THE CENTRAL REVIEW

1915
no.4

中央公論

春期大附錄號

第三十年第四號　第三百十六號

小劍氏が、京阪情調に滿てる傑作、悉く本選集に在り

父の婚禮

上司小劍作

所載「天滿宮」以下十篇

現時文壇の中心興味は、實に我が上司小劍氏に集まる。小劍氏が傑作中の傑作のみを選集せる本書は、從つて小說壇の北斗星たらざる可からず。中に於いて、『天滿宮』『寺の客』『父の婚禮』は、一個好色の老爺を主として、放恣度なき性慾生活を描き、【東光院】『兵隊の宿』は、若き寡婦の戀を描き、『鱧の皮』『筍婆』は、大阪の或る商家の家庭を描く。其他『畜生』以下作者の自信ある傑作併せて收むる所十餘篇、其多くは、京阪情調の豐かなるの故を以て興味に富めるは勿論、主觀の洗練と描寫の巧妙と共に近時文壇の驚異として嘖々の稱あるものたるは、江湖の普ねく知るところ也。

最上製美本
定價八拾五錢
郵送料八錢

島崎藤村作

縮刷 家 全二冊

量に於いて內容に於いて、直に文壇唯一の大作、藤村氏が藝術の極致にして、我が文壇の誇りとすべき名篇たり。讀書界の久しき希望を滿たす爲め今回至廉なる縮刷本を公にすることゝなれり。

總六號活字
紙數五百頁
總洋布美本
定價八拾五錢
小包料八錢

縮刷本は原本の約二分の一の廉價なり

東京市牛込區矢來町中の丸　新潮社　電話番町二二二三番　振替東京一七四二二番

植竹文庫

泰西の名著中大作雄篇のみを全譯し本文庫を刊行す。全號活字組印刷鮮明價格の低廉に至りては比すべきものなし。眞に理想的叢書なり

一 サニン　アルツイバシエフ作　武林無想庵譯編　定價九十錢　郵税八錢　三版殆盡

二 天才論　天才と狂人　ロンブロゾオ作　辻潤譯編　定價九十五錢　郵税八錢　三版

新刊 第四編

トルストイ作　相馬御風　相馬泰三　共譯

全譯縮刷

復活

これ單なる小説にあらず近代の一大經典なり

四六版新形七百五十頁■背皮總布製箱入美本■定價壹圓八拾錢、郵税八錢■三千部限　特價壹圓五拾錢

「復活」は單なる小説ではない。トルストイが藝術の假面を被つて文明を叱咤したる一大獅子吼である。乃ち晩年のトルストイが豊富なる知識と經驗と思索とをコンデンスし、一代の心血を傾注して、赤裸々に廿世紀文明のあらゆる問題に對し、赤裸々に批評を加へたものである。故に復活を以て他の翁の二大傑作に比較するに量に於て、「戰爭と平和」の三分の一、「アンナ・カレニナ」の二分の一に過ぎないが、其含蓄の量に於ては此の二大傑作を合せたものよりも猶多く、殆ど翁一代の思想を擧げて悉く其中に包容したと云はれてゐる。或人は本書を以て「藝術以上」の産物にして、實にこれ近代の一代經典なりと云ひ、ハルナック教授は「後世必ずゲーテのファウストと並び稱する世界の大傑作なり」と云つてゐる。

而して本書の藝術的價値に就ては、譯者御風先生はその自序に於て『（前文略）この作が吾人に消し難い印象を與へる所以は之れの表現の藝術的豊富である、凡てが豊富なる人間の心を以て描かれてゐる點である。そこにはあらゆる状相を持つたロシャの自然が太陽の光の如き鮮やかさを以て描かれてゐる。（中略）これこそ眞實の人間の詩ではないか』と言はれてゐる。

カチユシヤ劇の原本として有名なる「復活」は今非常の廉價を以て世に出でたり!!

發行所　東京市神田區佐久間町四丁目廿參番地

忽三版 第三編 罪と罰

ドストエフスキー作
生田長江
生田春月 共譯

■フリイドリツヒ・ニイチエは之の「偶像の黄光」に於て曰く『ド氏は吾が就て以て何等かの事を學ばざるを得ざりし唯一の心理學者なりとす。彼は吾が生涯の最美なる幸福の事件に屬す』と。英國評壇の權威モーリス・ベアリングは曰く『現在を支配するものはトルストイにして未來を支配するものはドストイフスキーなり』と。然りこの偉大なるドストイフスキーを知らざるものはこれ藝術家以上の藝術家を知らざるものなり。而して之の「罪と罰」を知らざるものはこれドストイフスキーを知らざるもの、彼が一生の述作の中何ものかよく「罪と罰」以上の代表作たるものぞ!!。而して我日本に於ては、從來「罪と罰」の名のみ徒らに喧傳せられ。遇々其譯述ありと雖、そは唯一部分の譯に過ぎず。讀者は皆齒痒の感を抱いて「罪と罰」の美名に憧憬したりが、今や初めて完全なる全譯成り普通定價の半ばにも滿たざる廉價を以て刊行さる。敢て大方の淸鑑を待つ。

■四六版新形六百七十頁■脊皮。布製極美本■全六號活字

定價 壹圓四十錢
郵税十二錢

植竹書院（電話下谷三四一九 振替東京一二九五三）

新刊 最新 實際新聞學

■東京毎夕新聞主幹兼編輯長 小野瀬不二人譯著

四六判總布表紙
箱入頗美本
定價壹圓三十錢
二千部に限り
特價壹圓拾錢
郵税八錢

■如何にして新聞を經營すべきか、如何にして新聞記事を書くべきか？

今や將に新聞界の發達はその頂點に達せんとし、新聞の權威は王冠の如くに輝き來る。此の新時代に於て我が文明の邦土に一の「新聞學」なきは奇蹟なり。歐米諸國にあつては各夙に十數種の「新聞學」書ありて、卓拔なる良新聞の輩出を促し、優秀なる記者の向上を喚起し、常に新聞界を助長すると共に一般讀者の爲に多大の便宜と興味とを齎してゐる。我が新聞學の權威たる小野瀬氏玆に見る所あり本書を完成して斯界に唯一の學燈を捧げ、理想を說き、實際を說明し、「新聞」に關する事細大となく力說して餘す所なく、本書出でて初めて「新聞」及新聞記者の本領、事業、權威明かなり新聞經營者記者は勿論、一般新聞の讀者のために敢て一本をすゝむ。

少額資本 實業成功法

●本社が東京四大新聞に廣告し懸賞を以て少資本成功の考案を募集せし結果本書を出版せしに空前の大好評を博し忽ちにして五十餘版を出すに至れり、本書は五圓以上百圓以下の少資本にて容易に成功し得べき左の職業を撰定し其營業法に至るまで詳細に記述し、一讀直に實行し得べきを期したり。▲人の氣づかぬ新職業十八種▲高尚にして利益ある營業十三種▲外見惡しくも大利ある職業九種▲地方田舍の有望事業二十種

本書に記せる職業にて成功せし者甚だ多く、讀者よりの、禮狀亦續々として來る、眞に一字千金の良書なり尙參考として●何故に東京に出でゝ失敗するか●驚くべき計算表●資本金を得る法●借金償却法●不景氣利用法●四種の商略●最有望なる實業學校●日本財產家一覽表等を揭ぐ實業界に大成功を成んとする者は速に本書を讀め、一册送料共金三十四錢、振替送金一錢增、切手代用三十八錢送れ

致富講義錄

少資本を以て大成功を得んとする者は本會發行『致富講義錄』を讀め！

本會講義錄は全九册千〇六十餘頁に及び、有望職業百數十種有利內職數十種を詳細に講述し何人にも實行容易なり

本會講義錄に揭載せる職業にて數萬の財產を作りし人甚多し此際至急御入會あれば三大特典あり詳細說明書及規則書は郵券二錢封入申込次第進呈す

本會講義錄全九册出來に付一時に取りまとめ送本希望の求めに應ず

東京神田表神保町十番地
帝國富強會
（電話本局長六八五番）（振替東京三七七六番）

第三版 致富秘訣 金をふやす法

本書の著者は茨城縣の片田舍に生れ、赤貧より起りて今や數萬の富を積めり、故に其說く所皆自己の經驗にして眞に耳を傾むくべき價値を有す

▲余が失敗と富を作りし實驗談▲余が發見せし面白き貯金利殖法▲八年間に誰でも千圓を貯蓄し得る法▲三年貯金▲不動貯金▲强制貯金▲生命保險▲銀行貯金▲郵便貯金▲如何なる銀行は確實なるか▲特種銀行の特典▲最も多くの利子を得る貸金の方法▲新案面白き貸金法▲變形的貸金業に貸金證書作製の大注意▲金を貸してごまかされぬ注意▲土地家屋株券債券等何れか今後有益なるか▲財產乘換法は致富の最上の手段也▲財產乘換の手段と其好期▲かくの如くせば一萬圓の財產は五年間に二萬圓となる▲貯金積算表▲複利法▲利子早見表▲公債株券利廻表▲年利日步換算表の眞に一字千金何人も必讀せよ。

全一册送料共 **廿九錢** 切手一割增

見よ!! 地方田舍にも此の如き金もうけの良策あり

第四版 地方必適 金もうけ案內

◎**第一 特種作物** 外國輸出用作物工藝用作物藥草類の栽培は普通の如く勞力を要せず故に地方の副業として妙なり、然も土地一段步より二百圓內外の大收益あり（全國農事試驗場報告）本書には數十種の栽培法收支豫算を揭ぐ

◎**第二 家庭工業** 地方人は冬季業務の閑散なる時又は雨天などの日を利用して副業內職を營むは其家を富ましむる最良の方法なり、本書には最容易にして婦女子にも出來資本僅少にして利益最多き數多の手內職及家庭工業を揭載す

本書はかくの如く**地方田舍**に最適當にして成功し易き事業のみ揭載す志ある者は一日も早く本書を讀め

全一册送料共 **廿九錢** 切手一割增

大利益 秘密

金壹百圓內外の資金あれば農工商官公吏其他何人を問はず秘密に大金を儲けらるゝ方法あり此方法により巨萬の富を作れる人頗る多し世人に致富の良法を知らしむべく富強世界第二卷六錢に之を公開して、詳說す一册送料共タッタ三錢

東京神田表神保町十
電話本局長六八五番
振替東京三七七六番
帝國富強會

◎三浦關造氏譯——大詩聖タゴール氏來朝紀念

原作者の寫眞及び書簡挿入

東洋に輝き出でし世界の光

タゴール詩集 伽陀(ギタ)の捧物

玆に大詩聖「生の實現」の著者の最も優れたる詩集の譯成る。是は幾千年東洋人の心の奥に秘みたる不死の喜びの妙曲であります。譯詩は原詩其儘に一字一調を傳へて靈動き肉顫ふ。何處の人も如何なる人も是に讀み入り給はゞ西方淨土の海に汲んだ無量壽の光と酒の滴が土の瓶からあなたの唇に魂にこぼれてまゐります

菊半截百五十頁 洋裝美本
定價四拾錢
送料四錢
製本出來

發行所 東京中澁谷町 振替東京七八六四 東文堂

發賣所 東京神田表神保町 振替東京二七〇番 東京堂

■最新刊■

長篇小說▲高濱虛子傑作

女七人に男一人

平福百穗揮毫口繪

△定價九十錢
△郵稅八錢

中版四百卅餘頁

久しく讀書界に翹望せられたる虛子先生の名篇成る。純寫生主義に成れる氏の著作は少しとせず而かも全然氏が別個の試みに勞作せるは空前絶後本書唯一卷あるのみ。其文其想正に之大正文壇の精、纒綿せる情緒、人情の機微、七人の女に一人の男、冷か熱か喜か悲か彼等今何物を吾人に語らんとするか

東京神田旅籠町一丁目卅番地
發兌 四方堂 電話下谷六九七九 振替東京九五五六

古典講義錄

▲會員募集

祖國興隆の根本義を究め雄渾崇嚴の大精神を養ひ神人合一的奥義を脩めむとする眞面目の志士は來て本會員たれ

▲菊版百廿頁一册卅錢郵税四錢 半ケ年前金税共壹圓八拾錢

▲古事記講義壹ケ年修了 一ケ年會費參圓五拾錢

第三號（三月廿日發行）要目

内容

古事記講義前提　講師　川面凡兒先生

祖神垂示靈魂觀讀講。列國古今宗教學說の比較研究。國津務の魂と天津職の靈。荒魂と和魂と直靈との目的活動の差別。伊吹雄健雄詰の實行法。元氣煥發の道。鎮魂。等……約八十頁

△寒中禊に就て

△醫學上及生理學上より見たる寒中禊の効果　國學院大學講師　山田倉太郎先生　醫學博士男爵　高木兼寛先生

△古事記原本……

發行所　東京市日本橋區上槇町八番地　古典攷究會（振替東京二九、六七三）

發賣元　東京市日本橋區上槇町八番地　玉成堂書店（電話本局七四二）

大賣捌所　東京堂、北隆館、東海堂、至誠堂、良明堂、盛春堂（其他各國各書籍店）

第一號要目

古事記講義前提　川面講師

開會之辭秋山少將、發會趣旨鵜澤博士、祝辭八代海相、杉浦東宮侍講、頭山滿、筧博士、ひとこと　川面講師

發會趣旨書

會報

寫眞版一葉

第二號要目

古事記原本

古事記講演前提讀講　川面講師

隣邦人と對比して我日本人の特性　秋山少將

石版畫四葉

會報

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

一 當會社の保險料は低廉にして且つ利益金の百分の五十以上を五箇年目毎に契約者に分配す

一 當會社の保險料拂込方法は保險證劵訂正の煩を要せず其變更契約者の隨意とす

一 當會社は拂濟保險の便法を設けあり

古河家經營

博愛生命

社長 男爵 中島久萬吉
專務取締役 小原元美
專務取締役 鈴木市之助
常任監査役 安達仁造

本店 東京市日本橋區本町四丁目十五、十六番地
電長本局一八五六、五一五〇、一二八七番
振替貯金口座東京一七一七番

支店 大阪市東區本町一ノ一三（電長本局三三一一番

一 當會社は低利なる金融機關の設あり

一 當會社は被保險者の年齡範圍最も廣く滿九年七箇月以上滿六十年六箇月迄契約す

一 當會社の保險金支拂は最も迅速なり是れ保險契約の目的を遂行せんが爲なり

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は掲載

Village Gossip

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



Village Gossip

中央公論



春季大附錄號
第三十年第四號
第三百十六號

世界戰爭の終局と四國同盟

(一)

今や歐洲中原の戰況は所謂四ッ取組の光景を呈し西方獨逸が右を指して白耳義、北佛を席卷せんとするを支へて佛は右アルサースに侵入し、東邊露國が左を指しガリシャ、シリシャを侵略して獨墺を中斷せんとするを防止せる獨逸は左東普方面より露軍を一掃しワルサウに向ひ强力の威壓を加へつゝあり、戰亂開けてより已に八閲月に及べるも終局の眺望は依然として茫漠たり、獨逸潜航艇の奇襲は少なからざる恐慌を英國の人心に與へたるが如きも、其實際被害の程度却て多からず、英國は之に報ゆるに飛航機隊の空中攻擊を以てしてオステンドなる獨逸潜航艇の策源地を破壞すべく試みたり、而して二月十八

日を以て開始すべしと宣言されし獨逸の英國封鎖は徒らに紙上封鎖に歸し、外交界の笑話の種となり、却て英國は報ゆるに獨逸港灣の封鎖を以てし食糧品も亦た戰時禁制品と見做すべく宣言したり、獨逸は數月以前より麥粉の濫費を取締らんが爲め之を一旦政府の手に收め人民各個の分量を定めて之を拂渡すの方を取れる外、馬鈴薯も亦た其使用を制限したり、此の一事を以て獨逸人民は今にも饑饉に瀕せりと想像するものあらば是れ恐らくは早計ならん、獨逸政府が此種の取締をなすは偶〻其注意周到なるを示すものにして、假令今後英國の封鎖令實行せられ米國其他の方面よりする食糧品の輸入杜絶することありとするも、兎や角と今秋の收穫期まで漕付くるを得ば、此間粗食減食は免れずとするも、尙ほ一箇年の生命を繫ぐこと必ずしも不可能には非ざるべきか、蓋し獨逸人民は尙ほ昂然として最後の必勝を期し居るが如きを以て粗食減食の苦痛にも能く堪得べきも、是より漸く必敗屈辱の免る可らざるを自覺するに至らば人心の變化竟に意外の結果を齎らすなきを保せず。

中原の戰局結んで解けざるに際し君須丁堡方面に於ける英佛海軍の活動は實に一快事ならずとせず、英佛海軍はダルダネール砲臺の破壞に成功し將に各其の陸軍を或はアルチエリーより、又は埃及より派遣して、ガリポリ半島の占領を企て、露國はボスホロス方面より侵入しつゝあり、土國の防禦は今や獨人の手にて歸し頗る侮るべからずと雖も君府の陷落亦た遂に免る能はざるべし、玆に於て露國は英佛の保障を得て地中海に進出の自由を得べく、爲めに彼をして益深く英佛に倚賴せしむると同時にオデッサ港より南露の小麥其他農産物輸出の途を開くを得て大に英佛の市場を賑作するに至らん、斯くて聯合諸國

相互間の經濟的疏通の方を得て財政上の便利少小ならじ、抑もダルダネール、ボスホロス兩海峽問題はクリミヤ戰爭以來六十餘年に亘れる露英衝突の一大原因にして、所謂東方問題とは即ち兩海峽の問題に外ならず、中間獨逸の暗中飛躍成功して君府の實權彼の掌握に歸せしは宛も日清戰後露國が全盛を朝鮮京城に極めしと髣髴たりしが、此變局は却て英露の接近を促し遂に今次の大戰爭を誘致するの因となり、而して獨の勢力を君府より驅逐し露をして公海に出づるの宿志を遂げしむるは即ち日露戰爭の結果我邦が朝鮮を併合するに至れると能く相似たり、蓋し土國瓦解後の處分如何、兩海峽自由航路の形式如何、英佛が露の進出に對し求めんとする保障如何、其他希臘を初めとして勃羅兩國の果して土國遺產の分配に與るべきや否、此等の頗る興味ある問題は自ら大戰の終局と共に解決せらるべし。

斯くして聯合軍の土國攻擊は近東の形勢に最も巨大の結果を齎らすべきも、現在中原の戰局に對しては假令君府陷落するも直接多大の影響あるべしとは思惟せられず、蓋全體の戰局より觀れば君府は即ち第二の青島のみ、之に據り虛勢を維持したる獨逸軍人を一掃するは單に獨逸の聲望に對する一打擊たるに過ぎざらん耳、但し土國中央集權の瓦解は自ら高加索方面に於ける對露遠征の鋒を鈍らせ、蘇西運河破壞を目的とする埃及遠征の不可能を確實にするの利益ありて、英露をして各々後顧の憂を絕つの感あらしむるべく、之が爲めに從來此各方面の防備に宛てし兵力の一部を割き中原の戰局に立たしむるを得べし、然れども是れとて到底大局を左右すべき有效のものと見做すべからず、寧ろ君府陷落を機會として希臘も聯合諸國に與みして出兵し、從つて巴爾幹諸國の活動を促かし、遂に伊太利の起立を見るにも

至らば是れ一種の僥倖と謂ふべきのみ、伊太利の起立は確かに大戰局を左右すべき一大原因たるを得べきなり、蓋し伊國の國情は果たして其戰爭に參加するを許すや否は一大疑問なり、由來久しく起立すべく豫期せられて今日に至り尙ほ起立せざるを以て觀れば伊國は到底不起立に終るなきか、理屈は兎に角として二十餘年來の同盟二國の存亡に際し超然として中立傍觀の態度を執るは頗る忍び難きことに相違なし、然るを更に一歩を進め舊同盟と開戰し其の最後の「止どめを差す」の役目を勤めんことは流石の伊國の君臣に取りて大に躊躇する所なきを得じ、利益打算を以て去就を定むるは現代の國際氣質なりとは云へ全然友誼を無視しては大國の面目遂に保つべからず、蓋し伊國が中立を宣言するは一種の理由ありとするも、更に一歩を進めて獨墺と開戰するには殆んと純粹の利害打算の外何等の體面を存すべき理由あらず、故に吾人は伊太利が到底起立せざるものと鑑定す、但し今後の獨墺の對伊態度の上大に彼か面目を毀損するか又は彼が利益を甚だしく蹂躙するが如きことありて大に伊太利の人心を激昂するにも至らば形勢に如何の變化を見んも知るべからず、故に獨逸は大に此邊に顧慮する所あるもの丶如く、前首相ビユウロム公を駐羅馬大使に任じ公及びその伊國宮廷に覺へ目出度夫人を以て伊國側の歡心を買ふに汲々たり。

斯くて伊國終に起立せずとせば英佛露對獨墺の四ッ取組は容易に解決の途なく、獨逸亦た急に糧食乏亡し爲めに屈服するが如きことなしとせば、戰局の前途は最も顧念に堪へざるものなくんばあらず、然れども聯合軍側に於ける一の望は昨秋以來訓練中に屬する英國の增援隊に屬されつ丶あるに似たり、其

人員は稱して百五十萬と云ひ又は二百萬と號するも、恐らくは訓練を終了し兵器彈藥を充實して出征に堪ゆるは五十萬に過ぎざるべきか、新たる大軍を編制するに最も困難とするは將校の得難きに在りと云ふ、兵卒の訓練は八箇月に終了し得るとするも多くの將校の教育を斯る短期に成就せんこと頗る困難なるべければなり、兎に角英國は當春期に於て五十萬の新軍を白耳義方面に派遣すべく、其活動開始の曉には戰局に一大移動を生ずべきこと殆んと疑を容れず、一たび白耳義方面に於て大に敵を掃蕩するの機會に際せばアルサース・ロルレーンの方面亦た佛軍の活躍を見るべく、此時に際し露國亦た東方より大軍を以て威壓を加ふるに於ては、流石の獨逸も一方には波蘭を退却し他の一方には白耳義及びアルサース・ロルレーンを放棄するに至るべきか、戰局の開展終に斯の如きに至らば茲に始めて平和談判の開幕を見ることとなるべく、吾人は獨逸最後の勝利を豫期せざると同時に聯合軍が伯林に迫り城下の盟を爲すべしとも思惟せず、結局は英佛に取りては白耳義、アルサス・ロルレーンの回復露國に取りてはガリシヤの領有を期するの外なかるべく、其外償金の徵收及び海外領地の處分を以て終了するなるべきか、但し英の新援軍五十萬の勢力は果して能く豫期の偉功を奏し得べきや否、日本援兵の提議亦た此間の一大問題たらざるなきを得るや否、是れ識者の考慮に上るべき重要案件にあらざるなきか、世人或は我歐洲出兵を以て印度アルヂリャの援軍に比し國體を辱むるものと爲す、何ぞ辨へざるの甚だしき、萬一我皇軍にして歐洲の戰線に立つことありとせば是れ宛も英軍がフレンチ元帥の統帥の下に戰線に立つと同一の位置に立つものたることを知るを要す、但し出兵の可否は自ら別問題にして、果して聯合三國よりの

提議あるを待ち其條件を協定し且つ軍事當局の意見を徴し後に決定すべきのみ。

(二)

歐洲の戰局が何れの時に終を告ぐべきかは吾人の豫言する限に非ざるも、去ぬる元旦に於て佛國大統領ポアンカレー氏が本年一杯を以て平和克復あるべしと云ひしは蓋し中らずと雖も遠らずと思ふ、一たび平和克復の上は列國は果たして從來に倍し戰備に努むべきか又は今次の戰爭に懲りて著るしく平和主義の勢力を加へ來るべきか、軍國主義勝つか自由主義勝つか、世界の大勢は果して獨逸の敗退を觀て人道主義に歸すべきか又は獨逸が意外に驍強にして、遂には屈服したるも其再び速に國力を回復すべきを思ひ、世界は遂に獨逸主義に感化せらるべきか、即ち一論者が獨逸の敗れたるは軍國主義の爲に非ず其外交を誤りしが爲のみと云へる如く、罪は軍國主義に在らず寧ろ外交策の失敗に在りと見做し、各國爭ふて軍國主義に傾かんも亦た知る可らず、之に反し戰爭の慘憺に至りては未だ曾て今回の如く甚だしきものはあらず、普佛戰爭以來戰時道徳の研究頗る進歩し萬國平和會議の決定を經て列國の同意を得たる人道的規定少なからずと雖も、一たび今次の開戰を見るや各種の規定は化して一片の反古と爲り、無防禦の市町は燒かれ、寺院高塔は遠慮なく破壞せられ、私有の財寶は掠奪され、老幼男女の別なく無辜の民は忍ぶ可らざるの凌辱を受け、慘死を遂げたり、佛國政府の任命せる最も責任ある委員の調査に由れば獨軍最も暴戻を極め、獨逸潜航艇の各國商船に對する暴行に至りては之を稱して海賊的行爲なりと云ふも過酷ならず、世界文明の標準は獨逸の爲め一世紀の退却を見たりと云ふ亦た一理なきに非ず、然れば

斯の如き慘憺たる狀態に對し世界の平和主義者及び人道主義者は果して沈默雌伏して止むべきか又は此際大に憤起して軍國主義の撲滅に努力するに至らんか、是れ實に人類將來の幸福安全に重大の關係ある大問題に屬す。

絕對の平和主義に對しては吾人多大の尊敬を拂ふに躊躇せずと雖も其遂に空想に歸すべきを思ふ、地球上幾萬年後の狀態に付ては吾人意見を立つるを得ずと雖も前途數百千年を想像すれば民族國土に基き國家を立つるの狀態は依然として今日と異ならざるべしと思ふ、既に國家あり必ずや國防なかるべからず、各國兵備あり必ずや戰爭なかるべからず、絕對の平和主義は各國家の存立を否定するより始らざるべからず、故トルストイ伯曾て人に告げて曰く愛國心に善惡なし、愛國心は凡て惡なり、日本より愛國心を艾除し盡さゞれば眞の基督の意は日本に行はる可らずと、吾人は思ふ基督の意なるものに就ては意見自ら異なるものあるべきも、之を平和主義と解すればトルストイ亦た眞理を喝破せりと謂はざるを得ず、蓋し國家あれば必ず愛國心あり、愛國心なき國家は國家にあらず一種地理的名稱たるに過ぎざる耳、譬へば一國内に於ける郡縣の如きものにして、世界は統一せられ今の各國は行政上の一區劃をなすに過ぎずして、自ら國防の必要なきは明なり、然れども是れ空想なり、國家は現代に於ける文明の基礎にして、此基礎の上に築かれざる文的は將來に起るべきようなし、抑も國家觀念の拔くべからざるは今次の戰爭に對する社會主義者の態度に由りても立證せられたり、今より數年前獨逸に於て萬國社會主義大會の開かれしに際し、佛國社會黨首領ヂョーレー氏は獨逸社會主義者に對し不幸萬一にも獨佛開戰の場合

には兩國の主義者は共同して開戰に反對すべしと提議して獨逸側の反對に遭ひしことありき、果せるかな、今次の開戰以來獨逸の社會主義者は熱心に戰爭に參加し毫も一般國民と異らず、佛國に於ても該のヂョーレー氏は開戰と共に無名の刺客に殺され一般の社會主義者は奮つて戰線に立ち母國の防禦に任せり、彼等曰く獨逸の侵略に對し佛國を防禦するは父母の國を守り文明を護るなりと、是れ即ち愛國心の純の純なるものに非ずや、即ち非戰論の理想に最も近かりし佛蘭西社會主義者にして尙且つ然り、獨や英や、露や、米や、社會主義者、平和論者少なからずと雖も、或る少數なる純粹なる理想家を除くの外は孰れも其屬する國の愛國者ならざるはなし、從つて護國の責に任ずるの覺悟あること言を俟たず、トルストイは眞の理想家なり敎て曰く愛國心は惡なり國家は害惡なり、敵來り爾の國を攻めなば之を防ぐ勿れ、彼れ爾を捕虜とせんと欲せば之に抗する勿れ、爾及爾と同國人の無抵抗なる愛は遂に敵をして戈を棄てゝ鋤を執るに至らしめんと、若しもトルストイをして佛人たらしめ又他の佛人をして擧つて彼の敎を奉ぜしめば、今や佛人は國を擧げて獨人馬蹄の蹂躙に委し平然として葡萄園の耕耘に餘念なかりしなるべし、佛國の燦爛たる文明開化の如き彼等の眼中には惡魔の誘惑とほか見へずして、其悉く破壞されんも萱し意とせざりしなるべし、然れども此れ一片の空想なり、愛國心は佛國民の誇りとする處、大凡國を建つる者孰れかトルストイの非國家主義を奉ぜんや、我日本人は　陛下の臣民たるを無上の光榮と做し愛國に富めるを以て金銀に富めるより名譽なりとなす、北米人は世界第一の富强を以て人に誇り、英人は地球上の最大國民たるを以て自負し、獨人は世界政策を以て英と雄を爭はんとし、露亞西は譬へ

ば年若き象なり其今後如何計の發達をなすべきや想像の外にあり、即ち列强皆な愛國心なきはあらず、而して小國の人民は如何と云ふに、白耳義人の愛國心に富めるは吾人が今眼前に見るが如く、其他瑞西、和蘭、丁抹、那威瑞典、葡萄牙、希臘、塞維、モント・ネグロ等孰れも然らざるなく、墨西古は國家自滅するも米國の保護を受けずと力きみ、支那は國土分裂の危險を犯すも日本の提議を容れずと肩を張る、大凡坤輿の上國家を爲すもの幾十百、之れを古今に顧みれば其幾千なるを知らずと雖も、一として愛國心なきものはなく愛國心を以て最高の道德となさゞるものはあらず、既でに愛國心あり、戰爭竟に絶滅す可らざるなり。

(三)

然りと雖も兵は凶器なり戰爭は害惡なり、其回數を減じ其害惡を少くし、且平素の軍備を制限するの法を講ずるは人道の問題たる耳ならず亦た國家の利害打算よりして必要とする問題たらずんばあらず、想ふに今次の戰局一たび終結の曉には平和の永續を希望するの情は蔚乎として各國民間に勃興すべく、ヘーグの平和殿も亦た萬國議員の聲を以て喧囂たるに至るべし、然りと雖も世界の平和論者の主張たる國際仲裁條約又は一般的軍備制限なるものは今次の戰爭ありしが爲め痛く其効果を疑はれるに至れるは日を睹るよりも明白なり、戰爭の爲めの必要とあらば條約も反古なり、國際法も空文なりと見做すべしとせば假令某々兩三國の間に一般仲裁條約を締結することあらんも、宛も是れ荒繩を以て人を縛るが如く偶々以て弱者を制するに足るべく、若夫れ强力のものは腕臂を一張せば乍ち縛を解くを得べきのみ、吾

人はタフト、ブライアン諸氏の如きが再び熱心に仲裁條約を主張するの勇氣あるや否は今後の頗る興味ある問題なるべしと思ふ、然らば則ち實際に平和を持續するの方法如何と云ふに、吾人は之を平和論者人道主義者の努力に待つこと多からずと云ふに非ざるも、寧ろ是よりも更に多く列國均勢の按配に俟たざるを得ざるなり即ち現在の形勢を基礎として將來の平和把持を安全にするより外に方法なきを思はずんばあらず、別語之を云へば列强中の平和攪亂者と見做すべきものに對し優勢の防禦同盟を結び以て彼をして兵を動かすの餘地なからしむるより外に途あるべからず、例せば若も今次の開戰に先だち英國が露佛と堅く結び其必ず佛露を助けて起立すべきことを明白ならしめたらんには、打算に明なる獨帝は必ずや開戰を躊躇せしなるべし、是れ英國の態度決定後に於ける獨逸君臣が如何に驚駭し憤怒せしかを見て察すべし、既往は言ふも詮なし只だ顧みて以て將來を戒むべきのみ、蓋し將來の爲め策を立てんとするには須らく各國の國勢を審かにし以て敵とし又は味方とする國を定むるに於て判斷を誤るなからんことを要す。

戰後の形勢を豫想するに吾人は依然として獨逸を以て世界平和の攪亂者と見做すの適當なるを思ふ、未だ其敗亡の程度及平和條件を見ずして前途を語る可らざるも、假令聯合軍側の希望通り獨逸が大に屈伏するに至るも、其國家としての回復は意外に迅速なるべきこと疑ある可らず、而して其國力を回復すると共に其志や必ず臥薪嘗膽、英佛露及我日本に對する復仇雪辱にあらんこと言を待たず、然れば四國が敵として警戒すべきは獨逸及び彼が得意の外交術を以て作現すべき與國に在りと謂はざる可らず、殊

に怖るべきは獨逸の離間により四國の互に分裂睽離を見んことにして、斯の如き危險を豫防し平和の保障を堅固にせんには四國同盟を締結するを上策とすべし、

幸に我邦と他三國とは已に英國とは同盟の關係あり、露とは支邦に於ける勢圏の協定必ずしも至難ならず、佛とは彼我相倚り協力すべきの機運今正に大に熟し來れり、若しも彼我相互に交讓の心を以てせば平和克復を飾るに四國同盟を以てせんこと蓋し難事に非ざるべし、一たび日英佛露の同盟を成就するを得ば前途數十年の間世界の平和を把持するの效は期して待つべき耳。

世間には實力の崇拜者多し、今次の戰爭に於ける獨逸の花々しき奮鬪振を心竊に羨美し、永久に彼を敵とするの不利を思ふもの亦た少なからざるべし、或は獨逸は必ず戰後に露を英佛より離間し之と結托するに至るべしと豫想し、四國同盟を以て早計なりと思惟するものあらん、然れども財政の關係上露國が佛國と離るべからざると同時にダルダネール・ボスホロス海峽自由開放の結果として英國とも亦た離る可らざるに至らんことは疑を容れず、從つて獨逸とは其國境線方面及び巴爾幹、亞細亞土耳古に於ける露の發展の爲め氷炭相納れざる利害繫爭を生ずべし、戰後の獨露親善を豫想するが如きは頗る淺慮の杞憂に非ざるなきか、而して露國が今後益々近東及び西方亞細亞に多事ならんとするは即ち極東經營に比較的に閑散ならんとする所以にして、我邦と妥協交讓の餘裕綽々たるものあるべし、

之を要するに戰爭の慘害に付ては世界の大部分、少なくとも其重立ちたる大部が今次の大戰爭の爲め最も痛切に感したるに關はらず、純粹の平和主義は到底現世に實行し得らるべく思はれず、止むことな

くんば仲裁條約、軍備制限、戰時道德の實行等を講し以て戰爭の慘害を比較的に輕減するより外に執るべき途なしと雖も、此等の方法も一たび獨逸の如き狂暴なる軍國の起るあらば宛も大風の前に秋葉の落つるが如く乍ち空文紙と化し了せんのみ、茲に於て唯一の賴とする處は利害を同一にする列强相倚り相結び軍國を主義とす。强國を牽制し平素の注意に由り不時の慘害を防壓するの道を講するに在り、日英露佛の四國同盟の如き世界の平和を把持すべく最も有効の方法にあらざるなきか、是れ則ち大戰局の終末を想像すれば何人の心に浮ぶべき一大理想にあらずや、之を實現するはは世界人類に對する日英佛露の一大義務と謂つべきなり。

對支交渉の行惱

對支交渉の條項に關しては吾人は事の樞機に屬するを以て之を公表するの自由なしと雖も其條項なるものが悉く我邦朝野の希望を包含し、比較的に穩正の要求たるは吾人の信じて疑はざる所なり、其一氣呵成に貫徹せらるべく豫期せられしに關はらず彼我の交渉回一回と困難を加ふるものの如く、將に三箇月に垂んとして尙ほ行惱の狀態に在り時に危機の切迫するとさへ風說せらるゝは吾人が日支親善の理想に對し最も遺憾とする所たらずんばあらず。

由來支那人は性得の外交家なり、其言語文章亦た好辭令に富み其智は實物の知識に缺乏するも以て榨

俎の間優に變權を弄するに足れり、其三千年の歴史は多くは北方蠻族と交渉の歴史にして、强ければ則ち之に賂賄するに絹布金銀を以てし皇女の降嫁を以てし、弱ければ則ち之を釣るに利を以てして懷柔使役す、近代に至り歐米と互市を開始して以來其樽俎接衝の先方は野蠻民族に非ずして文明列强なり、而て最近半の世紀間を回顧すれば外國との交渉案件其幾十百なるを知らずと雖も彼れが得意の權謀術數も遂に功を奏せず假令一時は小功を收得るが如きことあるも遂には必ず失敗に歸せざるものあらず、故李鴻章が馬關談判の後露獨佛を援きて干渉を求め三寸の舌よく遼東を回復し得たるも、此の所謂大成功が遂に日露戰爭及び今回の日獨交戰の遠因と爲り、曳ひて今次の日支交渉を見ざるを得ざるに至れるなり、是れ即ち著るしき一例なり、支那の當局もし宇內の大勢を達觀するの明あらば速に至誠を披瀝して我提出條件を容れ以て極東平和の基礎を築かずんばある可らず、然るに彼れが爲す處を觀るに踏跙逡巡權變百出の態あるは支那人の特質なりとは云へ、決して支那自ら利益する所以に非ず。

今の日支交渉を論ずるに當り吾人は提出條項と當局交渉の巧拙とを區別せざる可らず、談判開始以來の成行手續等を未だ公表せざるを以て能く其巧拙を批判する能はずと雖も、若し我邦識者の意を叩かば必ずしも悉く加藤外相の手腕、思慮を謳歌すとは限らざるべし、然れども交渉の巧拙問題は提出條項の贊否を左右せず、假令加藤男を以て拙劣なる外交家と思惟するものも國家を代表して同男の提出せし條項に對しては一人の異議ある可らず、萬一にも總選擧の結果に因り現內閣が日支懸案中に顛覆することありとするも、後繼內閣は必ず同一條件を提げて交渉を繼續すべく是れ天下萬衆の寸毫も異論なき處な

り。

最近青島守備隊を增加し、滿洲駐屯軍の新舊交代を行はんとするや支那人中には我邦が早己に開戰の準備を爲せりと解するものあるに似たり、然れども此れ誤解なり、我邦は防備なき支那に對し猥りに開戰を威嚇せんとするほど不誠意ならず、但だ支那の輿論なるもの近來頗る無責任、無規律なるが故に若し今次の談判不幸にして更に久しきに亘らば輿論教唆の結果、如何の珍事の出來せんも未だ知るべからず、乃ち帝國臣民の生命財產を保護し、我が利權を擁護して以て、平和を把持せんと欲せば今次の增兵亦た止むを得ざるものあるべし、而して支那の官民亦た我兵力の儼として其眼前に存するを觀て大に反省し一層の誠意を披瀝して可なり。

元來今次の交涉は深く日支兩國の親善を慮りて開始せられしものなるが故に、萬一にも此の問題と聯關して兩國の間兵火相見ゆるが如きにも至らば兩國に取り此上の不幸ある可らず、我當局は須らく現代支那氣質を解して交涉の過程に於て及ぶべき丈寬容隱忍なるべく、支那官憲亦た能く帝國の眞意を諒として誠意局に對し速に問題を解決すべし、以て日支間の睽離に乘じ竊に利せんとする第三國をして策を施すの間なからしめんことを要す。

立憲の本義を誤る勿れ

今此稿を草するに當り總選擧の期日は僅々一週間の後に迫り、我四月號の讀者の手に落ちる時には當選者の姓名は已に世間一般に熟知せられ居るべきを以て、今にして總選擧の結果を豫言するが如き危險は吾人の犯すことを肯てせざる所なり、只だ吾人が聊か玆に朝野兩派の領袖及一般讀者に告げんと欲する所は總選擧の結果に對し政府も在野黨も共に克く立憲の本義に則りて去就を誤る勿れと云ふに在り。

今次の總選擧は大隈內閣の信任、不信任を問はん爲めに行はれたるものたることは何人も否定すべからず、勿論在野黨は不信任案を提出せざりしなり、其議會に於ける態度は頗る不透明にして、唯だ政府提出の增師案を歐洲戰局終了後まで延期するの意味に於て削除せんとしたるに過ぎず、政府亦た此一案の否決に口を藉りて解散を斷行せり、故に表面一般の理屈より言へば政府の信任、不信任は朝野係爭の問題となり居らざる譯合なれども、此れ政略上よりして双方とも同じく此問題を忌避したるに由れり、實際の處大隈首相及閣僚は其就任當時より小數各派を基礎として政府に立つを苦痛なりとし解散を斷行して大に多數の味方を募らんと希望せり、只だ種々の事情により久しく之を斷行し得ざりし耳、政友會及び國民黨亦た大隈內閣の下に立つを快よしとせず好題目を求めて之と衝突せんと欲せし機會に臨み、偶々師團案反對を以て最を多數を制するに便利なりとなしたるのみ、是れ公然の秘密にして、此事實は朝野ともに深よく之を認識するを要す、即ち今回の總選擧は政府の信任、不信任を問へるものなるが故に、若し政府黨多數ならば內閣の基礎益々堅固なるべきも、萬一にも在野黨多數ならば大隈首相及閣僚は潔よく桂冠して以て去就を明白にせんことを要す、但し現在の狀勢より察すれば與黨も反對黨も孰れも百

に絶對に多數を占むるに至らず、政府の信任、不信任問題は中立者の態度定まるを待ち始めて決すべき形勢を現出するなきを保せず、斯る場合には臨時議會を待ち議院の形勢をトし以て去就を決するの外執るべき途なかるべし、孰れにしても政府の態度は立憲的なるを要す、中立議員の操縱の如き腐敗手段を用ゆるの機會最も多からん、吾人は多年藩閥と戰ひ立憲を標榜せし大隈伯が心して其晩節を誤る勿らんことを希望す。

今次の總選擧に際し我司法部の態度頗る公平にして黨派の如何により檢擧の緩急を示すの跡なきは吾人の賞賛を惜まざる所なり、殊に行政官の意を受けたる警察官の檢擧の如き近來の痛快事ならずとせず、剛直廉正なる平沼檢事總長は宜しく其部下を統率して終局まで今日の態度を維持し怠るなからんことを要す、吾人は今の我國情を顧りみ、檢事局の方針次第により直に選擧界の廓清を期し得べしと信ずるほどに單純ならずと雖も、少なくとも今次の一般的にして用捨なき檢擧は以て大に犯違者を威嚇するに足れりと思惟す、少なくとも腐敗の一部を防壓し得たるは槪して選擧費用の幾分を減じ得たるの事實を以て察すべし、之に反し内務省直轄の下にある地方官憲が往々選擧に干涉して政府黨選擧委員の觀あるは見逃すべからざる事實なり、是れ選擧界の廓淸を標榜する隈閣の下に在りて一大醜態なりと謂ふを妨げず、事務官　須らく事務を執るべし、その政治家を學ぶは正に是れ非立憲なり、隈伯及び閣僚は其平生の主張に對し深く自反する所なかるべからず。

公論

日本の農村問題

神戸高商教授　津村秀松

一

熟々我國の農業なるものを觀るに、大地主なるものは勿論のこと、中地主と雖も、自作するものは、甚だ少い。地主とか、大百姓とかいふものの、大抵は土地を他人に貸付けて、小作せしめ、出來秋毎に、小作人から取立つるところの小作米に飽食暖衣する連中に過ぎないのである。近頃、農商務省の調査によると、我國の農家百戸に付き、自作農なるものは僅に三十二戸餘りで、即ち三割二分餘りに當るに過ぎぬ。其等は皆小作農又は自家の農作兼小作農であつて、之が全體の六割八分、即ち三分の二以上の割合を占むる。小作農又は自作兼小作農は言ふまでもないが、自作農の内でも、其多くは、中地主以下のものであるから、若しも中地主以上のものに就て、自作農と小作農とを區別したならば、誰れしも、自作農なるものの極めて少數なるに驚くであらう。だから、耕地反別の上からいふと、自作農地と小作農地との間に、更に一層大なる懸隔あるものであつて、我國の田地田畑の大部分は、實に小作農によるものだといふことを推定し得るのである。

一體、東西の農業上には、著しい相違がある。そし

て其の相違には、善き相違もあるが、又惡い相違もある。西洋では多く大農組織で、日本は小農組織である。西洋では大地主が多數で、日本は小地主が大多數である。之が日本に取つて善き相違であると稱せられて居る。或はそうかも知れない。然し西洋の地主には自作農が多いが、日本の地主には他作農が多い。之が日本に取つて惡い相違である。勿論、西洋と云つても、一概に大農組織の國のみとは云へないし、又中には隨分他作農の盛んな國もある。英吉利の如き、白耳義の如き、即ちそれである。が然し、全體からいふと、西洋では自作農が多いのであつて、獨逸の如きでは、二十乃至百ヘクタールの百姓でも九割六分は自作農、百ヘクタール以上の大百姓でも七割八分は自作農であるといふ有樣である。

斯樣な譯で、大體に於て、西洋では自作農が多いが、我國では小作農が大部分を占めて居る。此事たる、我國の地主と西洋の地主と、從て我國の農家と西洋の農家と、從て又我國の農業と西洋の農業とが、根本的に其の性質を異する所以である。西洋でも英吉利の如き例外もあり、又國によつては多少の差異もあるが、概して地主は即ち農家、農家即ち自作農たるもの、比較的に多いけれど、我國では、地主なれども農家にあらず、農家なれども自作農にあらざるものが、比較的に多數である。殊に中地主以下に至るに從ふて、彼れと我れとの此種の相違が益々甚しい。そこで、我國に於ては、眞に農家と名けられ、眞に百姓であると稱し得るものは、比較的に少數であるといふことに成る。唯土地を有し、小作米を所得とするものが多い爲めに、年の豐凶、殊に米價の騰落に利害關係を有する者が、全體に於て多數であるといふに過ぎぬ。西洋にては兎に角、我國にては、田畑を所有し、專ら之に依て生活する者であるから、それは農家であると速斷することが出來ぬ。それは皆百姓であると思ふたならば、大きな間違である。我國では、田畑を所有すること多い者ほど、其の實、農業者でもなく、又其の實、百姓でもない、唯其の廣い田畑を他人に貸附けて、小作せしめ、

毎年、其の收穫の約半を徴收するところの『農業的資本家』たるに過ぎぬものなのである。お金を銀行に預けて運轉せしめ、月々得るところの利息で暮して居る人々や、會社の株に金を出して、半期々々の配當に飽食暖衣して居る彼の所謂資本家なるものと、其の性質に於て、毫も異なるなきものである。唯金で出さずに土地で出し、お金を預けずに田畑を預ける相違がある爲めに、農業的資本家だと稱すべきだけのものである。「今でも日本の國民の六割以上は農民である。であるから、日本の經濟政策は、常に農家の利益を中心として打算せねばならぬ」といふやうな議論を、よく聞くが、日本の國民の六割以上を占むる所謂農民の、其の六割以上が、百姓をして居ない百姓であることを忘れてはならぬ。農民である、百姓で御座るといつても、それは土地に割合多くの資本を投じて居る爲めに、小作米が主たる財源と成つて居るといふ關係に於ての農民であり、百姓であるに過ぎぬ。更に一層切實に云ふど、それは、小作米が主たる財源に成つて居る爲めに、年の豊凶、殊に米價の騰落に、利害關係を有すること深大であるといふ意味の農家であり、百姓であるに過ぎぬ。だから、百姓といつても、此種の百姓は、鋤や鍬を持つ術さへ知らぬ百姓なのである。結局、今でも日本には農業に依つて衣食して居る者が多數であるといふ意味に於て農業國である。然り、日本は確に農業國ではあるけれど農民國ではない。

二

然るに近年我國に於ては、此種の農業的資本家なるものが、漸次增加しやうといふ新傾向を現はして來て居る。之には幾多の原因があることとであろうが、私は玆に其の內の主なるものと信ずる三つを數へたいと思ふ。

第一は、近年地方に於ける金融機關が次第に荒れ行く爲めに、都會に比して常に一層甚しい金融の逼迫が、自から地方の土地所有權をして、都會に吸收せしむる一原因を成して居ることとである。此吸收力は、都會から觀れば、先づ手近い郊村から、次第に遠方に及すも

のであるが、田舍から觀ると、周圍の農村の田畑の所有權が、一旦、其の中心たる小都會に吸收され、次で其の又中心たる中都會に吸收され、更に大都會の大資本家の手に吸收されるといふ順序に流轉しつゝあるやうである。孰れにしても、我國では、地方の人口が次第に都會に吸收されつゝある丈けではない。地方の土地所有權も亦漸く都會に吸收されつゝあるものだといふことは、看過すべからざる現象なのである。

第二の原因は、特殊米及び特殊麥を産出する日本の田畑なるものは、放資の目的物として、甚だ有望なるものであるとの道理を、都會の資本家が、漸次悟るやうになつたことである。一概に米麥と言つても、日本米、日本麥は、特殊の品質、從て又一種特別の風味を有する特殊米であり、又特殊麥である。而も此日本米及び日本麥は、世界廣しと雖も、風土氣候の關係から、日本にしか産せないものである。米國に於て最良の米作地たるテキサス州やジョージヤ州に、日本米を移植しても、年々米質を變化し來つて、大抵三年目には日本米ならざる日本米、即ちテキサス米ジョージヤ米と化するとのことである。そこで方今世界には年々約五億萬石の米を産するが、其の內、日本米たるものは、日本にしか産せない約五千萬石丈けである。然るに我が日本人は、昔からの習ひが性となつて、日本米なり、日本麥に對して、一種强烈なる嗜好を持ち、一種猛烈なる執着心を有して居る。米であつても、日本米でなくては、食つたやうな氣がせぬとか、如何に物價が騰貴しても、米だけは、日本米でないと納らないといふのが、日本人一般の氣風である。之が爲めに、一旦、不作となり、一朝、凶年に會すると、三年前のやうに、米價三十圓といふ無暗な相場を現はすのである。又斯樣な年には、不足を補ふ爲めに、南京米の盛なる輸入を見るが、それが翌年豐作とくると、忽ち減退するのも、亦此の日本人の日本米に對する强烈なる執着力に原因するのである。然し、日本米が油氣が多いとか、粘り氣が多い爲めに、日本人の嗜好に適するが、外國人の口舌には適せないやうである。支那人や、外國人

の料理法からいふと、却て油氣の少ないサバ〳〵した南京米の方が、歡迎される。それに、南京米に比して價が甚だ不廉である爲めに、食料としての日本米の輸出力は、甚だ貧弱である。結局、日本しか出來なくて、日本人のみが極端に嗜好するが、然し又大體日本でのみ消化されねばならぬ運命のものであつて、而も日本人たりとも無暗に消費量を增加する譯には參らぬ食料品たる日本米は、凶年には暴騰するが、反對に、豐年には暴落するのは、定れる自然の運命である。之が豐年續きの後を承けたる昨年の出來秋から、近年稀なる米價の暴落を見るに至つた一の大なる原因である。然し又左樣な年には、米は日本の主たる產物であるといふ理由やら、米を作る百姓が日本國民の大部分を占むるといふ理由やら、農業は今尙ほ國の基であるといふ理屈やらで、政府の力で、米價を引上ぐるといふ米價調節法も出づることであるし、又左樣なことがなくても、限りある日本米產地たる日本に、日本米に對して强烈なる執着力を有する日本人が限りなく增殖し行くといふ此の明なる日本の現狀が、結局、年一年、日本米の相場を騰貴せしめずむば止まぬものである。此後と雖も、年の豐凶により、米價に動搖あらうが、大勢は次第に之を釣り上げ行くものである。そこで、何れの國でも、地價地代は結局漸次騰貴すべき性質のものであるが、世界有數の繁殖率を有する日本人の、强烈なる嗜好を負ふ日本米の唯一無二なる產地たる日本の田畑の地價地代は、別して急速なる騰貴を見るを得べきもので、從て一寸他に比類なき恰好の放資物であるとの自覺(?)が、利を知るに敏なる都會の資本家の間に、漸次發生し來つた爲めに、近年に至つて、一般に土地熱の流行を見るやうに成つたのである。勿論、一時の投機的土地熱は、所謂土地會社なるものの殘骸を遺して、大方游ぎ去つたやうであるが、此間にも、遠大なる考から出た確實なる土地に對する放資家は、既に多分の利益を收めつゝ、今尙ほ其の方針に向つて努力しつゝあるのである。

第三の原因は、近來、地方人の間に勃發し來れる株

式熱の流行が、土地を株式に代へしむる傾向を見るに至つたことである。何事でも一利一害は、數の免れざるところであるが、それが交通機關の發達、殊に新聞紙の普及の上にも現はれて居る。近時、我國に於て、都鄙交通の發達、殊に新聞紙の普及が、地方人を啓發して、彼等の思想をダン〳〵現代化するに連れて、彼等が何んでもかでも都會人の眞似をするといふ惡風をも生ぜしめた。日露戰爭後の諸株暴騰時代に、都會から田舍に注入された株式熱の流行なるものは、即ち其の一つである。都會でそれを專門に飯を食つて居る黑人さへも、屢手を燒くことのある米の思惑や、株の投機に、田紳が手を出したところで、到底最後の勝利を占め得るものでないのであるが、世間の狹い田舍に、唯の一人でも、一寸した當り屋や、小成金が出づると、それが忽ち大評判に成つて、それからそれへと諸株に對する思惑熱や投機熱を蔓延せしむる基と成つた。尤も其の內には、單純なる投機でなく、實際の放資たるものも澤山あつた。手堅くはあるが、年に三分や四分の利廻りにしか當らぬ田畑に、資産を投じて置くよりか、之を賣り拂ふて、見込の宜い株に代へて置く方が、遙に悧巧な遣り方である、あはよくば、一兩年の間に、資産が倍にも三倍にもならうといふので、東京でも、大阪でも、當所株が六七百圓臺にも暴騰した明治三十九年から四十年にかけて、田地持ちが株持ちに早變りしたのも、大分多かつた。が然し、孰れも、四十年の四月から四十一年にかけての株式界の急轉直下に、非常な手傷を負ふて、賣り殘しの先祖傳來の田地田畑は勿論、家や家敷までも賣り拂ふて、遂に田舍を後に、都會に向つて浪々の身と成り果てた田紳も、少くはなかつた。

三

斯樣な大打擊を受けても、一旦、田舍に染み込んだ株式熱は、容易に脫れないものと見えて、其の後と雖も、地方到る處の小都會にまでも、「呑」專門の仲買店の出張所や、所謂『電話口』なるものが、雨後の筍子の如く、簇出し來つたのは、正に此時分からのこと

である。之が又更に一層地方人の株式熱を誘動した。それと前後して、都會に於ける土地熱なるものが、前述の如く、勃興し來つたものだから、彼れ是れ相應じて、最近十年間に、地方から流れ出た土地なるものが莫大であると同時に、地方に流れ込んだ株式なるものも亦莫大なものであつた。

私は、地方人の放資物として、凡て株式は宜しくない物だと斷定するのでない。又私は、土地所有權の場所的移轉を、一概に悲觀するものでもない。現代文明の特色が、早晩、茲にも現はれ來つて、土地所有權の集中が行はれるであらうし、又地方に於ける財産の「都會化」をも見ることであらう。人も、富も、勢力も、權力も、何もかも、集中の運命を免れないのが、「集中の文明」たる現代文明の特色で、又キャピタリズムたる現社會の當然の成行なのである。山の山の其の奥までも、現代的教育、現代的智識を普及せしめやうといふのが、現代文明の齎す第一の使命であつて見れば、田舎に於ける日常の衣食住萬端が、次第に都會化する今の世の中に、獨り財産狀態のみが、何時までも、古代色を帶びて居やう道理がないかも知れぬ。

四

が然し、私は此際を利用して、曩に述べた三種の原因の綜合から、我國の農村に於ける土地兼併なるものが、今や新舊二樣の形式によつて、二重に行はれつゝあることを注意して置き度い。其の一つは、地方に於ける大地主の土地兼併である。之は我國從來の農業金融機關等（農工銀行の如き）や、農業金融政策（低利資金の供給の如き）が、皆大地主に私するやうな仕掛――其の仕掛は後に説明する――に成つて居る爲めに　其の資力を增加する一方に、今尙ほ中地主以下の者に對する金融の道が、梗塞して居る爲めに、天災や、地變で、小地主中地主が疲弊する毎に、米價が騰貴したり、地價が暴騰して、土地に對する思惑心を唆くる毎に、地方に於ける大地主の手に、土地所有權の集中することが、益々加速度と成るやうである。然し、之は言はば、舊式の土地兼併である。此外に、今一つ、新式の土地兼併なるものが起つて來

た。それは、曩に述べたところの都會に於ける資本家の土地兼併である。世人は、今でも、土地兼併といへば、農村に於ける大地主の土地兼併のみの如く心得、此方のみに注意して居るが、少くとも、今の日本では、都會に於ける資本家の土地兼併なるものが、存外猛烈に行はれ居るのである。そしてそれは都會に於ける人口の集中以上に、地方に於ける農村の疲弊を齎す原因となつて居るのである。

本年一月の官報で發表されたところの我國最近の農事統計を見ても、

一　自作農の漸減
二　大地主の漸増
三　兼業農の漸増

といふ三大事實は、ありありと示されて居る。が然し、尙ほ此外に、此統計では分らないが、今一つ、

四　都會農の漸増

といふ新現象も、なかなか著しいものだといふことを、附け加へて置きたいと思ふ。結局、以上の四大現象が、日本の農業の最近の色彩である。そしてそれは、相集つて以て、我國に於ける私の所謂農業的資本家なるものの増殖を說いて居るものなのである。

五

然るに是等の農業的資本家なるものが、常に我國に於ける農業の利益を代表して居る。中央に於ても、地方に於ても、農業に關する公私の機關や、團體や、集會や、運動には、必ず是等の農業的資本家の跳梁跋扈を見るのである。是等の農業的資本家により、牛耳を取られて居ない農業上の機關や、團體や、集會や、運動が、一つとしてないと言つてもよい位である。一體、此種の人々は、多くの田畑を所有しては居るが、自分で百姓するのでないから、田舍に居つても、年中割合に閑散な身の上である。それに、是等の連中は、それぞれ其の地方での地主であり、家柄であり、中には多額納税者であるものさへあるから、自から其の地方に於ける勢力家であるといふことになる。そこで、自然、是等の連中が、田舍に居つたり、都會へ出たりし

て、公私百般の事業に關係する、奔走する、所謂地方の有志家なるものとなるのである。だから、地方に於ける各種の議員の選擧でも、各種の施政の方針でも、苟も是等地方の有志家即ち其の實農業的資本家なるものの御機嫌を損じては、決して成績を收められないといふことになる。

それどころじやない。斯かる閑散な境遇にあつて、而も財力と權力とを兼備して居る農業的資本家自身が、多く其の地方の利益、殊に農業上の利益を代表する議員と成つて打つて出づるのである。そして其の實農業の利益よりも、農業的資本家の利益を代表して居るものの如き態度を採つて居るのである。即ち都會に出でては、衆議院議員となり、貴族院議員となり、其の他、各種の方面に出頭して、地方の繁榮、農業の保護を叫ぶのであるが、其の多くは、其の實、地方繁榮策でなくて地主繁榮策であり、農業保護策でなくて地主保護策たるに過ぎぬのである。又彼の地方に於ける縣會や、郡會や、農會の議員といひ、産業組合の役員といひ、農工銀行の頭取を初め重役といひ、是れ亦皆此種の農業的資本家自身か、若くは其の頤使に任ずる者の集團に過ぎぬのである。

そこで、是等の農會でも、組合でも、米價の騰貴こそ望め、米穀の增收を望まないといふ不思議な現象を呈して居る。あまり米作が出來過ぎては、昨年のやうに、米價の暴落に遇ふて、收入が減るから、少々不作でも、それ丈け米價が高値を保つ方が、收入が多いといふ、地主たる懷中合ひ勘定から、此節は、農商務省の技師や、各府縣の當局者が頻りに勸誘するところの、彼の五石取りや、六石取りなどいふ增收稼法を排斥するといふ風聞さへ傳へられて居る。

是れまでとも、日本の農會に於ける利益擁護の機關や、日本の政界に於ける農業上の利益代表者なるものが、自から農業者である、若くば農業者の集團であると稱して居つても、それは鋤鍬を持たぬ百姓や、簑笠を着けぬ百姓の集團である。羽織を着たり、フロックコートを着て居る百姓の集團で、即ち其の實、農業

資本家たるに過ぎぬ人々の集りであつた爲めに、是等の機關や、是等の代表者が主張する各種の農業政策なるものが、地主政策であつて、百姓政策でなく、農業保護政策でなくて、地主保護政策であつたのは、決して不思議でも何んでもないといふことになる。外米課税や、地租の輕減や、米價の調節――といつても其實米價を引上ぐるといふ調節などが、彼等の絶叫するところであつて、又其の歡迎するところの農政であつたのは、何よりの證據である。

此外にも、尙ほ彼等が建策せるところ、又其の建策を容れて、既に實施せる我國農政上の施設なるものが、數々あつが。が然し、其の多くは、時弊に適中しない、從て時艱を救濟するに足りないで、今に尙ほ成績不良のまゝに過して居るものが澤山ある。中に就ても、彼の農工銀行や、將又低利資金の供給の如きは、其の最も甚しいものだと思ふ。

六

兎角、日本の農業が、沈滯不振の狀態にあるのは、それは全く農業金融の便を缺く爲めである。低利なる農業資金の供給が足りない爲めであるといふのが、昔から各府縣の農會や、中央に於ける帝國議會の叫びであつた。我が政府當局者も、遂に此點に同意して、西洋の如く、我國にも農業金融機關を特設し、殊に低利長期の貸附を斷行したならば、之に依て、西洋の如くに、我國農業の偉大なる發展を期待し得るであろうといふことになつた。其の結果として、過ぐる明治三十年に生れ出でたのが、東京に於ける日本勸業銀行を中心として、各府縣毎に設けた四十六の農工銀行である。更に其の後になつて、中央政府の手より、各府縣に散布された郵便貯金の化身たる所謂『低利資金』の供給なるものも、亦全く此趣旨から割り出されたものである。然るに、其の結果は、豫期の如くに、日本の農業の發達を促して居ない。之は一體如何なる理由であろうかといふと、それには一段の深い原因があるのである。

成程、農銀の貸附や、低利資金の供給が。それだけ、

地方に於ける資金を豊富ならしめたには相違ない。が然し、農銀自體の經營者なり、又其の關係者なるものが、悉く農業的資本家であつて、又官憲に阿附して、低利資金の甘味を吸收し得る者も、其の大部分は、農業家ではあるが、百姓でない爲めに、地方の有志家たり得、從て多少とも、地方の政界に有力者たる地位を占むるところの農業的資本家であつた爲めに、其の種の資本家が、土地や、米麥に就て、思惑をなす農業資金は增加したが、土地の改良や、米麥の增收を來たす眞の農業資金は左まで增加しない。土地の兼併や、團米をなす農業的資本家の懷中合(ふところあひ)は都合よく成つたが、譯を知らぬ政府や、國民が、之に就て期待して居つたところの、種子の改良とか、施肥の增加とか、農具の改良とか、牛馬耕の普及とか、二毛作の實行とか、副業奬勵とか、害蟲の驅除とか、之を要するに、直接農業の改良として現はるべきものが、甚だ少なかつた。土地の開墾とか、排水灌漑の工事とかいふが如きも、名を是に借りて、其の實、依て得たる資金を以て、土地買收の思惑をしたり、土地兼併の勢を加へたり、甚しきは、之を以て、米穀買占の資金に供したに過ぎぬものが、少くないといふことである。先年の米價の暴騰には、是が大分重い原因を成して居つたことは、今や公然の秘密である。

更に最も甚しいのになると、農業資金たるべきものが、活動寫眞の資金に化けて居る處さへある。私は昨年十月香川縣高松市に開催された帝國農會の大會で、此事を述べたところ、其の夜、宴會の席で、香川縣農會の理事者たる某氏が、臨席に居て、聲を潜めて言ふには、「本日の御演說中、活動寫眞云々の一條は、誠に項門の一針で、恐れ入つたる御觀察であります」とのことであつた。左程恐れ入るには譯があろうと問ひ質して見ると、「實は、當縣でも、農工銀行が活動寫眞に多分の金を貸付け居るので、それを御看破に成つての御演說と存じまして」との答であつた。私は香川縣にも左樣なことが行はれ居るであろうとは、夢にも知らなかつたのである。唯關西の某府で農工銀行に此事あ

るを聞いて居つたものだから、一例として、忠告を試みた次第であつたが、それと同じことが、香川縣にも行はれて居るといふやうでは、尚ほ他の府縣にも澤山例のあることであらうと思はれて、轉た慨嘆に堪へぬ。

此外、各府縣の農工銀行が、地方の田地田畑に對して貸附るを好まないで、都會の地所や家屋に對して貸附くる傾向の著しいことも、今や公然の秘密である。それでは、農工銀行でなくて、正しく不動産抵當銀行であるとの批評は、蓋し免れないところであらう。之れといふのも、農銀の理事者は勿論、是等の人々と平生交際があつて、容易に低利長期の貸附を受け得る人達も、皆地主ではあるが、農家でなく、農家ではあるが、自作農でないところの農業的資本家たるものであるからである。そして又斯様な農業的資本家は、地主ではあるが、百姓をしない閑散な身の上である爲めに、時には政治に奔走する、然らざるまでも、常に地方に於ける所謂有志家なるものであつて、公私各方面に關係するところ多いから、自然又權勢家でもある。左様な人達に圍繞されたる各府縣の農銀なるものが、動もすれば、其の地々々に有勢なる政黨政派の機關となり、金穴たるまでに退化するに至つたのは、是れ亦當然の成り行きと申さねばならぬ。

七

然し此のことたる、一概に農工銀行を咎むべきでない。農工銀行は、一面、國家の特典に浴する公共機關たる性質を帶ぶるものであるが、又他面、營利會社たるものであつて見れば、五反百姓や、水呑百姓を相手にせず、比較的安全なる地主――それも成るべく資産裕かなる大地主や中地主を主なる得意とするのは、勢の免れざるところである。唯此種の金融機關に依て、我國の農業の發達を期待し得るものだと思ふた政府當局者の考へそは、正しく我國の農界の事情に通ぜざるより生じた根本的誤謬であることを指摘せねばならぬ。農業は同じ農業でも、地主は同じ地主でも、其の地主に自作農の多い西洋では、地主に對する融通が、自から農業に對する融通となる、又農業に對する融通

は、自から開墾拓地の進歩や、農具肥料の改良と成つて現はれてくる。ダガ日本では、地主は地主でも、地主たる性質が、西洋と異つて居る以上、西洋から直輸入の農業金融機[illegible]では、本家本元と同一の功果を奏せないのは、固より當に然るべきところである。

依て思ふに、方今、我國では、各府縣唯一の農業金融機關たる農工銀行をして、名實相適ふものたらしめ、是に於て、我國の農業を發達せしめ、地方を開發せむと欲するには、是非とも、政黨の機關たるに過ぎざる農銀の現狀を打破すると與に、そが資本的資本家の機關たる實情をも打破する爲めには、之を一括して、勸業銀行の支店化せしむべしといふ議論もあるが、如何程此種の改正を圖つても、我國の地主狀態にして、現在の如くである以上は、之が實績を求むること、恰も木に緣つて魚を求むるが如きものではあるまいか。それは獨り農工銀行だけのことではない。我國に於ける地主狀態にして、現在の如く、農業的資本家たるに止むに於ては、產業組合の普及、信用組合の發達、扨ては低利資金の供給等に依て、我國の農村の發達を期待せむとする企も、亦甚だ望み薄いものとなるのである。所詮、我國に於ける小作農をして自作農たらしむると同時に、我國に於ける地主をして自作地主たらしむることが、我國に於ける何より有功な農業刷新策であり、又農村繁榮策である。之が先づ或る程度まで行はれなくては、千百の農事獎勵も、萬般の農業金融も、何もかも、功果少いのである。之れさへ行はるれば、我國に於ける一切の農政上の施設が、皆悉く現實に活動し來るのである。特に農業金融機關に於て、最も然りである。

尤も我國に於ける地主が、悉く自作地主に成るといふことは、トテモ言つて行はれることじやない。又左樣な國は、世界に一つもないのであるから、私は左樣な出來ない相談を、玆に特ち出すのでない。然し地主であつても、自作地主でない限りは、決して百姓でない。從て其の種の地主の言ふことを聽いたり、其の種の地主に資金を融通しても、それは日本の農業を發達せし

め、日本の農村を發展せしむる功力薄いのであるから、一切止めて貰ひ度いといふのである。そして之を止めるには、斯様な百姓でない百姓を、此後は一切百姓として取扱はぬし、又百姓の代表者としても、百姓の關係者としても、一切取扱はぬことにするのが、何よりの捷路である。さすれば、眞の百姓が出て來て、眞に百姓に有功なる施設を要求することになる。そこで眞の百姓に對する眞の百姓政策が行はれる。眞の農業に對する眞の農業政策が行はれる。又斯くなれば、眞の百姓たる利益と權威が、眞の百姓たる分子を增加せしむる基にもなるのである。斯様にして、私は、眞の百姓のみを百姓として表面に立たしむることが、正當であつて、又有益であると信ずる。百姓面をしても、事實百姓でない百姓を、我が農會から葬り去らねば、眞の百姓政策が起らぬ、眞の百姓の利益が增進せぬ、眞に百姓たる分子が益々凋落する。百姓でない百姓を、百姓の利益を代表するあらゆる方面からも、百姓の利益を增進するを以て目的とするあらゆる機關からも、全然排斥することが、百姓たるを以て誇りとし、百姓たるを以て利益とし、從て又百姓たらむとする分子を增加せしむる所以であつて、そしてそれが、日本の農業の發達、從て日本の農村の復活を得せしむる所以ともなるのである。

八

此の如くして、地主を自作地主化せしむることが必要であるが、それと同じやうに、小作農を自作農化することも亦必要である。現在、農業的資本家たるに止る大地主や、中地主にして、自作農たるに至るもの、次第に增加するやうになつても、現在、自作農たり、又は自作兼小作農たる小地主が、次第に所有田畑を失ふて、純然たる小作農たるに至るやうでは、差引、日本の農業狀態が改らないことになる。要するに、農民をして土地を失はしめず。土地を所有する者に其の土地を耕作すると同時に、土地を耕作する者が其の土地を所有するやうになつて、土地と勞力とが、密接なる經濟的觀念で、常に固く結び付て居るやうに化すること

とが、我國の農政の根本義であらねばならぬ。嘗てアーサー、ヤングの言つた「所有權の魔術は、砂石を化して黄金となす」といふことは、いつの世でも常に農政の信條であらねばならぬ。

斯く申せばとて、小作農は如何やうに成り行くも可なりと言ふのでない。是れまで單純なる小作農たりし者が、一歩進んで、小さいながらも自作農たり得るに至ることを保護し、助成することが、必要ではあるが、其の進化はトテモ急には望めない。而も現に小作農たる者が、夥しい數であつて、大正二年末の調査では、我國の農家戸數の約二割八分を占め、自作兼小作農たるものを合すと、全體の約七割に達する。して見ると、之れこそ眞に我國の農家の本體と見ねばならぬものであるから、其の利害休戚を度外に措くことはならぬ。何れかといへば、日本のあらゆる農業政策は、小作人本位の農業政策であらねばならぬ筈のものなのである。然るに是れまでの日本の農政は、大部分、地主本位の農政であつた。それも其の實大地主本位の農政であつた。曩に累々述べた通り、我國の大地主は、皆農業的資本家である爲めに、年々上納される小作米に飽食暖衣し得る連中である爲めに、暇あるに乘じて、あらゆる方面に亘つて、日本の農業界の利益代表者たる地位を占め、勢力を有することが、斯く大地主本位の農政たらしむるに至つたのであるが、之が爲めに、我國の農民の七割を占むる小作農の利益は、何れの方面に於ても代表されて居ない。從て常に其の利害休戚を顧られないどころか、屢々蹂躙されつゝあるのである。

九

一例を擧げやうならば、産米改良の奬勵である。産米の改良を奬勵するといふことは、良い農政に相違ない。が然し、それが良い農政であるといふことには、先づ以て、日本の百姓と、西洋の百姓と、同一性質の百姓であることを前提としなければならぬ。自作農の多い西洋では、それは良い農政であらうが小作農の多い我國ではそれは左程の價値あるものでないのである、一層的確にいふと、小作農でも、金納制度、

では、それは、良い奬勵法であるが、米納制度たる我國では、それは、地主の利益のみで、小作人の利益にならぬ奬勵法なのである。同じ反に一石五斗の小作米でも、一等米での一石五斗と、三等米での一石五斗とでは、地主の所得——貨幣所得——に大なる差がある。そこで、地主の利益を中心として考案せらるゝ日本の農政では、産米の改良を口喧しく云ふ。縣や郡の當局者と地主連との肝煎りで、時々品評會などを開催して、一等米を作つた者には、褒美として米一俵を與ふるなどいふ奬勵法が講ぜられて居る。多くの小作米を取り、從て賣米の餘裕多い地主の懷中合勘定では、少々褒美を出しても引き合ふ奬勵法であらうが、此奬勵法に釣り込れる小作人こそ可憐れ者である。良い米を作ろうとすれば、多くの米が穫れない。米質の良いものほど、産額が少い。良い米を作つても、惡い米を作つても、反に一石五斗といふ小作米の割合に變りがない以上は、少々米質が惡くても、産額の多いものを作ることが、反に一石五斗の小作米を納めた剩餘米にのみ衣食する小作人には利益なのである。少々の褒美拵に釣り込まるべきものでない。それを強て釣り込まうとする所謂産米改良の奬勵は、無智なる小作人を欺かうとする惡い計謀である。地主の利益の爲めに、小作人の利益を犧牲に供せしめやうとする詐欺的惡政だと評されても、恐く返す辭はなかろう。

地租の輕減などいふことも、農民の負擔を輕減する第一の善政だとして、屢々唱へられたし、又現に屢々實行された。凡そ租税の輕減といひ、民力の休養といひ其のことのみを抽象して考へたならば、言ふまでもなく善政である。地租に於ても、之を輕減し得る丈けの財政上の餘裕さへあれば、一日も躊躇すべきことでない。が然し、それが日本の農民の負擔を輕減するものだといふに至つては、再考を要する。地租の輕減によりて負擔を輕減される者は、田地の所有者たる地主のみである。田地を所有して居ない小作人には、何等負擔の輕減とはならぬのである。一概に日本の農民の負擔の輕減とか、日本の農業の負擔の輕減とかいふ

が、地租の輕減によつて、負擔を輕減される所謂農民は、羽織を着て居る農民であつて、簑笠を着て居る農民ではない。それは皆農業的資本家であつて、眞の百姓の一部に過ぎないものである。

十

實を言ふと、小作農必ずしも不可ならずである。英吉利や、普魯西亞では、小作農地の方が、自作農地よりも、却つて宜く耕されつゝある所が少くない。然し、其の之れあるのは、是等の國に於ける小作人が、比較的に有福であるに拘て、加へて、是等の小作人に對する國家の施設が宜しきを得て居る爲めに、其の農業上に用ゆる資力が充分であるからである。然るに、我國の小作人の境遇は、全く之と反對で、小作人といへば、誰れしも直ぐ貧乏人を聯想する如くに、一體に資力が貧弱である上に、從來、日本の農政が、地主階級の爲めに蓋はれて、國家の恩澤が毫も是に及ばなかつたから、小作農か自作農に優つた結果を收めつゝある例が少いのである。從て又小作農が自作農に進化し得る望みも、殆んど絶えて居るのである。凡そ斯樣な不都合なことが、一々皆改正せられねば、我國の農村なるものは、次第〱に荒れ行く外ないのである。

功利の貯藏としてのロオマンス

田中王堂

一、前說の深化

一昨年の初夏の際、私があの『吾が非哲學』を著して、將さに新たに世間に對つて Romantic Utilitrianism の人生觀を提唱しようとして居つた時に、私は或る一

人の友人より、最近、佛蘭西に於て、Romanticisme Utilitaire の標題を持つた一書を公けにした學者のあることを聽いた。この友人の話しに依ると、この書の內容は、ジエムス、ベルグソン、ニイチエ、三家の人生觀の紹述に過ぎないといふことであつたから、當時、私があの書を機關として計畫して居つたところのもののとは大分に趣を異にするわけではあるが、兎に角、私はこの新造語の暗合には多大の感興を催ふしたのであつた。そして、私の目的とするところと、彼等の目的とするところとが、等しく現代生活の研究と鑑賞とにありながら、ジエムスのは心理的であり、ベルグソンのは形而上學的であり、更に、ニイチエの到つては藝術的であるがために、彼れが是等の三方式に Romanticisme Utilitaire の名目を與へて居ることは、私の方式が（尠なくもあの書に現はれて居る限りに於て）、主として、人文史的であるがために、私が其れに Romantic Utilitarinism の名目を與へて居るのと同じ理由で、同じ程度に、妥當であり適切であると思つた。

私は、現代生活を豐富にし、豪健にしようとして、正しき態度で其れを研究し、正しき氣分で其れを鑑賞して居る者は、何人にしても或る一種の理會に到達しなければならぬ。そして、其の細目に於ては、常の人々の性情と修養との殊なるに從つて、視界の分野、高調の箇處を異にするに到ることも自然であるが、其の歸結に至つては、凖べて悉く Romanticisme Utilitaire 又は Romantic Utilitarinism なる輪廓に依つて劃せらるゝ範疇の中に落つべきものだと信じて居る。

私は、さきに實利とロオマンスとの依立する文明を叙說した。この度は、あの見地を更に深化して、一論文の能くする限度に於て、ロオマンスを貯藏とする功利の生活を論議して見たいと欲ふのである。

二、功利とロオマンスとの劃義

あらゆる感想、あらゆる思惟、あらゆる作動も、所詮は、單一なる生活が時々刻々の必要に應じて、暫く取る形容に過ぎない。然し、是等の總べては人間の久しき經驗より「節約の法」に從つて、其の異なれる機能

の性質に據り、それ〴〵、識別されて來たのであるから、復たび『節約の法』に依つて、是等のもの丶區分の改整又は撤廢の喚示せられざる間は、現在の事實を尊重し維持することが賢くもあり大切でもある。功利とロオマンスの關係は、他方の協同を竢たずしては、一方の活動は自づから不具となるのみならず、其れの存在さへも危殆の運命に陷るであらうと考へらる丶程に、健全なる生活に在つては、是等兩者の交渉は、親密なものになつては居るが、是等兩者の機能を同視することの出來ないことは、猶ほ、眼と手とが單一なる生活の必要から分化し來たつて、現に共通の目的に對つて常に親密に協同して居るからといつて、眼と手とを同視することの出來ないのと同樣である。若し、眼と手との關係に於て、さうすることが『節約の法』に負くことになるならば、同じ理由で、實利とロオマンスとの關係に於ても、さうすることは『節約の法』に負くことになるとせねばならぬ。勿論、若し吾人にして好むならば、實利の觀念を擴大してロオマンスを攝取せしめることも出來るし、又、之れに反して、ロオマンスの觀念を敷衍して、實利を包擁せしめることも出來る。然し、さうした結果、在るまゝの生活を統一し、助長するに於て、一の利なくして、百の害あるものとなるだけならば、實利とロオマンスとは久しき間の經驗から得た智慧に信賴して、機能の上より識別さるべきものであると私は信じて居る。

それでは、功利とは如何なるものであり、如何に理會すれば宜いか。ロオマンスとは如何なるものであり、如何に理會すれば宜いか。

私は功利を劃義して、

功利は、主觀が出來るだけ經濟的に、或る欲望を滿たすの目的を以て、彼れが撰擇し、若しくは創設した方法に與へる價値である。

とし、又、ロオマンスを劃義して、

ロオマンスは主觀が新たに生ずる或る欲望を出來るだけ豐富に滿たすの目的を以て、彼れの資格が許す限り、汎く深く其れが方法を索める氣分又は努力である。

としたいと欲ふ。

私は、是れまで、隨分、その煩に堪へない程に、經濟道德乃至藝術に關する著作の中に於て、功利とロオマンスとの兩語に逢著した。然し、私の狹き見聞の範圍にあつては、未だ何處にも大切なる是等兩語の意義の闡明せられたことを見出さない。最も結構なのでも、纔かに、煩瑣な冗漫な實例の臚列に終つて居る。私は、こゝに始めて、是等兩語の意義を劃する第一の試みをしたのである。字面の如きは、もつと洗練して、一層簡淨な、一層緊張したものにすることが出來ようが、功利とロオマンスとの意義は大抵こゝに盡きて居ると私は信ずる。

この劃義に依ると、功利とロオマンスとは、孰づれも吾人の生活の持續と發展とに取つて必須の物であるが、其れの機能に到つては、全然、別である。

三、生活の特徴

何故に、吾人は生活の道具として、功利とロオマンスとを併せて必要とするか。其れは生活其の物の特徴から來て居るのであることは云ふまでもない。

人間の有ち得る唯一の目的の生きること、詳しく云へば、善く生きることに限られて居ることは、誰れにしても尠し考へれば容易に解かる筈である。而して、生きるといふことは、欲望を滿たすこと、善く生きるといふことは、善く欲望を滿たすことであることも、亦、誰れにしても大して考へないでも相當の程度には解かる筈である。然し、如何なる種類に屬する欲望にしても、其れを滿たすには、代償として必然に或る時間、或る勞力を拂はねばならぬが、そこに入り來たる他の一切の事情にして同じである以上は、若し或る一つの滿足を獲得するに、二つ或は其れ以上の方法があるとしたならば、總べての場合に於て、殆ど凡ての人は、其の中で最小の勞力にて獲得される方法を撰ぶであらうといふことだけは豫言することが出來る。而して、滿足の大小と勞力の多寡とを商較するに標準となるものは、功利の他にはないとすると、人間の生活に於て、功利の支配する領域は隨分廣いことを承認せ

ねばならぬ。功利主義の强みは、この事實に其の根柢を持つて居る。

然し、人間の生活は決して固定しては居らぬ。其れを組織するものは、ざつと見ても、境遇と品性との二つであるが、境遇の方に在つても其の條件は絶へず變化し、品性の方に在つても其れの理想は絶へず發展して居る。然し、是等の兩者は、たゞ或る輪廓の中に大體の相關を保つて居るとは謂はれ得るが、一方の變化と他方の發展とには嚴密な意味に於ける『先定調和』は存じはしない。こゝに於て、或る種、或る程度の偶然は生活の中に入つて來る。事前に當たつて、この侵入者を制御するの道は、獨りロオマンスに依つて種々の方式を案出し、思想上の冒險を試みることに限らるゝ。して見ると、高等な、復雜な生活に取つて、ロオマンスが不時に生ずる生活の破産を保障するに與かつて偉大な効力を有することは明らかである。或る程度の文明に達した人士に取つてロオマンチシズムの魅力を有することはこの事實より説明されると思ふ。

斯くして、人間の生活は現に吾人の見て居るやうなものであると云ふ極めて平明な事實からして功利とロオマンスとは、其の原始の時代より、人間の興味と努力とを分つ兩極となつて居つたのである。たゞ、初めには、現實と想像とは明瞭に分離するに到らなかつた爲めに、功利は想像に惱まされて茫漠であり、ロオマンスは現實に囚はれて平板であつたのである。其れが、兩方ともに、歳月の推移し、經驗の堆積するに從つて、だん／＼に分離を加へ來たると同時に、交渉を滋し來たつた。されば、事實に徴して、古代人はロオマンスに長じて功利に短であつたといふのは眞ではない。古代人はロオマンスにも功利にも等しく幼稚であつたのである。嚴密な意義に於て、人間がロオマンチックとなり、功利的となつたのは比較的に近代のことである、大觀して、其れは文藝復興以後のことであると見るのが一番便利であらう。

四、文藝復興

私は、是れまで二三の場合に於て、異なる興味を以

て、異なる側面から、文藝復興に就て解釋と評價とを試みた。こゝに重ねて、同一の意見を、同樣の言葉で繰り返す興味もないし、又、さうして居る時間もない。こゝでは、唯、文藝復興がそれの感化を功利の觀念とロオマンスの氣分とに及ぼした範圍に於て、尠しくあの運動を考察するに止めて置かう。

文藝復興の成果は何であるか。それは、個人をして一方に自已の價値を知覺し他方に自已の權威を認識しせしめたところにあるのである。自己の價値を知覺して來た結果はます〳〵汎く方便を索めるし、自己の權威を認識して來た結果はます〳〵確く境遇を支配しようとする。斯くして、情操は富贍となつて藝術を生じ、理智は銳利となつて科學を起したのである。

五、功利主義とロオマンチシズム

人間が、彼れの生活を統一する二大原理たる、功利とロオマンスとは、文藝復興に依つて與へられた刺激によつて、各從來よりも一層顯著に其れの特徵を表はして來た。さきに尠しく述べて置いたやうに、功利の機能は經濟的に現存の方便を選擇するにあるし、ロオマンスの機能は觀念的未來の爲めに方便を案出するにあるのであるから、是等二つのものは、互に依立して始めておのれの機能に意義を有ち得るのであるが文藝復興以後、兩者の何れかの一つを主とし、他を從とする人生觀が組織されたのである。功利主義とロオマンチシズムとが、即ち是等である。

總べて如何なる機關、又は活動にしても、二つのものの協同に依つて、始めて其等兩つの作用が決定されて居る場合に當つて、若し誤つて、一方の存在を尊重するがために、他方の存在を輕視し、若しくは無視するならば、反つて、尊重せんとする方の性質をも誤解するに到るものである。今、功利主義が功利の機能に對する誤解の如き、又はロオマンチシズムがロオマンスの機能に對する誤解の如き、好き實例である。

功利主義が、人間は一つの滿足を求めるに、二つ若しくは其れ以上の方法がある場合には、彼れには、其の中で最も經濟的の方法を擇ばうとする自然の傾向が

あると認て居るのは正しい。然し、經濟的の方便といふ意味を餘りに狹く限つて、或る種の欲望を滿たす方便を功利の標準以外に置いたのは確かに誤謬である。如何なる欲望を滿たすにも、經濟的であるのと經濟的でないのとの方便は存じ得る限り、功利の標準は、勝手に欲望の種類に從つて其れを滿たす方便の或るものを功利的であるとし、其の他の或るものを反功利的であるとして區別することは出來ぬわけである。若し、人間に音樂の欲求があるならば、其れは家屋、又は衣服の欲求と等しく正當なものである。されば、音樂に依つて得ようとする欲求の性質が定まつた場合に、其れを滿たす方便が一つ以上あるならば、其等の方便の中に或るものを功利的とし、又、或るものを反功利的とする標準は建てられよう。然し、單に一般人に依つて家屋や衣服は音樂よりも欲求されゝ場合が多いからと云つて、直に、家屋や衣服は功利的であつて、音樂は反功利的であるとやうに考へるのは確かに誤りである。

ロオマンチシズムにも功利主義に劣らない謬見が含まれて居る。先きの定義に從つて、ロオマンスの作用は未來に於て經驗に入り來たるかも知れぬところの或る偶然に對して豫備するが爲めに、廣く觀念的に方便を立案するところの努力である。して見ると、ロオマンチシズムが生活に必要なる經驗を輕蔑して、俗に超功利的と云はれるものだけに價値を置くのは確かに誤りである。ロオマンチストたるものは、試に自づら問ふて見るがよい。彼れが盲目的に擯斥する經驗がなくして、彼れが尊重する經驗だけがあるとしたなら、彼れの生活は果して成り立ち得るか。又、さうした時に彼れの生活は彼れが現に有つて居るだけの價値を猶ほ保留することが出來るか。何んでも生活に必要なる一切の經驗を包擁して、其等の各に相當な價値を與へ得るものでなければ、正當な見解であるとは云へないと思ふ。

六、現代文藝の二潮流

一寸見たところで、歐洲の文藝界に、正反對の態度にあるやうに見える二潮流の現存することを否むわ

に行かぬ。大觀して、一つを功利派に屬するものとしも一つをロオマンス派に屬するものとする。ロオマンス派に屬する一人の者の意見に從ふと、純なる文藝は、一切功利の關係を超越して、一つの確な心像さへも有たないやうな、瞬間的の情緒の發露したものに限らるべきである。評論とか小說とかいふもの丶文藝でないことは無論のこと、本事詩、劇詩等さへも、嚴密な意味では、文藝ではないと云ふのであると云ふのである。之れに反して、功利派の人々の意見に從ふと、眞正なる文藝の有ち得る唯一の職分は、個人の生活又は社會組織の改造にあるのである。

斯く擧げて來ると、功利派の主張する文藝と、ロオマンス派の固執する文藝との間には、何等の類似もないのみならず、何等の交涉するところもないやうに見える。然し、事實、果してさうであらうか。

兩者は相塡補して、私が現代の中心思想であると考て居るところのものを形作つて居ると私は思ふ。成る程、一方の主張を代表するものは自づから他方の主張の價値を無視する傾向があるが、然し、相應に存在の理由を以て或る二つの潮流が並立する時には、どんなにしても、一方の潮流だけが現代精神の全體を代表して居るものと見ることは出來ない。私は、文藝は經濟的に方便を撰擇して直に境遇の改善を圖つて居るものと、觀念的に方便を工夫して性情の陶冶を圖つて居るもの丶二種があると信じて居る。最後の目的は各の個人の改造である。然しながら、是の目的を達するには、境遇の改善と性情の陶冶とが必要である、そして、是等は俗に正反對に立つて居ると見られて居る二種の文藝が陽には別々に手分けして、そして陰には互に助け合つて是の共通の目的を達して居るものと見る外はない。

七、基督とマキヤベリ

基督とマキヤベリとは、孰づれも人性に對して驚くべき透觀を持つて居つた。是れまで、地上に於てこの二人程、反對の敎訓を說いたものはない。

基督は物質的形式主義に反對して、靈の信仰を敎へ

マキヤベリは空虚的形式主義に反對して世智の道德を説いた。基督は道德の要は煩瑣な行狀の規則を與へるよりも、直ちに人の心を改悛せしめることに在りと敎へ、マキヤベリは、處世の法は他人の情行の知識　利用して己れの安固と成功とを圖ることを説いた。基督の敎訓の内的にして徹底的なる點に於て、全く獨創のものであつた如く、マキアヴエリ敎訓も現實的なることに於て、嶄新なものであつた。基督が敵に勝つの道は、彼れを愛することに依つてゞあつたが、マキヤベリが敵に勝つの道は彼れを陷れることに依つてゞあつた。

私は、永遠に人心の機微を直覺することに於てはマキアヴエリーは到底基督の匹ではないが、然し、一時の紛々たる俗情を明察することに於てはマキアヴエリにも固より非凡の資があつた。基督は他人に於ける感激の力を過大視し、マキアヴエリには其れを過小視した。

基督は極端なる理想派に屬する人であり、マキヤベリは極端なる功利派に屬する人である。基督の敎は動的である。永久に人間を改造する力を持つて居るが、マキヤベリの敎は靜的である、現在の人間を左右する力を以つて居る。

眞の道德、即ち、現代に於て、最も消耗を來たさない道德は、基督のロオマンチシズムを酵母とするマキヤベリの功利主義であると思ふ。

八、總ての活動の傾向

あらゆる人間の活動、及び、それの所產たる機關は、悉く直接的より間接的になる傾向がある。其始め多くは日常生活の必要より出立するが、それが段々に進步し、發展するに從つて、遂には、日常生活に何等の關係もないのみならず、反つて、それを破壞するやうな傾向を有つて來るやうなことがある。是れ等は、皆、私が前に用ゐた特殊の意味で、功利的よりロオマンテックに進んだのである。蓄財欲の變形、科學の進程、道德の洗練等は皆是の法則に從つて居るのである。今、私は、こゝに、此の事實の最も普通なものとして、蓄財欲を取つて見よう。人は何の爲めに蓄財の欲を有つ

か。それは、云ふまでもなく、財産を有つことは生活に便利を與へるからである。初めに當つては、彼れの蓄財は實際に用途を有つか、或は、さういふことが想像されて居るのである。然しながら、彼れが財産に依つて、一度利益を經驗するならば、それから以後は、一々實際に貯金の用途は解らないでも、始めの經驗に信頼して、これ〳〵の財産に依つてこれ〳〵の利益を得たから、それの十倍、若しくは、百倍である以上は、隨つて十倍乃至百倍の利益を得るであらうと演繹して蓄財する。されば、一見しては蓄財其のものが目的となつて居るやうに見える場合があつても、猶ほ漠然ながら、一層大なる目的がそれを支配して居ることが解かる。つまり、蓄財は直接的より間接的となり、功利的よりロオマンテツクとなつたのである。

斯くの如き例は、多々他の種の經驗よりも舉げることが出來るが、兎に角、直接的、功利的の要素と併せて間接的、ロオマンテツクの要素を有つて生活する人は、直接的功利的の要素だけで生活する人よりも、安固な生活を送り、强き人であり得ると云ふことは多言を要するまでもないことである。

九、現代生活の一象徴

私は飛行機其の物に對してよりも、寧ろ、それを現代生活を表現する最も適當なる象徴として、其れに興味を有つものである。なぜならば、私は飛行機に於て最も美しく大膽なるロオマンスは、最も美しく精緻なる功利と結合して居ることを見出すからである。

傳説や、小説に現はれて居るところから推察しても、人間が或る工夫に依つて、地上を離れて空中を飛ぶと云ふことは、久しき間、美しき憧憬であつたやうに見える。然しながら、現代に到るまでは、是の憧憬は、一度も實現されなかつた。なぜならば、彼等は生活の總て他の部分に於て、未だロオマンスと實利とを交渉せしめることを知らなかつた如く、この試みに於ても、さうであつたからである。彼等は生活の奥底を探くれば、そこには、いつでも、功利とロオマンスとが協同して其れを支持して居ることを覺らなかつたのであ

る。

如何に平凡なる思想も、それを實現する方便を伴はなければ、一つの空想に過ぎないと等しく、如何に大膽なる思想も、それを實現する方便さへ見出されるならば、最早空想ではないのである。中天に舞ひ昇る、或は、中空を翅け廻はるといふことは、只、それが憧憬として止まる間は空想であつた。然しながら、既に其れが方便を得た今日に於ては、一つの權威ある現實である。

私は、ロオマンスと實利との結合として、飛行機に大なる興味を有つのである。なぜならば、彼れは前人は多分不可能とし、不可思議としたらうと思はるゝ現代生活の一つの象徴として立つて居るからである。

十、代議政治

代議政治は、必ずしも總ての場合に於て、現代の所產ではない。國に依つては、隨分久しき前より行はれて居た。然しながら、代議政治に依つて、包含されて居る意義は現代に到つて始めて會得されたと云つてもよい。

代議政治の眞の意義を發揮しようとするならば、それを靜的に見ずして、動的に見ねばならぬ。單に、在る制度と見ずして、絕えず在るべき制度として見ねばならぬ。

代議政治が今後、永久に吾人の政治機關として存在するものであるか、或るそれよりも更に優れた物に依つて取つて代はらるゝか解からない。然しながら、現に、吾人がそれを有つ以上は、其の意義を正當に理會しなければならぬ。なぜならば、見やうに依つて、此の制度位、名實伴はない虛僞の部分の含まれた制度は他に多く類を見ないからである。

代議政治の中心意義は要求である。現存の材料を用ゐて或る理想を實現しようとする要求である。代議政治には、飛行機の如く、誰れの眼にも容易に映ずる冒險的の要素は華々しく現はれて居ない。然しながら、代議政治に携はるものは、官吏でも、議員でも、若しくは一般の國民でも、恐ろしき試驗に掛かつて居るの

である。そして、始終『汝の手に於て、改良も出來、破壞も出來る此の機關を通じて、汝は、汝の現狀を超越して、更に優れた狀態に進むことが出來るか、どうであるか。』の質問を受けて居るのである。或る人は、代議政治は單に僞りの名稱である。宜しく、代理政治とすべきであると云つた。然し、私は假令代理政治と改めても、猶ほそれは、一つの理想の表現であつて、事實の敍述ではないのであるから、今日の代議士が文字通りの代議士になるのは、無限に達しても、むづかしからう。斯くて代議士は永久に理想を表現する言葉であるとしても、やはり、代議士で宜いと思ふ。そして、現代の理想の表現として、永久に一つの要求として置くが宜からうと思ふ。唯、吾人の任務は其の意義を誤解しないことを努めるにあるだけである。

十一、大なる利己主義

近世に於て、自己に關して、全然反對に立つた思想家が二人あると稱せられて居る。一方はカアライル、他方はニイチエである。ニイチエは自已を主張し、カアライルは自己を否定したと云はれて居る。然し、是れは、果して事實であらうか。私はさうは信じない。カアライルが自己を否定したことは明らかであるが、私はニイチエもやはり自己を否定して居ると思ふ。なぜならば、ニイチエにあつては、超人の出現には自分は必然にそれの橋梁とならなければならないと說いて居るからである。勿論、この場合に超人の出現を各人の意志とせよと說かれて居る。私共は、各、或る意志を實現する爲めには、他の欲望を犧牲にすることはしば〱ある。然し、その場合には、やはり自己の利益、權威が中心となつて居るのである。ニイチエの場合には、是れより何千年、若しくは何萬年先きに出現すると想像せらるる超人の爲めに、自己を犧牲にせよと說くのである。私は、眞に是れが、英雄的行爲の動力となるか、どうかは頗る疑はしいと思ふ。眞に、英雄的行爲の中心となるものは、吾々自身の擴大、吾々と肉體にも精神にも、接觸して居る子孫の擴大であると思ふ。

眞の利己主義はいつでも自分を目的とし、自分から出立する。然し、彼れの生活は、必然に自分の品性と、彼れの周りの境遇とより成り立つて居るから、自分の生活を改造しようとすれば、必然に自分の生活の半面たる境遇をも改造せねば滿足しなくなる。彼れは、自分の品性を改造して、境遇を改造しなければ、猶ほ自分の生活の半面が改造されないと思ふ。斯く考へて來ると自己完成と社會感情とは、矛盾しないものとなる。斯く考へて行ふ人は、大いなる己人主義を實行して居る人である。つまり、或る人の方針が利己主義に依るか、否かと云ふとは、其の覺悟及び出立點の相違より分るゝのであつて、決して、彼れの勢力の及ぶ範圍の大小に依つて定まるのではない。ニイチエも、カアライルも、共に其の色彩は極めて進取的であつたが、畢竟するに、單のロオマンチストであつた。そして、現實の上に立てる功利の觀念を缺いて居つた。これが、大に利己主義を主張し、或は大に他愛主義を主張しようとして、斯る誤謬に陷つた原因である。生活の二大要素なるロオマンスと實利との兩方に同樣の注意を拂ふ私は、自己を中心として出立する大なる利己主義を主張する。

十二、私の主張

私は前に私が擧げた佛蘭西の學者がなぜニイチエ等三人を呼んだやうに、功利的のロオマンチストと云はずして、ロオマンテックの功利主義者と自ら呼び、尙ほ其の覺悟の上に安んじて居るのであるか。それは、前から述べて來たやうに、功利とロオンマンスの生活は、あらゆる優秀なる生活の上に、必要であるからと云つて、あらゆる人間が今日の生活を持續して行く以上は、功利が基本であつて、ロオマンスはそれに色附けるに過ぎないと考へるからである。絕へず偶然の要素の侵入を受ける、この吾人の生活に於ては、往々、直接に行爲の表面に現はれてはたらかないやうでも、常に間接に其れの背後にあつて、其れに特殊の色彩と光澤を與へる豐富な觀念の貯藏を有する人は安全であり、且つ美しき行動をする人である。

も一つ、私がロオマンチックな功利主義を造り、其れを宣傳しようとする理由は、國民として吾が同胞は、

(四) まだ〳〵大體に於て、功利主義の洗禮を受くる必要があると信ずるからである。彼等はまだ其れを受けないがために、世界に於ける自國、即ち自分の要求と、立場とを無視して、荐りに輕薄なる流行を追ふて反功利的の聲を放つて居るのが尠なくない。然し、この場合に說かるべきは、生活の半面の要求と、事實とを閑却して造られた功利主義ではなくして、其等を包攝し、而して後、生活の一大原理に依つて其等を統一したロオマンチックな功利主義であらねばならぬ。

私はプラグマチズムよりロオマンチックな功利主義に移つた。然しながら、純乎たるロオマンチシズムには移らなかつた。是れは、私の性情と生活から來つた眞の要求の結果である。私のロオマンチックの功利主義は單に私の實行的態度を示すだけのものではなくして、併せて私の理論的理會と、鑑賞的氣分とを表はすものである。私はロオマンチックな功利主義の主張に依つて、總べての事件總べての問題に對して、自己を決定し、自己を發揮して行きたいと思ふのである。

私に取つて最も好ましき生活の樣式は其れの內容の充實と、其れの樣式の自由と云ふことである。いつでも、樣式は必要に應じて變化し行きながら方針を創設し、內容は充實して居りながら、氣分の光潤を失はない生活が私には一番價値あるやうに思はれる。而して、若し世に尠しでも當人の性情と境遇とを別にして、かゝる生活を造るに取つて、暗示と刺激とを與へ得るものが一つでもあるならば、私の說くロオマンチックな功利主義は確かに其の優なるものであると私は信じて居る。

新局如何

茅原華山

『新局如何』の稿を起さんとして原稿用紙に『新局如何』と染め出した刹那は正に三月二十日午後二時十分、總選擧の期日は眼前に迫つて、各候補者の參謀本部では所謂『如何にして最後の突撃に奇勝を博すべきか』の作戰計畫に悶殺、煩殺、忙殺せられてゐる瞬間である。かゝる悶殺連、煩殺連、忙殺連は兎角我門引票で、從つて新局が如何に打開せられるであらうかといふ見當が附かないのは無理もないとして、然らば第三者の立ち場に居て、冷靜に此政局を觀測するものには此新局が如何に展開せられるかといふ大凡の見込みは付くかといふと、これが頗る浮雲なつかしい。所詮『新局如何』といふ問題は、素人にも、黑人にも、通にも不通にも、門外漢にも門内漢にも、端的に分らないのだ。一體豫言といふことは、それがいか程確かな背景に據るにせよ、大なる冒險である。況んや何等據るべき背景がないのに『それはこうなるであらふ』と豫斷することは全然一六勝負の仕事である。此意味に於て日本の政局の將來を談ずる程危險なことはない。そうかといつて私は全然豫言が當てにならないとはいはない。多くの場合、『あらふ』は『あつた』と『ある』を土臺として其の上に築き上げられる、故にそれが論理的に發展して行く事象であれば『あつた』と『ある』の土臺の上に殆んど『ある』に近い『あらふ』を歸納することも可能るが、日本の政局には全でそういふ論理的過程がない。日本の政局は『こうなるであらふ、そうならなければならない』ところまで來て突然方向變換をやる。一昨年の憲政擁護運動が進行して桂内閣が倒れた時論理的には政黨の聯立内閣が出來ねばなら

ない筈であつたのに、山本權兵衛伯が鍛から棒に飛び出して來て内閣を浚つて行つてしまつたではないか。昨年の海賊退治運動が成功して山本内閣が瓦解した際、論理的には同志、中正の聯立内閣が組織せられねばならない筈であつたのに、大隈重信伯が突然早稲田田圃から躍り出して内閣を乘り取つてしまつたではないか。脱線ならば線路があるのだからまだ可いが、日本の政治には始めつから線路がない、盲目の運轉手が無茶苦茶にハンドルを操縱してゐるのだからどこへ行くのか分りつこはない。私は歐洲戰亂の勃發するや相等のメートルに準據して確信を以て獨逸は一敗地に塗れるやうなことはないと豫言した、而してその豫言は全部的中しないまでも大體に於て今日之れを訂正しなければならない事實に遭遇してゐないが、燈臺下の政局については其前途をトすべき適當なメートルがないから殆んど見當が付かない。然し若し強いて「新局如何」に就いて私の豫測をいへといふのならば私は――日本には私が見て以て新局と名くべき局面（即ち元老と官僚とに歸着する一切と、民衆に歸着する一切とが火花を散らして戰ふ「一切對一切の戰（ウオア、チザ、オール、エゲンスト、オール）」の局面）は當分打開せられない、而して世間が見て以て新局と名づける局面（即ち總選擧後の臨時議會を中心としたる政局）は、舊局が無意義なりし如く無意義であらう――と答へる。これでは甚だ漠然として雲を摑むやうであるが、漠然として雲を摑むやうであるだけそれだけ此豫測に價値があるのではあるまいか。

然しそれでは餘り摑みどころが無さ過ぎるといふので「新局如何」の問題を――總選擧後の臨時議會に增師案が二度のお目見得として現はれた場合、これを可とするものが多いか、否とするものが多いか――といふ極く狹い範圍に切り詰めて私の豫想如何と質されるなら、私は是れに答ふるに先つて、同志會の前途に就き一言せねばならない。

昨年の暮議會が解散せられて朝黨野黨は互ひに軍容を調へて快馬（?）一鞭、愈々これから逐鹿場裡に馳驅縱橫といふ一刹那、同志會の頭領大石正已君が「如今

撤擲西湖裡、「下載清風誰附與」と頗る禪味ある大悟引退を斷行して敵味方を驚殺したことは如何に健忘症の三日坊主國民でも、流石は未だ記憶の外に追ひ出してはしまはないであらう。此大石君引退の一事は、大隈内閣の下に於ては政黨育ちの大石君よりは官僚育ちの加藤男の方が重用せられ、舊國民黨系の同志會員よりは舊中央倶樂部系の同志會員の方が巾が利く證據として、世人は同志會の官僚化を想ひ、舊國民黨系の同志會員中、志あるものは早晩同志會を去るべきことを豫想した。然し選擧を目前に控へての際であつたから、あの場合自ら進んで政府黨といふ利器を抛つ程の迂拙の男子はなからうが、苟くも大石君程の人物があゝいふ事情で政界を退いたのに對して、同志會に何等の動揺なくして濟むべしとは思はれない。殊に今次の總選擧に於て同志會の幹部が舊中央倶樂部系の候補者に厚く、舊國民黨系の候補者に薄かつた處置に對しては、舊國民黨系の代議士の中一片の男腸默し難きものがあるに相違ない。此蹶起組は大石君の引退を機として幹部に叩き付けるべき筈の爆彈を、總選擧後まで延期して、機を見て幹部に叩き付けるに相違ない、其機が臨時議會の前であるか、後であるかに依つて增師案の勝敗は決するであらふ。若し此蹶起組の爆彈投下が以前に於て行はるれば政府の負、以後に於て行はるれば政府の勝。

蓋し總選擧場に於ける議席の分野を案ずるに、私も世間の多くが豫想する如く、政友會プラス國民黨對同志會プラス中正會プラス大隈伯後援會の勢力相伯仲して議案の決定權は所謂中立無所屬の議員にあるべしと信ずる、而して此中立無所屬議員は稀れに例外がないでもないが、其大部分は時の權勢に阿附する浮草黨であるからである、而して私は大石君の引退を白眼に視送つた程利害の打算に鋭敏な不平組が、臨時議會開會以前に爆彈投下を決行するやうな下手な戰はやるまいと思ふ。そこで爆彈投下はやるに相違ないがそれは臨時議會以後に於てやるといふことになる。さすれば――總選擧後の臨時議會に於ける增師案の運命如何――

といふ問に對しては——中立議員の贊成を得て政府案は成立すべし——と答へねばならぬ。而して先にも述べた通り中立無所屬と稱する議員の大部分は時の權勢に阿附する浮草黨、換言すれば權勢に阿附して利祿に有り付かんとする連中であるから、只で政府に盲從はしない。何か利益を得た後に贊成するに相違ない。私は日本の政局が常に此の中立無所屬の議員に依つて支配せられてゐるのを悲しむものである。

私は日本の政局が常に此の中立無所屬の議員に依つて支配せられてゐるのを悲しむといつたが、實際日本の政局が所謂中立無所屬の議員に依つて左右せられたことは昨日や今日に始まつたことではない。世人はよく「政友會の横暴」といふ、政友會の横暴も久しいものだが、此政友會の横暴といふ奴も些細に吟味して見ると實は此浮草黨の横暴なる場合が多い。それはどういふわけかといふと政友會が議會に絶對多數を占めてゐる時分と雖も、眞の正味の政友會員といへば百六七十名内外で剩餘の五六十名といふものは此無所屬の浮草黨を利益の餌で釣つたに過ぎない。既に浮草黨に好餌をかけて誘つた以上、本來の自黨の黨人に對しても是れに適當な好餌をあてがはなければ丸く治まるわけがない。或は黨弊といひ、又は横暴と稱するもの、源を洗へば多くは此浮草黨を誘ふ爲めに好餌を示し、從つて又自黨の家の子郎黨にも好餌を與へざるべからざるに至つた餘波である。故に大隈内閣が浮草黨を誘つて議場に多數を制し得れば、政友會の横暴と黨弊はこれを矯め得ることが可能るかも知れないが、同時に同志會の横暴と黨弊とを見るは必定である。畢竟ずるに政友會から浮草黨を誘拐するに白晝公然買收もなるまいといふので、解散、總選擧、大臣遊説、蓄音機吹き込みといふやうな手續きを踏んだだけのはなしで、無意義極るものだ。

BがAと爭つてCが出來、CがBと爭つてDが出來るところに展開があり、進歩があり、新局面がある。若し大隈伯の黨弊洗滌が新しい様式と新しい機關を以て政友會を打破するにあればそこには意義があるけれ

ども、政友會から横暴の冠（浮草黨）を奪つて同志會の頭にのつけたのでは、政友會の黨弊に代ゆるに同志會の黨弊を以てするやうなもので、一般國民の生活は依然として此の黨弊の下に押へ付けられてゐるのだ、AとBとが爭つてBがAの地位を奪ひAがBの地位に墮ちたといふだけだ。これでは新局ではない、舊局の反復に過ぎないのではないか。憲政布かれて三十年、日本人はよく飽きもしないでこの舊局の反復を繼續して來たものである。

仄聞するところによれば後藤男を中心として某々の暗中飛躍家が近頃頻りに第三黨の組織に奔走してゐるそうであるが、彼等の所謂第三黨とは第一黨と第二黨の中間に介在して私利を營む黨弊の大本山である。そんな第三黨は眞つ平御免蒙らねばならない。私も矢張既成政黨には滿足しないで第三黨の組織を思つてゐるもので、現に私が今度の總選擧に際し身を以て選擧の範を日本國民に教へるつもりで、東京から候補者の名乘りを上げた宣言書の中にも第三黨組織のことを述べて置いたが、私の所謂第三黨は既成の政黨に對して組織するのではなくして、更に第四黨の興るのを豫想して出現するのである。國民生活の要求を基礎とした新らしい第三黨、新らしい第四黨が出現して始めて眞の二大政黨が對立するわけになるのだ。眞の第三黨は自我を意識した不斷に增加する要求を持つ國民が、自我の内に在る世界を外に表現せんとする機關を必要とする時に始めて起るのであつて、股ぐらの膏藥黨が第三黨を潜稱するのは沙汰の限りだ。

故に眞の新局は國民が自我を意識して、其自我の内的世界に於て不斷に增加する要求を外界に實現徹底せしむる爲めには全く既成勢力に依らない政黨が要ると悟つた時でなければ決して打開せられるものではない。然し悲しいことには日本人にはまだなか〳〵そんな要求が出そうな氣ぶりも見えない。私は日本の憲法政治が國民の自覺したる要求に發したものでないことを今回身を以て實驗したが、然し私はたとひそれが國民の自覺したる要求に出でたのでないからといつて假

に日本の憲法政治に失望はしない、私は今後益々熱心に日本人が憲法政治を要求するやうに自覺せしむべく努力するつもりではあるが、而してどうしても日本に眞の新局を打開しなければならないが、現狀では――選擧民には何等の政見がなく、天降りの政見を頂戴して今晩は成程增師は必要だと合點し、明晩非增師論をきいて成程增師の必要はないと合點するやうな現狀では――とても我々の理想するやうな新局は期待せられない。

只私が最後に一言して置きたいことは、我々が理想する樣な新局は到底こゝ姑らくは來ないけれども今年の本議會までには、今迄の黨派の合縱連衡よりは稍々面白い變化のあるべきを豫想することが可能るといふことである。それは何かといへば例の大隈伯後援會といふえたいの知れぬ鵺黨をいつまでもあのまゝにして置くことはできまいから何とかはつきり片をつけねばならないであらふ。此後援會の始末をつけるのをきつかけに、先きの不平組も何かやるに相違ない政國合同といふ樣な企畫もチャンスさへあれば全然出來ない相談でもあるまい。而して政府黨の動搖といふことは反對黨が策を施すには絕好のチャンスなるなからんや。此間の消息は時と共にだん／＼と國民の前に其姿をはつきり現はすことゝおもふ。

歐洲動亂史論（四）

吉野作造

墺塞の開戰並に露獨佛英の參加

墺塞兩國の眞關係、特に南スラヴ民族の事は、從來比較的に世に知られざりし部面なるが故に、予は出來る限り之を詳說した積りであるが、本號より說かんとする方面は、實は既に世間の知悉する所たる部分が多く、改めて事新しく說くまでもないやうな感がする。開戰當時の外交關係、就中列强の樽爼折衝に付ては、各國政府の公文書の發表もあり、又學者の研究も少からず公にせられた。邦文の論文中に在りても本年一月頃の外交時報に掲げられた原勝郎博士の「戰亂勃發の眞相に關する私見」と題する長編の論文の如き最も推稱すべきものであらう。若し夫れ露獨佛英の何故に戰鬪に參加せしかの問題に至つては、普通の外交史上の智識に基いて多くの人より兎も角も隨分と議論せられたので、今更之が解說を繰り返すのは蛇足に類するの嫌がある。但し予は斯く云へばとて今日まで出版せられた歐洲戰爭に關する凡ての著作を完全なものと云ふのではない。中には頗る杜撰なものもあるやうに見受けらる。併し一ト通りの事は少しく信用のある外交史と戰亂開始當時の外國電報とに若干の注意を拂へば了解は出來ると思ふのである。依つて予は本誌に於ては

國同盟の起源だの、三國協商の緣因だのと、遠い淵源の蹤索はせぬ。又戰亂勃發當時の列國の表面の交涉の經過をも略して述べぬ。予は之より先づ簡單に大亂勃發の最近歷史上の所由を明にして後、專ら今次戰亂の根幹とも見るべき獨逸の帝國主義、殊に英獨の競爭と露獨の衝突とを詳述して見やうかと考へて居る。伊太利土耳其の戰亂に對する關係も、自ら此中に論ぜらるゝは言を待たない。そこで予は先づ本號に於ては順序として各國の開戰に到れる史的緣因から簡單に說いて見やうと思ふ。

▽墺塞の開戰

墺塞兩國の關係が近年非常に緊張し、機會があれば何時でも破裂すべき狀態にありしこと、而かも幾度も斯かる機會があつたに拘らず、常に「歐洲平和」と云ふ壓迫の爲めに恨を飮んで双方劍を收めて居つたと云ふ事情は、己に前に述べた所で明かである。そこで我々は、一方に於ては今度の皇儲殿下の暗殺が、墺塞兩國の國交破裂に絕好の機會を與ふるものであることを認むるけれども、又他方に於て列强の「歐洲平和」に脅々たりし從來の事情から推して、此事より直に戰爭の出現を來たすに相違ないと云ふ風には必しも見ることが出來なかつた。縱し之が墺國にとつて非常に重大な事であり、爲めに多年の堪忍袋の緒が切れて、今度こそはと腹を決めても、他の諸國から「歐洲平和」の爲めと壓迫せらるれば、戰爭にならなかつたかも知れない。そこで今度の戰爭を理解するには、單純に墺塞兩國の緊張せる最近の關係とか、其極皇儲殿下の暗殺を見るに至つたとかの事情の外に、更に他の直接の事情、即ち「歐洲平和」の壓迫を排けて、斷乎として劍を把るに至らしめた所の事情を探らなければならない。而して今日の所、之は尙外交上の秘密に屬し、我々局外者は僅かに暗中模索によつて之を想像するを得るに過ぎないのである。

皇儲殿下の暗殺が、直ちに墺國の民間に於て反塞感(アンチ・セルビア)情を勃發した事は已に述べた通りである。詳しい事情

を調べない中から、人民は直ちに塞國政府に對して惡聲を放ち、甚しきは塞國の公使館に對してまで、暴行を加へた者もあつた。けれども墺國の政府としては、直ちに塞國の政府に公けに文句を言ふと云ふ譯には行かぬ。然らば何時頃から、墺國政府は塞國政府に對して、公式に掛け合はうと云ふ考になつたか。西歐諸國の操觚者界には、七月一日頃から、墺國政府は塞國政府に對して何等かの要求をするだらうと云ふ噂が立つた。加之墺國政府はうす〳〵軍事的の準備にも取掛つて居ると云ふやうな風說も傳はつたのであつたが、併し事實果して墺國政府が眞に斯る態度を採つたかと云ふ事は今日のところ確證がない。且つ又新聞に現れた所でも、此頃まだ墺國が何を要求するかと云ふ事はハツキリしてゐなかつた。單に皇儲殿下の暗殺は大塞比亞主義の運動の結果だから、塞國内に於ける同主義者を取締つて吳れと云ふ事を要求するのか、又は更に進んでセラエーヴォ事件の策源地が塞國内にあると云ふ理由で、其陰謀加擔者の訊問處罰をも要求するのか、此等の點はハツキリ新聞にあらはれてゐなかつた。其後新聞紙上には墺國政府部内で、各大臣の密議が每日〳〵連續して開かれたと云ふ報道があつたけれども、併し初めの約十日間ばかりの密議の題目は、新聞紙に散見する所では、ボスニア・ヘルツエゴヴイナ十二州の取締の問題、いはゞ內政上の問題であつて、塞國に對する關係の事はまだ深く問題とならなかつたやうに見ゆる。七月五日及び六日、皇帝は陸軍部內の諸將に長時間の謁見を賜ひ、同日十時と十一時の間に共同外務大臣ベルヒトールドが拜謁し、十一時には共同大藏大臣のビリンスキーが拜謁したと云ふ事は、事態ハ重大なるものあるを示すやうだけれども、七日の朝皇帝は再びイシルの離宮にお發ちになつたと云ふ事より見れば、どうも外交問題が主として考へられて居つたとは思へない。七日の十一時には外務省に於てベルヒトールドを議長として大臣會議があつた。之は共同大臣の外に墺洪兩國双方の總理大臣と陸軍の參謀總長と海軍の軍令部長も加つて、密議六時まで續いたが、其席上に

於て共同大藏大臣のビリンスキーと陸軍大臣のクロパテーンと大いに激論したと云ふ事が傳へられて居る。併し之は皇儲殿下暗殺の責任並びに今後の取締に關する意見の相違から起つたものであると當時の人は解釋して居つた。即ちビリンスキーは皇儲殿下の暗殺を、當時主として警備の任に當つた憲兵の責任に歸し、陸相クロパテーンはビリンスキーの政策が元來ボ・ヘ兩州に對して餘りに寛大であつたと云ふ事を責め、互に攻撃し合つたものらしい。且つ又今後の措置についても後者は益々嚴密な取締を加へやうとし、前者は從來の寛容政策の方針を餘り變へたくないと云ふ考で、此點についても爭つたらしい。八日の午前十一時再び聯合大臣會議が開かれて六時まで續いた。此時も大臣は豫め陸海軍の頭領と打合はせをしたが、此會議の目的については政府は後ボ・ヘ二州の内政上の問題並びに墺洪兩國共同の財政上の相談の爲めだと公式に發表したが、實は主として問題となつたのはビリンスキーの提議せるボ・ヘ二洲に於ける大塞國主義取締案であつたと云ふ事である。ビリンスキーは何處までも、取締は須らく警察的たるべく軍事的たるべからずと主張し、軍人一派の說を排斥して、戒嚴令を布かうなどと云ふ提案には反對したと云ふ事である。而して此時右の案の外にまた塞國に對して採るべき手段といふ事も問題となつたと傳へられて居る。果して然らは對塞外交關係が會議の問題となつたのは、此時を始めとせねばならぬ。是れ蓋しセラエーヴオに於ける豫審の決定が、七日を以て首府に到達し、塞國の官人亦此事件に關係ある者ありと云ふ事が明白になつた爲めであらう。それで、此時此點が餘り業々しく新聞にあらはれなかつた事を以て見れば、此時の相談の結果も大して重大なものではなかつたらうと想ふ。此事は又皇帝の裁可を求むる爲めに外相ベルヒトールドが、イシルに赴いて拜謁を願つたのが翌々日の十日の朝十時であると云ふのでも分る、緊急の大事件であるなら、一昨日の會議の來歷を今日になつて奏上すると云ふ事はあるまい。此等の點を綜合して見ると云ふと、假りに墺國が塞國に對

して何等かの要求、而かも嚴重なる要求をすると云ふ事にしても、其初めは開戰を賭してまで塞國をイヂメルと云ふ程の考はなかつたものと想像せられる。それから暫らくの間、墺國政界の雲行は別に險惡の樣子を示さなかつた。之が廿日前後から急に險惡になつて、そして廿一日に至つて彼の有名な最後通牒の案文が成り、上奏裁可を求め、廿三日午後六時を以て塞國駐剳の墺國公使をして之を塞國政府に致さしめたのである。斯く急に墺國政府の態度が轉進したと云ふ事については、何か其處に重大なる事情が無ければならぬ。是れ實戰前外交界の一つの秘密であり、且つ又今日多くの人々の揣摩臆測を逞くする點である。

墺國政府が最後通牒を發するまで、歐洲列國は悉く此事件が結局平和に終結を見るだらうと豫想して居つた。去年七月頃彼地で發行された多くの雜誌などを見るとエッス・ベーカや、セートン・ワトソン等を始め、多くの近東通は誰一人開戰を豫言したものは無かつた。されば墺國駐在の露國大使などは、七月廿日に維納を出でゝ旅行に出掛け、塞國の總理大臣も總選擧の遊說の爲めにベルグラードには居なかつた。塞國自身でも、まさか墺國からあんな嚴重な最後通牒を受くるだらうとは豫想して居なかつた。要するに二十三日の最後通牒と云ふものは、其發表の唐突なると其內容の森嚴を極むる點に於て歐洲列國を震駭せしめたものである。そこで墺國政府が急に斯かる態度に出でたのは一體どう云ふ譯に解釋すべきかと云ふ問題が起る。或人は墺國政府は初めから此機會を利用して塞國に一大打擊を與へようと考へて居つた。が暫らく陰忍し、所謂滿を持して放たざるの態度を以て時機の到るを待ち、其間、頗る秘密の間に計畫を廻らし、廿三日に至つて俄に敵の虛を衝いて其意志を發表したものであると說く。又他の人は、墺國政府は初めはそれ程强い考はなかつたが、廿日前後から或事情に促がされて急に其態度を改め、突嗟の間に此重大なる決定をなしたと觀る。然らば其ある特別の事情とは何かと云ふと、それは獨逸の後援であると云ふ風に見る　此等の點は兎も

角今日では外交上の秘密であつて容易に外部から之を確めることは出來ない。只從來の歴史的關係を本として之を想像するに止まるのであるが、私の考では、墺國の斯る態度を採つたについては、實に單純な動機のみに基くものでなく、いろ／＼複雜な關係があつて、右に行かう、左に行かうと躊躇してゐる間に、自然と勢が玆に到らしめたものであらうと思ふ。私かに想像するに、當時墺國の政界には、此機會を以て塞國に大痛棒を與へようと云ふ考の者は無論あつたに相違ない。殊に軍人などの間には斯う云ふ考が盛んであつて、而して此考が少からず當時要路の政客の心を動かしたらうと思ふ。之と同時に一方には、塞國に對して餘りに嚴重な態度に出づるときは必らず露國が起つて塞國を援けると云ふ事になる。さればウッカリ塞國に高壓手段を加ふるのは甚だ險呑だと云ふ風に考へた者も少くなかつたらう。恐らく此種の意見は外交官などの間に盛んであつたに相違ない。若し露國が塞國を援けると云ふ事になれば、無論獨逸は墺國を援けるに相違ない。斯くて此等の點について一應獨逸と打合せたるべきは疑を容れない。併しながら獨逸が戰鬪に參加すれば佛國も亦必らず之に參加する。さうすると歐洲全體の大戰爭になると云ふ事は分り切つて居る。斯くては由々しき大事であるからして、ウッカリ露國の怒を挑發すると云ふ事も考物である。と云ふやうな意見は必らず要路の人の胸を惱したらうと思ふのである。併し又他の一方に於ては、露國は一九〇八・九年當時の如く獨逸の一喝に屈して引込むかも知れぬ。露國が引込めば同時に塞國も墺國の要求に屈するから、兎も角も嚴重な最後通牒で威嚇を加へて、之によつて墺國が其目的を達することが出來るかも知れぬと觀測した者もあつたらう。予は此等のいろ／＼の思想が各々相對立して政界に相當の勢力があつたものと考へる。其中の一つの思想が他の總ての思想を壓倒して、單一の思想のみが初めから政府の行動を指導したとは考へられない。今日の國際關係は極めて複雜であるから、何處の國にしろ只一つの考で一本調子に進み得ると云ふものでない。

右に行つても障碍があり、左に行つても障碍がある。右にしようか左にしようかと云つて、ハツキリしたやうな、しないやうな漠然たる方向を決めて動きつゝ、其間に外交的手腕を弄して自國に有利なる形勢を作ることに努力すると云ふのが、今日の外交界の有樣であると思ふ。外交の巧みなものは、斯くの如き危ぶない、綱渡りのやうな外交ハ舞臺に立つて結局勝利者の榮冠を獲、外交の下手な國は、ウカ〳〵と飛んでもない破目に陷る事になる。斯く觀察して予は、墺國は、世界の大亂になるかも知れぬと云ふ懸念を抱きつゝ、獨逸の援助及び露國の屈服を空頼みとして、ウカ〳〵と進んだものではあるまいかと思ふ。而かも外相ベルヒトールドは到底歐洲の中央に於て、斯かる至難の政局に處し、自國の爲めに有利なる形勢を作り得るやうな才物ではない。而かも歐洲の大亂になれば、墺國は到底勝算歷々と云ふ見込がないと云ふ事も知つて居る。從つて此機會を以て塞國を壓倒し得るとか、或は巴爾幹方面に發展する爲めには此上の好い機會がないなどゝ心中喜んで、此絕好の機會に乘り出したものと觀測するのは誤りであると思ふ。**且つ又墺國政府は、最後通牒を發した後でも、本當に開戰の決心があつたかどうかと云ふ事を疑ふべき餘地がある。**事に依つたら單に威嚇する目的であつたかも知れぬ。けれども單に威嚇としては餘りに要求が森嚴を極めて居つたから、單に威嚇ばかりで少しも開戰の決心がなかつたと云ふ事も出來ぬ。詰り不安の念を抱き、開戰の危險を冒しつゝ、一か八かの投機を試みたものと見るのが一番適當であるまいかと思ふ。斯くして墺國は前申した通り廿三日午後六時最後通牒を發し、四十八時間を限つて回答を求め、塞國が無條件で之を承諾せざるに及び、遂にいよ〳〵宣戰せねばならぬ羽目に陷つたのである。京都大學の原敎授は、先きに引用した外交時報所揭の論文中に於て、墺國は最後通牒を發して後心密に其不承諾を希望しつゝ、而かも開戰するを好まなかつたのであるが、二十七日露國の態度が塞國援助と決するに及んで己を得ず宣戰の布告を發するに至つたと說いて居ら

る。之も一種の解釋である。要するに墺國の宣戰布告は我から進んで喜んで而して豫めの計劃に基いて發したものでないことは疑なからうと思ふ。

△露獨の關係

露國は墺塞開戰の場合に決して袖手傍觀するものではないと云ふ事は、最近の歷史に明白であるが、併しいよ〳〵の場合に、敢て劒を把つて獨墺兩國を敵とするを辭せないかどうかは、少くとも一つの疑問であつた。墺國と露國とが十九世紀の前半、共に保守主義のチャンピオンとして當時全歐に澎湃たる自由主義の樸滅に提携したことは人の知る所である。一千八百四十八年には洪牙利の獨立運動を破るべく墺國を助け、一千八百五十六年には墺國と共同してフレデリック大王の覇業に抵抗した事さへある。併し乍ら墺國が十九世紀の後半巴爾幹半島に手を出すやうになつてから段々露國と利害の衝突を來すやうになつた。近年露國は、墺國勢力の東漸を阻止するの目的を以て、力を盡して巴爾幹のスラヴ諸民族を懷柔し、甚しきは墺洪國領内のスラヴ民族獨立運動にも公然好意を表しなどしたから、墺露兩國は益々相離反することゝなつた。殊に最近に至り塞國の問題に關して屢々墺國と衝突した事は已に述べた所である。最近の巴爾幹半島の戰爭中、一再ならず露國が墺國と將に開戰せんばかりの急迫の事情に立ち至つた事も是亦前きに委しく述べた。されば墺國が塞國を嚴しくイヂメると云ふ事になれば、露國は到底義理としても默つては居られない。けれどもいよ〳〵墺塞兩國が開戰をすると云ふ時に、露國は極力塞國を援けるかどうかと云ふことは、彼のボヘ二州合併の際、露國が獨逸の一喝に屈したと云ふ事情から見ても一つの疑問とはなる。けれども茲に考へねばならぬ事は、一九〇八・九年當時の露國と、今日の露國とは、大に事情が違ふと云ふ事である。露國と墺國と戰爭をすることになれば、三國同盟の關係上から云つても勿論獨逸は墺國を援ける。さすれば露國は墺國を敵とすると同時に亦獨逸をも敵とせねばならぬ。一九

○九年の當時は、成程日露戰爭後創痍未だ癒えざりし時であつたから、三月二十二日獨逸皇帝の一喝に遭つて其儘引き退つたのであつたけれども、今日も仍ほ露國は獨逸の一喝に遭つて屈するやうな意氣地無しであるかどうかは輕々に論斷することは出來ない。其故如何といふに、一つには今日露國は既でに日露戰爭の手傷から癒りつゝある。戰後の經營も着々歩を進めた。軍備も段々に充實しつゝある。財政狀態亦頗る順潮に在る。其上尚一九〇七年の英露協商以來、英露兩國の親密が年と共に加はり、殊に近年獨逸の暴慢な態度は、益々此兩國を迫りて親密ならざるを得ざらしめたから、露國は今や有力なる同情者をも持つて居る譯である。其上に日本との關係も近年頗る良好で、假りに西歐に風雲が捲き起つても、東亞を顧慮するの必要は以前程ではない。すると今日の露國と云ふものは、最早や六七年前の露國ではない。且つ此上露國が獨墺諸國に屈讓して居つては、巴爾幹半島に於ける從來の威信が立たぬ。露國は之れまでスラヴ民族の保護者を以て居り、而かも近年スラヴ民族の發展を要求して獨墺諸國の阻止に遇ひ、オメ／＼と之に退讓したのである、そこでスラヴ諸國、就中塞國などでは、一部の人士の間に段々露國に向つて鼎の輕重を問ふものを生ずるに至つた。是れスラヴ民族を踏臺として南方に發展せんとの野心を有する露國の忍び得る所でない。されば墺國の塞國に對する嚴重なる最後通牒の發表に接するや、露國は二十四日夜御前會議を開き、墺國に對して最後通牒の定むる回答期の延期を求むるの議を決し、二十五日其拒絕に遭ふに及んで、改めて「墺國にして其意思を貫徹する爲めに武力を塞國に加ふる如きことあらば、我は漫然として傍觀の地位に立つを得ず」と宣言し、最も明白に斷乎たる決心を中外に示した。而して之が爲めに獨逸と戰爭するの危險ありと云ふが如き事は更に初めから顧慮しなかつたやうである。

露國がいよ／＼決心を堅めると云ふ事になれば、固より獨逸は默つて居ない。獨逸は三國同盟の誼から云つても、又自國の安寧の必要から云つても、到底墺露

間の戰爭を傍觀することの出來ない關係にある。獨と露とが歐洲の中原に於て兩雄竝び立たざる關係にあると云ふ事は論を俟たない。一千八百七十八年の伯林會議以來二國の反目が著しくなつたと云ふ事は勿論の事として、一九〇八・九年の出來事は露國をして更に一層獨逸に含くましめた事も人の知る所である。若し夫れ獨逸の近東に於ける最近の活躍に至つては露國をして日に〳〵其危險を感ぜしめて居る。獨逸と近東との關係は、なほ後に土耳其の事を說く場合に之を述ぶるが、要するに露國は今日少くとも歐洲の東方に於ては獨逸の勃興を抑ふる必要がある。是れ獨逸と露國と兩雄竝び立たざる關係にありと云ふ所以である。又獨逸は墺國が其敵たる露國の攻擊を受くると云ふ事は、自衞上之を默視することは出來ない。墺國は獨力を以て露國に當るには未だ十分ではない。元來獨逸の利益といふ點のみから云へば、露國と共同して衰弱の墺國を分割すると宛かも波蘭の如くするのが一番得策であらうけれども、今の處然うも相成らぬとすれば、全力を墺國の援助に捧げて露國に當ると云ふ外に獨逸の採るべき道はない。三國同盟も畢竟は此の目的の爲めに出來たものと云つてよい。であるから露國が二十八日の墺國の對塞宣戰に促されて、二十九日百二十萬の兵員に動員を命じ、斷乎として墺國に當る威容を示すや、獨逸は乃ち起つて最後通牒を送り、十二時間以內に動員を中止すべきを要求し、聽かずんば我亦兵を擁して露國に當ると云ふ決心を示すとなつたのである。

右の如き結果になるのは、勿論初めから判つて居る事であるが、併し獨逸は果して斯かる結果の發生を希望して居つたかどうかと云ふ事は一つの問題である。開戰の當初に於て、獨逸は露國の對墺動員に促されて已むを得ず起つたと稱し、畢竟開戰の責任を露國に歸せんとして居つたが、勿論獨逸は露國が起つた爲めに己むを得ず自分も起つたので、實は戰爭を希望するものではなかつたかも知れない。少くとも彼は當初、墺國の最後通牒は之を與り知らなかつたと稱し、佛を唆かして露國を制し、以て塞國に加勢せしめざらんと力

めた形跡がある。墺塞關係は墺塞兩國のみをして解決せしめたいといふのが、獨の本來の希望であつたらう。併し墺塞關係を關係兩國のみの解決に任かすといふ事其れ自身が、もと／＼露國の默認する所でない。果して然らば露の起つたのは己むを得ざるものと云はねばならぬ。故に獨にして戰を欲せざらん乎、須らく墺を制して最後通牒の要求を緩和せしむべきであつた。若し獨にして一方には墺の要求を承認し、他方には露の起たざるを欲したとすれば、是は慥に明白なる矛盾である。然らば獨逸は實は戰を欲したりし者と見るべき歟。抑も露國をして起たしむると否とは、實はよく考へると、獨逸の態度如何によつて如何樣にも決まる問題であつた。何となれば、墺國は其塞國に對する關係に於て、獨逸の意に反しては何等の行動にも出づる能はざるものであるからである。墺國があれ程斷乎たる處置を執つたと云ふについては、何等かの形で獨逸が之に後援を與へたるべきは、今更之を爭ふの餘地はない。果して然らば、獨逸は一面に於て好んで露國を挑發したとも見られ得る。併し事實に現れた所では、獨は露を挑發した形にはなつて居るけれども、熟ゝ思ふに、露が其挑發に激し、憤然として起つといふ事は、恐らく獨の眞の希望では無かつたらうと思ふ。何故となれば、獨が起てば、我亦默つては居れず、自分が立てば自ら佛英の干入を喚び來るから、やがて世界の大亂となり、而かも獨墺兩國の連合では、到底英佛露の連合に對抗して勝味が無いからである。尤も一說には獨は初め英の中立と、伊の參加とを期待し、其打算の下に歐洲大亂の結果となるを知りつゝ避けなかつたと觀る者もあるが、此觀察の淺薄の見たる所以は追て後に之を說く。要するに予は、獨は英伊等の態度必ず今日の如くなるべきを誤算せなかつたと確信するが故に、從つて獨が歷々たる勝算のない戰爭に我から好んで進み入つたとは考へられない。

然らば獨は何故に墺を制して露の奮起を避くるの手段を採らなかつた歟。是れが一つの問題である。或人は此問題に對し、獨逸は露國を見縊つた、否露國は如

たぬだらう」打算を誤つたと云ふ解釋を與へる。併し此解釋は一應尤ものやうであつて、實は露獨最近の事實に吻合しない。成程露國は一九〇九年三月には、獨帝の一喝に會ひ、匆惶救塞の鉾を斂めた。一九一二年塞國の西方發展を承認すべきや否やの爭議にも、結局墺國の主張に屈從した。けれども露國は今度も亦例の如く一片の威脅に屈して引き退るだらうか。否々露國は今や則ち最早呉下の阿蒙ではない。數年此方着々兵備を修め、殊に一昨年の秋からは西方の獨逸に近き國境方面の防備をも修補し、一兩年の後には完全に充實すると云ふ狀況にあつた。而して此事は獨逸の政府でも全く氣が附かなかつた筈はない。何となれば此等の點については已に昨年の二月から三月にかけて獨逸に於て大いに問題になつたからである。昨年の二月下旬から三月の央にかけて獨墺の新聞と露國の新聞との間に、軍備問題について大いに無遠慮なる爭論を交換したと云ふ事は當時我國の言論界にも矢釜しかつたのである。事の起りは二月下旬以來獨墺の新聞に、露國の軍備が近來著しく整頓した事、殊に其西方に於ける防備の着々進歩しつゝある事、軍事通信に關する施設か近來頗る嚴重になつた事、又獨墺洪並びに瑞典方面に近頃露探が盛んに活動して居る事等を數へ立てゝ、暗に露國が近時西方に志ある旨を仄めかし、以て一種の恐露的流說を傳播したのに在る。尤も初めは一部の二流三流の新聞に傳へられたのみであつたから、深く識者の話題には上らなかつたのみならず、是れ皆兵器製造業者などの投機的運動の手段として、流布せられたる妄說であるといふ意見さへ唱へられたのであつた。然るに、三月三日に至り獨逸のキヨルニッシエ・ツアイッツングまでが、露都通信として露國が近來其西境の防備を充實するに苦心しつゝあると云ふ記事を掲載した。是に於て此問題は初めて有力なる人々の注目をも惹くことゝなつたのである。蓋し此新聞は伯林の政府と密接の關係のあることは人の知る所である。かゝる有力なる、且つ信用のある大新聞が、斯かる記事を掲げたのであるから、世間は露國の西境防備說をマンザラ

虛傳でもあるまいと信ずるやうになつた。而して段々調べて見ると、成る程露國は一昨年の秋以來、秘密の間に西方の防備を修めたことは事實であることが判つた。ソコデ獨墺の輿論は、期せずして筆を揃へて露國の禍心を攻擊することゝなつたのである。獨逸の大新聞は概して流石に「露國如何に防備の充實に苦心すとも、未だ其完成を見ざる今日、直に吾人に抗敵するが如き愚は爲さぬだらう」などゝ高をくゝつては居たが、中には伯林のターゲブラットの如く、「獨墺兩國は從來久しく露國の威嚇に屈し來りしも、此上一歩たりとも侵略し來らば、最早吾人は斷乎として之を斥けなければならぬ」などゝ、躍起となつたものもある。墺國の新聞に至つては、「露國は不日一億五百萬留の巨費を投じて、全軍團の動員を試演せんとして居る。是れ彼れが吾人に戰備の既に成れるを示さんが爲めの攻勢的示威運動に非ずして何ぞ」と、今にも露國が戰爭を仕掛けて來るやうな事を書いた。啻に新聞ばかりではない。一部の性急なる青年輩は、兼て露國に心を寄せて居ると睨まれて居るルセニアン民族に對して迫害を加ふるものすらあつた。要之世間ではかのキョルニッシェ・ツアイツンクの記事をば尋常事ならずと見たのである。去れば神經過敏なる株式界は果して動搖し、其波動遠く巴里倫敦にまで及んだ。後に同新聞は、前記の記事は、聖彼得堡よりの一私報に過ぎなかつたと云つて辨解を出し、三月五日露國の大藏省も亦其機關新聞をして此報道の妄を辯明せしめたけれども、併し世間一般の新聞は之を以て直ちに筆を收めなかつたのである。故に政府の機關新聞同志の間には爭論が止んだけれども、其れ以外の新聞間では益々盛んに此問題が論ぜられた。又邪推をして見れば、獨墺側では政府故らに這般の言論を取締らなかつた様でもある。當時タイムスの如きは現に、「獨逸に於ける排露熱が、今なほ何等の妨害を受けずして蔓衍しつゝあるは、官憲之に贊成するによるか、然らずんば政府が政略上之を是認するものならん」と說いて居つた。政府が更に軍備擴張の口實を得んが爲めに此種の風說の蔓衍を默過したのかど

うかは分らぬが、兎に角新聞では露國の態度を攻撃するの餘り、隨分ヒドイ惡口を放つたのである。之が爲めに如何に獨墺兩國に對する露國の反感を助長したか分らない。

さて獨墺新聞の攻撃に對する露國新聞の態度は概して比較的堂々たるものであつた。彼等はかねて獨墺側の攻撃を豫期して居つたもの丶如くであつた。新聞は一般に、獨逸は已に自國の軍備を擴張して居りながら、何故に吾人の擴張をのみ獨り之を難ずるかと論じて敢て防備修整の事實を隱さうとしなかつた。而して獨墺側の雜誌の聲愈烈しきを加ふるに及んで、露國は遂に次の二つの事實を以て無遠慮に之に應酬した。二つの事實とは何ぞや。その第一は三月十三日露京の夕刊新聞「貿易時報（ビルセウイヤ・ウイエドモスチ）」に現れたる「露國は平和を欲す。然れども戰を辭せず」と題する一論文である。心易くして居る某露人から聞いた話では此新聞は餘り性質（たち）の良い新聞ではないさうである。けれども陸軍大臣と近い關係があると云ふので世間から多少の注目を拂はれて居る新聞である。而して斯の如き關係にある此新聞が題目からして甚だ殺氣を帶びて居る論說を堂々と書き立てたので、獨墺兩國は宛かも挑戰狀でも突き付けられたやうに吃驚したのである。而して其中に書いてある事は、先づ以て「吾人は確かなる筋より材料を得た」と前置をして

(一)今や露國の軍隊は十分整頓し、戰時に於て完全に國境を防備するを得る事。

(二)今や堅固なる近世的防禦工事を施せる一列の要塞を完成し、之を以て一切舊式の要塞に代へたる事。

(三)將校の數は完全に充たされ、軍隊一般の訓練並びに給養、及び彈藥武器の供給亦皆滿足なる狀況にある事。

(四)野戰砲隊の備砲は完全にして、多くの點に於て獨佛のそれに優るものがあり、且つ要塞砲隊も日露戰役の經驗に鑑み、組織に多大の改良を施したる事。

(五)飛行機の設備も整頓し、中にもスコルスキー式は最も其効用を發揮すべき事。

等を列擧し、最後に結論として、「吾人は我が皇帝陛下が本來平和を愛し給ひ、爲めに曩きに率先して海牙平

和會議の開催を提唱し給へるの盛德を誇りと爲す者なれども、又之と同時に我國の輿論が「平和を欲するものは戰備を忘るべからず」との格言をも肝銘せんことを冀ふもの也』と放言して居る。是れ豈に獨墺に對する一種の宣戰布告ではないか。而して右記事の謂ふ所の「確なる筋」とは申す迄もなく露國の陸軍省の事であるとは一般の認むる所である、中には佛國の新聞などは上記論說の蔭には陸軍大臣のスコムリノフが居ると專ら評判したのであつた。獨逸では無論此佛國の解釋を信じ、更に「此記事によつて吾々は啻に露國が只防禦設備を完うしたばかりでなく、更に攻勢的野心をも抱藏して居ることを知るとが出來る」などと奴鳴るものもあつた。尤も他の一面に於ては斯んな小新聞の云ふ事は重きを置くに足らぬなどゝ無理に平氣を裝うて居つたものもあつたけれども、概して獨逸の社會が一般に不安の念に襲はれたことは疑を容れない。次に第二の事實といふのは、三月十二日露國議會の豫算委員會が、秘密會議を開いて臨時軍事費一億二千萬圓の支出を可決した事である。此事は間もなく西歐に知られ、且、此中には無論西部國境に於ける軍團增設の費用をも含まれて居ると云ふ報道さへ傳つた。露國議會が急に斯かる措置に出でたのは、想ふに獨墺に於ける物論に激せられた結果であらうとは、當時普ねく認められた所であつた。猶之に續いて三月十五日タイムス所揭の露都通信は同國の軍備擴張計劃を報じて居る。曰く露國政府は、平時に於ける常備軍の增加を計劃しつゝあり。人員は四十六萬人ならんとの事なるが、果して然らば露國は國防第一線に優に百七十萬を有するに至るべし云々と。此計劃は前記の一億二千萬圓の支出と關係ありや否やは不明であるが、要するに露國は去年の春獨墺兩國に對つて露骨に其軍備擴張の意思を誇示した事は事實である。去れば獨逸政府は此際其の機關紙北獨逸新聞（ノルドドイッチエ・アルゲマイネ・ツアイツング）をして「吾人は露國軍隊の自己吹聽を批評するの必要を見ず、又之が爲めに毫も不安を感ずるの理由もなし。只吾人は兩國政府の友誼的關係は此種の挑發的記事によりて毫も動搖せられざるも

のなることを信ずるのみ」と書かしめて平氣を裝つて居つたけれども、心中甚だ不安を感じたことは、之を想像するに難くない。

以上述ぶる所の如く、露國は既に去年の春に於て、端なくも其西部方面に於ける軍備充實の計畫を曝露し、且其充實計畫が假令今日未だ完成の域に達せずと雖、若し玆に我を挑む者あらん乎、我は最早何人にもオメ〳〵と屈服するものでないと云ふ壯んなる意氣込みを示した。去れば世間では露國が一九〇九年當時の如く獨逸の一喝に會つて直に引退かるやうな哀れな狀態からば、疾うの昔に脫出したと云ふ事を、少くとも去年の春この方熟知して居るべき筈である。獨墺に於ける排露熱は何處から起つたか、政府が唆かしたものか、或は兵器製造業者等の流布したものか、それは今日まだ分らないとしても、兎に角獨墺の官民は、政府の機關新聞が何と言ひ繕つても、今日の露國は最早や三四年前の露國ではないと云ふ事丈けは篤と諒解した筈である。況んや民間に於ては、尙ほ引續き露國に獨逸攻擊の異圖ありとして盛んに無遠慮な議論をなすものが多かつたに於てをや。去らば獨逸が去年の七月、露國を見縊り、一喝以て之を抑へ得べしと考へたとは觀る事が出來ない。少くとも「露國は場合によつては劍を把つて反抗して來るかも知れない」との覺悟はあつたものと見ねばならぬ。獨逸が露國の態度を誤算したなど〻云ふのは、露獨最近の關係を知らない人の議論である。

以上說ける所で、獨逸は開戰の前後、決して露國の態度に付き、誤算する筈がなかつたと云ふ事が明白となつた。然らば獨國が輕々しく墺國を援けて露國と衝突するの機會を我から作つた事に付ては、他に其理由を求めなければならない。是に於てまた說を立つるものあり。曰く、獨逸は一九一三年露國に先ちて己に東方に軍備を擴張し、對露方面の準備は先づ略ぼ完成した。然るに露國の西方の防備は如何といふに、段々と其步を進めて居つたとはいへ、未だ全く完成はして居ない。全部の完成は一九一七年に到らなければ之を見

るを得ざる計算である。然らば其の未だ完成せざるに先ちて之に一撃を加ふるのは、獨逸の將來の爲めに得策である。是れ獨が奇貨措くべしとなし、進んで對露衝突の機運を作つた所以であると。之も一應尤もの理屈である。其上當の露國の首都には、丁度この頃勞働者の同盟罷工騒ぎなどがあつた事から、獨逸は露に挑むに絶對の機會を見出したりと考へたらうとも思へぬでない。且又準備の完成せざるは啻に露國ばかりではなかつた。モー一方の敵國たる佛國も亦た其のころ同樣の狀態にあつたのである。然らば單純なる軍略上の着眼點から論ずれば、一刻るなればそれたけ敵の戰備が整ふのだから、成る丈け早く機會を作つて之等の諸國と戰爭をするのが獨の爲めに利益であると斷定せざるを得ない。想ふに斯う云ふやうな考は軍人などの間に盛んであつたらうと察せらるゝ。兎角軍人といふ者は外交關係などは深く之を顧みないで、動ともすると單純な兵力兵備の比較のみから天下の問題を解釋せんとする傾向がある。併し獨の政治當局者までが果して敵の軍備未だ完成せざるを奇貨として、急遽起つの決心を爲したものか如何と云ふに、我輩はどうも此の見解には承服することが出來ぬ。そは外交家の立場から見れば、獨はどうしても今の儘では戰爭を爲し得るものではなかつたからである。何なれは露獨の開戰は即ち同時に英佛を敵とするの結果を來すからである。

尤も人に依りては、獨墺は當時種々の事情より露國との衝突を敢て避けなかつたと認むべき理由があると說くものもある。其事情とは第一は英國中立の豫期であり。第二は伊國の援助の期待である。而して第三は日本の對露開戰の見込であるといふのである。併し此說も亦予の觀る所では正當でない。何となれば獨逸の外交官が如何に愚なればとて、今日多少現實の國際關係に觸れてゐる以上、日本が火事泥的に此際に露の背後を衝くだらうの、伊太利が三國同盟の誼を重んじて我に味方するだらうのと考へる筈はないと思ふが故である。伊國の三國の同盟に屬するの只名ばかりのことであることは、今に始つた事でない。墺伊の反目のこ

とは事新しく云ふまでもない。獨伊亦今日再び昔日の親みを見ることの出來ぬことは、トリポリ戰爭の際に具さに之を世間に曝露した。此事倘ほ後に說く。若し夫れ英國の中立を待ち設くるとの必竟空賴みに過ぎざるべきことは、少しく最近の兩國交涉史を知るもの丶熟知して居る所である。斯かる明白の事理を獨乙官憲が誤解するやうの事は有り得やうか。蓋し英の中立は斷じて獨の中立を前提とするものである。獨亦英と提携して共に平和の保持に努むると云ふなら格別、自分は兵器を把つて露佛に當り乍ら、英國をして獨り傍觀の地位に居らしめんとするのは是れ畢竟出來ない相談である。猶此事は後に之を詳說する積りであるが、獨逸は固より英國の中立を希望したことゝは信ずるが、決して之を豫期したとは思へない。故に之等の豫期に基いて、獨が對露開戰の危險を避けなかつたと見るの說には到底贊成することは出來ない。果して然らば何故に獨逸は此危險を冒したか。是れ甚だ興味のある問題である。

露獨の衝突が英佛の干入を喚起するといふ事は、何故に獨逸をして斷然たる處置を執るに躊躇せしむる所以となるかは、玆に聊か注解を加ふる必要がある。抑獨逸は元來露國の外更に佛國をも敵とすると云ふことは、必しも其の大に苦痛とする所ではない。恐らく佛國と露國との兩者位ならば、立派に相手に廻して切り拔けて見せると云ふ自信は持つて居つたらうと思ふ。海軍に於ては勿論のこと、陸軍に於ても、優に此の兩國には對抗が出來るのである。けれども更らに英國の參加を見るに至れば、獨墺對露佛の均勢は玆に著しく變動するを免れない。夫の英國の强大なる海軍と其の無盡藏の金力との壓迫を蒙つては、到底獨逸には勝算がないのである。獨逸は平常陽に英國を下り阪の國など丶云つて馬鹿にして居るのではあるけれども、陰に非常に怖れて居つたことは、去年七月の末から八月の初めに亘り、列國關係の段々切迫するに伴つて、獨逸は國を擧げて熱狂し、露佛に對する敵愾心が非常に勃興して居つたに拘らず、一度び自耳義の中立侵犯問題

について八月三日英國大使が伯林を引揚げると云ふ報道の傳はるや、全獨逸の空氣は俄かに打濕めつて、其日一日は流石熱狂した伯林の都會も、何物にか魅せられたかの如くに、殆んど色を失つて沈默した有樣であつたと云ふ事によつても明である。要するに獨逸は英國の戰鬪參加は其の非常に怖るゝ所であつた。であるから、獨逸は何とかして英國を中立せしめんと苦心した。英國を聯合軍の一として之を敵とし戰ふことの、如何に獨逸の苦痛とする所たるかは、サアー・ヘンリー・ジヨンストンも去年七月の「十九世紀及其後」に掲げたる「獨逸、露西亞及澳洪國」と題する論文中に述べて居る。曰く獨逸にして我から英、佛、白、和との戰爭に沒入せんか、彼の衰亡は爾後一世紀に亘りて恢復し得ざる程大なるものあるべし云々と。單に之のみではない。獨はまた能く其唯一の味方たる墺國の軍備の不完全なることを知つて居つた。一九一二年春の對露動員(二月號所載本篇四八頁參照)は、墺國陸軍が統御編制上幷びに兵器材料の供給上共に大なる缺點を有することを世界に暴露した。其以來鋭意改善に努めつゝありと雖も、今や漸く其緒に就きしのみである。ドーセ墺國陸軍は獨に取つては決して賴み甲斐のある味方ではない。斯く考へると、獨は何れの點から見ても、我から進んで開戰の機運を作つたものとは受取れない。寧ろ彼は開戰の危險の前に戰慄したであつたらうと思ふ。去れば彼は墺露關係に對する態度を決するについても、本來大に愼重の熟慮を費したべき筈である。若し彼が輕々に這般の問題に對する態度をきめたとすれば、それは甚だ無謀といはねばならぬ。而かも獨逸は事實此の無謀の擧を敢てした。然らば何故に獨逸は此無謀の擧に出でたか。之がなか／＼興味のある問題である。

獨逸は何が故に、國運を賭せざる可からざる危險を知悉しながら、露を挑發し、從つて佛英の奮起をも避けずして、墺國の對塞要求を後援したか。是れ現時動亂の史的研究の上に、最も肝要なる問題であるけれども、今日は未だ的確に之を論明し得る時期でない。

らく今後暫くは、史上の迷宮として多くの史家を悩す問題たるやも知れない。今は只各自の想像に依りて之を推測するの外はないが、予の私見では、之も亦先きに墺政府の對塞行爲のことを說ける際にも述べた如く、種々復雜な事情に基いて已むを得ず茲處に至つたのではあるまいかと思ふ。一言にして云へば、一定の主義政策が其の玆に到らしめたのではなくて、勢が自然と獨逸政府をアンナ羽目に陷れたのではなからうかと考ふるのである。想ふに當時の獨逸の政界には、色々の思想が併立して唱へられたりしに相違ない。或はよしや露國を挑發するの惧ありとするも、墺國を後援するが政府當然に採るべき道なりと云ふ者もあつたらう。或は露佛兩國が未だ其軍備を完成せざるに先つて、之に大打擊を加ふる事が得策だと云ふ樣な說も、無論少くなかつたに違ない。又或は今露國と衝突するのは、自ら英國の戰爭參加を促すの虞があるといふので、多少躊躇して居つた者も少くとも識者の間には少くなかつたらう。而して其うち段々民間には戰爭熱が勃興し、騎虎の勢遂に已み難く、其上當局の拙劣なる外交が、未だ自國に有利なる形勢を作り得るに及ばずして、遂に戰鬪を開始せねばならぬ破目に陷つたのかも知れない。此點について英國のポリチカスなる匿名氏は、去年九月の「隔週評論」に於て面白い觀察をして居る。其云ふ所によると、當時獨逸には二つの政治的中心があつた。一つは軍人の連中に圍繞せらるゝ獨逸皇帝で、一つは皇帝から當時餘り顧みられなかつた外務省である。外務省では外交的見地から極力平和の維持に盡力せんとした。此事は後諸國の發表した交涉顚末によつても分る。此方面に現れたる獨逸は、確かに他の外國政府と共同して露墺塞三國の平和を維持し、少くとも戰鬪區域を東歐に制限せんとするの希望を以て盡力したやうである。外交家の立場としては然るべき事である。然るに外務省の此政策は、不幸にして常に皇帝の外務省そつち除けの專擅的處置に由て打ち壞はされて居つた。皇帝は軍人一派の說を容れて、外務省の意見を無視し、ドンドン武斷主義を以て天下の大政を決斷

した。不幸にして當時の外交使臣、殊に墺國駐在の使臣の如きは、皇帝に媚びんとてにや、常に外務省を無視して直接皇帝に外交上の報告を上り、又其指揮訓令を仰いで居つた。現に彼が墺國政府の當局者と共同して作成したと見るべき對塞の最後通牒の如きも、未だ之を塞國政府に提示せざるに先ちて其内示を受け、直に其内容を皇帝に奏上した。外務省は大使よりもカイゼルよりも何等の報告に接せざりしが故に、只管外交的見地から、歐洲平和の擁護の爲めに、盡力しつゝあつたが、豈圖らんや此間皇帝と軍人とは、互に相談し合つて、露佛攻擊の危險な策略を講じつゝあつたのである。斯く見なければ、開戰當初に於ける獨逸の態度は說明がつかないと云ふのである。前記匿名氏が何の根據によりて斯かる說を立てるかに付ては甚だ明白ではないが、當時の事情から推しても又獨逸皇帝の性格及び獨逸政府の組織の點などから見ても、此說にも一應の理由はある。記して以て後日の參考に供する所以である。

▽英佛の參加

露獨開戰すれば佛國が次いで起つと云ふ事は、最も明白な事で、深く說明を要せざる點である。所謂露佛同盟條約の文字の嚴格なる解釋上、此の際佛國が果して露國を援くるの義務ありや否やは、國際法や外交史の學者の間には色々の說があるやうだけれども、併し兎に角右兩國が今日アレ程の親密な仲となつた以上は、佛國は最早義として露獨の戰爭を默過する譯には行かぬだらう。のみならず、佛國と獨逸とは昔から不倶載天の敵同士であつて、佛は四十餘年來獨に對する復讐を夢みて未だ曾て一日も之を忘れたことはない。而かも兩者の反目は、一八七〇年の普佛戰爭に始つたのでは無くして、實はモット遠い歷史上の根柢があるのである。極く遠い昔の事は姑く之をおく。夫の路易十四世の獨逸攻略や、那翁の侵入やは、今日猶當年の掠奪破壞の跡を各地に留めて、敵愾心をそゝつて居る。佛人の恨は、云はゞ後進國たる獨にやられたといふ屈辱の

念も幾分か助けて居るのであるが、獨人の恨は、一八七〇年の戰勝だけでは未だ十分に滿足せられざるものがあらう。只今日獨は國運隆々として遙に佛を凌いで居るから、佛獨り積極的に獨に對する憎惡の念を洩すのである。而して此兩國は今日表面は普通一樣の國交を開いて居るけれども、併し國民相互の感情は彼此決して相融和して居ないのみならず、兩國の元首の間にも第三共和國創設以來未だ曾て一片の挨拶すら交換された事はない。いはゞ平和的國交斷絕の姿にありと云ふてもよい位である。佛國の大統領が露國などを訪問する時に、獨逸の鐵道による近路を故らに避けて、常に途を海上に取るのは、詰り獨逸元首の顏を見るのが嫌だからであらう。一九一二年の夏、瑞西で久振りの陸軍大演習があつた時に、獨逸皇帝が親しく此演習を觀戰せられ、佛國からも大統領の名代として某將軍が來たが、此際此兩人が瑞西政府の招待せる公式の宴會の席上で、如何なる態度を取るのであらうかと云ふ事は、當時非常なる興味を以て世間の注目を惹いた事がある。之等の例を以て觀ても、如何に佛國が獨逸に含んで居るかと云ふ事が判る。次に又佛國は、獨逸が今日隆々の勢を以て發展するのをかね〲嫉視して居るから、更に此上勢力を張ると云ふことは、到底彼の忍び能はざる所である。さらでだに獨逸の壓迫は佛國の日に益々强きを感じて居る所である。元來佛國は獨逸に復讐せんとするの希望燃ゆるが如きものもあるけれども、從來の國情は先づ共和制の確立に專念すべきを要求したから、殘念ながら餘りに軍隊の强くなることは避けねばならなかつた。王黨其の他の反動的諸政黨と軍隊との關係は、第三共和國成立以來、常に政治家の苦んだ問題である。されば國際上の必要からは軍備は大に之を整へねばならぬのだけれども、內政上の必要からは軍隊が一つの纏つた勢力となることをば、周到なる注意を以て常に之を妨げねばならなかつた。是れ佛國政治家の最も苦心せる所で、又同國が之れまで思ふ通りに軍備を擴張整頓することが出來なかつた一つの理由である。されば佛國は之れまで絕えず恨を飮んで、

獨逸の壓迫に齒切りをして居つたのである。然るに今や獨逸は更に露國の軍隊に痛棒を食らはして此上に其勢力を張らんとしつゝある。是豈佛國に取つて由々しき大事ではないか。故に獨逸が露國に對して劍を拔く以上は、佛國は自衛の點から見ても默つて居る譯には行かぬのである。加之佛國は近來に至りて曾て多年反目して居つた英國と段々相接近し、一九〇四年所謂英佛協商以來は兩者の親交一層堅きを致し、今や佛國は夫の對岸の大海軍國をば最も賴み甲斐ある友達として信用することが出來るやうにはなつた。英と佛とは歷史的に云へば、本來仲の惡い國柄である。百年戰爭のことは言はずもがな。亞米利加大陸に於ける競爭や、エヂプトに於ける競爭や、何れも兩國の反感を示さぬものはない。英が那翁を苦めるに全力を傾注せしことは、今更申すまでもない。要するに十九世紀の央頃までは、佛の覇業を覆すと云ふのが、英の國際政策の大方針であつた。而して最近に在ては、一八九八年例のファショダ事件を以て、兩國危く開戰せんとした事もある。然るに二十世紀に入りて此兩國は、段々と舊怨を忘れて相接近するに至つた。而して二者が急に在來の態度を改めて接近するに至りし理由は、一つには英のエドワード七世と佛のデルカッセとの盡力に因るといふけれども、主としては獨の壓迫が勢兩國をして茲に到らざるを得ざらしめたのである。斯くて今日英國は獨逸の壓迫に對しては極力佛國を保護し之に同情する事となつた。此事は先年のモロッコ事件の場合を觀ても最も明白である。そこで佛國は獨逸と爭ふと云ふ場合には最早決して孤立ではない。斯く考ふると云ふと、佛國は或は今露獨佛の開戰するのを見て、乘ずべき好箇の機會到れりといふ風に考へたかも知れぬ。要するに以上の點を綜合して考ふると佛國が起つたと云ふ事は、もと當然の順序に屬し、毫も怪しむを要せないのである。

次に露國佛國が起ては必らず英國が起つと云ふ事が是れ亦極めて明白である、此點について世間の議論の中には、英國は或は中立を守つたかも知れないと云。

やうな說を唱ふるものもあるが、之にはどうも納得は出來ない。尤も英國は危機切迫の際に、最後まで中立の維持に盡力したと云ふ事は明かである。墺の對塞最後通牒の公表に接するや、逸早く佛、獨、伊の三國政府を促して倫敦に大使會議を開き、以て墺露、塞の間に周旋する所あらんと提唱せしは（七月二十四日）、英國であつた。超て七月二十七日、獨國政府が其遣外大使をして、墺塞關係を單純なる兩國だけの事件と見做し、萬一開戰の場合には戰局を東歐の一部に限局せしめんことの希望を述べしめた時にも、英國は最も先に贊成の意を表した。最後に露佛兩國は、戰亂を未前に防止するには墺國の對塞要求を緩和するを要し、墺國をして此の要請に聽かしむるには獨を牽制するの要ありとなし、頻りに英國政府をして「萬一の場合には露佛に加擔して起つべき」の宣言を發表して、以て獨を脅さんことを懇求せるも、英は最後まで之に應じなかつた。露佛は英國さへ斷乎たる態度を示せば、獨は必ずや屈すると信じたものらしい。去れば後日此兩國の言論界では、英國の態度が煮え切らなかつた爲めに、獨逸をして劍を藏めしむるを得ず、遂に開戰の不幸を見るに至つたと恨を述べて居るものもある。反對に獨逸でも亦、英國があれ程平和に忠實な顏をして居りながら、最後に露佛に黨して起つたのは、如何にも裏切つたやうな態度であると云つて、是れ亦怨を述べて居る。兎に角英國は開戰の前後、最も熱心に平和の維持に盡力したことは疑ない。併し平和の維持に熱心なものは、常に戰鬪の參加を欲せざる者ではない。熱心なる仲裁者は、往々變じて勇猛なる鬪士となることがある。否イザと云ふ場合には只では濟まさぬぞと云ふ決心ある者が、能く有力なる仲裁者たり得ることは屢々見る所の例である。斯く考ふると、夫の露佛言論界の一部の怨言の如きは、必ず表面の出來事のみを見て判斷した者であつて、之が爲めに英國は、最後の瞬間まで中立を守るべきや否やの問題に迷つたものと觀るのは斷じて誤りである。英國は獨逸が起てば無論自分も起つと云ふ決心は、初めから持つて居たらうと思ふ。

只最後まで其決心を宣言するのを避けたのは、英國の外相は飽くまで獨を制して平和を維持せんことに眷々たるものがあつたからである。然らば何が故に英國は必らず露佛を援けて獨逸と爭ふに至るかと云ふに、之は主としては英國の自衛の爲めに必要であるからである。英國は一九〇四年の英佛協商、一九〇七年の英露協商の結果として、佛露の兩國と近來餘程親しくなつて居る。けれども此關係は三國同盟の如くに、英國が佛露の外國と爲す戰爭に參加することを要求するものではない。故に英國は何も佛國や露國を援くる條約上の義務はないのである。けれども英國は近來獨逸と反目して、最早や今日では歐洲の中央に於て、兩雄竝び立たずと云ふ狀態にある。其故は世間の云ふ通り、畢竟獨逸皇帝の世界政策に因するものである。一體英國は本來は露國と世界の各方面に於て利害相衝突し、佛國とも亦仲のわるい歷史がある。彼は寧ろ本來獨逸と親しむべき關係にあるものである。然るに此頃になつて獨逸の態度は、英國を逐うて遂に獨逸の敵と結ばしむることになつた。是れ一つには獨逸の勃興の結果でもあるが、主としては獨逸皇帝の傍若無人の政策に因るものであらう。斯く英國が獨逸を敵視するといふ關係が成立すれば、英國に最も近い對岸の大陸諸國が獨逸の勢力に壓倒さるゝと云ふ事は、英國は其自衛の上から到底忍ぶことが出來ないのである。而して今や露獨國交の破裂に促がされて、佛國亦獨逸に對して宣戰を布告せんとして居る。佛國が獨力で優に獨逸に對抗し得れば格別、否らざる以上は、到底英國は默然として之を坐視する事は出來ない。即ち進んで佛國を援助し、以て自國の安全を計らねばならぬのである。此點からして予は對獨關係に於て英國は佛國を援くるの政治上の理由と必要とがあると認むるものである。此事は現に先年モロッコ事件の際に、已に明に其證據を示して居る。獨逸が一九一一年七月、突如一砲艦をモロッコ西南岸のアガチール港に送り、其結果所謂モロッコ事件なる困難なる外交問題を惹き起すや、佛獨の關係は危機一髮の間に迫り、今にも戰爭の開始を見んとした

のであつた。此際英國は非常に佛國に同情しあらゆる方法を以て佛國の便利を計つたことは今何人の知る所である。さればこの時獨逸は英國に對し、「貴國は武力を以て佛國を援助するの決心なりや否や」と露骨なる質問を發したのであつたが、英國外相エドワード・グレーは斷乎として「政府は輿論が全然之を支持せざる限り、何等の約束をもなすこと能はざるも、若し茲に佛國に戰爭を强うる國ありとせん乎、我國の輿論は恐らく佛國に味方するを欲せん」と答へた。言葉は頗る婉曲であるが、是れ實に英國は獨佛の戰爭に於ては斷じて佛國に味方すると云ふ決心を宣明したものではないか。當時英國は獨佛事あらば、十五萬の兵を大陸に送つて佛國を援けようとしたと云ふ事である。之等の例を推して考ふるに、今度とても愈々獨佛開戰することゝならば、英は決して茫然中立を守るものでないと云ふ事は、之を豫想するに難くなかつたのである。

更に進んで我々は、英國は恐らく萬一の場合に佛國を援けるの條約上の特別義務があるのではあるまいかと疑ふの理由を有する。其の譯は一九一二年十一月の英佛海軍協約の結果として、佛國艦隊の主力は專ら地中海に移され、佛國の太西洋及海峽方面の沿岸は全く海軍の防禦を有せざる事となつたからである。抑々此事は何を意味するか。即ち佛國は地中海に其勢力を集中し、太西洋方面の警備は、英國主として單獨に之に當ると云ふ事を意味するのではないか。換言すれば萬一の場合には英國の艦隊が佛國の沿岸防禦の任に當ると云ふ條件の下に、佛國は太西洋艦隊を地中海に移したものではあるまいか、否らざれば隣りに强大な海軍を有する獨逸と云ふものを控へながら、其重要なる沿岸の地を全く無防禦の地位に放任すると云ふ理由が分らない。之れ必らずや何等かの密約があつた結果でなければならぬ。斯く觀察し來ると、英國は事に依ると佛獨戰爭に於て、少くとも其海軍を以て佛國を援くるの義務があるものであらうと推察せらる。さればにや英國は昨年八月二日、佛國に對して「若し英國海峽及び北海を遊弋する獨逸艦隊にして、佛國船舶若くは其海

岸を攻擊することあらば、英國は全力を盡して保護を與ふべし」と約したのであつた。

要之、獨佛開戰の場合に英國が佛國を援助すると云ふ事は避くべからざる必然の數である。成る程英國は現に戰鬪に參加せし際には、開戰の直接の理由としては、佛國の援助といふ事をいはず、專ら白耳義の中立侵犯と云ふ事を高調して居つた。即ち英國は佛國を援けんが爲めに起つたのではなくして、白耳義の中立を保護すると云ふ條約上の大義の爲めに起つたと云ふ事になつて居る、けれども斯は只表向きの開戰の理由の大義名分を求めたまでゞあつて、實際は白耳義の中立を獨逸が侵犯せるや否やの問題に拘らず、開戰の必要はあつたのである。蓋し白耳義の中立と云ふ事は、英國が採りて以て開戰の理由とするには、恰度都合のよい題目である。何となれば白國の中立は、列國の條約を以て保障する所にして、而かも之れを侵犯することなくしては、獨佛の戰爭は到底行はるゝを得ざるものであるからである。白國の中立は、一八三一年及び一八三九年の條約に於て認められ、英、露、佛、墺、普の五ヶ國は之が保障の義務を負うて居る。從つて白國の中立を侵さないと云ふ事は、此等の各國の條約上の義務である。此中立擁護の義務は、英、露、佛、墺を外にしては普西亞が之を認めたので、獨逸としては之に關係がないから、獨逸帝國の白國中立を蹂躪するのは、必しも條約義務違反ではないなど丶云ふのは、固より取るに足らない屁理屈である。斯くて白國の中立は各々列強の保障する所であるが、併しながらこの中立は實際イザと云ふ場合に眞に關係諸國の尊重する所たるべきやは甚だ覺束ない。少くとも獨國の之を侵すべきは疑を入れない所であつた。何となれば今日獨逸は、白國の中立を犯さずしては到底對佛戰爭に勝を占むる事が出來ぬからである。去れば英國が此處に對獨開戰の口實を求め得めたのは、實に巧妙な掛引であると云はねばならぬ。蓋し獨に向つて白國の中立を尊重せよと云ふのは、戰爭をするなと云ふに同じい。英國は何も獨が白國の中立を犯さずして對佛戰爭に取り掛るこ

とあるべきをも豫想して、斯かる要求を爲したのではあるまい。白國の中立を重して戰爭を全く思ひ止ればよし、然らざる以上は之を口實として獨と戰場に見へんとしたのであらう。英に取つては、開戰する以上、獨の白國中立を尊重すると否とに拘らず、戰爭に參加することは必要であつたのである。然らば問ふ、何が故に獨逸は白國の中立を侵犯することなくしては、對佛戰爭を進行することが出來ぬといふか。一つの理由は言ふ迄もなく、地勢の關係である。白耳義の中央は廣野茫漠として大兵を行るに適して居るのみならず、獨佛國境上には彼此共に强健なる要塞のかためがあつて、容易に之を突破することが出來ぬ。例へば獨に在てはメッツ、佛に在りてはヴエルダンの要塞の如き、堅牢なること世界無比と稱せられて居る。然らば比較的抵抗力の薄き白國より兵を進むるといふのは軍略上必要と曰はねばならぬ。一旦軍略上必要と定まれば、一刻でも早く此地に兵を入れたものがそれ丈け優勝の地位を占むる譯になるから、佛も獨も競爭して我れ先きにと白國の中立を侵し來るであらう。白國にして自力を以て自國の中立を維持し得ざる以上、兩大國の侵犯を競ふのは已むを得ないのである。斯うすると條約の如きは餘り顧みられなくなる。猶其上に白國は其建國の始以來極めて佛國と親善なる關係に在る。故に公然中立を侵さぬまでも佛が陰密に白國を對獨戰爭の策源地とするの懸念がある。果して然らは獨が一刻を猶豫せず白國に兵を進むるのは不能避の必要と云つてもよい。是れベルンハルヂ氏を待たずして自ら明白なる所である。抑も白國の獨立を得たのは一八三〇年である。而して此年十月獨立の宣言を發してから、和蘭王ウリアムの壓迫を脫して辛じて獨立の實を擧ぐる事の出來たのは、英と佛、殊に主として佛國のお蔭である、當時露、墺、普の三國は、保守的反動思想に動かされて、白國人の希望を抑へんとしたのに、英佛兩國は寧ろ之を援け、倫敦會議の席上に於ても辯明大に努めた結果遂に獨立を認められたのである。其後和蘭王が右會議の結果を承認することを拒んで兵を送つた際に

も、之を斥けて白の獨立を保護してやつたのは佛國の援兵であつた。故に佛國は白國に取つては獨立の母と云つてもよい。夫れ以來佛白の關係は極めて親密である。こは啻に白國人の中のワロア民族のみならず、フラマン民族も亦同樣である。白國人は元來以上の二民族より成つて居るが、ワロアは人種關係上佛國人と同樣である。而して之が現今政界の實權を握つて居るので、從て自國政府と佛國政府との間には一種の氣脈相通ずるものがある。フラマンは本來ゼルマン民族の一分派であり、且つ近來民族的精神の勃興すると共に、ワロアに對して不平の念を抱き、一種の民族競爭が內政の上にあらはれて居るが、對外關係となれば、フラマン族と雖も決して獨逸に同情するものではなくして、寧ろ佛國の文明に親愛の情を持つて居るのである。勿論獨逸の社會民主黨などが、近來フラマン勞働者と連絡を附けるとか云ふ如き事情からして、フラマン人と獨逸人との接近が、一部の人の間に劃策せられては居るけれども、併し全體としては、フラマン人も佛國文明の下に、統括され、宗教も天主教であり、其他思想感情もゼルマン的たるよりは羅甸的なりと云はれて居る。それで白國全體としては、佛國に同情があつて獨逸に同情がないと見なければならぬ。斯う云ふ國柄であるから、假令永世局外中立國であつても、若し獨佛開戰せんとするが如き場合となれば、白國の直ちに佛國の便宜を計るに努力すべき事は、火を睹るよりも明かである。現に白國の國防狀態を見ても、兵備は獨逸に對する方面には嚴重にして佛國に對する方面には弛やかである。有名なアントワープ、リエージ、ナミユールの要塞の如きも、皆獨逸に對する防禦設備である。且つ獨佛開戰の場合に、白國の中立がどうなるだらうと云ふやうな問題を揭げて議論する際にも、白國人は何時でも獨逸の侵略を蒙ることのみを問題として議論を戰はし、佛國の事は更に念頭に置かないやうである。佛國が兵を入れると云ふ事は當然の事であるかの如くに考へて居るものらしい。

此事は一九一一年モロッコ事件當時、同國に矢釜し

かつた國防問題の討議について見ても明かである。モロッコ事件は同年七月から九月にかけて非常に矢釜しかつたのであるが、此時英國は佛國を援けて獨逸と戰ふの決心をなせりとの風說が傳はつた。而して英國は十五萬の大兵を白國に上陸さして獨逸を衝くとか、又獨逸は之に先んじて兵を白國に入るゝとか云ふ流言も傳つた。そこで白國が其中立を侵さるゝと云ふ事になるので、大變矢釜しい問題となり、現に中立擁護の爲めに九月十四日には豫備を召集したのであつた。此等の問題が十一月二十三日から開いた同國の議會に於て復論議せられたが、此際先づ第一に問題を起した人は自由黨員の名士ムーヴィーユ氏である。彼は次の諸點を擧げて國防の缺點を指摘し、內閣に向つて其辨明を求め併せて陸軍大臣ヘルボー將軍の責任を問ふたのである。其の言ふ所によると、

第一、白國軍備の現狀は、萬一の場合十分に其中立の地位を保持するに足らぬ。步兵將校は約三分の一の缺員になつて居るのに、其儘に放任されて居る。砲兵隊の如きは其備ふる所の馬匹は所要の數の半分しかない。

第二、ナミユール、リエージ、及アントワープの要塞は極めて不完全である。此等の要塞を通じて、此夏危機切迫の際に、約一萬人の兵員の不足があつた。

第三、武器彈藥は不完全であり且つ不足である。其上に近世式でない。

斯う云ふ質問をして大いに政府に肉薄したのであるが、此質問について我々の注意すべき事は、論者は獨逸に對する防備の點のみを見て、英佛より來る中立侵犯の事は毫も眼中に置いてなかつたと云ふ事である。即ち獨逸の侵入に對抗することが出來るや否やと云ふ方面のみを責めて居る。此事は現に前記ムーヴィーユ氏が、軍備の缺點を指摘するに附隨して、序に「獨逸クルップ會社の我國に供給する所の兵器は、不完全にして殆んど用をなさず。ヘルスタルの武器製造工場も、獨逸人の手に歸してよりは、其供給する武器は粗末になつた」と、獨逸を罵倒した事によつても明である。

此質問攻撃に對しては政府反對派たる社會黨及び自由黨も擧つて賛成で、結局此兩派は、獨逸に對する國防の完備の爲めには、相當の出費に協賛することを辭せぬと云ふ見解を發表したのである。此時陸軍大臣は一一其難點を辯護し、一片の風說を信じて議論するとの甚だ輕卒に失するを責めたけれども、而かも彼は一九〇九年の兵事に關する法律が、未だ十分に行はれてゐなかつたと云ふ事丈けは之を認むる旨を自白し、遂に自由派の要求に從ひ、國防調査委員會を設けて之を調査せしむる事に同意した。之が十一月二十八日の事である。超えて十二月一日保守黨即ち政府黨の動議により、信任投票が行はれ、七十三に對する八十二の多數を以て、政府は辛うじて顚覆を免れたけれども、自由派の攻撃尚過まず、爲めに翌年二月二十四日には陸軍大臣は遂に辭職するの已むを得ざるに至つた。以上の出來事は明白に我々に二つの事柄を敎ふるのである。一つは獨佛開戰の場合には、必らずしも佛國に其境域を開放するを厭はざる事、他の一つは獨逸は必らず白國の中立を侵犯すべく、而かも白國は其侵犯をば極力防がんとするの意あることである。尙序に申すが、此時の質問を機會として、白國では獨逸に對する軍備の充實に骨折り、一昨年の夏、重要なる法律を通過した。

前にも云つた通り、一九一二年二月二十四日陸相ヘルボーは辭職したのであるが、當時其の職は姑く總理大臣ブロックヴィーユ之れを兼任せしも、四月三日に至りミセル將軍を、改めて專任の陸相となし、之より政府は熱心に軍備充實の問題を研究したのである。然るに十一月に至り此問題について端なく內閣の議論が分れ、十一月ミセル將軍また其職を辭し、首相再び之を兼任する事となつた。此日議會が開かれた。而して翌月の十二月五日に至つて玆に軍備充實案が提出されたのであつた。其の要點は一九〇九年の法律の主義、即ち一家一人を限つて兵役に服せしむると云ふ從來の原則を改めて、一般兵役義務制度を採用し、每年の徵募人員を三萬三千とし、之れに一年志願兵の制度をも採用し、斯くて平時約十五萬、戰時約三十三萬の兵員を

得んとする計畫であつた。(服役十三年、役務期間十五ヶ月)。此爲めに差當り費す所約二億三千四百萬法と云ふ計算であつた。此案は一昨年二月十三日に初めて討議に上つたが、五月二十八日には下院に於て、社會黨及び急進黨の六十二票の反對に對し、百〇四の多數を以て見事に通過した。やがて上院に廻附せられたるが、上院でも勿論大多數を以て通過したのである。斯くの如くして白國は一昨年の秋から段々獨逸に對する軍備を充實して居つたのである。此軍備充實案の通過するや、表面の理由は固より中立義務を嚴守するの必要と云ふ事にあつたけれども、併し實際の效果は、獨逸よりの侵略を防ぐと云ふ事にあるのだから、佛國では固より之に滿腔の同情を表し、獨逸では之に反して激烈なる物論を沸騰せしめたのであつた。獨逸の小新聞中には、之を以て白國の獨逸に對する敵對行爲であると放言した者もあつたが、然らざるも、少くとも白國の此軍備充實は、專ら佛國の勸說によつたものであると云ふ位の說は普く唱へられた。又或新聞の如きは、一九一二年秋、巴爾幹戰爭の初まるや、時の佛國外相ポアンカレーは、白國駐劄の自國公使をして覺書を白國の政府に提出せしめ、白國にして自ら守るの力を備へずんば、佛國は獨佛開戰の曉、マース地方一帶の地を占領すべしと通告せしめたなど丶書き立てたものもあつた。要するに此の軍備充實は、佛國の利益で獨逸の不利益である事は疑を容れない。今度の戰爭で、白國が案外にも獨逸に對して相當の抵抗力を示したのも、恐らく此等の事實の結果であつたらうと思ふ。

佛白の關係右述ぶる所の如くなる以上、戰時に於て獨が決して白國の中立を尊重するに違なかるべきことは、明々白々一點の疑を容れない。故に獨の白國中立侵犯はベルンハルヂの說明を聞かないまでも、西歐識者の夙に豫期して居つた所であつた。而して獨が初めから戰爭の場合には白國の中立を尊重するなど丶云ふ考のなかつた事は、彼は萬一の場合に於ける獨國の白國侵入を妨害すべき事物に對しては、平時から之が排除に腐心して居つた事實に依ても明である。夫の一

九一〇年から一一年にかけて當時西歐諸國に八釜しかつた和蘭のフリッシンゲン防備問題は實に其適證であると思ふ。フリッシンゲンはセルド河口に位し北海に對する和蘭の一要港であつて、海陸共に交通貿易の衝に當り、且アントワープに入るセルド灣の入口を扼する要害の地になつて居るので、軍事上からも肝要な處である。去れば之れまでも一種の防禦設備はあつたのだけれども、從來の防備は極めて舊式な到底今日の用には立たぬものであつた。之を今度改めて近世式の堅固な要塞に代へようと云ふのが一九一〇年來起つた問題である。併しながらフリッシンゲンに堅き防備を設くると云ふ事は、取も直さずアントワープと外海との交通を脅かすと云ふ事を意味する。而してアントワープと外海との交通を脅かすと云ふ事は、又英國の白國中立擁護の義務を妨ぐるといふことになる。何となれば萬一白國が獨國等によりて其中立を蹂躙せらるゝ時、英國が之を妨ぐる最良の方法は、軍艦をセルド灣に入れてアントワープ港を占領するに在るからである。そこで英國は和蘭政府のフリッシンゲン防備の計企を以て、英國に對する敵對行爲であるかの如くに考へた。況んや和蘭政府と獨逸政府とは、宛かも佛白兩國の關係の如く、大に密接なるものあるに於てをや。且つ白國の中立を維持するといふことは、先きにも述べた通り、實は英國自身の存在上からも非常に必要な問題である故に少しでも白國の中立を危うすることは、英國の到底呑氣に默過し得る所ではない。而して和蘭は今や英國の海軍とアントワープ港との間に、一つの障壁を築かうとする。英國の憤慨したのも無理でない。啻に英國ばかりではない。佛國も亦之に依つて大に激昂した。何となればフリッシンゲンの防備は、獨の地位を優越にして英の地位を弱からしむるものであるからである。去れば當時英佛の兩國新聞では、和蘭政府の此防備計畫を以て獨逸の使嗾に出づるものとなし、且つ、近年和蘭が獨逸の勢力の下に在るの事實を指摘し、畢竟獨逸が和蘭をしてフリッシンゲンを防備せしめ、戰時白國の中立を蹂躙する際の便宜に供せんとす

るのであると盛に書き立てゝ居つた。而して獨逸は事實果して和蘭を唆かして此の措置に出でしめたか如何かは判らぬけれども、獨逸の新聞が此際熱心に和を辯護して英佛の攻撃に應酬したことは事實である。之れ丈けでも白國の中立は戰時に於て決して尊重せらるゝものでないと云ふ事が分ると思ふ。何となれば白國の中立にして果して尊重せらるゝものなら、獨逸は何を苦んで他人の喧嘩を買つてまで和蘭の辯護をする必要があるか。又英國は何を苦んでフリツシンゲンの防備に故障を云ふの必要があるか。此事が矢釜しい問題となるのは、畢竟白國の中立と云ふものゝ、決してイザと云ふ場合には尊重せらるゝものでないと云ふ事を、銘々深く認めて居つたからである。此フリツシンゲンの防備問題が直接獨逸の勸說に基いたものかどうかは、今も言つた通り固より明白ではない。現に一九一〇年十一月廿九日時の內相ヘームスケルクは、下院に於ける豫算討議中に於て、「沿岸防備に關する提出案は外國の要求の結果にあらざる」旨を力說抗爭して居り、同じく十二月六日の豫算討議の際に於ける外相の演說にも「沿岸防備の事たる一に國民的義務の感情から發露するものであつて、決して外國に動かされ又外國に對する意味のものでない」と云ふ事を明かにして居つた。けれども、議員中には尙「沿岸防備の策は獨逸皇帝の慫慂に出づるとの說あるが如何」とか、「兎に角海岸防備と云ふ事は獨逸に利にして英國に不利なる結果を來たすものであるが、斯くても今之を敢行するの必要は何處にあるか」などゝ問ふものがあつた。外務大臣は重ねて、「我國は其內政の執行に關しては何國の干涉をも受けない。且つ我國は英國に對して本來何等の敵意を有せないものである。吾人が沿岸の防備を改良したりとて、彼何ぞ我國を難ずるの理あらんや、蓋し吾人の防備は或一國に對するものでなくして、和蘭の獨立に威嚇する者に備ふるものである」と辯明した。併し英國は決して此等の辯明には滿足しなかつた。そは白國の中立は、アントワープと英國との交通を安全にして置くことによつて、始めて獨逸の侵略から之を

保護するとが出來るのであるからである、而して英國が白國の中立を保護する爲めに、軍艦をアントワープに入るゝには、兩岸共に和蘭領たるセルド海の入口を通過せなければならない。今和蘭がわざ〳〵此入口に新式の防備を設くると云ふのは、是れ豈獨逸の白國中立侵犯を援けて、英國の援を阻止せんとする底意に出づるものではあるまいか。斯くて英國は當時佛國の外相たりしピションの協力を得て頻りに和蘭の防備計劃を中止せしめんと骨折つた。獨逸は無論此問題を以て純然たる和蘭内政上の事項なりとして、熱心に英佛の干渉の不當なる所以を難じた。中には「若し此防備を缺くならば、英國先づ戰時に於て白國の中立を破り、以て獨逸の不利益を計るの虞がある。然らば獨逸は英國の此態度に對抗する爲めに、英國の白國に入るに先つて、先づ和蘭の中立を侵すの必要があるかも知らぬ。和蘭にして苟くも戰時英國の白國中立の侵犯に刺戟されて起つ所の獨逸の侵入を避けようと云ふならば、速かにフリッシンゲンの防備を完成して、英國をして白國に侵入するを得ざらしめなければならぬ」と云ふやうな事を云つて居る者もある。孰れにも相當の理屈はあるが、兎も角斯くの如き問題が、矢釜しく英佛獨の間に外交問題となつたのも、戰時白國の中立は到底尊重せらるゝものでないと云ふ事が、深く人々に確認せられて居つたからである。尙序に云ふが、一九一二年七月七日、和蘭政府は一九一三年度を以て五百三十六萬グルデンを以てフリッシンゲンの防備修補に着手すべきの案を議會に交附し、翌一三年五月六日、下院は三十五に對する五十四の多數を以て之を可決した。

以上述ぶるが如く、白國の中立と云ふものは、戰時に於ては到底之を尊重するとが出來ないものである。從つて白國の中立を尊重せよと云ふのは、取りも直さず全然戰爭をするなと云ふと同じ事になる。英國は獨逸の白國中立の侵犯を名として戰爭に參加したけれども、之は只戰爭の名義を茲に借りたまでゝあつて、獨佛開戰する以上は、どうせ事茲に到るのは初めから、

かである。獨佛開戰して仍ほ白國の中立が尊重せられると云ふ事は少くとも今日はあり得ない。今より四十有五年の昔、普佛戰端を開きし當時は、英は交戰兩國に對ひ、戰爭繼續中、幷びに戰後十二ケ月を期し、白國中立の尊重を約せしめ得たるも、（一八七〇年八月九日及同十一日）、當時と今日とは丸で時勢が違ふ。英國が今日の如く獨と反目し佛と親善であつて見れば、獨が其の昔の中立尊重の要求に大人しく應ずる譯には行かぬのである。獨にして白國の中立を尊重せずとすれば、從つて獨佛開戰の曉に英國が中立を守ると云ふ事は絕對にあり得ない。成程英國は今度も一八七〇年の昔の如く、最後まで獨佛兩國に白國の中立を守れと云ふ事を要求した。即ち八月四日外務大臣エドワード・グレーが英國議會に於て述ぶる所によれば、開戰の當初英國政府は、佛獨兩國に對し、白國の中立を尊重するや否やと尋ねたが、其際佛國は直に之を尊重すると約したけれども、獨逸は「之に回答するは我策戰計畫を洩らす事となるが故に、明答を與ふるを得ず」と答へたとの事である。其際獨國は反對に英國に對ひ、「我若し軍略の必要上一時白國の領土を占領すとも、直ちに之を還附することゝせば、英國は之にて滿足するや如何」と反問したが、英國外相は之に對して「予は吾人の義務につき取引をなす能はず」と答へたと傳へられて居る。此時實は既に獨に白國入兵の事實あり、且つ恰かも白國王からも此の事を訴へて干涉を求め來つたからして、そこで英國は憤然として起つ事になつた。以上はグレー氏の演說の要點であるが、併し予の觀る所では、氏が白國中立問題に特別の重みを置くのは畢竟外交上の辭令であつて、事實氏が獨佛開戰の後猶白國の中立が尊重されるかも知れぬと豫期したとは思はれない。恐らく氏の意は此儘戰鬪を思ひ止まれと云ふ意思を婉曲な辭令を以て表はさうとしたのであらう。既に劍を拔いて起つたものに短刀直入喧嘩をするなと叱りつけるのは、却て相手同士を激するの恐がある。婉曲の辭を以て巧みに之を思ひ止まらしむるは、是れ亦一種の外交的技術である。グレー氏は常に巧に此技術を利

用することによつて久しく歐洲の平和を維持した人である。或は姑息と誹り、或は彌縫と罵る人もあるが、兎に角彼は巴爾幹戰爭の際に、屢々各國の間に戰端の開始を見んとしたのを巧みに彼れ此れ取り繕つて窮通の手段を發見し得た。過去數年の間緊張せる國際間に、ともかくも平和を維持し得たのは、實に彼の巧妙なる外交手腕のお蔭である。思ふに彼は今度の事件に際しても、萬一戰爭になれば無論自分は中立を守り續けることは出來ないと云ふ丈けの堅い決心はあり乍ら、其決心を色にあらはしては他國の戰爭熱を激する恐れあるから、隱忍に隱忍を重ねて、最後の瞬間まで「歐洲平和」の維持に盡力したものと察せらるゝ。而して彼の折角の苦心も今度は遂に功を奏せずして、獨、佛、露各々宣戰を布告するに至つたから、然らば我もと英國も亦自衞の爲めに起つたものと見へる。是れたゞ自衞のためである。白國中立の違反問題の如きは畢竟一の口實に過ぎない。假りに暫らく中立違反の事なくとも、恐らく英國は何等か他の口實を以て佛國を援けたに違ひない。況んや白國の中立は、決して尊重せらるべからざる運命にあるものなるに於てをや。後日獨逸では白國の中立を先づ侵かせるものは我國にあらずして英國なりなどと云つて、中立侵犯の先後を爭はんとして居るが、斯の如きは抑々末の問題である。誰が先に犯したかと云ふが如きは、愈々戰爭の始つた以上は、何等重要の意義はない。只中立侵犯の最初の責任を敵に歸して、世界の同情を我に集むると云ふ所に外交の妙が存するのである。此點に於て獨逸のヤゴー氏は到底英のグレー氏の敵ではなかつた。

以上述ぶる所は、同時に一時內外の論客の間に主張された「開戰の當初獨は英の態度を誤算した」といふ說の謬妄なることをも明にするものである。即ち當初世上には、獨は伊の援助と共に英の中立をも豫期したといふ說が盛に唱へられたのであつたが、予は始めから此說に反對であつた。英の中立を守り能はざる所以は、以上の如く甚だ明白である。如何に獨逸の外交家が迂濶たとて斯かる打算を誤る道理はない。獨逸の政

治當局者が自分は白國の中立を侵し乍ら、英國は中立の地位に立つかも知れぬと豫期したとは、如何しても考へられぬではないか。假りに獨が白國の中立を侵さざりしとするも、英が永く局外中立を守るべきや否やは疑問である。況んや白國の中立尊重は、到底獨の從ひ得ざる所なるをや。而かも現に獨の當局者は初めから白國の中立を尊重するの意がないのである。斯くても英國の中立を萬一に期待したとすれば、餘り蟲のよ過ぎる話である。若し夫れ英が露佛の懇求を斥けて最後まで平和の爲に斡旋せしの事實を捉へ、之を以て獨が英の中立を期待せしと見る說の例證となさんとするが如きは、英が露佛の懇求を斥けつゝも、而かも獨に對しては同時に極めて峻嚴なる態度を以て、交渉談判しつゝありしの事實に目を蔽ふものである。英が當時愛蘭問題に惱され居りしより恐らく外國と事を構ふるの餘裕なかるべしと觀る說も、近年英國の政黨が朝野擧つて外交問題については擧國一致の態度をとらんと期し、グレーの政策は、殊に巴爾幹事件以來、議場に於て常にボナー・ローの裏書する所たりし事實を看遁がした判斷ではあるまいか。要するに獨逸が當初英國の態度を誤算せりと見るの說は、恐らく皮相の見であらう。

附言　本年二月發行の太陽に、予の署名の下に「墺塞葛藤の內面觀」と題する論文が載つて居る。併しアレは予の責任を負ふ能はざる論文である。予の戰亂に關する意見は、凡て中央公論所載の本論に依て御承知あらんことを希望する。偶々前記太陽の論文が、有力なる學者の批評に上つたと云ふ風說を耳にしたから、玆にこの事を斷つて置くのである。(著者識)

政府黨と在野黨との對戰

△立憲の本義より觀たる今次の政爭

某大學教授

選擧は政權爭奪の最も進步したる方法である。昔は血を以て政權を爭奪した。今は言論を以て政權を爭奪する。政權の爭奪が言論を以て天下に訴ふることによつてなさるゝと云ふのが立憲政治の特色である。

政權爭奪の古い形式を歷史上から觀ると云ふと、先づ初めには暗殺で行はれた。我國の歷史でも蘇我氏が專權を振つた時に、中大兄皇子が藤原鎌足と結托して廟堂に於て不意に入鹿を殺したのは之は國家の爲めに賊臣を誅すると云ふ動機から起つたのではあろけれども、併し政治史上から觀れば血を以て行はれた一つの政權爭奪である。政權爭奪は又讒言によつて行はれた事もある。菅原道眞が藤原時平の讒言によつて九州に追ひやられたのは、歷史上の事實は兎も角もとして、暫らく稗史の傳ふる所に從へば是れ亦一種の政權爭奪である。降つて敵味方徒黨を組んで政權を爭ふ時代になれば、政權爭奪は卽ち戰爭によつて行はるゝ。源平の爭の如きは正に其適例である。而して政權爭奪其の事が血を以て行はるるのみならず、一旦政權を得たものは自己の地位を安全ならしむるが爲めに、更に血を以て敵の餘類を亡ぼさうとする。此間帝劇で演ぜられた寺小屋の段の如きは政權爭奪の犧牲となつた菅秀才の身代りを題材としたものである。卽ち時平は自家の政權を安全ならしめんが爲めには頑是なき道眞の遺子をも殺さんとしたのであらう。淸盛の如きは義朝を討伐して政權を握るやウツカリ今若、乙若、牛若の三人を生かして居つた爲めにマサカ初めは此三人も政權爭奪に加勢すると云ふ事は豫期してゐなかつたらうけれども、遂に此等のものゝ加勢によつて天下を賴朝から奪はれた。敵の殘黨は一人でも之を生かしてはならぬと云ふ活きた證據を提供したのである。されば賴朝が天下を得るや平家の殘黨の逃げ隱れて居つたものを百方手を盡して狩り立てんとした事は芝居なぞの好題目となつて居る。三位中將維盛がすしやの番頭彌助となつて居つたと云ふのも皆政權爭奪の犧牲となつたのである。斯く考ふると、德川家康が多少の情誼あるに拘らず、ひたすらに口實を設けて淀君、秀賴を苦しめたと

云ふのは強ち彼を老獪にして涙なきの狸爺との み罵倒する譯には行かぬ。政權爭奪が血を以て行はるゝ以上は政治家として家族の如き度外を取るのは止むを得ないのである。然るに今日は、政權爭奪は所謂萬機公論に決すると云ふ方法で行はれる。即ち主義政見を天下に訴へて國民多數の同情を得れば廟堂に立ち、不幸にして天下に同情を得ずんば暫らく野に下つて他日風雲の來るのを待つ。何も其間に血を流すの必要もなければ又權力を維持せんが爲めに敵を死地に陷れると云ふ必要もない。斯く政權爭奪が公明正大に 正々堂々 と行はれ る所に立憲政治の特色はある。

立憲政治の理想は選擧と云ふ手續によつて正々堂々と政權を爭ふと云ふ所にある。けれども此理想の完全に行はるゝには人民がしつかりしてゐなければ駄目だ。政權を爭はんとして主義政見を以て訴へ來るものある時に人民が之が判斷に迷ふやうでは立憲政治は十分に行はるゝを得ない。若し夫れ形は立憲政治の體裁を備へながら、政權を爭ふものゝ操縱する所となるやうでは到底憲政の實は擧らない。支那、墨西哥の國歩艱難して居る所以は即ち玆にある。此等の國に於ては人民がしつかりしてゐないから形は立憲政治でも實際は矢張り暗殺やら追放やら種々忌むべき手段によつて政權爭奪が行はるゝ。墨西哥に於ては去年の五月一時權勢を弄して居つたウエルタは追はれた。ウエルタは一九一三年の二月マデローを殺した。マデローは一九一一年の五月三十餘年間墨西哥を統治し、永く飛ぶ鳥を落すばかりの勢であつた八十餘歲の老チアスをして一族三十餘人を引連れて國外に去らざるを得ざらしめた。墨西哥の大統領で無事に天命を終つたものは殆んどないと云つてよろしい。支那に於ては中華民國となつてから日が淺いけれども、已に宋敎仁の上海に於て暗殺せらるゝあり、又孫、黃の徒か國内に身を容るゝ能はずして外國に亡命し居るではないか。之れ皆人民がしつかりしてゐない爲めに政權爭奪の犧牲となつたものである。

今日、日本人民の發達の程度は、私の見る所では立憲政治を行ふに十分熟して居る。一般の知見の程度は西洋諸國に於て立憲政治を創設した時代と比較して決して劣らざるのみならず、否、今日の歐米の一般人民と比較しても決して甚しき遜色は無いと思ふ。故に我國に於ては憲政を立派に行つて行く丈けの素養は已に人民に備はつて居ると私は信ずる。只不幸にして我國の人民は政治的の訓練を經てゐない。從つて憲政の運用が從來甚だ妙でなかつた。之が私の常に甚だ遺憾とする所であつた。今日までの處、支那、墨西哥のやうな甚しい事は無いけれども選擧はどうも公明正大に行はれなかつた。殊に私の遺憾とする所は日本國民の精華として古來誇つて居つた武士道の精神の如きも選擧には全く行はれなかつた事である。昔の政權爭奪は其方法が已に公明正大なものではない。それでも昔は一種の武士道と云ふものが彼等の競爭上の手段を規律して居つたのである。之は戰記物語や稗史小說などを見ても分る。今日のハイカラな言葉で云へば、所謂戰數が隨分戰規の犧牲となつて居つた例が多い。戰の必要から云へば敵を一人でも多く殺して勝ちさへすればよい

けれども、目的を達しさへすればよいと云ふ事は戦規が之を許さなかつた。戦規は即ち武士道である。熊谷次郎直實が遙かに波を漕ぎ分けて行く若武者を見た時に、後から追驅けて行つて一刀にペサリと截ると云ふ事はしなかつた。態々オーイ〳〵と呼び止めて、我こそは關東一の旗頭の何某と云ふものであると、長々と名乘を揚げて、敵の名乘りを聞いて立派な挨拶を交換してから刀を交へんとした。若し夫れ上杉謙信が甲斐の國が鹽に困つて居る話を聞いて國産の食鹽を武田勢に送つたと云ふが如き美談は我武士道の最も誇とする所のものである。斯くの如き儀禮は親の仇を取る場合でさへも守られて居つた。曾我兄弟が富士の卷狩に恨重なる親の仇に廻り合ひ、祐經の寢所に忍び入り、其スヤ〳〵と眠つて居るのを見て只一刀に截り下ろさんと五郎時致が刀の柄に手をかけた時、兄の十郎祐成は、待て暫しと押止め、敵ながらも寢首を掻くは武士の禮に背くと云うて一旦枕を蹴つて祐經の眼を覺まし、曲者と枕刀に手を掛けたのを見て初めて兄弟は刄を下ろした。祐經なればこそ兄弟の手に掛つたが、若し之が芝居で見る荒木又右衛門とか宮本武藏のやうな豪傑であつたら請度返討に會つたに違ひない。不倶戴天の親の仇に向つてすら武士道は守られて居つた。然るに今日は如何。演説會場で妨害をしたり、敵方の候補者を罵詈讒謗したり、人の小股を潜るやうな汚ない小策を弄するのみならず、甚しきは演説會場や人力車などを買占めて、下らない所で敵を困めるなど云ふ見苦しき方法をすら執るものがある、武士道も糞もあつたものでない。只目的を達すればよいと云ふ成金の金儲けをするやうな手段を取る。甚しきに至つては多少の利益を提供して買收するなどゝ云ふ汚ない手段をすら取ることを辭せない。斯くの如きは政治的訓練の未だ行き屆かない結果ではあるが、併し競爭するものにも罪があり、又人民にも罪があると思ふ。

併し大體から觀察すると云ふと、我國の選擧界は憲政創設の當時からずつと見渡すと餘程進歩して居ると思ふ。殊に今度の選擧では從來に比して更に一段の進境を認める。元來選擧が公明正大に行はれぬと云ふ事については實は制度の罪もあつた。選擧權が餘りに制限されて居ることや、選擧取締を勵行しなかつたと云ふやうな事が確かに腐敗の一源因であつた。英吉利の如き政治的に天才のある國民はわるい制度も之を善用するが、倚らしむべし知らしむべからずの流義で永く治められた我々日本人にはさう行かぬ。十九世紀の初め英吉利では投票の賣買が盛んに行はれた。中には新聞に堂々と廣告して、本選擧區は何千圓で賣ると云ふやうな事を公示したものだ。併し此廣告に應じて議員たらんとしたものは常に年若くして未だ世間に知られない貴族の俊秀なる子弟に多くして、成金や何ぞは決して出なかつた。十九世紀初頭の多くの大政治家は斯くして出たものである。賣つて得た金も亦二三有志家の懷には歸せないで、必らず其土地の公共事業に費されたと云ふ事である。流石のグラツドストーンですら、制度の不都合な事は飽くまで之を認めたけれども、生中之を改正すれば青年秀才に門戸を閉ぢて英吉利政界の風紀を停滯せしむるだらうと考へて初め選擧法の改正には反對であつたと云ふ位

である。英國は法律制度が無くとも、縦しんばわるい法律制度があつても常に之を善用する國民である。此點に於ては我々は到底英人に及ばない。故に我々は速かに制度の改正を希望するのであるが、併し制度の改正が無い迄も各種の方面から國民の政治的啓發を促して段々立派な選擧が行はれるやうにする事は出來る。又識者は斯くせねばならぬのである。細かく觀れば私は此點に無論遺憾な所が多いけれども大體に於て我國の選擧界は順當な進歩をして居ると思ふ。現に今度の選擧でも例へば金澤市に於ける中橋、横山二氏の競爭の如く、兎も角も正々堂々の陣を張つて火花を散らして爭ふのは實に一代の壯觀と云はざるを得ない。此種の例は何外にも澤山あらう。併し全體としてはまだ無論十分に進歩したとはいへない。今度は取締が嚴重な爲めでもあつたらうが、買收などで動くものが非常に少くなつたと云ふ事は認めねばならぬ。之れは確かに一つの進歩である。けれども今日の選擧民の大多數は買收には動かないとしても、まだ進んで獨立の見識を以て候補者を品隲して、誰を自分の代表者とするかを決定すると云ふ積極的態度に出づるものは少ない。從つて頼まるれば選擧してやると云ふやうな考で、投票を以て國家への義務とか、自己の權利の行使とか云ふ風に考へて居るものは少ない。其結果として起るものが三つある。一つは田舍などで百姓なぞが投票を自分の事と考へない結果、地主や資本家などの云ふ通りになると云ふ事である。今日現に何村の某地主を動かせば其村で五十票纏るとか三十票纏るとか云ふのは畢竟選擧民各自に獨立の見識なきを示すものである。第二には之も投票を自分のものと考へない結果、選擧民の投票を促す爲めに澤山の運動員と云ふものが必要になる。選擧に多數の運動員を入れようとするとは決して立憲政治の謗ではない。運動員に促されて始めて投票をするやうでは矢張り候補者が直接に人民に訴へると云ふ關係を紛更する譯になる。第三には之も頼まるればやると云ふ考からして、どうしても戸別訪問と云ふ必要が起つて來る。堂々たる一國の選良が戸別に選擧人の宅を繰り返し〳〵廻ると云ふ程不見識な事はない。けれども言論丈けでは選擧民は頼まれたやうな氣がせぬので、どうでも戸別に訪問して頼まなければ自分に投票して呉れないのである。此等の理由からして各候補者が其主義、其政見、其人格を以て單刀直入天下に政權を爭ふと云ふ事は理想通りに行かない。尤も今度の選擧では田舍の百姓などに「今度は日當も貰ふ事も出來ず、御馳走になる事も出來ず、又どうせ甘い酒も飲まされないんだから、いつそ我々の好きな人に投票しようぢやないか」と云ふ考が餘程起つて居る。即ち選擧民が獨立の判斷を以て投票すると云ふ好ましき風潮は大いに勃興して居るけれども、併し此思想が大いに勢力を得るには何數回の經驗を重ぬる必要があらう。今日の所では運動員とか、地方の有志家などの働く餘地は大いにあるやうである。從つて選擧の勝敗も亦單純な主義政見の爭ばかりでは決せられないだらうと思ふ。此點は多年地方に地盤を開拓した政友會の強味たるに相違ない。

政友會は地方に牢固なる地盤を有するからして、他の黨派に比して選

擧上至大の便宜を有するといふ事は固より言ふを俟たない。けれども今度の選擧に於ては國民の間に隨分從來の政黨にけ厭きて居るといふやうな氣分も見える。そこで我は政友會也、我は同志會也といふことだけでは通らない所も少からずあるやうだ。政黨が眞に主義政見で集散し且つ其主義政見に眞に忠實であるといふと、選擧は大體に於て政黨本位で爭はるゝものである。然るに日本の現在の政黨の如く碌な主義政見を有たず、其政黨の所屬代議士の如きも唯議會に於ける一票たる外何等の値打無きやうな人物が多く、而も政黨は我黨の政策などと言つて、言ふこと計りは立派でも一向之を實行せぬといふやうでは心ある國民は、政黨を見ずして候補者各個の人物を見るであらう。いかに巧妙な計算を立てゝ斯々の事業に投資すればこれ丈の利益があると說き立てても、說く者に十分の信用が無ければ心ある者はウツカリ此輩の言に乘らずして多少の貯金は利子が少くても郵便局に預ける。そこで政見よりも人物といふ事になる。一體人物本位で選擧を爭ふといふことは立憲政治に於ては實は寧ろ恥辱だ。けれども我國の今日では人物本位で通用するのも致方がないのであらう。而して今日人物本位で爭つて居る者に現內閣派と見るべき者が頗る多いやうだ。此點が亦政府黨の一つの强味であらう。斯く考へて見るといふと選擧の結果は政府黨、非政府黨、概ね互角の形勢ではあるまいかと想像する。

總選擧の結果如何に依つては政府の引渡といふ問題が起る。今日の政府黨が絕對多數を占むれば無論問題は起らない。然れども之は餘程六ケ敷い。若し政府黨が絕對多數を占めなければ玆に政府を引渡すか引渡さぬかといふ問題が起る。此問題に就いても我々の希望する所は立憲的に正々堂々と遣つて貰ひ度いのである。從來は頗る我々の希望に反して居つた。明治二十年代の所謂超然內閣時代が非立憲であることは申すまでもない。三十年代の半頃から初つた桂西園寺の交代も實は妥協の結果で、頗る公明正大を缺くものであつた。先年西園寺侯が世間の稱ふる如くんば桂公の奸策に載せられて政界から引退しなければならない破目に陷つたのは、あれは昔ならば敵將の毒殺といふところを、廿世紀式に行つたまでの事である。斯くの如き舊式の陰險なる手段は一切今の世に行はれざらん事を希望する。元老、官僚などの間には斯かる陰險なる手段を案出して自ら多才多策を誇る者あるのは甚だ遺憾とする所である。私は常に高遠なる理想を高調する大隈內閣に向つて、若しも總選擧の結果政友會が絕對多數を占めたならば潔く辭職して、原政友會總裁を後繼者に推薦するの雅量に出でられんことを希望する。而して原氏に向つては一部の政論界に危まれてをるが如く、元老、官僚と欵を通ずる事なく、若し樞密院、貴族院邊で純然たる政友會內閣に異議を挾むものあるならば之と堂々と戰ふの決心を定められんことを希望して已まない。若し又政友會が單獨で絕對多數を占め得ざるも、國民黨と相合して過半數を超ゆるといふ事であつたならば、現內閣は德義上新議會に向つて取敢えず先度の議會の解散の原因たる增師案を提出して政府の信任を問ふべきである。幸に可決せらるれば可、不幸にして否決せらるゝならば矢張り

辭職して大政を原氏に讓るべきである。原氏と犬養氏とが聯立內閣を作るや或は政友會のみの內閣を作るやは兩黨首領の相談に任せてよい。何れの場合にしても政府黨が絕對多數を占めざる場合に再び解散を繰返して天下を騷がすのは立憲的の方法では無い。立憲政治の精神としては政權爭奪の爲めに力を極めて爭ふのはよいが、然し飽く迄政權に戀々たるといふことは宜敷くない。辭すべき時に辭さないで、惡辣な手段を以て政權に執着せんとするの時に必ず弊害が起る。予は此再解散說を信ずる者ではないけれど、坊間此噂を傳ふるものあるが故に一言する。

尙終に一つ考ふべき點は、假りに現內閣が辭職すべき場合になつたとして、若し日支交涉の結果、政府の更迭を著しく不利益ならしむるが如き事あらば、反對黨は暫く現政府に其職に止つて其結末を着けしむるだけの雅量を示して貰ひたい事である。

△總選擧の後

松井柏軒

(一)

今回の總選擧に於て、特に著るしき印象を與へしは、朝野兩派の態度に大なる相違あると也。

日支交涉を首め、中外の政務多忙を極むる間を繰合せて、大隈首相は大阪、金澤、名古屋の三市に廣長舌を揮ひ、汽車よりは又到處キレドー・スピーチを試みて努力大に勵み、加藤外相亦雄辯を皷して敵黨の首領原氏を痛擊し、尾崎法相、武富遞相、河野農相の如き黨人出身者は申すに及ばず、若槻藏相は席溫かなるに遑なきまで各處に遊說し、謹愨重厚なる一木文相すら政府の方針を闡明するに努めたるに、政友會にては、僅かに高橋男、山本達雄、元田肇、大岡育造の諸氏が多少遊說せるのみ、原總裁に至ては、芝の蝸廬に蟄して殆んど寸步も出でざりしが如きは、餘りに懸隔なるに非ずや。

最も著るしきは、政友會の論旨の甚だしく振はずして、動もすれば多く受太刀なりしこと也。

(二)

原氏は、外交上大に憂慮すべきものありと再度まで言明せしに拘はらず寸毫も其の次第を語らず、又之を匡救すべき所以をも闡らざりしは、加藤外相の痛擊せる所にして、恰かも徒らに時人を惑はすの傾向なきに非ざりしが如し、殊に對支交涉の酣なる時、世上或は大隈內閣が政略として對支案件を利用したりとの說ありといへるが如きは、殆んど識者の顰蹙を禁ぜざりし所とす。

加藤外相が名古屋市の演說に於て、公然原氏を痛擊したりしに拘らず原氏が一矢だも之に酬ひざりしは、少くも幹間の感情に大影響ありしや疑ふ可らず。

高橋男の積極方針、募債主義は、到底若槻藏相の語つて詳かなりし財

政演說に匹敵する能はざりき、男も素より財界の老大家よりと雖も、若槻氏が吏僚として多年財政の局に當り、其の實際に精通するに比すべくもあらず、山本氏、高橋男の如く粗大ならずして、穩健の見頗ぶる識者に重んぜらるゝと雖も、財政通としては寧ろ數籌を若槻氏に輸せざるを得ず、若槻氏、現在の當局として、其の精通せる財政を說明するに對して、高橋男山本氏の所說の著るしく貧弱に感ぜらるゝ、詢に已むを得ざるのみ乃ち財政演說に於て、政友會は朝黨に比して多くの遜色あり。

外交の一事に至ては、前議會に於ける政友會の質問が、悉く加藤外相に擊退せられて、爲めに加藤男の名聲を揚げしめたるに徵して明白也、況んや加藤男の名古屋に於ける原氏痛擊演說ありしをや。

政友會には、山本內閣、海軍問題といふ二大弱點あり、而して大隈內閣の外交と財政とに對しても、亦斯の如く相敵せざりしとせば、總選擧に於ける戰鬪の不利なりしこと何ぞ多言を要せんや。

(三)

有體にいへば、今日の輿論は、尙ほ政友會の失敗を恕するに至らざる也、而して大隈內閣の對獨開戰を是認し、殊に對支交涉の當然なるを認めて、極力之を支持せんと欲するのみならず、開戰の結果として、第一廢減稅の計畫を放棄したるの已む可らざるを認め、第二納稅期改正、大藏證券發行制限の行はれたるに同情し、第三外債募集の到底行はれざることと行ふ可らざることを承諾し、第四に還債基金五千萬圓を割て其の二千萬圓を鐵道其の他に流用するの機宜を得たるを思ひ、第五に治水費等の特別會計の撤廢を當然と信じて、之に反對する政友會の主張を非とするもの、それ今日輿論の趨向也。

彼の増師問題に至ても、政友會は甚だしく不利益なる地位に在り、此の問題は元老及び貴族院の極力支持する所にして、輿論の多くもまた其の已むを得ざるを承諾し、殊に歐洲大戰以來、世人の感情は進んで増師の必要を主張するに至れり、故に政友會總裁が、之を以て小なる問題なりといひ、政友會と増師問題との關係とを以て白紙なりと做せるは、極めて實際的にして、又極めて智慧ある態度なりき、然るに議會の形勢切迫するや、政友會は俄然態度を一變し。増師問題を提げて政府に肉薄し、竟に自から解散を招けるは何ぞや。

(四)

吾人の見聞する所にして違はずんば、政友會は今回の政戰に於て、始めより情況判斷を謬まりて、竟に敗戰の結果を齎せしもの也。

彼等は以爲らく、元老等皆大隈內閣を嫌へり、隨つて貴族院の同情も亦大隈派に存せず、若しも我黨猛進して之を衝かば、大隈派必らず蹉跌すべく、竟に寺內內閣を出現せしめて、我黨其の支持者たることを得べしと、彼等は斯く信じて、山縣井上の兩老が、深く政友會の横恣を嫌惡せしを察すること能はず、又貴族院の多數が大正以來政變を頻發するの不可なるを認め、殊に大典擧行以前輕々しく政變を促すの非なるを信じて、已むを得ざるに非ずんば大隈內閣を倒すを欲せざる意向あることをも察せず、殊に輿論の大多數が、大隈內閣の海軍廓淸を多とし假令其の

技術實力に多少の不安あるも、歐洲大戰に際し、我國も亦其の一端に參加せし今日、寧ろ忍びても舉國一致外に當るべしとするの大なる事實を認めざりしは、政友會の一大錯誤なりとす。

且つ政友會が政府と戰はんとするや、增師問題を以てせずして、外交問題を以てせんとしたりしは、諸元老其の他の對加藤感情を利用する計策にして、彼の某々團體をも巧みに操縱し得たりしと雖も、議會に於ける外交質問の拙なる、却つて徒らに加藤其の人の名を成すに止まり、世間の反響寧ろ己れに不利なるを觀るや、更に增師問題を以て政府を攻むるの已むを得ざるに至れり、抑も此の問題を以てせば、元老及び貴族院の反感を招くの不利と、黨內に異論を生ずるの危險とあるも、必然に國民黨と提携し得るを以て、衆議院の大多數を制すべく、此の勢ひを以てせば、元老等は議會を解散するよりも、寧ろ內閣の更迭を促がすべく、假令然らざるも、少くも政府を勸めて議會と妥協せしむべしと思惟したるが如し、現に政友會の幹部も、國民黨の多數者も、萬々解散なきを固信し、解散の詔勅の朗讀せらるゝに及びて、茫然自失したりしといふは事實なるべし、政友會の機關新聞が、解散の當日早くも停會の號外を印刷し置きて、既に地方に發送せし所ありしといふも事實なるべし、蓋し彼等の多數は停會を信じ、停會に由て政府との妥協成る乎、然らずんば政府竟に倒るべしとして策戰せし也。解散即ち總選舉は、實際に於て彼等の極めて不利益なりとして、素より豫期せざりし所也。

議會に於ける政友會の策戰の失敗と、豫期せざりし總選舉に對する地位の不利なりしとは斯の如し、唯だ其の絕對多數黨の地位を失へるに拘らず、兎も角も現在に於て比較的最大黨たる地位を保ち得る所以のものは、其の所謂地盤と、選舉に對する駈引の熟練ある賜のみ。

識者は大隈內閣の實力と手腕とに就て、頗ぶる疑惧を禁ぜずと雖も、世間の多數は、總理大臣としては原氏よりも大隈伯を悦ぶべく、外務大臣としては牧野男よりも、加藤男に信賴すべし、遞信大臣としての元田肇氏と武富氏とは假令甲乙なしとするも、大藏大臣としての高橋男と若槻氏と、及び文部大臣としての大岡氏と一木氏とに至つては、寧ろ後者を擇ぶべしと做さん。

同志會は素より堅實にして精力ある政黨に非ず、中正會また然り。然れども未だ政友會の如く多く世上の疾惡を買ふに至らず。

且つ對支交涉の解決せざる間は、元老等假令大隈派を悅ばずと雖も、之を支持して其の事を成さしめざるを得ざるべし、對支問題解決の時は、元老等の大隈派を視る、狡兎死して良狗煮らるゝにも喩ふべし、然れども對支問題の解決にして誤まらずんば、天下の稱讚は或は却つて內閣に集まるも知る可らず、果して然らば元老も世間を憚かつて、容易に大隈派を見離し得ざるべき乎。彼の樞密院の一派獨り大隈派を咒詛するも、其の結果や知るべきのみ。

米價調節策と蠶糸業救濟法とは、識者の一部に熱烈なる反對ありと雖も、當業者の多數は寧ろ之を悅べるを奈何ともす可らず、而して政友會

は從來の主張に於て極力之を攻擊し得ざる地位に在り。

總選擧に次で來るべき臨時議會に於ては、別に政府を倒す程の大問題は起らざるべし、增師問題は、政友會が一年延期を唱へしより旣に半年を經たり、僅かに半年のために之に反對するは、益々不徹底也、若し夫れ國民黨の增師に反對する一年兵役論に至ては、天下の擧て嗤笑する所、素より問題たるに足らざるのみ。

故に今日より豫想す可らざる大問題の突發せざる限り、臨時議會は平安なるべしと判斷して誤りなからん、總選擧の結果に視て、大隈內閣が少くも今秋の大典擧行後まで繼續せらるゝことは、何人も之を疑ふこと能はざるべし。

△在朝黨と在野黨の對戰

石井半山

(一)

今回の政戰は各地到る所盛に戰ふて居る所だが、今日迄の所ではドウやら政府黨の勝利では有あるまいかと思はれる、我輩が三月十五日に計算した所では、政友會が百五十二名、國民黨二十五名、其他無所屬の非政府黨を合せても、百八十名位の者があッた、ソウすると政府黨は同志會、中正會、大隈伯後援會其他を合せて、約二百名となる計算だ、然かしながら此の政友會の百五十二名、國民黨の二十五名は、十分多く見積つた計算で、選擧の結果はドウなるか分らないが、兎てもコンなに多くは當選すまいと思はれる。

政府當事者の一人は、其の豫想を語り、多分三十名內外政府黨の勝利となるで有らふと言て居た、又政友會の一領袖は頗る悲觀して、政友會は百三十名以下に降るで有らふと言て居た、國民黨の如きは多くて二十一名、少ければ十八名位の者で有らふと云ふ說が有る。

天下の勢と云ふ者は可笑しな者で、政府黨の勢力が强大になると、中立議員の多くは政府黨に傾く、實を云ふと同志會の中にも、加藤、大浦諸君に反感を抱き、所謂非幹部派と稱して、幹部に反抗する者も有るのだが、政府黨の勢力の强大なる間は、彼等も矢張り政府黨でやつて居る、之れは大勢の賜だ、其の代り一旦大隈內閣が不人望になつて、倒れかける事になつたら、一時に政府黨が減少して、兎ても之を支へることは出來なくなるかも知れない。

(二)

今回の對戰に於て、大隈伯個人の勢力の偉大なることが明かに現はれた、同志會や中正會に反對する者も、大隈伯には反對しない、犬養君の如きも加藤君や尾崎君を攻擊するけれど、大隈伯に對しては餘り攻擊の鋒を向けない、岡山あたりでは「大隈伯を救ふが爲めに大隈內閣を破壞すべし」と唱へて居る國民黨員も有る、原君も加藤君に對しては、激に攻めて居るが、大隈伯に對しては餘り擊たない、天下の人心は此

老伯が其の『最後の御奉公』をなす所の誠意を諒し、兎に角老伯にやらせて見たいと思ふて居る様だ、加藤君の識見は敬服に價ひする者がある、內閣の中心は確かに加藤君に在るに相違ないが、然かしながら今の內閣から此の老偉人を除く日になれば、其の重味が減ずることは爭はれぬ事實だ、今の日本に於て、此の老偉人の如き廣大なる人望を收めて居る者は無いと言ても宜しからふ、而して若し豫期の如く政府黨の勝利を得たとすれば、其の最大原因は此の老偉人の德望に歸することが正當で有ると思ふ。

（三）

今回の政戰に、原敬君が少しも動かなかつたのは、其の意を得ない、政府に在ても大浦內相が少しも動かなかつた、或は參謀總長の積りで有つたかも知れぬ。加藤外相も名古屋ばりかで、外へは少しも往かなかつたのは、甚だ物足らない、大隈首相も大坂と金澤ばかりでなく、豫ねての計畫通り、全國の大遊說をやらせたかつた。

尾崎、河野、武富の三相及び島田、箕浦の兩總務が、能く戰ふたのは、流石に多年の練習の功と謂ふべきで有るが、若槻藏相の奮闘に至つては眞に敬服の外はない、其の演說も到る所に受けて、彼れの人物は此の遊說の爲めに一段大きくなつた、一木文相も若槻君に次て能く戰ふた一人である、政友會に在ては、高橋是清、元田肇、奧田義人、床次竹次郎、大岡育造の諸領袖が各地に奮闘し、犬養君も寧日なく全國を廻遊した、其の國事に熱心にして、其の勞を厭はざる點は、主義主張の如何に拘らず國民が感謝しなくてはならぬ。

茲に我輩が最も奇異に感じたのは、岡陸相と八代海相が動かざりし事である、全體今度の政戰の重要なる題目は、二個師團增加ではないか、之に對して岡陸相が全然沈默して居ると云ふ法はない、又政友會は三十五議會に於て海軍擴張費をも否決して居る、八代海相は何故に全國に巡遊して、此の擴張の必要を說き、政友會の行動の非を鳴らさないか、彼等が此の重大なる任務を、尾崎、河野、武富、若槻の諸相に一任して、サアベルの蔭に隱くれて居たのは、未だ官僚式の臭味を脫せざる者で、非立憲的と謂はれても仕方のない所だ。

（四）

各派から新人物が候補に立つたのは、我輩の喜ぶ所である、其の當落は暫らく措き、小林丑三郎、大島久滿次、大場茂馬、秦豐助、鳩山一郎、大隈信常、平沼亮三、田村新吉、濱口雄幸、香坂駒太郎、下岡忠治、政尾藤吉、古谷久綱、犬塚勝太郎の諸君が立つたのは、選舉界に新味を添えたワケで、我輩の喜ぶ所で有る。

政友會も奧田君、高橋君、床次君等が肩を入れて來て、大分良くなつて來た、同志會も加藤、若槻兩相が大に身を入れて努力するなら、良い政黨になるかも知れない、それから犬養君の國民黨と尾崎君の中正會が、今後如何に變化して往くやが、國民の最も注意すべき所だ、犬養、尾崎の兩君は、古るい政治家だけれど、依然として政界の一角を領有して、大勢力となつて居る所はエラい者だ。

▲變說者同志の政爭

松山忠二郎

近來政治家の食言問題がチョイ〳〵ある。これは問題に依ては餘り嚴酷に追窮するのは氣の毒であると思ふ。小さい問題ならば看過しなければならぬと思ふ。其理由に二つある。一つは彼等が官僚的政治家であるなれば、餘り世間の問題に對して意見を發表しないからして少々說が變つても濟んで行くが、近來の所謂立憲政治家になれば、さうは行かないのであつて、種々の問題に就いて意見を發表する。中央の問題は固より、地方の問題でも、又財政、外交、學術、宗敎其他いろ〳〵の問題について其の意見を發表する機會が多い。それが官僚政治家であれば變說にならないのでも、此場合に立憲政治家は變說になるを免れない。約り變說は決して褒めたことではないが、此點に於て官僚政治家は有利な地位に立つ間に、立憲政治家は不利益な地位に立つことになる。其等の小さい問題をまで追窮するのは氣の毒といふ感が起る。勿論小さい問題と雖も故意に變說する奴はわるいに違ひないのであるが、いくら立派な政治家でも小さな問題まで悉く得意であるといふ譯には行かないから、昨日善いと思つた事が、今日研究の結果惡いと思つて改める事は無いではないと思ふ。第二には多くの人が内閣を組織する場合には——つまり多數の政治家が寄つて一つの團體を形作る爲めには多少とも自分の意見を捨てゝ、所謂小異を棄てゝ、大きいのに合する必要があるのである。さうでなければ内閣は出來ないのである。十人の閣員が悉く自分の細かい主張まで我を通さうとするなれは、内閣は所謂不統一となつて、直ぐ瓦解の外は無い。小異を捨てゝ大同に合するは之は已むを得ない。そこで立憲政治家に向つて小さい變說を尤むるのは酷だと思ふ。併し大きい問題ではさうは行かない。大きな問題では、妥協苟合の爲めに變說するといふ事は政治家として申譯がない。ところが此相當に大きい問題で、今の立憲政治家に殆ど說を變へてゐない者は無い。例へば今の内閣總理大臣大隈伯爵である。此人は在野の時に財政上に於ては總て現狀維持を唱へて居つたのである。當時減稅問題が盛であつたが、其時に今減稅するに及ばない、國民の力を休養せしむるよりはもつと急な問題がある。即ち正貨問題を根本的に解決する必要があると言つて居つた。之を解決しないで兌換券が萬一不換紙幣となれば日本の破產だと稱して居つた。從つて此問題の解決の爲めには減稅は暫く見合はすがよい。最も新規な歲出計畫は同時に一切見合はすがよい。二個師團增設は勿論の事、海軍も當分擴張しない事、鐵道も新規延長しない事、總べて現狀維持。其間に正貨問題が自然に解決さるゝ。是が國家の爲めに根本的の急務であるといふ意見を發表した事がある。處が内閣に立つに至つて此意見は全部變つて來た。二個師團擴張論者になつた事は現に世間に矢釜しく非難されて居る。鐵道も此前の議會には八千萬圓の臨時支出をして新規敷設延長の計畫を立てたのである。そして實行はまだしないが相當の程度に租稅を

廢すると云ふ事も昨年政綱として發表したのである。現狀維持で增稅もしない代りに減稅もしないと云ふたに拘らず減稅をすると云ふ事になつて居る。勿論此方の變說は何人も反對する者はないだらうと思ふが、何故に現狀維持を排して減稅論を主張するに至つたかと云ふのに、要するに俗界の人心を收攬せんが爲めである。俗界の人氣を集めんが爲めに正貨問題の解決よりは減稅の方を急務と認めたからである。先に、もつと必要とした事を閑却して比較的不必要な事に先に手を付ける事になつたのである。此點から云ふと現狀維持から減稅に變說したのはよくなくて惡いと云はなくてはならぬ。二個師團擴張問題、海軍擴張問題の變說の不可なる事は云ふまでもない。小さい問題について說の變るのは前記の二個の理由によつて餘り追窮はしないが、さう云ふ大きな問題に於て說の變つた事は伯の爲めに遺憾とする。獨り大隈伯ばかりでなく、今の內閣の閣員の多くも矢張り變說をして居るのである。加藤高明男、武富時敏君此兩君共に陸海軍非擴張論者であつた事は皆知るところである。然るに之が增師論者になつて居る。尾崎行雄君が增師問題の不可な事を提げて天下に叫號した事はつい一兩年前であるが、今は先日來の遊說に於て多分地方では增師の必要を說いて居る事だらうと思ふ。大藏大臣若槻君もその通りである。若槻君は桂大藏大臣の次官として減債基金五千萬圓維持を熱心に主張した人である。處が之を三千萬圓に減じた。外にも理由があつて今日の場合之はやむを得ないと思ふけれども、同君の經歷から云へば說が變つて居る。それから殊に若槻君は大藏次官として桂公の積極財政方針を計畫した人である。鐵道も布設されれば、港灣修築もやる。大袈裟な治水計畫を立てる。公債の借換もやる。ところが今は全部此說を抛つて了つて消極論になつたのである。これは變說と云はなくてはならぬ。元來私は今の財政狀態に於て當分消極主義を取る事が最も必要だと思ふ。のみならず積極的財政々策は言ふべくして行ふ事が出來ぬものと信ずる。前大藏大臣の高橋是清男は積極方針を頻りに呼號して居るが、今日の場合澤山の借金をしやうといふても出來ないのである。又借金せずには多くの事業を企てる事が出來ないのである。詰り言ふべくして行ふべからざる事である。のみならず假令出來ても正貨問題の根本的解決がついて、日本の財政經濟が常態に復するまでは積極方針を謹まなくてはならぬものと信ずる。故に若槻君が今の內閣の大藏大臣として消極主義に變つたのは國の爲めに結構だと思ふ。が、氏自身から云へば、說が變つたと云ふ責を免れないのである。若し若槻君が段々に研究した結果今までのは國の爲めに不利益であつた。今度のは利益と悟つたと云へばそれまでゝある。

尤も說の變つたのは大隈內閣の閣員ばかりでなく、政友會の領袖にもなか〳〵これがある。否寧ろ政友會の方が酷い變り方をして居る樣に思ふ。これは今の閣員よりは責任の衙に立つた歷史が多い爲めであるかも知れない。長い間責任の位置にあつたが爲めにボロが多い、今の內閣も永く繼續すればこれに劣らないだけのボロが出るかも知れない。今政友會に比して比較的變說の度の少ないのは、歷史が新しい故かも知れない。

さう云へば必ずしも政友會が最も惡いと云へないかも知れぬが、政友會の責任を重んじない事は甚だしいものである。現に政友會が我黨内閣と稱する山本權兵衞内閣に際して政友會の領袖は陸軍に對して二個師團増設の内約をしたのである。大正三年度の豫算に於ては山本伯の懇請を容れて海軍の大々的擴張をなすが、翌年度即ち四年度からは二個師團増設に賛成すると云ふ内約を與へた事は公然の秘密である。此内約があつたが爲めに政友會は第三十五議會に於て増師問題を武器として政府と爭ふ事に餘程躊躇したのである。原總裁は政友會は増師については白紙だと云ふた。これは表面の事實である。表面では明白に公然増師に對して賛否の意見を決した事がないかも知れない。若しこれが表面通りであつて陸軍に對する内約がなかつたなれば、當時政友會は大隈内閣に向つて突貫するのに増師問題程よい武器はなかつたのである。この武器を提へて徒らに大隈内閣に突貫するなれば、輿論は必ず政友會の説を是とした に違ひない。敏捷なる原敬氏は無論これは知つて居たに違ひはない。而も内部に於て陸軍から弱點を抑へられて居るからこの結構なる武器を利用する事に躊躇したのである。而して外交問題若しくは漠たる政府不信任案の樣なもので闘戰したのである。而もその方ではうまく今の内閣の尻尾を捕へる事が出來なかつたが爲めに、政友會は據所なく増師問題を提へる事になつた。而もこれを提げて内閣に突撃する前には内約の手前、山縣公を初め諸元老を歴訪して政友會の大勢上已むを得ないと云ふ事を陳辯したのみならず、陸軍大臣並に參謀次長までも訪問してそれを陳辯しやうと思つて、拒絶されたのである。増師問題について今の大隈内閣に疑惑者の多い事は無論であるが、政友會も此點に於て同じ事である。只老猾な原敬君は其意見を二年前に世間に發表しなかつただけの事である。公けに發表しないで内々約束しただけの事である。變説と云ふ上に於ては同じ事だと思ふ。今度の總選擧の結果政府黨と政友會とどつちが多數を占めるか分らないが、若し政友會が多數を占めて内閣を組織することになれば、政友會は再び説を變じて今度は増師論者となるだらうと思ふ。昨年の議會に於て増師を絶對に不必要とか不急とか言ひ得ないで、單に一年延期と云つたのは其下準備と見て差支ない。次に政友會は此政治的理想に於ても大いなる變説をして居る。政友會の今日の大をなしたのは云ふまでもなく桂公と妥協してなつたのである。西園寺侯と桂公と二人して大きくしたものであると云ふて差支へない。而して十年提携の後で桂公と手を分つと、今度は憲政擁護と云ふものを唱へ出した。其發起人は犬養君尾崎君であつたかも知れないが、最も有力な肩入れをしたのは政友會であつた。而して其理由とするところは、桂公の樣な藩閥出身の政治家に政治を任すのは我國の憲政を危くするものであると、殆ど過去十年間に於ける妥協若しくは情意投合の歴史を忘却した樣に見える。然るに桂公は辭職をし、山本權兵衞伯と提携の内約が出來るや否や、今度は犬養尾崎兩君に脊負ひ投げを喰はせて、矢張藩閥出身の山本伯と提携したのである。憲政擁護論で以て桂公に喰つて掛かつたところのものを山本伯と實行する樣になつたのである。其經歷の不信義にし

薄なる事は甚だしいものである。更に財政上の意見に就いても政友會は態度か變說して居る。今政友會は地方に於て盛んに積極政策を主張して居る。現内閣の樣な消極的方針では國は發達しない。現に米價が安くなる、生糸が安くなる、諸物價低落して世間は甚だしく不景氣になつたのは大隈内閣の消極政策の罪だと云ふて居る。が、政友會はこれまで積極的方針で終始して居つたかと云ふのに決してさうでない。大いに消極論を主張した時代があるのである。

政友會内に於て最も積極論を鼓吹するところの高橋是淸男も會て非常な消極論者であつた事もあるのである。今此點に就いて概略をお話しすれば、日露戰爭後に於ける第一次西園寺内閣は積極的財產政策を採つたのである。私設鐵道を買上げて國有鐵道となし、地方の短距離の鐵道の外、鐵道は總て國家で經營して民間の布設を許さない事とした。これは最も著しいものであるが、何事も總て積極的に仕事をした。其結果歳入が足りなくなつた。そこで明治四十一年度には增税を企てた事もある。第一次西園寺内閣は增税をしても積極的方針を採る事を辭せなかつたのである。ところで其結果は非常に財政紊亂して此内閣は倒れた。而して桂内閣が之に代つた。第二次西園寺内閣の時には政友會は今度は消極主義であつた。其時の大藏大臣山本達雄君は寧ろ極端なる消極主義を採つたのである。例の、無い袖は振れないと云ふて殆ど總ての新事業を拒絕した。實は政友會はこれより先に在野黨であつた時に民間で種々の事業を約束したのである。鐵道港灣治水等を約束したのである。我々が天下を取れば斯う云ふ有利な事業をお前の方にしてやらうと約束したのである。而して兵黨勢を擴張しやうとしたのである。ところが朝に立つて内閣を組織する事になれば山本大藏大臣は、無い袖は振れないと云ふて一切の新事業を拒絕したのである。山本藏相の意見に從はんか、今までの地方に於ける豫約を如何せん。又地方の約束を實行せんか、山本大藏大臣の無い袖が振れないを如何せんやであつた。そこで今の原總裁、當時の原内務大臣と山本大藏大臣との間に大分甚だしい衝突があり。討論があつたのである。當時世間ではこれは政友會が地方の選擧區に對する言譯けに過ぎないので、原山本兩君の爭論確執は實は表面だけの事であつて八百長であると酷評したものもあつた。兩君の腹の中は何うであつたか知らないが、兎に角山本原の兩君は積極と消極との爭ひをやり、其結果山本大藏大臣の消極論が勝ちを制したのである。而して政友會が地方に對する面目玉を踏み潰す事を顧みないで、一切の新事業を見合す事にしたのである。無論公債は募集しない、借金は一切やめて、普通歳入の許す範圍内の仕事しか爲なかつたのである。否當時の政友會内閣は今の大隈内閣以上の消極政策を採つたのである。然るに今消極方針を唱へる現内閣を攻擊するは、我々より見ると馬鹿々々しいと考へる。それでこの時の主張から云へば、山本大藏大臣は今の政友會の主張よりは大隈内閣の主張に贊成しなくてはならぬ人である。財政策に於ては大隈内閣側の人である。政友會の多數が今の如き積極的主張を持つて居る限りには、假令今度の選擧に多數を制して其結果政友會内閣が出來たにしても

其時の大藏大臣にはなれない人である。若し此人にして說に忠實なれば大隈派となる方が適當だと思ふ。ところが感情の爲めか、行き懸りの爲めか、積極方針を唱へる政友會に籍を置いて、積極論の本會たる高橋男と相携へて地方に遊說して歩いて居る。地方で如何なる事を唱へて居るかは私は知らないが、若し今の政友會と同じて積極論を唱へて居るならば變說である。高橋男は今積極論の本家本元の樣に世間に見られ、自分でもさう思ふて居る樣であるが、此人の歷史から見るとこれも違ふ。高橋男は申すまでもなく日露戰爭中に日本の財務官として倫敦で外債を募集した人である。これは國家存立の爲め必要缺くべからざる軍資金を調達したのであるから、積極とも消極とも云へない。如何なる消極論者でもこれは當然やるべき話である。こいつは今論評する限りでないが、高橋男が歸つて日本銀行總裁となつて以來、日露戰爭及び其後の積極政策の餘弊が出て正貨が著しく外國に流出する事になつた。度々外債を募集して之を補充したけれども、補充するに從つて悉く出て行つて了ふ。日本銀行の責任者としてこの事を目擊して居るところの高橋男はこれではいかぬと云ふて非常に消極論を唱へた事があるのである。世間にはあまり知れて居ないが、松方侯と話し合つて第二次西園寺內閣へ建議した事があるのである。どうしても借金政策はいけない。絕對に非募債主義で財政策を建てねばならぬ事を建議した事がある。其時の建議は丁度私が年來主張して居るのと同じ事であつて、今後布設すべき鐵道の新線路はこれを民間に許して政府がやらない樣にすれば、政府は公債を募集しないでも財政計畫が立つと云ふ議論であつた。其意見をもつて松方侯に話し、元來消極論の松方侯も之に贊成して西園寺內閣に迫つた事がある。松方侯が非募債主義、消極的財政策と云ふ事で西園寺內閣に迫つたのは當時の新聞にも出て居るが、その參謀は實に高橋男であつたんである。多分今の內閣にも其書類が殘つて居る事と思ふ。松方侯の手から西園寺侯の手に渡した覺書やうのものがあるから、必ず今の內閣に殘つて居ることゝ思ふ。大隈內閣はこの事實を知つて居るか居らないか知らないが、若しこの書面を突き付けて高橋男の前に出せば、男は今の積極論を唱ふる事が出來ぬ筈である。其後高橋男は大藏大臣になつたが、大藏大臣になつてから後もその實行した跡から考へて見れば、矢張り消極論者であつて、勿論松方侯の參謀となつて西園寺內閣に建議した樣な理想的な消極政策を遣らなかつたに違ひないが、どちらかと云へば消極政策に傾いて居つた。今更めて云ふまでもなく山本內閣は大いに行政整理を遣つた。諸官省の經費を切り詰るのは勿論、一切の繼續事業を切り詰めた。或は事業繰延べを遣つた。三年間に布設すべき鐵道を五年間に延ばし、五年間に完成すべき事業を七年間に延ばすと云ふ風にした。無論新事業は一切遣らなかつたのである。だから高橋男自身が消極論を遣つた人である。勿論この消極論には取除けがあつて、その一つは高橋男の計畫をした產業基金法である。大正三年度の豫算案に依れば、六十何百萬圓の金を出して產業奬勵基金と云ふものを作る筈であつた。如何なる方法を以て如何なる產業を保護するやと云ふ事は頗る漠然であつて殆ど雲を摑

む樣なものであつたが爲めに、之が發表さるゝや否や世間では大に非難をした。議會では無論の事大部反對論があつた。政友會が多數を占めて居る衆議院に於てもなか〳〵反對があつた。先づ衆議院で大いに削減を加へた。ところが當の責任者たる高橋大藏大臣は必ずしも原案を固執しやうとはしなかつた。衆議院が削減しようと云ふならば、之に同意してもよいと云ふので同意して了つた。そこでこの點に於ける高橋男の積極論も決して熱心でなかつた事は明かである。も一つ山本内閣の積極的計畫と見るべきものがある。それは海軍擴張である。一億六千萬圓の金を投じて海軍大擴張を遣らうと云ふのであつた。行政整理で以て各方面から集めた金、若しくは事業繰延、其他の消極政策で以て絞り出した金、これ等一切のものを投じて海軍擴張をしようと云ふ事であつた。これは内閣も强硬に維持し、政友會の過半數の衆議院でもそのまゝ通して、而してこれが貴族院で大削減を加へられたが爲めに、内閣も辭職する事になつた。さうすれば山本内閣は海軍擴張の外は總て消極政策であつたのである。山本内閣の大藏大臣たる高橋男は海軍擴張に對しては、熱心な積極論者であつたかも知れないが、鐵道、港灣、治水等の事業に至つては矢張りなか〳〵の消極論者であつた。而して其唯一の産業奬勵金なるものも餘り熱心に固執しなかつた。以上の如く高橋男の歴史を考へて見れば表面に於て消極的政策の運動をしたのみならず、表面責任の地位に立つた時も消極政策を實行した人である。それが今大變な積極論者となつて居る樣である。借金をしても生産事業を盛んにしなければならぬと云ふ論者になつて居る。どうかかうか外國で多少の借金の出來る時ですら消極方針を主張し、且つ實行して居つた高橋男が、歐洲未曾有の大戰で外債は到底も出來ない時に外債論を主張し借金論を主張するに至つては頗る奇怪と云はねばならぬ。畢竟大隈内閣が消極政策、非募債主義を主張した爲に高橋男はこれに對して積極政策、借金政策を鼓吹する事になつたのだと思ふ。大隈内閣が今の消極政策に何處まで忠實であるかは私の疑ふところであつて内々危んで居るところどあるが、大隈内閣は平常の主張は第二として内外の狀勢よりしてどうしても消極政策を採るの外はないのである。然るに强いて高橋男を初め政友會一派がこれに反對して積極方針に出ようとするが故に色々六ケしい缺點が出て來るのである。今日實行する事の出來ない事を主張する事になるのである。而してその結果丁度第二次西園寺内閣の時に政友會が各地で色々の事業の豫約をして、扨て政權を握つた曉にこの約束が履行されないで大いに國民の信用を失したと同じ樣な結果になるかも知れない。若し政友會が今度の選擧の結果少數で破れて依然在野黨であるなればこの問題は起らないかも知れないが、若し多數を制して内閣を組織する場合にはこの問題は乾度起つて來ると思ふ。これは畢竟政友會がその主張に忠實でなくて感情、行き懸り、政略等の爲めに主張を二三にする結果である。

右の如く大隈内閣にも變説はなか〳〵あるが、政友會には更に大きい變説が多いのである。これは必らずしも政友會の性質が惡い譯ではなくてその政權を握つた時間が長いが爲めにボロが多いと云ふに止るかも知

れない。而して今の内閣でも今後永く續けば同様の事を遣るのかも知れないが、第三者として今日迄の双方の經過を見れば右の様な次第である。されば政府黨と在野黨との對戰は、即ち食言者同志、變說者同志の政爭に過ぎずして、我々の如き黨派的感情の外に立つ者よりして之を観れば、誰れか烏の雌雄を知らんやと評するの外はない、

△政府黨の勝利と憲政の逆轉

超然樓主人

今の所總選擧の結果がどうなるかまだ分らない。恐らく誰も分らぬだらうと思ふ。或は五分五分と云ひ、中立議員の嚮背によつて決するとか云ふ話だけれども、結果を見なければ分らぬ。此雜誌の出る頃には其れが勿論分るであらうが、今の所は何とも分らない。

私共は今の政府を別にわるいとも思はない。取立てゝ云ふ程のわるい事もしてゐないやうに思ふし、又一般世間も最早や政變が度々あるとには飽きて居る。それで私共は成るべく現在の政府が維持さるゝことを希望する。然し選擧の結果では仕方がない。若し少數ならば辭職の外はない。又多數ならば今の政府で行けるのであるから政變は起らないで無事に濟む譯である。

只私は憲政の發達と云ふ根本の立脚地から考へて見ると、政府黨が勝つと云ふ事は、或はわるい結果を來しはせぬかを恐れるのである。云ふ迄もなく兩三年來の政變の原は增師問題から來て居る。而して今の政府が議會を解散したのは主として增師問題と云ふ所謂政界の暗礁に船を進めたからである。それを今の政府が何故出したかと云へば、出さなければならぬ事情であつたとしか思はれない。何となれば此政府はどうして出來たかと云へば、山本内閣が倒れ、元老等集りいろ〱の說が出た。或は德川公を推すとか、清浦子を出すとかいろ〱やつたが何れも物にならずして、とう〱大隈伯に行つた。詰り元老の作つた政府である。或人は天下の輿望を負うて出來たものだなどと云ふけれども、實は元老の作つたものである事は疑ない。立憲政治の本義から云へば、内閣を組織するものは多數黨であるべき筈であるのに少數黨を基礎として出來たのである。當時天下の人氣が政友會を去つたのは確かであるが、兎に角大隈内閣を作つたのは元老である。元老は官僚軍閥の本家本元である。然らば其元老等が推して出來た所の内閣は、當然增師案を出さなければならぬ使命を帶びて居るものと見なければならぬ。何となれば大隈伯は元來增師反對論者であつた。筆にも口にも反對論を公けにして居つた。それが防務會議の結果必要と云ふことにして增師案を出したけれども、在野の大隈伯なれば增師案などを出すことは決してなかつたと信ずる。增師案をやるか、やるなら指名する位の意味合で、推されたものであらう。夫れ故にどうでもかうでもあの案は出さなければならぬので、出

た結果が解散になつたのである。元來政友會と云ふ奴も碌な奴でないから、政友會だつて政府に立てば出したかも知れぬ。のみならず先度の議會に於ても、初めは外交問題を提げて大隈内閣に肉迫する積りであつたが、それが不成功に終つた爲めに今度は增師一年延期論を唱へ、詰り政府と戰ふ爲めに問題を探したのであつて甚だ頼もしくない奴だから、或は今度は通るかも知れぬ。況んや政府黨が多數であれば勿論通るてあらう。然し、扨、其通つた所でどうなるか、政府黨が多數で、增師案も通れば、政府を維持することが出來れば、大隈内閣も萬歳のやうであるが、私共はさうは旨くは行くまいと思ふ。と云ふのは元來大隈内閣は增師を請合うて出て來たものである。それが出來れば元老共からは用のないものである。けれども若し大隈黨が總選擧の結果羽翼已に成り眞に堅固なる多數黨になつて了へば、元老共が見放しても、糞を喰へと云ひ得るかも知れぬが、それが行かぬと云ふのは、中立派か何かを入れて多數黨となり得たと云ふ事の外に、同志會、中正會、後援會等の異分子が今でも已に内輪喧嘩して居るんだから、之が一つの纏つた鞏固なる大政黨となるのは覺束ない。外からは元老の保護が無くなり、内からはゴタゴタが絶えないとすれば、此内閣の運命も極めて危いもので、結局倒るゝの外はなからうと思ふ。而して其倒るゝや、政府黨の少數あるが爲めであれば、多數なる反對黨を推して退けば之は憲政上立派な倒れ方であるが今想像しでたやうに多數であるのに倒れたとすれば、又恰かも官僚の暗殺に遭ふと云ふ結果になつて、日本の憲政は再び逆轉するの外はあるまいと思ふ。已に多數黨にして倒る、少數黨を推すべきの理由なきが故に、又官僚と政黨の合の子のやうな内閣が出來る。是れ憲政の逆轉にあらずして何ぞやである。故に憲政の本義から云へば寧ろ元老に推された所の今の内閣を支持する政府黨が少數で、多數なる在野黨をして純然たる政黨内閣を作らしむる事が望ましいのであつて、若し今の政府黨が多數になれば、今云つたやうな理由によつて或は憲政の逆轉を來しはせまいかと云ふことを懼れるのである。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

■吉井勇著三歌集■

歌集 片戀

戀の歌三百餘首

「昨日まで」に次ぐ近業集

□片戀 五十八首
□綠酒行 四十九首
□盲藝人 二十五首
□海潮音 四十四首
□多情多恨 五十七首
□眞實眞經 三十五首
□續眞實眞經 三十五首

袖珍美本 定價金六拾錢

歌集 初戀

戀の歌三百餘首

（五月九日發行）

□初戀□海邊の戀□後の戀□醉狂□祇園□南船北馬□わかうど□

袖珍美本 定價金六拾錢

歌集 昨日まで

戀の歌三百餘首

□郊外□昨日まで□逃亡□二藝人□紅燈□谷に來て□夏□秋と冬□

袖珍美本 定價金六拾錢

東京市丸の内三菱廿一號館 籾山書店 振替東京二四一七

■ 藏版時報 無代進呈

（中付一の二）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は掲載謝絶す

（中付一の四）



犬の話

中澤臨川

家畜中の家畜が犬である。家畜にもいろ〱種族があるが、犬ほど人間に親しみ易く、忠實で勤勉でそして柔和な物はない。動物中でも一番人間に近かしいものは犬である。主人に侍づく犬を看よ。彼の濕ひを持つた悲しさうな親み深い瞳、垂れた尾、しなやかな體軀――これほど世に敬虔で從順な相があらうか。それでゐて、彼は輕快である、剛健である、勇敢である。犧牲と戰ひを權化したものが彼である。幼兒に親しみ、少年に狎れ、山野の戰士に從て獵する彼は、飽くまで忍耐強く、怒ることと疲れることを知らない。彼にはその運命を投げ出して捧げてゐる三四の星がある。それは彼の飼主の家族の人達である。彼は是等の星の下では滿足の伴つた絕對の獻身を德としてゐる。世にはとき〱性惡な、犬がある。然し、それは皆な飼主の罪に歸することが出來る。溫良な躾と慈悲の手に育つた犬に獰猛、恐怖などいふ性質の決して附き纏ふものではない。これは私のかなり廣い經驗から斷言することか出來る。人の性の善なる以上に、犬の性は柔和で且つ善良である。要するに、素直に生ひ立つた犬は、獻身と柔和とそして勇敢の德を先天的に具備して

る。彼には運命を甘んじ樂む限りなき叡智がある。

犬の獻身と忠實とに關する哀れなまた健氣な物語は洋の東西を問はず有り餘るほどあつて、世人の耳に熟してゐるから、玆には述べる必要がない。たゞ最近私の聞いた一つだけを書いて見よう。事の起つたのは本年の一月下旬である。常州土浦に一人の醫者があつたが、非常の犬煩惱で、常にその愛犬を自分の居間にまで入れてなづけてゐた。然るに、一日その醫者は病家を見舞に行く道で、誤つて汽車に牽かれ、重傷を負つて近邊の醫家まで擔ぎ込まれたまゝ、間もなく命をとられた。彼の家では上を下への騷動に、飼犬のことなど全く忘れてゐたが、ふと死んだ主人の居間で怪しい悲鳴の聲があがつたのに驚かされ、皆の者が驅けこんで見ると、遺愛の寵犬が自分から舌を嚙み切つて紅い血潮の中に悶絶しつゝあつた。やがて葬儀の日には其家から二つの棺が出たといふ話である。愛犬者にとつては斯樣な話ほど奥床しく、身につまされることはない。

私にも少年の頃から犬と親しむ性癖があつた。私の故鄕は山國の片田舍ではあるが、水とも緣の深い所である。毎日村の學校へ通ふにも、幾つかの丘を越して、かなり大きな河を渡舟で渡つて行くといふやうな淋しい場所であつた。冬は裏の林に兎も飛べば、凍てつた二十三夜待の晩には月影の冴えた丘の上から、手に取るやうに狐の聲を聞くこともできた。私の少年時代は斯樣な土地で過ごされた。で、なつかしい記憶の多い其頃の私の生活と離すことの出來なかつたものは何かと言へば、丘と河とそれから犬であつた。夏は、暮方になると河鹿の鳴きだす谷河の岸に、臀たくりして一心に釣竿を垂れてゐる少年の側には、何時も「かめ」が足だけを水に浸けながら、無言で辛棒強く待つてゐた。

私が愛犬「かめ」を得たのは確か十二の年齡であつた。五六里離れた田舍町の親戚の所へ行つたとき、狗兒で貰つて來たのだ。それから約三年間——私が遠い町の中學校へ遣られるまで——私と「かめ」の生活は、引離して考へることの出來ないほど密接なものであつた。私が毎日學校へ通ふ丘や谷や渡船の中の惡戲の多かつた道中で、「かめ」の姿を逸したことはない。ときどき學校へ行く振をして、惡友と丘や林で一日を遊び廻

つた日には（私にはそれが多かつた）、私の不足勝な辨當は「かめ」の爲めに割愛されるのが常であつた。夏になると私は殆んど泳ぎと釣とで暮した。「かめ」はいつも私に隨いて泳いだ。急流に差し懸ると、彼は狼狽えて能く私にしやがみ附いた。私はこの口傳で屢々彼を苛めたものだ。

私が或時其の畑で胡瓜の初實を摘いで、恐ろしく母に叱られた時は、小供心にも、められて、日が暮れても家に歸られなんだ事があつた。その時も「かめ」は私と一緒にゐた、おそろしい闇の襲ひかゝる荻原の中で少年は擦りつくほど「かめ」に近よつて、下男に捜し當てられるのを待つてゐた。

また或時はこんなことがあつた。ひと夏の事で、私は學校からの歸り路に、恐ろしい雷雨に出逢つた。慌てふためいて、路傍の鎮守の森の大きな杉の樹の下に驅け込むと、間もなくひどい音がして附近に落雷した。暫くしてから私は漸く人心地に歸つて眼が覺めて見ると、私は確かりと「かめ」に抱附いてゐた。私はこの時ほど「かめ」を愛しく思つたことはなかつた。

その後、私が中學校へ這入つて故郷を留守にするやうになつてからも、「かめ」は一年餘り私の家にゐたが、隣村の或る寺の牝犬を知るやうになつてから、その方にばかり入浸つて、とう〳〵寺の飼犬に成つて了つた。私は或る夏休みの歸途に、蔭ながらその寺を訪ふて見たが、遂に「かめ」の姿を見ることが出來なんだ。

かやうな因縁からして、私は犬といふものに愛着と趣味を有つやうになつた。學校を出て、東京で些やかな家を持つやうになつてからも、狹い庭の中でいろ〳〵と苦心して犬を飼ひ上げて見た。この七八年間に私は三十頭からの犬を手に懸けた。一時は同時に五頭から色々の種類のものを飼つて置くほど犬に狂した。これは愛犬家の通有性であらうが、街を通りながら如何なる犬にもおのづと眼をつける。路傍に棄てられた一片の燒芋の皮が氣になる（これは犬を伴れて散歩に出るとき、彼がよくひろつて食べるのを知つてゐるからである）。殊に自分の飼犬を失つたときほど、愛犬家の心を悩ますことはない。故二葉亭の『平凡』といふ小説に、その主人公が失はれた寵犬の行衛を捜す爲めに、幾日も勤務を休んで處構はず街々をうろつき廻り、漸くとある角で似通つた犬の影を垣間見てから、辻で燒鳥の數串を買ひ求めながら、根氣よく幾夜か待つてみたが、漸く見附け出したその犬は似もつかん他の犬であつたといふやうな意味の事の手に取るやうに書いてあつたのを、私は朧氣ながら覺えてゐるが、實際かや

うな場合に於ける愛犬家の心理はリテラリーにその通りである。私にも二三度この經驗がある。

都會の狹苦しい中で上種の犬を狗兒から無事に仕上げるといふことは、素人には仲々容易でない。それかと言つて成年した犬を他から伴れて來たのでは趣味も愛情もない。丁度それは種から草花を育て上げて丹精の結果を待つのと、緣日で鉢植を求めて來て庭に並べて置くのとの差がある。狗兒の時代から自分の小供のやうにして、犬溫熱の禍まで手に懸けて見てやるやうでなければ、眞の愛犬趣味は味はれない。また、同じく育て上げるといつても、唯だ頑健に仕上げただけでは面白くない。狩獵その他の技藝は別として、一種の精神教育を施さねばならぬ。溫良、勇敢、上品などの德を涵養してやることが必要である。前にも言つた通り如何に天性疎野な犬でも、飼はれてゐる家族が慈悲溫良な人ばかりであれば、決して人に咬み付くやうな事はない。取も直さず、飼犬はその家族の品性を現はしてゐるものと謂つてよい。

さて我等は何の爲めに犬を飼ふのか。實用または趣味として之を利用しようとするのが普通である。夜番としての犬は忠實で忍耐强い。獵友としての犬は健捷で勇敢である。羊の守としての犬はやさしく閑かだ。或は雪に埋れた旅人を救つたり、水に溺れた小兒を助けたりするものがある。そのほか警察犬として軍用犬として、いろ〳〵の方面に用ゐられてゐる。最も賤しくブルータルなは鬪犬である。趣味の劣惡といふよりも、寧ろ人間の殘忍性を發揮して之に過ぐるものはない。近者、東京では紳士間に鬪犬が非常に流行するさうであるが、之は實にいま〳〵しい顯象であらうと思ふ。西洋の貴女がするやうに所謂「ペット」として、その姿かたちを愛で、或は路上の伴侶として愛撫するのは高尙な趣味であるが、これも餘り贅澤に流れることは戒むべきである。是等の實利なり趣味なりが畜犬に伴ふことは當然として、之を愛撫するといふからには、今一段深い意義がそれにあることと思ふ。それは即ち「生命の爲めに」犬と親むこと、六ケ敷く言へば Dogo

for the life's sake まで往かなければ、上乘の愛犬家てはなからうと思ふ。兎角人は景色や植物に對すると、些の恐怖心なしにその美を愛でて忘我の郷に入りうるが、進化の路で行はれた遺傳的性癖の爲めでもあらうが、己れに最も近き力を有する獸類に對する時は、其處に無意識に强い反抗心と殘逆性とか伴つて來る。若し我等が我等の血脈を流れてゐると同じき廣い生命の流と融和して之を體得しようとならば、それは我等に最も近い生き物の心を讀むことから始めねばならぬ。蓄犬家が彼の愛する犬と無心に相親しむでゐる時、そのピットの濕ひのある溫かい眼の中に讀む眞理は、宇宙生命の洋々として自他を絕した一體たることの自覺である。人我を離れて大神我卽ち大獸我に沒入する喜悅である。無邪氣な小兒と犬とが互に親み易いのは、かやうにして相互に共通した生命を讀み合ふからである。我等が深夜おそく家に歸つて門に待つ愛犬の頭を撫するとき閑かな南向きの日和にうづくまつて熟々彼の眼の奧に視入るとき、獵する野山を二人で伴れ立つとき、我等は彼と我との生命の平等で共通なことを泌み／＼感ずる機會がないであらうか。ツルゲーネフの『散文詩』の中にある次の一條は、最も能く這般の妙機を捉へたものである。

犬

部屋の中に我等二人、わが犬と私と……戸の外には恐ろしい嵐が吠えてゐる。

犬は私の前に座つて、そして正面に私を視つめてゐた。

で、私も亦彼の顏を視つめた。

彼は何か私に話しかけたい樣子だ。が、彼は啞だ彼は言葉を持たない。彼は彼自身を理解しない――が、私は彼を理解する。

私には斯ういふことが能く解かる。この刹那、彼と私とに同じ感情が活きてゐる。我等の間には差別がない。我等は同じだ。我等の各々には同一の振える火花が燃えて輝いてゐる。

死は一掃する、そが冷たく廣い翼の波もて…………

かくて終焉だ！。

その時誰が我等の間に燃えた火花の何たるかを判じうるであらうか。

否な！。今互に相對する我等は動物と人間とではない……

それは平等の眼だ、互に打込んだ我等の眼は。

かくて、斯の獣物と人間との各々に、同じ生命が恐怖もて互に寄り付く。

餘り抽象に傾いた詮議立てはこれ位にして、他の話に移らう。犬には二百餘の種類があると聞いてゐるが、玆には最も普通な物で、私の直接または間接に知つてゐるものだけに就て其性質、特徴などを記載してみよう。外國殊に英米では幾つかのケンネル、クラブが出來てゐて、斯道の熱心家の手に依り、最近四五十年間に、非常に犬種の改良が行はれた。で、ブルドックなりセッターなりに就て見ても、その進歩の跡は實に著しいものがある。例へば一八〇〇年頃、即ち今からざつと百年前に生存したといふブルドックの畫を見ると、今日の物とは全く異種と思はれるほどの相違がある。それから、今日ではそれ〳〵のケンネル、クラブに於て、各種の犬に就き其形態、大小などに關する詳細のスタンダードが取極められてゐるほどである。

純粹の日本犬は今日では餘り多く存在しない。土佐犬はマスティッフと日本犬との雜種であるといふ説が正しからう。秋田犬でも至純の物ではない。たゞ山形縣の山村の一部に僅かに昔の面影を止めてゐて、その土地では他村の犬がまぎれ込んだのを見付けると必ず撲殺して混種を防いでゐるといふ話である。この事を私は商船學校の教授をして居らるゝ小見忠雄君から聞いた。私も同君のお世話で、二度まで其地方産の犬を取寄せて見た。一匹は幹驅の至て逞ましい尤物であつたが、逹いたその晩に門を破つて逃亡して了つた。その後一度も姿を見せない。或は山形の山奥まで一目散に歸つたのであらうといふ説をする者がある。二度目のは生後五ヶ月ばかりの幼狗であつたが、これも二ヶ月ほど飼つてゐるうちに犬瘟熱で失くした。總じて日本犬は朴架で無表情で野蠻人の面影がある。それでゐて一種の悲相を藏してゐる所に、敗殘者を偲ばせ、何となくアイヌに似かよつてゐる。彼等をして山野に育たしめよ。都會のまん中に彼等をつなぐことは少なからぬ殘酷である。セント、バーナードは古い犬種の一つで、その種屬中最も偉大な體格を有してゐる。普通に

小馬またはライオンほどの大さがあつて、體量廿五貫を越えるものが珍らしくない。性質は應揚で、至て從順で、婦女小兒の好き伴侶であるが、それでゐて仲々敏感で、殊に自分の尊嚴を汚されることを好まない。彼等がその故國瑞西のアルプス山中で旅人を救ふ話は有名である。彼等は氣付藥の這入つた小さな桶を首に懸けて、雪に埋れた旅人の行衛を搜し廻るやうに馴らされてゐる。今もベルネの博物館にその骨を藏してゐる「バリー」號は四十人以上からの人命を助けたと謂はれてゐる。彼は十五歳で死んだが、或時夜道に迷つた旅人を救はうとして、却て狼と誤られて銃殺されたのであるさうな。セントバーナードは先天的に他の生命を救助する本能を有してゐて、水に落ちた小犬を救ひ出したりする例は珍らしくない。之と似てゐるのは、ニューファウンドランドである。大さも稍やセント、バーナードに次ぎ、威嚴のある風采で、至て水を好む所から、能く水に溺れた小兒を救ふことを特徴としてゐる。で、凡そこの犬ほど英國で畫に描かれたり、詩に歌はれたりして持て囃されたものはない。古くはバーンスの詩に、この犬を讃美して『犬の中の貴族』だと稱してゐる。またバイロンが彼の愛してゐたニューファウンドランドの死を哭した詩は、あの邦では名高いもので、その中に次のやうな句が讀まれてゐる。

Near This spot
are deposited the remeins of one
Who possessed Beauty without Vanity,
Strength without Insolence,
Courage without Ferocity,
And all the Virtues of Man without his Vices.

ブルドックを獰猛な鬪犬とばかり思ひ做してゐる見方は誤つてゐる。その醜い滑稽な顏の中に彼は無限の柔しさと智慧とを藏してゐる。メーテルリンクが『小犬の死に就いて』の中で、『ペリアはソクラテスやベルレーヌのやうな大きな、脹れた、力強い額を持つてゐた。それからその小さな黑い鼻の下に、對になつて垂れ下つた大きな顎を有してゐて、それが彼の顏を重苦しく、頑なで、愁はしげな、三角がたした脅迫のやう

に見せてゐる。彼は美しい自然の怪物の意味で美しかつた。それからまた、此の尊ぶべき醜い面相を僅かに撫でてやつた場合に、何といふ注意深い從順の、汚すべからざる無邪氣の、限りなき感謝と全き無我の笑であらう。何處からこの笑が湧き出るのであらう。かの無心な溶けるやうな眼元からか。人間の言葉を攫へやうとして立てた耳からか。乃至は理解し且つ愛するために皺を延ばしたその額からか。彼が神と崇める人の掌または一瞥を再び惠まるる幸福に、彼の小軀に充ちた親愛の喜びを證めすべく曲げたその尾の切先からか」と言つてゐるのは、能くこの犬の特徴と美質とを說明してゐる。殊にブルドックは小兒にやさしい。あれだけ勇猛な犬でありながら小兒の伴侶としては絕對に安全である。西洋に行はれてゐるこの犬の話に、さま〴〵な武勇を談つてゐるものの中で、斷食して主人に殉した麗しい物語をも傳へてゐる。これをみても、ブルが如何に叡智に富んだ犬であるといふことがわかる。序でに言ふが、犬は飢餓の世界に住む動物である。犬ほど限りない餓鬼はない。彼等の恐怖は彼等の飢餓から來てゐる。然るにその犬が斷食までする殉忠心は、よく〳〵至純の犧牲と言はなければならない。

コリーほど多能な犬はなからう。彼は銳敏な鼻を有してゐてポインターやセッターのやうに立派な獵犬になりうる。またレトリーバーやスパニエルの任務にも馴らされることが能きる。然し、彼の天性の務めは羊番にある。コリーは牧童と共に、靑草の上、水の邊り睡むたげな羊と詩の天地を形造るところに最も適した彼の使命を有してゐる。彼のふさ〳〵した、輝く絹のやうな長毛を被つて逍遙する彼の姿は、正に正裝した騎士である。その威嚴を持つた、底深い、やさしい眼には、また言ふに言はれない美と親しみがある。彼が田園詩人のバーンスを喜ばせたのは無理がない。

スパニールとテリヤには、いろ〳〵の種類があつて、最も廣く行はれてゐる犬種である。或は獵犬として或は番犬として、または愛玩用として、何れもふさはしい。殊に家庭に於ける小兒の伴侶としては、スコ

ツチッシユ、テリヤなどが最も適してゐることは日本獨特の「ちん」はスパニールの一種であらう。倫敦あたりの貴婦人の虚榮心を滿足さしてゐる彼のプードルは、不自然なモンスターである。

優秀な獵友は、何と言つてもポインターとセッターである。しかのみならず彼等はその親み深い性質に於て、溫順忠良な點に於て、犬の中の犬家畜の中の家畜と稱するも決して溢賞ではない。彼等はその表情の點に於て千姿萬態の妙を盡し、而もそれが至て自然であるので、何時でも決して其主人を厭きさせない。セッターには、エングリッシュ――アイリッシュ――ゴルドルの三種あるが、エングリッシュ、セッターが一番に推されてゐる。何が之にまさる優雅の姿であらう。あの艷々した澤山の柔毛、しなやかな體軀、濕れて輝く眼、應揚な口元、威のある廣い額、深く柔かく垂れた耳、重い力のある尾――これほどチャーミングな姿勢が他にあらうか。これには實にラベラック氏が四十五年の獻身的努力に負ふ所が多い。彼はあらゆる方法を盡してエングリッシュ、セッターの改良に粉骨し、漸く今日の優良種を作り成したのである。その後ステッドマン氏が出て更に之に改良を加へ、所謂『クラシカル、ヘッド』として知られた斯種一流の尊貴な頭骨を作り上げることが出來た。今日、エングリッシュ、セッターの優劣の判斷に就て二種の異見が行はれてゐる。その一は老獵人の主張に拘はるもので、たゞ體軀と四肢との發達と强健とを標準としようとするもの（宮内省御獵犬舍主任蒔口幹知氏はその一人である）、他の一は犬の姿態と被毛との如何に重きを措かうとするものである。前者は實用に傾きすぎた議論で、後者は外貌にのみこだはつた議論である。この二つの特質は決して矛盾するものでないから、一頭の犬に於て兩者を併せ具へしむることは決して難事でない。現に日本でも求めて其のやうな完全に近い犬を擧げることが出來る。

ディーヤフアウンドとボルゾイとグレーフアウンドとはその大さに於て姿勢に於て、能く似てゐる。洵に犬屬中の王皇貴族を以て目すべきものは彼等である。グレーフアウンドは餘りに柔しく弱々しい。その些しく下種のものは貧弱の譏を免れない。ディーアフアウンドはその强健の點に於て、性質の推しなべて忠良な點に於てボルゾイに優るといふ人もあるが、然し何といつても是等の種屬中ではボルゾイが第一位に位してゐる。ボルゾイには時々氣質の惡いもののあるのは事實である。私も現にそれを經驗してゐる。然し一般には、家庭の者に對しても、路傍の人に對しても、決して害を及ぼすやうなことはない。寧ろ人なつこひ、そして神經過敏な性質を有してゐると言つてよい。然り、

餘りに神經過敏である爲めに、意地の惡い者の手に懸つて育つとき、純良でない性質を養成されるのである。

さて、ボルゾイは元來は露西亜の產で、その邦では狼獵りに使用されてゐる。身の丈凡そ三十吋、體軀の殆んど全部が白色の長毛を被つてゐる。細長の顏、小さく後に反つた耳、ふさ〳〵とした毛を持つて地に達するほどの太い尾、殊に「ちん」も羨むほどの艶のある柔かい被毛――を其特色としてゐる。彼が徐々として威嚴のある歩をはこぶ時は、必ず路傍の人から驚きの眼を牽く。ボルゾィが英國の社會に現はれたのは今から凡そ三十五年前である。

露西亜皇帝が三頭の立派な優物をアレキサンドラ女皇に送つたことなどが由緒となつて、その後この犬が英米の上流社會、殊に貴女間に盛んに飼はれるやうになつた。わが邦へは前の米國大使が伴れて來たのが嚆矢であらう。今日では東京中に五六頭はゐることと思ふ。私の經驗に由れば、我國の氣候風土は割合にこの犬種に適してゐるやうである。

下らない長話をつゞけた。此處で話頭を變へよう。あなたが一頭の狗兒を求めたとする。それをあなたが一匹前の犬に育て上げるまでには並大抵の苦勞ではない。然し、之に伴ふあなたの樂みはその苦勞を償つて餘りがある。前後を通じて何時もあなたが注意せなければならない第一要件は、常に清新な食物と水と、清潔で日當りの好い犬舍を與へて遣ることである。食物は適度で且つ質素なことを旨とする。肉などの生物は殊に禁ずべきで、必ず一度は火を通ほしてやる必要がある。その質素といふことには經濟の關係もあるが、私の經驗では、東京市中でかなりに大きな犬でも一ヶ月四圓あれば充分に飼育されると思ふ。畜犬は決して贅澤の娛樂ではない。それから、狗兒には初めのうちは一日五六度に分けて食物を與へ、次第にその度數を減らして行つて生後六ヶ月以上の物になると、朝夕二度づゝにしてやるがよい。寐床の藁は常に日光に曝らすやうにし、一週間に一度ぐらゐづゝ犬舍を掃除して、新しい藁を代へて遣るが可い。狩獵を仕込むには

生後六七ヶ月からを好時期とする。

犬にはいろ〳〵の病氣があるが、幼狗に最も注意すべきは胃腸にわく寄生蟲と犬瘟熱(ディステッパー)とである。寄生蟲を除くには犬の大さに應じた適度の分量の下劑を凡そ一ヶ月に一度以上づゝ飲ませるのが必要である。犬瘟熱を豫防するには狗兒(こいぬ)を雨に當てないことである。然しこの病氣は何(ど)んな犬も必ず一度は通過せなければならないと言はれてゐる程、普遍で特有の病氣であるから罹病後の注意をも怠つてはならぬ。この病氣に罹ると、犬は口熱を起して、呼吸に多少の臭氣を帶び、眼やにを出すから、直(す)ぐ發見することが出來る。かやうな場合には、時を移さず獸醫の診察を乞ひ、また他の飼犬を絶對に隔離して傳染を防ぐ必要がある。犬の幼くして生命を落す原因の八九分は犬瘟熱の爲めである。次に最も普通の病氣は疥癬(マンヂ)と稱する皮膚病で、被毛を剝脫する恐れがある。凡そ是等のものは皆な獸醫の助けを藉らねばない。犬の健康を診斷するに最も睹易き方法は、毎日その糞便を檢することと、尾及び眼、鼻の有樣を注意することである。糞便の黑色を帶びて堅いもの、馳走する時に尾端が彈力を有して上向(うわむ)いてゐるもの、鼻の濕潤してゐるもの、眼やにを出さないものは、健康の兆である。之と反對のものは病氣の兆である。猶ほ犬の飼育法に就ては、いろ〳〵の書物に詳しく載つてゐるが、私は最も信頼すべき我國唯一の著書として、溝口幹知氏の『獵犬の飼育と訓練』を讀者におすゝめしたい。

それだけではあなたの役目はまだ濟まない。あなたはあなたの愛犬を狗兒(こいぬ)の時から、能ふだけ愛撫し且つ庇護して遣らねばならない。眇たる天地無所住の一動物にとつては、主人たるあなたは唯一の神である。人間は生れ落ちて物心附く頃から、言葉や知識やいろいろの方法に由て、いかに外界に適應すべきかの術を、自ら習はずして知ることが出來るが、獸類(けだもの)の悲しさは一々の事物を危險な恐ろしい經驗にかけて、自ら踏み試みねばならぬ。殊に都會に飼はるる犬のやうに複雜な外界——人間社會をも含んだ——を經驗の敵とする

物にとつては、その處世術は傷ましくも苦しいものでなければならぬ。況んや彼は先天的に「飢餓」といふ恐ろしい罪を荷つて生れた。かやうな哀れむべき孤兒の神たり運命の星たるあなたが、何で彼に對して無關心で無慈悲でありえよう。あなたが一匹の狗兒をあなたのペットとした其日からあなたは無限の娯樂を得る一方にはまた、寄るべなき生物――廣くは生命に對する――あなたの負擔と責任が新たに加はつたことを思はなければならない。その飼犬に殘忍でありうるやうな人間は、いかなる罪惡をも敢てしうる極惡人であらう。

鬪犬を樂む都會、白晝公然犬を殺して見せる都會、柔和な飼犬にまで口輪をはめさせようとする都會に、動物虐待防止會のあることは我等の意を強うする。

新議會に送らるべき新人物

鐵拳禪

（一）

▼同じく總選擧と雖も、任期滿了後のと、解散後のと、自ら其の趣を異にす。一は換氣法の如く、一は堰を決潰するに似たり。換氣は室内の空氣を新にするにあるも、決潰は強ひて我が田に水を引かんとするにあり。

▼我田引水の際は、必ず一場の活劇を生ず。活劇の後、堰の決潰し去れば、人莽命に疲れて呆然たるも、水は容赦なく下流に就き、附近の田圃を浸潤す。浸潤すること過度なれば、從つて横溢す。斯の時に至りて驚く者は、始め決潰を喜べるの徒ならずんば非ず。

▼淸水の横溢は、作物に害尠きも、濁流の奔馳するに至りては、其の禍闘るべからず。解散を以て我田引水の用に供するもの、其の手心を誤れば、自ら濁流を被らざるを得ず。濁流を被れば、作物おのづから枯死す。内閣の生命、獨り恙なきを得んや。

▼世、政界の沈滯に倦み、腐敗を厭ふこと久し。何とかして局面を展開し、以て刷新の實を擧げんとせるの時、解散は晴天の霹靂の如く到れり。

曾て非立憲の甚しきを攻擊されたる解散は、今次却て立憲的なるが如く歡迎され、期待さる。是れ今次の解散の、從來の夫れと、何程か趣を異にせる所以。

▼今次の解散は、時勢より觀れば、一種の換氣法なり。政界に新しき空氣を作らんとするにあり。內閣維持策より觀れば、我田引水ならざるに非ず。唯其の我田引水なるや否やは、總選擧後に於ける彼等の態度如何によりて判ずべきのみ。

▼大隈內閣の諸公は、一齊に今次の解散を以て、民意を問ふものとせり。解散を斷行する、正に斯の意味に於てせざるべからざるは勿論なるも、從來の解散には誠意と責任との伴はざりしが故に、一種の暴行を以て目されたれば、伯大隈等の斯の聲明を立憲的なりと受取れるに外ならず。

▼內閣の死活は、總選擧後の新議會にあり。與黨尠くして勝算なければ即ち冠を挂けて去らざる可からず。總選擧の結果は其の頭數に依りて明かなるも、民意の裁斷の最も顯著なるは、總選擧後の議會ならざるべからず。

▼解散後の總選擧は、一種の活劇なり。其處には、任期滿了後の總選擧に見るべからざる、生彩と活氣とあり。而して、此の生彩と活氣とより新人物は生る。新人物は局面の展開と、政界の刷新とには、必ず無かるべからざるなり。何となれば、舊人物の成し得ざる事を敢行し、以て新しき空氣を作るべければなり。

▼內閣死活の上より見るも、彼等は極力議會の空氣を一新せしめざるを得ず。舊態依然たるに於ては、彼等の生命は持續するものに非ず。若し强ひて活きんと欲すれば、非立憲の汚名を蒙らざるを得ず。而して來るべき最後は、濁流を被れる作物の枯死すると、何の擇ぶべきなきに至らん。

▼窒息は愚者の事なり。腐敗せる空氣を一掃せんには、先づ其の窓を開かざるべからず。新鮮の空氣の水の如く流入する所、其の爽快に打たれて死すべくんば、寧ろ死するも快ならずや。非立憲的の窒息は立憲的に氣死するに若かず、其の後繼たるべき新人物、又窒息の禍より免るゝを得べければなり。

▼局面展開は、即ち政界の窓を開くにあり。其の窓一たび開かるれば、清新の氣忽ち横溢せん。斯くて親分子分の博徒的關係より離れて、眞個政治生活を營むに至らば、新人物の控自期し難きに非ず。

▼凡そ政黨の弊は、政見を主とせずして、人足的結束を重んずるにあり其の結果、議會は徒らに人足的議員の集合所となり、贊否の票決器械たるに過ぎざるに至る。議會を刷新せんと欲せば、先づ此の黨弊を矯正せざる可からず。代議士の腐敗、墮落は、多く票決器械たるに起因す。

▼惟ふに陣笠の稱、此の人足的結束を以て能事とし、票決器械を以て得々たるに由りて起れり。縱令幾多の新人物を送るも、陣笠に甘んずる以上政界の窓は永久に開かるべきに非ず。

（二）

▼議員買收の語、坊間に行はる。人身賣買は法の禁ずる所、況んや議員賣買をや。而も依然として議員買收の語を聞くは、票決器械たるが故な

せ。既に票決器械なり、公然正札を附せざるも、買收の競声下らば、賣約済となる偶然に非ず。

▼陣笠は一家の政見を立せず、時に高價に買收さるゝ事あり。彼等は票格を有すれども、人格を有せず。議政壇上に自家の經綸抱負を吐くこと能はず、徒らに『結束』てふ政黨節制の下に、一票と化し了す。此の際、無意義の一票は、眞個國民の意志を代表せず。

▼票价を以てすれば、代議士たらん者は、領袖と陣笠とを問はず、一人一票なり。其の一票たるに於て、政友會總裁原敬も、薩摩の志々川藤彦も同格なり。其の選擧民の利益を代表するに於て、前者も後者も對等なるべければ也。

▼代議士は公人なり。帝國の選良なり。國民の代表者なり。議會に於て一票の價格を正確に維持すると同時に、選擧民を辱しめざるの人格を有する者ならざる可からず。單に無意義の票決器械となり、盲從結束の陣笠となるが如き票格者たる可からず。

▼票格者は議會に一票の價値を有するも、選擧民の利益を代表せず。時に賣買せらるゝを以て、公人の德義を有せず。收賄罪、瀆職罪等を犯すも恬として恥ぢず。斯の如き一票を議會に送れる、選擧民は禍なり。

▼選擧民の代表者を日比谷に送る、宜しく人物本位ならざる可からず、衆議院議員の五字を正確に解しかざる者、若くは北京を北炭と誤る者、解散を海底と解する者等を選擧するが如きは、金力をのみ見て、人物を吟味せざる結果ならずんば非ず。

▼無學の英傑、稀れに無きに非ざるも、代議士として書を讀み得ざるは不可なり。苟も國民の代表者たる以上、能く時勢を解し、思潮を知る所の、見識乃至人格なかる可からず。寸前暗黒にして、國政を議するが如きは、烏滸の沙汰なり。

▼世は如何に政界の革新を叫び、政黨内閣を唱ふるも、肝腎の代議士其人にして、時勢の落伍者たり、寸前暗黒漢ならば、如何ぞ能く其の目的を貫くを得ん。來るべき議會の代議士にして、依然として人格者少く、票格者の多からば、政界の窓漸く開かるべしとも思はれず。

▼然れども、時勢の進運と共に、人心漸く政治に向ひ新人物の所在に崛起するあり。爭覇戰の激烈なる、未だ曾て見ざる程なれば、其の選出さるゝ人物必ずしも票格者のみに非ず。或は前回の總選擧以上に人格者、乃至手腕家を送るべきは明かなり。

▼吾人は政府黨、非政府黨の勝敗以外、此の新人物に興味と、期待とを有す。縱令少數の非票格者と雖も、厲往するに於ては、新空氣を作る、必ずしも難しとせざればなり。

(三)

▼輿論内閣は、輿論を無視して、二個師團を提案せり。故に國民黨の反對あり、政友會の半熟的反對あり、其の半熟にもせよ余熱にもせよ、反對は反對なり。政國聯合軍の反對に遇ひて、輿論内閣は遂に解散を斷行せり、而して二個師其他の是非曲直を、議會以外の輿論に問はんとせり。

▼現内閣は伯大隈の自負するが如く、眞個輿論の内閣なりや否は暫く措

き、口舌を以て、或は文筆を假りて、輿論を製造するに巧ならざるに非ず。而して現内閣は、其製造されたる輿論の上に立つの傾向なきに非ず。

▲伯大隈の同情者には實業家あり、新聞記者あり。是等を狩り集めたる隈伯後援會なるものあり。唯夫れ同情者なり、敢て伯大隈と主義政見の合致したるが故に非ず。唯夫れ後援なり、二個粉飾贊成の聲を揚ぐるに過ぎず。過ぎずと雖も、此の前㭐後押は、跛脚伯の爲めには、無二の金剛杖ならずんば非ず。

▼大隈信常は、伯の第二養嗣なり。伯松浦の出にして、背後に因襲的勢力と、華胄有數の金力とを有す。第一養嗣英麿離縁の後、其の妹婿となれり。英麿は明治三十年其の郷里岩手縣より出て、自由黨の耆宿谷河尚忠を蹴落せり。信常今次の總選擧に、政界の才人竹越與三郎と覇を爭ふ。政治家の婿たるもの、先づ代議士の手習より始めざる可からず。

▼信常は、養父首相の秘藏なり。秘藏にして補足なり。伯大隈の跛脚を補ひて三脚となり、平均一脚半の歩を運びつゝあり。時に首相に肩を貸し、時に其の杖持となり、常に身邊を離れずして、擁護の任に膺る。正に孝子の標本なり。

▼憲政擁護閥族打破を叫べるもの、犬養尾崎等の臨時神格者あり。其の氣焔の盛んなる時、勢威全國を風靡す。信常は大隈擁護黨閥打破を唱へ政界の一角に風雲を起すを得ば、臨時神格者を驚かすに足れり。

▼信常は、伯大隈の養嗣たるが故に著聞せるのみ。其の政治的手腕に至りて、未だ地平線上のものに非ず。其の學識、辯才の如き、又竹越に及ばず。諸種の情實と、粉飾とを取り去りて、赤裸々に其の力を角する時は即ち土俵外にけし飛ばん也。

▼吾人を以て見る、信常は到底果桁の尤なり。彼れに其の識見、抱負、手腕を期待するは誤れり。英麿の鈍重に比し、何程か才氣あり、生彩煥發の感なきに非ざるも、要するに殿様の怜悧なり。波瀾多様の政界に立ちて、其の活勢を操縦するに堪へず。

▼伯松浦と縁戚の關係ある、亘理胤正は邑主格の殿様なり。伊達騒動の忠義一徹者、伊達安藝の後裔なるも、養鶏以外何等の趣味を有せず。多年米國に遊學せるも、圖南の鵬翼を張るの準備に非ずして、鶏子の渾沌を研究するにありき。

▼彼れを以て茫漠たる性格となすも、然か許せんには餘りに茫漠に過ぎたり。又抱擁の大を稱せんには餘りに、鷹揚に過ぎたるものあり。唯其の自由奔放なる生活と、享樂的氣分に爛醉するの癖とは、何程か現代に活くるに似たり。知らず、政界にありて、克く其の鷄翅を張り得るや如何。

▼實業家には、大木喬命、横山章、其他幾多の田舍富豪あり。又實業家と虛業家の仲間に介在する、成金村上太三郎あり。伯大隈に同情するの裏面には、大殿當込みの意味も亦無きに非ず。

▼大木は甲州の分限者、呉服屋『おふどう』を以て著聞す。資產家の動もすれば火の車推さんとするの當世に、數代傳はりて根太一つ搖がず。浮世の浪に超越して、福徳を擅にしつゝあり。人物一種の癖あるも、固よ

り何等の抱負あるに非ず。唯罪格の高潔を持するを以て、足れりとなすべきのみ。

▼伯大隈の同情者は、多く斯かる無自覺の人物を混ず。即ち政治を老後の餘興と心得、若くは金持の道樂と思惟す。立憲の本義の何たるやを理解せず、却て憲政の逆轉を以て、民本政治を賊せんとす。此の徒の政局は、決して政界を革新する所以に非ず。

▼横山は、中橋德五郎と鎬を削れるに由りて、其の名を知らる。金澤地方の勢力侮る可からざるも、實業界に於ては未だ中橋の敵に非ず。其の人未成品なれば、中央財界に雄飛するや、政界に活動し得るやは、明日に殘されたる疑問ならずんば非ず。

▼中橋は先年代議士となれるも、其の資格に疑義あり。議會の問題とならざるに、自ら辭職せり。今大逐鹿場裡に立たんとするや豫め覺悟する所ありて、大阪商船社長の椅子を退けり。是れ彼れが、政界に活動せんとするの野心に出づ。

▼中橋の黄金を散じたるは勿論なるも、横山も亦大に札びらを切れり。彼等の競爭は、人格の失れに非ずして、金力の失れなるが如くなるは、選擧界の爲めに惜まざるを得ず。然れども、人物本位を以てすれは、後者の前者に優ること數等なり。政界の立物たるもの、彼れに非ずして是れにあり。

▼伯大隈の同情者は、多く金力を擁して選擧界に莅み、而して政友會の人物を驅逐せり。政府黨も亦政友會を破らんが爲めに、地方の勢力家乃至金力者を押立て、爭覇戰を激成せるは蔽ふべからず。人物本位を以てせず、金力本位を以てするの弊は、舊陣笠を斥けて、新陣笠を迎へ、罪格者の多きを致すの結果となる。新人物と雖も、罪格者は、政界の氣分を新にする所以に非ず。

（四）

▼操觚者には、上島長久、大谷誠夫、川崎克、白河次郎、樋口秀雄等あり。白河は鯉洋と號し、國民黨に屬す。他は、隈伯後援派、中正會に非ずんば、同志會なり。大隈内閣の與論の上に立つ所以のもの、故なきに非ず。

▼然れども、吾人は彼等を以て、輿論製造者と做すものに非ず。彼等が伯大隈の政策を贊するは、必ずや彼等が年來唱道せる主義主張と合致せる所以ならずんば非ざるべし。若し然らずして、徒らに謳歌するに於ては、成金者流と何等擇ぶなきに至らん。

▼上島は報知、大谷は都、樋口は新日本、川崎は確か日本の記者なりと記憶す。前三者は同志會乃至同志會系の人物にして、後者は中正會に屬し、憲政擁護以來の奔走者なり。個人關係に於て尾崎に親しきこと、猶龍峽の男加藤を擬ぐが如きものあり。

▼龍峽は帝大出身の文學士、信州人の街氣と誇大風あるも、稱態必ずしも蔽はざる所に、其の天眞を見る。醉へは、其の鼻をうごめかすこと愈々忙しきも、未だ天狗の大をなすに至らず。

▼臨風、毎に龍峽を譁ふに陣笠を以てす。龍峽笑つて、村夫子焉んぞ敢

治を解せんやとなす。龍風の講義に、歴史小說に、大に儲けるの時、龍吠会を散じて爭覇戰となす。自家の『群衆論』を應用して、黨人操縱の呼吸を解するを得ば、一陣笠に止まらざるべし。

▼井原百介は、明治十六年駒場出身の農學士。山口、宮城、大阪等の農學校長となり、農業教育の爲に盡瘁すること三十年、正四位を辱うせり。大阪の子弟に擁されて蹶起せるもの、大體議員と同一視すべきに非ず。

▼議會は陣笠の結束所に非ざると同時に、所謂政治屋、辯護士、實業家等の集合所に非ず。眞正に國民の意志を代表する、各種各樣の人物を網羅するを要す。此の意味に於て、教育家、文藝家、畫家、勞働者等をも選出せざるべからず。

▼然れども、多少にても思想方面若くは勞働者を代表する者は、運動費潤澤ならず。勢ひ理想選擧――惡く云へば乞食選擧――を標榜せざるを得ず。氣位徒らに高くして、選擧民の嫌惡する所となり、落選の不幸を見る。苟も理想選擧又は模範選擧を唱ふる者は、退いて自己を守らんよりは、先づ進んで選擧民を教へざる可からず。選擧に於て消極的なる者、如何ぞ議會に出でて積極的行動を取るを得んや。

▼新人物の新空氣を作り、新運動を試みんとする、宜しく議會に入りて先づ結束主義の迷想を覺醒するを要す。理想を標榜して理想を待ち、模範を唱道して模範の報酬を期するが如きは、積極的革新を試みんとする者の取るべき手段に非ず。革新と謂ひ、廓清と云ふが如きは、是れ優強者の事業たる也。

▼法博小林丑三郎、大場茂馬、副島義一等は、新人物中に於て多少の異彩を放つ。副島は一種の人物なるも、其の行識稍奇に失す。選擧界に在み、選擧の實際に迂なるを免れず。小林は財政經濟の學理に通ず。其の大局より堂々と論ずる所、確かに議政壇上の花たらずんば非ず。

▼四百の代議士中、多年の經驗上數字を記憶するも、財政經濟に對して徹底的の意見を有せず。小林は經驗なきも、一種の眼光を有す。彼れが姑息なる政策を排して、財政整理、海外發展、地方開發、國民貯蓄の理想を實現せんとするや言を俟たず。

▼刑法の大場は、憲法の花井と共に、私學出身の双壁なり。獨逸留學後大審院判事となり、官界の流行兒となりしが、一昨年官を擲って辯護士となれり。彼れが現行刑法を非難するを以て、賣名の手段の如く猜するも、決して然らず。是れ彼れが多年研究の結果、止むを得ずして發するなり。

▼固より研究の結果と雖も、法曹界の傾聽を値すべしとは限らず。彼れの所論、或は異議なきにあらざるも、自ら任ずるに人權擁護を以てし、法治國の實を擧げんが爲めの努力は、之を壯とせざるを得ず。唯中途にして、其の意氣を紛失すること勿れ。

（五）

▼今次著しく變調を呈せるは政友會なり。同會は由來結束を以て稱す
其の所謂代議士の如き、郡縣會議員の漸進者か、然らざれば自由

の所謂受黨者に過ぎず。人物拂底の歎ありしが、俄然官僚出身者の激増を致せり。

▼政友會の變調は、他面に於て政界の變調を意味す。内閣更迭毎に、地方官更迭に政治的色彩を帶びたるの結果、官界の野心家をして政黨に向はしめたる事、其の一因ならずんば非ず。而して官僚出身者の政黨に入るに至りて、政界の分野は何程か鮮明となり、黨界の空氣も亦多少の新味を帶び來れるは爭ふべからず。

▼政友會の澤田牛麿、杉山四五郎、大島久滿次、大芝惣吉、犬塚勝太郎、古谷久綱、宗像政、葵豐助等は、悉く官僚の出身なり。之が先蹤をなしたる床　竹二郎は、宛然是等の首領たるの觀あり。

▼杉山は前衛生局長、未だ手腕の稱すべきなきも、一種の雄辯を有す。信州に生れて、越後人の養嗣となり、收税長を父として、身を官界に起せり。年少政治に志せりと云へば、黨人生活は、全く彼れの豫算外の道樂にも非ず。

▼澤田は陸軍省參事官時代俊敏の稱あり、頗る其の將來を注目されしが大阪市助役に失脚して又振はず。不遇の境地にありしが、牧師反對を標榜して蹶起せり。古谷は公伊藤の腰巾著となり、公の薨後式部官となりしが、遂に野に下りて鹿を逐へり。惟ふに、其の志す所小ならざるべきも、秘書官以上の椅子を占むるや疑問なり。

▼宗像は清浦流產内閣の智囊なりしが、一轉して政友會に入り、總裁原の幕僚となれり。從來鷄鳴狗盜の士に圍繞されたる彼れも、辣腕大島、壇の浦宗像を左右兩翼となすに於ては、子大浦に鼻を明かすの必ずしも難きに非ず。

▼犬塚は頭腦明晰、手腕縱横の點に於て、床次と雁行す。唯床次に比して器局狹く、抱擁大ならず。動もすれば官僚の本性を露出す。大芝は血氣に逸り、葵は鈍重に失するも、其の識は百姓陣笠の上にあり。

▼政友會の官派に對し、同志會に濱口雄幸、香阪駒太郎等あり。下岡忠治は未だ入黨せざるも、所詮は同志のものなり。香阪の前身は司法官にして、今は某會社の重役なるも、何程か政治的資質を有す。

▼濱口は大藏次官、下岡は内務次官、共に明治二十八年の帝大政治科出身なり。小大隈の三十二年の卒業なるに比し、四年だけの先進なり。一は豪放、一は辛辣。前者の黨人肌なるに反して、後者は官僚肌なり。目下大浦の幕下にありて、縱横の策を弄しつゝあり。

▼其他新人物に、鳩山一郎、越山大刀三郎、政尾藤吉等あり。鳩山は帝大出身の俊秀、越山は東電の重役、政尾は米國法博。其の器大ならざるも、多少の新彩なきに非ず。但越山は新顔なるも、年輩に於ては必ずしも新しからず。

▼鳩山は年少にして、前途有望なり。政見を抱持せざるに非ず、辯才を有せざるに非ざるも、戸別訪問を專一とし、堂々たる政戰を試みざりしは、新空氣を作るに於て遺憾なき能はず。年少且新米の花々しき活動を期待するの無理なるも、票格的人物に墮せざらん事を望まざるを得ず。

（大正四、三、一四）

生活ロマンス

松崎天民

自分自身の感想や事件が、他人に共通する場合が有る樣に、他人の生活ロマンスが、自分自身の過去に共鳴を覺える場合も、決して稀有の例ではない。私は此の意味に於て、他人の上に有つた既往の事件を、私自身の過去として眺め得るだけの、執着と同情とを有つて居る筈である

芝居茶屋の女

一、戀を戀する人

我々の仲間では、笹村と云ふ其の姓を呼ばずに、富さん〳〵と其の名を呼で居る、會社員の笹村富夫君と。武と云ふ名も呼ばねば、三宅と云ふ姓も呼ばずに、三さん〳〵と云つて居る、若い洋畫家の三宅武君と。松崎とも云はねば、天民とも呼ばず、松ちやんと云つたり、天ちやんと呼だりされる松崎天民と。——

この三人が、紀元節の翌夜、所もあらうに多摩川電車の終點、夏ならば涼しい風の吹きさうな多摩川のほとり、割烹店喜月の樓上で、小酌を催した折の事である。鷄卵をからませた白魚鍋に、鯛のおさし、燒海苔の極く淡泊と、櫻正宗か何正宗かに輕い醉を覺えて來ると、談話は例に依つて「戀物語」にはづんだ。舊暦廿九日の空は暗澹として、寒むさうな星がキラ〳〵して、何處かでボーと云ふ睡む氣な汽笛の音が聞えたり、汽車の軌り行く響が聞えたりする程に、四邊は陰森として、何となく氣の滅入りさうな晩であつた。

「何所かのお通夜にでも行つてる樣ですね。」

洋畫家の三さんが、皮肉らしく云つた樣に、ほんとに浮き立たぬ晩であつた。男のために苦勞をし拔いたらしい世帶くづしの女中と、戀も浮氣もこれかららしい十八九の廂髮とが、交る〳〵お酌をしながら。

「ちよいと、何ちらからのお歸途なの、お珍しいでは有りませんか殿方ばかり…………」

と笑つた樣に、三人とも恐しく悄氣返つた樣な、屈托の有りさうな顔色をして居たらう。

「いくら飮んだつて、醉はないばかりぢやない。こんな晩には、飮んだ酒が冷たい涙になつて、自然に流れて出るばかりだ…………」

天ちやんが斯う云つて、舌打をすると、

「何の積で此んな所へ來たんだらうねえ。月も無いし、花も無いし、何うかして居るぜ、三さんも松ちやんも富さんも…………」

富さんも斯う云つてため息を吐いた。

「女が居ないからでせう、美人がね。」

三さんは獨で斯う極めて、萬事を呑み込んでる樣な顔をして居る上に、淸元の三千歳々唄ひたい樣な、贅澤な顔までして居た。

「天ちやん何かは、行き當りばつたりに、何んな女でも宜い、刹那の慾望を遂げさへすれば、他に何の要求も無さ相な類の男に、誤解されても居るし、また誤解されても仕方の無い樣な、放縱な態度をして居ますが、富さんは違ひますね。金さへ出せば何うにでもなる種類の藝妓でも、一二度逢つた位では、手も出ないと云つた鹽梅で、其の勇氣の無いのにも驚きますが、また苟くもせぬと云つた風の所には、平生から密に敬服して居ますよ。富さんは戀が無くては、女を何うする事も出來ない男で、天ちやんとは一寸、趣致を異にして居ますねえ。」

三人の中で最も酒に強い三さんが、いの一番に醉ひ初めて、いの一番に浮かれさうな形勢になつた時、廊下一つ隔た隣室に、男女一組のお客樣があつたらしい。そして遂來た女の笑ひ聲と、重々しい濁つた男の笑ひ聲とが、斷えてはまた續いて聞えた。

二、尊むべき經驗

「なアに僕だつてね、巴里の賣春婦に關り合つた事もあれば、不見轉を何した經驗もあるけれど、唯、お手輕に何する氣分になれないだけのことさ。未だ三十に

なるやならずだもの、女に就ての思ひ出も、色よりは戀の方が多いし、また戀物語の方に波瀾がある。天ちやんぢや無いけれど、其の一をホーランド公園附近と云ひ、其の二を兄貴と僕と彼の女と云ひ、其の三を新橋藝妓筆子の死、其の四を芝居茶屋の女、其の五を伯爵夫人の面影と云ふ位のロオマンスは、僕の前半生にも有りましたよ。」

隣室の男女のお影様で、此方の十二疊にも、酒の香と莨の煙とが漲つて、そろ〳〵遊蕩的情調になつて來た。富さんは背のスラリとした、色の淺黑い好男子で、濃い髮を右から七三に分けて、狹い額の左方に渦を卷かせ、鼻下の濃い髭を短く刈つて居る。口ほどに物言ふ眼に一種の情味を漾へて居るのが、戀は曲者、若い富さんの前半生を語り顏である。

「お通夜の晩が、大分面白くなつて來た樣ですね。何うです松ちやん、貴君の人生探訪の材料になるぢやないですか。畫題としては、ホーランド公園附近も好いし、伯爵夫人の面影も佳い樣ですが……。何れか一つね、富さん、酒の肴にもなりますよ。」

三さんの尻馬に乘つて、天ちやんまでが、

「兎に角、聽くことにし樣ぢやないか。五つの中ではさうだね、芝居茶屋の女が宜ささうぢやないか。短くて、面白くて、要領を得て居て、波瀾があつて、小說的で、小說よりも興味のある事實なら、正に僕の領分內に入れるべきロマンスだもの……」

と云つたので、富さんも默つて居る譯には行かなくなつた。年增の世帶くづしの方は、

「おや、おや、御馳走樣ですわ、ね。」

と云つて笑ひ、十八九の廂髮の方は、

「芝居茶屋の女つて、へえ、美人ですの。」

と不思議さうな顏をしたが、そんな事は何うでも宜い。女中達は靜に謹聽して、富さんの此れから話す出來事の中に、女中達自身の姿を探ね出して、胸に手を當てさへすれば宜い。何んな人の何んな事でも、其の經驗はかりそめで無い、また卑しむべきでは有るまい。

多く飲けぬ口の富さんは、シトロンを取寄せて飲み、

三さんはビール、天ちやんは酒を飲みながら、語つたり聽いたりした。これが築地や木挽町の待合で、傍に紅い蹴出しが居て、甲高い聲で話したり、啞者の様な手振り身振りで、他の客や座敷の噂をしたりするのを見聞して居たのなら、三人ともそんな心持にはなれなかつたらう。幸にして星暗い多摩川の一夜は、三人の氣持を同時にしんみりさせて、語る人の上にも、聽く者の上にも、遣る瀬ない思が漲つて居た。

「その女との關係は、去年の暑い七八兩月間だけで、思へば短い果敢い遭逢でしたよ。」

富さんは斯う云つて、「芝居茶屋の女」と自分との一切を、二人の前にさらけ出した。——

三、新富座の總見

「一昨年の冬、新富座で新派劇を演つて居た時、僕の關係して居る會社で、河合武雄のために、總見をした事があつた。本家茶屋に事務所を置いて、其の日の帳場は僕が受持つ事になり、看客席圖と首引で、隨分、忙しい思をしたが、其の代り一つの獲物があつた。

御承知の通り新富座の本家茶屋では、男の案内人を一切使はず、十六七から二十四五までの女を、案内人に使つて居るが、十人餘の中に唯一人、何とは無しに僕の心を惹いた十八九の女が居た。取立てゝ云ふ程の美人ではないが、中肉中背の何となく色ッぽくて、色こそ稍淺黑けれ、眼に何とも云へぬ風情があつて、男の心を惹かねば置かぬと云ふ風の力のこもつた女であつた。僕と一所に帳場に居た同僚達の眼にも映つたと見え、互に目引き袖引いて、「好い女ぢやないか、何と云ふ名だらう」と、取沙汰したものであつた。

女の名も宅も知らず、其の夜は其の儘、碌に言葉を交す機會も無くて、別れたのみであつたが、其の日からと云ふものは、何かに付けて女の事を思ひ起す様になつた。妻もあれば子もあるのに、と笑ふかも知れないが、若い僕の昨日今日に、斯うした戀心地があつたとて、別に大した罪でもなく、大した道樂でもあるまい。自惚でも何でも無いが、初めて逢つた其の一夜、女の方でも心有り氣に、僕の顏をチョイ／＼偸み見て

は、心を蕩かす様な秋波を、惜し氣もなく浴せたものである。僕は其の後、市村座へ見物に行つた時、茶屋の三洲屋から座の方へ行く右側の、橘屋と云ふしる粉屋の娘が、新富座の女に似て居る事を發見して、せめてもの心遣りにして居た。それから後、去年の六月、再び新富座で總見をする迄は、半年の間、女に逢ふ機會が無くて打過ぎたが、いよ／＼總見の其の日になると、僕の心の高波は、怪しくも亦慄ひ戰いた。

僅に半年ほど逢はないで居た間に、女はもう成熟し切つて、化粧の仕方や着物の着こなしに「芝居茶屋の女」らしい姿を見せて居た。其の日も僕が帳場を受持つたので、傍に人の居ない折を見ては、女の方から寄り添うて話しかけるし、例の微笑みと秋波とを、半年前よりも鮮明に浴せて來た。本郷三丁目邊に、物堅い父と一所に暮して居るお近と云ふ女である事が判ると同時に、僕は密に覺悟を極めて、此の女を正式に妾として圍はうと思つた。そして出來る事なら、今夜にでも人目を忍んで女に逢つて、女の口から明ら様に、其の思惑を聞いて置かうと思ひ立つた。

芝居が打出て後、同僚達が萬安へ行かうと誘ふのも斷つて、僕は唯一人、尾張町のライオンの前に立つて、新宿行の電車を待つともなく待つて居た。其の時、僕の心の底には、お近の姿があるばかりで、妻も無く子も無く、家も無く世間も無く、宇宙も無かつた。

笑つてはいけません。妻子が有ると云つても、二十八歳の僕だもの、戀を戀する氣分になつて歩くのに、何の不思議があるものか。」

四、妾にせうとて

「お近の一顰一笑に囚はれてしまつた僕は、今にもお近が來る樣な氣持がして、あても無いのに十二時近くまで、銀座の四角に立つて居た。天金の方へ行く三人連の女の一人が、お近の後ろ姿に見えたり、品川行に乘つた女の横顔を、お近でないかと眺めたり。

青山行の赤電車が、ライオンの前で停つた時、運轉手臺から降りたのが、嬉しや夢現のお近であつた。僕も意外に思ふたし、女も餘程驚いた樣子であつたが、

晴れて言葉を交すにしては、憚り多い巷であつた。それにお近には男の連があるらしく、「本郷へ、送つてあげ様か」と小聲で云へば、「えゝ」と答へただけの笑顔であつた。新宿へ歸る僕が、本郷三丁目まで同じ電車で送りながら、車内にも人目があつて、其の夜は其の儘の「左様なら」が悲しかつた。もとより「かね康」も寢て居たので、お近の好きな物を買つて遣る事も出來ず、思へば本意ない別れであつた。

可愛い妻も有れば子も有つて、それが厭でなく憎くも無いのに、斯うした戀に現の男心を、浮氣の一語で貶し去るのは、一を見て二を思はぬものであらう。僕はお近に參つてしまつて、先づ天賞堂で二十餘圓の指輪を買つて送り、次で午前十時を期して、須田町で落合はうとの手紙を送つて置き、其の日は朝から午後一時まで、親不知子不知の須田町に立ち盡したりした。それにしても心有り氣な女の擧動、待ちぼけさせられた怨を抱いて、久し振に新富座の茶屋に入り、久し振りに大阪の義太夫を聽いたのは、それから間もない後であつた。恰も宜し、お近が僕の番に當つて、茶菓を持運んだ時の嬉び様は、「今夜、歸途に、數寄屋橋の公園前で、待つて居て下さい、いろ／＼お話したいことがあるわ。」の一語であつた。一人の連を巧にまいてしまつて、公園前で蚊に利されながら待つて居ると、十二時近くにお近が來て、「待つたでせう、隨分、濟まなかつたわ、ねえ」と云ふ次第。

今夜は溜池の伯母の許で泊ると云ふので、それから歩きながら話さうと、赤電車過ぎた夏の深夜、初めて二人の世界となつた。須田町で待ぼけの一條やら、指輪のお禮やら、今夜お目に掛れやうとは、の捨臺詞が濟んだ後、僕は初めて心の底を打明けた。大久保の家には妻もあれば、娘と男の子二人ある身の上、晴れて夫婦の縁では無いが、妾にならば差支い無いであらう。然るべき家を持たせて、月々の仕送り三十圓と、他にお父さんの手當月二十圓だけは出すが、此の戀ての思を遂げさせてくれと、呼吸さへはづんだ。

女の返事は意外も意外、「妾には種々事情があつて、

晴れてお目に掛ることは出來ない身の上。何處か二階借でもして下されば、月に何度か日を極めて、お目に掛るより他には、氣儘になれない身體ですわ」を聞いた時にも、僕はお近を獨身と信じて居た。

其の夜も其のまゝ別れたのみで、心は許し合つて居ても、身體はまだ他人であつた。」

五、多摩川の月夜

富さんは此所まで語つて來て、一寸一息と云ふ形で、シトロンを一氣に飲んだ。三さんは酔うて居るのに、當面の聽者になつて、「ふん」とか「さう」とか調子を取つて居た。行儀の惡い天ちやんは、横に寢そべつて莨を吹いたり、女中にお酌をさせて飲だり。隣室の男女はもう靜り返つて、階下の時計が九時を打つた。

「大變……、長物語のおのろ氣、ねえ。」

と年增が云へば、十八九の廂髪も、

「面白いわ、それから何うして、え。」

と笑つた。富さんは、ニヤリ〳〵と興がりながら、

「これからが大變なんだよ、何時か一度、天ちやんに書いて貰はうと思つて、日記やら手紙やら、材料は總て持つて來た。これから多摩川の月夜、風雨の江の島になる順序だが、面倒臭いから日記を朗讀し樣か。ねえ、三さん、天ちやん……。」

と云つて、小い包の中から「大正三年の日記」を取出して示した。便宜上、其の數節を拔萃して、富さんとお近との戀愛狀態が、其の後どんな風に發展したかを見やう。日記は七月と八月とで、總て簡約な文章體になつて居るが、必ずしも、惡文では無いらしい。――

七月二十五日、お近に手紙を出す。

去年の暮、初めて彼の女を見初めし時は、深き處女の色ありき。今年六月、半年振りにて逢ひし時は、既に去年の娘にてはあらざりき。彼の女は既に男を知り、男を解せるに相違なし。芝居茶屋の女に清きを求むるは、求むる者の愚なり、痴なり、妄なり、暴なり。

七月二十九日、お近より手紙來る。

御一所に他所へ行くにも、着て行く着物なく、恥しく口惜しく候。憐れと思し召さば、三越か白木にて、單衣と帶とを……と記しあり。午後、八丁堀の古着屋へ赴き、藝妓物らしき中古の單衣、帶など、二十金足らずにて購ひ、直に小包にて送り屆く。三四日後、一所に多摩川へ遊びに

行く旨の手紙をも添えたり。

八月××日、樂しき其日となれり。

午後五時、有樂町の停車場にて落合ふ。縞物の單衣に、白味勝ちし帶、赤、桃色、水色、銀杏返し、白粉、香水、見擬ふばかり美し。澁谷にて多摩川行電車、七時過ぎ着く。二子を渡りて、龜屋へ落着き、入浴、晩餐、愉快極り無し。折柄、月色水の如く、流れ清く、風涼し。お近、十二三歳の小娘の如く喜び、はしやぎ廻る。宿に命じて、小舟を中流に浮かぶ。東京に近うして、東京に遠き心地す。

船頭に二圓與へて上陸せしめ、河上、舟中、たゞお近と予のみ。詩吟聞え、都々逸聞えなば、誂へ向の情景なれど、事實は必ずしも然らず。お近の眼燃え、予の脣おのゝくのみ。「何時までも斯うして居たいわ」と云ふお近の顏旋、心も身も、予の有となれり。天に月あり、地に我等二人の戀あり。あゝ此の夜、此の景、此の情、願くは永遠にあれ。——

「折柄、船頭さんが歸つて來たのでね、二人は其の夜も、他人の儘で別れたんです。」

と、笑ひながら富(とみ)さんが説明した。

六、風雨の江の島

八月××日、風雨の後、江の島行。

新橋より二等乘車、藤澤下車、電車にて片瀨まで。風雨の後とて、到る所、被害甚だし。

片瀨のゑびすや支店に少憩、江の島の橋落ちたれど、三十分前より通ずと聞き、安心す。お近の喜び一方ならず、「こんな所で、夫婦仲好く、一生暮したなら、何んなに嬉しいでせう」と云ひ、「もう歸らないわ」と云ひ、「死んでも宜いわよう」と、感動の狀あり。ゑびす屋に泊る。三階の八疊と六疊にて、四邊に他人の氣配せず、何の遠慮も入らず。褥を別にして睡りたれど、夢しばしば破る……。あゝ此の夜、二人は終に夢幻より現實に入れり、空想より實際に入れり、計畫より實行に入れり。記憶すべき一夜、忘れ難き一夜、やがては思ひ出の一夜なるべきか。

朝七時半、眼覺む。江の島見物は、女にとりて、多少の驚異と趣味とをそゝりしが如し。晝餐後、寢そべりながら、今後の事に就て、女の同意を求む。予の第二の妻として、予の保護の下に生活せん事を勸むれど、儘ならぬ身の上なればとて、多くを語らず。予の心、大に平かならず、他に相許したりし男あるや如何に、最早、二人の間に、秘密のあるべき謂れなし。悲しみも、苦しみも、悶えも、煩ひも、二人の上にこそと語り聞かす。果は、「芝居茶屋の女をして居る方が、浮氣が出來て宜いのであらう」と、予又た多く言はず。

果然、お近には大なる秘密潜みたりき。さめざめと、春雨の如く泣き喧びつゝ、彼の女の自白せる處に據れば、お近には相許せし人ありしなり。新俳優×××の高弟たる岡村仙太郎が其の情人たりしなり。人妻に非ず。妾に非ず、隱れて樂しむ情夫がありしなり。運命の神は、我等二

人を風雨の江の島に宿せしめて、歡樂の一夜を授け、また忽ちにして苦痛の白日を與へたり。戀の甘酒汲み交はしたるも、思へば果敢き刹那の夢なりしよ。覺むれば、既に苦痛の谷底に墮されて、泣けども、叫べけども、二人は悲しき色情の僕となれり。

予は初めて怒れり、女の誠心を疑へり、女の虚僞を憎めり。情人ある女と知らずして、無心地の日頃を送れる予の妄を悲しむよりも、情人ある身の上を隱し蔽ひて、予の妄情に妄從せる女の大膽と無恥と厚顔とを憎み、且つ嘲り且つ罵りたり。女は唯、慟哭するのみ、「許して下さい」と連呼するのみ。岡村の女なるに相違無けれど、その樣なる心地は少しもせず。たゞ御身一人こそ、心の情人なれと叫ぶ。予の心、理智に明かなるが如くにして、感情に暗し。骨を刺すが如き運命の翻弄に對して、密に呪咀の感を深ふするのみ。

あゝ弱き者よ、汝の名は單り女のみならず。惡緣、契深うして、容易に斷ち難いかな。

歡樂の江の島、苦痛の江の島、風雨の江の島。——

「日記はこれだけで終局になつて居るが、二人の仲はこんな事位で、大詰になる樣な平凡劇では無かつた。今、思ひ出しても身慄ひのする樣な、大變な打出しになつたんだもの、振つて居るよ。」

斯う云つて、富さんは一通の手紙を出した。

七、密通の罪に候

「事件の結末が著いた時、大阪の友人へ送つた報告の手紙だが、これを讀みさへすれば、何も彼も判つて了ふ。僕がくど〳〵話すよりも、此の方が手ッ取早いから、先づ天ちやんに讀で貰はう。日記とは違つて、此の手紙の方は、稍名文なんだからね。」

手紙は相應に長いが、要點だけを摘むのも面倒臭いから、全文を左に掲げやう。——

木村君、いろ〳〵御心配を蒙つた一件も、どうやら無事に解決したから、何うか安心して下さい。江の島でそれと判つた時、綺麗に手を切つて了ひさへすれば、今度の樣な面倒な事にもならなかつたのに、弱い女らしい多情の小生、飛だ騷ぎを仕出かして恥しい。

お近の情人が、板橋の魁座で芝居を演つて居た時にも、小生はお近と一所に板橋まで出掛けて、身の程知らずの嫉妬をしたりした。小生の方からは、逃げ樣〳〵としても、女の方から電話で呼出されたり、手紙の呼出しなどが來ると、宜い氣持になつて出掛けたものだ。自動車に乘つて大森の曙樓へ遊びに行つたり、妻子が實家の靜岡へ行つた留守中には、小生の宅に連れて來て、下女を親許へ遊びに遣つて、一晝夜も泊めたり惡いと知りながら、男も女も斯う大膽になれるものかと、果は自分で自

分が恐しくなつたりした。

一所に錦輝館の活動寫眞を見たり、一所にタキシーに乘つて、濱町の花長で天麩羅を食べたり、それが何うしてお近の情人に知れずに居やう。何でも小生の宅へ泊つた晩、男がお近に尾行して來たらしく、それから三日ほど過ぎた八月三十日附で、お近の相許せし人岡村仙太郎から、一通の書留郵便が來た。

前略、私情婦近子と貴殿との近來の不倫の行爲は證據歴然、本人の自白等にて罪狀明白し、最早や宥すべからざる密通の罪にて候

是れが爲めに生ぜし私の不面目を如何に御所置被下候や、御確答を得たく、御面語を强請申候、午前中ならば、私宅以外の場所にて面會仕るべく候間、右に對する御返答を待申候

此の狀、今三十日御落手と見て、九月一日迄の消印の御返事なき時は非常手段に出申すべく候事を御承知被下度候　以上

××區××町××の地の××

大正三年八月三十日

河村仙太郎

笹村富夫殿

兼て覺悟はして居ながら、此の手紙を見た時には、慚愧と懊惱と悔悟とに苛まれて、今更の樣に小生自身の姿が、淺間しい畜生の樣に眺められた。斯うして明ら樣に書いて寄來す以上は、お近も責め苛なれた結果隱すに隱されず、事實有の儘を白狀したに相違あるまい。この上は小生も、その情人なる男に逢つて、欺らぬ心の儘を語つた上で、思ふ存分の手段なり所置なり制裁なりを受けやうと決心して、早速返書を認めた。何時でもお目にかゝるから、お差支の無い時に、何うか宅の方へ來て下さい、此方からも種々お話したい事がある、と簡短に書いて出した。

八、情味ある論判

木村君、小生が返書を差出した翌日の夕方お近の内縁の情人たる岡村仙太郎が、大久保の小生の宅を訪れて來た。心からか、見れば顏色悄然として蒼ざめ、悲痛の色が漲り渡つて見えた。對座すること少時、互に一語なく、默然として、相見るのみであつた。

岡村の言葉は悲憤の調を帶びて、一語は一句よりも激越して、果は熱い涙が兩頰に流れるのを見た。手紙に書いてある意味を敷衍して、お近の亂行を罵り怒ると共に、小生の無恥と不倫とを攻め立てた。法律上に妻と認定されるべき戸籍上の手續きは、都合あつて未了になつて居るが、お近が自分の未來の妻たる事實に二三は無い。兎にも角にも、相應の媒介人を立て、正式に同棲した女に對して、斯る行爲をされては、僕の體面も立たぬし、第一この心の苦痛を何うして癒すことが出來やうぞ、と、聲を慄はして、且つ憤り且つ訴へた。

小生は心より事件の經過を陳べて、芝居茶屋の女としてこそ、思慕の情を寄せたれ、新俳優の情婦と知つて居たなら、何を好んで不義の戀を敢てしやう。たとへ戸籍上の正しい妻で無くても、君の情婦と知つての後も、依然として逢引を重ねて居たのは、自分の不徳であり、自分の汚行

である。就いては如何なる制裁を與へられても、自分に於て更に寸毫の怨恨も無く、更に何の不服も無い。金で濟む事なら金で濟まして貰ひたいが、公沙汰にして他の手段に訴へると爲らば、それも致し方の無い成行である。何らか思ふ存分にして貰ひたい、自分も思ふ存分にされるのが、當然の成行だと信じて居る、と思ふ所を返答した。そして君の愛する女の爲めに、一人の若い男が、癒し難い戀の傷痍を負つて、人知れず悶え苦しんで居る事實に對しても、君は勝利者の態度を敢て取るか、と訴へて見た。

俳優技藝學校を卒業したのみでなく、曾ては早稻田大學に學んで、哲學を研究した男だけあつて、河村仙太郎は普通の新俳優ではなかつた。强硬な態度で談判的に論じて居た彼も、小生の打明けた經過と、心からの謝罪を聞くや、カラリと態度を一變して、君の負はれた戀の傷痍に對しては、僕も深く同情を表すると云つて、ハラ／＼と落涙した。そして金も入らぬ、訴へもせぬ、唯この後、お近と逢引してくれさへせねば、他に何の要求も無く、他に何の欲する物も無い。要するに、お近が馬鹿ですと云つて、淋しく微笑むだ。

お近の父なる人は、餘り性の好くない人らしく、其の後お近を連れて來て、千五百圓出すなら、お近を河村から取戻して、お前さんの妾に差上げると云つて、小生を脅迫した。然し此方が强硬であつたのと、お近が泣いて諫めたのとで、父なる人も我を折つて、百十圓を與へると「今後貴殿へ對し、何等御無理ケ間敷き行爲は勿論、且つ御迷惑を及ぼすが如き事これ無く」の一札を小生に出して、何も彼も落着した。何らか、安心して下さい、笑殺して下さい。

過ぎ去つた今となつては、一場の惡夢であつても、小生にとつては、貴い經驗の一つでした。――

九、虚榮の强い女

「これで結末は着いた譯だが、河村の方はなか／＼納らないで、遂に髮斬騷ぎまでしたらしい。河村が火の樣に憤怒して、お近の髮を斬つた時、お近は悲しい樣な、怨めしい樣な、何とも云へぬ凄い表情をしたさうな。河村自身も職業柄、いろ／＼の表情を研究もし、實見もして來たが、お近の髮を斬つた刹那に見た表情ほど、人間の感情の複雜した凄い表現を見た事はない。河合武雄が巧いの、喜多村綠郎が上手のと云つても、あんな表情は出來ますまいと、或る友人へ話して居たさうな。」

富さんは語り終つて、ホッとした風になりまたシトロンを一氣に飲んだ。

「その後、一度も逢ひませんか。」

三さんが初めて斯う云ふと、天ちやんは、

「まさかねえ、そんな富さんでもあるまい。」

と、熱い燗を立つゞけに二三杯飲んだ。

「不如意の間に育てられて、小學校を卒業するかしない間に、芝居茶屋の女になつた女だもの、萬事が芝居的でねえ、表情など巧いものでしたよ。それに見よう見眞似のバニチーが强くて、指環は欲しがる、美しい衣は着たがる、自働車には乘りたがる、顏の綺麗な男には秋波を使いたがる。刹那〳〵の物慾に滿足する他には、何の希望も何の野心も無い女だけに、萬事が娼婦型の樣でした。從つて妻として母としては、落第の方かも知れないが、妾とか情婦とかにするには、理想的の女であつたがねえ。」

富さんの思ひ出は、遠く江の島の邊に飛で居るのか、但しは近い多摩川の其の月夜へでも、飛で居さうな樣子に見えた。

「何うだい姐さん、今の話に似て居る樣な戀物語を、大抵の男は一つ位づゝ有つて居るが、姐さん達にも澤山有らうねえ、彼所此所と數限りなく……」

天ちやん、少しく醉ひ初めて、揶揄ふと、

「お生憎樣、折角ですけれど、一つも持合せが御座いませんわ。何時も〳〵、もう聞かされたり、見せ付けられたり。妾達は斯うして、人樣の花やかな舞臺に出ます、名も無い仕出し役者で、一生を終るのですわ。ねえ、お芳さん、つまらないわよ。」

年增は年增だけに、一寸、巧い事を云つた。

「だけれど、妾達、これからですわ。だましても、だまされても宜いから、同じ何するなら、死ぬる樣な戀をしたいと思つてよ。」

若いのは若いだけに、若い事を云つた。

三人は此の夜を語り明し飲み明さうとて、更に熱い燗と鍋物とを命じた。多摩川畔の夜は次第に更けて、赤熱した三人の頭腦には、三人別樣の思ひ出が、浮いて居る樣な景色に見えた。歡樂もあらう、懺悔もあらう、悲哀もあらう、苦痛もあらう、追恨もあらう。

「今度、市村座へ行つた時には、橘屋のしる粉を食べ

ながら、お近に似た女を見やう。」

と云ふ事だけは、三人の心に共通したらしい。

今度は、三さんが「勝誇つた戀」を語るか、天ちやんが「捨られた戀」を語るか、何れにしても、富さんは聽者の方に廻る順序である。——二月十三日朝——

天民附記、前號所載拙稿「山田梓華の死」に對して、平岡權八郎、小山内薫、正岡蕨陽、辻通義吉、原紫女の諸氏より、新事實の通告を得たるは、予の深く感謝する處なり。

櫻花

黒頭巾

其一

◉三月十三日、帝都は珍らしき大雪なり。此の夕、客來りて、荒川堤の薄寒櫻、既に、滿開すと報ず。翌、天晴る。乃ち、孤杖飄然として荒川堤に向つて櫻花を探る。看花の人、未だ一人の至る無く、吾輩をして、先鞭の名を爲さしむ。

◉櫻三月といふ。吾輩は未だ雪中の櫻を想像したること無かりし。荒川堤の薄寒櫻は、吾輩に、新趣味を鼓吹せるにならずんばあらず。吾輩の行く時、人に逢つて、同遊を勸むるに、皆、時の早に過ぐるを笑ふを見れば、薄寒櫻は、未だ多く趣味の人に知られざるなり。

◉雪の上に、薄寒櫻の白花、枝垂れて咲けるを見れば、關東の春色、占斷し得て此に在るを思ふ。薄寒櫻の花は、純白には非ず。花片、微紅を潮すること、譬へば病める美人の頰の如し。微紅を潮すと雖も、精彩足らず。枝に滿てる白櫻花、爛熳の氣分を見せず。

◉雪中に咲ける薄寒櫻は、やゝ白梅花に似たり。白桃花に比すれば艶冶の氣足らず。白櫻花は白桃花よりも枝態、裊娜たり。然れども花彩は薄し。

●絢爛たる滿開の櫻花を香雲に擬するものあり。櫻花は芳香を以て勝るにあらずといへども、薄寒櫻は、また餘りに芳香を缺く。薄寒櫻は香無く彩無し。愛嬌無き美人の、人を動かさゞるが如きものあり。

其二

●荒川堤の薄寒櫻は、年々、二月に開くを常とす。去年は節分に開く。今年は、嚴寒の爲に後れたりといふも、尚ほ雛節句に第一花を著く。櫻花としては、餘りに早し。關東の梅花は、往々、薄寒櫻に後る。越ケ谷の梅花、漸く盛を稱するの時、荒川堤の薄寒櫻、早く既に滿開を過ぐるなり。

●薄寒櫻は、花時の長きこと梅花に讓らず。破蕾より凋落に至るの間、殆んど一箇月、恰も梅花の花時と比敵するに足る。櫻の花時の久しき、此の如きものは他に求む可らず。此の花、漸く梅花に近きを見る。

●荒川堤には櫻花の種類の豐富なること、恐らくは海内無雙なるべし。二月、薄寒櫻より開き始めて、四月、八重櫻の凋落するに至るまで、各種の花時、參差、錯落して、其の間、六七十日に渉る。櫻花の名所にして、花時の長きに渉ること、此の如きものは、海内、また他に求む可き無し。

●およそ花の名所たる所以にも、種々の意義無くんばあらず。或は、花彩の美なるを以て、或は花の多きを以て、或は背景の畫趣あるを以てす。而して荒川堤が名所たるは、櫻花の展覽會たるに由る。

●櫻花の展覽會たりといふは、趣味の上よりも、寧ろ學術上に價値あり。美人の愛せらるゝは、人間美貌の標本たるが故に非ず。花の名所たるは、展覽會たるに由つて重きを加へず。これを以て、荒川堤の花は、花時の長きに干せず。其の、能く人心を引くは、春風駘蕩、四月、八重櫻開くの時に在り。

其三

●吾輩、去年秋、築地の南庭に、櫻花の寂しくり咲きするものあるを見たり。其の二三花の、牆を出でゝ、路人を照らすの時、人の、これに留意して驚く者あり。留意せずして經過する者もあり。

●春の櫻花なりせば、牆を出るの花、人に見られざること無し。極めて稀に、珍らしく開くの秋櫻花にして、路人に閑却せらるゝを免かれざるは、還り咲なればなり。

●荒川堤の櫻花は、花種の豊富にして、花時の變化多き丈けに、遲り咲の花も亦時を異にし、踵を接して來り、早春二月より晩秋十一月に至るの間、殆んど數片の遲り咲を見ざることと無しといふ。則ち此の地や、櫻樹、不斷の花ありといふも亦た妨げず。

●遲り咲は花に非ずといふを得べし。遲り咲は必らず寂びし。寂びしき花は人を動かさゞればなり。人を動かさゞるは、花精、すでに去り、花彩、既に褪せたればなり。花の花たる所以は、其の形にあらず、精と彩とに存す。精彩奕々として人に迫るに非れば、不言の花にも非ず、解語の花にも非るなり。

●花は氣分を表現するものならずんばあらず。春の花は、春の氣分を表現し、秋の花は秋の氣分を表現す。花は唯だ象徴（シンボル）なり。

●雪中に咲く櫻花と遲り咲とは、氣分を表現せず。象徴として見られず。花神、未だ來り宿らざるの時、花ひとり開くものといふべし。花は花神の宿る宮殿たらずんばあらざるが故に、花神の不在なるとき開ける花は、花の靈たる所以を有せず。

其 四

●春の盛りは櫻花に象徴せられ、人生の盛りは女に象徴せらる。「櫻姫」の一語は、端無く、這般の興趣を象徴す。駘蕩、爛熳の氣分は、櫻花及び櫻姫の一語に磅礴せずんばあらざるなり。

●櫻花が人の感興を煽るは、花に非ず、春の氣分なり。美しき女必ずしも人を動かさず、妙齡なるを條件とす。人生の妙齡は則ち一年の盛春時なり。

●實在の櫻姫は老ゐて姥櫻となりし事もあるべし、戯曲に見る櫻姫は、絢爛たる妙齡の盛春時なり。妙齡の盛春時に非れば、櫻姫たる所以の感興無し。

●吾輩は、今、櫻花を論ぜんと欲して、偶、去年春、帝劇に「櫻姫」を觀し事を回憶す。近松の描ける櫻姫と、帝劇の櫻姫とを對照し來つて、覺えず、ひとり微笑す。

●櫻草は草なり。櫻の一語を冠するに因りて、限無く優さしくて華美なるよう思はる。櫻花の異名にも、古來、草を冠することあり。花樹の異名を草とすること、可笑しきようなれども、古人は、松柏にすら草の異名を附せり。況して美しき櫻花の木を、優さしく感ずる氣分を表現せしむるに於いて、草の異名を附したるは、古の歌人に在つて、寧ろ當然の傾向なりしなるべ

●古來、櫻花に附するに草の異名を以てするもの、夢見草、他名草、いろみ草、吉野草、曙草、かとり草、もよひ草等の名あり。「風吹けば、いづくも春の心地して、あたりの草も、かとり草かも」の古歌あり。此の歌意、櫻花を以て、陽春の氣分を表現せしむるの意味、明らかなり。盛春の和氣、乾坤に吹き滿つれば、地上の草といへども、悉く櫻花たるやの心地す。則ち櫻花の氣分、草木に磅礴して、春草も櫻花となり、櫻花も春草たらずんばあらざるを謂ふ。

●櫻花の氣分、草木に磅礴するの意味を以て、櫻花の異名に、草を附するとする時は、夢見草といふ如きは、適はしき名なるべし。曙草といふも、曙光に映發する櫻花の氣分を象徴するに、善き名なり。而して草といふに由つて、何と無く、軟らかき嫩々しさを感ぜずんばあらず。

●櫻草は、櫻花の咲く氣分を表現する草なり。草にして櫻草といへば限り無く優さし。然れども其の優美、艶冶、駘蕩、爛熳たる氣分を「人格美」化せしめたる櫻姫の名の美しき哉。

其五

●櫻姫の出現する清水の舞臺は、櫻花の氣分をして、極めて爛熳たらしむ可き檜舞臺なり。人工美を表現しつゝある、莊嚴なる寺の舞臺は、滿開の櫻花に映發し、而して其の間美しき女と男とを映出す。此の刹那に於ける滿場の氣分の凝結せる精華ともいふ可き、女と男とは、櫻花の象徵としての人たる可き氣分を發揮せずんばあらず。

●吾輩が帝劇に見たる櫻姫は、劇の筋も、櫻姫も、これを近松の櫻姫に比すれば、櫻花の氣分、如何にも慊らず。近松が描ける櫻姫の精采煥發せるに對照す可くもあらざるなり。吾輩の往きし時の櫻姫は森律子なり。彼女は艶冶、足らざるにあらず。而して自から抑へて、絢爛の極致を逞しくせしめず。他の女優のは見ざりしかども、いづれも相似たるものなりしならんと思はる。吾輩を以て見れば、櫻姫に依つて象徴さるゝ櫻花美の氣分は、此の如く謙抑、修省したるものにあらざるべし。

●帝劇の櫻姫は、近松その儘に演じたるに非るを以て、其の櫻姫が、近松の理想に適せざるは、必ずしも問ふべきところに非ず。然れども吾輩は、近松に依つて、櫻姫らしきを見、帝劇に現はれたる、忸怩たりし

櫻姫を、櫻姫らしからずと思ふ者なり。

●櫻花は、極めて明かるき花なり。此の花、自から明かるきのみならず、併せて背景をも明らかならしむ。櫻花は、梅花、水仙花の如く、清奇、可憐なりといふにあらず。空に開きて、飽まで華かに、豪蕩、莊麗、必ずしも人に愛憐せらるゝに非ず、却つて、高きより人を見下し、人を愛する放縦の態度あるを要す。

其六

●近松の描ける「一心二河白道」にては、美しき櫻姫は、腰元どもを連れ、清水の舞臺に上り、繪馬を眺めおはします。かゝる處に、三木之丞吉永、美しき男なり。當世の伊達若衆、熊谷笠に、大小差し、下人彌太郎を伴に連れ、瀧の下を通る。笠の中なる人こそ床しけれ。腰元ども之を見て、口々に言ふ。若衆樣見事々々、お笠を取り、お顏が拜みたい。

●彌太郎は三木之丞に、笠を取れといふ。此方で耻かしがる故、彼方で嬲りまする。私が褒めて遣りませうといふ。褒め詞に、よう並んだり並ばしやれた、五人揃つて並ばつしやれたれば、稻荷五社の大明神、御本社の上ろう神、御神體の笑ひ顏、水を芙蓉のまなじり

：：翡翠の島田といふにいはれぬ。申すは愚痴なり、いはねば胸に岩躑躅、紫つゝじ、紅つゝじ、どつこいそつこい及びも無い事、地主の櫻もぉどかしゆござる。牡丹芍藥もふるい〳〵、日本の花ではたとへが足らぬ。彼の釋迦如來の花畑、摩訶曼陀羅華曼殊沙華、寶うへの珊瑚珠、……三木之丞もつゝと出で、同じく續いて、褒め申す。

●はすはなる女の、如何で默して已む可き。中にも、はすはなる櫻姫、團扇をかざし、褒め返していふ、よう仰つた辯舌樣、先に立つたは御主らしうて、たをやかに、しなやかに、のつしりと大樣で、あつぱれ若衆の大將軍、在原の業平に三代の末孫、お供にとつつく伊達介は、心きゝで口きゝで、御顏ばせのあてやかさ、光源氏の鏡の御影、春日の作の兒文珠、……ようよう若衆の開山さまといふ。扨々、はすはなる事かな。

●はすはといふは、必ずしも櫻姫の本領に非ず。櫻花の特徴といふにもあらず。然れども絢爛、駘蕩たる櫻花を人格化せしめば、はすはと見ゆべく、はすはといはるゝまでに非れば、本領を發揮したりといふを得ざるべし。櫻花は、しめやかに、をとなしく、つゝましき花に非ず。光り輝ける、はすはなる花ならずんばあ

らず。

其七

●櫻の字は支那に出づ。然れども支那には日本の所謂櫻花無し。櫻は木をいふ。花を意味せず。發爲二萬朶櫻一と東湖が歌ひしも、支那詩人には諒解せられざるべし。

●支那人は、美人を形容するに、梨花一枝帶二春雨一といひ、或は雨に惱めるは海棠を引きて喩ふ。つねに雨中の情趣を說くを見れば、彼等の民族性の、吾が日本人と大に異なるものあるを見るべし。雨は詩情あるも陰性たるを免れず。麗らかなる霞の日和に、櫻花の爛熳たるが、日本人の性情に適合するに孰れぞや。

●吾が邦にて、陽春の氣分を、一抔に表現せしむるものは櫻花ならずんばあらず。王安石に、辛夷花發白如雪、萬國春風慶將時の句あり。陽春の氣分と國民的感情とを融和せしめたる詩なり。我が詩人ならしめば、此の場合に辛夷花を夢想せず。直ちに櫻花を歌ふ可きところなり。櫻花は、國民的性情を表現すればなり。

●我國の櫻花は世界に無し。西洋にも亦た見ず。其の原產地は未だ詳かならず。他に求めて得ずんば、日本を原產地とするに於て妨げず。或は、比馬零山地の中に、略ぼ我が櫻花と同じきようの花ありと聞けど、其の播布の區域廣からず。其の播殖せざるを見れば、彼地よりも、我が日本に適するの花なるを知る。抑も比馬零山中に、假令原產地ありとするも、これを以て、櫻花と佛教とを聯想するは大早計なるべし。

●櫻花が我が邦に適し、我が邦、獨特の花たるは畢竟、櫻花が我が地氣を象徵しつゝあるものなり。地氣を象徵するは。則ち民族を象徵する所以ならずんばあらず。

其八

●櫻花は我が地氣を象徵し、日本人を象徵す。これを橫さまに見れば、我が人生、眼前に、日本の風土、人物を表現し、縱に見れば我が國史に沿ひ、其の落花紅は國史の流に浮ぶ。日本の人物と言へば、櫻花を背景とせざるは無く、日本の風景といへば、必らず櫻花を點綴せざるは無し。日本を櫻花國といふ所以なり。

●兒島高德が櫻を削り詩を書するの一事は、其の事實を抹殺するも、其の精神を抹殺するを得じ。此の事、櫻花が國史に薰ずるの嚆矢とす。此の如き事實、眞に有りしや否は、抑も、詮索の限に非ず。櫻花が日本人

か、日本人が櫻花乎、花と人と契合して涵養せる一種の性情は、計らず流露して、此の傳說となれるならずんばあらず。

◉太平記の作者は、史家として何程の價値ありやは、吾輩、玆に闡明するを要せず。此の一事を以て言ふにあらず。彼の文才は、兎に角、民族性を筆端に流露せしめたるなり。彼は精練なる史筆を有せずとするも、試みに、此の一事の筆を以てするも、國民的詩人たるを失はず。

◉我が國史を繙いて、其の民族性を發揮し得て、痛快なる處に到れば、櫻花、片々、紙上に點ずるの思を爲すべし。而して我が眼前、春風駘蕩、櫻花の咲き誇れる間に、時々、刻々、我が歷史は作られつゝあるに非ずや。

◉日本民族の發展史は、墨汁を以て書かれず。櫻花汁を以て書かれたり。書く者の血管に、櫻花の氣分流通し、讀む者は櫻花の汁に醉ひ、心臟は其の醉に鼓動しつゝあり。日本の國土は櫻花の精彩を煥發せしめ、櫻花が日本人の性情を涵養しつゝあること此の如し。

其九

◉櫻花美の一半は散るに在り。櫻花と梅花とは落花せず。落花の畫趣は此の二者には無し。梅花は落つること無くして凋む、枝に獅嚙み附く。櫻花は凋まず、落つること無くして、飛んで舞ふて散ず。風無しと雖も、ひら〳〵として散る。櫻花は、宜しく之を飛花、散花といふべし。

◉天花繽紛の畫趣は、唯だ櫻花にのみ在り。櫻花の散るさまをば、唯だ何心無く、見耽るを要す。櫻花の眞も、善も美も、皆、此の中に在り。

◉「木の下は、汁も膾も櫻哉」といふは、餘りに寫眞めきたる俳句哉。櫻花の飛花美は、落ちたる後の事を言ふにあらず。枝を離れて飛び、散り、舞ふ間に在り。唯だ散れ、散れ。美しく散るものは櫻花なり。櫻花は、散らんが爲に咲く。散るは櫻花の使命ならんずんばあらず。

◉「三月見ぬ間の櫻」といふ事あり。世人、多くは、其の開くの倏忽なるの意に取る。此の語、また移して以て、其の散るの突如たるにも譬ふべし。寧ろ散るとするに於て興趣、更に深し。三月見ぬ間に櫻は散る。散る櫻を見ざれば悔多かるべし。

其十

◉散る櫻には、種々の感興あり。古今集に、散る櫻に、無常を觀ずの歌あり、「あだなりと名にこそ立てれ櫻花」といふ。或は「あすをも知らぬ今日の命を」といひ、「かゝる浮世に、散るを見るらん」といふ。すべて淺薄なる觀察、佛教より出で來る。

◉高天原(タカマガハラ)の日本人、櫻花を見しとせば、散る櫻に悲觀せず。飛來紛々たる中に、手を拍つて歌ひ舞ひしなるべし。散る櫻に泣くは、日本人の本色に非ず。吾輩を以て見れば、天は、散る櫻の花を賜ひて、美しき日本の風景を飾りつゝ、兼ねて、日本人の氣魄と趣味とを涵養し來れるならずんばあらず。

◉散る櫻は女々しからず、寧ろ雄々し。落る椿の花には、地上に、無常の響を印するやも知れず、散る櫻は、空に、「畫趣の淨土」を現出す。櫻の咲き滿ちてより、其の燎亂して散るの時、此の世から天人の音樂の聞ゆる心地するなり。

◉櫻花の未だ開かず。花神の扉の、未だ鎖されて在る時、現世を呪ひし者も、櫻花の綻び初むると共に、其の顏も解けそめて、次第に崩れゆき、「理想の實現」に近づきつゝある享樂を感ずべし。吾輩は一茶の『此のよふな末世を、櫻、花だらけかな』の句を愛す。此の句は、這般の心境を歌へるものならずんばあらざるべし。

◉櫻花よ、散れ。散る櫻は、何人にも興趣を與へ、神來(インスピレーシヨン)を起さしずんばあらず。『姉は丸山に、妹は島原に、櫻花かや、散り〱に』の一節、感興言ふ可らず。「散り〱」の一語の趣味、歐洲の詩人、千古、未だ嘗て解道せず。

◉散り〱の櫻の花片に對して、散り〱の姉妹を憶ふ。何等の情調ぞ。大將福島が、單騎、西比利亞を踏破せし以前に、早く既に、此の索寞たる「世界の端」に、『後のカチユーシヤ』の如くに、さすらひ、天草の女ありといへり。爾來、今に至つて、一世紀の四分の一を過ぐ。女は、散り〱に、大風に飛ぶ花片と共に、萬里の天外に飛び散りしもの幾干ぞや。峯を踰えて遠山櫻の花の飛び行く如く、思ひ掛けぬところに、美しき花一片、散り來れるを發見するなるべし。

◉一片の飛花にも花精あり。此の如く散り〱に散り行く花瓣(ハナビラ)の女にも、櫻花の情懷ありと知らば、風雨に撲たれて、天涯の溝壑に委しつゝ、ある泥まみれの花片

を憐まずんばある可らず。漫に、櫻花國の散る女を笑ふこと莫かれ。

其十一

●「咲いた櫻に何故、駒繋ぐ。駒が勇めば花が散る」情趣は、何故の一語に在り。何故は詠嘆の意あり、駒を繫げるを咎むるの意に非ず。

●花を散らすは惜む可しと雖も、若く輝ける春駒の勇みて、花の奔蕩して飛び散る。花の飛び舞ふて、高く散るものは霞に入りて見へず、天花の繽紛たる中に駒の躍る。何等の畫趣ぞや、逸興ぞや。此の如き「活ける詩」は、駒を、咲いた櫻に繫ぐに非ざれば見られず。駒を繫げる者は、心無くして繫げるや。心無くして繫がば、青き杉の下に繫ぐも妨げず。這般の畫趣を豫期して繫げるにや。他に繫ぐ可き木の無かりし故に、偶然、繫げるにや。咲いた櫻に駒を繫げる者は何人ぞや。何故に繫げるぞや。

●咲いた櫻の下に立てる女は、ハイカラなるよりも、文金高島田なるが可し。小袖幕を張つて、丈けに餘れるみどりの髮を結べる文金高島田の、あてやかなる女の、鈴を張つたる目の微見えて、幕の中に、天下の春を籠めて、櫻花を以て包みたるは、浮世の人に示さんばかりに非ず。「春の神」も、密と霞の扉を推して見玉ふべし。此の刹那、風ありとも見へず。盛りの花瓣、三つ、四つ、五つ、落ちてひら〳〵として小袖の幕に散りかゝる。

其十二

●櫻花の名所には寺多し。寺の櫻は、何と無く風情あるものなり。寺は、地の閑にして、花彩を對照せしめて、花に對する感興を沈著、深實ならしむるのみならず、僧の閑にして花を培養するにも適すればなるべし。眉雪老僧時輟レ帚、落花深處說二南朝一の詩趣は、寺の櫻の特有するところに屬す。

●櫻花は寺に調和するに非ず、背景に對照するの妙味に在り。閑境は閑情を生ず。然れども一脈の生氣、其の間に活躍するものあるに非ずんば、閑情は續かず、忽ちにして其の性命を失ふ。閑情は盆栽の花の如し。或は、擂餌を以て小禽を養ふが如し。閑情を培養するは、軟に流る可らず。硬に傾く時は本領を失ふ。培養の味、微妙の間に存す。

●寺の閑情と閑趣とは、我が邦の詩境に於て、一個の

別天地を占領す。如何に幽靜の茅廬を築き成すとも、情趣の寺に似たるものを得る能はず。書を讀み、文を草し、想を練り、思を運らし、悠然として刹那の境遇を樂むこと、寺に於てする如きは、また人生の清福事たり。時に、境遇を味ひ、時に、風景を味ふべし。寺が信仰の空氣の中に立ち、「永遠」に對する情調の漂ふものあるは、寺をして這般の感興を磅礴せしむる根本義たらずんばあらざるべし。

●寺の閑情、閑趣は、幽寂なる佛教の氣分と、「永遠」の情調の上に立つ。此の悠遠、幽寂なる空氣を動かすに、極めて華やかに開きて散る櫻花を以てす。寺の閑情を培養す可き微妙なる摺餌は光彩、明らかなる花なるべし。而して櫻花を以て、特地に、其の適者となすこと、譬へば須彌壇の黃金佛、天井の天女の舞に於ける詩味の如くならずんばあらず。

◉寺の坐敷の幽にして、庭の古りたる、苔厚く石滑らかにして、樹影を照らす日色の冷やかなる。春來、一樹、櫻花の絢爛たゝもの無かりせば、滿眼の風物、すべて幽殺されずんばあらず。此の時、櫻花、開きて精彩動半空に揺曳す。限り無き閑情、限り無き靈動を覺ゆ。

◉寺は町の中なるも佳し。山寺なるも佳し。京都の寺の櫻に、細雨の蕭條、雨糸、見へつ、見へず。天造の友染圖を、靜かに張れる如きも佳し。田舍寺の秋は、銀杏樹の金葉に照らさるゝが、春は、櫻花に浮び出るも佳し。

●山寺には櫻を植う可きものなり。櫻花無ければ山寺無きなり。笠といへば杖といふ如く、寺といへば花壇無くんばある可らず。但し花壇に、其の大小、花種の如何の奈何、必ずしも問ふを要せず。唯だ華やかなる盛りの櫻、一本あるを要す。

◉寺の櫻花は、閑情を性命とす。詩を賦し、毫を揮ひ、芳醇を細酌するも妙なるべし。碁、將棊も面白かるべし。華々しき歌舞には適せず。寺、山寺の櫻花を觀るは、茶氣と野趣とを帶ぶるに非ざれば、油乘り來らず、木の芽の田樂が、美味を逞しくする舞臺たる所以なり。

◉山寺の和尙の境涯こそ野趣あるものなる可けれ。其角に「饅頭で、人を尋ねよ山櫻」の句あり。町の詩人より見れば、山寺の和尙は、此の句中の人なる可くも思はるゝやも知れざれども、和尙、案外に、饅頭を好まず。朝な夕な、爐上の自在鍵を上下して、手製の澁き番茶に、咽喉を濕ほしつゝあれども、彼の理想は、ポカく暖かき三月の山櫻花下の般若湯に存せずんばあらず。

●「山寺の和尚さん」が、麗長閑なる裏庭の坐敷に、般若湯に蒸されたる円顱の頂に霞の立ち籠むる時、照り添へる櫻花の光に醉ひて、興に乘りて、フラ〳〵として、毬を蹴らん事を思へども生憎、毬無し。猫を紙袋にドシ込んで、ポンと蹴りて、ニャンと鳴かすは此の時なるべし。

●町の寺は、却つて山寺の陽氣なるに及ばず。晴れたる午も、豆腐屋の濁聲、遠く聞えて忙がしからず、裏の野菊畑に、雄鷄のクヽと雌を呼ぶが、雅致を帯びて聞かる。本堂の椽に、子守女の腰掛けたるあり、立てるあり。鐘楼に近くして櫻花、咲き滿ちて閑靜なり。

●暮の町の寺こそ詩趣多きものなれ。日、西山に傾き、暮烟、町を籠めて、街燈の光に交じれる、なほ薄く殘れる夕陽の影の、次第に、淡く褪せ行く頃、町の寺にては、恰も濛氣を帯びたる波上に、海獸の群の出沒しつゝ、既にして漸々、濛氣の濃くなるに隨ひ、波を潛ぐりて、見へずなるように、墓地の、一面に、石塔の頭ばかり、僅かに淡く、暮靄に浮びて殘る頃、鐘聲ゴーンと響き、櫻花、ハラ〳〵散る。

其十三

●櫻花は、古來、人格化して見らる。兒櫻、稚櫻、老櫻、櫻人等の語あり。人の年時に譬へたるが多く、人の性格、境遇、運命に擬せるは稀なり。吾輩を以て見れば、人、花の如く、花も人の如し。花も亦た人の性格、運命、境遇を有するを見るなり。

●形式の整齊、富貴にして、官僚らしきは官僚櫻なるべし。正しく集合して植えられたるは軍隊櫻乎。瘠せたるもあり、肥えたるもあり。正月十六日頃、咲くといふ伊豫松山の山越の十六日櫻の如きは、識見の、餘りに現代に先だち過ぎたる、江戸時代の蘭學者の如き櫻なるべし。遲り咲きは時代後の櫻なり。

●櫻花には、又た木の高きもあり。低きもあり。すねたるもあり。順なるもあり。舊式の、型に適りたるもあり、極めて新らしきもあり。公園の櫻は、都會の人の如く、畑の中の櫻は百姓の如く、名苑に培れたるは箱入娘の如く、紀念の手植の櫻は、人の銅像の氣分あり。名所の櫻を見れば、地方の中心人物を見るが如く、盆栽の櫻花は雛人形の如く、されど櫻花は盆栽には似合はしからず。

●櫻花の、珍らしき色彩を爲せるは、著るしく、珍らしき色、柄の裝を凝らして、人目を惹きつゝ、路を行

く男女の如き乎。峠の茶屋に、見事なる櫻花の、軒に咲きかゝりて、女の無愛嬌なるは、花も、ひそかに愧べし。思の儘らしき處に、傍若無人に咲けるは浪人櫻なる可く、端嚴、謹愼の態度を以て、豊かに匂へるは右近、左近の櫻なるべし。

◉吾輩は、郷國を出で、始めて東京に來りし年の翌春、大學の庭に高く櫻花の開きて、樓上の窓に倚って見れば、花、相語らんと欲するが如きものあると見たる時、忽然として、花近高樓傷客心の句を想起せずんばあらざりき。但し、杜甫が、此の詩を作りしは、櫻花に對してには非ざりし。

◉此の春の、櫻花の盛時は、總選擧の最中なる可ければ、無情の戰塵、花を掩ふにやあらん。花に耽りぬせで、東西に奔走しつゝある人の心を、櫻花は、高く、空より冷笑するなるべし。

其十四

◉櫻花は、葉櫻となりて、更に可し。葉櫻といへば、素袷を聯想す。素袷の時は、一年の、尤も爛熟したる享樂時、而して素袷の氣分を象徵するものは葉櫻ならずんばあらず。

◉十年前、讀みし誰やらの句に、「葉櫻の疊に映つる月夜かな。」鳴雪の評に、細君は洗髮にしてとありしを憶出す。今日、櫻花、未だ駘蕩の節に入らず、吾輩、既に、葉櫻の蔭に夢魂飛ぶ。

◉葉櫻は、秋、黃葉、紅葉する時、頗る畵趣あり。雨の如く散る葉、尤も好し。葉櫻は夏初に好きのみならず、秋初の氣分に好きこと此の如し。吾輩、今、海岸に來り煙草を喫ひつゝ此の稿を畢る。日本の櫻は、チエリイの如く、パイプに宜しからず。櫻花に關する吾輩が筆、未だ盡きず。想、湧くこと、欄前の帆影の如し。而して紙と煙草と恰も盡く。

◉櫻花の破蕾の前、春光、先づ梢より生ずるを見る。數千の枝端、花芽を含んで微に紅を抹し、枝頭、嫩かく、軟かく、細くなりて、垂れて天半に動きつゝあるように見ゆ。春初に、細くなり行ける櫻花の枝頭は、毛細管引力の水分を吸收する如くに、枝頭より春の氣分を吸收するならずんばあらず。

稿畢って、筆を措いて、海を望む。帆影、鷗影を越えて海の彼岸に遠く、南に、北に、櫻花を移して、花の蔭に、我が民族のひろがり行かん事を思ふ。

黑頭巾再記

豫約出版

訂正増補

大日本時代史

日本古代史	文學博士 久米邦武
奈良朝時代史	文學博士 久米邦武
平安朝時代史	池田晃淵
鎌倉時代史	文學博士 三浦周行
南北朝時代史	文學博士 久米邦武
室町時代史	文學士 渡邊世祐
安土桃山時代史	文學士 渡邊世祐
徳川時代史	池田晃淵
幕末史	文學士 小林庄次郎
維新史	文學士 本多辰次郎

本史は完備大成せる本邦唯一の時代史なり、往年の發表に際し天下の耳目靡然として本史に集注し空前の好評を以て迎へられしは一世の倶に知る所なり、爾來本史は本邦史の最大權威として**史界の重望**を荷ひ、文部省公布の圖書館標準目錄に於て**必備の重要圖書**として選定せられしにも拘らず、豫約以外に之を頒たざりしを以て坊間に絕えて之を見ず、江湖の之を憾める實に一朝一夕に非ず、本史の著者は或は修史局に或は史料編纂所に修史の事に從ひ或は官省の機密古文書を管して世間未知の史實に精通せるを以て、片言隻句も**史論の典據**とせらるゝの榮譽を荷へるものたり、本史の好評ある豈偶然ならんや、今改版に臨みて記事に**大修正大增補**を加へしのみならず、行文の難解なるものは之を暢達平易に改め、難字難句には傍訓注脚を施し、全然その面目を一新して一般讀書界の要望に應ぜんとす、本史は豫約以外に販賣せざるものなるが故に加盟の好機を逸せざらんことを切望す。

內容見本 はがきで申込次第直に送呈すべし

體裁
菊判布製美本
全部拾貳册
紙數六千五百册
寫眞版、木版、口繪等三十枚入

豫約價
甲種(申込と同時即金) 金拾貳圓
乙種(一圓廿錢宛分納) 金拾四圓四拾錢

送本費

	一回	十二回
東京市內	四錢	四十八錢
內地	十二錢	一圓四十四錢
鮮臺樺支	廿五錢	參圓

申込 大正四年四月卅日限り

送本 大正四年五月より、毎月壹册發行

豫約元 東京牛込早稻田 **早稻田大學出版部** 取次所 全國各地書肆

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

フリードリヒ ニイチエ 原著　早稻田大學教授 金子馬治譯（現代哲學）第三編

新刊

悲劇の出生・善悪の彼岸

脊皮上製全一冊　正價金貳圓廿錢　三千部限り特價　金壹圓八十錢　郵稅金十二錢

世界的名著

ニイチエ思想の理解の秘鍵！

平和と安樂とを來たさんがために非ず寧ろ苦悶と戰闘とを此の世に大ならしめんがために生れたるがニイチエ也。現代文明の滔々たる逸樂的廢頽的衰滅的傾向に反抗して西歐思想壇の中央に蹶起し、全歐を戰慄せしめたるディオニソス的大獅子吼を揚げたるがニイチエ也。彼れが精神的戰闘主義は明かに西歐純粹ロマンチシズムの精髓にして又世界的近代思想の隨一たり。我國に於ては從來此天才に關する適當なる譯書を缺きしがため今日尚彼が眞精神を理解せる者極めて少なし。本書は彼れが根本思想の理解のためには最便宜にして且最著名なる二著述を忠實に譯出せるもの、讀者は之れによりて初めて深くニイチエ思想を翫味するを得べし。深刻なる思想精神の錬磨愈切なる今日廣く我讀書社會に向つて敢て此世界的名著を推薦す

ベルグソン原著　金子馬治、桂井當之助共譯（再版）

現代哲學第壹

創造的進化

正價二圓廿錢　特價一圓八十錢　郵稅十二錢

ヒルン原著　本間久雄譯

現代哲學第二

藝術之起源

正價壹圓八十錢　特價一圓五十錢　郵稅十二錢

十版　文學博士 桑木嚴翼著

縮刷 哲學概論

三六版天金函入本文九ポイント活字五百四十頁　正價壹圓　郵稅金八錢

發兌　東京牛込早稻田 振替一一二三番　早稻田大學出版部

（賣捌）東京堂、至誠堂、北隆館、東海堂　大阪盛文館、名古屋星野文星堂、其他

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

印度 ラビンドラナート タゴール著
W.B.イエーツ序文 増野三良譯

印度新詩 ギタンジャリ

■哲人の來遊に先立つて『歌のささげもの』と呼ぶ至純眞卒なる此詩聖の名譯篇出づ

夜と曙とを象徴したる詩集 定價金九拾錢 送費八錢

見よ東洋の寂しき曙に新しき生命の豫言者現はれたり。その光輝は今や全世界の人心の上に及ばんとす。ギタンジャリは實に眞卒直截に新生を欣求せるささげのうたにして何人の心をも更新す。タゴールの眞生命を窺知し得る唯一の詩集也。長篇の解説を附す。

新刊四種

街上不平
土岐哀果著 ■詩歌集■
菊半截美装 定價八十錢 送費六錢

著者近業の詩歌を收む著者の詩は都會に住みて劇務に從事せるものの生活を謳へる歌として異色あり。

マンダラ
■マンダラ詩社第一詩集
菊判函入美装 定價七十錢 送費六錢

蒲原有明 野口米次郎 三木露風 上田敏 河井醉茗 北原白秋 澤村胡夷 富本憲吉 合著

善惡の觀念
イエーツ原著 山崎允譯 ■文藝美術の論集■
四六版五百頁 定價壹圓廿錢 送費八錢

「新しき藝術家の聖書」と稱せらる、イエーツの論集の全譯也。愛蘭文藝復興運動の主將、象徴主義神秘主義の詩人、劇作家としての著者の藝術的信仰の表白を聞け

さくら草
與謝野晶子著 ■詩歌集■
三六判總洋布 定價壹圓 送費八錢

女史の近詠四百餘首に添ふるに新詩三十餘篇を以てす。「さくら草」一巻は新春詩壇の先驅たり、又第一の光輝たるべき乎。

發行所 東京市日本橋區檜物町九番地 東雲堂書店 電話本局一八七一 振替東京五六一一四

(中付二の四)

人物評論（五十八）

平沼檢事總長論



△平沼騏一郎論

法曹界の一人

▲平沼も大學を出てから二十五年である、平沼より數年後の大學卒業生たる若槻が、既に大藏大臣たること二回であるとせば、平沼の檢事總長たることの必ずしも平沼の名譽でないかも知れぬ、年俸五千五百圓の平沼を買ふべく餘りに廉價である、然しながら平沼の平沼たる所以は、實に此處にあるのである。

▲平沼は大學を卒業してから、司法省に任官して、曾て其埒外に出たことがない、即ち試補となり判事檢事となりて、區裁判所、地方裁判所、控訴院大審院を經由し、司法省參事官、民刑局長、司法次官となり、更に檢事總長となつたのである、他の榮達を羨まずに司法省に終始して居るところに平沼の面目がある、平沼の長所と短所とがある、實を云へば此一事即ち平沼の批評の全幅と云ふても差支ない。

▲平沼は官吏としてよりも、先づ學者として顯はれてあつた、平沼の民法總論、刑法論は平沼自身の如く、直截簡潔、多くを言はずして理義の在るところを說明して居る、帝國大學講師たりしこともあつたが、矢張り此の摘要的解釋で通して居つた、平沼の講義は其理事たる私立日本法律學校（今の日本大學）に於て、久しく一種の權威を有してあつたのみならず、各私立法律學生をして、他と異る一種の感味を得せしめてあつた、明晰なる頭腦、緻密なる質問、判檢事辯護士委員としての平沼は、受驗者の暗礁として目せられたとのことだ。

▲平沼は今の日本大學の理事として、久しく其經營に從事して居る、松岡校長、石渡學長を輔佐して、兎も角も日本大學の基礎を建設したのである、日本大學が其講師に判檢事辯護士試驗委員の多くを網羅して、入學生を誘ふことに付き、世間には可なりの攻擊がある、或は平沼を以て一種の才人なりとするものもある位だ、然しながら之れは平沼を知らぬものの言であると思ふ、平沼は自信の人である、司法省を自個の手中に握つて居る平沼は、自個の信ずるものを試驗委員たらしむるのである、隨つて自個の信ずる試驗委員の大多數を自個關係學校の講師たらしむるのである、平沼は學校商賣を解するやうな男でない、而して平沼の此の自信は一昨年の司法省大改革を促したのである。

▲今日の司法省は勿論平沼のものである、如何なる人が大臣となつても、また平沼が大審院に居つても、平沼は事實に於て司法省の支配者である、故に平沼に取りては大臣が司法部の內情と事務とに通ぜぬことが、最も其手腕を施す場合である、事務家を氣取らずに、また政治家を氣取らずに、英雄的の大臣であることが、平沼の希望である、故に平沼は歷代の法相中、不得要領中に要領を寓した故松田正久を最も推奬して居る、同じ茫漠型でも、岡部長職は全權公使、次官などをやつたことがあるので、偶には實務に容喙することもあつたそうであるが、松田は全然平沼に委せて居つた、而して斷の一字をのみ平沼に與へた、實に是れ平沼得意の絕頂であつたのである、此意味に於て立憲的政治家を以て任じて居る尾崎の下に次官たらざりしことは、平沼の幸福である。

▲司法省の小改革は屢々行はれてあつたが、一昨年四月の大改革は、平沼をして毀譽の焦點たらしめてあつた、三四の大審院判事、六七の控訴院の首腦を斬り九十餘名の判檢事に休退職を命じ、二百名近くの轉任を行つたのである、天下は囂々として平沼派の專橫跋扈を攻擊した、年俸三千七百圓の局長たる齋藤十一郎を大阪控訴院長に移して、一萬五千圓を與へ、三千五百圓の東京檢事正たる小林芳郎を大阪控訴院檢事長として四千五百圓を與へ、後進の堀榮一、横田五郎の如きを京都、横濱の地方

裁判所長たらしめたところなどは、充分に非難の原因をなして居る、然しながら平沼は自信の人である。自信以外一歩も出ることの出來ぬ男である、己れの信ずるものは飽迄之を遂行せしめ、信ぜざるものは之を排するのである、平沼には反省がない躊躇がない、商量もなく比較もないのである、平沼は斯くの如くにして多年司法省の官吏判檢事を任免して來た、今日の司法部が平沼黨を以て充滿して居ることは、寧ろ當然の歸結と云はねばならぬ。

▲平沼は正義の人である、平沼の修禪も恐らく正義を遂行する腹を据ゆる爲であらう、平沼の無妻も恐らく正義を紊すことを恐るゝが爲めであらう、而して平沼は自個の自信を以て正義と合致したものと考へて居るから溜らない、自ら信ぜざるものは悉く之を擊つのである、其學其識に於て、其德其勇に於て、司法官中の雄であつた函館控訴院長一瀨勇三郎の退職の如き、一瀨が平沼に對して常に一敵國の觀があつたからであるまいか、平沼は自信の人なるが故に、他の言を容るゝことが出來ない、隨つて狹量である獨斷である專横である、正義の人たる平沼が、司法部に在ることを最も適任とするが、全國の司法官をして悉く平沼の風を學ばしめ、民意を探ること能はず、異色を收むること能はず、所謂檢事閥の如き、昔時の專制官吏の如く固つて、天下の大不正義を實現して居るのは、其罪の一半は平沼にあるのである、博士大場が司法省に志を得ず、平沼を追ふて大審院に走り、却つて其排斥を受けて野に下りしが如き、平沼及び平沼系の官僚主義の餘弊である。

▲今回の總選擧取締方針の如き無論平沼の手腕から出たものである、取締費用の一部七萬圓を檢事局に移さしめ、警察部以外、檢事局直轄の檢擧を斷行したことは、大に賞すべきであるが、其遣り方が細微に失して非常識に陷り、天下の民を悉く罪人扱ひにしたところなどは、平沼の短所を暴露したものと云はねばならぬ、況むや檢事局が選擧運動者、有權者のみを視て、行政官が取締の名の下に間接の選擧干渉を試みたことを傍觀して居つたことなどは、平沼の官尊民卑癖を表徵したものであらう、かうなつて來ると平沼の正義も少々怪しいものである、

▲平沼は新聞記者嫌ひで有名である、隨つて訪問客に接することも嫌ひである、自ら信ずる平沼は、他人の言を聞くことを求めぬからである、二三年數次の內閣變動に際し、小山温、鈴木喜三郎等を進めて次官たらしめ、自ら終身官たる檢事總長になつたことを以て、平沼を當世才子とするの酷なるは勿論であるが、訓練研究を缺きたる平沼の正義は、遂に平記を英雄、大人、君子たらしめぬであらう。

△兄の觀たる騏一郎

平沼淑郎

騏一郎と私とは、戶籍面では一年違つてゐますが、本當には數へ年の二つ違ひです。私の九歲の時――ですから、彼の七歲の時、私共二人は

國元から東京へ遣つて參りました。其頃は蠣殼町の藩邸に住居することになり、私共兄弟は常に一室に起臥を倶にし、相勵み相戒めて勉強したものです。私共は其室を特に且濡樓と名付けました。

恥を申上げねば解りませぬが、兎角する中に親が病氣に罹り職を辭するやうになりましてから、私共の家道は衰へ、吾々も今日の所謂苦學生の身の上となつて了つたのです。筆耕をしたり種々様々の艱難を經て來たものです。今でも兄弟相寄ると、其頃の苦心を語合つては互に相慰めてゐます。私共の母は夙に亡くなり、七十餘りになる老祖母と、尚幼い妹とが居りましたが、その小い妹が炊事をし、祖母が家事一切を引受けて遣つてゐたのですから、お互に具に辛苦を嘗めたとは一通りではありません、今日でも親戚の子供や何かが贅澤な眞似を仕度がつたりすれば、其當時の私共一家の生活の有樣を語り聞かせて戒めてゐます。ですから、私と弟とでは其性質に於て相異つてゐるところがありましても、贅澤をしないといふ點では一致してをります。

弟は幼少な頃から極めて寡言な人で、寧ろ沈默な人でした。其點は僅かに私とは違つてゐるので、私は可成口の達者な方ですが、弟は餘り口を利きません。その代り一旦口を開けば動かすべからざるものがありました。幼少の時分の性質は多分未だ殘つてゐることと思ひますが、少い頃から剛毅端正といつた風で、正義に對しては、昔から今まで、一歩も讓らぬことだけは信じてゐます。

弟は公務を勉強の傍ら、日本國體の因つて來る所を知るには古代史の研究に如くはないといふので、餘暇餘暇には種々の材料を蒐集して、之を一生の事業としてゐます。

趣味としては、私共二人とも繪畫が好きです。今から觀れば無論拙い物ですけれど、これで二人とも自ら筆を執つて畫いたものです。二人とも歴史が好きでしたから、色々の古實を聞いては、主に戰記に關する繪を描いたり、彩つたりしました。娯樂としては寶生流の謠曲を好んでゐます。今日でも私よりは上手です。沈思默考の人ですから碁は比較的強い方です。手合せは見たことがありませんが、天野博士ぐらゐのところかと思つてゐます。庭の手入れも氣を附けてはゐますが、公務が忙しい爲めに左程心を潜めてゐるやうにも見えません。

かういふ性質の男ですから、逸話といふ程の逸話もありませんが、何時か新聞に出た、鬪犬が好きで云々といふのは、あれは全く誤傳で、實は一時居合拔の稽古をしたものです。その時の下女が、主人が毎朝々々座敷の眞中で、刀を拔いて振り廻してゐるのを見て、當家の主人は多分狂人だらうと思つて逃げて歸つたといふ事實があるのです。それを誤り傳へて鬪犬が好きで云々の新聞種を作つたものらしう思はれます。誤傳といへば、妻を離別して、今では獨身生活を送つてゐるのは事實ですが、是れは健康が良くない爲めで、早く妻を迎へる事は吾々親族一同の希望する處なのですが、醫者が許さないのです。但だ海軍少佐の未亡人の子を仕立てゝゐるといふやうな噂は全く虚傳で、私の娘の婿が海軍少佐であるからでも來たのでせうか。

餘り親しく接してゐるせいか、特に之と言つて申上げる程の事も御座いません。殊に私から弟を論評する事も出來ません。餘は他の賢明な諸氏にお委せする事と致します。

△同級生の觀た平沼君

鹽谷恒太郎

平沼君は明治二十一年に大學を卒業した。同窓には、今大阪に居る平田讓衛、柿崎欽吾などいふ人も居つたし、前の民政長官大島久滿次、横濱の辯護士會長をしてゐる小出鋤太郎、遞信次官であつた小松謙次郎、次席檢事の鈴木宗言、大審院檢事の棚橋愛七、それから松江裁判所長の佐藤信などいふ人々は皆同窓の友人である。

君が大學に入つて一二年の間は、さして優良な成績といふでも無かつたが、卒業近くになつて嶄然頭角を顯して、其頃教授であつた岡村博士も『平沼が一番頭腦がしつかりしてゐる』といふ意味の言を云はれたのを覺えてゐる。

君が在學中一番懇意に交際したのは、東北大學長の北條時敬君とか、一昨年物故した京城の高等法院の評定官平山銓太郎君とは特に別懇の間柄である。君は其時分から修養の爲めと稱して、漢籍或は謠曲を勉强した。中にも禪學は君の最も造詣するところで、確か鎌倉の釋宗演は君の師であると覺えてゐる。

君は誠に寡言沈默の人であつて、友人同輩相會する場合にも、極めて口數の尠ない、從つて失言の禍を招くなどの事のあらう筈がない。君は卒業後間もなく妻を迎へたけれど、不幸にして子なく、遂にこれを離別した。それ以來今日まで未だ獨身の生活を續けて居るのであるが、頃者君に會つた時にも其話が出たが、それは君の健康を大切にするが爲めであつて、今一つには君の性格から妻の必要が殆どないといふ意味の事を言つて笑つて居た事がある。

君はいかにも意志の堅固な人であるが、自分の知己朋友に對しては、亦極めて友情に厚い人である。一度信頼されると、假令幾年を經過しても、何かの機會に其友人を援けねばおかない、從つて今日司法部内に於ても、眞に君を崇拜する人は、其崇信する事、實に神の樣であると言つても過言ではない。

先の海軍收賄問題が起つて、三井の重役を檢擧するに就ても、是が爲めに我が經濟界に影響の及ぼす事のない樣に、君が苦心を重ねたことは實に一通りでなかつた相である。是が爲めに國家に及ぼすところの利害關係が、事件其物よりも重大であつてはならないし、一面に於ては、三井銀行の經濟界に於ける勢力をも失墜せしめてはならないと言ふ事に非常に細心の注意を拂つた相である。

これは機會があつたならば、一般實業界の人々に、話し度いと思つて居る事であると言つて、曾て君が話した事であるが、我が國現在の實業

界には、種々の惡風がある。若しそれが法に觸れた場合には、三井銀行の重役にすら猶且容赦は出來ないのであるから、他の實業界でも、此邊愼重の注意を拂つて貰はねばならない。若し過ちがあつて、それが檢察官の眼に觸れたら、決して之を見逃す事は出來ない。遺憾ながら法律の力を示さなければならない樣になるであらうと。

君の才幹は、政友會内閣の時、松田正久男に認められ、肝膽相照して互に其人物に推服して居つた。未だに君は男の德を景慕して居るし、男が君の人物に信頼した事は、實に尋常一樣ではなかつた。今では司法部内にあつて隱然一大勢力をなして居る。位置は檢事であるが、司法内に於ける勢力は非常なものである。

君は曾て海軍問題に際して、地方の裁判所の某檢事の事に就て、當時の新聞が漫りに臆測を逞うして、汽車中で種々の談話を試みた樣に書いたのは、多くは事實無根であつて、かゝる重大事件に就て新聞記者が漫りに臆測を逞うし、輕々しき獨斷を下すのは、甚だ遺憾であると言つて慨歎して居つた事がある。

君は花井博士と交り相好く、法律の眞僞正定は互に胸襟を披いて談ずる間柄である。

△寡言實行の平沼檢事總長

匿名氏

平沼は、近來、司法部内に一頭地を拔いて、巍然として聳えて居る。司法部の人物は、一體餘り多く世間に出て來ぬ、殆んど部内に割據して居るようであるから、彼を司法部の埓の外に出して、廣い舞臺で競爭させて見たら、どれほどの偉らい人物であるかゞ分るのであるが、彼も中々考へて居るから、埓の外へ出て來ない。司法大臣の内命を受けたといふ評判もある。事實然うであるかも知れぬが、依然として檢事總長の椅子に安んじて居る。安んじて居るといふ譯でも無い。彼に取つては今の位地に據つて居るのが、一番、強味の有るところだ。

人物の變動の少い、昇進の遲い司法部内に居て、彼の如く出世した者は余く、稀有である。或は、當分、其の類を見出さぬかも知れぬ。司法部内の人は自から部内に人物が少いと言つて居る。謙遜の氣味もあるが、兎も角、非常の秀才を以て任ずる者が、長く、司法部に留らぬのは事實であるらしい。清浦とか波多野とかいふ先輩は別問題として其の以後には、司法部内から政治家を出して居らぬ。松室が一頭地を拔いて居た。松室の後では平沼である。併し松室は非常の先進者で大臣になつたのは、特に、出世が早やかつたといふ意味は少しも無い。司法部内に居た丈けて、大臣になる頭目を作つたのは、波多野と平沼と前後唯だ二人てある。而し

て波多野の出世の早さは、とても平沼には及ばない。平沼は恐らくは、司法部、創立以來の幸運者である。然れども平沼が、それ丈に、司法部ありて以來の人物であるか否かは別問題である。

司法部の出身者で、世間に頭角を拔いた者は幾人もある。仲小路廉の如きは其の顯著なる者の一人である。彼は中央大學の半途退學者で、埼玉の裁判所の雇か何かをして居たといふ事だ。早くから頭角を拔いて、自から四十にならぬ前に馬車に乘つて見せると言つて豪語して居た。實際、彼は、才物である。一の事務官としても、事務を裁斷し、着々仕事をして行く能力に至つては稀に見るところである。此の點に於ては、仲小路は平沼以上である。且つ、仲小路は文才もあり、辯才もあり、俗ではあるが、臨機應變、時と場合で、甘い事を言ふたり、遣つたりする。元老に取入る事には、非常に苦心したと傳へられて居るが、實に、元老に話をする具合は巧みなものである。それに文才もある。遊說をする一段に至つては、彼の如く上手な者は少かろう。平沼は勿論、學問は遙に仲小路の上に出るが、其の才幹に至つては、未だ仲小路を凌駕する事は出來ぬ。平沼は仲小路の如く、何省に往つても、あれほどに仕事をやりこなす事が出來るかは、疑問である。これを要するに、彼れは、司法省から出世した人物の中で、近來、唯一絕無の人才であるとは、未だ斷言しかねる。司法部内での異彩として注目す可きものであるかも知れぬ。而して仲小路等が、若し續いて司法部に居たと假定して、彼が今日ほどの聲名を贏ち得るやは、これまた斷言出來ぬところである。

併し仲小路は、到底、行政官たるの適材であり、平沼は、行政の技倆もあるが、學問も根抵があり、學者肌のところもあるので、二人は全然其の人物、趣向を異にして居る。一口には比較されぬ人である。

平沼は松室ほど敏悧でもない、大に眞面目で人である。彼の出世の早やかつたのは、面白い研究問題である。彼は、藩閥にも學閥にも、閨閥にも因緣して、其の力で出世した譯では無い。彼は、作州の出身で、兄は平沼淑郎、これも若い時には秀才で、兄弟、大學に居る時、二人の將來如何は友人間の問題であつたが、兎に角、弟の方が、深く嘱望されて居た。弟の方が地味であつたが、確實で力が有つた。彼は、作州から出て、賴るべき鄕里の先輩は無かつた。彼は、世間からは唯加賀閥を以て見られて居る。或は純粹の加賀人と見られる事もある。彼の交友が加賀人に多くて、彼が加賀人と共に一團結を爲して居るからだ。

彼の親友に織田小覺といふが居て、加賀の人で一種の人物である。これが前田侯の輔導主任といふべき位地に居る。此の人等を中心として、平沼、織田、河村善益、北條時敬などいふ人々が一團をなして居る。その中で加賀人で無いのは平沼一人である。それで織田が牛込の若宮町に居た時は平沼も其の隣に居て、織田が前田侯に隨つて、西大久保に引移つてからは、平沼も其處に移つた。西大久保に前田侯の別莊がある。その附近に、平沼、河村及び平沼の姉婿掛下重次郎なども集まつて居る。彼等はつねに類を以て集まつて居る。平沼が加賀閥と誤解されて居るようであるが、實は平沼閥といふものが、漸々、著限されて來た。加賀人が

平沼を崇敬して居るのでは無く、尤も始は崇敬して居たのかも知れぬが、今日に於ては、加賀人が平沼の傘下に集まつて居るといふ方が適當であるかも知れぬ。事實此の通りであろうと思ふ。

平沼、河村、北條、織田等の一團は、禪の趣味から集まつたものらしい。今北洪川の弟子である。が中にも河村は禪もやり、劍もやるといふ風で、大分、今の若い司法官とは樣子が違つて居る。河村が織田の爲に譯した佛蘭西の本で、人間は、水と空氣とを吸つて居れば生きるといふような事を書いた本がある。それで司法部内では河村の事を水と空氣とあだ名して居るそうだ。平沼は『水と空氣といふほどでも無いけれども、兎に角一風變つて居る。彼は妻帶をせぬ。今以て獨身である。始は肺病の爲に持たなかつたそうだが、今は健康になつても獨身を續けて居る。若い時、肺病にもかゝり、それで禪も遣り、修行もしたといふ間に、眞面目に考へたので、底力を得たといふわけであろう。獨身であるから、彼には勿論、閨閥といふものが有りようが無い。藩閥も無く、閨閥も無く、自分一本槍で仕上げ、禪の一團の首領となつて行くところに、彼の底力があるのであろう。彼が、頭角を拔いて、隨つて出世の非常に早かつたといふのは、此の底力が第一原因を爲して居るに相違無い。これに依つて見れば、彼は、壯年多病の結果、修行して、强志力行の人格を作り出したので、畢竟、彼は鍛錬の人である。司法部以外にどれほどの融通が利くかは分らぬが、少くも毅然たるところのある人物である。

彼の周圍には河村でも北條でも、皆、今日、其の道では異彩のある人物である。鈴木の掛下も、今は、現職を退いたが、强志力行、立志傳的の人物である。是等の人が、平沼より年齡の少いのでも無く、彼を推して毅然として首領らしくして居るところは、今日に於て、平沼が、恰度、働き盛りの年になつて來たので、表に推出す人物としては、どうしても彼を立てねばならぬのであらう。此の一團の中でも、方面の異ふ人は別であるが、同じく司法部に居る者では、或は、時機を失ひ、或は未だ早過ぎる人もある。今が平沼の時代が來たので、且つ、彼に、行政的手腕があるといふ事が、彼の底力を飾るべき武器である。彼の居る西大久保附近は、司法部の策源地と言はれて居る。彼の人物を見るには、宜しく此の策源地を注意すべきである。

司法部には、由來目立つた人が少い。何人を捕らへて見ても、評論の材料の多い人は無い。平沼は、異常の出世者であるといふ事と此の度の總選擧に檢事總長であるといふので、評判される位だ。それにしても、此の人も何處までも材料の少い人である。彼は寡言實行極めて地味な人である。

△現代に珍しき人物

某法學博士

○僕は平沼騏一郎氏を知らない。未だ一度も見た事もない。初めて此の

人の名前を知つたのは、僕が法科大學の上級生であつた時、氏が講師として第一回生の民法講座を擔任された時である。然し氏が毎日大學に通はれた時も、掛け違つて遂に其謦咳に接するの機會はなかつた。而して民法の講師として非常に令名があつたので、其後氏の名前は僕の腦裏に印して居るが、其れ以來友人先輩などから聽くとなしに、氏の噂を耳にして自ら氏を現代に於ける最も尊敬すべき人物の一人となすに至つた。

◎今度の總選擧で、選擧法の勵行、選擧取締を最も嚴重に行はうと云ふ考は、平沼氏の頭から出たと云ふ噂を聞いた。選擧法の勵行と云ふ事は、聞くところによれば尾崎司法大臣が在野當時からかねぐ〜主張して居つた宿論であると云ふ事である。故に取締の勵行は尾崎法相の方針から出た事かとも思へる。けれども尾崎法相と平沼檢事總長とを二人並べて、どつちが右の考の本源かと考ふる時は、どうも平沼氏の方に手が擧がる。事實は兎も角も彼は法の勵行などゝ云ふ事が問題になれば、直ちに平沼氏から出たらうと云はるゝ丈けの人物である。若し夫れ誰が最もよく法の勵行を遂げらるやと云ふ問題に至れば、無論尾崎法相にあらずして我が平沼氏たるべき事は、人の見て以て一致するところである。僕の尊敬する某先輩は、今度の選擧取締は平沼氏がやるんだから、政府黨だらうが反對黨だらうが斟酌はない。彼ほど情實に動かない男はないと云つて居つた。

◎要するに彼は司直のかたまりである。少くとも斯く周圍の人から認められて居る。何人でも斯く彼を見て、未だ一度も其觀察の誤つた事を發見したものはあるまい。彼は理想的の裁判官である。司法行政官としても拔群の手腕を示した事は今日其社會の定論と云つてよい。

◎彼が全く情實に冷淡であると云ふ事は、部下の任免黜陟に於て之を見る事が出來る。威脅は彼を屈するの道ではない。頭を下げて賴み込んでも無論直ちにうんとは云はぬ。強に抗し弱に折るゝと云ふ所謂似而非任俠は毫も彼に見る事は出來ない。然るに一部の人は彼の任免黜陟に對して不平を云ふ者もあるさうだ、然し斥けられた者から見れば、無論彼は完全な人格とは見えないかも知れない。又人各々多少の過はあるから、人を見るの判斷に於て全く過なきを求むる事は出來ない。故に彼の任免黜陟は、常に客觀的に公正を得て居るかどうかは問題である。けれども彼の人を任免する場合の動機は常に公平で、一點の私心を挾まざる事は僕の疑はざるところである。彼は先頃の淘汰に於て自分の親族をも斥けたさうだ。彼は少くとも主觀的には情實によつて不公平な沙汰をする人物ではあるまい。

◎斯くの如き人は、兎角度量が狹いと云ふ非難を受け易い。平沼氏にも亦此の非難が伴つて居る。併し僕は直接に彼に接した事がないから此事については判斷は出來ないが、思ふに淸濁併呑と云ふ樣な所謂度量は彼に缺けて居るだらうと思ふ。けれどもこゝに彼の長所があると思ふ。彼は漫りに乾兒を作らない。又名利を求めない。彼の地位を以て又彼の才幹を以て、多少の山氣があるならば、今日恐らく政府部内の壯年政治家として下岡、濱口、福原等をして獨り其の聲名を謳はしめなかつたらうと思

ふ。僕の見るところに依れば、彼は確に以上の三氏に優る人格であると思ふ。彼は求めて乾兒を作らない。けれども今日の司法省は平沼の司法省と云はれて居るではないか。

◎度量の狹い例として、彼が從來動もすれば異分子を排斥したと云ふ事を責むるものがある。大臣と雖も彼の意を迎へずしては、到底其職に止まる事は出來ない。歴代の司法大臣中よく彼を使つたのは松田正久一人であると云ふ人がある。他は恐く所謂員に備はるのみで、萬機彼の裁決するところに盲從したと云ふ事である。眞僞は知らぬ、けれども只僕の考ふるところでは、彼は漫りに我を張つて他人を斥けたものではあるまい。恐らくは彼に愛憎の念は本來ないと思ふ。只苟も事を共にし得るものは之を採り、事を共にすべからざるものは之を斥け、其判斷に情實を容れず、又其判斷によつて露骨に相手を取扱つたと云ふのが、恐らく彼の眞相ではあるまいか。

◎彼は司法官として又司法行政官としても、今日の聲名を馳せた。學術は彼の專門とするところではないけれども、講壇の人として、彼は又非凡の才幹を以て居ると云ふ事は、多くの人の許すところである。大學の講師としては只一年間の經驗であつたけれども、今日尚彼の講義振りを追想して賞讃の辭を放つ者が、當時の學生の中に少からずある。これ講義のやり方が巧妙であつた許りでなく、彼の頭腦も明徹で且つ學問上の造詣も相當に深かつたか　である。今日まで彼によつて制定された法律規則は數多くあるが、平沼が拵へたと云へば天下至る處に？（疑問點）なしに通用する。

◎之を要するに、彼は頭腦の明敏な人である。思想の明晰な人である。意志の堅確な人である。剛直は彼の生命である。斯くの如きは當世稀に見るところの人格である。度量狹少の譏にあつても斯くの如きは年と共に自ら圭角が少くなるだらう。どうか徒らに大ならんと努めて天賦の性格を損ぜしめたくないものだ。好漢願くば永く幼兒の心を以て其立てる路を直進せよ。側目を振るな。

△當り前の事をする人

前田蓮山

◎或者は平沼君を評して、血もなく涙もなく、石の如く氷の如き人であると言ひ、或者は彼れは陰險狡猾、朋黨比周して司法部内に平沼閥を樹てゝ居ると評する。而して世人は漫然此の兩者の說を孰れも然りと信じて居るものが多い。

◎併し考へ深き人（ソートフルマン）は疑問を挾すであらう。血もなく涙もなき底の人にして、能く閥を樹て得る筈がない、閥でも樹てる程の人ならば、必ずや血あり涙ある人に違ひないと。これは實に道理ある疑問である。

◎惡に強ければ善に强い、過を見てこゝに仁を知るで、若し彼れが閥を樹てること或者の評の如くんば、彼れは情誼的要素に富める人と見なけ

ればならぬ。如何に策略縱横の者と雖も、如何に陰險狡猾な者と雖も、内に燃ゆる情火がなければ、他を周圍に引きつけることは出來ないものだ。

◎石田三成とか由井正雪とか、講談師や俗歴史家の言ふ所では、人に惠むも策略、人を助けるも策略、門弟に僕を愛するも策略と云ふやうに見へるけれども、あれだけの徒黨を集むるには中々僞りで出來る話ではない。

◎山縣公の如きも、或者は陰險狡猾と評し、或者は僞善者なりと評するけれども、陰險狡猾の傾きがあるや否やは別問題として、兎も角、人を燃かす熱き情味がなければ、あれだけの乾分を有して勢力を張ると云ふことは出來ないものだ。

◎そこで斯う評する者もある。非常に感情の强い人は、一方には極度に人を愛する代りに、一方には極度に人を憎むことがある。彼れが一方に閥を樹て、一方に冷酷と言はるゝのは此の故ではあるまいかと。

◎如何さま、惡性の感情を持つて居る人には斯んなことがある。併し吾輩の平沼君を見る所は、悉く此等の評者と違つて居るのである。彼れは決して血もなく涙もなき冷酷人ではない。彼れは親に孝行で、召使ひなどに對して親切と云ふことは評判な話だ。十數年使つて居た車夫が老ひぼれたと云つては、老後の世話までしてやると云ふ人である。

◎さればと言つて、彼れは決して熱情の人ではない。彼れは今日に至るまで一度も結婚したことがなく、平氣で獨身生活を營んで居るが、是れは書生の時分に世話になつた或女に義理を立てる爲めだと云ふ話もあるけれども、兎も角、彼れは異性に對して冷淡であると云ふことは事實である。

◎彼れが親孝行や、召使ひに對する親切や、此等も温かき情から出ると云ふよりも、寧ろ世間の義理、人間の務めと云ふ理性的立場から割り出された行爲であるとも見へる。恩人に義理を立てゝの獨身生活は一般人には悲劇であるけれども、彼れに取りては少しも悲劇ではない、人間として當り前の事だと思つて居るのである。

◎彼れは血もあり涙もある人であるけれども、其の血と涙は穏やかに理性の溝を流れ、一滴たりと雖も其の溝の外に溢れると云ふことはないのである。彼れをして善良の社會に住ましむれば、彼れは寔に好々爺然たる一個の學究であるが、彼れをして邪惡の社會に住ましむれば、彼れは三軍を叱咤する猛將の如く、惡と戰はずんば止まぬのである。

◎而かも彼れは惡を憎むのではない。惡人が嫌ひだからと云つて之れと戰ふわけではない。彼れは惡を排斥することは人間として當り前と思つて居るのである。恰かも召使ひなどに情けをかけてやる事が、召使ひを愛するためと云ふよりも、人間の爲すべき道と心得て居ると同樣に、惡人に對しても之れが憎いと思ふのではなく、之れを排斥することは人間の爲すべき道と心得て居るのである。

◎司法官は威武にも屈せず、富貴にも婬せられず、苟くも愛憎の念があつては不可ない。併し法律にも情状酌量と云ふだけの涙はある。而かも

此の涙たるや甚だ少量であるからして却つて大切である。

◎經濟學から見ても需用が多くて而かも少量なのが高價だ。醫者の藥は大部分水である。其の水が數滴の原藥を混ぜられた爲めに藥用となり、若し混合の分量を誤れば毒と變ずる。食物は水で煮るけれども、其の味は唯だ一匙の鹽で決せられる。

◎法律には少量の涙がある。而かも其の涙の流し加減で法律全體の死活が決する程大切である。法律の涙は劇藥である、モルヒネの如く鋭敏である。司法官は此の涙の一寸の手加減で或は冷酷極まり無き人とも思はれ或は大慈大悲の人とも言はれるのである。

◎彼れが冷酷と云ふ評を受けるのも、此の涙の分量を一寸誤まることのある位のことで誇張せられたのではあるまいか。

◎彼れは閥を樹てると言はれる。或は司法部内に平沼閥と云ふものがあるかも知れない、吾輩は決して無いとは斷言出來ぬ。併し若しありとすれば、之れは彼れが作つたのではなく、自然に出來たのである。そこで一寸彼れの經歷を見やう。

◎彼れは廿一年、大學の英法科を一番の成績で卒業した。小松謙次郎、大島久滿次なども一所だ。尙ほ同時に佛法科から太田峰三郎、長森藤吉郎、政治科から木内重四郎、松崎藏之助、日置益など云ふ連中も出た。

◎爾來彼れは司法官となり、一時は地方に出たこともあるが、多くは本省に在つて、參事官から民刑局長に進み、故松田正久男が第二次西園寺内閣に司法大臣となつた時に彼れを次官に擢んでたのである。

◎松田男と彼れとは寔に能く調和したものであつた。松田男は人も知る禪味に富んだ人物であるが、彼れも亦た學生時代からして鎌倉に參禪したり、刀劍をいぢくつたり、頗る禪味のある男である。「ナーニ、當り前の事さへして置けば其れで可い」と云つた調子で、和尙唱ふれば小僧和すると云ふ風。

◎それから第三次桂内閣成立と同時に、松室致君の後を襲ふて檢事總長となり、以て今日に及んだ次第で、三十年一日の如く司法部内に生活し來つたのである。

◎されば自分から閥を作らうとしなくとも、又た包容の力と云ふやうなものが少ないにしても、自然に多少の閥が生ずるのは寧ろ當前のことである。彼れは當り前の事をして來て、當り前の結果を得て居るのである。併し彼れは恐らく閥が出來て居ると云ふことを自覺しては居まい、此の世評の閥なるものは、彼れの主觀に存するものではなくて、單に客觀的のものである。

◎海軍問題、本願寺問題で彼れは大に名を擧げたが、彼れは一向平氣である。何にも珍らしいことではない、唯だ當り前の事をしたに過ぎぬと思つて居るに違ひない。

◎今度の總選擧でも、行政官に對しては兎角の評があるけれども、司法官に對しては頗る好評である。是れ法相尾崎君に威力が無いからの僥倖だと冷評するものもあるが、彼れが尾崎君を眼中に置いて居ないのは事實で、獨り尾崎君に對してのみならず、凡て當り前の事さへして居れば

帰つたことはないと云ふのが彼れの持前だ。

○斯んな調子て、彼れには味と云ふものが甚だ少ない。殆んど無味淡泊である。險峻など云ふ辛い味があるやうに言はれて居るけれども、是れ恐らく誤解であらう。世間には當り前の事をされゝば大に困る人が甚だ多い、彼れが檢事總長になつた時には、天下は目を睜った、彼れに敵があるのは當然である。

○玆に一つ再疊の疑問として居る點は、彼れには生れつき情性的要素が少ないのであらうか、或は又た修養の結果であらうかと云ふことである。彼れは學生時代から鎌倉に參禪し、又た刀劍をいぢくる道樂がある。今こそ道樂であらうけれども、最初は心を冷靜にする修養では無かつたらうか。

○人の好んで爲す所に二種類ある。一は自分の天性好む所を樂しむもので、即ち道樂である。一は自分の天性の缺點を補はんとする修養である。而して是れは共に自覺して居る場合と自覺して居ない場合とがある。

○彼れの參禪や刀劍いぢくりは、孰れに屬するのであらうか。彼れは性來冷かにならんとする傾向を持つて居るてあらうと思はれる理由がある。修養のためと言はんよりは、こんなことが天性好きであらう。

○禪味が富んで居る點て、松田正久男と似て居るに拘はらず、渾然たる妙味がないのは此の故ではあるまいか。松田君は元來熱性的の人て、修養の結果圓熟したのであるが、彼れは何うしても人格を組織する要素が貧弱で、如何に修養しても渾然たる域に進み能はざるかに見へる。是れ色々の誤解を受ける原因であらう。

△理想的の檢事總長

法學博士　牧野英一

斯う云ふ事があつた。

今は地方の控訴院長をして居るが、其當時大審院の判事であつた人と會した席上で、或法律の議論をして、其法律の適用の結果不都合の事があると云ふ事を指摘した。處が其老判事曰く、あれは平沼が作つたのであるから、そんな譯が無い筈だと、其時自分は初めて、平沼氏が司法部内に於て今日の如き勢威を振つて居るのは、單に俗才に富んで居ると云ふのみならず、本當に司法家としての實力がある爲めであらうと云ふ事を感じた。自分は數年の間司法官として事務を執つたが、直接平沼氏の部下に屬した事がない。從つて直接に氏の力量は知らぬ。併し著書と講義によつて學風の如何を知ることが出來、又日常の談話によつて其人物の幾分をも想見することが出來る。

著書を見ると特に深い研究があるとも思はぬ。又特に創見に屬する處が多いとも思はぬ。固より法學界一方の重鎮であつて、又法學博士の學位には十分相應はしい人とは信ずるが、併しながら、深い研究と、獨創の見地と云ふものは餘り見えなかつた。けれども如何にも論理整然とし

て、其分類の明白なると、其説明の巧妙なるとは、法律家としても決して尋常一樣の人物でない事を感じない譯には行かなかつた。殊に民・刑兩方面に通じて造詣が決して淺くない。之は今日の法律界に於て實際珍らしい現象であつて此兩方をこなす事は平沼氏の特に誇りとする所であらう。又氏の立案にかゝる諸種の法律もなか〳〵よく出來たもので、氏は矢張り學者としても司法部の第一流の人物であると思ふ。

又平常多少の談話を交換する所によつて見ると、一種の信念を持つて居る人と信ずる。自己の信念を實行するに當つては、世俗の批評も構はぬ、又上官等の威光を以て抑ふることが出來ない。固より無暗に人と衝突する人ではなく、出來る丈け讓歩して圓滿にやらうとする。が、一定の方針を維持するについてはエライ所がある。此點から考へて自分は檢事總長としての平沼氏には餘程多きを待ち設けて居る。自分の聞いて居る所では、松室致氏は檢事總長として最も働いた人と思ふ。同時に松室氏は人格に於ても學識に於ても、殆んど理想的の檢事總長であつたが、自分は同樣の職分を平沼氏に期待して居る。自分は平沼氏の勢力を以て單に俗才や吏務に通達するのみならず、其イントリンシック・ヴアリユーによるものと信ずる。從つて其下に集る青年司法官も何れも皆其實力によつて採用したもので因緣によつたものではない。先年の司法官の大陶汰は主として平沼の手によつて劃策せられたと噂さるゝ。自分は事實はよく知らぬが、少くも平沼氏に深き關係があつたらうと思ふ。而して其成績は大體に於て極めて公平である。總ての點に於て誰が見ても公平と云ふ事は世の中にはない。從つて一二の點に就ては多少の遺憾を感ずる者もあらうが、然しやつた方から見れば恐らく公平を目的としたものであらうと思ふ。それ故に此點に於て平沼氏を攻撃する事が出來ぬと考へる。

今度の總選擧について選擧違犯者をドシ〳〵檢擧するについては平沼氏に相當の覺悟があるらしい。國民は平沼氏に信頼して可なりと信ずる。

平沼氏に果してどの位の度量ありや、又果してどの位の政治的役倆ありやは自分は深く知らぬ。けれども日本の司法界の人物として考ふる時は、日本は適當な檢事總長を持つて居るといつてよい。自分は此人の手によつて司法界が此上とも刷新さるゝことを待ち設けて居る。世上或は平沼氏を以て官僚式權化と云ふが、自分の信ずる所では、平沼氏は人權を無視する人でないと思ふ。只人權の尊重と社會秩序の維持とは往々にして一致し難き事があるので、此點で人と意見を異にするのであらう。新聞とか辯護士とかが十分の批評を試むるは固より望ましい事である。從つて平沼氏自身が、それによつて其仕事の上に多少の參考材料を得るであらうと自分は考へるのであるが、其新聞なり、辯護士なりの批評は若し平沼氏を排斥すると云ふ事にあるならば、それは間違である。我々は寧ろ平沼氏を信頼した方が、我が司法部の爲めになるだらうと思ふ。

司法官は一體人を責める職掌である。人を責めるについては、自分に責め得る丈けの人格が無ければならぬと平沼氏は考へて居るらしい。而して平沼氏は確かに此人格を備へた人で、先づ現在の日本に於ける理想的の檢事總長と云つてよからうと思ふ。

現下の社會的動搖

中澤臨川

東京朝日新聞に島崎藤村氏が、佛蘭西通信の一部として、『ある友に』といふ題下に、シャアル、モオラスを紹介した一文は、現代の社會といふものに就ての我等の考にいろ〳〵の暗示を與へて呉れた。この通信によれば、モオラスは今レオン、ドオデエの主筆をして居る『アクシヨン、フランセエズ』なる一新聞の政治綱に據て、或時はベルグソンの態度を駁し、或時はモオリス、バレスを評し、クレマンソオを評し、また或時は戰時に於ける『サンヂカリスト』の行動にまで言及してゐると書いてある。彼の熱意と精力とには何人も心を引かれると書いてある。そして彼に就ての或る人の評語が次のやうに引いてある。彼こそメエトルと呼ばるべき人である。彼が企圖し、また企圖しつゝあるものこそ眞の佛蘭西の改革である……その文學的運動は同時に政治的運動である。その主張が若き人々に與へたる感化には測るべからざるものがある』と。『主のための藝術』の先驅者となり、民俗的自覺から遠ざかる佛蘭西を憂み、直接に政治に向つて働きつゝあるバレスと並んで、モオラスは現代佛蘭西の騷壇の偉觀であるとも書いてある。

かやうな簡單な紹介も私の心を牽かずには措かなかつた。私は考へた、如何にして佛蘭西の社會はモオラスのやうな人を産んだのであらうかと。それは單に戰爭といふ非常事が突發的に激成した一般の愛國熱のシ

ンボルであらうか、それとも之にはもつと根抵の深い何物かゞ潜んでゐるのではなからうかと。勿論戰爭といふ眼前の一大事がモオラスのやうな思想家を激勵して、より強く憂世愛國的の言辭を成さしめたといふ點もあらうが、然し彼等の據て起るにはもつと深い遠因がなくてはならない。皮層な思想家が今更らしく愛國的宣言を弄したり、ニーチエ哲學の影響を云々したりするのとは違つて、バレスやモオラスやローランの代表してゐる若い時代の熱意と絶叫とには、斯しく堀られた生命の血脈が通じてゐるのであらう。

十九世紀歐洲文明の末路が極端なディレッタンティズムに馳せ、救ふべからざる病的個人主義を、釀成したことを、私は繰返し述べた。總じて今日の文明は、世界を通じて斯樣な西歐思潮の害毒に感染し盡された。初めは潑剌として深い精神的意義を有してゐたデモクラシイの思想も、今は停滯し腐敗して型にはまつた物質的利我的のデモクラシイに墮落した。政治ではそれが皮層な立憲政治と固化し、世界的平凡(メディオクリティー)が何人をも同一水平面に引下げ、人心は倦怠し阻喪し、利我的になり、冷笑的になり、薄情になり、輕躁に流れるやうになつた。而して國家的立場から見るとき、斯樣な心理狀態にある民族は、勢ひ非愛國的になり、最も惡しき意味に於ての、即ち無關心からくるところの消極的世界主義者と成り終らざるを得ない。怯懦にして似而非なる慈善家が、貧しき隣人を目前に踏むことを敢てしないで見えざる人類の愛を思ふ如く、俗惡の個人主義は却て人を一種の非愛國主義、世界主義に導くものである。

かやうな十九世紀末のディレッタンティズムが、何れだけ人心を停滯せしめ、絶望せしめたかを説明する爲めに、斯論の端緒に因んで最近佛蘭西の國民狀態を例に採つて見よう。それにはかのドレフエー事件の成行を回想するだけでも充分である。一八八〇年代から廿世紀初頭にかけての佛蘭西の民心程萎靡したものはなかつた。或聰明な著者が斯ういふ嘆聲を洩してゐる。

「そも〳〵の起源からラテン民族の心裡には死の萌芽を藏してゐた。我等の頭腦には古い事物の世界が氷りついてゐる。我等の元氣の消耗から意志の力を失つた我等は、同時にまた健全に理解し思索する力をさへ失つた。我等の如き無能な民族は一般善の爲めに早く除去さるべきである」と。

何といふ悲慘な絶望であらう。然し、かやうな絶望が自覺し嘆かるる間は其處に生命を見出すことが能きるが、それが驕慢なディレッタンティズムと化し、病的冷笑と變ずるところに、近代文明の深い弊害が發見されるのである。『人生の觀光客』だと自稱したアナトール、フランスの態度は、やがて今日の世界のあらゆる思想家に共通したものではないか。もつと皮肉な例はレミイ、ド、グールモンに於て見出される。曰く、「私自身としてはアルサス・ローレンスの忘れられた二州の代りに、私の右手の小指一本でも渡さうとは思はない。なぜなら、その指は私が物を書く時に手の慄えを禦ぐから。また私はその代りに、私の左手の小指一本でも渡さうとは思はない。なぜなら、その指は私のシガレットの灰を落すに役立つから」と。かやうな思想は、かうまで冷笑的に言ひ現はされないまでも、各國の知識階級に行き渡つてゐるものではないか。それは病的個人主義にして同時に病的世界主義ではないか。

かうした世紀末的な佛蘭西の空氣は、愛國詩人のフランソア、コポエをして絶望せしめた。世界主義的社會主義者のジョーレスをして其雄辯を壇まにせしめた。「我等の都市はスパルタよりも勇敢である」とユーゴーの讃美した國民は、名譽の La Patrie の代りに L'Internationale を歌つた。

然し、かやうに重苦しい沈滯の空氣が久しく續きえたであらうか。生命の不自然な壓迫が何時までも隱忍されたであらうか。隣邦の武的威壓が屢々彼の邦の上に恐怖の暗雲を投げないまでも、佛蘭西は早晩醒むべきであつた。醒めずには居られなんだ。而してその墮落と窮迫とは寧ろ世界的であつた。何れの邦もディレ

ツタンテイズムに沈むか、然らざれば功利主義に偏してゐた。覺めたる無意志の自暴的墮落と盲目な功利的猪突とは世紀末文明の兩面に過ぎない。

そこで反動が起つた。何等か生々たる生命のローマンスを要求する聲が聞え出した。「プラグマチズム」の傳播、カトリズムの改造、ベルグソン哲學の勃興の如きは、この勢に先驅したものであらう。病的個人主義の代りに民族的本能主義が、消極的世界主義の代りに精神的生命主義が芽ざし始めた。民族主義愛國主義は眞の意味の個人主義であり、やがてまた眞の意味の生命主義である。生命主義は如實の宇宙主義である。我等はかやうな新生命の勃興に對して、徒らに理性と言葉との上の矛盾を指摘するやうではならない。生命は擴大を要求する側から見れば宇宙主義であるが、充實を要求する側から見るときには個性主義である。それが今までの個人主義世界主義とどれだけ相違してゐるかといふことに注意せねばならぬ。

飛行家の心理が面白い例を示してゐる。嘗て巴里マドリッド間の飛行に賞を得た有名なヴェドリンが、或る所で次のやうな感懷を洩してゐる。「今私は私の胸奥にあるものを諸君に披瀝しようと思ふ。私が飛び始めた頃は私はそれほど——實際それほど——愛國的でなかつた。その後、私は些しばかり飛び廻つた。私は幾つかの國境を越した。よし、諸君よ、それが如何う諸君に取られるやうとも、私は私の感懷を打明けねばならない。私は爾來佛蘭西人たることに多大の喜びを感じてゐる」と。國境を超越した飛行家が、却て國境の意義を痛切に感ずるといふことには深い眞理が籠つてゐる。

若き佛蘭西は生れた。彼等はデイレッタンテイズムの外殼(から)を破つて出た。潑剌たる生命は先づ彼等の實行慾を挑發した。彼等は彼等の一歩前の先覺者たるベルグソンや、ローマン、ローランをさへ驚(おどろ)かした。彼等は聰明で、大膽で、快豁で、實踐的で、他人に對しても自分に對しても峻嚴であつた。彼等はルーブルに飾られた名畫よりも六十馬力や百馬力の美を喜んだ。彼

等は思索の鬱憂よりも生活の喜びを樂んだ。彼等はジヨーレスを棄ててポアンカレイを謳歌した。ディレッタントの王と稱ばれたルナンの孫が、「理想主義の失敗」といふ卒業論文を中途まで書きかけた儘、ソルボン大學を棄てて亞非利加の戰に參加した。『虛榮心のない豪慢と恐怖のない沈默を以て、佛蘭西は今彼の敵に面しつゝある。その左手には最後の時まで優雅な橄欖の枝を捧げつゝ、その右手には至上元氣と神聖抵抗の劍を半ば鞘から拂ひつゝ』——とは、戰前に於ける佛蘭西國民の心理であつた。

ローランの『ジャン、クリストフ』には、かやうな若き佛蘭西を形容して次のやうに言つてある『彼の留守中(十年間)に、歐州殊に巴里に於て根本的に再造の大事業が行はれた。新しい秩序が産れつゝあつた。理解よりは寧ろ行爲に喘ぎ、眞理よりは寧ろ幸福に餓えた時代が頭を擡げ出した。それは虛僞の代價を以てしてでも生きそして生命を攫まうと望んだ』と。

彼はまた次のやうに書いてゐる。

『現代の歐州思想の進化は迅速な歩みを採りつゝある。それは恰も或る機械的發明と新しいモートルに由て促進されてゐるかのやうだ。昔ならば些くも廿年間は人間を養ふに足りた僻見と希望の貯へも、今日では五年間を支ふるに足りない。精神の幾時代かが矢繼早に、互々を踏み碎きつゝ、突撃を知らせる「時」とともに過ぎた。……現下の時代はそが力と、そが體力と、そが偉大な胸と、喜びに餓えたそが勇ましい感能と、曠原の上に舞ふ鷹の翼のやうなそが翼とを驕(ほこり)としてゐる。……彼等は侵略的になつた。平和と理想に倦んで、彼等は戰の鐵砧(かなとこ)を謳歌した。その鐵砧の上で、血滴の滴る拳を以て、行爲が他日佛蘭西の威力を新鍛することを望んだ。觀念の諸體系に飽き足らない反動として、彼等は理想に對する侮蔑心を信仰の平面まで高めた。虛喝的に、彼等は劇しい現實主義を極端な國民的利我主義を崇め上げた。……彼等は侮蔑するだけでは滿足し能はなんだ——彼等は前時代の懦柔な老耄者を夢幻な理想家と見做し、前時代の人道的思想家を公用犯罪人として取扱つた。』

かやうな時代にバレスやモオラスのやうな人々の生れ出るのは決して不思議なことではない。これ等新時代の思想家はたゞ生命の爲めに生命を戰ふことのみを知つてゐた。彼等には藝術と政治との區別(けじめ)がなかつた。彼等の論ずる政治は同時に文學であり一切であつた。か

うして彼等は新しいフユーマニチイの見地から、政治を高かめ同時に藝術をも高かめようとした。古い立場から見れば彼等は一種のローマンチストであるが、新しい立場から窺ふときには最も實行的のリアリストである。

私はおもに佛蘭西に就て談つたが、最近十餘年間に於ける同樣の思想界革命の機運は、多少とも何れの國に於ても發見することが能きる。私は或る處でも述べたやうに、今回の歐州戰爭は、十九世紀物質文明の餘弊を償ひ、併せて新しい精神文明の門出の犧牲として戰はれたものであるといふことを繰返して置きたい。

わが國の文壇に於ける島崎藤村氏の位置、及びその徑路は、私が茲に叙說するまでもなく、人の知悉するところである。今日まで作家としての氏の態度は稍やフローベルのそれに似通つてゐた。その人が、遙々佛蘭西の彼方から、モオラスの消息を傳へて來るといふことには至大の意義がある。「私は今日の佛蘭西の學者、乃至は文學者の多くが政治を說く煩はしさに堪へません。そのディレッタンチズムには往々辟易します。ある茶の會へでも呼ばれて行つて、それに一篇の戲曲も草すれば政事も談ずるといふやうな紳士を見つけることは、巴里の町を步いて銅像を見つけるほど造作もないことです。左樣いふ中にあつてモオリス、バレスやシャアル、モオラスのことを想ふと、さすがに趣を異にしてゐるやうです」と氏は言つてゐる。更にモオラスに就て、「あの人は通俗な見解を全く捨てゝゐるやうです。あの人のことを思ふと、政治といふものの考へ方を變へさせられるやうな氣がします」と言つて、氏は半生の回顧に耽り、明治初代の青年がいかに政治に趣味を持つてゐたかを談り、その例證として二葉亭四迷や、國木田獨步や、北村透谷を擧げ、更に次のやうな感情を洩してゐる。

「それから二十五年ばかりの間、何といふ違つた世界に私の小さな生涯が開けて行つたでせう。私は步めば步むほど政治といふものから遠ざかるばかりでした。好いものでありさへすれば、假令如何なる

國のものでも、それを受納れるに躊躇しないほどの日本の青年が、自分の國に起りつゝある實際的の活動に對して興味を失ふといふは一つの不思議と言はねばなりません。それを不思議とも何とも思はないほど、私などは自分で自分の道を歩くといふ丈のことでした。……一筋に細い道を辿つて來た私は唯々自分の心を煩はされまいとしたのであつて、十年二十年の昔も今日も政治といふものゝ考へ方などは、殆んど同じやうな固定した通俗的なものに過ぎなかつたことを君に白狀しなければなりません。恐らく世には私と同じやうな通俗な見解から、政治は政治、哲學は哲學、藝術は藝術といふやうな狀態に甘んずる人もあるでせう。」

かやうな悔悟と覺醒の聲が同胞の先覺者から海を渡つて聞えて來る間に、國内にも漸く思潮の動搖が萠し始めた。その多くはまだ皮層的であり回顧的であるにも拘らず國民性の復活が叫ばれたり、一般政治界に新樣の潮流が流れ殊に思想界に携はる者の政治熱を喚起するやうになつたりしたのは、注目すべき顯象といはなければならない。

私は前述したやうな世界的潮流に伴ふ意味での大正維新を要求したい。その爲めには今日の社會的動搖の波をもつと大きくし、もつと深遠なものにしたい。凡そ社會の革命期には國民の實際生活と思想生活とが其人々の熱誠と精氣との中に溶け合ふやうでなければならない。それは一種の道德的復興でなければならぬ。單に抽象的理想の推移でなく、眞の變革、即ち新意志の創造でなければならぬ。私はかういふ希望を以て現下の社會的動搖の開展する未來に期待する所が多い。

新刊批評と紹介

△悲劇の出生、善惡の彼岸 金子馬治譯 早稻田大學出版部發行

我國の少しく思想問題に頭を突込んだ者は勿論、さうでない者までもニーチエの名を知らない者は少いが、其多くは零碎な斷片的な紹介の紹介に依つて其の一斑を窺ふ所のみである。難解で、獨斷的で、矛盾と撞着とを平氣で遣つてゐる偉大なる哲學者ニーチエを了解するにこれほど無雜な大膽はあるまい。此書はニーチエの處女作「悲劇の出生」と其晩年の作「善惡の彼岸」とを著者の蘊蓄ある學識と、時弊を救はんとする誠意とに依つて成つたもので、譯文の忠實にして、譯語の妥當なる、而してさしも難解なる原書を些の澁滯なく、平易に明晰に了解せしむる所著者を措いて他に求むる事は出來ない。ニーチエ研究者にとつては絶好無二の良書たるのみでなく、我讀書界爲めに蘇生の思ひあるであらう。其

勞を著者に謝し、此書を江湖に推薦する。(定價金二圓二十錢)

△現代文集　馬場勝彌後援會編輯　實業之世界社發行

馬場孤蝶氏立候補の後援として我國現在の各文士諸彥の同情を集めて編纂せるものにして、殆どあらゆる文壇の諸士を網羅して、小說に隨筆にそれぞれ各作家の特色を發揮して、近來珍らしき美觀を呈せり。(定價金壹圓九十錢)

△自國を誤り世界に災せる獨逸の主戰論　ベルンハルディ著　早稻田大學出版部發行

原著は「ドイッチエランド・ウンド・デル・ネヒステ・クリーグ」と題して、世界の耳目を震動せしめたる、今回の獨逸の好戰的態度は一に深く此書の原理に胚胎し、いかに獨逸が業に旣に其準備を怠らざりしか、以て這間の消息を窺ふを得べく、附錄として英國名家の駁論を載せたれば文明の二潮流を代表する英獨三國の戰爭觀、人生觀、延いては世界一般の之に對する思潮を感得しうべく、何人にとりても有益なるは、高田博士が海外旅行中珍る所本書を手にせざる者無かりしといふに見ても、現下の好讀物たるを知るに足るべし。(定價金九十錢)

△敎化と演劇　坪內逍遙著　尙文館發行

本書は博士が文藝協會の事業に携はりし間に、主として演劇と敎化事業との關係を論じたるものなれば、演劇そのものに就て敎へらるゝ所あるは素より、博士の演劇に對する態度を併せ知るに此上なき書也。(定價金壹圓)

△平和の巴里　島崎藤村著　左久良書房發行

藤村氏が海外旅行記の第一輯也。歐洲戰爭の勃興に至らざる迄の巴里の旅寓に氏が親しく觀察したる彼地の事情を書送れるものにして、フレッシュな氣分を味はんとて旅立てる氏が眼に彼の地の風物や如何に映したるか。何人も知らんと欲するところなるべし。(定價金五十五錢)

△近代生活の解剖　岩野泡鳴著　廣文堂發行

すべての因襲道德を破壞して、一度び個人主義の根柢の上に立歸つての日本主義者、個人の具體的存立中に含まるゝものとしての國家主義者たる氏の國家社會政治文藝の革新的言論を蒐めたるものにして、氏の言論には稍獨斷的嫌ひはあれど僅かに少くとも一部の眞理を包含して、聽くべきの言尠からず。(定價金壹圓五十錢)

△筧博士の古神道大義　岩野泡鳴著　敬文館發行

此書は筧博士の神道論を論じて氏の古神道に關する發見と同時に氏の新哲學新宗敎を說けるものである。(定價金二十五錢)

△破壞と建設　中澤臨川著　新潮社發行

著者は言つてゐる。「この一篇は過去五六十年間に凡ての國民の爲し遂げた偉大な努力――その破壞と建設――の跡を追はうとしたものである」と。要するに將に新らしき建設の時代に入らんとして我等は今一度しつかりと自分を眺めて見ねばならぬ。その人々の爲めにニーチエを論じオイケンを論じ、ローマシ・ローランを論じ、バザロフを論じて、思想道德の範圍に新らしき道を指き示さんとせるもの、新時代の要求を滿たす書物として推薦す。(定價金九十錢)

△善惡の觀念　山宮允譯　東雲堂發行

イエーツが文壇に於ける地位は今更言ふまでもなし。本書は其譯筆餘りに細心忠實を期し過ぎたるやの嫌もあれど、收むる所の論文『肉體の秋』を初め十九篇、何れも來らんとする象徴主義の運動を代表せる、新らしき藝術家の愛讀すべき物たるべし。(定價金壹圓二十錢)

△文部大臣を中心として評論せる日本教育の變遷　横山健堂著　中興館發行

我國教育の中心を捉へて、其當時の文教を論ずるに著者獨特の筆を以つてせり。維新の當時より今日の一木文相に至るまで、徵を窮め細を穿ち、各面目躍動して一世の文教がいかに變遷せるかを知り得て甚だ興味深し。我國教育の進歩の裏に、其教育機關の主腦に立てる者にして、いかに多くの苦心と滑稽とを胚めるかを知り得て亦興味深し。(定價金壹圓五十錢)

△ヷン・ゴオホの手紙　木村莊八著　洛陽堂發行

ポスト・インプレッショニストとしてのゴオホの手紙を譯せるものにして、かの有名な『弟テオドルに宛てた手紙』と『エミルベルナールに宛てた手紙』とを譯出せり。ゴオホの藝術家的生涯を知るに最も好適なる物にして、挿畫としてゴオホの藝術的作品十數葉を附しあり。(定價金壹圓)

△比較文學史　大日本文明協會譯　文明書院發行

本書に佛蘭西フレデリック・ロリエ氏の原著を飜譯せるものにして、各時代の文學を世界的に比較したる文學史也。其及ぶ所泰西諸國は勿論日本支那暹羅等の東洋より發見以前の米大陸に至るまで比較研究せざるはなし。斯くの如きは實に有用なる事業にして、世界の文明史として亦價値あるものたるを疑はず。(定價金貳圓)

△縮刷哲學概論　桑木嚴翼著　早稲田大學出版部發行

我國に於ける最も出色の哲學概論として定評ある本書の縮刷改版にして、改版に當りて尚讀者の了解を容易ならしめんとせり。(定價金壹圓)

△大學講義全集道德革新論　谷本富著　大日本圖書株式會社發行

本書は著者大學在職中の講議の中比較的重なる物を引續き刊行する目的にて、第一卷として出だしたるが此道德革新論也。稍舊稿に屬すれども、卷末に附せる最近世界思潮一斑に依つて氏の近來の思想は覗はれ得べし(定價金壹圓五十錢)

△大將東鄕　横山健堂著　春陽堂發行

曩に「大將乃木」を著して好評を博したる著者は、今復た更に「大將東鄕」を著せり。著者の雄健なる筆致は常に本誌に於て讀者の熟知せらるゝ所、本書の如きも著書の筆端に活躍せらるゝ東鄕大將の面目は一讀竟に卷を措く能はざるべし。(定價金二圓三十錢)

△碧巖集　小鹿青雲譯註　玄黃社發行

碧巖集の和譯詳註にして、碧巖集の宗門第一の書たるは言ふ迄もなけれど、辭句の難解の爲め容易に繙く能はざりしもの、今此書の如き一字一句に譯註を施し垂示、本則共に了解を容易ならしめ、總ぶるに評唱を以て終る。前後一百則、單に禪門に入らんとする者のみに止まらず、恐らく何人にも一讀の必要あるべく、而して一讀するに最も此書を便とすべし。(定價金二圓五十錢)

△教育小說愛と操　野田豐實譯　隆文館發行

教育家のオーソリチーとして近代教育の基礎を茲に發したりとも言ふべきペスタロッチの所論は我國現在の教育にも參考となれる所少からす。此書「愛と操」は普通人を目安にして、自家の教育思想を宣傳したるものにして、藝術品として觀るべからざるは申すまでもなし。只家庭教育の好參考品たるは勿論也(定價一圓八十錢)

△亡靈　高橋泰譯　東京堂發行

イブセンの亡靈の飜譯は、今迄にいろ〳〵出版され、嘗て舞臺にまで上せられた事もあるが、此譯書は殊に原文に忠實ならんことを期したゞけあつて、いかにも精確で、最も信頼するに足るものである。(定價金た

十錢）

△商店繁榮策　岡城寺長著　〃萩出版部發行

商店の繁榮を圖る爲めに、設備組織の根本より、顧客の應接、廣告等に至るまで、極めて實際的に論究して餘すところ無し。讀んで學ぶ所必ず少からざるべし。（定價金壹圓八十錢）

△黒い眼と茶色の目　德富健二郎著　新橋堂發行

德富健二郎氏の作物は何處か我國民性の上に深く根ざすところがあると見えて、「不如歸」以來いかに多くの人の涙を絞つたであらう。此書の如きも同じく意味に於て江湖の歡迎を受くべきは玆に冗々しく推奬するまでもなからう。（定價金壹圓二十錢）

△戀と名と金と　松崎天民著　弘學館發行

著者は此書に依つて、著者の半生を葬ひ、前半生に太い一線を劃して更に新らしい生活に入らんとするものである。「戀と名と金と」は氏の全欲求であるそうな。然しながらそれと同時に、此書の内容を爲せる、浮沈變化極りなき世相は何れも此「戀と名と金と」の欲求が産んだ結果ならざるはない。洵に相應しい名である。（定價金九十錢）

△現代英國劇作家　大田黒元雄著　洛陽堂發行

英國現代の劇作家として我國に最も能く知られてゐるショー、グレゴリー夫人、イエーツ等を始め、ガルスウァーシー、バーカー、ハウトン、シング等に至るまで作者の經歷、地位、作物に就いて親切なる解說を與へてゐる。劇作研究者にとつての好參考書であらう。（定價金壹圓）

△禪の面目　竹田默雷述　丙午出版社發行

本書は「默雷禪話」「續默雷禪話」の中より、高島米峰氏が最も會心の書とするもの百五十則を選びて輯めたるものである。（定價金壹圓）

△ニーチェ超人の哲學　生田長江著　天弦堂發行

本書は近代思潮叢書の第一編として、ブランデスの評論を抄譯したるものにして、ニーチェの發見者として又紹介者としてのブランデスの所論は慥かに讀者の期待に負かないであらう。（定價金五十錢）

△應用修辭學講話　八波則吉著　敬文館發行

「名文の名文たる所以を研究して讀書及作文の參考に資したい」といふ著者の宿志に依つて成れるものを本書となす。說くに趣味ある引例を以てし、何人にも解し易すければ、讀過に從うて修辭學の一通りを會得し得べし。（定價金壹圓二十錢）

△自我の研究　野村隈畔著　警醒社發行

此書は眞面目に自我といふものを研究したものである。凡ての哲學上の問題は必ず一度は玆から出發しなければならない。洵に意義あり興味ある研究で、讀者を益する所多いであらう。（定價金七十錢）

△拈華微笑　釋宗演述　丙午出版社發行

本書は宗演師が南滿洲に於ける講演を主として編纂せるものにして、禪學の道に入らんとする者にとつては勿論、然らざるも尚平生座右に備へて端座修養に資すべき也。（定價金壹圓）

△伊達政宗　番衆浪人著　大日本雄辯會發行

番衆浪人とは誰ぞ。伊達政宗を捉へて奔放自在に馳驅するところ中々侮り難き手腕を有せり。（定價金壹圓三十錢）

△實驗無痛安產法　青柳有美著　實業之世界社發行

無痛安產法は十數年前に獨逸のバーデン大學附屬のフライブルフ婦人科院で發明せられてあるそうな。我國では未だ實行せられてないから、

著者は其學理と實驗及方法及演劇等を紹介したものである。併せて發聲法の進歩を説いてゐる。（定價金五十錢）

△**我が五十年**　村上浪六著　至誠堂發行

浪六氏の自敍傳也。されど厳密なる意味の自己批判とにもあらず、寧ろ氏の接したる境遇を細叙し、そこに氏一流の雄健にして皮肉なる筆に依つて時代相を寫し出す。此書の興味も價値も相與に緊つて玆にありといふべし。（定價金壹圓五十錢）

△**徒然草講義**（定價金五十錢）　藤森花朗彰述　玉英堂發行

△**水巴句集**（定價金三十錢）　渡邊水巴著　曲水吟社發行

△**英國の二英雄**（定價金四十五錢）　大原武夫著　大日本雄辯會發行

△新譯**大學中庸**（定價金六十錢）　濱野知三郎著　至誠堂發行

△國史叢書**新東鑑**（一）（定價金壹圓）

△國史叢書**新東鑑**（二）（定價金壹圓）

△國史叢書**古事談　續古事談　江談抄**（全）（定價金壹圓）

△現代名作集**未練**（定價金拾五錢）　森田草平作　鈴木三重吉方發行

△現代名作集**毒藥を飲む女**（定價金拾五錢）　岩野泡鳴代作　鈴木三重吉方發行

△現代名作集**紫のダリヤ**（定價金拾五錢）　小川未明作　鈴木三重吉方發行

△現代名作集**倫敦塔**（定價金拾五錢）　夏目漱石作　鈴木三重吉方發行

△**飛行機ルムプラー及其機關**（定價四拾錢）　尾崎行輝著　東京國民書院發行

△**藤村詩集**（定價貳拾五錢）　川路柳虹著　名著評論社發行

△**放浪**（定價四拾錢）　原田譲次著　[illegible]船社[illegible]從

△**英利婦人用無話**（定價九拾五錢）　富田源太郎發行

△**春**（定價參拾錢）　島崎藤村著　佐藤義亮發行

△**貪者の寶**（定價貳拾五錢）　吉江孤雁著　新潮社發行

△**ロメオとジュリエット**（定價貳拾錢）　久米正雄著　新潮社發行

△**兎糞錄**（定價貳拾五錢）　蘆川忠雄著　名著評論社發行

△**水滸傳物語**（定價四拾錢）　鈴木悅著　實業之日本社發行

△**性慾論**（定價貳拾五錢）　相馬御風譯　新潮社發行

△**ゾラ物語**（定價四拾錢）　丘草太郎著　實業之日本社發行

△**お千代半兵へ**（定價貳拾錢）　佐藤卯兵衛著　佐藤出版部發行

△**お夏清十郎**（定價貳拾錢）　佐藤卯兵衛著　佐藤出版部發行

△**電氣の利用**（定價貳拾錢）　石井民治　堀七藏著　敬文館發行

△**樗牛全集から**（定價貳拾錢）　三井甲之著　名著評論社發行

△**電燈**（定價貳拾錢）　石井民治　堀七藏著　敬文館發行

△**靜かな曙**（定價拾五錢）　昇曙夢著　金櫻堂書店發行

△**時事叢書**（定價各冊二十錢）　富山房發行

露西亞及露西亞人（八杉貞利著）ポーランド悲史（齋藤清太郎著）生別と戰爭（山内繁雄著）南洋（井上雅二著）佛蘭西及佛蘭西人（九來欣造著）世界の一回轉（浮田和民著）戰爭と講和の歴史（時野谷常三郎著）戰爭と世界の終局（昇曙夢著）山東半島（富山房編輯局編）支那に於ける列強の競爭（今井嘉幸著）

△現代百科文庫（各冊金拾錢） 日月社發行

カラマゾフ兄弟（森田草平抄譯特に定價廿錢）蠍（さそり）（眞山青果作）耶蘇基督（前島潔著）親鸞と母（江部鴨村著）カーライルの宗教（淺海琴二著）親鸞と法然（村上專精著）十六羅漢（山邊習學著）藝術家と藝人（生田長江著）近代思想と宗教（柏原祐義著）

△サイエンス叢書（定價各冊十五錢） 以文館發行

趣味之數學（竹貫登代多著）植物界之奇觀（松島種美著）兩性之能力（小倉清三郎著）果實之利用（片山熊太郎著）自働車（西田順一著）花之研究（片山熊太郎著）驅逐艦と潜水艇及水上飛行機（藤田定市著）

△無星神叢書（各冊拾五錢） 馬上大學社發行

（一）東京馬米九里（二）藝術政治と軍學（三）濟交想（四）花月川（五）ホワイト讓よ（六）パンの政治（七）路ばたの草（八）モヤの女（九）鞍上と机上（米本悦三郎著）

△アカギ叢書（定價各冊拾錢） 赤城正藏發行

春の目ざめ（筑紫二郎著）エマーソン（栗原古城著）犠牲（日野月明紀著）ウヰルヘルム・テル（村上靜人著）罪と罰（上）（京極逸藏著）マグダ（葛西又治郎著）鴫（村上靜人著）第二のタンカレイ夫人（村上靜人著）ドストイエフスキー論（葛西文學士著）

△古典講義錄（第一號） 古典攻究會發行

國體の精華を發揮し、信仰の歸趣を明かにし宗教として哲學として、將た道德として我神道を研究せんとし、古典攻究會なるものを作り、古典の講義を川面凡兒氏に囑して、之を世に刊行せんとす。第一號を本號となす。川面氏は隱れたる學者にして、其蘊蓄造詣甚だ淺からず。就て學ぶべき所多かるべし。（定價金參拾錢）

御寄贈の新刊書紹介の御依頼を受けながら紙數の關係上未だ其責を果さゞるもの多々有之候へども、いづれ次號に於て御紹介可申上候へば不惡御宥恕被下度候

早稻田大學教授 内ケ崎作三郎先生序

吉田絃二郎氏著

タゴールの哲學と文藝

新刊

オイケン、ベルグソンの西洋哲學に對して尙ほ慊らざる所を覺ゆるの士は必ずや我印度の大思想家大詩人タゴールに來らざるべからず。彼の思想は印度思想の絶頂に達し彼の敬虔な生活は聖フランシスの如く彼の純眞な文藝の杯は處女的な優しみと綵幼爛漫の薫りに滿つ。本書は彼れの哲學・文藝・詩の殆んど全體を網羅し彼を批評し彼を紹介せんとするもの書中納むる所「生の實現」「園丁」「新月」「チトラ」「郵便局」「暗室の王」「ギタンジャリ」の主なる詩及殆んど全譯に等しき劇の梗概をも收め且つタゴールの評傳及彼の實生活をも掲げたればタゴール研究者の一權威たるを失はず。我が現代人を以て任ずるの士は速に外人をして『今後はタゴールの時代なり』とまで驚嘆せしめし彼が全集とも稱すべき本書を繙かざるべからず。

四六判上製美本 全壹冊 正價金壹圓廿錢 □郵税金八錢□

上司小劍著

小ひさき窓より

最新刊

針の如き急進的思想を包むに、絹の如く麗はしき技巧を以てして、聲名一代に揚れるこの小說家の感想錄と小品とを集めてこの一卷をなせり。彼の小說に於て彼れの思想と哲學とは、爛熟せる其の藝術の奥深く隱れたるもこの一卷に於ては單力直入忌憚なき鋒鋩を露出せるを珍とすべし。

四六版上製美本全 正價金七拾五錢 郵税金八錢

東京市神田區表神保町七 大同館發行 振替貯金口座東京八七貳番

(中付三の二)

第四版

盧舟 簡野道明先生講述

和漢 名詩類選評釋

(定價壹圓七拾五錢 郵送料金八錢)

天金美本全一冊 クロース製

和漢古今の詩中、人口に膾炙して國民性の陶冶に多大の影響を與へたる名篇、國語漢文中に引用せらるゝ傑作、壹千餘首を精選し、之を二十二門に分類し、一首毎に正確なる讀方と詳細なる解釋とを施し、更に先生獨特の博大精深なる評釋を加ふ

第四版

天台宗大學教授 島地大等先生校修

漢和對照 妙法蓮華經

(定價金壹圓五拾錢 郵送料金八錢)

美本全一冊 クロース製

上欄に漢譯の原文を掲げ音讀みの振假名を施し、下欄に和譯を掲げて對照に便にす。かつ大意・略科・字解を加へたれば、研究用讀誦用として非常に便利也。

十二版

文學士 内海月杖先生著

徒然草評釋

(定價金七拾錢 郵税金八錢)

美本全一冊 クロース製

流布本の誤謬を直し、丁寧に字句の解釋を下し、且つ徒然草一部を衆好法師の趣味論と解して之を評論したる著者獨特の觀察に加へて、その文章が文節の極めて出色、國文研究者の好參考書たるのみならず、一般讀者諸君の好讀物たるべきなり。

明治書院出版總目錄 御申越次第贈呈

發賣元 東京神田錦町一丁目 振替東京四九一番

株式會社 **明治書院**

電話長本局二四三八番

(中付二の三)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

永井荷風著作

荷風傑作鈔

花瓶

永井荷風が代表的傑作數十篇

習作時代の傑作、外遊時代の傑作、婦朝後の傑作、最近の傑作。

總假名付ポイント活字、二度刷、中判七百餘頁、紺裝金色燦爛。定價壹圓八拾錢。

■愈五月五日を以て發賣■

傑作鈔は著者が文學の一大系圖也
花瓶は新意を出した近作也

此の新作少說は、永井氏が新らたに拓かんとする文學の新境地を示すものにして雜誌に掲げずいきなり單行本として發賣す。定價一册金卅錢なり。

■四月五日を以て發賣■

(中付三の四)

東京市丸の中 三菱廿一號館　**籾山書店**　振替東京二四一七 電話本局二一三二

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

春期大附録

小說十七篇

(執筆者)

森鷗外
里見弴
上司小劍
岩野泡鳴
田村俊子
小川未明
藤原末雄
中村星湖
谷崎潤一郎
鈴木三重吉
田山花袋
長田幹彦
正宗白鳥
野上彌生子
久保田万太郎
小山內薫
近松秋江



津下四郎左衛門

森林太郎

津下四郎左衛門は私の父である。（私とは誰かと云ふことは下に見えてゐる。）しかし其名は只聞く人の耳に空虚なる固有名詞として響くのみであらう。それも無理は無い。世に何の貢献をもせずに死んだ、艸木と同じく朽ちたと云はれても、私はさうでないと辯ずることが出來ない。

かうは云ふものの、若し私がここに一言を附け加へたら、人が「ああ、さうか」とだけは云つてくれるだらう。其一言はかうである。「津下四郎左衛門は横井平四郎の首を取つた男である。」

丁度世間の人が私の父を知らぬやうに、世間の人は皆横井平四郎を知つてゐる。熊本の小楠先生を知つてゐる。

私の立場から見れば、横井氏が榮譽あり慶祥ある家である反對に、津下氏は恥辱あり殃咎ある家であつて、私はそれを歎かずにはゐられない。

此禍福とそれに伴ふ問題とがどうして生じたか。私はそれを推し窮めて父の寃を雪ぎたいのである。

徳川幕府の末造に當つて、天下の言論は尊王と佐幕とに分かれた。そして苟も氣節を重んずるものは皆尊王に趨つた。其時尊王には攘夷が附帶し、佐幕には開國が附帶して唱道せられてゐた。どちらも二つ宛のものを一つ／＼に引き離しては考へられなかつたのである。

私は引き離しては考へられなかつたと云ふ。これは群集心理の上から云ふのである。

歴史の大勢から見れば、開國は避くべからざる事であつた。攘夷は不可能の事であつた。智慧のあるものはそれを知つてゐた。知つてゐてそれを祕してゐた。衰運の幕府に最後の打撃を食はせるには、これに責むるに不可能の攘夷を以てするに若くはないからであつた。此祕密は群集心理の上には少しも滲徹してゐなかつたのである。

開國は避くべからざる事であつた。其の避くべからざるは、當時外夷とせられてゐたヨオロッパ諸國やアメリカは、我に優つた文化を有してゐたからである。智慧のあるものはそれを知つてゐた。横井平四郎は最も早くそれを知つた一人である。私の父は身を終ふるまでそれを曉らなかつた一人である。

弘化四年に横井の兄が病氣になつた。横井は福間某と云ふ蘭法醫に治療を託した。當時元田元孚などと交つて、塾を開いて程朱の學を敎へてゐた横井が、肉身の兄の病を治療してもらふ段になると、ヨオロッパの醫術にたよつた。横井が三十九歲の時の事である。

嘉永五年に池邊啓太が熊本で和蘭の砲術を敎へた時、横井は門人を遣つて傳習させた。池邊は長崎の高島秋帆の弟子で、高島が嫌疑を被つて江戸に召し寄せられた時、一しよに拘禁せられた男である。兵

器と、それを使ふ技術とも、ヨオロッパが優つてゐたのを、横井は知つてゐた。横井が四十四歳の時の事である。

翌年横井が四十五歳になつた時、Perry が横濱に來た。横井は早くも開國の必要を感じ始めた。安政元年には四十六歳で、ロシアの使節に逢はうとして長崎へ往つた。其留守には吉田松陰が尋ねて來て、置手紙をして歸つた。智者と智者との氣息が漸く通ぜられて來た。翌年四十七歳の時、長崎に遣つてゐた門人が、海軍の事を研究しに來た勝義邦と識合になつて、勝と横井とが交通し始めた。これも智者の交である。慶應二年五十八歳の時、横井は左平太、太平の二人の甥を米國に遣つた。海軍の事を學ばせるためであつた。此の古い洋行者は皆横井が兄の子で、後に兄を伊勢佐太郎と曰ひ、弟を沼川三郎と曰つた。横井は初め兄の家を繼いだものなので、其家を左平太の伊勢太郎に讓つた。伊勢太郎の子が今の時雄君である。

智者は尊王家の中にも、佐幕家の中にもあつた。しかし尊王家の智者は其智慧の光を晦ますことを努めた。晦ますのが、多數を制するには有利であつたからである。開國の必要と云ふことが、群集心理の上に滲徹しなかつたのは、智慧の祕密が善く保たれたのである。此間の消息を一の drame の如くに、觀照的に鍊稠して見せたのは、梧陰存稿の中に、井上毅の書き殘した岩倉具視と玉松操との物語である。これは敎科書にさへ拔き出されてゐるのだから、今更ここに繰り返す必要はあるまい。そんなら其智慧はどうして保たれたか。岩倉村幽居の「裏のかくれ戸」は、どうして人の耳目に觸れずにゐたか。それは多數が愚だからである。

私は殘念ながら父が愚であつたことを承認しなくてはならない。父は愚であつた。しかし私は父を辯護するために、二箇條の事實を提出したい。一つは父が青年であつたと云ふこと、今一つは父の身分が低かつたと云ふことである。

父が生れた時、智者横井は四十歳であつた。三十一歳で江戸に遊學して三十二歳で熊本に歸つた。當時の江戸歸は今の洋行歸と同じである。父が横井を刺した時、横井は六十一歳で、參與と云ふ顯要の地位にをつた。父は二十二歳の浮浪の青年であつた。

智者横井は知行二百石足らずの家とは云ひながら、兎に角細川家の奉行職の子に生れたのに、父は岡山在の里正の子に生れた。伊木若狹が備中越前鎭撫總督になつた時、父は其勇戰隊の卒伍に加はらうとするにも、幾多の抗抵に出逢つたのである。

人の智慧は年齡と共に發展する。父は生れながらの智者ではなかつたにしても、其の僅に持つてゐた智慧だに未だ發展するに遑あらずして已んだのかも知れない。又人の智慧は遭遇によつて補足せられる。父は縱しや愚であつたにしても、若し智者に親近することが出來たなら、自ら發明する所があつたのかも知れない。父は縱しや預言者たる素質を有してゐなかつたにしても、遂に consacrés の群に加はることが出來ずに、時勢の祕密を覗ひ得なかつたのは、單に身分が低かつたためではあるまいか。人は「あが佛尊し」と云ふかも知れぬが、私はかう云ふ思議に涉ることを禁じ得ない。

私の家は代々備前國上道郡浮田村の里正を勤めてゐた。浮田村は古く沼村と云つた所で、宇喜多直家の城址がある。其城壕のまだ殘つてゐる土地に、津下氏は住んでゐた。岡山からは東へ三里ばかりで、

何一つ人の目を惹くものもない田舎である。

私の祖父を里正津下市郎左衞門と云つた。舊家に善くある習で、祖父は分家で同姓の家の娘を娶つた。祖母の名は千代であつた。千代は備前侯池田家に縁故のあつた人で、駕籠で岡山の御殿に乘り附ける特權を有してゐたさうである。恐らくは乳母ではなかつたかと、私は想像する。此夫婦の間に私の父は生れた。

父は嘉永二年に生れた。幼名は鹿太であつた。これも舊家に善くある習で、鹿太は兩親の望に任せて小さい時に婚禮をした。鹽見氏の丈と云ふ娘と盃をしたのである。多分嘉永四年で、鹿太は四歳、丈は一つ上の五歳であつたかと思ふ。

鹿太は物騷がしい世の中で、「黑船」の噂の間に成長した。市郎左衞門の所へ來る客の會話を聞けば、其詞の中に何某は「正義」の人、何某は「因循」の人と云ふことが必ず出る。正義とは尊王攘夷の事で、因循とは佐幕開國の事である。開國は寧ろ大膽な、進取的な策であるべき筈なのに、それが因循と云はれたのは、外夷の脅迫を懼れて、これに屈從するのだと云ふ意味から、さう云はれたのである。其背後には支那の歷史に、夷狄に對して和親を議するのは奸臣だと云ふことが書いてあるのが、心理上に réminiscence として作用した。現に開國を說く人を憎む情の背後には、秦檜のやうな歷史上の人物を憎む情が潛んでゐたのである。鹿太は早く大きくなりたいと願ふと同時に、早く大きくなつて正義の人になりたいと願つた。

文久二年に鹿太は十五歳で元服して、額髮を剃り落した。骨組の逞ましい、大柄な子が、大髻に結

つたので、天晴大人のやうに見えた。通稱四郎左衞門、名告は正義となつた。それを公の帳簿に四郎とばかり書かれたのは、池田家に左衞門と云ふ人があつたので、遠慮したのだらうである。祖父の市郎左衞門も、公には矢張市郎で通つてゐた。

鹿太は元服すると間もなく、これまで姉のやうにして親んでゐた丈と、眞の夫婦になつた。此頃から鹿太は岡山の阿部守衞の内弟子になつて、擊劍を學んだ。阿部は當時劍客を以て關西に鳴つてゐたのである。

文久三年二月には私が生れた。父四郎左衞門は十六歲、母は十七歲であつた。私は父の幼名を襲いで鹿太と呼ばれた。

慶應三年の冬、此年頃醞釀せられてゐた世變が漸く成熟の期に達して、德川慶喜は大政を奉還し、將軍の職を辭した。岡山には、當時の藩主池田越前守茂政の家老に、伊木若狹と云ふ尊王家があつて、兼て水戶の香川敬三、因幡の河田左久馬、長門の桂小五郎等を泊らせて置いた位であるので、翌年明治元年正月に、此伊木が備中越前鎭撫總督にせられた。

伊木の手には卒三百人しか無かつた。それでは不足なので、松本箕之介が建策して先づ勇戰隊と云ふものを編成した。岡山藩の士分のものから有志者を募つたのである。四郎左衞門はすぐにこれに應ぜようとしたが、里正の子で身分が低いので斥けられた。

そのうち勇戰隊はもう編成せられて、能呂勝之進がそれを引率して、備中國松山に向つて進發した。隊が岡山を離れて、まだ幾程もない時、能呂がふと前方を見ると、隊の先頭を少し離れて、一人の男が

道の眞中を濶歩してゐる。隊の先導をするとでも云ふやうに見える。骨組の逞しい大男で、頭に烏帽子を戴き、身に直垂を着、短袴を穿いて、太刀を吊つてゐる。能呂は隊の行進を停めて、其男を呼び寄せさせた。男は阿部守衛の門人津下四郎左衛門と名告つて、さて能呂にかう云つた。自分は兼てより尊王の志を懷いてゐるものである。此度勇戰隊が編成せられるに就いては、是非共其一員に加はりたいので、早速志願したが、一里正の子だと云ふ廉で御採用にならなかつた。しかし隊の勇ましい門出を餘所に見て、獨り岡山に留まるに忍びないから、若し戰闘が始まつたら、微力ながら應援いたさうと思つて、同じ街道を進んでゐるのだと云つた。能呂は其風釆をも口吻をも面白く思つて、すぐに伊木に請うて、四郎左衛門を隊伍に入れた。四郎左衛門が二十一歲の時の事である。

　松山の板倉伊賀守勝靜は老中を勤めてゐた身分ではあるが、時勢に背き王師に抗すると云ふ意志は無かつたので、伊木の隊は血を流さずに鎭撫の目的を遂げた。それから隊が六月まで約半年間松山に駐屯して、そこで伊木は第二隊を募集した。備中の藤島政之進が指揮した義戰隊と云ふのがそれである。

　或る日城外の調練場で武藝を試みようと云ふことになつて、備前組と備中組とが分かれて技を競べた。然るに擊劍の上手は備中組に多かつたので、備前組が頻に敗を取つた。其時四郎左衛門が出て、備中組の手剛い相手數人に勝つた。伊木は喜んで、自分の乘つて來た馬を四郎左衛門に與へた。競技が濟んで歸る時、四郎左衛門が其馬に騎つて行くと、沿道のものが伊木だと思つて敬禮をした。

　六月に伊木は勇戰義戰の兩隊を纏めて岡山に引き上げた。兩隊は國富村操山の少林寺に舍營することになつた。四郎左衛門は隊の勤務の旁、伊木の分家伊木木工の側雇と云ふものになつて、劍擊の指南を

どをしてゐた。

四郎左衞門は勇戰隊にゐるうちに、義戰隊長藤島政之進の下に參謀のやうな職務を取つてゐた上田正夫と心安くなつた。二人が會合すれば、いつも尊王攘夷の事を談じて慷慨し、所謂萬機一新の朝廷の措置に、動もすれば因循の形迹が見れ、外國人が分外の尊敬を受けるのを慊ぬことに思つた。それは議定參與の人々の間には、初から開國の下心があつて、それが漸く施政の上に發露して來たからである。

或る日二人は相談して、藩籍を脫して京都に上ることにした。偕に輦轂の下に住んで、親しく政府の施設を見ようと云ふのである。二人の心底には、秕政の根本を窮めて、君側の奸を發見したら、直ちにこれを除かうと云ふ企圖が、早くも此時から萠してゐた。

二人は京都に出た。さて議定參與の中で、誰が洋夷に心を傾けてゐるかと探つて見た。其時二人の目に奸人の巨魁として映じたのは、三月に徵士となつて熊本から入京し、制度局の判事を經て、參與に進んだ橫井平四郎であつた。

橫井は久しく越前侯松平慶永の親任を受けてゐて、公武合體論を唱へ、慶永に開國の策を献じた男である。其外大阪の城代土屋采女正寅直の用人大久保要に由つて德川慶喜に上書し、又藤田誠之進を介して水戶齊昭に上書したこともある。世間では其論策の內容を錯り傳へて、廢帝を議したなどゝ云つたり、又洋夷と密約して、基督敎を公許しようとしてゐるなどゝ云つたりした。

公武合體論者の橫井が、純粹な尊王家の目から視て、灰色に見えたのは當然の事であるが、それが眞黑に見えたのは、別に由つて來たる所がある。橫井は當時の智者ではあつたが、其思想は比較的單純で、

それを發表するに、世の嫌疑を避けるだけの用心をしなかつた。横井は政治の歴史の上から、共和政の價値を認めて、アテエネに先だつこと數百年、堯舜の時に早く共和政が有つたと斷じた。「人君何天職。代天治百姓。自非天德人。何以愜天命。所以堯巽舜。是眞爲大聖。」これは共和政を日本へ行はうと云ふ意ではない。横井は又ヨオロッパやアメリカで基督教が、人心を統一する上に於いて、頗る有力であるのを見て、神儒佛三教の不振を歎いた。「西洋有正教。其教本上帝。戒律以導人。勸善懲惡戾。上下信奉之。因教立法制。治教不相離。是以人奮勵。」これは基督教を日本に弘めようと云ふ意ではない。同じ詩の末解にも、「嗟乎唐虞道。明白如朝霽。捨之不知用。甘爲西洋隸」と云つてある。横井は政治上には尊王家で、思想上には儒者であつた。甘んじて西洋の隸となることを憤つた心は、攘夷家の心と全く同じである。しかし當時の尊王攘夷論者の思想は、横井よりは一層單純であつたので、遂に横井を誤解することになつた。

　横井が志士の間に奸人として視られてゐたのは、此時に始まつたことでは無い。六年前、文久元年に江戸で留守居になつてゐた時も、都筑四郎、吉田平之助と一しよに、吳服町の料理屋で酒を飲んでゐるところへ、刺客が踏み込んで殺さうとしたことがある。吉田は刺客に立ち向つて、肩先を深く切られて、創のために命を隕したが、横井は刺客の袖の下を潛つて、都筑と共に其場を逃げた。吉田の子巳熊は仇討に出て、豐後國鶴崎で刺客の一人を討ち取つた。横井は吳服町での擧動が、いかにも卑怯であつたと云ふので、熊本に歸つてから祿を褫はれた。

　上田立夫と四郎左衞門とは、時機を覗つて横井を斬らうと決心した。しかし當時の横井は、もう六年

前の一藩士では無い。朝廷の大官で、駕籠に乘つて出入する。身邊には門人や從者がゐる。若し二人で襲撃して爲損じてはならない。そこで内密に京都に出てゐた處士の間に物色して、四人の同志を得た。一人は郡山藩の柳田直藏、今一人は尾張藩の鹿島又兵衞、跡の二人はいづれも十津川の人で、前岡力男と云ひ、中井刀禰夫と云つた。皆朝廷の前途のために、身命を抛ちたいと誓つた少壯の人達である。

四郎左衞門は土屋信雄と變名して、京都の片田舍の三宅某と云ふものゝ家に潛伏してゐた。そして時々五人の同志と會合して、所謂斬奸の手筈を相談した。然るに生憎横井は腸を傷めて、久しく出勤しなかつた。邸宅の邊を徘徊して窺ふに、大きい文箱を持つた太政官の使が頻に往反するばかりである。同志の人々はいつそ邸内に踏み込んで擊たうかとも思つた。しかし此秘密結社の牛耳を執つてゐた上田が聽かなかつた。なぜと云ふに、横井は處士に忌まれてゐることを好く知つてゐて、邸宅には十分の警戒をしてゐた。そこへ踏み込んでは、六人の力を以てしても、必ず成功するとは云はれなかつたからである。

歳暮に迫つて、横井は全快して日々出勤するやうになつた。同志の人々は會合して、來年早々事を擧げようと議決した。さて約束が極まつた時、四郎左衞門は訣別のために故郷へ立つた。

四郎左衞門が京都に上つてからも、浮田村の家からは、市郎左衞門が終始密使を遣つて金を送つてゐた。同志の會合は、人の耳目を掠くために、わざと祇園新地の揚屋で催されたが、其費用を拂ふのは大抵四郎左衞門であつた。色が白く、柔和に落ち着いてゐて、酒を飲んでも行儀を崩さぬ四郎左衞門は、藝者や仲居にもてはやされたさうである。或る時同志の中の誰やらがかう云つた。かうして津下にばか

り金を遣はせては氣の毒だ。軍資を募るには手段がある。我々も人真似に守錢奴を脅して見ようではないかと云つた。其時四郎左衛門がきつと居直つて、一座を見廻してから云つた。我々の交は正義の交である。君國に捧ぐべき身を以て、盗賊にまぎらはしい振舞は出來ない。假に死んでしまふ自分は瑕瑾を顧みぬとしても、父祖の名を汚し、恥を子孫に遺してはならない。自分だけは同意が出來ないと云つた。

大晦日の雪の夜であつた。津下氏の親類で、同じ浮田村に住んでゐた杉本某の所から、津下の留守宅へ使が來た。急用があるから、在宅の人達は皆揃つて、こつそり來て貰ひたいと云ふことであつた。市郎左衛門夫婦は何事かと不審に思つたが、よめの丈には、兎に角急いで支度をせいと言ひ附けた。若しや夫の身の上に掛かつた事ではあるまいかと心配しつゝも、祖父母の跡に附いて、當時二十二歳の母は、六歳になつた私を連れて往つた。

杉本方に待つてゐたのは父四郎左衛門であつた。私は幼かつたので、父がどんな容貌をしてゐたか、はつきり想ひ浮べることが出來ない。只「坊主好く來た」と云つて、微笑みつゝ頭を撫でゝくれたことだけを、微かに記憶してある。兩親と母とには、餘り逗留が長くなるので、一寸逢ひに歸つたと云つたさうである。父は夜の明けぬうちに浮田村を立つて、急いで京都へ引き返した。

明治二年正月五日の午後である。太政官を退出した參與横井平四郎の駕籠が、寺町を御靈社の前に差し掛かつた。駕籠の兩脇には門人横山助之丞と下津鹿之介とが引き添つてゐる。若黨上野友次郎、松村金三郎の二人に、草履取が附いて供をしてゐる。忽ち一發の銃聲が薄曇の日の重い空氣を震動させて、とある町家の廂間から、五六人の士が刀を拔き連れて出た。上田等の同志のものである。短銃は駕籠舁

や家來を威嚇するために、中井がわざと空に向つて放つたのである。

駕籠舁は駕籠を棄てゝ逃げた。横井の門人横山、下津は、兼て途中の異變を慮つて、武藝の心得のあるものを選んで附けたのであるから、刀を拔き合せて立ち向つた。横山は鹿島と渡り合ひ、下津は柳田と渡り合ふ。前田、中井は從者等を支へて寄せ附けぬやうにする。

上田と四郎左衛門とは一歩後に控へて見てゐると、駕籠の戸を開いて横井が出た。列藩徴士中の高齢者で、少し疎になつた白髪を髻に束ねてゐる。當年六十一歳である。少しも驚き慌てた様子はなく、拔き放つた短刀を右手に握つて、冷かに同志の人々を見遣つた。横井は撃劍を好んでゐた。七年前に品川で刺客に背を見せたのは、逃げる餘裕があつたから逃げたのである。今日は逃げられぬと見定めて、飽くまで闘はうと思つてゐる。

上田が「それ」と、四郎左衛門に目くばせして云つた。四郎左衛門は只一打にと切つて掛かつた。しかし横井は容易く手元に附け入らせずに、劍術自慢の四郎左衛門を相手にして、十四五合打ち合つた。此短刀は今も横井家に傳はつてゐるが、刄がこぼれて簓のやうになつてゐる。

横井が四郎左衛門の刀を防いでゐるうちに、横山は鹿島の額を一刀切つた。鹿島は血が目に流れ込むので、二三歩飛びしざつた。横山が附け入つて討ち果さうとするのを、上田が見て、横合から切つて掛かつた。其勢が餘り烈しかつたので、横山は上田の腕に微傷を負はせたにも拘らず、刄を引いて逃げ出した。上田は追ひ縋つて、横山の後頭を一刀切つて引き返した。

四郎左衛門が意外の抵抗に逢つて怒を發し、勢鋭く打ち込む刀に、横井は遂に短刀を打ち落された。

四郎左衛門は素早く附け入つて、横井を押し伏せ、髻を掴んで首ヶ斬つた。

四郎左衛門は「引上げ」と一聲叫んで、左手に横井の首を提げて驅け出した。寺町通の町人や往來の人は、打ち合ふ一群を恐る〳〵取り卷いて見てゐたが、四郎左衛門が血刀と生首とを持つて來るのを見て、さつと道を開いた。

此時横井の門人下津は、初め柳田に前額を一刀切られたのに屈せず、奮闘した末、柳田の肩尖を一刀深く切り下げた。柳田は痛痍にたまらず、ばたりと地に倒れた。下津は四郎左衛門が師匠の首を取つて逃げるのを見て、柳田を棄てゝ、四郎左衛門の跡を追ひ掛けた。

下津が四郎左衛門を追ひ掛けると同時に、前岡、中井に支へられてゐた從者の中から、上野が一人引きはづして、下津と共に驅け出した。

上野は足が下津より早いので、殆ど四郎左衛門に追ひ附きさうになつた。四郎左衛門は振り返りしなに、首を上野に投げ附けた。首は上野の右の腕に強く中つた。上野がたじろく隙に、四郎左衛門は逃げ伸びた。

上野が四郎左衛門を追ひ掛けて行つた跡で、從者等は前岡、中井に切りまくられて、跡へ跡へと引いた。前岡、中井は四郎左衛門が横井を討つたのを見たので、方角を換へて逃げた。横山に額を切られた鹿島も、上田も、隙を覗つて逃げた。同志のうちで其場に殘つたのは深痍を負つた柳田一人であつた。

四郎左衛門の投げ附けた首を拾つた上野と一しよに、下津が師匠の骸の傍へ引き返す所へ、横山も戻つて來た。取り卷いてゐた群集の中から、其外の從者が出て來て、下津等に手傳つて、身首所を異にし

てゐる骸を駕籠の内に收めた。市中の警戒をしてゐた邏卒が大勢來て、柳田を捕へて往つたのは、此時の事であつた。

四郎左衛門は市中を一走りに駈け拔けて、田圃道に出ると、刀の血を道傍の小河で洗つて鞘に納め、ゆつくり歩いて座敷を借りてゐた三宅方へ歸つた。三宅方の裏には小さい酒屋があつた。四郎左衛門はそこで酒を一升買つて、其德利を手に提げて、竹籔の中にある三宅方の裏口から這入つた。三宅の家には、四郎左衛門が捕はれて死んだ後に、此德利が紫縮緬の袱紗に包んで、大切に藏つてあつたさうである。

捕へられた柳田は一言も物を言はず、又取調を命ぜられた裁判官等も、强ひて問ひ窮めようともせぬので、同志の名は暫く知られずにゐた。しかし柳田と往來したことのある人達が次第に召喚せられて、中には牢屋に繋がれたものがある。

四郎左衛門は毎日市中に出て、捕へられた柳田の生死を知らうと思ひ、又どんな人が逮捕せられたか知らうと思つて、諸方で問ひ合せた。柳田は深痍に惱んでゐて、まだ死なぬと云ふこと、同志の名を明さぬと云ふことなどは、市中の評判になつてゐた。召喚せられて牢屋に留め置かれたり、又捕縛せられて牢屋に入れられたりしたのは、多くは尊王攘夷を唱へて世に名を知られた人々である。中にも名高いのは和泉の中瑞雲齋で、これは長男薫、二男鼎、三男建と共に入牢した。出雲の金本謙藏、十津川の全田次郎、下總の千葉德次郎、二條城詰の親兵大隈熊藏なども入牢した。四郎左衛門の同郷人では、海間十郎左衛門が召喚せられたが、これは一應尋問を受けて、すぐに歸された。海間は岡山紙屋町に吉田屋

と云ふ旅人宿を出してゐた男で、志士を援助すると云ふ評判のあつたものである。

市中の評判は大抵同志に同情して、却つて殺された横　の罪を責めると云ふ傾向を示した。柳田の沈默が稱へられる。同志の善く秘密を守つて、巧に形跡を晦ましたのが驚歎せられる。それには横井の殺された二三日後に、辻々に貼り出された文書などが、影響を與へてゐるのであつた。此文書は何者の手に出でたか、同志の干り知らぬものであつたが、其文意を推するに、例の落首などの如き惡戯ではなく、全く同志を庇護しようとしたものと見えた。貼札は間もなく邏卒が剝いで廻つたが、市中には寫し傳へたものが少く無かつた。其文はかうである。

「去んぬる五日、徴士横井平四郎を、寺町に於いて、白日斬殺に及びし者あり。一人は縛に就、餘黨は嚴しく追捕せらると云。右斬奸之徒、吾未だ其人を雖不知、全く憂國之至誠より出でたる事と察せらる。夫れ平四郎が奸邪、天下所皆知也。初め舊幕に阿諛し、恐多くも廢帝之說を唱へ、萬古一統の天日嗣を危うせんとす。且憂國之正士を構陷讒戮し、此頃外夷に內通し、耶蘇教を皇國に蔓布することを約す。又朝廷の急務とする所の兵權を屛棄せんとす。其餘之罪惡、不遑枚擧。今王政一新、四海屬目之時に當りて、如此大奸要路に横り、朝典を敗壞し、朝權を毀損し、朝士を惑亂し、堂々たる我神州をして犬羊に齊しき醜夷の屬國たらしめんとす。彼徒は之を寬假すること能はず、不得已斬殺に及びしものなり。其壯烈果敢、櫻田の擧にも可比較。是故に苟有義氣者、愉快と稱せざるはなし。抑如此事變は、下情の壅塞せるより起る。前には言路洞開を令せらると雖も、空名のみにして其實なし。忠誠慷慨之者は固陋なりとして擯斥せられ、平四郎の如き朝廷を誣罔する大奸賊登庸せられ、類を以て集り、政體を頽

壞し、外夷愈跋扈せり。有志之士、不堪杞憂、屢正論讜議すと雖、雲霧濛々、毫も採用せられず。乃ち斷然奸魁を斃して、朝廷の反省を促す。下情壅塞せるより起ると云ふは即是也。切に願ふ、朝廷此情實を諒とし給ひ、詔を下して朝野の直言を求め、奸佞を驅逐し、忠正を登庸し、邪說を破り、大體を明にし給はむことを。若夫斬奸之徒は、其情を嘉し、其罪を不論、其實を推し、其名を不問、速に放赦せられよ。果して然らば、啻に國體を維持し、外夷の輕侮を絶つのみならず、天下之士、朝廷改過の速なるに悦服し、斬奸の擧も亦迹を絶たむ。然らずんば奸臣朝に滿ち、乾綱紐を解き、內憂外患交至り、し彼衰亡の幕府と擇ぶなきに至らむ。於是乎、憂國之士、奮然蹶起して、奸邪を芟除し、子遺なきを期すべ。是れ朝廷の威信を繫ぐ所以の道に非ず。皇祖天神照鑒在上。吾說の是非、豈論ずるを須ゐんや。吾に左袒する者は、檄の至るを待ち、叡山に來會せよ。共に回天の大策を可議者也。明治二年春王正月、大日本憂世子。」

此貼札に更に紙片を貼り附けて、「右三日之間令揭示候間、猥に取除候者あらば斬捨可申候事」と書いてあつた。これは後に彈正臺に勤めてゐた、四郎左衞門の劍術の師阿部守衞が、公文書の中から寫し取つて置いたものである。

橫井を殺してから九日目の正月十四日に、四郎左衞門が當時官吏になつてゐた信州の知人近藤十兵衞の所に往つて、官邊での取沙汰を尋ねてゐると、そこへ邏卒が踏み込んで、主人と客とを拘引した。これは上田が鹿島と一しよに高野山の麓で捕へられたために、上田の親友であつた四郎左衞門が逮捕せられることになつたのである。初め海間が喚ばれた時、裁判官は備前の志士の事を糺問したが、海間は言

を左右に託して、嫌疑の上田等の上に及ぶことを避けた。しかし腕に切創のある上田が捕へられて見れば、海間の心づくしも徒事になつた。

四郎左衛門が捕へられてから中一日置いて、十六日に柳田は創のために死んだ。牢屋にはまだ舊幕の遺風が行はれてゐたので、其屍は鹽漬にせられた。上田と四郎左衛門とが捕へられた後に、備前で勇戰隊を編成した松本箕之介は入牢し、これに與つた家老戸倉左膳の臣齋藤直彦も取調を受けた。

當時の法廷の摸様は、信憑すべき記載もなく、又其事に與つた人も亡くなつたので、私は精しく知らぬが、裁判官の中にも同志の人達に同情するものがあつたので、苛酷な處置には出でなかつたさうである。私は又薫子と云ふ女があつて、四郎左衛門を放免して貰はうとして周旋したと云ふことを聞いた。幼年の私は、天子様のために働いて入牢した父を、救はうとした女だと云ふので、下髮に緋の袴を穿いた官女のやうに思つてゐた。しかし實はどう云ふ身分の女であつたかわからない。後明治十一二年の頃、薫子は岡山に來て、人を集めて敬神尊王の話をしたり、人に歌を書いて遣つたりしたさうであるが、私は其頃もう岡山にゐなかつた。

父四郎左衛門は東京に護送せられて、明治三年に刑場の露と消えたと云ふことである。官邊への遠慮があるので、墓は立てずにしまつた。私には香花を手向くべき父の墓と云ふものが無いのである。私は今は記えてゐぬが、父の訃音が聞えた時、私はどうして死んだのかと尋ねたさうである。母が私に、斬られて死んだと答へた。私は、斬られたなら敵があらう、其敵は私がかうして討つと云つて、庭に飛び降りて、木刀で山梔の枝を敲き折つた。母はそれに驚いて、其後は私の聽く所で父の噂をしなくなつた

さうである。

父が亡くなつてから、祖父は力を落して、田畑を預けた小作人の監督をもしなくなつた。收穫は次第に耗つて、家が貧しくなつた。祖父母が亡くなつた跡には、母と私とが殆ど無財産の寡婦孤兒として殘つた。否、啻に寡婦孤兒だと云ふのみではない。私共は刑餘の人の妻子である。日陰ものである。

母は私を養育し、又段々と成長する私を學校へ遣るために、身を粉に碎くやうな苦勞をした。私は母のお蔭で、東京大學に籍を置くまでになつたが、種々の障礙のために半途で退學した。私は今其障礙を數へて、めめしい分疏をしたくは無い。しかし只一つ言ひたいのは、私が幼い時から、刑死した父の寃を雪がうと思ふ熱烈な情に驅られて、專念に學問を研究することが出來なかつたと云ふ事實である。

人は或は云ふかも知れない。學問を勉强して、名を成し家を興すのが、即ち父の寃を雪ぐ所以ではないかと云ふかも知れない。しかしそれは理窟である。私は亡父のために日夜憂悶して、學問に思を潛めることが出來なかつた。燃えるやうな私の情を押し鎭めるには、冷かな理性の力が餘りに微弱であつた。

父は人を殺した。それは惡事である。しかし其の殺された人が惡人であつたら、又末代まで惡人と認められる人であつたら、殺したのが當然の事になるだらう。生憎其の殺された人は惡人ではなかつた。今から顧みて、それを惡人だと云ふ人は無い。そんなら父は善人を殺したのか。否、父は自ら認めて惡人となした人を殺したのである。それは父が一人さう認めたのでは無い。當時の世間が一般に惡人だと認めたのだと云つても好い。善惡の標準は時と所とに從つて變化する。當時の父は當時の惡人を殺したのだ。其父がなぜ刑死しなくてはならなかつたか。其父の妻子がなぜ日陰ものにならなくてはならぬか。

かう云ふ取留のない、tautologie に類し、又 circulus vitiosus に類した思想の連鎖が、蜘蛛の絲のやうに私の精神に絡み附いて、私の讀みさした卷を閉ぢさせ、書き掛けた筆を拋たせたのである。

私は學問を廢してから、下級の官公吏の間に伍して、母子の口を餬するだけの俸給を得た。それからは私の執る職務が、器械的の精神上勞作に限られたので、私は父の寃を雪ぐと云ふことに、全力を用ゐようとした。しかしそれは譬へやうのない困難な事であつた。

私は先づ父の行狀を出來るだけ精しく知らうした。それは父が善良な人であつたと云ふことを、私は固く信じてゐるので、父の行狀が精しく知れれば知れる程、父の名譽を大きくすることになると思つたからである。私は休暇を得る毎に旅行して、父の足跡を印した土地を悉く踏破した。私は父を知つてゐた人、又は父の事を聞いたことのある人があると、遠近を問はず訪問して話を聞いた。しかし父が亡くなつてから、もう五十年立つてゐる。山河は依然として在つても、舊道が絶え、新道が開け、田畑が變じて邸宅市街になつてゐる。人も亦さうである。父を知つてゐた人は勿論、父の事を聞いたことのある人は絶無僅有で、其の僅に存してゐる人も、記憶のおぼろけになり、耳の遠くなつたのをかこつばかりである。

私の前に話したのは、此の如くにして集めた片々たる事實を、任意に湊合したものである。傳へ誤りもあらう、聞き誤りもあらう。又識らず知らずの間に、私の想像力が威を逞うして、無中に有を生じた處も無いには限らない。しかし大體の上から、私はかう云ふことが出來ると信ずる。私の豫想は私を欺かなかつた。私の豫想は成心ではなかつた。私の父は善人である。氣節を重んじた人である。勤王家で

ある。愛國者である。生命財産より貴きものを有してゐた人である。理想家である。

私はかう信ずると共に、聊自ら慰めた。然しながら其反面に於いて、私は父が時勢を洞察することの出來ぬ昧者であつた、愚であつたと云ふことをも認めずにはゐられない。父の天分の不足を惜み、父を啓發してくれる人のなかつたのを歎かずにはゐられない。これが私の斷案である。父の傳記に添へる論讃である。

私は父の上を私に語つてくれた、人々にここに感謝する。主な一人は未亡人澁間の刀自である。婦人の持前として、纖小な神經が徴細な刺戟に感應して、人の記憶せぬ事を記憶してゐてくれたので、私は未亡人に、父の經歴中の幾多のdetailsを提供して貰つた。今一人は後に岡山の典獄になつてゐた三宅某君である。父を流離瑣尾の間に認識して、其愛は遺物の德利にまで及んだ。私は次に父を辯護してくれた二人の名を擧げる。丹羽寛夫君と鈴木無隱君とである。丹羽君は備前の重臣で、三千石取つてゐた人である。それがかう云つた。四郎左衛門を昧者だと云つて責めるのは酷である。當時の日本は鎖國で、備前は又鎖國中の鎖國であつた。岡山の人は足を藩の領域に踏み出すことが出來なかつた。青年共は女が戀しくなると、岡山の西一里ばかりの宮内へ往つた。しかし人に無禮をせられても咎めることが出來なかつた。咎めると、自分が越中界に入つたことが露顯するからである。其青年共に世界の大勢に通じてゐなかつたのを責めるのは無理である。己も京都にゐた時、或る人を刺さうとしたことがある。しかし事に阻げられて果さずに岡山に歸つた。そのうち比較的に身分が好いので、少屬に採用せられた。それから當路者と交際して、やう〳〵外國の事情を聞いた。己は智者を以て自ら居るわけではないが、己と四

郎左衛門との間には軒輊する所は無い筈だと云つた。鈴木君は内外典に通じた學者で、荒尾精君等と國事を謀つてゐた人である。それが私にかう云ふ傳言をした。己は四郎左衛門を知つて居た。四郎左衛門は昧者ではなかつた。横井を刺したには相應の理由があると云ふのであつた。しかし私の面會せぬうちに、鈴木君は亡くなつた。どんな說を持つてゐたか知らぬが、殘惜しいやうな氣がする。

私は父の事蹟を探つただけで滿足したのではない。顏に塗られた泥を洗ふやうに、積極的に父の寃を雪ぎたいと云ふのが、私の幼い時からの欲望である。幼い時にはかう思つた。父は天子樣のために働いた。それを人が殺した。私は其の殺した人を殺さなくてはならぬと思つた。稍成長してから、私は父を殺したのは人ではない、法律だと云ふことを知つた。其時私はねらつてゐた的を失つたやうに思つた。自分の生活が無意味になつたやうに思つた。私は此發見が長い月日の間私を苦めたことを記憶してゐる。

私は此內面の爭闘を閱した後に、暫くは惘然としてゐたが、思量の均衡がやうやう恢復せられると共に、從來回抱してゐた雪寃の積極手段が、全く面目を改めて意識に上つて來た。私はどうにかして亡き父を朝廷の恩典に浴させたいと思ひ立つた。父は王政復古の時に當つて、人に先んじて起つて王事に勤めたのである。其の人を殺したのは、政治上の意見が相容れなかつたためである。殺されたものは政爭の犧牲である。さうして見れば、時代が既に推移して、恩讎兩つながら滅した今になつて、枯骨が朝恩に沾つたとて、何の不可なることがあらうぞ。私はかう思つて同鄕の先輩に謀り、當路の大官に愬へた。それは私が學問を廢することになつた後の事である。

明治十九年から二十年に掛けて、津下四郎左衛門に贈位する可否と云ふことは、一時其筋の問題にな

つてゐたさうである。しかし結局、特赦を蒙らずして刑死したものに、贈位を奏請することは出來ぬと云ふことになつた。私は落膽して、再び自分の生活が無意味になつたやうに思つた。尤も此時の苦悶は、昔復讐の對象物を失つた時に比べて、餘程輕く又短かつた。私が老成人になつてゐたためかも知れぬが、或は私の神經が鈍くなつたためだとも思へば思はれる。

私はもうあきらめた。讓歩に讓歩を重ねて、次第に小さくなつた私の望は、今では只此話を誰かに書て貰らつて、後世に殘したいと云ふ位のものである。

聞書はここに終る。文中に「私」と云つてあるのは、津下四郎左衛門正義の子で、幼名を鹿太と云つた人である。それだけの事は既に文中に見えてゐる。それのみでは無い。讀者は、鹿太がどんな性質の人でどんな境遇にゐて、どんな閲歴を有してゐると云ふことも、おほよそは窺ふことが出來たであらう。

私は此聞書の éditeur として、多くの事を書き添へる必要を感ぜない。只これが私の手で公にせられることになつた來歴を言つて置きたい。私は既に大學を出て、父の許にゐて、弟篤次郎がまだ大學にゐた時の事である。私は篤次郎に、「どうだ、學生仲間にえらい人があるか」と云つた。弟はすぐに二人の同級生の名を擧げた。一人はKと云つて、豪放な人物、今一人は津下正高と云つて、狷介な人物だと云ふことであつた。弟は後に才子を理想とするやうになつたが、當時はまだ豪傑を理想としてゐたのである。Kも津下君も弟が私に紹介した。Kは力士のやうに肥滿した男で、柔術が好であつた。氣の毒な事には、酒興に任せて强盗にまぎらはしい事をして、學生の籍を削られた。津下君は即鹿太で、此聞書の

antenr である。

津下君は色の蒼白い細面の青年で、いつも眉根に皺を寄せてゐた。私は君の一家の否運が Kain のしるしのやうに、君の相貌の上に見はれてゐたかと思ふ。君は寡言の人で、私も當時餘り饒舌らなかつたので、此會見は殆ど睨合を以て終つたらしい。しかしそれから後三十年の今に至るまで、津下君は私に通信することを怠らない。私が不精で返事をせぬのを、君は意に介せない。津下君は私に面會してから、間もなく大學を去つて、所々に流寓した。其手紙は北海道から來たこともある。朝鮮から來たこともある。兎に角私は始終君を視野の外に失はずにゐた。

大正二年十月十三日に、津下君は突然私の家を尋ねて、父四郎左衛門の事を話した。聞書は話の殆其儘である。君は私に書き直させようとしたが、私は君の肺腑から流れ出た語の權威を尊重して、殆其儘これを公にする。只物語の時と所とに就いて、杉孫七郎、青木梅三郎、中岡默、德富猪一郎、志水小一郎、山邊丈夫の諸君に質して、二三の補正を加へただけである。津下君は久しく見ぬ間に、體格の巖畳な、顏色の晴々した人になつてゐて、昔の憂愁の影はもう痕だになかつた。私は「書後」の筆を投ずるに臨んで、敬んで君の健康を祝する。

晩い初戀

里見弴

一

先づプラトニックな戀を知り、それから次第に灼くやうな樂慾の味や裏へ々々と掻い潜らうとする種々な戀の戯れなどへ適く世間普通の道樂者の經路とは丁度反對で、昌造は露骨な性慾の策勵から這入つた放蕩を七年ほど續けた後に始めて戀する心を知つた。ものを見、ものを思ふにつけて一々戀人の俤と結び附くやうな、殆ど年若い童貞のプラトニック戀と同樣な戀情に浸ることがあつた。これまで彼の心がその折々に享樂した斷片な幸福の代りに、戀人から豊かに與へられる不斷の糧を有つやうになつた。それにも拘らず彼は時々淋しくなつた。これまで友達とか兄弟とか——彼の好きな周圍に對して感じることが出來た愛が次第に戀

人一人の上に細まつて了つた。そればかりでなく、彼は自分の仕事を愛する念すら大分薄れて來たことを思はない譯にいかなかつた。仕事に專心になつて周圍を忘れ果てゝゐやうとも決して淋しさは來なかつた。しかし今度はそれが來た。彼は僅かばかりの愛する周圍からさえ離れて、自分と戀人と二人きりの世界へ立て籠らなければならないやうに感じた。このことが一方益々彼の戀着を濃かにしたと同時に一方には彼の淋しさの源になつてゐた。彼は戀人が彼自身と同じやうに悉く周圍の愛着を捨てゝ了つて唯々彼の胸へ來て專念に縋り附くことを貪慾に望んだ。かうして二人の世界を何者も侵すことの出來ない別天地に堅めて了はうとした。孤獨を淋しがつて益々その孤獨の城廓内に埋るやうに傾いた。

十二月の或る寒い日暮れがた、昌造は戀人の傍にゐられない苦慮に食滯れたやうな重苦しい心持に餘裕をつけやうと一人戸外へ出た歸り途に、電車の車庫へ突き衝る道幅は廣いが殆ど人通りのない往來へ出て來た、工場の多いその邊の空は煤煙の濁りで日の短い盛りを殊更夙く暮れかゝつて來た。それでゐて地上には却つて、日中に吸收してゐた光を仄かに吐き返してゐるものがあるやうに、そことも知れぬ明さが漂つてゐた。練瓦塀は赤々と映え、黑い土の上にはブリツキの破片などが跣の蹠の聯想を以てチクリと光つたりした。昌造はいかにもさう云ふ風物に適わしく首をたれ肩を窄めた貧乏臭い容子で、しかも自分と戀人との耀かしい將來を夢のやうに目前に見ながら歩いてゐた。例によつて一方には烈しい孤獨に襲はれながら。

その時昌造は或る露路から一と塊りになつて走り出た二人の人影に驚かされて立ち止つた。その二人は嗄聲を振り絞つて何か云ひ罵りながら澤庵石ほどの大さのものを劇しく奪ひ合つた。昌造はそこに釘

付けにされて四五間隔たつた處から見詰めてゐた。直ぐに、ヒドい容姿の勞働者と、同じやうに男の風呂敷包はしてゐるが勞働する女とで一つの風呂敷包を奪ひ合つてゐる光景が、薄暮の、目にウズ〳〵するやうな明るさのなかに判明して來た。もう二人とも折れて出るとか奸智を弄するとか云ふ人間らしい餘裕を全く失つて、自暴くそな腕力と出放題な罵詈とで獸のやうにたゞ荒れ狂つてゐた。

「巫山戲たまねをするねえ」男はたつた一人の見物人である昌造に氣を兼ねたか少し力を緩めて强ゐて嚴かに云つた。すると女は急に氣負ひかゝつて何か甲高い聲で早口に罵り返した。爭鬪は再び劇しくなつた。

「この不貞腐が！　撲り殺されるな!!」

「なにヨを——撲てるもんなら撲つて見ろ！　さア撲て！」

ポクッと云ふ心の腐つた丸太でも打つたやうな音と一緒に女は顳顬のあたりを强かに擊れて、地上に倒れた。然し風呂敷包の一方は矢張り堅く握つてゐた。——

昌造にはこの男女が何故に爭つてゐるかは解らないが二人の心持だけは判然と自分の心にも感じられた。隅々まで悉く同感することが出來た。彼は慥かにさう云ふ心持を經驗つてゐた。（それは多分嘗て彼が或る女と別れ話をした時に噴井戸のやうにゴブ〳〵と湧き上る劇しい憎惡の念に洋傘の柄を力いつぱい握り締めながら震えて口も利けなかつた時の心持でゝもあらうか。然し今彼はその時の自分を思ひ出してゐるのではなかつた。）

いつともなく彼は男女の勞働者と同じ程度まで亢奮してゐた。彼自身と同じ心を享ち、その一念に焰

のやうになつて有ゆる不純を灼き燼して赤裸になつてゐる二人を彼は堪らないほど親しい者に思つた。全く自分と同じものであつた。戀人も何も忘れて唯その二人が可愛くなつて了つた。――

「撲つたな」女は地上に横座りになつたまゝ正面に男の顔を振り仰いで執念深い冷かな低聲になつて云つた。男は不意に風呂敷包をウンと引いた。女は首をガクリとさせて座つたまゝで二三歩ズル〳〵と引きづられた。そこに昌造が近よつて行つた。彼は青くなつて涙ぐむでゐた。そして杜切々々に云ひ始めた。

「何んにも理由を聞く必要はない。貴方たちの心持はよウく解つてる….眞正に解つてると思ふんだ。だから….。もうよしたらどうだらう。貴方たちはいゝ人なんだ。復雑つた事情は聞かなくつてもいゝとそんなことはどつちになつても決局をんなじことになるんだ。みんないゝ人なんだから….」

昌造はいつも純な心になつた場合に感じるやうにこの時にも心が言葉に化る間際で妙に力を殺がれ、別なものにされて了ふことを感じない譯にいかなかつた。それを感じると同時に心の熱は劇しく急速度で冷め始めた。然し彼はもう一度試みやうと思つた。二人は呆氣にとられて昌造を見てゐた。四つの手が風呂敷包にかけられたまゝ。

「私の云ふことは貴方たちに解らない――多分解らないね。然し私の心持は解つてくれるだらう？ 氣違ひでもなんでもないよ。え？ そりや解るだらう？ つまり貴方たちもかう云ふ心は享つてるんだから。ね？」

どうも駄目だと昌造は思つた。言葉は必竟心の周を廻つてゐるだけで肝心な出したいものは遂に外へ

持ち出して吳れさうもなかつた。彼は自分に腹が立つて來た。

「こんなことを云つて然し何んにもならなかつたかも知れないね」昌造は半ば獨語のやうに、「君たちが仲直りをしたらもつと事件としては惡くなるかのも知れない。そりや實際私にや解る筈がないんだから……。まア君たちの勝手にする方がいゝやうだ」かう仕舞には少し自棄氣味になつて云つた。そしてもうこの場を去らうと思つた。何か企てゝ、それを成すにまだ力が足りないことを知つた時の心細さに總てのことがつまらなく、馬鹿々々しく思はれて來た。

「實際私は制めていゝんだかどうかも解らないくせに……。餘計なことをしたね」かう云つて昌造は後ろを向くとサッサと歩きだした。

つまり俺はどう云つたら氣がスッとしたんだらう。かう彼は、口に出して云ひ悔くかつた言葉ならせめて心の内で呟いてみやうとして考へた。「私は君たちを愛……君たちが大好きだ！」「それがどうした！」彼の裡のあの勞働者がいきなり怒鳴り返した。俺たちに要るものは愛ではない。金なんだ。かう云ふ聲もあつた。金と云ふ考に逢着ると昌造は忽ち自分と戀人とが有ゆる點で已に堅い夫婦であるに拘らず、唯必要だけの金がないばかりに種々な不都合を忍ばなければならない今の境遇を思ひ浮べた。愛情と金。彼は到底この二つのものを一緒に考へるすら可嫌なので、ゴタゴタと腦の裡にとり散らかしたまゝ電車の停留所へ出た。そこから勞働者の夫婦だか何んだかゞ一つの風呂敷包を爭ひ合つてゐた方を振り返つて見たけれども、電車の柱の黃色い一列の灯がダヾッ廣い往來をボンヤリ照してゐるだけで、動いてゐるものと云つては何一つ見當らなかつた。昌造は再び二人のことを思ふと忽ち胸が開けるやうに

愉快になつて來た。それは孤獨と云ふ言葉の丁度正反對の心持であつた。身の周を親しい者に取り圍まれてゐるやうを心强さを感じた。——かう云ふ感情を彼はこれまで餘り知らなかつた。少くも戀しない前の彼があの喧嘩を見たらどう思つたらう。恐らく眉間に不快げな八の字とよせて唾を吐いて行き過ぎたに違ひない。かう氣がつくと彼は戀人と二人きりの別天地の中だけに育くむでゐたつもりの愛情が自由にその城廓外にも流れ出ることを知つた。否。そこに湧き上る愛の源がなくてどうして四方へ流れ出るものがあらう、と思つた。——彼は限りなく幸福であつた。

二

借りられる機會があり次第少しでも餘計に借りて置かなければ損だと云ふやうな心得で金を借りる。どんな高利をも恐れず借りた金は、何に使つたともなくグズ〳〵と濟崩しに、吝嗇く倂も至つて不檢則に使ひ果して了ふ。こんな風な借財がドン〳〵嵩むで來てもまるで平氣の平左でゐるられるのは、客と云ふ寬大好きな人物がいつ何時その無條件的な度量を示さないとも限らない藝者稼業に限つた强味で、また同時に女子供を對手に何千、時には何萬と云ふ金を、これも平氣でドシ〳〵貸し付ける金貸したちの强味でもある。この場合藝者なることのみが債權者にも債務者にも同時に必須なそして有利な條件である。所で幸運の玉の輿はその藝者の一代に逐ひ來ないかも知れない。然しそれは少しも不都合を齎らさない。彼女は生みの娘なり養女なりにその借金をそつくり讓り渡す。藝者と云ふ條件が謂はば借金の抵當であるから讓られた者も亦必ず藝者でなければならない。隨つてそれは前代の債務者におけると同

樣不安にも苦痛にも値しない筈である。新らしく借金でも殖しながらまた主の輿を待つてゐる。來ればよし、來なければ三代目の「藝者」にまた讓つてやるまでの話である。

昌造の戀人のおしげは斯樣にして讓られた數千圓の借財を有つた藝者だつた。

血族の者と云つては今では一人も生き殘つてゐない母方の姓を襲ふ幼少の時から戸主である昌造は或る格の遺產を有つてゐた。それは彼が十三の齡に亡つた母方の祖母が一生貧困と戰ひながら全く手一つで稼ぎ溜めた僅かなものが土臺となつて、その後彼の父の保管と苦心の下に次第に大きくなつた上に思慮深い父から大勢の同胞たちに均等に分配された財產を加へたものであつた。二十歳越してから昌造は母にその金格を聞かされた時に肇めて一生を文學者として送ることに決心した。自分で稼がなくても利子だけで一生食ふに困らないほどの財產があることを慥かめないうちは文學者になることが必ずしも幸福とは思へなかつたから。

併も昌造は戀人の爲めにならばあの馬鹿げ切つた「讓られた借財」をも、彼の大好きな死んだ祖母の汗や涙が基になつてゐる財產の何分かを割いて綺麗に濟せてやらうと決めてゐた。さうすれば財產の殘りが自分で稼がなければならないほどになつて了ふか、さもなくても餘程生活の程度を低めなければならないほどに少くなつて了ふ。それでも一生おしげと一緒に暮す方が仕合だと思つた。

然しこの結婚はどの途易い仕事ではなかつた。兩親でも同胞でもこの話を喜ぶ筈はなかつた。彼の母は或る時よく／＼息子の强情に弱らされたと云ふ調子で、「お前はどうせ私たちの勸めるやうな人では氣に入らないんだから、お前の氣に入りさえしたら何も私たちもさう別にムヅかしいことは云やしないか

ら自分で決めたがいゝ。だけど一生のお願ひだから藝者や女郎だけはよしておくれよ。それだけはほんとに頼んで置くよ」と云つたことがある。その時已におしげのことを心に決めてゐた昌造は母を可哀さうに思つた。自分は誰が何んと云つてもやり徹すからいゝが、假令偏見にもせよそれほど可嫌がつてゐる最後の許せないものに抵觸して、老年の親に苦い想ひをさせなければならないことはいかにも心苦しかつた。實際、保護者たる父兄の立場から見れば一言に「若氣の至り」と排けないまでも甚だ多くの不幸を最も易く若い者の行く手に思ひ描くことの出來る場合である。女に誑かされてゐるのだらう、とか、それだけの金を出してやつてまで一緒にならなければならないほどの女だらうか、とか、さう云ふ稼業をしてゐた女ではとても堅氣の家に心棒してゐられまい、とか、其他種々。昌造はさう云ふ類の詰問に答へなければならない自分を考へて見たりすると、兎も角、無駄な心配や不愉快で相方の心が煩されるやうなことは出來るだけ避ける工風が肝心だと思つた。そこで結婚や財産の自由を法律が身方について護つてくれる年齢に達するまでは、この話は宅の誰れにも打ち明けずに置くことに決めてゐた。その時が來たら法律の力を貸りてもやり徹すと云ふ意味ではないが、唯何んとなくその頃には兩親もその二つのものゝ自由を與へてくれさうな氣がしてゐた。然しそれまでにまだ丸三年ほどの月日が介在まつてゐた。その間最愛のものを車夫のやうな下等と彼等に獨特な傲慢不禮と豚のやうな淫猥との宴席に曝して置かなければならない。そのために戀人の美しい性情が少しでも害はれやうとは思はないが、(假令ごく僅か害はれるとしても彼が不斷に與へてゐる良い感化がそれを償つて充分餘りがあるとは信じてゐるが)唯待ち明して東が白むで來る時分になつても戀人が歸らない晩は……昌造は一夜で頭が白くなるほ

どの念をどうすることも出來なかつた。それがこの先三年。昌造はどうかして金を得たいものだと思つた。

おしげは藝者の家から歸つて來た。そこらに母親の姿が見えなかつたので直ぐに昌造が間貸りをしてゐる二階の部屋へ上つて行つた。昌造は机の前から捩じ向いて彼女の這入つて來るのを待つてゐた。

「どうだつた？」

「矢ッ張り――」

「妊娠だつて？」

おしげは眞面目くさつて突立つたまゝ首肯いて見せた。昌造はハッとして、暫く口が利けないで戀人の顏を見上げたまゝマジ〳〵してゐた。

二人共至つて子好きな彼等は始終「自分たちの子」を此上もなく可愛らしいものに想像して、それが事實になる日のことを樂みに話し合つてゐたけれども、不思議に、何んの理由もなく、それは遠い未來のことのやうにしか思へなかつた。おしげは五月に亘つて見るものを見なかつたが、乳房や腹の具合から惡阻のない點やらで、經驗の多い彼女の母親さへ妊娠ではないと一圖に思ひ込んでゐた。それでも放つて置いても惡いから、何か滯血の降りる藥でも貰つて來たらと云ふので其日醫者の家へ無理に行かされたのであつた。そんな譯で昌造は餘り思ひがけない結果に吃驚した。

一家の衣食住から法外な借金の利息までおしげの稼ぎ一つでやつてゐる今の狀態に子供が出來ると云

ふことは、その子の父である昌造にとつて慥かに困難な事件だつた。金を獲ると云ふ點では彼は十八になるおしげの働きに遠く及ばなかつた。一月を支へ得るだけの格ですら彼の働きでは儲けられさうな目標はなかつた。この點で彼はハタと當惑した。負ひ切れぬ責任の重さに壓倒される思ひがした。

併もそれらの感情の旋風を忽ち壓し鎭め了つた更に力強い感情があつた。それは最愛のものが我が子を生むと知つた父の喜びであつた。五年ほど前にも一度同じやうな事件が彼に起つたことがあつた。その時の彼には、醜い年長の下婢から我が子を得ると云ふ事實は、唯自分の虛榮心を護るだけの意味で堪へられない苦痛であつた。自身手こそ下さなかつたが全く彼の意思に基いてその子は墮胎されて了つたこの暴戾な行爲のために彼がその後どう云ふ苦みを嘗めたかは玆に省くとして、今の彼は同じ年輩の獨身の青年としてはいくらか父親の感情に親しむでゐた。徒らに滑稽や皮肉や不安を感じることなしに最も自然に父親の感情に這入ることが出來た。親らしい愛と、親の喜ばしい負擔とが春風のやうに、騷立たしい旋風のあとを柔かく吹いて通つた。

「さうか……」昌造は微笑みながら彼等のために生死の大役を勤めてくれる愛人に心で禮を云ふやうな調子で呟いた。

「どうなるんでせう」とおしげは急に體が重くなりでもしたやうにそこへへト〳〵と座つた。明かに彼女は母親の不機嫌を豫想して當惑してゐた。彼等二人の間（それは未だ嘗て客對藝者の關係に立つたことは一度もなかつた）は初めから母親の前に秘密であつたことはないのだが、金錢にかけて殆ど無能力なことを知つてゐる昌造の子が出來ることを、この母親の立場として喜び得る筈はなかつた。

「どうもかうもないさ。立派な、人並優れた子を生むでくれるばかりさ」
「でも」と急に聲を落して早口に、「お母アさんきつと墮落せつて云ひますよ」
「そんなこたアさせない。そりや大丈夫だ」昌造はかう云ひ切りはしたが、産の前後六七ケ月のおしげ親子の生活費から産の入費、その後の嬰兒の扶養まで大分の金を、彼にはどう工面しやうにも全く標はないのだ。唯、漠然と三年彼方へ延してある結婚問題を持ち出すなりどうなりして、兎も角兩親の保監の下にある遺産を使はして貰ふ工風をするより外はなかつた。それは必竟彼の所有と云ふ定、餘り自分の勞苦と沒交渉に存在してゐるせいか、何んとなく要求するのが憚かられた。その上、もの堅い兩親が易く承知しないことも知れ切つてゐた。然し彼はそれだけの困難のために彼女の母親が採らうとする不自然な手段を手を束ねて見てゐる氣にはなれなかつた。しつかりした決心さへあれば道は自ら通じる。昌造はかう思つて少しも迷ひはしなかつた。
「金はどうにでもなる」
おしげは不安さうな顔つきをしてそれには答へなかつたが暫くして、
「ほんとに貴方には苦勞ばかりかける」
「ちつとも苦勞だとは思はないよ」實際戀人のためならばどんな苦勞でも彼れは苦勞でなかつた。苦痛には感じなかつた。その時彼は丁度美しい氣高い子供を心に思ひ描いてゐた。母の愛と滿足とに輝いてゐる戀人と、その腕のなかに安らかにしてゐる基督のやうな嬰兒とを繪のように眺めてゐた。
「だけど……あゝあ、私に甲斐性があつたら……」

「あつたら」昌造の見てゐる覺めた夢のなかの嬰兒はいつの間にか頭の上に光輪を有つてゐた。その子の前に彼は下賤な大工であつた。併もその子の父であつた。

「……お母アさんに何んと云はれても仕方がない。それにこんなこともさせて貰つてるんだし……」

　昌造は惘然してゐるこの言葉の前半は聞かなかつたが、聞きとつたゞけの意味でカッとなつた。

「させて貰つてるたアなんだい！　してゐるんぢやアないか。稼業だの親を養ふだのつてことは何も人間としてちつとも尊い仕事ぢやアないんだ。そんなこたアみんな二の次の問題なんだ。俺たちのしてゐるやうなことこそ人間として眞正に尊いことだ。甲斐性もくそもあるもんか。金なんぞ一文も稼がなくつたつていゝんだ……」昌造は夢中になつてから怒鳴り立てゐるうちにおしげの悲しさうな涙ぐんでゐる目を見た。可哀さうに思はないでもなかつたが、餘り彼女が事の輕重を辨へなさ過ぎると思ふ腹立ちは抑えられなかつた。否。彼女とてその位の道理は解つてゐるのだが、一般の成年者のやうに餘り眞正すぎることは恐ろしくて考へたくないために陋習的な口を利いてゐるのだと思ふと、どうでも彼女の腦のなかゝらその陋習を吹き飛ばして了はなければ氣がすまなかつた。そこは見ず知らずの勞働者の喧嘩の仲裁に這入つた時のやうに思ひきりよくはなかつた。言葉は解らうが解るまいが、人間と云ふものはかう云ふ風に眞正のことを怒鳴つても少しも差支のないものだと云ふことを解らせたかつた。そんな陋習に捉はれるとは子供の癖に一體なまいきだと思つた。

「お前はもうちつと眞正のことを云はなくつちや駄目だぞ。第一ものゝ眞正の格値と云ふことをもつと本氣で考へて見ろよ。『こんなこともさせて貰つてるんだし』たア一體何んのこつた。お前には俺たちの

してゐることが恥かしいことなのか。おッ母さんの手前を憚つてるのか。何もおッ母さんのお慈悲でさせて貰つてるんぢやアない。そんな‥‥まるでそんなことぢやアないぢやアないか。俺がお前を愛すると云ふことは外に動かしやうのないことなんだ。おッ母さんを養ふとか借金だとかつてことは動かせる‥‥どうにでも變へられることだ。まるで性質の‥‥格値の違つたもんぢやないか。俺たちの間のことはナ、俺が死んじまうまで動かせない‥‥地から生へた樹みたいに世界にコビリ附いて、動かせないことなんだ。動かせるか、それとも、馬鹿！」

「それだから私神様のお引き合せだつて始終云つてますわ」

「ウン――」と昌造はまだ中々大低なことでは不服さうで、「神様のお引き合せもいゝが俺たちが自分でこゝまでお引き合せたのだつて中々馬鹿にア出來ないんだ。どうして中々尊いことなんだ」その最後の言葉を「お前にア解るまいが」と云ふ風に獨で味つて、昌造は急に機嫌よく二三度首肯いた。おしげももう昌造の心持がすつかり嚥み込めたので安心してゐた。で、「自分たちでお引き合せた」と云ふ可笑しな昌造の言葉から二人の關係の始りを思ひ出してゐた。そして何か稍エロテイックな回想を以つて微笑んだ。その笑顔を見ると直ぐ昌造にも略似よつた心持が仄かに漂つて來た。彼は火鉢にかざしてゐる戀人の手をとつて唇に押し當てゝから優しく云つた。

「どうだ、解つたか」

「解りました」

「お前の云ひ草はまるでものゝ格値と云ふものが顚倒へつてゐたと云ふことがよく解つたか」

「よく解りました」

「どうもお前は少し馬鹿過ぎるね」

「そいぢやおよしなさいましな」

「所がよさないね。俺はお前と違つてものゝ格値と云ふものを眞正に知つてるからね。沒分漢や間拔やもの知らずや粗相ッかしことや字のうまいことや……」

「よござんすよ」

「……字のうまいことやそれから行儀作法を知らないことや、まア一と口にヘマだね——さう云ふ缺點がいくらあつても、そんなことゝは比べものにならない尊い心の格値を知つてるからね」

「つまり眞正の人間としてだね。例へばこゝに海があると、いゝか、解つたか」おしげは昌造が彼女に何か云ひ聞かす折の口吻を上手に眞似て、頭や手を矢鱈と振り動かした。

「馬鹿！」

「お前がつまり素敵に亢奮した場合にだね」昌造に掌で口に蓋されてアブ〳〵云ひながらも拂ひのけて

「徹底さする氣がなきア駄目だぞ。お前にアその根氣と云ふものがないぢやアないか。馬鹿！」

「仕様のねえ奴だなア。いくらヒドク叱言を云はれても直ぐさう燥いでやアがる」

「そのくせ直ぐ泣きアがるくせにナ」

「こいつめ！」

昌造はいきなり愛人の體を攫うやうに抱きよせて劇しく唇を吸つた。

三

今昌造は差し迫つた實際問題として事件の解決を急がなければならなかつた。考へれば考へるほどそれは出來憎い話しだつた。或るこの上なく愛する娘と結婚したい。そこまではいゝ。娘は藝者で〇千圓程の借金がある。父は肺病で死んだ。母は三十何年藝者をしてゐた人で、これは一生養はなければならない。少し足らない十四になる弟がある。娘は姙娠してゐる。丈夫な子を生ますためには早速休ませて養生させなければならない。さうなれば一切の費用はこつちで持つより外に仕方がない。——これでは他人が聞いても決していい話だとは云はない。況して親身の者には「氣でも違やアしないか」と思はれさうな話だつた。二十八になつて肇めて知る初戀の甘さに充分酔つてゐる昌造にも、殆ど不可能と云つてもいゝ程の困難の程度はよく解つてゐた。然し彼にはその困難を誤魔化して逈りぬけやうと云ふ考はなかつた。二人の關係の初りから少しも暗い蔭はなかつたのだから、尚更最後まで正面的に明るく事を運ばうとは思つてゐた。それでも唐突に兩親を驚かすほどの勇氣はなかつた。いつも「待て！」と云ふ心に制せられた。「もう一度考へて見ろ！」然し考へると云ふことはこの場合困難の程度を繰り返して感じ直すと云ふことに過ぎなかつた。考へてゐる間はいつまでも出來つこのない話だつた。從來の彼の生活でもいつもこの「待て！」に芽を摘まれて或る高さ以上には延び得なかつた。彼は自分の常識主義に業を煮やして了つた。

或る晩ふと彼は十三の齢に別れた祖母のことを思ひ出してヒドく亢奮した。この祖母は死に絶えた自

分の家名の便りない幼い承繼者として昌造を限りなく愛してゐた。祖母が死んだ時に彼は、「どんな惡いことをしても許してくれる人」がもう世界中に一人もゐなくなつたやうに感じた。父母や同胞も勿論愛してゐてはくれるが、何か非常な惡いことをした時どうしても許してくれない場合がありさうに思へた。唯祖母だけはどんな場合でも機嫌よく快活で、「よし〳〵」と云つて苦しみ悲しむでゐる彼を何げなく慰めてくれさうな氣がしてゐた。別にそれを證據立てるやうな記憶がある譯ではなかつたが、唯、何か紐を手綱の代りに口に咥へさせた祖母を四ン匍ひにさせて、その背に馬乘りに跨つて日當りの椽側を幾度も往つたり來たりさせてゐる光景や、長火鉢の側で祖母の膝に腰をかけ、人形使ひのやうに後ろから兩肘を持ちそへて貰ひ、鬱金木綿の茶拭巾をクル〳〵と卷物のやうに卷いたのを右の手に持たされて、「やアれ喜三太、我も汝もかく身を窶し、この家へ入り込みしは何んのため、六韜三略の虎の卷を傳へ受け、亡父の敵の平家を亡ぼし、再び源氏の代に飜へさんと、思ふオなアり」と棒讀みめいた假聲につれて虎藏の身振りをさせて貰つたことなどの記憶が、不思議にあの特別な愛の心持を形造るのであつた。

わりあひに宗教的な心持には乏しく生れついた昌造もこの祖母を思ふ心持だけには特別なものがあつた。淨土眞宗に深く歸依してゐた祖母の命日には毎月必ず僧侶が讀經に來た。東京の宅にゐれば彼も袴を穿いて佛壇の前に座つた。友達が遊びに來てゐたりすると煩いナと思ふ時もあつたが、大低の場合彼はそのことを好むだ。殊に放蕩であつた時代には月に一度づゝしめやかな心持になる日があることを喜んだ。よく宿醉のダラケ切つた體を強いてキチンと座つて蝱の羽音のやうな讀經の聲を聞きながら小一時間ほど祖母のことを思ひ續けてゐるうちに、いつか生れ變つたやうに淸々しいシャンとした心持にな

つてゐることがあつた。さう云ふ場合の彼はいつも不思議な位宗教的だつた。それは死んだ祖母と生きたまゝの姿で相對する心持であつた。祖母はどこか非常に淸々しい處の不老不死の住人だつた。そして全く時代と云ふものに超越して昌造の心の隅の隅まで同感することが出來るやうになつてゐた。云ふまでもなくどんな惡いことでも許せる獨特な愛を湛へてゐた。かう云ふ祖母は二六時中高い處から彼の一擧一動を眺めてゐる筈であつたが、彼の方では月に一度佛壇の前に座つた時だけ一緒になつて色々の話をするのであつた。大抵はその折々に惹かれた雜多な冗話だつた。前の晩に合つた惡戯な仲の町藝者のことだとか、電車の中で喧嘩しかけたことだとか、情人と約束してある樂しみな芝居行きのことだとか、どんなことでもこの時代遲れでない祖母とは話が合つた。いつでもニコ〳〵と機嫌がよかつた。所が昌造が東京を離れて住むやうになつてから佛壇のある寒い北向きの部屋で俗侶のイヤに落ちついた讀經の聲を聞く場合もなくなつた。自然祖母との交渉が稀になつてゐた。

――その晩昌造は祖母に子供の出來たことを話した。祖母は譬へやうもなくそのことを喜んだ。おしげの話をした。祖母はおしげを昌造と同じ程度に可愛いがつてくれた。昌造が祖母のゐる淸々しい世界の住人となつて始終祖母の傍にゐるならば、おしげも亦同じやうにその傍に居させてやるほど好きだつた。――誰もゐない部屋で嬉し涙をボロ〳〵こぼしながら昌造は十五年も前に死んだ祖母と話をして獨で喜んでゐた。彼はもうすつかり話が都合よく片づいて了つたやうな氣になつて了つた。いつものことで、祖母は決して豫言めいた未來のことは云はなかつた。例へば、この結婚は是非しろ、きつとうまく行く、そんなことは決して云はなかつたけれども、彼が心持よくすることならばどんなことでも喜んで

くれると云ふ信念は、非常な身方だつた。それで充分な勇氣を得た。直ぐに彼は兄へ宛てゝ長い手紙を書いた。亢奮のために腕が堅くなつてうまく字が書けなかつた。三四日して彼は同情のある返事を受け取つた。それに益々力を得た彼は俄に上京することに決めた。丁度おしげは座敷へ出てゐて留守だつた。出かける前に彼は大急ぎで筆をとつて、

「可愛いゝ〳〵おしげ。私に人間以上の力がつくやうに神様に祈つておくれ。人間らしく考へてゐる間は云ひ出すことも出來ないやうな無理な話を實際に纏めるためにこれから東京へ行く。理窟や雄辯では出來ないことを念力でやり徹すのだ。いくら悧口でも猿にも犬にもそれは出來ない。人間の一念だけは神様の力と同じものになる。唯念力一つでやるだけだ。お前も精いつぱい念じてゐておくれ。念力は飛行機のやうに空を飛ぶ。お前の念力は東京へ來て私の腰を後ろから押してくれるだらう。私はどこまでもやつて來る。私たち二人の仕合せのために働いて來る。一念を私の上へ集めて祈つておいで。針のめどへ白熊（これは昌造がおしげに與へてゐる字名だつた）を通して歸るまでシツカりした氣性をもつて念力の飛行機を飛ばせ飛ばせ！」

と書いて祖母の寫眞と一緒に机の上へ置いて停車場へ向つた。

「然し若しお祖母さんが今生きてゐたとしたらどうだらう」から夜汽車のなかで昌造は考へた。「矢ツ張りお母さんと同じやうなことを云つて反對しさうだ。それほどでなくつても決して喜びはしない。あんなに何んでもかんでも贊成して喜んでくれるのは死んで了つた人だからだ。お父さんやお母さんだつて若

し死んでゐたら矢ッ張りお祖母さんと同じやうに喜んでくれるに違ひない。唯生きてゐるから……現世の人だから許せないのだ。矢ッ張り世間に捉はれてゐるのだ。お父さんやお母さんが一度死んだことがあつたらこの話はドン／＼片づいて了ふ譯だ。すると俺は幽靈の立場だな。黄泉の道德で現世を押し渡らうと云ふんだからな……」こんなことを考へた。

「然し冗談ぢやァない」

昌造は忽ちかう「現世」の人に蘇生へつて明日の日の兄との會見を心に描いて見た。もう何遍となく繰り返して老へた困難が色鮮かに再び浮び上つて來た。

「いけない……考へると云ふことが今は一番いけないことだもう考へちやァいけない—」

彼は頭を振つて目をつぶつた。（大正四年三月）



お光壯吉

上司小劍

一

東京から乘つた人も、名古屋から乘つた人も、大阪へ着くと、おほかたは下りて了つて、汽車は其の疲れ切つたやうな姿を空にして、ぐつたりとプラットフォームに横たはつてゐた。果物の皮や紙屑が、油光りに汚れてブリキか何んぞのやうになつた小倉服を着た驛夫の手で、だらしなく後前の乘降口から掃き出された。

「一夜妻でも妻は妻。……なら、一夜の宿でも宿は宿。……やないか、なア君。」と、まだ手水を使はぬ顏に疲勞の色を浮べて、可なり大きな信玄袋の紐を肩に引つ擔ぎながら、同じやうな裝ひをした連れの後を追ふて、改札口へ利休下駄の運びを急ぐ男も見えた。

首から胸に黑い珠數を懸け、脛には脚袢を着けた甲斐々々しい扮裝の四十女が唯一人、同行にはぐれたらしく、キヨト〱と方々を見廻はしてゐるのも眼に立つた。

電燈の光は淡く曉の空氣を染めて、冬至前の午前五時十八分はまだ四邊が眞闇であつた。ぞろ〳〵と神佛に參詣でもするやうな足取りの人々に混つて、小池壯吉も霜降りの大マントに包まれつゝ、小ひさな信玄袋を唯一つ提げて、出口の方へ押されて行つた。欠伸しながら切符を受け取る色の生白い男の手が齒痒いほどノロくて、容易に改札口から外へ足が運べなかつた。

「贅六は切符切りまでノロくて、焦つたいな。東京のステーションなら、これくらゐの客を出すのに三分とはかゝらない。」

こんなことを咽喉の嗄れた聲で、聞えよがしにいふ高帽の男もあつた。

漸く改札口を潜つた壯吉は、ステーションの暗い軒下を傳つて、無意識にトボ〳〵と東行の一二等待合室へと辿つた。其の前の方にはもう車夫どもの黒い姿が堵のやうに集つて、「參じまへうか、旦那。」などと口々にやつてゐた。

東行一二等待合室には、ストーブの火が眞赤に、丁度芝居の舞臺で見る電氣仕掛けのそれのやうな色に燃えて、早立ちの客が二三人に、赤帽が一人混つて、皆々腰のあたりをあぶつてゐた。長いのや圓いのや、白いのや黒いのや、さま〴〵の顏をしたそれ等の人々は、皆眼を此方に向けて、一齊にヂロッと壯吉を見た。今汽車から下りた人たちとは違つて、これから乘らうとするこれ等の人々の眼には、皆活々とした曉の力が籠つてゐた。

眞ん中に大卓子を置いて、萌黄の天鵞絨の大きな腰掛けの四角形に並んでゐる晝間も電燈の入用なこの陰氣臭いカアブのやうな廣い待合室。此處にさへ居れば飛行機から投下する爆彈の害も恐ろしくない

と思はせるほどの嚴璧な室。何處か其の邊には林檎や葡萄酒の貯へてありさうな場所。……

それは壯吉が毎もお光との密會に、第一の接見所としてゐるところには、何時入つて見ても一種の懐かし味と、色ッぽさとを感じさせるところである。

大高源吾が一番の大槌を揮つても、メキとさへ音のせぬらしく思はるゝほど、堅固に造られた出札口の奥には、あか〳〵と電燈が光つて、根上りで束髪を戴せた丸ぽちやの白い顔が、夢に見る人のやうに浮んでゐた。

『京都行、オーライ。』と、歌ふやうに言つて、黒の制服の美少年が、カチヤンと改札口を締めた。壯吉の乗つて來た汽車は、まだ死んだ鰻のやうに長々とプラットフォームに横たはつて、其の隙間から靜かに動き出すのが見えた。

十歳の頃、この大阪の角の芝居で見た『谷間の姫百合』といふリットンの飜譯劇の舞臺に、汽車の動くところがあつて、それに乗りおくれまいと、今の仁左衛門、其の頃の我當の扮した主人公が、あたふたと駈け付けた。――其の時の舞臺の上を下手から上手へ、すうつと通つた汽車に、この京都行の汽車が似てゐると壯吉は思つて見てゐた。

銘々に異つた名があつて、産れたところも、生ひ立ちも違つてゐるのではあらうけれど、他から見れば、どれがどれやら、甲と乙と取り替へたつて少しも分らぬと思はるゝ、同じやうな黒い顔をして、垢光りのする、ブリキの如くにしやちこ張つた小倉服の驛夫が來て、遊冶郎や藝妓どもや、ラクダの厚外套に身體を埋めた禿頭の考爺やの、不潔物を吐き込んだ痰壺の掃除をしたり、床の上に水を撒いたり、

大時計のタイムを合はしたりした。

早曉からの汚ならしい勞働。それは彼等小倉服の仲間よりも、二つ三つから年少のものが、羅紗服を着て、上品な改札といふ仕事に當つてゐるのを見る時、彼等は其の粗末な、穢れた小倉服の袖を顧みて何と思つてゐるであらうか。

綺羅びやかな乘客といふものに對して、彼等は同じ人間といふ觀念が痲痺してゐるらしいけれど、同じ構内に勞働する仲間の年少者に、始終手の綺麗なのが居るのを知る時、彼等は果して何を感ずるであらうか。手の綺麗なのを不名譽とするユートピアは、彼等の仲間にも近所にもない筈である。——壯吉は、ぼんやりとこんなことを考へつゝ突ッ立つてゐると、後向きに綴れのヅボンの破れ目から、小窓のやうに下帶らしいものを見せつゝ、蒸露の水を撒き／＼退つて來た小倉服の汚い男は、「背後に眼がないぞ」と言はぬばかりに、古板のやうに堅い靴で、壯吉の右の足を絹足袋の上から踏ん付けて、素知らぬ顏で豚の如き形をしつゝ引ッ込んだ。

壯吉は踏まれた足の泥をハンケチで拂ひ／＼、出口の方へ行つて見たが、まだほんのりと明けかけたくらゐで、眼の前の大きな街は牛のやうに眠つてゐた。

十三四の新聞賣子が、インキの香の新らしい紙を、小ひさい身體の傾くほどドッサリ腋に挾んで、かじかんだ兩の手に白い息を吹きかけつゝ、横の方から出て來た。

まだ薄暗い軒下を通つて、西行待合室へ行つて見ると、此處にもストーブの火が眞赤に美しく燃えて小倉服の汚ない人が蒸露で水を撒いてゐた。

東京から壯吉と同じ車室の遙か先きの向ふ側に、見事な敷物を擴げて、「大阪へ着けば花屋の番頭が行火入りの人車を持つて迎へに出てゐる」などと、四邊の客に吹聽してゐた鼻眼鏡の、平の長芋のやうな若旦那は、夥しい荷物を外套とゝもに大卓子の上に積み上げて、脊廣姿の腰を此處のストーブで温めつゝ夜の明けはなれるのを待つてゐるらしかつた。彼れは壯吉の姿を見ると、眩しさうに眼をそむけた。壯吉も氣の毒なやうな氣がして、彼れの傍へ近づくに忍びなかつた。

夜の黑幕は一枚づゝ剝ぎ去られるやうに、薄く明けはなれて來た。大きな街は新たに生れたもの丶如く、靄の間から現はれた。ステーションの前の『名物粟おこし』の看板が、淡く讀み得らるゝほどになつた。

雷のやうな音を、けたゝましく立てゝ四半時間おきくらゐに走つてゐた市內電車も、頻繁に行き交ふやうになつた。さまざまの聲、もろもろの音。方々の烟突からは眞ッ黑な煤煙が雲のやうに舞ひ騰つて火山が鳴動を始めた如く、この大きな町は生活の叫びを立て出した。

壯吉は南行の電車に飛び乘つて、南の方に向つた。――『明十八日の午後一時、梅田ステーンションの東行待合室で』といふお光との約束の平安を希ひつゝ、お光の住む北數里の田舍町の空を眺めて。…………。

二

今宮は蟲どころなり蹕なり――と歌つた來山といふ町の詩人の昔話を思ひ浮べながら、壯吉は惠美須

から大濱行の電車に乘り換へた。二三丁先きのポイントに、黒い荷物電車が脫線してゐて、壯吉の電車はなか〱動き出しさうになかつた。時間を限つて何處かへ通勤する、八字髯の先きを朝のお糊で濕らして來たらしいヅボンの太い洋服男等は、氣が氣でないといふ顏をして、電車の中で立つたり腰かけたり、小手を翳して線路の行く手を眺めたりした。

土佐派の繪にあるやうな、惜し氣もなく官費の繪の具を繪所で塗り立てたらしい、眞ッ赤な大きい旭が、生駒山脈の尾と金剛山との間の凹みあたりから、堂々と昇つて、小波の如き金色の光を海のやうな一面の家根瓦の上に投げかけた。電車の窓硝子も金色に光つて、安洋服の勤め人たちの横顏は、燃え立ちさうに艶々しく見えた。

二三丁先きのポイントでは、脫線した荷物電車のぐるりへ人だかりがして、工夫どもは長い丸太を持ち出し、車軸の下をうんとばかりに捏ね上げてゐるのが見えた。

「うーん。……」

「君、此處から力入れたて、あかんで。」

「志しがあるんなら、先方へいて手傳うてやりや。」

茶色の洋服の男が、工夫の車軸を捏ね上げるのに、遙か此方から力を合はして、「うーん」と窓のあたりを押してゐるのを見ると、其の隣りの鼠色の洋服男と紺の洋服男とが、打ち笑ひつゝ言つた。

「氣は心、ちうことがあるさいかいな。」

「えらいところへ、氣は心を使うもんやなア。」

車中の人々は皆一時に笑ひ顔になつた。
「これが東京だツて見ろ、一人や二人は屹と癇癪起して、飛び下りて行くやつがあるんだがなア。」
珍らしくタンカの切れる東京辯が耳に入つたので、壯吉は一種の懐かしさに打たれて、聲のした方を見ると、運轉手臺で黒い四角な顔をした運轉手が、白く圓い顔の車掌に話しかけてゐるのである。
「飛び下りたかて、先きに電車あれへん。……短氣は損氣や。」と、車掌は乘降口の鎖に凭れて、悠長な顔をしてゐた。
「八ツ山の入れ換へで、僕の電車が大脱線をやつたことがあつたなア。……」と、運轉手は三角な眼に感慨の深かさうな色を浮べた。
「八ツ山て、何處や。」と、車掌は鎖でブランコの眞似をしつゝ問ふた。
「品川だい。」
「其の品川ちうとこにも紅葉あるのやなア。」
「……あゝア、詰まらない、詰まらない。……百五十里からも流れて來て、矢ッ張りコレかい。……」
かう言ひながら運轉手は、白いのが鼠色になつた手袋の右の手で、電車の齒止機を廻はす眞似をしてホッと溜め息を吐いた。
「君、僕は今東京から着いたばかりだがね。君は何時から此方へ來たんです。」
壯吉は不意に運轉手の傍に寄つて、かう言ひ〱、丁どマントのかくしにあつた東京電車の往復切符の片ひらを出して見せつゝ、

「これ何うだい。」と言ひ足した。

「へえ!。……」と、運轉手は今にも涙の滴れさうな眼付をして、チッと其の藍色に刷つた切符を見てゐたが、

「これ私に頂けませんか。……何んなら四錢五厘でお讓り下さいな。……尤も此處に金持つてませんけど。」と、指の先きで強く〳〵切符を摘んで、壯吉の手から奪ひ取るやうにした。

「いゝとも、上げるよ。」

『東京の切符、えらいもッちやりしたのんやなア。……一寸見せてみい。』と、車掌は運轉手の右の手を見ながら言つた。

『直つた〳〵。』と叫びながら、一人の工夫が線路を馳けて來た。見れば稍右に傾いて居た黑い荷物電車は、平ひらかに復して、家根の上の竿を向け變へると、運轉手が輕く動かした把手によつて、ポイントを車庫の方へ滑るやうに入つて行つた。

蟻が砂糖の塊りを動かすやうに、十幾人の群れが黑く集つて、一寸或は五分と、ほんの少しづゝ、小一時間もかゝつて、挺で捏ねてゐたこの重いものを、筋さへ通らば、一人の小男が指の先きで樂々と動かし得る力。——

「この力は即ち產業革命の力である。私たちの生活が、新らしい埒の中に踏み込んで行かなければならぬやうになつた力である。……これから先き、この力の波及するところには、山もない、巖もない、鐵もない。當るところ皆碎け散つて、あらゆるものを平ひらげて行く。……」

壯吉はこんなことを考へながら、チッと其の黒い荷物電車の走つて行く先きを見詰めてゐた。さうして、

「俺が斯うやつて、百五十里も距てゝ住んでゐるお光と、輕便に媾曳の出來るのもまたこの力の賜物だ……」と思ふと、覺えず微笑まずにはゐられなかつた。

線路の閉塞が開いたので、壯吉の電車は間もなく、東京を戀ふる東京辯の運轉手によつて動き出した。この都會の郊外の、淸々しい朝晴の空氣を突き切つて、電車は眞一文字に進んで行く。松は靑々砂の白い住吉の社頭にさしかゝると、「献燈」の二字を思ひ切つて深く刻んだ石燈籠の並んだのと、だいぶ古ぼけた反り橋とが、先づ壯吉の眼についた。首を捻ぢ向けて、海の方にチラと高燈籠のあたりを眺めながら、壯吉はフト××座の女優と、其の舞臺監督とが、この柔らかな砂の上に、二つの長い影を落しつゝ、そゞろ歩きしたといふことが思ひ出された。さうして、「……君が日傘の△色にして」といふ舞臺監督の其の折の歌のことも考へられた。――君が日傘は何色であつたらうか。希くは白か、または、ひわ色でゝもあつて欲しい。赤だといゝが、幾ら女優でも日本人には大人が赤の日傘を翳し得まい。今時流行る濃い萌黄は、松の色にクッ付いていけない。――

こんなことを考へてゐる中に、電車は早や長い大和川の鐵橋に轟々と響きを立てつゝ、淸らかな流れを泉州へ越した。

堺の市の大通りは、眞田幸村が大阪陣に關東勢を苦めた唯一の手品の種、それは其の頃の開港場であつたこの堺で、ポルチユガルの商人から不完全ながらも望遠鏡の一つを手に入れた時分其のまゝと思は

るゝほどに、家並の低い、古ぼけた、暗さうな建物が並んでゐる。其の間に時々ペンキ塗りの窓の四角い新建の家があるのと、『泌尿生殖器科』などとした醫者の看板を見るのとが面白かつた。

また橋を一つ渡ると、潮の香が俄に高くなつて、電車はやがて大濱の波打際近くに停つた。壯吉は其處の伽藍堂のやうな三階の『御料理兼旅館』といふ家に入り、赤前垂れの三十女に案内されて、二階の奧の〳〵の疊赭ちやけた八疊に通つた。

赤前垂れの女から湯札を貰つて、直ぐ前の大きな潮湯に溫まつて歸ると、床の間の前に脇息を置いて、絹座蒲團が敷いてあつた。火鉢には鐵瓶の湯が松風の音を立てゝ、菓子器には薄茶入りの青い羊羹が入つてゐた。一二ヶ月このかた患つてゐる全身の瘙痒症が癒り切らぬので、壯吉は女の眼を偸みつゝ脇息に凭れかゝつてゴシ〳〵方々を搔いてゐた。

何だか刻限のよく分らぬ日であつた。硝子障子から射し込む日陰が夕日のやうな氣がするのに、時計を見るとまだ漸く午前九時であつた。

午飯にも晩饗にも、膳の上は汁も膾も皆鯛であつたのに閉口して、鯛臭いおくびに胃部を押へつゝ電燈が點いてから間もなく寢た。

三

夢も見ずに朝まで眠つた。眼を覺ますと、强い海風がガタゴトと硝子戸を搖つて、晴れた日光は枕頭まで射し込んでゐた。がばと跳ね起きると、仙德の火鉢の櫻炭は半ば白く灰になつて、鐵瓶は疲れたや

うに、音もなく細く白い湯氣を吐いてゐた。

「さァ今日だ。……お光に會へるかな。」

壯吉は口の中でかう言つて、信玄袋から取り出した楊枝を啣へつゝ、元氣に充ちた狀で潮湯に行つた。外では吹きつける向ひ風に、くづ織の貸し丹前の袖が、帆のやうに風を孕んだ。

また鯛づくめの午飯を喰べて直ぐ、壯吉は昨日の電車を逆に梅田のステーションに向つた。可なりに因緣の深い東行待合室に入ると、昨日の拂曉此室で夜の明けるのを待つたことが、一年も前のことのやうに思はれた。ストーブの火は昨日の通り燃えてゐるが、薄暗いながらも、眞晝には眞晝の姿があつた。男女さま〴〵の旅行者が、走馬燈のやうに動いたり、活人畫のやうに腰を据えたりしてゐる中に、大卓子の前の腰掛けで、小振りの丸髷に裏羽色の手絡の後姿を見せて、新聞の挿繪を眺めてゐる女の頸筋のあたりがお光にそつくりであつた。

黑縮緬の羽織の紋所をも究はめずに、壯吉は必定それと獨りで決めて、拔き足で近寄りつゝ、鬢のおくれ毛を引ッ張つてやらうか、それとも暫く何處かへ隱れてやらうかと思つた刹那、其の女の振り向いたのを見ると、全で知らぬ反齒の長い顏であつた。

時計を見ると一時半になつてゐる。一時前後といふ約束であるのに、また去年の秋のやうに、急に兵隊の宿でもしなくてはならぬことになつて、出て來られぬのではあるまいかと思ふと、壯吉はたゞ焦々して、丁ど其處に居合はせた胸に勳章の光る二三のカーキー色の人々をば、自分の行く手に立ち塞がる敵のやうな氣がして、同じやうに八字を生やしてゐる其の人々の顏を睨み詰めてゐた。

横の方を見ると、頸筋のあたりのお光に似た最前の女は、まだ新聞の挿繪から眼を離さずにゐる。「何んだツてまた、こんなに酷く似てやがるんだらう」と、壯吉は其の女が憎くて〳〵耐らなかつた。

蹴込みの淺いこの土地風の人力車の夥しく並んだ廣場を、粟おこし屋の店の前まで行つて來て、また待合室へ戻ると、向ふ側の上り線には、下の關から來た東京行の長ッたらしい列車が着いて、兵隊も女もぞろ〳〵と改札口を出て行つた。

「あの汽車が出て了ふまで待つてやらう。」と、さう思つて、壯吉は改札口の前に寂しく突ッ立つてゐた。こんな時の五分十分は消ゆるにおそくて、汽車はなか〳〵動きさうにもなかつた。

突然、壯吉のマントを輕く引ッ張たものがあつた。何か柔かいものを草履の足で踏んだ折ぐらゐの感覺をおぼえながら、壯吉は何の氣なしに、引ッ張られた左手の方を向くと、お光が嫋々とした姿勢をして、にッこりしながら立つてゐた。今日、明日、明後日と三日の中に都合の好い日といふ約束であつたから、一番の富籤が先づは空であるとかいふやうに、第一日は大抵無駄足と諦めてゐた壯吉は、面のあたり現はれたお光の姿に、寧ろ意外を感じながら、自分もにッこりと笑ひ返へして、

「よく來られたね。」と、稱美するやうに言つた。

「え丶、よッぽど明日にしようか思ひましたんやけど、待つてやはると可かんいふて、お母アはんが今日行け言やはりましたよつて、……」と、これだけ言つてお光は口をつぐんだ。

「君と僕のことを阿母さんがスッカリ知つてるんかね。……厭やだなア。」

「誰れぞ一人、知つてるもんがないと、かうして會うこと出けえしまへんがな。」

お光は、濃紫と白とのだんだら染めのオペラバックに附いた同じ紫と白との手綱組みの紐を弄りながら、四邊に氣を兼ねる風で差し俯伏きつゝ、低い聲で言つた。
「旦那には何處へ行くッて來たの。」と、壯吉は言ひにくさうにして言つた。
「…………」
「今日歸へらなけやいけないの。…泊つてもいゝの。」
「明日中に去にさへすれや、よろしいがな。…明日の晩までに。」
かう言つてお光は俯伏いたまゝ、またにッこりとした。
「僕はね、大濱の△△樓に泊つてるんだがね、彼家へ君を連れて行くのも變だから、和歌の浦へでも行かうよ、これから、何うだい。」
「どッこへでも。…」と、お光は漸く首を上げて、一寸壯吉の顏を見た。
「さうと決まれや、早く行かう。」と、壯吉は幅の廣い薩摩下駄の音を立てゝ歩き出した。何時の間にか驛夫が夕立のやうに水を撒いた三和土の上を、ゴム草履で歩き惱みつゝ、お光は其の後に隨いた。
市内電車で紀州行の電車の停車場へ行く中に、或る交叉點から乘つた帆木綿の厚司を着た仲士風の若い男が、凄い眼の光りをヂロ〳〵とお光と壯吉との頭の上に投げかけて、彼方に席が空いてゐるにも關はらず、二人の前の吊り革から離れずに立つてゐるので、壯吉は若しやこの男が一昨年離縁になつたといふお光の先夫ではあるまいかといふやうな氣がして、怖れを感じつゝお光はと隣りを見れば、水の切れた活花の如く頸垂れて、氣の故か青い顏をしてゐた。

「二人の仲は牽牛織女さんの戀。……」と、お光がよく手紙に書いて來るやうに、たゞ幼馴染といふだけの緣が、百五十里も離れて生活してゐる二人を繫いで、お光に聟養子の夫のなくなつた一昨年から、一年一度の媾曳を樂んでゐるのも、天の川の逢瀨のやうな滑らかに平和なのではなくて、厚司の男に睨まれるなぞの危險があつては馬鹿氣てゐる。寧そお光を振り棄てゝ、天下晴れてのお茶屋の女の許へでも行かうか。……とまで壯吉は考へた。

其の上、お光には此頃旦那があるらしい、イヤあるに決つてゐる。

「……あなたさまは、芽生源氏伏見里の淨瑠璃をお聽きになつたことがございますか、私は操を破つて操を立てた常盤御前に習ふて、年寄りや小ひさいものゝために、……」なぞと、先頃の手紙には書いてあつた。

「こんな八方塞がり、暗劍殺の女に係り合つてゐて何うしやう。……」とも、壯吉は心の中で思つた。

紀州へ行く電車のステーションが窓から見えたので、二人は運轉手に聲をかけつゝ、もう動き出しさうになつてゐる市内電車から下りた。

「あの厚司着た男知つてるの。」

其の男も同じところで下りたが、二人とは反對の方角へ人込を縫ふて行く後姿を指さしつゝ、壯吉が言ふと、

「いゝえ。」と、お光は首を振つたけれど、其の厚司の男の行く方を見やうとはしなかつた。

土竈のやうな形をした紀州行の電車のステーションへ入ると、此處にも人が一杯になつて、茅渟の浦

迯に歸る漁夫の一群が一際眼に立つた。壯吉はまた少しづゝ身體の癢痒を感じて來た、背中へ手を突ッ込んで、變な姿勢をしながら、ゴシ〳〵搔いた。

『おんたが、、、痒い〳〵言やはるよつて、、、わたへも痒なりましたがな。』と言ひ〳〵、お光も鼈甲の簪を拔いて顏を顰めつゝ束髮の根を搔いた。壁織お召のコートの下から、同じもの〳〵木の葉散らしの羽織や、大島の二枚がさねや、長襦袢や、さま〴〵の袖口が、細く白い腕に捲くれかゝつて、太物屋の陳列棚を見るやうであつた。左右の指に黄色く光る指輪の太すぎるのは、流石に田舍町の小料理屋の若女將といふお里は爭はれぬと、一しきり痒いところを搔き終つた壯吉は、兵兒帶の緩んだのを締め直しながら、一生懸命に粧ひを凝らして來たらしいお光の服飾をば一つ〳〵批評的に見てゐた。

『何でそないに見なはるのや、穴が明きまんがな。……見るのん厭や。』と、お光はキマリ惡るさうにして、手を差し伸べつゝ、壯吉の眼を遮つて目隱しをする眞似をした。

『えへん。えへん。えへん。』

若い漁夫の一人は、態とらしい咳拂ひを二人の上に浴せて笑ひながら前を掠めて通り過ぎた。

四

紀州に向ふ大きな電車の中では、例もの通り一番先きの端に席を占めて、壯吉は追々に展け變つて行く先き〳〵の景色を樂んでゐた。中學生の一隊がドヤ〳〵とこぼれるほど乘り込んで來て、二つ三つの停車場を過ぎると、またドヤ〳〵と出て行つた頃から、右手の方には常に蒼い海があつた。落日が淡路

島の上に溫和しく輝いて、鳴戶のあたりから阿波の山々が、柔かく雲のやうに見えてゐた。

壯吉は窓の外の景色を眺めては、また隣りのお光の橫顏を一目づゝ偸み見るやうにしてゐた。

「この女も、もう三十だなア。……」

自分が十九で、女が十三であつた頃、同じ田舍町の近所に住んでゐて、他愛もない遊びに興じ合つた折のことが、いろ〳〵と思ひ出された。二十三夜待ちの雜魚寢に、小ひさなお光が自分の膝へ俯伏しになつて眠つたので、自分は、桃割れを載せた白い活々した頸筋を、薄暗いランプの光に眺めながら、曉三時の時計の音を聞いたこともあつた。其の頃はまだ彼女の母が水々しく若くて、自分は町の人々に母との仲を疑はれなぞした。

「あの頃の頸筋から見ると、今の頸筋は窶れたものだなア。」

壯吉はかう考へて、女の老いは先づ頸筋から來る、といふある西洋人の言葉を思ひ出してゐた。

「わたへ、十五の時、お母アさんと和歌の浦へいたことおますわ。紀三井寺はんへも參りましたんや。丁どあんたが東京へ行きなはつた翌くる年だす。……其の時分まだこんな電車あれへん、汽車だした。」

こんなことを言つた外に、お光は餘り物を言はなかつた。口を開いた時奥の方の齒の黃色く汚れてゐるのが、壯吉の氣になつた。

和歌山驛から、小ひさい電車に乘り換へて、城下町を突き切つた頃は、小ぢんまりと賑やかな町筋に、荷を擔いだ豆腐屋が立て前もせずに歸りを急いでゐた。街燈にはチラホラ灯が點いて、時計屋や吳服屋の並んだ通りには、人が可なりに多く往來してゐた。『大賣出し』の赤い旗が、だらりと垂れて、風のな

い町は暖かさうであつた。何々銀行の赤煉瓦が嚴めしく、堅さうに、突ッ立つてゐるのゝ見えた。

古城の石垣に沿ふて、濠を埋めたらしい土の上を電車は走つてゐた。屋敷町のやうなところでは　奥さまと呼ばれてゐるらしい丸髷の人が、小旅を前垂れの下に隠して、急ぎ足に行くのが見えた。

『一寸えゝとこだすな。』と、何事か考へに沈んでゐたらしいお光は、フト首を上げて窓の外を眺めつゝ言つた。

和歌の浦で下りて、茅葺きの宿屋に眩しく電燈の點いた店頭に立つと、女學生が袴を脱いだばかりといつたやうな姿の十七八の女が、奥から駈けて來て、『どうぞ別莊の方へ』と、二人を稍離れた大きな家の二階に案内した。十疊の座敷の襖の引手には、緋の房がだらりと下つてゐるのも物々しく、正面の大床には南天を活け、『功名富貴塵埃の如し……』といふ意味の詩を大きく書いて、『爲何々樓主人』とした老樞密顧問の大幅が誇り顔に掛かつてゐた。

『此處は玉津島といふんかね。』と壯吉は、チヨコナンと坐つてゐるお光に言つた。

『さよか。』と、お光は氣のない返事をした。

『一に權現、二に玉津島、三にさがり松、四に鹽釜よ。ツて言ふぢやないか。』

『この先きの方に、鹽を拵へるところがおまんな。』と、お光の聲は、今にも泣き出しそうであつた。

巖を斫り開いた蛙に直ぐ手の届く廊下を傳ふて、湯殿へ行つてから、鮮らしいさく／＼の魚類で、二の膳付きの食事をした。

金地に墨繪の龍虎の見事に描かれた違ひ棚の中へ、二人の持物を入れて置いて眠りに就くと、鼠が

く／＼と栞れ出した。氣になるので、壯吉が起きて違ひ棚を開けて見ると、紙入れを包んだ袱紗は、丸く嚙み破られて、紙入れにも少しく齒の痕があつた。お光のオペラバツクの手綱形の紐は三つに喰ひ切られてゐた。派手な長襦袢の袖を銜へしつゝ起きて來たお光は、悲しさうな顏をして、斷られた紐を繋ぎ合はした。

五

其の翌くる日は、少し風があつたけれど、よく晴れて暖かゝつた。

お光と壯吉とは、玉津島からブラ／＼と歩いて、紀三井寺の方へ行つた。蒼い海には月並の白帆も見えて、潮の香に名產蜜柑の香が混つてゐるやうであつた。蜜柑羊羹などを賣る海邊の家の前に立つて、壯吉が店の物に稍暫し見入つてゐると、

「奥さんにお土產だッか。」と、お光は沈み切つた聲で言つた。

長い／＼紀三井寺の石段をばを息を吐き／＼上りながら、

「一昨年行きました東光院ちうお寺にも、高い石段がおましたなア。」と、お光は十四の年に別れてこのかた、壯吉との初めての媾曳の折を思ひ浮べてゐるやうであつた。

石段を上り詰めて、寺の古建築を背中に、大海原を見渡した時、お光は、

「舟に乘つて、何處ぞへいて了ひたいなア。」と、寂しい笑ひを、眠りの足りなさゝうな顏に浮べて言つた。（完）



秘書官

岩野泡鳴

社長の紹介を以て會見してから浪川が四五年も出入りして御機嫌を伺つてた子爵閣下である。その子爵が〇〇大臣になると云ふ號外が出たゆふかた、至急親展書を屆けて來たので、さては、こちらの本望も成就かと踊りあがつた。

おほ急ぎで車を飛ばして子爵邸に伺ふと、主人は今また相談があつて新總理大臣のお屋敷へ行つてるからと云つて、奥さまが代理で應接室へ出て來たので、渠は何よりもさきにかしこまつて、

「この度(たび)はまだお目出たう御坐います」と云つた。以前にも一度こんなことを云はなければならぬ場合があつたが、その時はまだ云つただけのことであつて、それ相當の報いがこちらにも向いて來るほどの信用はなかつた。

「まあ、あなたも子爵の御機嫌を伺つてお置きなさいましよ――いつかはまたい

いことが御坐いましようから、ね』と、子爵夫人に愛相よく云はれただけがまだしも頼りであつた。

そして子爵のお留守の時などの御つれづれを慰める爲めに、度々意外な時に招かれて小說の話のお相手などをした。『近頃の作では矢張り花袋や白鳥のがおよろしいのでしよう、ね』などと――前月やその月に發表になつたやつの批評などを乞はれるので、自分の畑ではないのだから、大いに面くらつてしまうことがあつてからは、中央公論や太陽を初め、好みもしない小說雜誌を、いろ／＼不斷から讀んで置いて、夫人の襲擊に對する常備的軍備を整へてゐることにした。夫人は子爵と同席の時にも話をそんな方に持つて行くので、子爵はただにこ／＼と笑つて御坐るが、こちらの答辯はなか／＼責任を感じないではゐられなかつた。

ところが、今回は、夫人までが愛相のいい顏に引き締まつたところを見せて、――無論、小說の話どころではなかつた――

『あなたもお目出たいのですよ』と、じつとこちらの顏いろを見た。

『……………』浪川は成るべく野卑な喜びを示めすまいとしたのが、われながらただ鹿爪らしい樣子になつたと思つた。が、さう思へば思ふほどなほその樣子を改められなくなつて、最もうや／＼しく、

『先刻お招きにあづかりましたので、早速伺ひましたのですが――』

『御不足かも存じませんが、祕書官ですよ。』

『いや、結構です！』案のじようなので、つい自分ばかりのにツこりを出したが、これをさうでないふりに見せる爲めに叮嚀に下を向いておじぎをした。そして渠が顏をあげると、夫人の何だか皮肉な微笑

に出くわした。きまりが惡かつたのでやッと何げないふりをして云ひ添へた、『どうも子爵閣下を初めまして、奥さまの御盡力を感謝いたします。』

『で、――あなたの御拜命は明日ださうで御坐いますが、――すると、直ぐにも官舍へ這入つて貰はないぢやァ困ると子爵が申してをられました。』

『はい、それは承知しました。』

『ところが、ね』と、夫人はこちらを少しくつろがせるやうな口調になつた、『その丸のうちの官舍は――お氣の毒ですが――冬はなか〱お寒いので御座いますよ。わたくしも、前に子爵が同じ大臣の時に、其時の秘書官を訪ねて、一度、行つて見たことが御座いますが、ね、それは〱床がお高過ぎまして、――お寒いのはそれが爲めかとも思はれますが、――おもに日本造りで、應接室だけが洋館建てになつて、すが、ね。』『わたくしの方では、そんなことは不平を申す場合では御坐いませんので――』

『まァお寒ければストーヴに澤山石炭でもお入れになることですよ。』

『はい。』この時は、もう、渠も椅子に腰をおろして、夫人と相對した。が、どうも、不斷のやうに巧みな應對言葉が出なかつた。

そのうち子爵閣下が歸つて來たので、いろんな心得を云ひ含めさせられたが、お屋敷を辭する時、子爵の手から――然しこれも親切な夫人の注意によつてであらう――移轉その他の支度料に入るだらうからッて金五十圓を立てかへて貰つた。

その足で、早速、社長の宅を訪問し、兼てそのさしがねで紹介を受けた目的が今回やッと成就するこ

との禮を云ひ、記者として長らく同社に厄介になつてゐた地位を辭する言葉を述べた。

浪川政次郎と云ふ標札のかかつてる家は赤坂區の裏町に在つた。

つい、この間、八圓の家賃を五十錢あげさせて腐つた門を直させたところだのに、氣の毒にも引ッ越さねばならぬなど考へて、玄關を這入ると、妻を初めとして、うへの子二名と女中までが——多分、この女中の發議であらう——ずらりと並んで渠を出迎へた。

「さうでしたの？」

「無論、さ！」渠は靴をぬぎながら、にこ付かないではゐられなかつた。

「ありがたい、ありがたい！」妻は早口に斯く二度唱へながら、立つてたからだを踊らせて、くるりと一つまわつた。

「ありがたい、ありがたい」と、うへの娘の子がまた母の眞似をした。

「あり——あり——」次ぎの眞似師も、あぶなッかしいからだを横に動かさうとした。

「坊ちやんまでが嬉しがつて」と、女中はそれを抱きあげたが、矢ッ張りかの女も頬赤の平べッたい顔をにこ〳〵させて、一緒に主人の室までついて來た。

渠は氣づかれがしたと云はねばかりにどッかりと腰をおろして、洋服のままあぐらをかき、妻のいい顔を見ながら、家には不相應に大きな有田燒きの丸火鉢のふちをなでた。

「よかつたの、ね。」

『斯う來るのが』と微笑を浮べながら、『當前ぢやアないか？　四五年間も御機嫌を伺ひに行つたり、意見書の代筆をしたり、大きな飜譯を子爵の名で出してやつたり、さ。』

『でも、それにやア』と、妻は今夜に限つて色つやが一層よくなつたと見える爪ざね顔を斜めにして、所天と女中とを半々に見ながら、『その時その時のお禮は貰つてます、わ。』

『お前たちやアまだ分らない、さ——さうしたお禮などを貰つてることが重なるので、却つて向ふが斯うおいでなさるんぢやアないか？』

『さう云へばさうでしようが——』女中と嬉しさうな顔を見合はせた。

『まア、これで』と、女中は渠の妻に代つて妻の胸のうちを述べた、『青山へも澁谷へも意張つて行けます、わ、ね。』

青山には渠の妻の姉婿が住んでゐる。澁谷には妻の妹の家がある。共に軍人だ。そして妻の父は退職軍人だ。ここの主人だけが軍人でも官吏でもないのを、何だか肩身が狹いやうに思つてたのは、浪川自身の知つてる通り、妻ばかりではない。或ミシヨンスクルの神學部を卒業する間ぎはから、小使ひ取りに英語を教へに行き、つい出來合つたそのそも〳〵から、二人の味方になつて働いて呉れ、家を持つてからも三人の子をすべて手しほにかけて來た女中の考へも、また、同じであつた。

『せめて、文官でもいいから、高等官になつて下さいよ』とは、かねがねの頼みであつた。渠自身も亦惡くはないと思つたから、その方針で進んで來たのだ。

『でも、ね、お貞』と、渠は女中に向つて云つた、『まだお前達の滿足には行かない、さ——特別任用だ

から。」

「特別任用だッてかまひません、わ、ねえ、奥さん。」

「そりやア軍人なんぞとは違ふから――」

「お前ならい、さう、さ、軍人なら平兵隊でもいいんだらうから。」

「そんなことは」と、妻と女中とが同時に笑つて取り消した。

「實は、ね」と、渠はにこ〳〵顔を新たにして、今まで隠してゐた紙の包みを横あひから取り出した、

「いい物があるん、さ。」

「なに？」

「お菓子、お菓子！」うへの娘の子は飛び立つて喜んだが、渠のひらき出したのを見て失望の様子であつた。

「いいお下駄――奥さん！」

「いくら？」妻はいそいで手に取つた。

「當てて見な。子爵が移轉費にも入るだらうと云つて、五十圓立てかへてくれたから、ね、前いはひに一つ買つて來たの、さ――お前は下駄、下駄と云つてたから、ね。」

「お禮をおッしやいよ、奥さん。」女中はのぞき込んでゐた。

「お貞にも、何か買つてやるよ。」

「どうかよろしく――坊ちやんにも、ねえ」と、膝の上のを抱き締めた。

『あたしにもよ。』

『さう、ね、お孃さんにも――』

『繻珍でしよう、これは』と、妻は鼻緒をいじつて見ながら、『まア、一圓八十錢から二圓まで。』

『馬鹿な！』渠は少し不興げな顔をして、『三圓二十五錢に負けたんだ。』

『奥さん、結構です、わ。』

『嬉しい、嬉しい！』妻は突然その下駄の片足を兩手であたまにかぶつて、からだを左右させた。

『あんなこと――お母ちやん！』子どもはそばで笑つた。

『あなたも嬉しいでしよう』と、笑ふ子の肩を押さへて見てから、眞がほになり、『おやア、引き移りでしよう。』

『さう、さ、あす任命を受けたら、直ぐにもッて。』

『大變だわ、ねえ――』と、また女中と顔を見合はせた。

『でも』と、女中は答へた、『一人人足を雇つて、お父さんにも來て戴いたら――』

『さう、ね――』

『官邸の應接室は西洋造りだぜ――日本建ての方も床が高いッて。』

『まア――』妻はそれから思ひ出したやうに、『奥さんはどうしてらしッて？』

『矢ッ張り喜んでたよ。――然しあの夫人も隨分皮肉さ、おれがつい嬉しい樣子を見せたのをその時はいやアにただ笑つてゐたと思つたら、あとで子爵の前ですッぱ抜いて、浪川さんもお正直で御座います

よ、先刻申し上げた時に何とも申しやうのないやうなお喜びの御様子でと、さ。」

「あなたは人がよ過ぎるからですよ。」妻は不平さうであつた。「そんな時にやア少しおもみを持つてるものです、わ。そこは軍人なんか——」

「また軍人か？」今度は渠がむッとした。

「もう、およしなさいよ、奥さん、軍人でも秘書官でも、高等官になれたんぢやア御座いませんか？」

「さう、さ、お貞の云ふ通りでいいんだ。」渠は斯う云つて主人がほを正してから、早く食事と命じた。

そして不斷は飲んだこともない酒を少し飲んで見る氣になつた。

拜命の當日から、大臣の公用私用と自分の不慣れとの爲めに、碌々新居たる官舍に落ち付くひまがなかつた。

そして三日目の午後に、一つ、初めて大臣のお目玉を頂戴した。そのわけは、その翌日或法律學校で行はれる式場に於てこの省の大臣が演說をするか、若しくは祝辭を讀むかすることになつてたのであるが、新任早々のことだから、浪川が大臣代理として出席し、一篇の祝辭を讀めとの命令を受けた。で、一大事と思つて、他の用をそこのけにして一心にいい文句を考へてると、大臣に呼び付けられて、「そんなことはいつでもやれる」と叱られた。が、渠はこれを妻には報告したくないので、しなかつた。そしていよ／＼その翌日、代理を勤めた時は、多くの人々の面前に、廣い演壇の上で自分の聲が——自分の書いた文章を讀んでるのだのに——おしまひまで顫えた。

「こんなことぢやア仕かたがないが」と思つて、兎に角、忠勤をぬきん出て、その補ひを付けるより道がないとし、その日も一部の人々と共に夜遲くまでも殘つて、省の仕事をした。

それでも午後十時近くには、渠も自分の官舍に在つて、家族が茶の間と定めた六疊敷きの長火鉢のそばに四日ぶりで氣を休めてゐた。

丸の内の一部で、――周圍はしんとして、赤坂あたりよりは寂しいやうだ。そして子爵夫人の云つた通りに、寒さも違ふやうだ。

「子爵夫人が、けふ、突然、いらッしやいまして、ね」と、妻がその時の樣子を語つたのは、もう、十分か二十分も前のことだ。「直ぐ歸りますからと云ふ前置きで、ほんのちよッと話して行かれましたの――官邸がお互ひに近くなつたから、また來ますッて。」

「一度うんと御馳走して置かんといけない、さ。」

「でも、何だかそわ〳〵してらッしやるんですから、こッちも一緒にそわ〳〵してしまつて――」

「無論、いい折を見て、さ――わざ〳〵呼んぢやア大變かかるにきまつてるから、ね。」

こんなことを話してゐたのであつた。さし向つてる妻は子供を寐かしたあとで、胸もだらしなく、また赤い目をして、ねむたさうにふところ手をしてゐる。

「應接室のストーヴを焚いて意見でも聽かうか？」

「また何ふんですか、ね」と、氣の無ささうな顏をして笑ひながら、「政治論なら、ここでも出來ます、わ。」

「かゝりますよ、隨分石炭が。」女中はいつのまにか酒の燗をして持つて來たのだ。

「ヤア、氣が利いてる、ね。」

「ええ」と、女中は笑ひながら、「醉つてききたいことがあるッて、お父さんはよくお歌ひなさいました。」

「おやぢだッて、碌に飲めやしない。」

「でも」と、妻は手をふところから出して不器用にお酌をしながら、「あなたよりやア――」

「ぢやア、お前達アおれを機關車のやうに無理に焚き付けて、働かさうとするのだ。」

「ふッ」と、妻は女中の方を向いて吹き出したが、「そんなわけぢやア御座いません、わ。」

渠は妻の後ろに當る壁に某雜誌發刊廣告の、もう、古くなつたビラ繪がかかつたのを見て、

「またあんな物を掛けとくぢやアないか？」

「いいぢやア御座いませんか」と、妻もちよッと後ろを向いたが、また女中と顔を見合はせて、「棄てようと思つたのですが、お貞が置いとけと云ひますから――子供が見て喜んでるんですもの。」

「もう、然し、あいつにも意張れる、ね。」あいつとはその雜誌の有名な編輯者で、浪川の妻を崇拜する友人等の一人であつた。そして妻も亦その人の金儲けに上手なのを羨んでゐた。ここ二三年は全くやつて來ないが、よくやつて來た時は、それが爲めにこの夫婦間にわけもない喧嘩が起つたこともある。

「ああ云ふ人の仕事では、勳章や位はつかないから――」

「ぢやア、もう、思ひ切つた、ね？」

「また馬鹿々々しいことを！」妻は赤い顔になつた。

渠は、妻がこちらの冗談の爲めに氣が引き立ち、目と口とに釣り合ひのいい愛嬌が浮んで來たのを見て、自分も調子づいた。そして今回の政治問題に關する政府黨と反對黨との立ち場を説明し、同じやうに問題をただ手段視して黨略の具に供するのなら、自分は政府黨の飯を喰ふやうになつた以上、一個人としても恩ある方の意見を採用するのが別に恥ぢとするに及ぶまいと語つた。

「お前の意見はどうだ、ね？」

「さア」と、あまり熱も見せないで、「それで結構でしようよ。」

「そんなことぢやア」と、渠は歯がゆいやうすをして、からだに力を入れた、「反對なら、反對でもいいから、しツかり云つて見ればいいだらう。」

「でも、ねえ」と、笑ひながら、女中と相談するやうな目つきをした。

「女は女の用が別に御座いますから――」

「あつたツて」と、渠も女中の方を見て、「少しは主人の話あひ手になるやうでなけりやア――」

「そりやアさうですが――」と、妻が高聲になりかけたのを、

「まア、待て」と、渠は早口に低い聲で制した。

女どもも渠と共に急に心配さうに耳をそばだてた。

子供は三名ともよく寐てゐるやうだ。

が、渠の耳には、呉服橋からつゞく外堀ばたの石垣の上の松や、うち堀和田倉門あたりの松を吹く風の音らしいのが聽えるほかに、今一つ最も近い音が聽えた。

低くだが、がり／＼！

「それ。」

暫くして、またがり／＼！

「それ。」渠は眞ッ直ぐに座わり直して、きよと／＼と目を浮かせて、妻と女中とを順番に見まわしながら、角ばつた顔の長いうは髯を片手で撫でてゐた。

「鼠でしよう――？」

「默れ」と、渠は妻を目つきで制した。

「またいつかのやうに。」妻も心配さうだが、案外平氣であつたので、渠は女の淺墓なのを怒らないではゐられなかつた。代々木にゐた時のあの事件は如何にも鼠であつた。自分は先づ妻をさきに立てて、怪しい音のした臺どころの唐かみをあけさせたら、自分の持つてる手燭の光に大きなやつが天井にかけあがるのが見えた。然しあの時はあの時だ。

「身分が違ふ！」と、身づから壓迫したよりも、他から壓迫されたやうな顫え聲であつた。そして警戒深い目を尤もらしく妻から女中に轉じた。

「鼠にしては」と、女中も不斷は締りなく平べッたいその顔から頰ッぺたの赤味を全く押し退けて、この二三日よくなで付けるやうになつたと見えるいてふ返しのあたまを傾けた、「少しあやし過ぎます、

わっ」

がり〳〵、がり〳〵と、音が皆にはッきり分るやうになつた。皆の息をひそめてゐるところから最も遠い室なる、日本間の客座敷の床したあたりだ。

「ちやア、この邊にやア狸でもゐるんでしようか？」

「馬鹿」と、渠は妻の呑氣さを罵りたかつたのが、聲には出せなかつた。同じ動物を想像してゐるのではあるが、渠のは四つん這ひのではなかつた。渠には、男の助か何かのやうに大きな覆面の人間が半ば腰を曲げて、頻りに疊の下を鋸で挽いてる姿が、ぞッとする闇の中にあり〳〵と見えた。渠のからだ中が總毛立つたと同時に、力強い決心を以つてだが、然し押し伏せた顫え聲で、『電話をかけろ――電話を！』

「どこへ？」妻は直ぐ立ちかけたが、中腰で片手を火鉢のふちへかけた。

「知れたこッた、警視廳へ！」

「警視廳へ――」立ちあがつてから、「何と云つて？」

「〇〇大臣秘書官邸に、今あやしいものが來てゐるから、直ぐ來て呉れろッて。」

「それがおよろしいでしよう」と、女中も立つて妻の躊躇するのを電話室に急がせた。妻は女中に脊中を押しやられながらも、なほ不安心らしくこちらを向いたのに向つて、渠は聲をかすめて叱り付けた。

「こッそりだ！」

「…………」電話室から女中と共に戻つて來た妻は、少し燒けを起したやうに無作法に、どッかりと、もとの坐に坐わり、兩手を揃へて火鉢のふちにかけたが、反對のかはに所天が顏の色を換へて、前と同じやうに直坐して、髯をひねりつつ耳をそば立ててゐるのを見詰めながら、低い聲で「承知しましたと——あなた、若し違つてたらどうして？」

「違ふもんか！」斯う云つて、渠は妻が自分よりも左ほど恐れてゐないのを小憎らしく思つた。同時に、かの女や女中の手前を初めてひやりと感じた。實は、電話の應答がこちらへも聽えた頃から、あやしい音はしなくなつてゐた。渠は三人に向つて自分の威嚴を取りつくろはねばならぬ氣がしたので、それをこの不平にまぎらせた、「もッと靜かに電話をかければいいのに——お前達が逃がしたのだ！」

「だッて——」妻はこちらを馬鹿にしたかのやうに横を向いた。

渠はこれを見て慚愧と忿懣とが俄かに心のうちでかき亂れた。が、間もなく、玄關の呼びりんが鳴つた。警視廳は直ぐそばであつたから。

「しまつた」と思つたので、あわただしく立ちあがつて、渠は寢室の方へ行きかけたが、こちらを見返つてる妻のそばへ片足を踏みとめて、「おれは寢たことにして置け！」

寢卷きも着かへないで寢どこにもぐり込み、誰れも見てゐないくら闇を幸ひに、自分で自分の顏をしかめて、兩手であたまを投つた。

『ええッ、馬鹿！』聲のない言葉で叫んだ、『これが子爵に聽えたらどうする！　子爵からまた子爵夫人に傳はつたらどうする！』

息を殺して半ば首を擧げると、妻や女中が何だかくど〳〵と說明してゐる。來た人數は一人や二人ではないらしい。

渠はまた顏をしかめて、枕の上で自分のあたまを投つた。

家族が茶の間へ戾つて來たけはひがすると、客座敷の床の下あたりで人の聲がしてゐる。やがて、また、自分の寢てゐる下でも話し聲がする。自分はこのまゝかついで行かれるやうで――ちよッと氣が遠くなつたが、直ぐわれに返つてひやりとしたのは、床したの話がはッきり聽えた爲めだ――

『一體、主人はゐるのか？』

『寢てゐると、さ。』

『白ばッくれやがつて――』

『犬か何かにおぢけたんだらう。』

『人さわがせにも程があらア、な。』

段々その聲が移つて行つて、何を云つてるか分らなくなると、茶の間の下からそとへ出たらしい。その雨戶が一二枚明く音がして、妻の聲で云つた。

『まア、お茶でも――どうか。』

『へい――別に異條は御座いません。』

「さうでしたら安心ですけれど――主人は宵から疲れて休んでしまつたので。」

「なァに、御心配にやァ及びません。」

「何のこともないぜ。」「臺どころの方からまわつて來たらしい聲だ。

「犬だらう」と、またこれも加はつた、「一つ二つ足あとがあつたから。」

「まァ、そんなところでせう、な。」最初のが云つた、「さァ、行かう――どうか御主人によろしく。」

「どうも濟みませんでした。」

浪川は寢床のうへに半身を起し、その室のそとをまわつて行く人々の話し聲に耳を向けると、渠等の來てぜりふが皆自分をあざけつてるやうに思はれて、自分の兩手に冷汗を握つてゐた。

「おれの面目がつぶれたぢやァないか？」電話など出來たのがあまり便利過ぎた。それにしても、妻が「若し違つてたら」とあとで注意した時、あの時なぜ取り消す智慧が出なかつた――只今電話をかけましたが、もう、安心になりましたと？ さうすれば、あいつ等の來た時に、體よく斷わることも出來たのに！ 「馬鹿！」またわれとわれを罵つた。

妻は氣轉を利かして、主人を宵から寢かしたと云つても、渠等はとても信用してゐさうではない。斯うなると、家族のものにも自分の價うちが全くさがつてしまうので、先づその取り返しかたを考へてゐた。

すると、ひッそりしてゐた茶の間の無言が妻によつて破れた。

「若しあの奧さんに聽かれたら、どうだらう？」

「さうです、ね。」

「これだから、軍人でなけりやア――」

かげでまごついてた渠は、これを聴いてむッとしたと同時に、いい出の手がかりを得たので、無理にも怒りの顔色を見せて飛び出して行つた。

「そんなに軍人がよけりやア、直ぐ歸つてしまへ！」

「そんなことを、旦那さん！」女中が先づ聲を出したが、いづれも呆れた顔をしてこちらを見あげた。

「いいや！」つッ立つたまゝがん張つて、「今、ひまをやるから出て行け！おれは軍人でないから――卑怯者だから――おれの面目はどうせつぶれたのだから」と、語調をつよめて疊みかけて、「出て行け！出て行け！　直ぐ里へ歸れ！」

「そんなことをおッしやつたッて、旦那さん。」

「いいや、お前も一緒に歸れ！」

「わたしは女中で御座いますから、いつでも歸りますが――」

「田鶴子も一緒につれて歸れ！」かう女中に云つてから、また妻を猛烈に目の色を換へて見おろしながら、「お前のおやぢも軍人だから、おやぢにやアお前の申しわけが立つだらう――どうせ軍人でない亭主は見込みがないからッて――」

「まア、お坐わりなさいませ。」女中は横合ひから立ちあがつて渠を無理に細君のそばに坐わらせた。「突然どうなさいましたので御座います？」

「おれは以前から」と、渠は妻があきれて顏色を青ざめて、こちらをじッと見てゐるのをなほ睨み付けながら「軍人でない、軍人でないと云はれるのを癪にさわつてるんだ。今回のやうな拜命だッて、もとはおれから進んで運動したのぢやアない。おれはどうせ意久地がない――お望み通りの軍人にゃ高等官にもなる資格がないのだ。あす、斷然辭職する！」

「…………」妻の顏は見る〳〵死人のやうになつたかと思ふと、『あたしが惡かつたのですから』と半ばも云はず、渠の前に泣き伏してしまつた。

「奥さんがお可愛さうぢやァ御座いませんか？」女中はまた半ば母親のやうな優しさを見せて渠の妻を見ながら、渠に訴へた。

渠は本當に胸がむしやくしやしてゐたのだが、この樣子を見て、多少主人たるの威嚴を取り返したと思つた。

そのうち、渠のそら寢をしてゐた室で子供が泣き出したので、妻はその袂で目を押さへながら、すすり上げつつ、その方に行つてしまつた。

「今のさわぎも、まア、無事で御座いましたし――」

「決して無事ぢやァ濟まん！」

渠と女中とはそれッ切り云ふこと葉がなく互ひ横を向いてゐた。

渠は手持ち無沙汰を感じたので、妻の坐わつてたあとへ行つて、わざとにもこわい顏をして、火の上に片手をかざしながら、猫板（ねこいた）の上に在つた一板の名刺を別な手に取り、警視廳探偵なにがしと書いた字

のおもてを見詰めてゐた。

その翌日は、胸に傷持つ思ひをして、渠はおづ／＼勤務してゐたが、別に大臣の機嫌を損ずるやうなことはなかつた。

事務も大分わかつて來たので、丁度さう用がないのを幸ひ、午後の四時頃に歸宅して、ここへ移つてから初めての晩食を妻子と共にした。

「さア、來い」と、渠が女中の手から末の男の子を取つて、膝の上に抱いた時は、妻子も食事を濟ませてゐた。

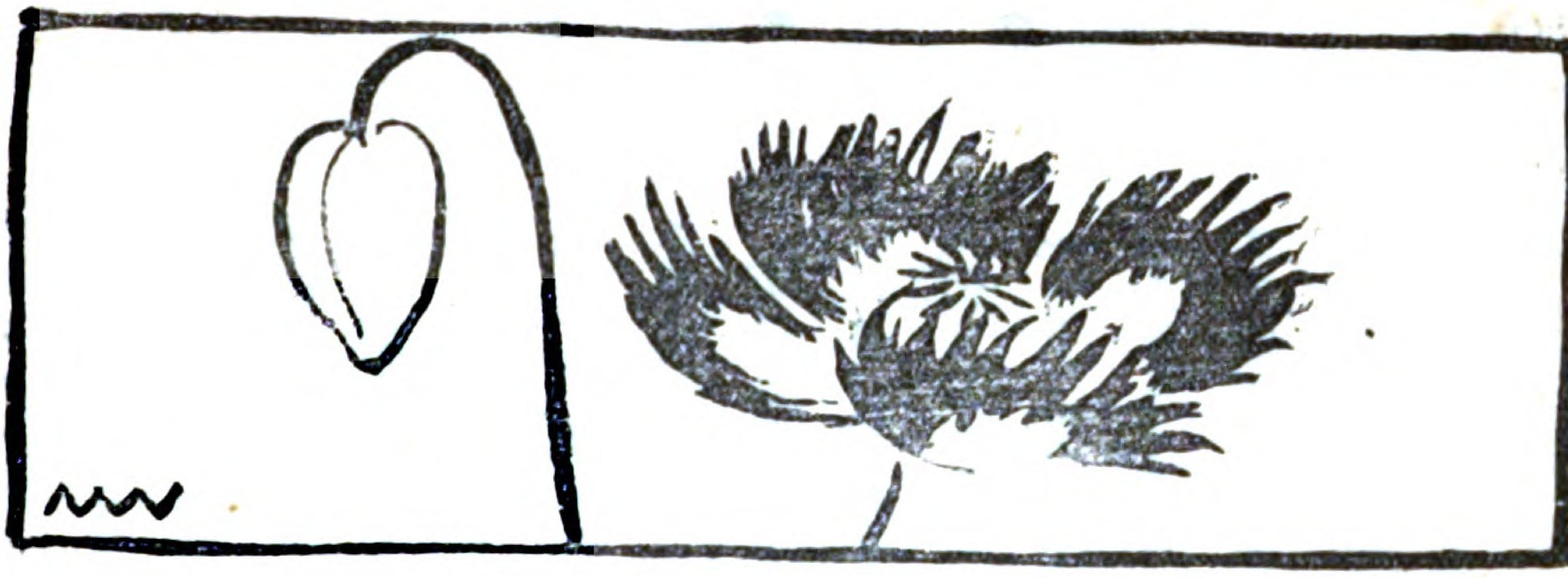
妻はこの時思ひ出したやうに、だが、落ち付いて云つた、

「けさ、電話がかかりまして、ね、――警視廳から」

「何だッて？」

「もう、犬のがり／＼は聽えませんかッて。」

「人を――馬鹿！」渠は斯う云つて何氣ない樣子をしたが、忘れてゐた一生の恥ちを思ひ起して、心は大臣室で全くちぢみあがつてゐた。



夜着

田村俊子

二人は、夜着まで新調して結婚すると云ふやうな、結構な人間並みな結婚をしたのではなかつた。

その時まで下宿住ひをしてゐた男の方には、夜着などは一枚もなかつた。女が自分の幼少い時からの一人寝の一と組の夜着を持つてゐただけであつた。それには赤の交ぢつた友禅の模様のついた掛け蒲團などもあつた。二人は家を持つと、その狭い夜着の一と組に不足も云はずに夜は一所にその中に寝た。ある夜は端と端とを引つ張りつこをして笑ひ合ひながら眠ることもあつた。

女は、一人で寝てゐた頃とは違つて、夜着の裏が直きに傷むのにおどろいてゐた。ギヤラコの布れがまんなかから破れて腸のやうに綿が食み出てくるのを、餘り度重なると女は無性をして繕はずにおくことがあつた。その破れた裏を仰向に返

した儘で、日の當る二階の欄干に男が亂暴に干しておいたのを、後になつてから女がそれに心付いて、往來の人に極りの惡るい思ひをしながら狼狽て取り込んだりした。

一方を繕へば又一方が破れて來た。熱い夏が來て夜着の用が暫らく中止になるまで、女はその裏の繕ひに氣を盡した。女は夜着の裏地の破れがはげしいほど、男の寢様のわるいことを語つた。男は女が寢様がわるいのだと云つた。夜着の手入れは女の夏の仕事であつた。裏の破れないやうに赤い木綿などが付いた。

その時から二年經つたある春に、男が不圖、狹い蒲團が窮屈で堪らないと云ひ出した。男は自分の肩が夜着の外に出たり、足の先きが疊の外に出たりすることを忌々しそうに云ひ出した。

「第一、一所に寢ると云ふことはお互の身體の毒だ。非常に神經が疲れる。よく睡眠ができない。何うにかしやうぢやないか。」

女は男のその言葉を突然に聞いた時、不思議に嫉妬を感じた。女にはまだ、狹い蒲團を引つ張りつこをして笑ひ合ひながら寢るだけの感興が殘つてゐた。女がその感興から覺めないうちに、男がもう其れに倦きたことが女には嫉ましかつた。二年の間、男が夜着の窮屈さを感じなかつたのは、女と同じやうな感興に惹かれてゐたからであつた。それに倦きたから男は身體の窮屈を感じ初めたのだと女は思つた。女はその狹い夜着に寢ても、神經の疲れるやうな事も覺えなかつたし。よく熟睡ができた。男は自分の口に近い女の呼吸の苦しさを感じて朝も早く目が覺めた。室の戸を開け放つておいて自分は散歩に出て行つたりした。

女はいろ〳〵に遣り繰りをして夜着を拵へた。

古るい浴衣を紺屋にやつて荒い模樣を置かせるやうな事も、他から聞いて女は覺えた。女は、二人が一所に寢ても肩の出ないやうな、幅の廣い敷蒲團や、四布の掛け蒲團などを拵へ上げた。

初めて二人が別々に寢る時、女は窓の方は不用心で氣味が惡るいと云つて、男は窓の方に、自分は壁の方に添つて寢た。

その翌晩は又、壁の方は階子段の下り口になつてゐるので、その階子段が夜つぴて氣になつて寢れらないと女は云つた。その晩から男が壁の方に寢て、女は窓の下に寢るやうになつた。女は、自分を身近くぴたりと圍つてゐて呉れるものがなくては、安らかに夜を寢ることができなかつた。女は唯寢衣の身の周りが淋しく、男が傍にゐながら、一人寢の深夜が恐しくて堪らなかつた。よく眠りに就いた男を美しく思ひながら、自分は不安に寢られない夜を明るい灯の下で明かすことが多かつた。

女は結婚してから二年の間に、それほどに臆病になつてゐた。その處女の頃には暗い座敷にたつた一人して寢ることなどは何でもなかつた。女は眠れない床の中でそんな事を考へた。

だが、直きに二人分の夜着は不足になつた。それはこの家に下女を置くやうになつてから、主人は下女にも相當な夜着を與へなくてはならない爲であつた。寒い冬が來て、二人は昔のやうに又一所に寢るやうになつた。昔よりは廣い幅に作られてある夜着を、せめてもの滿足にして男は幾分か悠長にその夜着の中に身體を横にした。

その頃、二人はよく喧嘩をした。すべての上に二人の幸福は充分ではなくなつた。女はだん〳〵男の

壓制を强く感じてきた。男は、女が自分の一切を男の所有にはさせまいとする反抗を持つやうになつた事を知り初めた。男は女の生活から侮蔑を見出し、女も男の生活から侮蔑を見出した。二人は、二人の日々に齎らす種々な生活の事實のもとに、一とつ〳〵異つた意見を持つて爭つたりした。男は女の意志に强いて協和することを屈辱のやうに思ひ、女は男の意志に理由もなく同ずることを恥辱のやうに思つた。然うして二人は朝からでも絕えず口論をした。男の愛と憎惡と、女の愛と反抗とが、そこに食ひ違へてくる時二人は激しい打ち合ひをすることが度々だつた。

そんな時に女は男と一とツの夜着の中に入りかねて寒い室に懷手をした儘で徹夜をした。然もない時は男から夜着を奪つて來て他の室に一人して寢たりした。男は一人で寒い机の前に肱を突いて然うして夜を明かした。

二人が結婚してから丁度七年經つたある冬に、男は初めて風邪に冒されて、每晚ひどい咳に苦しめられた。熱も少しあつて男は晝も夜もうつらうつらと病に苦しんでゐた。

夜になるとその病床に女は入つて寢た。

「一所に寢るから風邪をひくんだ。きツと然うだ。」

男は然う云つて、二人並んだ肩の隙間などを撫で廻しながら、

「斯うだもの。こゝから風が入つちや堪らない。」

と云つた。女はそんな事はないと云つた。

「私は風邪をひきませんよ。夜具のせいぢやありませんとも。私はあなたの風邪でも傳染さして貰ひませう。」

女は男の熱臭いのが少しも氣にならなかつた。男はまるで夜通し咳いてゐたけれ共、その咳も女には氣にならなかつた。然うして疲れてる女はその儘彼方を向いて快く寢入つた。

男は毎晩苦しかつた。自分の虚弱な熱のある身體を膨大な他の一とつの身體が絶えず壓迫してゐることが男はたまらなく苦痛であつた。

何うすれば夜の自分の身體を、安靜に休ませることが出來るだらうかと思ひ詰めると、男は夜着の外に這ひ出して行きたいやうに切ない苦しみを覺えた。男はわざと夜着の内で身を揉んで咳き入つたりした。それでも女が疲れて眠りから覺めない時、男は、

「おい。」

と云つて女を小突き起した。

男は自分の氣分の惡るい苛ら苛らしさから、夜になると、何彼の用に托けて女を起した。夜中に一度は女を起してそうして夜着の外に出した。女は男がわざと空咳をしてゐると思ふほどにも、その仰山な病體を小憎らしくは感じながら、一時間でも好く眠りたいと云ふ懸命な望みから男の云ふ事を聞き流して直きに眠りを續けやうとした。身體の虚弱な男がこの一二年思ふやうに働けなくなつてから、其れに代つて働かなくてはならない仕事が女にあつた。女は自身の身體の力不相應な仕事に根よく毎日從いてゐた。その毎日の勞力で女の精神は疲れてゐた。女は何よりも好い睡眠をとることを喜んでゐた。夜分熟

睡ができなければ女は翌日の仕事をつゞけることが難儀だつたし、一と晩の睡眠の不足が彼女に不眠の癖をつけることがあつた。夜の眠りを妨げられると云ふことが彼女にはいちばん恐ろしかつた。

男の病的に冴えた神經は、自分の傍で女が眠れば眠るほど、まるで土塊のやうにその身體が邪魔になつた。男はその晩も夜中に女を起した。

「濕布を取り代へてくれないか。」

と男は女に云つた。

女は男の言葉を聞きながら、うつ〳〵と眠つてゐた。男は幾度も女に繰り返したが、女はそれを聞きながら夢の中でぼんやりと返事をしたつもりで眠つてゐた。男は突然女の枕を後に敷いてから、女の脊中をどんと拳で突いた。女は目を覺ましながら靜に顏を男の方に向けて男を見た。

「さつきから起してるんぢやないか。」

「何だつて云ふの。」

「濕布を取り代へてくれつて云つてるんぢやないか。」

「寒いから起きるのは厭だわ。女中にお云ひなさいな。」

女は枕を直してそつと頭を其れに就けた。男の今の仕打が女をひどく怒らせてゐたけれ共女は默つてゐた。その儘で自分は安らかな眠りにつかうとして、自分の閉いだ瞼の力で自身の感情を抑へつけてゐた。だが男は默らなかつた。自分が重い病氣に罹つても、この女は自分を看病することの出來ない女だと云つて罵つた。

「あなたの身體より自分の身體の方が大切だわ。極まつてるぢやありませんか。私は唯眠れば宜いんですから、うるさくしないで下さい。」

男はそれを聞くと、先きよりは一層強く女を突き出すやうに拳でその脊中を打つた。

「何をするんです。」

女は然う云つて起き上つたが、夜着の隙から風が入つて寢衣が凍りつくやうに直ぐに冷え通つた。その寒さに我慢ができなくて女は又身體を横にした。男はいつまでも愚圖々々と女を責めてゐた。

「あなただつて私を眠らせないぢやありませんか。寢が足りなければ私の頭腦は直ぐに惡るくなることを知つてる癖に、なんだつて然う人をいぴつてゐるんです。」

「おれは寧そ起きやうかしら。」

男は然う云つて苦しそうに身體を轉々とさせた。女はそれを聞くと直ぐに床を出てしまつた。女は默つて――然し勢ひよく着物を着かさねた。夜の空氣がしん／＼と女の手足を襲つた。

「ぢや、一人で樂にお寢みなさい。私は今夜は起きてゐますから。」

その時女は忍從の面當てと云ふ心持をその胸に帶びながら、序に濕布も取り代へてやらうと云つた。

男は、

「もう宜い。頼まない」

と云つて默つた。

女は次ぎの室に來て机の前に坐つた。本箱の上の置時計が一時四十分を指してゐた。

男は、起きてしまつた女に聲を掛けやうともしないで靜にしてゐた。男は初めて安靜な氣分でその熱のある身體を廣々とした夜着の中に横たへてゐるのだらうと、女は寒い室で想像してゐた。夜着の不足がお互の心を邪慳にしたことを女は自分獨りに恥ち思ひながら、小夜着で身體を包んで机の上に寄りかゝつた。そうして其の儘其所で寒さに戰えながら假睡をしやうとした。先きからの忍從の面當てが犧牲と云ふ快さの中にだん／＼に浸潤してゆくやうな心持に女はなつてゐた。

女は翌る朝、身體の惡る寒さを凌ぐために湯に入つた。その晩から女は不意にはげしく發熱した。男が五六日前から冒されてゐる風邪よりも、一層重い感冒だと云ふことがその熱度で推し量られた。女の身體は火のやうになつてゐた。

男はその夜女の熱のはげしいのに驚かされた。

翌日になると、女の容體は餘つ程惡るくなつた。女は床をはなれる事ができなかつた。

「一所に寢るのが惡るいんだ。だから風邪を冒くんだ。」

二人の身體は一層窮屈でぎごちなかつた。一方が動くと、一方の熱のある身體はぞく／＼と痛んだ。

男は何うしても夜着を別にする事を考へてゐた。二日目の晝に、二枚襲ねてゐた薄い敷蒲團を一枚づゝに分け、掛けるものも二つに分けて、それに羅紗のマントや外套や、小夜着などを集めててんでんに其の上に足して寢ることにした。男もまだ晝の間も、床の上に起きたり寢たりしてゐた。

二三日後に女はだん／＼に惡るくなつていつた。咳が烈しく出た。殆んど一日一と晩その咳に女は苦しんだ。四疊半の薄青い障子の色をした小窗の方に顔を向けて、惡寒に戰える身體を堅くして蒲團の中

に包まつてゐる女は、薄い敷布團の下から、疊の冷えが全身に徹つてくるやうな氣がした。掛けるものも輕くなつて、肩の上がふわ〳〵と寒くてたまらなかつた。

女はあらゆるものを夜着の上に掛けて貰つたりした。身體の上が重くなれば、それで惡寒が止むやうにも思はれた。然し何を掛けても女の身體は快い暖みを受けることはできなかつた。胸部から咽喉内に炎のやうに嗝んでくる熱と、手足から逆に寒さを感じてくる震へるやうな冷えとが、彼女の身體に一層惡るい矛盾の苦しみを與へてゐた。女は夢中になつて、寒の水をコップに一杯飲み干すことがあるし、然うかと思ふと舌も爛れるやうな熱いポンスの湯を一と口に飲むことがあつた。女は絶えず惡寒に惱んだ。

溫い夜着——女は其ればかりを心に望みつめた。女はたゞ夜着が欲しかつた。

「身體が惡るくなつてから、薄い夜具になるなんて反對だわ。病氣になつたら平常よりももつと蒲團をかけて暖かにすると云ふのが普通ぢやありませんか。私等もよつぽど妙なことをしてゐるのね。」

女は自分の寢てゐるところから男の方を見て云つた。この頃男は大抵晝間は起きてゐられるやうになつた。男の夜着は晝間は明いてゐた。晝間だけでもその夜着を女の役に立てることができるのだが、女は夜になつてから其れを引き剝がされる時の寒さを思ふと、其の薄い夜着の儘で晝も夜も平等な溫度に身體を馴らしておく方がまだしも幸福であつた。

「何うしても夜具だけは拵へなくつちやいけないね。」

と男は女の寢床を氣の毒そうに眺めながら、低い聲で云つた。

心がければ夜着の一枚や二枚が作れないほどのことはなかつた。女は相當に多少の收入をその仕事から得てゐた。唯、彼女の道樂氣が無駄な金錢を費消しなくては濟まされない場合を澤山に作るのであつた。夜着などには手も廻らぬほどに、いつも彼女の低級な藝術家氣質が、僅な收得の彼女の金錢を忙しく追つてゐた。演劇だの、音樂だの、味食だの、そうして玩具だの——それは隨分馬鹿氣たことだつたと女は思つた。

女はつく〴〵と夜着の必要に切迫しながら、一とつ〳〵無駄な費消を數へ立てゝ、その胸で計算をした。熱のひどい掌を握つてそれを胸の上に女はのせてゐた。そうして女は夜着の新調の金高などを繰つたりした。

夜着は僅な金でもできた。だが、今の自分たちの夜着のやうな硬い地のものなどで、同じやうに何枚も作ることを考へてゐると、女は其れも厭になつた。そんな木綿の夜着に何時まで自分の身體が包まつてゐることだらうなどゝ女は淋しく思つた。女は非常に美しい派出やかな夜着が欲しくなつた。

紫の紋羽二重で一と組の夜着を作ることなどを女は考へた。その裏地に女は鴇色ちりめんを付けて見たりした。黒の天鵞絨に好きな意匠の繡ひをしてそれを掛け蒲團と敷蒲團に、そうして掛けぶとんの裏地と、間の夜着の表は同じ物にしなくては面白くないと思つた。いろ〳〵に思案して、紅と水淺黄の手綱染に麻の葉模様を浮かした平凡な友禪にして、その夜着の裏には緋を付けて見た。女は黒びらうどとそれらの縮緬の色彩との配合を描いて限りなく美しいと思つた。そうして女は、その美しい夜着の中に自分一人して寢ることを考へてゐた。

女がこんな空想に心をさまよはしてゐる時、電燈がその頭の上に點いた。熱のある女の眼には壁も障子も黄色く映つてその額が痛んだ。女は溜息をして、そわ〳〵と落着かない夜着をしつかりと自分の身に抱へ締めながら眼をつぶつた。その時女の幼少い頃のことがその胸にふと浮んだ。

それは女の家がまだ之れ程に零落しない頃のことであつた。女は七才ぐらゐであつた。祖父の敷蒲團が山賊の夜着のやうに厚い天鵞絨のものだつたことと、さうして自分の小さい夜着に、母が踊りの浚ひに使つた近江のお兼の衣裳が直してあつたとを思ひ出した。それは草色の縮緬みであつた。その裾に何か赤の交ぢつたこまかい模様がついてゐた。その摸様が何であつたか女には思ひ出せなかつた。それがお兼に使つた衣裳だつたと云ふ事は、後になつてその布れ地を好いてゐた母の話の種になつたので女は知つてゐた。

女は昔がなつかしかつた。それで草色の縮緬みで夜着を作つて見やうと考へ付いた。その草色の裏地に桃色がつけたかつた。

女の風邪はだん〳〵惡るくなるばかりで快くはならなかつた。食事が進まなくなつた。女はたゞ濃く出した茶ばかりを命にして日を過ごした。五日經つても七日經つても病ひの恢復する兆しが見えないのに焦れ出して、女はとう〳〵醫師に診て貰ふことにした。

急に醫師を迎へるやうになつたのは夕方であつた。體裁を見好くするために、男は座敷を片付けたり女の寢夜着の見窄らしいのを氣にして、別々に分けた夜着や蒲團を又一所にして厚くかさねてやつたり

した。女も寝衣など代へて見苦しくないやうに自身の身體に氣を付けてゐた。然うして久し振で厚くかさねた夜着の中に身を横たへた。

蒲團の中はほんとうに幸福であつた。女はふくふくと身體が夜着の中に埋まつてゆくその心持をしみじみと快く味つて喜んだ。幾枚もの夜着が女の身體を柔らかく上から上から押し付けてゐた。肩にも夜着の襟がぴつたりと掛つて包んでゐた。女はまるで慈愛と云ふものを形にして眺めたやうな氣がした。夜着は慈愛の象徴であつた。

「お醫者にかゝらないでも私はこれだけの夜具を着ただけでもう癒るわ。なんて快い心持でせう。斯うやつて靜に二日も寢てゐれば風邪なんか癒つてしまふ。夜具が足りなくつて寒い思ひばかりしてゐたからいつまでも癒らなかつたんだ。」

女は枕許に座つてゐた男に云つた。毛布の暖かさが今更彼女の身體に感じられた。

「そんなに暖たかかい。」

「暖たかだわ。」

やがて二人は、診察に來た醫師を迎へた。

氣管支加答兒に、少し腸を痛めてゐると醫師は病人に告げた。濕布と吸入をすることを勸めて醫師は歸つて行つた。

男は自身の健康がまだはつきりとしないのに、女の病體がいくらか自分よりは重いばかりに、その介抱もしてやらなくてはならなかつた。そうして夜になると、男は病人の夜着のうちに入つて寐なくては

ならなかつた。

夜着のなかは熱臭かつた。女の身體に觸るまいとする氣遣ひで男は殆んど夜を通して眠られなかつた。自分の身體は縦半分はまるで夜着の外にあつた。發熱してくると女は苦しい苦しいと云ひつゞけて悶搔いてゐた。

女は男の身體が邪魔でたまらなかつた。肩の廻りに折角ぴたりと押し付いてゐた慈愛の夜着は、夜になると、その半分を奪はれて、肩と肩の間には大きな空虚の穴ができた。女はそこが寒くて、身體に不快な惡寒を感じてくるのであつた。女には男の身體が丸太の棒のやうに思はれた。その棒が横たはつてゐる内は、女は安らかに發熱の眠りをうと〳〵と辿つてゐることができなかつた。

女は不安に目を覺ました儘で、仰向になつて自分の急速な呼吸を聞いてることがあつた。そうしてこの間のやうに美しい夜着をその頭に描いてゐると、自分の臨終の床は然うした美しい綿繻の床であるやうな氣がしてきた。女は幾度自身でその運命の相を打消しても、やつぱり自分は美しい床の中で死に就くやうに思はれた。女は目を閉ぢて、まるで鏡に映る自分の未來の姿を見詰めるやうに、頭に浮んできたある美しい場景を眺めてゐた。

女は翌る日、男にその話をして笑つた。男は、

「おれにはそんな運命の確信はない。」

と云つた。自分はやつぱり木綿の夜具の中で死ぬのだらうと云つた。ある人間の最後は、土の上か水の中か、それとも夜着の中か――男はそんな事を考へてゐた。

半月も經つたが、はか〳〵しく女の病氣は輕くならなかつた。醫師の藥は飲んでも、吸入はやつても、咳も止まらなかつたし、熱が一向にとれなかつた。

女は其れを夜の故爲(せい)にしてゐた、晝の間は女は見舞ひの客と話し勞れた。そうして夜はその身體と精神をゆつくりと休めることが出來なかつた。

「斯うしてゐちや、いつまで經つても熱はとれやしない。」

女は何うかして一人して寐ることを考へながら呟くことがあつた。夜の發熱が殊に彼女の血を逆上させた。夜、一人して靜に寐ることができない爲に一層逆上して、破(わ)れるやうに女の頭は痛んだ。

女は自分で考へて、氷嚢を頭に當てるやうにした。氷は池の端の方から二貫目ぐらゐづゝ持つて來た。その氷を當(あ)てるやうになつてから、頭腦の方が非常に快くなつてきた。そうして自然と咳がやんできた。女は又自分で考へて、胸部に濕布をあてた。女はこの二三日胸が痛んでたまらなかつた。

男は、女が氷嚢をあてるやうになつた晩から、他の室へ入つて一人で寐るやうにした。客の座蒲團や自分たちの座蒲團をいつぱいに敷き重ねて、小さな夜着や外套などを引つ掛けた儘、男は着たなりで轉寐(ごろね)をした。

「あなた。寒くはないの。」

女は枕から顏を上げて、次ぎの室に外套を引摺つて行つた男の後姿を見た。

「寒くはない。」

と男は簡單な返事をした。男は夜中に一度づゝ其室から起きて來て、女の爲に氷嚢の氷を入れてやつ

た。

「有難う。」

女はいつも然う云つた。氷嚢の中で一杯になつた氷がかちや／＼と冷めたい音を立てゝゐるのが女の脳に響くと、女は快い心持であつた。そうして、男が次ぎの室に入つて唐紙をぴつたり閉めて了ふと、女は心の周りが空寂と靜まつてせい／＼とした。室内の灯も靜に病人の枕許を照らしてゐた。その灯の光りが落着いて森としてゐた。夜の室内が女王の座のやうに廣々として來たやうに女には思はれた。右を向いても左を向いても、夜着はふか／＼と袖を垂れてゐた。熱で倦るい足を何所へ伸ばしても、丸太の棒には觸らなかつた。毛布が軟らかく暖に彼女の足の裏にさわつた。

女は知人の女講師から貸して貰つた廣重の錦絵の本を枕許に引寄せて、其の絵を眺めたりして夜の病ひを自から慰めた。

三日も四日も男は轉寐をしてゐた。朝など、開いた唐紙の隙からその轉寐をしてゐる男の姿を見た。男の肩から脊中にはなんにも掛つてゐないやうであつた。男は頭ばかりを潜らして小さく堅くなつて寐てゐた。

「風邪を冒さかへすといけないわね。そんな風をして寐てゐて。」

女が云つても男は大丈夫だと云つて取り合はなかつた。

「ほんとに大丈夫？」

男が「うむ」と返事をすると、女はそれで安心した。男の口から愚痴さへ聞かなければ女は幾日でも、

幾月でも、斯うして一人して暖い夜着の内に寐てゐたかつた。

だが男は毎日不快であつた。身體の皮膚が始終腫れぼつたくて顔なども重かつた。熱があるとも無いとも付かない身内が氣倦るくて、氣分が勝れなかつた。時とすると、男は何となく女の横暴を憤るやうな心持を忍ばして女に對してゐる事があつた。女には碌に口もきかずに、夜も早く次ぎの室に引籠つて男は自分の生活を考へたりした。

そうして、夜着さへも充分に調へることの出來なかつた七年間の過去の生活を男は省みた。自分に人間一人前の能力が備つてゐないとしても、女と結婚してから五年間、自分は可なりに働いたと男は思つた。その收入は二人の生計の費用を引去つてもまだ殘餘がある筈だつたと男は思つた。けれ共夜着を作ることができなかつた。そうしてこの二年ほど自分に代つて女が働くやうになつてから、その收入は却つて昔よりも増加えてゐた。けれ共矢張り夜着を作ることを女は考へなかつた。

「すべては女が物質主義者でない爲に、我々の家庭を夜着一とつ作ることのできないやうな状態にさせたのだ。」

と男は思つた。

自分の力で得る金を、悉くつまらぬことに費消し盡す女の平生を思ひ浮べた。男にはその時女が愚かしく下司に思はれた。自分は相當に働きながら夜着一とつ家庭に備へることのできない女を、男は決して悧潑ではないと思つた。

世間には一人で働いて、丹念に其れを貯金するやうな女もゐた。男は生活に締め括りのない愚な下司

な彼女をひそかに侮蔑した。然うして、この一二年自分が手を束ねて遊んでゐると云ふ遠慮から、五錢の煙草を三日に喫むやうに心掛けてゐる自分の女に對する思ひやりも、却つて女に取つては男の性格を賤しく卑小なものに思はせるばかりだつた事を男は今更腹立しく思ひ起した。

男は四五日も脱いだことのない皺んだ着物の儘で、懷手をしながらぶらりとある朝庭に出た。そうして鳩を入れてある金網の前に立つて三つの鳩の姿を眺めてゐた。

この鳩は一と月ほど前に何所からか四羽が群れてこの庭に下りて來たのであつた。鳩はよく人に馴れてゐた。二人はそれを押へて飼つておいた。その内一羽が寒さに冒されて落ちてしまつたが、後の三羽は金網の中で喧嘩をしながら健かに生きてゐた。男は毎朝、その鳩に餌を配つてゐた。

今朝も男は餌をやる事を考へながらその前に立つて、鳩が人の足音を知つて爭つて金網に取縋つてくる姿を眺めてゐた。鳩は人の手から米を與へられることを待つてかうして騷いでゐるのであつた。男は少時してから米もやらずに金網を開けて三羽の鳩を放してやつた。放された鳩は直ぐには庭から逃げて行かなかつた。その逃げて行かないのがふと男の神經を苛ら立たせた。そうして小さい一羽が男の裾の周圍を廻つてうろ／＼してゐるのを、男は俯向いて手に摑むと石の上に抛りつけた。鳩は其の儘ぐたりと頭を垂れて死んだ。

男は座敷に入つて來てから、薄曇つた窓の外を眺めてゐた。その鳩の一羽を殺したことが男は氣になつた。鳩が石に打ち付けられてぐたりと死んだ姿が男の眼前からはなれなかつた。

鳩を放してやつたのは、金網の中の鳩の生活がふと男に悲慘に思はれたからであつた。そうして夜に

なれば外の寒氣を防いでやる爲に、鳩の金網に毎晩覆ひを掛けてやらなければならなかつた。其れも男はこの四五日その注意を怠つてゐた。男は鳩に今夜から自由に夜着を求めさせるつもりで放してしまつたのであつた。

だが何故鳩を殺したのか、男自身にもわからなかつた。

男は不愉快な顔色をしながら、其れを女に話した。

「何うしてそんな亂暴なことをしたの。」

女は知らぬ間に男の手で、無殘に殺されたり放たれたりした鳩のことを悲しく考へた。

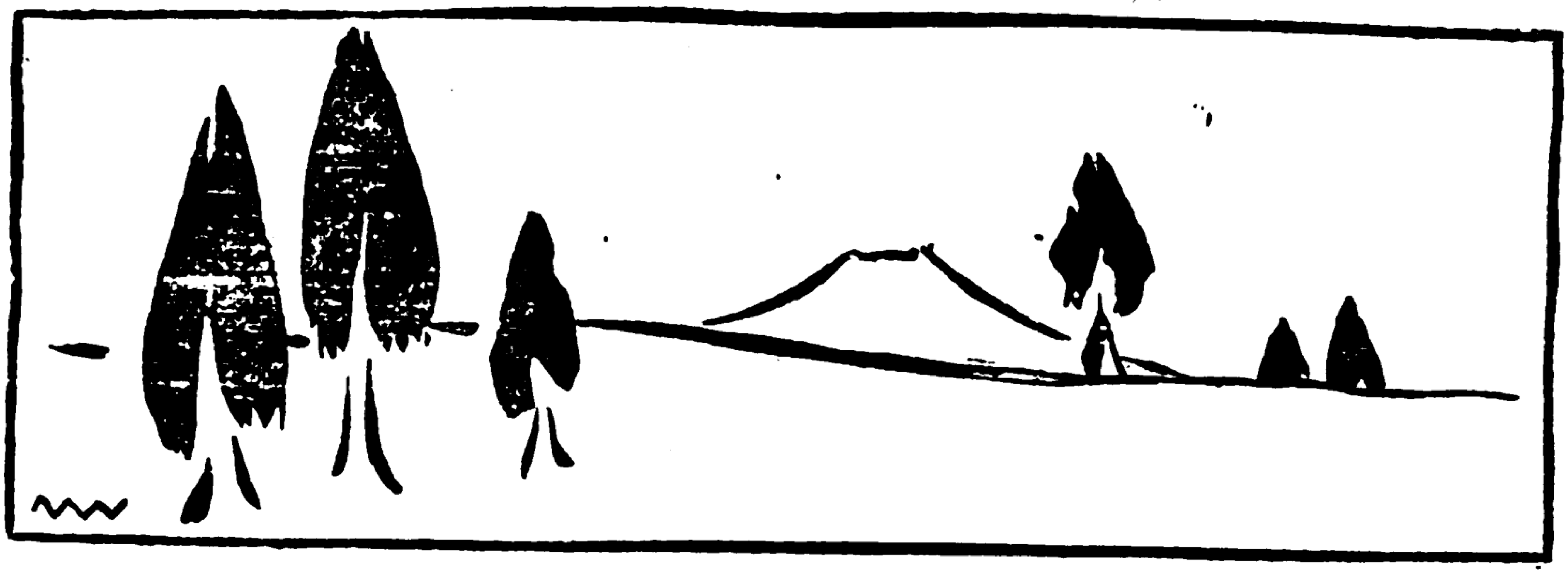
「あれは私の鳩ぢやありませんか。」

女は自分の所有のものを、勝手に男に失はれたことが面白くなかつた。女は男を憎んだ。

「それも夜着のせいだ。」

と男は一と口に云つた。

女の病氣はいつか癒つてゐた。外には春が來て梅が咲いた。そうして一とつの夜着の二人の枕許に朝々又新聞が散らかるやうになつた。



愚かなこと

小川未明

一

森には風があつた。凍つた鈍色の雲が隙間もなく空を張詰てゐた。十二月のある日のことであつて、物憂い冬がこれから先き長くつゞくといふことを思はせる他、落莫たる四邊の景色は、これに對する人の眼に一點の華かな色彩をも投じなかつた。

二人の男は墓場へ通ずる路を歩いてゐた。背の高い方は青年雜誌の編輯をしてゐる北山といつて、彼は前日妻を亡つて悲歎にくれてゐた。肩を並べるやうにして歩いてゐて、脊も低く年若に見える方は、西田といふ大學生であつた。此男は何となく弱さうに見えた。二人とも沈んだ顔付きをして、默つて歩いてゐた。

北山は既に三日三晩といふものは眠らなかつたので、餘程體が疲れてゐた。而

して時々頭の中がづき〳〵と痛んだ。自然と瞼が重く垂れ下つて來るのを覺えた。小さな石に躓いても彼の體は轉倒するに違ひなかつた。けれど彼は心の中で己は彼女の死んだことを空想してゐるのでもなければ、また夢を見てゐるのでもない、全くの事實である。而して、今彼女の屍を埋める墓地を探しに行く途中にあるのだと思つてゐた。而して、其の刹那に、すべての眠氣も、また心の疲れも掻き消されて新しい悲しみが湧いて來た。神經は冴えて來て、意識は常よりも明瞭になるのであつた。かう彼女の姿が眼の中にはつきりと映る上は彼女が生きてゐると少しも變りがない。さう思つて己は思ひあきらめることが出來るだらうと、彼は死といふものを懷しむやうな心にもなるのであつた。

　學生は懊惱としてゐる彼の姿を見ない譯にはいかなかつた。髭の延びた、眼の血走つた黑い外套を着てゐる北山の姿を見ると、いかにも痛々しく感じられた。自分は小說で妻を失つた男の心持を書いたものを見たことがある。其れによつても略ぼ推察の出來ることであるが、實際に於て家庭を持たない者は夫婦の間に繫がる眞の愛情を理解することが出來ない。しかし恐らく自分は一生の間にこの經驗をせずにしまふかも分らない。自分にとつては一日も長く此世に生きてゐることが即ち幸福である。いかなる快樂も、またどんな榮華でも、生其のものより優る筈がないのである。自分は靜かな生を愛する。この靜かな生を愛する故に他人の幸福をも思はなければならない。自分の周圍が皆んな靜かで、平和でありたいものだ。自分は心の上に苦痛と責任とを感ずることなしに、靜かに眼を閉ぢて生を終りたいものだ。かう思ふと西田は今更ながら孤獨といふものが、いかに樂しいものであるかをしみ〳〵と身に感じたやうな氣持がして、覺えず痩せた肩を聳やかした。而して、直ちに並んで歩いてゐる不幸な女の樣

子に眼を向けて、

「さう思ひ給ふな、體に毒だから」と言つて、下を見詰てゐる北山の顏を覗くやうにして慰めたのである。北山は默つて、たゞ頷いた。

曇つた空の下から、ホーイ、ホーイと喘ぐやうな聲の起るのが聞えた。其の聲のする方を見ると幾つも墓が立つてゐる。ちやうど物を言はない、動かない人が立つてゐるやうに、墓石にはいろ〳〵の形があつて、大きのもあれば、小さなのもあつた。其等の頂きからちら〳〵と鍬の頭が見えた。人夫が鍬を振り上げて穴を堀つてゐるのである。

二人は立止つて、しばらく其方を見守つた。同じい日に、他にも死んだ人があると見えると北山は心の中で思つて、涙ぐんだ。二人はまた默つて歩き出した。

寒い風は頻りに吹いて、潤ひ氣のない木立を鳴らしてゐた。濃淡の雲脚が亂れ勝ちに、慌しく墓石の上を駈けて行くのが見えた。

「君、靈魂といふものは不滅なものだらうかね。意識の交換といふやうなものが、死んでからも出來ないものだらうかね」と北山は振向いて、いつしか後れて考へながら歩いて來る西田に問うた。

學生は、妻を亡つた男が愛着の念からこんな質問を出したといふことを知らなかつた。彼は常の如くこの問ひを一種の研究問題として受取り、而してこれに對して自分の考へを述べやうとした。

「死後に尙ほ自覺があるとは信じられません。蠟燭の火を吹き消したやうなものでないでせうか」と言つて、彼は默つて、其の問題に考へ耽つた。

北山は默つて歩いた。彼は怖しくなつた。無目的にこの地上に現はれて來て、また目的も行く先きも告げられずに奪ひ去られてしまふ。眞に生きてゐるといふことは怖しい惡夢を見てゐるやうなものだ。これを深く考へ詰めたら、誰でも發狂せずにはゐられぬだらうと思つた。

けれど二人は互にどんな考へを抱いてゐるか知り合ふことが出來ない。西田は全く反對の思想に耽りつゝ北山の後から歩いてゐた。なんで死といふものが怖しいのだ。人生といふものは生きてゐる間の事實と考へれば其れでいゝのである。而して死の刹那といふものは經驗した者はない。實際に於て死ぬ前に腦神經が麻痺して意識が鈍り、認識が出來なくなつてしまふのである。だから死といふ觀念は各自の思想の中にあつても、誰も實際に於て經驗することが不可能である。誰も死の刹那を知る者がない譯である。死といふことがそんなに怖しいものなら、なぜ眠りといふものを怖れないのであらうか。死も眠りも共に不可抗の事實である。この自然力に抗ふことが即ち人生の悲劇である。この生を煩はされずに靜かに、平和に送る、この上の幸福はないと思はれるのであると西田は日頃の信仰を外界の刺激によつて壞されまいとした。

「死んで行つてからも、もう逢はれないものだらうか」と未練がましく、北山が獨言をしてゐるのが聞えた。これを聞いても、西田には全く異つた世界に住んでゐる人のやうで何の同情も起つて來なかつた。寧ろ先きになつて歩いてゐる北山の黑い外套の裾を風が徒らに飜へしてゐるのを見て、言ひ知れぬ哀れを催ふした。茫然として上を仰ぐと、其處にあつた灰色の雜木林にも西風が吹き付けてゐた。其等の梢の鳴る音にも、風の音にも、たゞすべての自然は無心であるといふことしか感じられなかつた。

北山には周圍に少しの注意を向けるだけの氣力も、また心に餘裕もないやうに見受けられた。彼は人一倍ひよろ高い脊を前に屈めて、下を見詰めて覺束ない足どりで歩いてゐるのであつた。

路の傍には大きな杉の木の林があつた。木の下の土は削り取られたやうに赤色を帶びてゐた。其の低地には五六日前に降つた雨水が處々乾かずに溜つてゐた。何となく薄暗くて其處には日の光りも射さなかつた。

『死ぬと同時にこの肉體が腐れてしまふんだもの、どうして二度と顏を見ることが出來るものかね』と不意に北山は立止つて西田を顧みて言つた。

此時、北山は眼の前に冷酷な涙氣のない自然が漠然として押し付けるやうに迫つてゐたのを見た。かうしてこの自然は自分一人をば苦めてゐるやうな氣持がした。西田は眼敏く不幸な友の心の苦悶を感ずることが出來た。此時、他人を愛するといふことは即ち自分で生きる途だと思つた。彼は何とか言つて少しでも友の苦悶を忘れさせるやうな言葉はないものかとうろたへたのである。

學生は僅かにかう言ひ得たのであつた。

『何等か眼に見えぬ因縁によつて、かうしてこの世界に時を同うして產れて來て、或は親となり、或は子となり、或は妻となり、或は友達となつたからには、また未來幾億年の間に於て、たへず繰り返されつゝある奇しき運命の笯は、いかなる機會で同じ狀態の因緣から、親となり、子となり、妻となり、友達となつて世界の上に現はれて來ないとも限らないと思ひます』と疲れた友の心に理論の上で何等かの滿足を得させやうと欲した。西田に友達の關係ではありながら、自分は年少の處から北川と話しする時

は常にある程度の敬語を用ひたのであつた。其處にこの學生の謹嚴な性格の一面が現はれたのであつた。

西田の言葉に耳を傾けながら、墓場の生垣に添うて歩いてゐた北山は、またしばらく步みを止めて思ひ込んだ。

「さうすると不幸なもの、罪を犯したもの、其等は永遠に其れを繰り返して、其の責苦から脱れることが出來んといふことになるが」と信じられぬものゝ如くに言つた。而して靜かに步き出して、小石に躓いた。

西田も自分の言つたことは一種の詭辯に過ぎなかつたと思つた。而して心にもないことを言つたことを耻ぢた。

「たゞ永遠に二たび見ることが出來ないと思つて、思ひつめると氣でも狂ひさうな氣持になるが、またかうしていつまでも眼の中に、自分の心の中に彼女の姿が宿つてゐると思へば、彼女が生きてゐるも同じだといふやうに考へられて、思ひあきらめることが出來る」と北山は自分に向つて言つてゐるのか、他に向つて言つてゐるのか分らぬやうな言ひ方をして、氣味惡く血の氣の失せた青白い頰に冷たな笑ひを浮べた。

（二）

森で鴉が啼いて、痴人の囈語を嘲笑つてゐた。何處からともなく吹いて來て、何處へともなく吹いて行く風は、人間に向つて考へるといふことも愚かなことだと囁いたのであつた。

此時、北山はふと頭を擡げて、墓場に立つてゐる大きな高い杉の木を見上げた。其の木は黑い簪のや

うに默つて立つてゐて、何となく陰氣に見えたのである。彼は急に眼を下に落して瞳の痛みを癒さうとした。而して心で、あの木は自分が死んでしまつた後までも尚ほ幾十年かこの地上にあの儘の姿で立つてゐるであらう。其れに較べると人間の命といふものは短かいものであると思つたのである。學生は眼を四邊に配つて、いろ〳〵の形をした墓標や、石碑などを見ながら思つた。此の世で虐待を受けた人々が死んで、後から墓を建ててもらつたからとて其の怨みが晴れるだらうか。墓石の形や、其の大きいと小さいとで喜び、また悲しむであらうか。靈魂が不滅であるとしたら、其等の靈魂は永久に何を待ちつゝ其處にかうして留つてゐるであらうか。そんなことを想像することすら出來ない。要するに墓標は尚ほ此の世に生き殘つてゐる遺族等が、死んだ者に對する懺悔として、また罪滅ぼしとして建てた一つの象徴(しるし)に過ぎないのである。死んだ者より、まだ生きてゐる者の方が貴い。死んだ者の靈魂の平和を祈る前に、生きてゐる者の靈魂を惱み、苦しみの中から救ふことが必要であると思つてゐた。

二人は思ひ思ひの空想に耽りながら、いつしか並び合つて共同墓地取締事務所のある方に向つて路を歩いてゐた。

『あゝこれから他へ散歩せずに、妻の墓へお詣りに來ることにしよう』と北山は自身を慰めるやうに言つて、曲つた脊を伸して淋しさうに正面を望んだ。

『皆んなが死んでしまふのだ。悲しむにも足らなければ、喜ぶにも足らない譯である。自分に來た今日の日を靜かに迎へて送るより他に『眞實』の生活について考へることが出來ない』と西田は同じく心で思つて、何氣なく寠れた友の姿を見守つた。而してかうして共に歩いてゐながら、二人の心は別々である

と思ひ、いくら一つにならうと思つても其れは畢竟不可能であると考へて、つく〴〵と人生の孤獨なることを感ぜずにはゐられなかつた。

また、森の方で鴉が啼いた。二人はいつしか共同墓地取締所の小舍の處に來て立つてゐた。其の小舍には四十五六の頭髮の半分白くなつた男が小さな机に向つて控えてゐた。北山は死んだ妻のために墓地を買はうとしていろ〳〵のことを問ひかけた。西田は默つて傍に立つて二人の會話を聞いてゐたのである。而して墓地の番人までが、何處か役人氣取りをして、横柄な物の言ひ方をするのを小癪に思つてゐた。けれども悲哀のために心の傷ついてゐる北山は、何と言はれても其れに對して怒る勇氣もなければ、飽迄自身は下手に出て相手の感情に強いて逆らはぬとしてゐるやうな樣子が見えた。

「一等地と二等地と一坪について幾何程、異ひますでせうか」と北山は震へるやうに、言葉尻を柔げて聞いてゐた。

「まあ、場處を見てゐらしてからでいゝでせう。あなたは何等地になさるお考へなんですか」と男は情(つれ)なく赤黒い顏を此方に向けて、尖つた物の言ひ方をした。

「場處を見る前に、價ひを聞いて置かんければなりませんから」と北山は幾分か言葉に力を入れて睨むやうに相手の顏を見た。

男は漸く體を動かして、前にあつた紙片(かみきれ)を取り上げて、此方に出した。

「これに書いてあるから御覽なさい」と素氣(そつけ)なく言つた。北山と西田は其の定價表の面に見入つた。

此時、北山は心の中で、死んでしまつてからも、矢張こんなやうな種類の人間が監督してゐる處へ來

て横たはらなければならぬのであらうかと思つた。何處か規則だの、手續きだのといふやうな厭はしいもの丶ない自由な人間の手から離れた自然の地といふものがないものであらうか。風の音と、小鳥の聲の他に汚れた人間の出入りしないやうな森がないものであらうか。あまり此世に於て罪を犯しもせずに、比較的美しい渉を見て一生を終つた妻の屍を此處へ運んで來てたゞ一人葬つて置くに忍びないやうな氣持がした。

「まあ埋葬地を見て來やうぢやありませんか」と西田は輕く言つて、茫然としてゐる北山を促したのである。北山は頷いて、氣を取り直した。

「墓地を一つ案内して頂きたいものです」と北山は、此時彼方を向いて机の上で字を書いてゐる男に言つた。

「今、ちよつと案内するものがゐませんのですがな、一等地は西南の隅で、二等地といふのは眞南の處です」と男は頭を上げてさう言つたばかりで、此方を見向きもしなかつた。

「私共は不案内ですから、もう少し親切に敎へて下さいませんか」と西田は稍尙く言つて、小柄な體を二三歩前に乘り出した。

「オイ、埋葬地を案内するんだ」と男はちやうど其處へ入つた來た、常雇ひの穴堀人らしい穢らしい風をした男に眼を止めて命じた。

二人は、其の事務所を出て、穴堀人の後に從いて墓の間の小路を歩いた。

空漠とした場處に出た時、穴堀人は立止つて、二人を振向いて、地面を指しながら、

「こゝが二等地でがす。こゝなら日當りも好うがす」と言つた。其の男の顔色は黒くて、眼に深く落窪んでゐた。

二人は四邊を見廻した。其處には木もなければ、また草の生へてゐるやうな處もなかつた。幾分か濕氣を帶んだ赤土の原であつた。冬の午後の空が物悲しく、地平線の上に垂れ下つて其の下には森や、岡や、建物などを望むことが出來た。風は、この墓場を擴げるために開拓(かいたく)された、赤味を帶んだ原の上を鋭く吹き過ぎた。而して其處には哀れな、まだ日數の經たない卒塔婆や、墓標などが僅かばかり盛り上げられた土の上に立つてゐて、其の周圍には粗末な青竹の垣が出來てゐたのであつた。

「こゝなら何處へ埋めてもいゝんですか」と北山は言つて、見晴(みはらし)の好い、最も土の乾いた處をと眺め廻した。

「いゝえ、この順にしか場處は取れんでがす。それが掟で、順に次から次へといふ風にしか出來んでがす」と穴堀人は言つた。ちやうど其の男の立つてゐる處が、この次にこゝへ葬られる人の場處となつてゐた。隣には最も粗末な垣が廻してある墓があつて、其の墓の前に立てられた花や、樒の葉は既に凋れてゐた。

「この垣根なざあ、御自分でゐらして造つて行かしたのでがす」と穴堀人は眼を其の墓に落して、せゝら笑つてゐた。

「これが二等地なんだね、一等地といふのは何處だね」と北山は言つた。

「さうだ、もう少し木があるとよう御座いますな」と西田は脊の高い北山の後(うしろ)に從いて下を向きながら

歩き出して言つた。先になつて、穴堀人は歩いた。

墓場の間を通つて、この墓地の西南の隅の方へ行つた。其處には大きな木立があつた。奥深いうす暗い杉の森などがあつた。其の直ぐ麓の處に僅かばかり開拓せられた土地があつて、其處だけはやはり際立つて土の色が赤く新しく見えた。而して其の邊は殊に寂然としてゐた。

「こゝでがす」と穴堀人は立止つて、其處を前に望んで指した。

「こゝが一等地なんだね」と北山は言つて眤と眼を見据えた。疲れた視力には一層新しい土の色が無情を語るげに、漠として眼に映つたのであつた。其の土は一層濕り氣を含んでゐた。而して處々に水が溜つてゐた。何の木か知らんが取り殘されて其處に一本立つてゐた。其の木は枯れてゐるやうに見えたけれど、また春になれば芽を萠くのかと思はれた。而して其處は一帶に寂然としてゐて、日がよく當らぬやうに思はれた。彼は穴堀人に對つて、

「大變濕地のようだが、こんな處に埋めたら直に死體が腐つてしまはないだらうか」と言つたのであつた。

穴堀人は、物凄い顔に笑ひを湛へて、大きな聲で言つた。

「水氣のある處は、いつまでも腐るもんぢやごわせんわ、其れやこんな處に埋めたら長く持ちますぜ」

と輕蔑むやうに笑つた。

西田は默つて、森の方を眺めてゐたが、

「こんな日の當らない處が、どうして一地等なんですか」と穴堀人に向き直つて問いた。

「たゞ地の格がいゝつて言んでがす」と男は答へて、其の傍にあつた木の根に腰を下して、煙草を喫し始めた。北山は茫然として、何方にしたものかと考へ惱んでゐた。

此時、西田はふと思ひ出したやうに、北山に向つて、

「まあよくお考へなさいまし、僕はちつと友達の墓にお詣りして來ますから」と言つて、其處から出て行つた。脊の低い制服と制帽姿の黒い影はやがて、幾つか立つてゐる墓の彼方に消えてしまつた。

（三）

右を見ても、左を見ても、同じやうな墓ばかりであつて、西田は容易に友の墓を見出すことが出來なかつた。友が死んでから三年經つた。其の當時を思ひ出すと友の墓の四邊にはまだ空地があつて、友の墓だけが裸になつて立つてゐるやうで、烈しい眞夏の日光が新しい木標を曝らしてゐたのが眼に殘つてゐる。其後、またとお詣りに來る機會がなくしてしまつた。彼は心に其れを濟まないことだと感じて、彼方の墓に衝當り、また此方の墓に衝當つて心當りの處を探したのであつた。

彼は友が結婚して二年と經たずに死んだことを思つた。友の妻君といふのはまだ若く、頰の紅い愛嬌のある女であつたといふことを思つた。彼が友の死を聞いて弔ひに行つた時に、妻君は黒い眼に淚を浮べて笑ひながら迎へたのであつた。其れは既に葬ひが濟んだ後の日であつた。墓地へ來ると高い木の葉は銀の如く光りと風に閃めいて、蟬が鳴いてゐた。墓場は寂寥として沈默の裡に浮き出て見えた。友の墓には赤い花や、白い花や、紫の花などが澤山に立てられてゐた。けれど其れ等の草花は熱さのために生氣なく凋れて頭をぐんなりと垂れてゐた。其等の過ぎ去つた日の光景が眼に浮んで見えた。彼は一つ

一つ墓標を見ながら急ぎ足に墓地をめぐつてゐた。

西田は遂に一つの木の朽ちかゝつた脊の低い墓標を見付け出した。彼は其の前に立つて凝視した。疑ひもなく友の墓であつた。

彼はしばらく其の墓前を去るに忍びなかつた。寒い風は周圍の幹の低い木立を襲つてゐた。彼は瞑目して過ぎ去つた時代のことを回想したのである。頭髮を分けて、眼鏡をかけてゐる友の姿が浮んだ。二人は田舍路を散歩したのである。背景に、夏の赤い夕燒が雜木林の間を染めてゐた。友はかう言つた。

『自分は戀のために、命を捨てても惜しくないよ』と而して、さも心地好さうに笑つた。

其時、自分はこれに對して、

『僕は結婚しないつもりだ。何よりも命が大事だから。たゞ靜かに、孤獨を樂しんで生きてゐる日が一日も長ければ、其れを幸福と考へてゐる』と言つた。

友は頻りに自分の言つたことを反駁したのである。長い、貧しい淋しい生よりも、刹那の充實した生を要求すると叫んだ。友は感情家であつたからだ。

『其の人々の信仰によつてきまることだ』と最後には、二人がかう言ひ合つて議論を止めたのであると西田は考へた。

彼は其の友は、もう此の世界にゐないのだと思つた。友の戀人であつた、あの美しい妻君は何うしたであらうと思つた。彼はこの世の中の煩はしい事柄を考へるのも苦しかつた。矢張自分だけは昔からの信仰を變へずに、靜かな、平和な、孤獨の生活を送つて、限りなき幸福を感ずると同時に、出來得る力

に於て周圍を愛し、彼等が喜ぶのを見て、自分はまた虛心で喜びたいと思つた。而して、生の終る日に自分は何物にも心を惹かされずに、誰にも告げずに、默つて、靜かに無終の眠りに就きたいと思つた。自分は生の緊張者でもない。また刹那主義者でもない。また死の恐怖家でもない。たゞ自分に與へられた生を靜かに味ひ、保護して行く者である。少しでも自分の體に適應した生活を自分の力で出來るだけ選擇して、長く生きるといふ意味で禁欲主義者であるやうに考へた。彼は今後に於て一層深く思索をつゞけて、確とした信仰の上に生活を立て一生の安心を得たいと思つた。けれどもまだ彼は其處此處にあつた多くの墓に眼を向けて、死んだ者をさう容易に忘れるやうな人々は、きつと不幸な彼等が生きてゐる時も情に篤くなかつたといふことが出來ると思つた。

西田は友の墓に向つて、さながら生きてゐる者に對して言ふやうに、

「君の妻君は、時々お詣りに來ますか」と問うたのである。けれど墓は何の答へもなかつた。彼はしみ〴〵と身に冬の夕暮方の寂寞を感じた。帽子を脫つて、墓に向つて頭を下げて、西田は去つたのであつた。

（四）

北山の待つてゐる處に來ると、もはや穴堀人は去つたものと見えて居なかつた。先刻、穴堀人が腰を下して煙草を喫つてゐた木の根に北山が代つて腰をかけて、茫然として暗い顏付きで足許を見詰て鬱ぎ込んでゐるのであつた。

西田は足音靜かに彼の傍に近寄つて、

「甚くお待たせいたしましたね、其れで墓地の方はおきめになりましたか」とやさしく言つてたづねた。

「まだ明日一日間があるから他の共同墓地へも行つて見やうと思ふ。それよりも、今妙なことを思ひ出してゐたんだよ」と北山は顔を上げて土色の笑ひを洩らした。

「どんなことですか」と西田は仔細ありげに感じて、北山の前へ静かに蹲まつた。

寒い風が頭の上を過ぎた。日はだん／＼暮れかゝつてゐた。空の色は雪を含んでゐるやうな雲で掩はれて鼠色と隙間を洩れる物凄い明るさとで、ぐん／＼下界に壓し迫つてゐた。やがて彼等が凱歌を奏する時には、眞暗な夜がすべての物體を包んでしまふ時であつた。而して、彼方の杉林はたへず物悲しさうに、この陰慘たる空の景色を見上げて挽歌をうたつてゐる。

「其れは君が聞くと少しロマンチック過ぎる話かも知れないが、自分は、殊に妻は死ぬまでこのことを氣にして思ひ悩んでゐたのは事實だから……」と北山はこんな前置きをして、著しく神經質に顔色は見えて、唇のあたりが引釣つた。

「どんなことですか、言つて聞かして下さい」と年少の西田は、出來るだけ謹嚴な態度を造つた。

思ひ込んだ調子で、懺悔する時ででもあるやうに、北山は相手の顔を見ずに語つた。

「妻が流產したことを君は知らないだらう。其の兒は男だつた。寒い冬の晩のことで、急に妻が苦しみ出したので、僕は慌て近所の醫者へ驅け付けた。醫者は來て診察するとこれは流產をするのだから專門の婦人科の醫者と產婆を呼んだがいゝと注意して歸つてしまつた。今から五六年前のことで僕は當時職

がなくて困つてゐた。さういゝ醫者を呼ぶ譯にはいかんでやはり近所にゐた醫者を呼んで來た。妻の枕許には醫者と産婆とが付きゝりで手當を盡した。けれど容易に下りなかつた。其れに出血が烈しいので何れも安らかな顏はしなかつた。僕は氣が氣でなくて、かうして呪として見守つてゐることが出來ずに幾たび家の外へ出て暗い空を仰いで神に救ひを心のうちで叫んだか知れない。而して家の中へ入つて見ると、眞白な綿に眞紅な血の染んだのが堆高く電燈の明るく照らす處へニッケル製の圓盤の中に積んである。僕は何うなつたことかと思つてゐた。たゞ醫者と看護婦の力に賴んでゐるより他がなかつた。しかし無事に終ることが出來た。皆ながやつと愁眉を開いたのは眞夜中の一時過ぎであつた。苦しい中から妻は産婆が綿の上に載せた胎兒を見た。而して眼に涙を滿へて僕に顏の輪廓が似てゐると言つた。而して直にまだ彼女は床の中に埋つてしまつた。僕も其時、其の兒を見て一種異樣な氣持がした。醫者はまだ四月未滿であるから屆けるに及ばないと語つた。而して參考のためにこの兒を貰つて行くことが出來ないだらうかと言つた。僕は妻の命を救つてくれた恩人であると思つた。感謝のために其の請ひを拒むことが出來なかつた。而して快く承諾してしまつた。病み疲れてゐる妻は、其れについて何も言ふことが出來なかつた。醫者は其れを決して粗末にしないと言つた。而して産婆と共に歸つたのは午前の二時頃であつた。僕は二人のために車を呼んで來た。暗い夜で、烈しい西風が吹いてゐた。

其の醫者は間もなく其町から居なくなつた。近所の人に聞いて見るとたゞ遠方の故鄕へ歸つたといふ噂であると言つた。而して誰もしつかりしたことを知らなかつた。妻は其の兒のことを言ひ暮らした。なんで醫者になぞやつたらう。其の兒の靈魂はいつまでたつても浮ぶ日がないと言つた。

僕もまた後悔した。途を歩いてゐて、多角形な西洋風の建物の前を歩いて來て、直角に横へ曲がる時分などにふと立止つて思ふことがある。何と乾いた感じだ。あの兒は何處に硝子罎の中に酒精に浸つてゐるだらう。其の硝子罎の上には埃がかゝつてゐる。テーブルの上には他にもいろんな罎が並んでゐる紫色の罎や赤色の罎などがある。また赤黑い劇薬の入つた罎もある。たゞ其等は科學といふものゝ分析的で化合的であるといふとを語つてゐる外、何等のイリユージヨンを混へてゐない。其等は乾いた感しか與へてゐない。其の室には窓がある。窓の硝子戸はやはり拭かないと見えて曇つてゐる。曇つた硝子窓を透して、外の灰色の空や、其の空の下にある陰鬱な木立などが見える。けれど死んだ兒の眼は其れすら見ることが出來ない。こんなことを思ふと僕の頭は重苦しく壓へ付けられるやうな氣持がして、物狂はしくなる。而してダイナマイトでもあつたら、直にこの傍の堅固な石と煉瓦で積み上げられた建物に投げ付けて自分の體も共に、微塵に碎けてしまひたいと思つた。

しかるに其の醫者が二年前、房州の布良で開業をしてゐると聞いたので、直にでも行つて、胎兒を取り返して來やうと思つたのが、つい今まで行かずにしまつたのだ。僕は今、其の子供のことを思ひ出して、妻の生きてゐるうちに取り返して來て案心さしてやればよかつたと思ふ。せめて其れも出來なかつたら、出來るものなら妻の死體と共に其の子供を葬つてやりたいものだと思つてゐたのだ」と北山は言葉を切ると共に深い沈默に陷つた。

「其の醫者は、たしかに布良にゐますか」と西田は顏を上げて友を見ながら言つた。

「僕の友人が現に其の醫者の處へ行つた時に北山さんの子供だといつて、罎の中へ入つた子供を醫者が

示したのを見たさうだ』と北山は力なく答へた。

『僕があなたのかはりに行つて來ます。其の醫者がゐるなら間違ひなく取り戻して來ますから、どうか名刺に其の趣を書いて下さい。遲くとも明夜の中か、明後日の朝葬式に間に合ふやうに歸つて來ます』と西田は決心を顏に見はして言つた。

北山は友の厚意を謝した。而してくれ〴〵も賴んで名刺に其の由を細かく書いて渡した。墓地の中は寂然として、うす暗くなつて來た。

明る日の夜もまた寒い風が吹いた。北山は端然として妻の死體を護つて、友からの消息を待つてゐた。折々風と共に霰の降る氣はひがした。彼は海の上を思ひ、暗い路を思ひ、寒い空氣を思つて西田の身の上を氣遣つた。蠟燭の火は幾たびか消えかゝつた。ちやうど十二時少し過ぎに西田は歸つて來た。彼の體は濕れて、顏の色は靑かつた。彼は直に袂から小さな罐を取り出して、北山に渡しながら言つた。

『これでございますか。醫者は布良から舘山へ移つてゐました。やつと醫者はこの罐を探してくれました』と西田は非常に疲れを感じながら、尙ほ友の喜ぶのを見やうと思つた。

然るに北山は訝かしさうにして、其の小さな罐を電燈の前で透して見てゐた。罐の中には乾固びた赤蛙のやうなものが濁つた酒精に浸つてゐるのであつた。

『こんなに小さくなかつた筈だが、何處に頭があるか、手足があるか分らない』と北山は言ひながら記

憶にある形と現在あるものとを引き合はして、何うしても眼を信じぬもの丶如く溜息を洩らした。其時傍から西田は、

「あなたはイリユージョンに捕へられてゐます。なんでも月日が經てば自然に朽ちて行くものです」と靜かに言つた。

「さうか知らん」と北山は頭を傾げた。

「確かにこれに違ひありませんから、今夜は心を安らかに、お休みなさいまし」と西田は言つた。

彼はかう言ひ殘して、此家から出た。而して二たび、寒い風の如く闇の裡に身を隱した。

―一九一五、二作―

雨もよひ

藤原末雄

青白い晩であつた。

水靄が濃やかに川面を立ちこめて、十五夜の月が、ぼんやり烟つてゐた。機の音も、櫓の音も聞えない。差潮の溢れるやうな氣配がして、唯つた一つ、河船の灯が中洲の河岸ぞひに散りながら、だん／＼遠く薄れてゆく。

溫い川風が柳の香ひを吹いてきた。

お歌は兩國橋の袂に出てきた。瓦斯燈の片かげを辿つて、舗石に差し掛ると、吾妻下駄の音が妙に冴えて、手摺に靠れて水面を覗いてゐた相撲取が慌しく振り向きながらお歌の横顔を詰めてゐた。

お歌は叔母を訪ねようとしてゐた。今朝、珍らしく叔父がやつてきて、叔母が相談したいから、點燈頃にきてくれとの言傳であつた。

すると叔父は思ひ出したやうに、「御芽出度い話だよ」と言ひ添へて、黄ろい齒並をかちりと響かした。もとより其場の冗談に違ひない。いまの身の上で、お歌に縁談のある筈はなかつた。叔母の話したいといふ事も大ていは見當が附いてゐた。日外、初雪の降りだした晩、今のやうに繼母や腹違ひの妹達に意地目られてゐるよりは、いつそ御殿奉公に出たいと零しながら、蛇の目の塵を拂つて、叔母に貸してやつた。思はしい奉公口が見付つたのに違ひない。さう思ふと、華美と榮耀に充ちた御殿の臺所が、お歌の目を掠めて、眩しい電燈の下で、御膳立に忙しい襷姿にはお歌の袖も交ぢつてゐた。

すると誰れかゞ袖に擦れ違つた。お歌は前を見上げると、柿色の囚衣に深編笠の後姿が、とぼ〱舗石を辿つてゆく。その後から髯の濃い巡査が猿廻はしのやうに、後繩を取りながら、ちらりとお歌の横顏を覗いてゆく。お歌は囚人の後姿を見詰めてゐた。若い肉體付で、肩から脊中に掛けて、嚴しく結んだ麻繩が強く後手を括つてゐた。眞白な指先が暗闇に仄めいてゐた。

お歌は瞳を外らしてしまつた。

やがて橋詰に來ると、囚人の後姿は横網河岸にそれて、青白い靄のなかに消えて往つた。お歌は元町から一つ目橋を渡つて、辨天樣の前に出ると、淋しい軒燈の灯影を潜つて、冷たい格子に手をかけた。ふと格子の暗闇に眞白な指先があり〱と浮んでゐた。

叔母は待ち草臥れてゐた。烟管をはたきながら、お歌を長火鉢の前に座はらせると、小さい柄杓で吸子に御湯を差しだした。

「たいへん靄が降りてをりますよ。」

「さうかい。陽氣が溫いから降るかも知れないね。」

「でも星が出てをります。」

お歌は河風に亂れた鬢を搔き上げながら、ちよつと茶の間を見廻はしてみた。叔父の商賣だけに掛物の長い箱や、靑い眞田紐を掛けた陶器の箱が山のやうに置かれて、御燈明の薄れた佛檀のそばには、太夫道中の浮世繪が悟り顏に掛つてゐた。その下には金梨地の鏡箱、卷繪の文箱、螺鈿の硯箱など、古びた調度が埃に塗みれて、古い時代の魂が微かな呼吸を漏らしてゐた。

さて話は繼母の惡口から初まつた。この叔母は亡くなつた母親には眞身の妹だけに、繼母を目の仇にしてゐた。お歌の父親は親切な、思ひやりの深い人であつたが、先年、器量好みで、後妻を迎へてから、禿げ頭をすつかり丸めこまれて、今は人間が違つてしまつた。後妻は娘時分に、隨分、噂の多かつた人で、惚れた男に散々、だまされて目が醒めると、もう戀よりは御金で、とう／＼お歌の繼母になつたとやら……

「先(せん)から隨分、勘定高いんだつたが、此ごろは小金を貯めてるんだつてね。それも好いけれど內所で、ちよい／＼貸してるさうだよ。大店(おほだな)の御內儀さんともあらうものが何んの眞似だね。世間體が惡いぢやないか。」

何時も聞き古るした惡口であつたが、叔母は新しい樂しみのやうに話し出して、お歌も新しい歡びとして、虐げられた胸に受け入れた。それからお歌は近頃、虐待された事柄を數へ立てて、つい先頃から、小間使が長の暇を取つたので、學校の出掛けに、妹の靴を磨いてやつたり、弟の靴の紐まで結んでや…

ことを述べ立てゝから、「こんな輝ですもの……」と叔母の同情を唆るやうに、醜い手先を差しだした。

叔母は凝つとお歌の指先を見詰めてゐたが、

「お前さんは姉さんぢやないか。自分の靴なら自分で磨いたら好ささうなものに……お前さんが素直だから附け上がるのだよ。」

と口惜しさうに眉を顰めてゐた。併し何にもかゝ繼母の指金で言付けに背けば、跡の祟りが怖しかつた。お歌は昨日の朝、盗人の濡れ衣まで着せられた行きさつを話しだした。

學校の出掛けに妹の紙入が見えなくなつてしまつた。お妹はお歌に預けたと言ひ張つたが、お歌は紙入を手にした覺えもなかつた。すると繼母が思ひ當つたやうに、

「金錢ばかりは兄弟でも他人だからね。」

と毒々しい言葉を並べて、お歌の横顔を見詰めてゐた。併し紙入は讀本の間から出てきた。

「それぢや、お前さんも居憎い筈さ……」

と叔母は疊の表を見詰めてゐた。

二人は肖像のやうに默つてゐた。掛時計が物憂げに響きだして、「人生」の傍觀者らしい顔付をしながら、憐れな叔母と姪とを見下ろしてゐた。惡口を言ひ立てた樂しさに、叔母は肝心の用談を忘れてしまつたやうであつたが、薄黄ろい横顔に、ふと新し味がさしてきた。

「ねえ。好い養女の口があるんだが、お前さんは往かないかい。」

「………………」

お歌には返辭の出來ない程、心の底が動いた。詳しい話は斯うであつた。此處の家主は二三年前まで兜町で腕利きの相場師であつたが、頭腦と享樂の過勞から、俄かに歿くなつてしまつた、あとには美しい後家さんが獨りぼつちで殘つてゐた。この後家さんは人形を弄ぶほど若くはなかつたし、過去を愛するほど年は取つてゐなかつた。それに一生、安樂に暮らせるほどの財產が、人手に渡るのを喞ち顏に、跡取りを待つてゐた。それゆゑ夫婦養子をしたいと考へて、先づ養女の方から探してゐるが、好い口が有つたら世話を賴むと、この間、家賃を取りにきたとき、後家さんが叔母に言つたさうであつた。それに親類から世話されると、とかく義理にからむから、赤の他人に口を利いて貰ひたいことも言ひ添へた。

「死んだ旦那が、水商賣だから、若しもの事があると、跡に殘つたものが可哀相だと仰有つて、地面や家作を買ひ込んで置いたのが、今は大した値になつてね。なんでも銀座や本石町には地面があるし、此處は地面と家作だし、月々、默つてゐても三百圓は上つてくるからね。こんな好い口は、またと有りやしない。養女になつて御覽、どんな旦那樣でも貰らへるよ。」

と叔母は憖醒めた顏に微笑を浮べた。その次には後家さんの批評に移つた。流石は相場師の御內儀さんだけに萬事、意氣好みで、家賃を集めに來るときには、何時も、りうとした身裝をして、深幌の俥を乘りつけた。そのうへ大さう話好きで、時には朝早くから晝近くまで話し込んで、供待ちの俥屋が日向ぼつこをしながら、生欠伸を嚙み殺してゐた。後家さんは芝居と音樂が大好きで、狂言の替り目毎には出掛

けるし、邦樂の演奏會にも缺かしたことはなかつた。それに大へんな凝り屋で、髮飾りは毎日老舗の飾窓を覗き込んで、新しい物と換へてゐた。着物は決して三越から買はなかつた。

「御金があるから、こんな眞似が出來るのさ。子供は有るぢやなし、閑だからね。」

叔母は悟つたやうに言つてゐた。後家さんは、もと大家の御嬢さんだけに何處かに品が備はつて、金放れの奇麗なせゐか、惡口を言ふ人はなかつた。唯だ機嫌買の氣性だけが、無さがなかの缺點であつた。併し素直なお歌のことだから、きつと可愛がられるに違ひないと、叔母は見込をつけてゐた。

「まあ、棚から、ぼた餅といふ風だが、正直掛直なしの處だよ。この叔母さんが、お氣の毒だと思つてゐたから、こんな好い口を見付けて上げたのさ。」

何時か叔母の顏には、親切を賣物にする誇が潜んでゐた。

お歌の心が輕くなつてきた。今まで押し付けてゐた重石が俄かに取り除かれて、ちやうど牢屋の高窓から黎明の光が匂ふやうに眞暗な魂の片隅に、光がさしてきた。お歌は運命の曙に佇んでゐるかと思ふほど、眼や頰に爽やかな潤ひがして、心のなかゝ、ほの〴〵と明るくなつてきた。さうすると、唇の筋が動いて、唇から笑ひが零れた。

「お前さんは承知だらうね、こんな好い口は、またと無いから……」

「私は好う御座んすが、皆さんが……」

「そりや大丈夫だよ。叔父さん始め、私が附いてるから、親船へ乘つた氣でおゐでよ。それに些し譯があるから、承知せずには居られまい。」

と叔母は事も無げに答へて、その譯を話しだした。お歌の家は數年前から失敗續きで、流石、元祿から買り込んだ老舗も、今は、だん／＼左前になつてきた。もう地面、家作も、すつかり抵當に這入つてゐた。それゆゑ繼母が何んと言ひ立てゝも、結局、資産家へお歌を養女にやるのは、何かの時に都合が好いから、この縁組は承知しない譯には往くまいと叔母は當推量をやつてゐた。

「あの店も、二重抵當に這入つたから、今年一杯が關の山さ。」

お歌は、ふと心細い氣がした。そのとき勝手元の障子があいて、「御待遠さま」と若い聲が聞えた。叔母は障子をあけて、臺所へ出て往つた。それから御膳棚あけて、暗闇で何やら探してゐた。瀨戸物の音が響く……

お歌は凝つと考へてゐた。家の身代が動きだして、あの家藏が抵當に這入つてゐるとは夢にも知らなかつた。さういふ場合に養女となつて、自分一人が、安樂な身の上になるのは、人の惡い仕打のやうにも思はれた。

軈て叔母は臺所の暗闇から御鮨の皿を運んできた。片手には下地注ぎと小皿を持つてゐた。

「お前さんが、來るから、先刻から、そいつて置いたのだよ。此處らには、美味しいのはないが、まあ口よごしに澤山とおあがり……」

叔母が番茶を焙じだすと、芳しい香ひが、御鮨のかをりと交ぢつてゐた。」お歌には叔母の親切が、泌み／＼嬉しかつた。あの小さい丸髷や、骨立つた黄ろい顏を見ると、心のなかで手を合はせたいほど御禮が言ひたかつた。さうして言ひ知らぬ涙が目に溜つて、電燈が霞んで見えだした。

もう夜が更けてきた。流石、片町だけに四邊が森として、按摩の笛が淋しい音色を遠くに殘してゐた。二人は御鮨を喰べだした。言葉のない沈默が流れた。あんまり色々の惡口を喋舌つたせゐか、口の筋が草臥れて、二人とも默つたまゝ、御鮨を口にして、「時間」と一緒に喰べてゐた。

すると叔母は俄か手を拍つて、

「さう〳〵、お前さんに上げるものが有つたつけ……」

と言ひ棄てゝ立ち上ると、佛檀の障子を開けた。暗闇から手さぐりで探しだしたのは小さい寫眞であつた。

「この間、簞笥の抽斗を片付けたら此んな寫眞が出てきたよ。これがお前さんの阿母さんさ。覺えておゐでかね。八つのときに死別れたのだから、克くは覺えてゐまい。」

と叔母は説明を加へてから穢れた寫眞をお歌の手に渡したが、それは古臭い寫眞で、長らく抽斗の底に埋れてゐた潤ひと、果敢さが潜んでゐた。お歌は寫眞を手にして、凝つと見詰めてゐた。これが亡くなつた母親の寫眞かと思ふと、言ひ知らぬ懷しさが心に泌み渡つて、添乳の温みが肌えに甦つてきた。併し此まで記憶の片隅に隱れてゐた。母親の面影とは、すつかり違つてゐた。母親の娘盛りに撮したものに違ない。昔の娘風俗、——今から見れば可笑しいほど古風な流行が烈しい世間の推移を見せてゐた。それに母親は卑しい藝人の娘で標緻の好かつたせゐか、仲働に上がると、父親、——その頃は若旦那、——の寵を受けて、とう〳〵お歌を生んでしまつた。お歌は母親の昔話は知つてゐたが、その顏立は疾うに忘れてしまつた。寫眞には、すつかり星が置いて、面影は薄れてしまつたが、母親の非だけは胸に

殘つて暗い宿命が母と娘とを縛ばりつけてゐた。

「あの人の寫眞は此れ一枚きりさ。當時は寫眞が珍しくつて、大へん流行つたものだよ。だが姉さんは寫眞を寫すと壽命が縮まると言つて、これきりしきや寫さなかつたが、それでも早死をしたから人の壽命なんて解りやしない。」

と叔母は悟りきつた顏をしてゐた。

するとお歌の手から寫眞を取つて、叔母は凝つて見詰めてゐたが、

「私も阿婆さんになつたものさ……」

と昔懷しげに言つて、なか〳〵寫眞を離さなかつた。

それから一時間ばかり無駄話をして、お歌が叔母の家を出たのは九時過ぎであつた。もう霧がすつかり晴れて、蒼白い月の光が片町に冴えてゐた。

幸福は翼の生えた旅人で、人には近かないと誰れやらが言つたが、果報はお歌の手を取つて、暗闇から引きだして呉れた。叔母の骨折りで、お歌は養女になつてしまつた。いくら老舖の總領娘でも、繼母を親にしてゐた悲しさには、着のみ着のまゝで、養母の手許に引取られていつた。それには名ばかりの祝儀があつた許りで、親類にも出入の者にも、正式には知らせなかつた。費用の嵩むせゐだと陰口が言つてゐた。

お歌は牢屋から出るやうな顏をして、野末の小鳥みたいに、新しい塒へ飛んでいつた。併し着馴れた

着物を脱ぎ棄てる殘り惜しさと、新しい寢部屋に睡むる怖しさを感じない譯には往かなかつた。養母は滋々とお歌の顔を見た。目鼻立は尋常であつたが、髮の赤いのが缺點で養母は疵物をつかまされたやうな顔をしてゐたが、さりとて取り換る譯にも往かなかつた。併し養母は、大そう、さばけた、優しい人で、

「お前のお聟さんには何んな人が好いだらう。商人が好いか、それとも勤人が好いかね。」

と冗談を言ひ立てゝ、お歌を困まらせてゐた。その度毎に、お歌は耳許まで赤くしながら、ちらりと母親を見ると、年より若い、美しい人であつた。殊に相場師のお内儀さんだけに萬事意氣好みで、澁い焦茶の半襟に黑襦子の襟を掛けて、瑞々しい丸髷に結つてゐた。かういふ美しい母親を持つたのが、お歌には嬉しかつた。

「お前さん見たいな野暮ぢや仕樣がないね。これが私の娘で候と人中へ出せないぢやないか。」

と養母は着物の着こなし、衣紋の拔き方、帶の締め方まで手を取るやうに敎へて、ちやうど植木屋のやうに鋏を手にして、お歌の枝ぶりを整へようとしてゐた。お歌も人形のやうに養母の言葉に隨つて、右と言へば右を向いてゐたが、養母に取つては、お歌を仕込むのが唯つた一つの樂しみらしかつた。養母は毎日芳町へ髮を結ひに往つたが、その歸りは美しい髮飾りを買つてきた。着物のことは言ふまでもなかつた。併し養母は、わざ〱芳町から下梳(したずき)の髮結を呼びよせゝ、桃割や島田に結はせながら、

「ねえ、何時になつたら、此の赤毛が直りませう……」

と訊くと、

「水油さへ御附けになれば直きなをります……」

と髪結は梳櫛の手をやめた。

「お前さんも、早く綺麗になつて、私と一緒に歩けるやうにならなくつちや往けないよ。」

と養母は鏡臺を覗き込んでゐた。

かくて十七の年は暮れていつた。

初めこそ意氣好みの衣裳は、身體に附かなかつたが、だん〳〵着榮えがして、お歌は意氣な下町娘になつてきた。あの養母も繪筆を置いた畫家のやうに、お歌の娘振りに見とれてゐた。もう近所の人に見せて批評を仰ぐ時がきた。養母は此れまでに仕込み上げた苦勞を述べ立てゝ近所の誰れ彼れにお歌を見せてやつた。誰れも嘆美の眼を見張つて、

「まあ、お美しいこと……これぢや何處へお出しになつても、貴方の娘さんと見えますわ。」

と讃めると、養母の方が目元を細くしてゐた。お歌は馬市の駿馬が毛並を讃められやうに茫んやり俯向いてゐた。あの髮の毛も誰れやらの式部みたいに何時か濡羽のやうに光つてきた。養母は、お歌の袖を手にして着物のことや、髮飾りのことまで喋舌つてゐた。

「いつたい、お幾つで居らしやいますの。」

かう訊かれると養母は口を噤んだ。さうして掛時計から時間を見るやうな眼付をして、

「十八になりました。」

と言ひながら、凝つとお歌の横顏に瞳を見据えてゐた。

けれどもお歌は溫室の花であつた。何處か娘らしい心持が缺けてゐた。そのうへ日影の花みたいに何

時も俯向いてゐた。それが養母には物足りなかつた。

「お前さんは素直で好いけれど些つとも曲がないね。よつぽど元の阿母さんに意地目られてゐたのだね。さあ、私は何とも言はないから、たまには駄々もこねて御覧な……」

と養母は、もどかしげに言つてゐた。此度は、お歌の身體に若い心を吹き込む筈であつた。

お歌は野山の小鳥みたいに自由の身であつた。朝日が枕許に射しだす頃まで寐てゐても、小言をいふ人はなかつたし、部屋の掃除も、床の揚げ下ろしも、ちやんと女中のお雪がやつて呉れた。近ごろは用がなくつて困まることさへあつた。ちやうど御殿に召し出された中間女(はしため)のやうに、お歌は、きよろ〳〵しながら新しい生活を見詰めてゐた。三日置きに貸本屋が新しい小説を持つてきた。お歌は窓際で活字の紙に眼を曝してゐると、何時か晴れ渡つた空に午砲(どん)が鳴り響く。彼女は殘り惜しげに本を置くと、頭の中が掻き亂れて、妙に胸が躍つてゐた。午後から養母と連れ立つて、芳町の髪結に往くのが常であつた。

時には人形町の角で若い男が流眼(ながしめ)を使つてゐた。時には御稽古歸りの姐さん達が、ぢつとお歌の後姿を見送つてゐた。

「お前さんも綺麗になつたと見えて往來の人が振り向くぢやないか……。」

と養母は嬉しげに笑つてゐた。

ある日、養母と歌舞伎に往つたことがあつた。何やらの連中があつた日で、七間中が大した人ごみであつたが、ふと高土間から向ふを見ると、繼母と妹が平土間の片隅で小さくなつてゐたお歌は日頃の仇(かたき)を取つたやうに胸もとが精々した。それから運動場の廊下で養母に出逢つたときには、態と輕く挨拶を

してやつた。養母は何んとも言はずに、通り過ぎようとした。すると隣の御新造がお歌の顔を見詰めて、

「まあ、お久振りですこと……別にお變りも御座いませんか。ほんとに美しくおなりですから、つひお見それ申して濟みません……」

と鄭寧に頭を低げた。お歌は孔雀のやうに、兩袖を擴げて晴着の模樣を見せてやりたかつた。それから厠の歸りに手を洗ひながら前の鏡を見ると、藝者らしい姿が映つてゐた。自分の姿とは思へないほど美しかつた。さうして隣土間の藝者より自分の方が美しいと思つた。着物も立派だと思つた。それが本當に嬉しかつた。

さて諸方から縁談の申し込みは絕えなかつた。養母は長し短かしと言ひ立てゝ急に聟取りをする心組は見えなかつた。これだけ磨きをかけてやつたお歌を、むざ〳〵人に遣り度くはないらしかつた。ある日養母の留守に本所の叔母が寫眞を持つてきて、

「こりや資産家の若旦那なのだよ。今は神田の大學校で法律を勉强して居らしやるが、來年は御卒業だから、お前さんは何うだね。學問は御出來になるし辛抱人だから、お前さんの氣に入るよ。」

と叔母はこの男の品行を讃めてゐた。

お歌は寫眞を手にしてみた。二た目と見られない田舍者で身持の好いのも無理はなかつた。お歌は叔母に見縊られた氣がして、何時までも昔を忘れない叔母の心持が却つて、腹立しかつた。

「お前さんさへ承知なら、私が先方へ掛合つて見よう。」

と飽くまで世話好きな叔母は、自分一人で乘氣になつてゐた。お歌は生返辭をしてゐたが、叔母が歸ると、寫眞は郵便で送り返してしまつた。その日は、いちんち心持が惡かつた。

いつか夏になつてしまつた。お歌の浴衣姿から若い身體の香ひが零れて、心の中が熱んできた。二階の窓から夕映の空を眺めて、簾垂れのかげに、ぼんやり立つてゐた。若い人達は二階を見上げて「吉田御殿だ」と惡口を言つてゐた。するとお歌は嫋やかな片手で靑簾垂れを捲き上げた。

そのうち秋風が吹きだした。ある糠雨の日であつた。お歌は近所の小間物屋から歸つてくると、玄關には見馴れない男下駄が脫ぎ棄てゝあつた。お歌は不審に思つた。茶の間では若い男の話聲がしてゐた好奇心はお歌の手を取つて襖をあけてしまつた。誰も顏を見合はした。養母と火鉢を挾んだ若い男はお歌を凝つと見詰めた。

「これが私の娘だよ。この方は增吉さんと仰有つて良人の可愛がつた方さ。」

「お初にお目に掛りまして……」

お歌は挨拶をしながら横目で增吉を見ると、大そう凝つた身裝をして、細い指先に金口の卷煙草を挾んでゐたが、俄かに居据まひを正して、丁寧に挨拶をして吳れた。

「それぢや、お聟さんを探してお居でゞすね。好いのを御世話致しませうか。何んなら私ぢや何うでせう。隨分、御役に立ちますぜ……」

「冗談お言ひでないよ。」

と養母は嗜めるやうに言つてから、お歌の方を振り向いて、

「ねえ、私は一緒に往けないから、今の內、お湯へ往つておいで……明日、髮結さんへ往くから、序

に髪も洗つておいでな。」

と言つた。お歌は素直であつた。「御免遊ばせ」と言ひながら増吉の横を通つて、火鉢の抽斗を開けるとぱつと乾いた香ひが飛び散つた。鬱金の財布から、お湯錢を出して仕舞際に、抽斗の奥を覗くと菖蒲(あやめ)の丹(たん)と雨の滓(かす)が古びてゐた。

お歌はお雪を連れて家を出掛けた。道々、歩きながらも頭には澤山の考が入り亂れてゐた。お歌は髮を洗ひながら増吉のことを考へた。増吉の顔立も思ひ出して見たが容色(きりやう)を讃められなかつたのが何んとなく物足りなかつた。それから養母の若いことも考へると、妙な疑惑が胸を衝いて、うまく御湯へ追ひ出されてしまつた心持もしてきた。

御湯から出ると、何時か本降りになつてゐた。

お歌は蛇の目を半開きにして、俯向きながら待合の角を曲がると、柳がさら〳〵傘に當つた。

「もうお上がりですか。」

と若い聲がして蛇の目の裾から増吉の顔が笑つてゐた。

「もうお歸りでゐらしやいますの……」

「えゝ、いくら貴方を待つとゐてもお歸りがありませんから、歸つた處です。御湯上りは格別ですな。さつきは岡惚れしましたが、かうなると本惚れですよ。」

と増吉の笑顔から白い齒並が露れた。

「あら御冗談ばかり……」

とお歌は顔を赤めて増吉を見ると、花車な白い指先が傘の柄を握つてゐた。ふと手持無沒汰の沈默

續いた。そばにはお雪が立つてゐた。二人は殘り惜しげに袖と袂を分つてしまつた。お歌は家へ這入りしなに振り返ると、增吉の後姿は御屋敷の黑板塀へ附いて大川端へ出ていつた。お歌は、茶の間へ這入つて、今しがた增吉と出逢つたことを話すと、

「あの人は道樂者で女垂らしだから、氣をつけなくちや往けないよ、これから、ちよい〳〵來るかも知れないが逢はないでお居でよ。」

と養母は眉を顰めてゐた。增吉は、もと大家の若旦那で、高商を卒業する年から道樂の味を覺えて、とう〳〵勘當の身となつてしまつた。今は大坂の株式界にゐるさうであつた。

併し增吉はあれきり來なかつた。

また冬がきた。さうして何時か年の暮になつてしまつた。車へ乘つて地代へ家賃を集めに往つた養母が歸つてくると

「お前の御叔母さんも餘つぽど蟲が好いよ。もう三月も家賃を溜めて洒亞〳〵してるのだからね。お前を世話した骨折賃と差引く積なのだらう。何にも、たつてお前さんを貰ひたいと言つたのぢやあるまいし……うまく買込んでいつたのだよ。矢つぱし道具屋の御内儀さんは違つたものさ。」

と嘲つてゐた。

お歌は嫌やな氣持がした。叔母こそ亡くなつた母親の妹で、養母の世話をしたのも叔母であつた。たつて望まれた身でないと思ふと、見下げられた氣がして、甘く買付けられたかと思ふと、腹立しい氣もした。ふと實家が抵當に這入つてゐて、去年中、持ち越せないと云つた叔母の言葉が思ひだした。この間、俥で家の前を通ると、昔に優さる繁昌であつた。お歌は叔母の心を考へて見た。さうして蟻のやう

に何處へ往つても甘い汁を吸ひたがる人間の心が淺ましかつた。

「昨日」は「今日」を連れてきて、「今日」は「明日」を殘してゆくと、また新しい年が來てしまつた。掛暦が新しく取り代へられても、人々は同じ寢室に睡り、相變らずの顔をしながら、いつもの食卓で、喰べ馴れた箸を取つてゐた。お歌の心は長く座はつた膝頭のように痺れてきた。

「今年は厄年だから氣をお附けよ。お聟さんは來年のことにしよう……」

と養母は繰り返してゐた。

また媚めかしい春がきた。ある暮方、お歌は二階の窓に佇んで茫んやり四邊を眺めてゐた。青々と晴れ渡つた空が薄く霞んで、大川の彼方には夕燒が殘つてゐた。緑の水、青い柳、花見船のどんちやん騷ぎがお歌の目に浮ぶと、肉體が餓えて心が渇いてきた。春の呼吸めいた生溫い、そよ風が頬を撫でゝ、土藏の大家根から宵月が、ほんのり眉を見せてゐた。お歌は洗ひ髮の裾を手にしてふと、嚙んでみた、髮のなかにも春の香ひが溢れてゐた。

あたりは森として階下からに時計の音が響いてゐた。お歌は其音を聞くことが出來なかつた。いくら耳を塞いでも時間の速いこと、生命の亡びやすいことが胸に浮んだ。あの時計を止めても時間は立つてゆく。彼女は初めて生れること、死ぬことも考へて見た。また今のこと、行末のことも考へたが、己れの醜い過去には瞳を注ぐことが出來なかつた。もうお歌は遠い明るみは見えても足許の見えない女であつた。すると何にもかも夢のやうに思はれて、此れまで生きてゐた氣持がしなかつた。お歌は額に手を當てゝ生き甲斐のある月日が送りたいと考へた。

夕闇は何時かお歌の淋しい姿を包んで、障子の棧が一小間づゝ薄暗くなつてきた。何んとなく、遣瀨

ない悲しみが胸にしみて、心の底が攪はれてゆくやうな氣がして言ひ知らぬ涙が涌いてきた。ふと障子の薄闇を見詰めると、眞白な細い指先が目に浮んだ。

彼女はぞつとした。いくら目を脊向けても目を潰つても、あの細い指先が瞳の奥に刻まれてゐた。

お歌は初めて昔の身の上を考へてゐた。すると今の幸福が身に副はない晴れ着のやうな氣がして、軈て誰かに剝ぎ取られる宿命の冷めたさが身に泌みてきた。彼女は怖しい運命の豫感からぞつと身振ひをして、心の底が締めつけられると、思はず知らず涙が頬に流れてきた。

併し別段のこともなかつた藤棚の色づく頃、あの增吉がやつてきた。こんどは京染の半襟をお歌の御土產に持つてきた。さうして養母と一時間ほど密談をしてから、歸つて往つた。お歌は怖しいやうな、懷しいやうな顏付をして二階の窓から增吉の後姿を見送つてゐた。それから階下へ往くと、

「あの人は道樂者で女たらしだから氣をつけなくつちや可けないよ。若し來たら隱れておいで……」

と養母は同じ言葉を繰り返してゐた。

その翌る日も增吉がやつてきた。階下からは密談の低い聲が聞えて、何處となく秘密の香ひが高かつた。お歌は養母の年若なことを考へると、妙な疑惑が胸を掠めて、差し向ひの長火鉢まで、ありありと目に浮ぶと、俄かに心が躍つてきた。重苦しい心持——胸許に蓋をされたやうな氣がして、動悸激しく打てば、打つほど身體中の血潮が煮え返つた。嫉妬と不安と好奇心が三つ巴に入れ亂れてお歌はもう居ても立つても堪らなかつた。何うしたことだらう、喉が乾いて頰邊が火のやうに火照ると、唇がぴくぴく動いてきた。お歌は立ち上つた。さうして階子の手摺に靠れて、階下を覗きながら立聞の耳を澄ました。凝つと息をこらすと冷汗が腋下からにじんできた。柱の掛鏡に眞赤な顏が映つてゐた。

「今は娘のあゝ身分だからね。なか〳〵物入りが掛るもの……」

「そりや知つてゐますが、このくらゐは出して戴けると思つて實は彼地から歸つてきたのです。さうして戴けば私も赤い着物も着ないで濟みますから……」

お歌はほつと胸を撫ぜ下ろした。動悸が靜まると冷汗が額から流れ出して、もう立聞の耳を澄ますことが出來ないほど、心が緩んでしまつた。養母を疑つた自分の心が恥しかつた。

程なく増吉は悄れて歸つて往つた。その後姿が妙にお歌の心に殘つてゐた。少し許りのお金なら出してやれば好いのにとお歌は考へて、養母の心が解らなかつた。お歌は増吉に赤い着物は着せたくなかつた。その晩、お歌は土産に貰らつた半襟を長襦袢に掛けてしまつた。

その翌日も増吉はやつてきた。お歌は、はら〳〵しながら昨日の通りに立聞をしてゐたが、話は例の押問答であつた。併し折角自分の手に落ちてきた物を見す〳〵奪はれるやうな不安を禁ずることが出來なかつた。夕方、増吉は青ざめた顏をして、俯向きながら門から出て往つた。日外、兩國橋の上で擦違つた四人の後姿が、鮮かに思ひ出された。

翌朝は小雨が降つてゐた。朝早くから養母が二階にやつて來た。

「お晝から増吉が來るかも知らないが、きたら居りませんと言つて歸してお呉れ。一寸遠くへ往きましたから夜遲く歸つてきますつて……好いかい、何にも言はずにお歸しよ。」

と言ひ棄てゝ行先も告げずに養母は出て往つた。

それと入れ違ひに増吉が這入つてきた。養母の出掛けたことを告げると大そう落膽して、ねつく行先を訊いてゐたが、眞青な顏をして溜息をついてゐた。ふと増吉の目はお歌の襟許におちた。

「おや、私の上げた半襟を掛けてゐらつしやいますね。」

「え丶、此間から掛けましたの…… 似合まして……」

「大へん克く似合ますね。掛けて下さるから、本當に嬉しい……」

顔を見合はして二人はにつこり笑つた。青ざめた眼許から邪惡の瞳が光つた。

それから何う言ふことがあつたか著者は知らない。古びた掛鏡も微笑を漏してゐた。併しお歌に取つては眞の幸福が黄金の沓を穿いてやつてきた。彼女は泌み／＼其日が嬉しかつた。けれどもお歌の胸には溝が堀られたやうに、冷たい素振を見せて養母を袖にしてゐるかと思はれた。お歌は唯だ二階の窓に靠れて考へてゐた。時には恍惚として溜息を吐いてゐた。ある晩、お歌は狂女のやうに、うなされて目が醒めると、おい／＼泣いてゐた。時には魂が痒いやうに胸を掻きむしつてゐだ。養母が心配して、

「お前さん、何處か惡いのかい。惡るきや御醫者様に見てお貰ひな……」

「…………」

お歌は返辭もしなかつた。養母は凝つと播卷を覗き込むと、

「阿母さん、蒼蠅つてよ。」

と劍も、ほろ／＼の挨拶をして、寢返りをしてしまつた。養母は取り付く島が無かつた。唯だ小頸を傾けながら、眉を顰めてゐたが、あれきり増吉の來ないのも不審であつた。

翌る日は雨もよひの空であつた。午後から生温い風が吹き募つて、妙に頭が重苦しかつた。それに手足が火照つて身體の遣り場のないほど嫌やな心持がした。皮膚には脂汗が溜まつて、砂埃で口の中が、ざら／＼してゐた。窓の障子が破れるほど砂が吹き付けて、瓦家根の雑草が低く靡いた樋ぎはに、黒雲

の切れ目から眞黄ろな日光が射してゐた。

「地震でもありなりさうな日だね。これから出掛けてくるよ。おとなしく留守番をしておいで……」

と養母は俥に乘つて、地代や家賃を集めに往つた。それから二時間ほど立つて養母は歸つてきた。

「大へんな風だね。心持が惡くつてお湯へ這入らなきや居られやしない。お雪を連れて、一風呂あびてくるから此れを預けておくよ。」

と養母は懷から紙入を出してお歌の枕許に置いた。その中には家賃や地代が這入つてゐた。それから養母は帶を解きだして、平生着に着かへると、お雪を連れて、菖蒲湯に出掛けた。

夕闇から若い肉體（からだ）の香がしてゐた。衣桁のそばにはお歌の平生着（ふだんぎ）が脱ぎ棄てゝあつた。何處を探してもお歌の姿は見えなかつた。箪笥の錠はあいて、つひ此間拵へた御召の袷と目星しい晴着がなくなつてゐた。それに鏡臺の抽斗にも金銀の髮飾りは見當らなかつた。

「まあ、どうしたのだらう……」

と養母は狐に捻まれ顏をして寢床に手をやると、もう溫味はなかつた。ふと枕許の火鉢を見ると、「八雲」の吸掛が灰のなかに殘つてゐた。それに吸口が濡れてゐた。留守にきた人も解つた。元よりお歌に預けておいた重い財布は見つからなかつた。

お歌を唆かした男の顏が養母の眼に浮んだ。

その晩、本所の叔母も駈けつけた。實家の父親も迷惑さうな顏をしてやつてきた。五月雨の音を聞きながら燈火（ともしび）を圍んで人々は肅めやかに話してゐた。

「お歌が惡いのぢやありません。まつたく男が惡るいのです。唯だあんなに可愛がつてやりましただけ心根が憎らしう御座いますわ。私が訴へますればお歌に赤い着物を着せられます。そんな慘いことをしたて始まりませんから、私の不運だと思つて諦めませう。こんな不都合を仕出來かした女を娘にしては置けませんし、もう、どうせ疵物になつてをりませうから、早速離縁を願ひます。」

と養母は、手切金として盜れた金の償却を求めなかつた。人々は寬大な處置に感謝の意を表した。

翌朝、叔母が神田の宿屋からお歌を連れてきた。もう男は居なかつた。お歌ばかりが途方にくれて泣いてゐた。男は現金と金銀の髮飾りを攫つて妻子の待ち暮らす大坂へ夜明けに立つてしまつた。

お歌は二年振りで實家に歸つてきた。惡い夢から醒めた子供のやうに、四邊をきよろ〳〵見廻はして茫んやり溜息を洩らしてゐた。絕えず、あの夜のことが思ひ出された。歎々で疵物にされた後悔が暗い胸を襲ふと、お歌は物狂はしく啜り泣いてゐた。もう幸福の盡き果てた奴隷娘は默つて朝から晩まで働いてゐた。

家の人々はアフリカの豪狗みたいに、お歌の死骸を貪つて骨まで齧らうとしてゐた。「泥坊姉さん」と言はれると、お歌は熱い淚をぼろ〳〵零しながら、妹の靴を磨いて、紐まで結んでやつた。

「懲役に往つたことを考へて御覽、便所の掃除位は愚かなことさ。」

と繼母に言はれるのと、お歌は小さい箒を手にし馬尻を重さうに下げて、厠の格子をあけた。さうして小さい障子に拂塵を掛けながら、雨もよひの空を凝つと見詰めてゐた。(完)



失はれた指環

中村星湖

　四月の或日曜日の朝、たね子は伯母の家を訪問しようと思ひ立つて、いつもより念入れに髪を結つたり、湯を使つたり、お化粧したりした。近頃流行るやうに廂をまん中で分けてみたが、毛癖が悪るいので、ともすれば入れ毛がはみ出すのをひどく氣にして、着物を着換へた後でも、しきりに鏡を覗いてゐたが、それも何うか斯うか思ひ通りに行くと、彼女はやうやう安心して鏡台の抽斗から青い天鵞絨張りの、脊が圓くて底の四角な、玩具のやうに可愛い感じのする指環のサックを取出した。

　掛け金を外すと、サックはまつ白い素絹の口を開けた。が中は空であつた。彼女はいくらかハッとしたが、つい入れ忘れてそこらに落ちてゐるであらうと思つて、サックのあつた抽斗ぢうを探してみた、屋賃の通帳だの、乳屋の受取だの、臙脂猪口の殻だの、簪の折れなどを掻き廻した。けれども、あの柔かい

光を持つた金指環は影も無かつた。彼女は更に別の抽斗を引出してみた。そこにも無かつた。よくうつかりそこに脱ぎ棄てゝ置いた覺えもあつたので、鏡台の上板に眼をやると、黑柿の板屑に塵がうす白く溜つて、それに指跡が付いてゐるのに氣付いたゞけであつた。

彼女は今度は、小供の弄具や何かの小物がゴタクサと載せてある箪笥の上を探しはじめた。

「何處へやつたんだらう？」

彼は眉をひそめながら、不安な調子でさう獨りごちた。そしてあそこゝと心當りを引掻き廻しながら、此前には、何日何處へ行く時にあれを穿めたかを考へた。

四五日前に、彼女は幼兒を子守に脊負はせ、自分では大きい方の兒の手を曳いて、郷里の女學校で一緒であつた友達の家を訪ねたのであつた。その時彼女は、いつものやうに、友達の身なりと自分の身なりとを比較したり、友達の小供と自分の小供とを比較したりしたが、いつ見ても友達は同じ水晶の指環しか穿めてゐない事を思つて、自分の金指環を誇るやうな氣持がした。半年程前にあの指環をやつとの思ひで夫に買つて貰つた當座は、他所から歸つて來ると直ぐとサックに收めて抽斗の奥深く、大切にしまふのが習慣であつたが、何時とはなくずるくなつて、あれを穿めたまゝ台所で馬鈴薯の皮を剝いたり、米を研いだりした。手にまつはる薯の皮と一緒に眺めても、白水や米粒の中に眺めても、あの指環は心地よい光を放つてゐた。けれども、此前友達の家から歸つて來た時には、彼女はそんな事をしたのではなかつた。その時は、もう夕暮ではあつたが、すつかり夕飯の仕度をして出懸けたつたので、台所へは行かずに、たゞ幼兒が火の付いたやうに泣き立てるので、着物を着換へる暇もなく、子守の脊中か

ら引下ろして乳を含ませた。乳を呑ませてしまふと、指環はたしかに、坐つた儘手を伸ばして床の間の端へ載せた。

さう思ひ付いた時には、彼女は脊を屈めて簞笥の側の床の間に眼を走らせた。けれども指環はそこにも見えなかつた。そこにもやはりゴタクサと置いてある針箱だの、たゝう紙だの、弄具の鐵砲や洋刀の間で、たまたまそれらしい物があつたと思ふと、弄具の環の壞れなどであつた。

彼女は泣き出したいやうな氣持がして來た。書物などばかり讀んでゐて、收入のすくない、妻や子供を着飾らせる氣などはすこしもない夫に厭味を言つたり、すねて見せたりして、やつとの思ひで買つて貰つて、やれ嬉しやと大切に〳〵、或時は子供などよりも可愛く秘藏してゐた、外に掛け代へとてはないあれを、自分の不注意から失くなしてしまつたとすると、夫にも申譯ないが、彼女は第一に自分の氣が濟まなかつた。

――こんな手近へ置いたんぢや、子供が弄具にして庭へでも棄てたかも知れない。それとも子守が、掃除の時、ちよいと盜んで隱してしまつたのかも知れない。

探しあぐんだ彼女はさう思ひ付くと、お化粧をする間遠ざけた子守や子供に訊いてみようと門口まで駈け出した。

幼兒を抱いた子守と上の子とは前の廣場で近所の子供達と騷いでゐた。

「お鶴」と彼女は聲高に呼んだ。『新作を連れてちよいとおいで……早くおいでつたら。』

子守は吃驚した顏付でこちらを眺めたが、片手で幼兒を抱き、も一つの手で遊びに興じてゐる上の子

を曳いて來ようとするので歩みが捗取らなかつた。

「お前私の指環を知つてない？」とたね子は格子戸から首を突出して言つた。でも、あたりを憚るやうに聲を低くして。

「いゝえ、存じませんですよ」とお鶴はそこに立止まつて、睫毛の長い眼をパチ／＼させた。

「そんな所にぐづ／＼してゐないで早くお入りよゥ」とたね子は甲高く叫んだ。彼女の顔は赤く火照つてゐた。やがて低聲になつて「新作、お前はママさんの指環を知らない？ソラ、ママさんがお指へ穿めるピカ／＼光る物よ。」

さう言つて彼女は、殆んど無意識に、右手の拇指と食指とで左手の無名指を抑へて見せた。

「うゝん、僕知らない」と土間まで子守に曳かれて入つて來た男の子は不思議さうな顔をして答へた。女の子のやうに白金巾の前垂を掛けさせて置いたのが、ところ／＼土で汚れてゐた。

「お鶴お前もほんとに知らない？」とたね子は重ねて息をはづませて言つた。「……知らなきや仕方ないが、上へのぼつてすこし探してみておくれよ。」

子守から離れた幼兒が乳を欲しがるのを突き轉がすやうにして、たね子は子守と一緒にまた床の間を探しはじめた。

「お前は見なかつたかね？　澁谷さんへ行つて來た日、私はたしかに此所へ脱いで載せて置いといた積りだけれど……それとも、あの日途中で……いゝえ、そんなわけはない。」

彼女はそんな事を諄く言ひながら、座敷から茶の間を、茶の間から台所を、台所から更に塵埃溜や庭

の隅々まで尋ね歩いた。

「お前が掃除をする時、何かチリンと音がしたやうな覺えか、光る物が轉んで行つた覺えは無いのかねえ?」

「いゝ……え。」

「お前はいつも座敷の塵埃を何方へ掃き出すのえ?」

「いつもお庭の方へ……」

「目付けてくれると褒美を出すわ。」

「………………」

主從二人はそんな事を言ひながらしきりにあちこちと眼を晒した。

簞笥の裏からは古雜誌が出て來たり、櫛が出て來たり、たね子がいつぞや夫の机から盜み出した女名前の手紙が出て來たりした。疊の間からは五厘銅貨が出て來たり、留針が出て來たりした。竈のかげには鼠の糞があつた。塵埃箱には小供の古靴が入つてゐたり、魚の骨が入つてゐたり、蕪の切株に青々とした新芽が生えてゐたりした。庭には椿の花の紅いのや黑ずんだのが落ちてゐたり、若草が柔かく萠えてゐたりした。緣の下には石油鑵だの硝子の破片だのがあつた。乾いた土に丸く穴を堀つて犬の寢たらしい跡には茶色や白の毛が落ちてゐた。けれども、あの、脊は菱形を幾つもつないで中高に、腹は薄く狹まつてゐる金の指環は見えなかつた。

「何處へ行つたんだらうねえ、ほんとに!」

もう探してみようもなくなると、たね子は腹立たさしと悲しさとで餘程取逆上せて、矢鱈に頑是ない小供などに訊ねてゐたが、たうとう二階にゐる夫の許へ登つて行つた。

「私ほんとに濟まない事をしました」と彼女は指環の事を話してから、「あなたは御覽なさらなかつたでせうか？……ひとつ、違つた眼で探して下さいませんか？」と嘆願した。

「あんな小さな物を、矢鱈そこらに轉がして置けば、失くなるにはきまつてるぢやないか」と夫はにべなく言つた。いつも仕事の忙しい時には怒つたやうな顔をしてゐる夫が、今朝は一層不快な顔付を見せて、「お前はいつだつてさうだ」と言はんばかりの調子だつたので、彼女は取付き端もなくちよつと默り込んだが、「でも誰にだつてうつかり忘れるといふ事はあるぢやありませんか、一緒に探してみて下さいな」と言ふと、夫は澁々卓子から離れて梯子を降りた。

夫に續いて降りようとして、彼女はふと西の窓から、隣の家の植込の櫻が暖かい日光の下に咲盛つて、僅かな風にもヒラ〳〵と散るのを見た。向ふの坂上の泥灰色の教會の尖塔と並んで天を指してゐる銀杏の老木の梢々は大刷毛を逆に揮つたやうに淺緑の芽を吹いてゐた。

折角の好い日曜をこんな事の爲めに台なしにしてしまふのを、彼女は此上もなく悲しく思つた。

「此所へ置いた？……それも確かぢやあるまい……さうハッキリ覺えてゐる位ゐなら直ぐにしまひさうなものぢやないか」と夫は床の間の前に立つて言つた。

「しまはなくてはならないと思ひながら、ちよいと用事に起つとそれぎり忘れちまつたのですよ。……ほんとに私はなぜかうでせう」とたね子は詫びた。

『庭の隅まで探して無いんなら、おれが見てみようもない』と言つて夫は眼鏡を掛けた顔を傾けて考へてゐたが、『失なしたら失なしたで仕方がない。探し物つてものは探す時には意地惡く出て來ないものだよ。そのうちに思ひ掛けない時に出て來るかも知れない。出て來なかつたらまた買ふさ。大した金目の物でもない。』

さう言はれると、たね子の心はいくらか落着いたが、それでも、すつかり諦めるわけには行かなかつた。またも子供を捕へて『新作、ママさんのピカピカを知つてないの？　お指へ穿める物を』と諄く訊ねた。

子守は幼兒を脊中へくゝり付けて、台所でゴトゴト音を立てながら何事かを働いてゐた。

——ひよつとすると、あれが盜つたんぢやないか？　先刻も子守と一緒に探した時、ふと、彼女の頭を過ぎたその考がまた起こつた。賢こげではあるが、いつも默り勝ちで、變な目付で人を見る癖のあるあの子が‥‥けれども、それは殆んどいはれのない疑ひであるとも思つた。

『ぼんやり考へてゐたつて、仕方がない』と夫は言つた。『それより折角仕度したんだからサッサと出懸けたら好いぢやないか？　早く行かないと、今日あたりは伯母さんも花見にでも出懸けるかも知れないよ。』

『えゝ』と言つたきりで、たね子は暫くやはり指環の事ばかり考へてゐたが、『ぢや行つて參ります。小供を連れて行かうと思ひましたが、こんな縁起の惡い日には途中でどんな事があるかも知れないから、二人共置いて行きますよ。そして私は用事だけ濟ませば直に歸るつもりですが、小供に氣を付けてやつ

て下さいまし。お鶴・吩附けて置きましたけれど、赤ちやんが泣くやうでしたら牛乳が取つてありますから。」

「うむ、うむ」と夫は承知したのかしないのか解らぬやうな返事をして二階へ登つてしまつた。

たね子は思ひ切つて、獨りで出ようとしたが、上の子が後を追ふので、とう〳〵それを連れて行く事にした。

小供には綠色ラシャのソットハットを冠らせて、すこし暑からうとは思つたが純白の毛織マントを羽織らせ、彼女自身は琥珀のパラソルを翳して、模樣のある空氣草履を穿いた。その草履は最早流行遲れになつてゐたが、天氣の好い日の外出には彼女が好んで穿く物であつた。陽炎が立つて花の散りかゝる横町を靜かに歩いて行くと、小供もさも嬉しげであつたが、彼女ものんびりした氣持になつた。けれども、傘の柄を握つた指に光る物の無いのが、何時になく佗しい事に思はれた。こんな時には、娘の時から持つてゐた安物の指環を新らしいのが出來た嬉し紛れに他人に遣つたりしなければよかつたとも考へた。

電車に乘ると、彼女は乘り合はせた女達の手元にちよい〳〵眼をやつた。指環を穿めてゐるのもあり、穿めてゐないのもあつた。が、男でも、すこし氣の利いたものは、眞贋は別として、黃金色に光るのを穿めてゐるのを見ると、返す〳〵も失なした指環が惜しかつた。

彼女はふつと氣を變へて、夫が「そんなに金目の物でもないからまた買ふさ」と言つた言葉を考へた。

實際、失なしたあゝはそれ程高價の品ではなかつた。『でも、もし伯母さんに訊かれたら、私五十圓出しましたつて言つてやりますよ……五十圓ではほんとにしないでせうか、ぢや三十圓……』などゝ夫と話して笑つた事があつた。

――また買はうと思へば買へない事もない、と自分を慰めるやうに考へたが、失なした物は大した物でなくても、失なしたといふ事その事が彼女には殘念で〳〵堪らなかつた。

うつかりしてゐて、もすこしで乘合を間違へようとしたりして、彼女は下町の伯母の家に着いた。小供は皆遊びに出たと言つて伯母は上の娘と二人で留守居をしてゐた。伯母は夫に取つての伯母なので、彼女とは何所か他人行儀の所があつた。正午前に歸るつもりであつたのが、用事は後廻しにしていろ〳〵と世間話などをしてゐるうちに、晝飯を馳走になつて、その上また二三時間を喋り過ごした。

伯母は年も取つてゐたし、家に居る時の習慣で、隨分見苦しい服裝をしてゐたが、指には亡い伯父の紀念だと言つて、幅廣の、ずん胴切りの金無垢の指環を穿めてゐた。

『伯母さんのやうなあんな年増でさへ金を穿めてゐるではありませんか？』

たね子は、失なしたあれを夫にねだつて買つて貰ふまでには、幾度その言葉を繰返して夫に叱られたか知れなかつた。『他人の眞似をしなくたつて好いぢやないか？　お前はほんとに馬鹿で仕方がない。田舍女！』などゝ。

彼女は伯母が自分の素手に氣付きはしないかと恐れたり、もし氣付かれて訊ねられたら今朝の事を話して、殘念で堪らない自分の心持を慰めて貰はうと思つたりした。が、自分から話し出すのは餘りに恥

ずかしい事だと考へた。

伯母はしきりに小供を育てる事のむつかしい話や、暮向きの話などをした。

たね子が歸らうとした時、伯母は『けふは小供等がゐないのでほんとに淸々しましたよ。お送りしながら甲武線の花でも見ませう』と言つて、羽織などを着かへた。

靑く澱んでゐる外濠の水に夕陽がさして、それに櫻の花片の散り込むのが、この世の物ではないやうに美くしくたね子の眼に映つた。彼女は、市內電車より大きくて廣い車室の、腰掛けも靑と黑との細かい縞の天鵞絨でふつくりと張つてあるのに身を任せて、この儘何處までも何處までも行つてみたかつた。すべての乘合ひの人々が善人のやうに見えた。すべての物が、人々も、木々も、花片も、空も、太陽も一緒になつて笑つてゐるやうな氣がした。

『外濠線で通つても此所は好い所ですが、甲武線はまた格別ですよ』と伯母は一と掴みにしたやうな無造作な束髮頭を電車の震動でかすかに搖すらせながら眼縁や口もとに皺を深めて言つた。『伯父さんの生きてゐる時分には、私は始終家にばかりゐたものだから、東京のうちにもこんな所があるつて事はつい知らずに過ごしましたよ。』

『ほんとに今日は飛んだ儲け物を致しました』と言つて、たね子も心から嬉しいといふ笑みを張り切つてゐる頰に漂はせた。

『もつと行きませう、もつと……まだお日さんがあるぢやありませんか？』と伯母にもすゝめられ、自分の心もすゝむまゝに、家に殘して來た子を氣にしながらも、たね子はうかうかと新宿の大停車場まで

行つてしまつた。

そこから伯母は同じ道を引返し、たね子は市内電車に移つて大迂廻をして彼女の家へ歸つて來た。その時には日長の春の日も、さすがにもう暮れかゝつて、冷たい風が襟を撫でた。

『只今、……伯母さんと一緒に外濠のお花見などしたものだから大變遲くなりました』と二階に聲を掛けてから、彼女は茶の間に入つた。そしてむづがつてゐる幼兒を子守の脊から卸して、直ぐに乳房を含ませた。

『今夜のお總菜は？』とお鶴は言葉短かに訊いた。

『さうね。……面倒だから、お前ちよつと下の魚屋へ行つてみて來ておくれ、まだお刺身にするやうな物があるか何うだか。』

そんな事を吩付けると、お鶴はなにがしかの錢を摑んで臺所口から出て行つた。暮れかゝつたとはいへ、まだ四邊に明るさが殘つてゐて、電燈を點す程でもない茶の間にだらしなく坐つて、片手では幼兒を抱き片手では伯母の許から貰つて來たお茶菓子の紙包を開いて上の子に與へたりしながら、たね子はホッとした氣持になつてゐた。すると、ふと、失なつた指環の事が浮かんで來た。

――ほんとに何うしたんだらうねえ！　まさか、あの子が盜つたわけはあるまいが……ひよつとすると、あんな眞面目さうな顏はしてゐても、うちがあの手紙のやり取りなどしてゐる女に贈つてやつたのでは……私には隱して手巾などを贈らうとした人だから……

彼女はそんな風に、子守や夫を疑ひはじめた。そして或事を思ひ付くと、急に幼兒を乳房から引放し

て、床の間のある座敷へ入つて行つた。そこは外の建物の具合や内の壁の具合などで妙に暗くなつてゐた。

彼女は玄關の三疊との界になつてゐる襖を引開けて薄ら明りを導いた、そして更に押入の襖をも開けた。男の子は直ぐうしろへ跟いて來て『ママさん何するの？』と言つた。彼女は默つて、頭をも押入へ突込むやうにして片手を差伸べて、古葛籠の向ふから汚い風呂敷包を引出した。それはお鶴の所有品一切を藏つてある包で、結び目を解くと、洗ひ晒しの單衣だの、前垂だの、片襟だの、何かわけの解らぬ幾つかの紙包だのが出て來た。彼女はそれ等の紙包をも一々開けてみた。羽織の紐や根掛けやが現はれたが、一つからはお彈きに使ふ貝殼の大きなのが十ばかり現れた。そんなにして、着物は袂の中まで、手箱のやうな物は倒さに振うてまで調べたが、彼女の思ふ品は出て來なかつた。あの指環は。

その時、ギシ〳〵と梯子の鳴る音がしたので、彼女はあわてゝ、そこに散らばつた物を包み直さうとしたが、降りて來たのは夫であつたと氣付くと手を放して『ちよつとこれを御覧なさいまし』と言つて貝殼に指差しゝた。

『何だい？』と言つて夫は近づいたが、外からの光を遮るので、體をすこし側に寄せて脊を屈めた。

『これはあなたが四國へ旅行なすつた時』とたね子はかすかに笑ひながら言つた。『土佐の濱で買つたとかつて、あの札箱の中へ入れていらしつた貝殼ですよ。皆盜ると解ると思つたとみえて、大きいのだけ盜つた所は何うです。』

『お鶴がかい？』

「えゝ。」

「そこはまだ子供だなあ……ハア、お前また指環の詮議を始めたんだね。指環はまさかあの子が盗つたんぢやあるまい。」

「この中にはありませんが、でも何時の間にこんな事をするのですから、油断は出來ませんよ。」

「無いと決つたら早く元のやうに包み直して置いておやり。調べられたと思ふと、あれでなか〳〵神經質だから厭な氣がするだらう。……さうだなあ、おれは自分で忘れてしまつたが、四國遍路をやつてからもう滿二年になる。ちやうど、今頃だつた。いや三月の末から始めたのだから、もすこし早かつたか。しかし、あちらは氣候が早いから、東京の五月頃のやうに思はれた。その貝は室戸崎の近所で買つたんだよ。降るともなく靜かに雨の降る日だつた。道ばたの臺の上に一と盛り五厘と立札をして、色々の美くしい小貝を澤山に入れた鮑の大貝が幾つも並べてあつた。草鞋だの草餅だのが、やはり同じ樣に置きつ放しにしてあつて、番人なんか居やしない。あちらは人情が質朴なんだね。旅人だつて、さうして置かれると只で盗つて行く奴なんかありやしない。中にはそんな奴があつたとしても、置いとく方は平氣なんだね。……アヽ思ひ出しても好い氣持だ。花も所々に咲き殘つてゐた。松原は續いてゐる。海は際涯もなく展がつてゐる……」

仕事が思ふやうに捗取りでもしたのか、いつにない上機嫌で、夫は狹い、暗い部屋のうちを、癖で兩手を背後に組んで、あちらこちらと歩き廻つた。たね子もお鶴の包を包み直しながら、夫の感興に滿ちた言葉に連れられて、今ある世界とは違つた世界を覗くやう氣がしたが、お鶴が台所口の障子を開けた

らしい音に驚かされて、包を元の所へ投げ込むやうにして、襖をぴつたり引寄せた。

調べてみれば、去年、彼女の郷里と同じ村からお鶴が始めて出て來た時に着てゐた古羽織の外は、すべてたね子が心付けて遣つた品であつた。あれだけがあの年若い奉公人の身上だと思ふと憐れにもいじらしくもなつたが、つまらぬ物ではあつても主人の紀念品をあれが盗んだ事を彼女は快く思はなかつた。指環も、事によると、あれが隠したではないか、といふ疑ひはますます強くなつた。

そのあくる日もやはり晴れてゐた。たね子は張板やバケツを裏庭に廻して、そこで白手拭を姉様冠りにしてせつせと張り物をしてゐた。白く熱した日光はまだところどころに花を見せてゐる二三本のたけ高い椿の青黒い葉かげを漏れて、彼女が張つて行く濕つた平らな布地に吸ひ込まれるやうに思はれた。子守のお鶴はすこし猫脊のやうな恰好をして縁側に腰掛けて小供の遊び對手になつてゐた。ピチイ、ピチイ、ピイピイピイ……と何處かで四十雀の鳴く聲が聞えたり、バサリと葉を掠めると同時のやうにボトンと重く椿の花の落ちる音もした。

――まあ靜かだ！　と思ふたね子の心の底から、またも指環の事が浮かんで來た。

彼女は張物の手を止めて手拭の下からそつとしかし注意深くお鶴の樣子を窺つた。腰のあたりが去年來た時よりは餘程肥つたやうに見えた。細面で色は白いが、鼻の恰好の惡いのと上唇の厚いのとが卑しい感じを與へた。その唇を尖らすやうに結んで、お鶴は幼兒を抱いたまゝすこし横向きになつて、新作

が色鉛筆で手帳へ電車か何かを描いてゐるのを眺めてゐた。

『お鶴、お前はほんとにあの指環を知らない？』とたね子はだしぬけに言つた。

お鶴は喫驚したやうにこちらを見た。

『指環ですか』とお鶴は言ひかけて睨むやうな眼つきをしてから『いゝえ』と言つた。

『ほんとに何處へ行つたんだらうねえ』とたね子は今度は獨り言のやうに言つて、またピタピタと張物を續けた。

『ソオラ、これが富士山で、これがトンネルで……』と新作が誇らしげに叫び出したと殆んど同時に、

『指環ッてば、奥さん、面白い事があるですよ』とお鶴が言つた。

『え、どんな事が？』とたね子は、屈めてゐた脊を急に起こした。

『昨夜、寢ながら思ひ出して』とお鶴は續けた『直ぐお話しゝようと思つたけれど、寢て起きるとすつかり忘れてしまつて……』

『馬鹿な子だねえ、早く話してしまへば好いぢやないか』とたね子はすこし急いて言つた。お鶴の話す事がてつきり自分の指環の事だと思つたので。

『でも、もう二三年前の事ですもの』とお鶴はすこし笑ひながら言つた。『ソラ、湖水がひどくふゑて、方々の家が水の中へ入つた事がありましたね。……あの前の年の事です。夏になると、よく皆が信濃屋の背戸へ泳ぎに行きましたつけ……』

『あゝ』とたね子は答へたが、——なあんだ、そんな事か、と思つて、今度は別の板へピタピタと張り

はじめた。

「新居のお吉ちやんがあそこで泳いでゐるうちに深い所へおつこちてしまつたのですつて。さうすると、信濃屋へ避暑に來てゐた女異人が、岩の上で見てゐて、いきなり飛び込んで引上げてくれたのですつて。着物のまんまで……」

「へーえ」と言つてたね子は仕事の手を止めた。「さうしてその子は助かつたの？」

「えゝ」とお鶴は勢ひよく續けた。「助かるにや助かつたけれど、その女異人が穿めてゐた指環が、お吉ちやんの體を摑まへるハズミに水の中へ落ちたのですつて。……そりやあ大變お金の掛つた指環だからつて、色々に探してみたけれど、何うしても解らなくて、しまひにはね、探し出した者には百圓くれるといふ事になつたものだから、泳ぎや水潜りの上手な大人が幾日もかゝつて探したですけれど、あそこは岩と岩の間のやうな變な所だからとう／＼解らずじまひでした。」

たね子はいつかお鶴の話に氣を取られてうつとりとした眼つきをしてゐた。もう幾年も歸らない故郷（ふるさと）の、時としては漣も立たずにとろりとする湖水の景色が浮かんで來た。松かげの、小鳥の糞などの白くかゝつた熔岩の出鼻に立つて、短かい釣竿で、姉と一緒に釣りをしてゐると、小さな魚が限りもなく釣れた事なども思ひ出された。

たね子が氣乘りのしない返事をするので、お鶴は話を切つた。お鶴が默つてしまふと、たね子は我に返つた。

「それで、その指環はとう／＼出なかつたの？」

「出ましたけれど。その時には何うしても見付からなかつたさうです」とお鶴は幼兒を膝の上で搖すりながら續けた。『異人の夫婦は——お吉ちやんを助けた女異人は御亭主や小供と一緒に來てゐたのですがね、お吉ちやんのせいにそんな大切な指環を失なしてゐながら、それからといふものは大變お吉ちやんを可愛がつて、新らしく着物を拵へてくれるやら、散歩に一緒に連れ歩くやらしましてね、その來年の夏になると、また避暑に行くから何日何時は村のはづれまで迎へに出ておくれ、反物を送つたからそれを仕立てゝ着てツて手紙をよこして置いて、その日になると横濱から自働車でやつて來て、阿爺つあんと一緒に出迎へに行つたお吉ちやんを見付けると、女異人がまつ先に飛び降りて來て、お吉ちやんを抱き締めたり背めるやうな事をしたりしてから、自働車に一緒に乘せて、プウ／＼と笛だか何だかを鳴らして一と飛びに信濃屋まで飛んで行つたですつて。」

『お前見てゞもゐたの？　よく詳しく知つてゐるぢやないか』とたね子は笑顔で言つた。

『でも』とお鶴も笑つた。『お吉ちやんの阿爺つあんが、こりやあ異人に娘を取られるぢやないかと心配したつて、よく誰とでも手眞似までして話してゐました……』

『姐や、自働車がプウプウつて言つたの？』とお伽噺にでも聞き惚れてゐる風に縁側にちやんと畏まつてゐた新作は急に口を挾んだ。

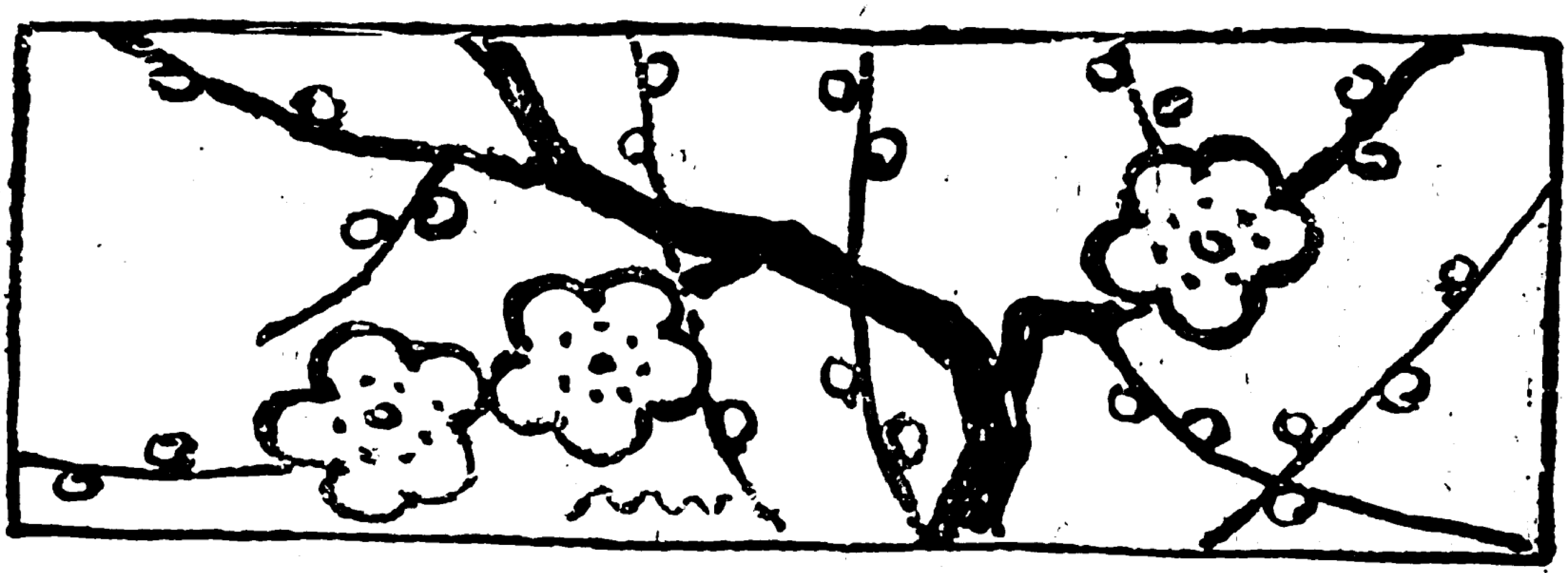
『それでお吉ッて子は何うして？』とたね子は訊ねた。

『今でも家にゐるでせうよ』とお鶴が答へた。『標緻も好えが、運も好え子だつて皆が言ひました。生命を助けられたばかりでなく、まるで見ず知らずの外國の人なんかにそんなに可愛がられて……』

「ほんとだねえ！」と言つてたね子は、その外國人夫婦のすがた形や心持を想像した。「その西洋人はお金持にはお金持だらうけれど……」

「二度目に來た時には雨がひどくて、急に湖水がふえて、信濃屋なんか島のやうになつたものだから、その異人さん達は間もなく歸つちまつたさうですがね。あの年は方々の家が水へ入つて隨分の騷ぎでしたよ。……さうすると、工事が始まつて、うちの阿爺つあんや兄さんなんか毎日仕事に行きました。去年私がこちらへ來るすこし前に疏水の穴が出來上がつて、いち時に水が流れ出したものだから、船着き場はずつと下の方になるし、信濃屋のうしろの泳ぎ場なんかは、から〳〵に乾いてしまつたですよ。さうすると、新田に雛つて馬鹿のやうな子がありますね……あれがあそこらで遊んでゐると、沙の中から指輪が出て來たつてわけですね。こびり着いてゐる土を落してみると、ピカピカ光つて、ちよつと高くなつた所に綺麗の玉が穿まつてゐたさうですよ。それはいつか女異人が落した物に相違ないからつて誰かゞ勸めて信濃屋へ持たせてやりますとね、「兎に角預つて置くべえ、もし今年もあの異人さんが來たら、十兩位ゐは出すだらう」てて机の抽斗へ抛り込んださうです……」

いつになく氣輕に話し續けるお鶴の話に耳を傾けて、たね子はホッと上氣したやうな顏をして佇んでゐた。（をはり）



創造

谷崎潤一郎

一

「兄さん今日は。久し振りで伺ひましたがちよいとお目に懸つて行きたいんです。此處をあけてもよくつて?」

「誰だ、綾子か。まあ這入るがいゝ。ほんたうに久し振りだな。」

「えゝ、實は宿と一緒に北の方へ旅行に行つて昨日歸つたばかりですの。それにしても東京はすつかり春になりましたわね。」

「さうさ、もう三月の半ばだからなあ。」

「此の暖いのによく兄さんは斯うやつて、部屋の四方を締め切つて、ぢつとして居らつしやるのね。そんなに仕事がおありになるの。」

「うん、ない事もないよ。」

「だつて別段働いて居らつしやる様子はないぢやありませんか。」

「働く前に先づ考へて居るのさ。仕事はしないでも、兎に角かうしてアトリエの中に立て籠つて考へて居れば、そのうちには素晴らしい思想が浮ぶだらうと思つて居るのさ。實は今、お前の這入つて來るちよいと前、少し思想が浮かびかけた所なんだ。」

「どんな思想なの？」

「どんな思想つて、さう簡單には云はれないよ。まあそのうちに立派な藝術にして見せるから、氣を長くして待つて居るがいゝ。何しろ仕事が大計劃だから、大分手間がかゝりさうだ。」

「しかしほんたうに結構ですわね。此の四五年間あなたがさつぱり製作を發表なさらないもんだから、世間ではもう川端も時勢に後れて老耄してしまつたんだなんて云つて居ますわ。あたしは兄さんの惡口を聞く度び毎に、何だか口惜しくつて仕様がなかつたわ。」

「馬鹿だなお前は。世間の奴等が何と云つても己を信用して居れば口惜しがるには及ばないぢやないか。己はまだ三十六だぞ。今から耄碌して溜るもんか。――けれども事に依つたら、お前もやつぱり世間の奴等と同じやうに己を理解する力がないかも知れないな。其れも此れも、いよ〳〵己の藝術を作り上げて見れば判る事なんだ。」

「兄さんがさう仰つしやるくらゐなんだから、それは餘程自信のある、非常な傑作なのでせうね。」

「まあ今迄の日本には嘗て現れた事のない傑作のつもりだ。己の拵へたものが日本一の創作になるだらうと思つて居るんだ。己の今度の藝術はほんたうの意味でのクリエエションなんだ。」

「でも西洋の藝術にはかなはないんですか。」

「己がどんなものをクリエエトしても、とても西洋人にはかなはないよ。日本人は當分の間、到底藝術を以て西洋人に打ち勝つ事は出來ないと云ふ、己は堅固な迷信を持つて居る。」
「さうして出來上つたら、今年の秋の文展へでも出品なさるおつもりなの。」
「今年の秋なんて、そんなに早く出來るやうな代物ぢやないんだ。何しろ己のライフ、ウォオクなんだから、今のところでは何年かゝるか解らないけれど、出來上つてから文展なんかへ出品する譯には行くまいよ。」
「そんならまあ出來上るのを樂しみにして、氣長にお待ち申しますわ。――それからね、ライフ、ウォオクで想ひ出しましたが、あたし今日は兄さんにちつとお話しがあつて參りましたの。」
「なんだい。」
「又例の相談かつて云はれるかも知れないけれど、兄さんのお身の上の事に就いて……。」
「早く結婚をしろと云ふんだね。」
「えゝさうよ。それに丁度適當な方が見付かつたから、今度こそは是非ともお勸めしてうまく纏めたいと思ふんですの。ねえ兄さん、いくら耄碌なさらないでも、もう三十六におなんなすつたら、いゝ加減に身を堅めた方がよくはなくつて。」
「折角だが今度も亦お斷りしよう。今度ではない、結婚の話だけは一生お斷りするとしよう。お前も知つて居る通り、己は一遍妻を持つてほんたうに懲り懲りしたんだから。」
「ですけれどあの時分のあなたとは、あなたも違へば相手の女も違ひますわ。今度の人ならT子さんと

は比べ物になりはしないわ。」

「相手の女は違つたにしても、己の方は少しも變らないんだから駄目な話だよ。T子と離別して以來、藝術家――そのうちでも殊に己のやうな藝術家は一生獨身を通すに限ると云ふ事を、ちやんとモットオにしてしまつたのだ。」

「それでもさうやつて獨りで居らしつたら、時々淋しいと思ふ事がありはしなくつて?。」

「そんな時には妻でない女の處へ遊びに行くさ。さう云ふ種類の女の友達を己は二三人持つて居るから、別に不自由なことはないよ。女は友達に限るもんだな。一軒の家に同棲して居ると仕事も何も出來やしない。」

「だつて兄さんは今まで五六年も獨身で居らしつた癖に、其の間何もなさらなかつたぢやありませんか。」

「其れあやつぱり以前T子と結婚した時の打撃が續いて居た所爲なんだ。結婚するまでは、己の頭には奔放な思想が自由に湧いて無數の創作が出來たけれど、あれ以來己の心は眠つたやうに働かなくなつてしまつた。此の頃になつて漸う打撃の傷が癒えて、新しい藝術の光が眼の前にちらちらするやうになつたんだ。」

「それぢや兄さんは、若しも此の後ある人と眞面目な戀に落ちるやうな事があつても、やつぱり結婚なさらないお積りなの。」

「女を戀する事なんか此れから先にありさうもないよ。己の戀は今のところ己の藝術を對象にして居る。

藝術より外に戀ひしいものはなくなつて居る。女は食物と同じやうに、唯性慾を滿足させるために時々攝取すればそれで澤山だ。」

「いつか兄さんはこんな事を仰つしやつたでせう。――戀と女と藝術とは自分に取つて全く一つものだつて。藝術家の一番貴い仕事は人生を共のまゝ藝術に化する事だつて。ねえ、さう仰つしやつたでせう。」

「云つたかも知れん。」

「あの時分と今とは、大分兄さんの藝術觀が變つてしまつたんですね。」

「さうだ、少し變つたやうだ。――正直を云ふと己の根本の藝術觀は變らないんだか、己は自分自身の力量や境遇に考へて見て、とても自分の人生を藝術化する事なんか出來ないとあきらめてしまつたんだ。それで自分の人生と、自分の藝術と云ふものを全く別々に取り扱はうと思つて居る。自分の實生活はどんなに卑しく醜くつても、自分の作る藝術だけは非常に貴く美しいものにしたいと思つて居る。」

「何だかあたしにはよく解らないけれど、それぢや兄さんの藝術と云ふものは、人生や實生活とはまるきり關係のないものなの。」

「關係は大いにあるさ。今に己の創作が出來上つて見れば解る事だが、世界中のどの藝術よりも、己の藝術が一番人間の實生活に關係の深いものなんだ。己はたゞ、自分の人生を直ちに藝術化する事を、あきらめてしまつたゞけなんだ。己には美しい容貌がない。立派な肉體がない。巨萬の富がない。――己のやうな醜い、貧しい、何等の資格をも持つて居ない人間が、藝術的の人生を造らうなどゝ思つたのが間違ひなんだ。」

「ひどく悟を開いてしまつたのね。妹の口からおかしいけれど、兄さんは何もそれ程醜い顔つきや體つきぢやなくつてよ。まあ十人並ぐらゐのところだわ。それに「富」の方だつて、巨富と云ふ程ぢやなくつても、兎に角世間の人が羨む程の、何萬と云ふ資産を持つて居らつしやるでせう。」

「役に立つ程でもないが、資産は少し持つて居る。しかし何より悲しいのは己の此の醜い顔だ。醜い肉體だ。……そら、あすこの鏡に映つて居る己の姿を見て御覽。何と云ふ光の鈍い、淺薄な瞳の色だらう。何と云ふ下品な不恰好な鼻の形だらう。黄でもなく、白でもなく、黑でもなく、何と云ふ曖昧な不愉快な皮膚の色だらう。あの頬骨のいやに尖つて突き出て居る工合を見ろ。それからあの不細工な肩を見ろ、ちつぽけな吝臭い胴を見ろ。貧しい兩腕の筋肉を見ろ。哀れな短い脚を見ろ。あの體中の何處かの部分に少しでも美と云ふものが認められるかお笑ひ草に捜して見ろ。苟くも美術家と名のる人間が、こんな醜い形體を持つて生れて、どうして自分の肉體に反感を抱かずに居られるものか。」

「だつて兄さんのやうに、體の小さい事や鼻の低い事や肌膚の色まで詮議なすつたら、大概の日本人はみんな駄目になるわ。」

「さうさ、大概の日本人はみんな駄目さ。己はお前の云ふ通り十人並かも知れないけれど、大概の日本人が駄目だから從つて己も駄目になるのさ。若し人生其の物を藝術化させようと試みるならば、己を始め一般の日本人は先づ貧弱な體質からして直してかゝらなければ無意味な話さ。よく雜誌の口繪や活動寫眞などに、日本人が多勢並んで寫つて居る光景があるだらう。あゝ云ふ寫眞を見せられると、日本人程暗黑な、卑賤な、非美術的な形態を持つて居る種族はないと思ふね。西洋人は無論の事だが、獅子だと

か羊だとか鳩だとか鷗だとか云ふ禽獸の類ですら、澤山集れば其處に一種の美感を生ずるものだけれど、日本人の顏だけは集まれば集まる程醜惡の度を增すばかりなのはをかしいぢやないか。美しい自然の中から美しい藝術が生れるとしたら、とてもわれ〳〵日本人などの間から立派な繪畫や彫刻が生れる筈はないやうな氣がする。」

「大分話が橫道へ外れてしまつたやうだわね。さう云ふ議論はいづれゆつくり伺うとして、もう一度結婚の問題に復らうぢやありませんか。」

「けれども此れが結婚問題に關係があるんだよ。――己はT子と結婚するまでは、自分の資格に就いて可なりの己惚れを持つて居た。兎に角自分は非常に美しくはない迄も、十人並の器量を持つて居る上に、相當な富の力を備へて居るのだから、自分の人生を材料にして、美しい戀の藝術を作れるだらうと信じて居た。若しもT子と結婚して、理想通りな藝術的生活を營む事が出來たなら、己はもう繪などを畫く必要はない。自分の生命を創作するだけで立派な第一義の藝術家になり得ると思つて居た。ところがT子は結婚してから間もなく己を捨てゝしまつた。己を捨てゝSの所へ走つてしまつた。さうして今でもSと睦しく同棲して居る。あの當時は恨んだり怒つたりしたけれど、今日になつて考へれば、己はT子の執つた行爲を少しも無理だとは思はない。成る程Sの所には己の家程の財產はないだらう。しかし彼奴の顏はどうだ、彼奴の肉體はどうだ。こゝにSの寫眞があるが、まあ此のパッチリとした瞳を見ろ。豊かな腕の肉を見ろ。生き生きとした唇の色を見ろ。それから氣高い、威嚴のある鼻つきを見ろ。此の男だけはたしかに日本人のうちでも例外の方だ。T子が己と同等の審美眼を持つて居るなら、醜い己を

捨てゝ美しいSの所へ走つたのは寧ろ當然の撰擇として許してやらなければならない。」

「それは兄さんが少し僻んで居らつしやるやうだわ。T子さんは勿論Sさんの美しい顏立ちに迷はされたには違ひないでせう。しかしあの人が兄さんを嫌つたには、まだ其の外に大事な原因あるんですわ。——此れは彼の人が其れとなくあたしにほのめかした事ですけれど、兄さんは女に對して非常にアブノルマルな病的な刺戟を要求なさるんださうですね。それをT子さんは恐ろしがつて嫌つて居たのです。兄さんと同棲して居ると、いつ何時命を落すか解らないつて慄へて居たのです。」

「それもやつぱり己が醜いせゐなのだ。己の肉體や容貌に、あの女を迷はせるだけの魅力がなかつたせゐなのだ。若しも己がSのやうな、或はS以上の誘惑に富む肉體を持つて居たら、あの女は己の魅力に醉つてしまつて、どんな要求にでも服從したらう。命を落すのを恐ろしがる暇はなかつたらう。……さう考へると己は今迄の己惚れや希望を一時に失つてしまつたのだ。己のやうな醜い肉體を持つた者はたとへ女を戀ひしたところで、到底自分の望むやうな絢爛な生命の藝術を編み出すことはむづかしい。再び此の世に生れ變つて立派な資格を備へて來るか、己自らが造物主となつて理想通りの美しい人類をクリエエトするか、孰方かでなければ己の幻覺に適合するやうな、艶麗な肉體の咲き匂ふ世界、奇怪な戀愛の許される世界、芳烈な色彩の流れ漂ふ世界は、現在の自分の能力でとても築き上げる事が出來ないと悟つたのだ。そこで己は女を戀する勇氣がなくなつた。先も云ふ通り、女は唯性慾を滿足させる日用品として時々使用するだけに止めてしまつた。」

「さう云ふ譯なら、あたしは何も女を戀しろとは申しませんわ。ですが兄さんどうでせう。——戀愛と

云ふやうな意味でなく、經濟的に慾望を滿足させる日用品として妻をお持ちなすつたら。」
「お前はおかしな女だな。結婚しないでも濟んで行くものを、其れだけの理由で妻を迎へる必要はないぢやないか。」
「あたしは必要があると思ふわ。それだけの理由と仰つしやるけれど、外にもまだ大切な理由があるんですの。――兄さんはお父樣のお遺しになつた川端家の財産や血統と云ふものを、一體誰にお讓りになるおつもりなの。たツた一人の妹のあたしは他家へ嫁いてしまつたし、兄さんに子供がなかつたら川端の家は斷絕してしまふぢやありませんか。あなたはお父樣へ對する務めとしても、結婚をして子供を生まなければ濟まないと思ふわ。」
「己は世の中へ自分の藝術を遺して行けばそれで澤山だ。子供なんかを遺して行く必要はないよ。」
「血統が絕えても構はないと仰つしやるの。」
「うん、……何もそんなに眞面目になつて詰問しなくつてもいゝだらう。己に云はせると、結婚するのはまだいゝとして、子供を生む事が一番いやなんだ。己は藝術を創作する職業を持つて居るんだから、己のやうな醜い人間を、一人でも餘計此の世の中へ作りたくない。こんな卑しい肉體や容貌は、自分一代で此の世から根絕してしまひたいと思つて居る。よく世間では器量の惡い男と女が結婚して、恥づる色もなく愛し合つて居るものだが、あんなのを見ると己は非常に腹が立つよ。殊にその醜惡な夫婦が、醜い上にも更に醜い子供を生んで、二人の間の寶物のやうに可愛がつて居るのがあるが、あれなんぞは全く親の氣が知れないよ。あんな夫婦が多いから、日本人はいつまで立つても立派な人種になれないんだ

「隨分御挨拶だわね。あたしだつて子供があるんですから、少しお手柔かにお願ひしたいわ。」
「何もお前にあて付けて居る譯ではないが、實際よくも親たちが愛憎をつかさずに居られるものだと思はれるやうな、醜い子供が澤山居るぢやないか。どうして世間の親たちは、美しい他人の子よりも醜い自分の子の方が可愛いゝんだらう。己が親だつたら、たとへ自分の子供でも醜い奴は奴隷のやうに虐待して、美しい他人の子供を養育するなり、可愛がるなりしてやるがな。」
「一遍親になつて見れば、なか〳〵さうは行きませんわ。」
「だから親になるのは嫌だと云ふのさ。親と云ふものは醜いものだ。耻かしいものだ。藝術家には眞似の出來ないものだ。」
「親の攻擊はもうそのくらゐで充分だわ。」
「その代りお前の方でも、己に結婚の忠告をする事だけは止めて貰はう。」
「えゝ止めませう。それ程に仰つしやるなら、もうあきらめて了ひませう。――ですが兄さん、いよ〳〵あなたが結婚なさらないと極まつたら、內の家名と財產とはどう云ふ風に處分なさいますの。」
「事に依つたら、己は養子を貰はうかと思つて居る。」
「成る程それがいゝでせう。さうして何處からお貰ひになるの。親類から？」
「親類なんか眞つ平だよ。」
「だつてあかの他人よりはいゝぢやありませんか。親類の子供ならば、未だしも血統が殘る譯だわ。」
「血統は絕えても仕方がないさ。」

「それでは誰か、適當な養子をお見付けなすつたの。」
「まだ見付けないが、此れから大いに骨を折つて、捜し出さうと思つて居るんだ。」
「どう云ふ人が兄さんのお氣に召すんでせう。あたしも心掛けて捜して上げるわ。」
「少し注文がむづかしいから、己が自分で捜さなければ駄目なんだよ。――己の今度の創作に大變な影響のある事なんだから。」
「何だかおかしなお話ね。養子をモデルにして繪でも畫かうと云ふおつもりなの。」
「いづれ其のうちに解るだらうから、詳しい說明は控へて置かうよ。兎に角今度の創作は、己の理想通りな、ほんたうに血あり肉ある生命の藝術をクリエエトするのだ。解つたかい。」
「解らないわ。」
「解らなければもう少し默つて見て居るがいゝ。」

二

(其の年の秋の會話)

「先生、それでは此れから、僕はあなたをお父様と呼ばなければならないんですね。」
「いゝや矢つ張り先生と云ふがいゝ。己はお前に此の川端の家を繼がせる。しかしお前にお父様と呼ばれるやうな、血緣もなければ資格もないのだ。お前のやうな高貴な容貌と端正な肉體を持つた人間が、醜い己を父と呼ぶのはあまり不釣合だ。あまり不適當だ。お前を此の世に生んでくれた眞實の兩親でさへ、お前を子に持つ資格はないんだ。」

「どう云ふ譯で？」
「あの親達はお前のやうな子を作りながら、惜し氣もなく養子に寄越してしまつたぢやないか。其れが何より親の資格がない證據だ。」
「しかし先生が強つて養子にくれと云ふお頼みでしたから、據んどころなく兩親も承諾したのでせう。それに僕は近頃になつて親父の期待に背きました。來年中學を卒業したら、法科か工科を撰べと云はれたのに、僕はどうしても文學をやると主張して、飽く迄反抗したのです。僕は親父のやうな實業家は大嫌ひだと云つてやりました。だから兩親もきつと愛憎を盡かしたのでせう。僕には澤山の兄弟がありますす。兄が三人に姉が二人に妹と弟が一人づゝあります。八人の子供の中から僕を養子にやつたところで、それ程惜しくはないでせう。」
「だが多勢の兄弟のうちで、お前のやうな美しい子は外に一人もないぢやないか。兄弟どころか兩親ですら少しもお前に似て居やしない。お前のその逞ましい肉づきは一體何處から受け繼いだのか、その桃色の肌の光澤は誰の力で染めて貰つたのか、名高い彫刻を見るやうなお前の輪廓のどの部分にも、お前は全く親兄弟の影響を受けては居ない。お前は恐らくたツた獨りで生れて來たのだ。あすこの家からお前が生れたのは本當の奇蹟だ。」
「先生、僕の體や顏つきには、そんなにも褒める値打ちがあるのでせうか。」
「どうしてお前は其れを疑るのだ。さあ此處へ來て、鏡の前へ立つて、裸になつて自分の姿を映して御覧。――さうだ、さうするのだ。何と立派な體格だらう。あの筋肉のむくむくと隆起した胸だの股だの

の鹽梅は、まるでミケランジエロのアダムの繪のやうだ。それから後ろへ廻つて背中の肉を映して見ろ。一つ兩腕を肩まで上げて肘を張つて見ろ。――さうだ、さうやつた時の、男らしい威嚴に充ちた肉體は、まるで「健康」の象徴（シムボル）のやうだ。あの發達した精悍な手足を見ると、何だかお前は獅子の血を受けた人間のやうだ。――どうしたのだ、お前は顫へて居るやうぢやないか。裸になつたので寒いのかね。」

「寒い事はありません。一生懸命に力を籠めて立つて居るので、體が自然と顫へるんです。御覧なさいあまり力んだものだから、僕の顔はあんなに紅くなつて來ました。」

「お前の體は猛獸のやうに頑丈だが、お前の顔はどうして又そんなに優雅なのだらう。上品で嚴肅で沈痛なくらゐに整つて居て、希臘のパルテノンのフリイズから拔け出して來たやうだ。かうやつて見て居ると、お前はとても十六七の少年とは思はれない。體中の骨格が、二十二三の大人のやうに成長して居る。――お前は自分でさう思はないか。我ながら惚れ〳〵と見惚れるやうな氣持にならないか。着物を着るのが惜しいくらゐに感じないか。」

「それでは僕の美しさには、少しも缺點がないでせうか。」

「缺點はまだ隨分ある。世界中のどんな有名な繪畫や彫刻にも缺點があると同じやうに、お前の美しさも完全だとは云はれない。お前の顔は整つては居るがあまり冷めたい。お前の肉體は立派ではあるがあまり强過ぎる。お前には柔かみと云ふものが全く缺けて居る。お前の持つて居るものは純粹の男性美ばかりで、女性美が少しもない。」

「だつて先生、僕は男ですよ。」

「男が女から妖艶な柔かみを借りて來た時、始めてほんたうの美しさを發揮するのさ。人間に純粋の男や女がないと同じく、その肉體も兩性の長所が交らなければ完全な美は得られないのさ。己は先、お前の體はミケランヂエロの繪に似て居ると云つたゞらう。――あれは必らずしもお前を褒めたつもりではないんだ。全體ミケランヂエロと云ふ男は性的異常を持つて居たので、生涯女性美と云ふものを知らなかつたさうだ。女性のモデルを使つた事のない人間ださうだ。だから彼の人の畫いた女はみんな男の肉體を持つて居る。己は其の意味であんまりミケランヂエロを好まないんだが、お前の體にも丁度それと同じやうな不滿足な點があるのさ。――以前己の友達にSと云ふ美男があつた。其の男の輪廓はとてもお前の足許にも及ばないが、しかし不思議な柔かみのある、女のやうななまめかしい表情を持つて居た。たゞ其れだけで其の男は美男だと云はれたんだ。」

「けれども僕が生れ更つて來ない限りは、自分の體へ女性の美しさを注ぎ込む事は出來ないでせう。」

「生れ更つて來ないでもいゝ。己はお前の爲めに適當な戀の相手を捜してやる。相手を捜して、其の女の血とお前自身の血の中から、美しい子供を生ませてやる。つまりお前の美しさは其の子に依つて完成されるのだ。繪を畫くよりも詩を作るよりも、其の子を生む事がお前のほんたうの藝術なのだ。其の子を作り出す爲めに、己はお前を養子にしたのだ。」

「先生のお指圖通りの女を娶つて、先生の理想通りの子供を生むなら、僕の藝術と云ふよりか寧ろ先生の藝術でせう。」

「さうだ。己の藝術とも云へるのだ。」

「僕はたゞ、先生の藝術の材料になる繪の具か大理石のやうなものです。其の子の爲めに僕は犠牲になるんですね。」

「だからお前はいやだと云ふのか。戀をする氣はないと云ふのか。」

「戀をするのは愉快な仕事です。戀をする事が出來るなら、僕は喜んで犠牲になります。しかし先生の捜して下さる相手の女を、果して僕が戀するやうになるかどうか、それが疑問だと思ふのです。他人が勝手に撰んだ女では、いくら美しくても戀する氣にはなれないだらうと思ひます。」

「其れはお前が間違つて居る。己はお前の氣に入らぬ女を、勝手に捜して來るのではない。お前が戀をするやうに運命付けられた眞の戀人を、お前の爲めに捜して來てやるのだ。お前の眞の戀人は此の世の中に一人しかない筈だ。さうして一人はたしかに居る筈だ。」

「僕にはそれが信じられません。」

「信じられなければ信じないでもいゝ。一年かゝるか二年かゝるか知れないが、己がその女を捜して來るまで、信じないで居るがいゝ。――お前はプラトンを讀んだ事があるか。」

「ありません。」

「プラトンの『饗宴』の中にアリストフアネスが戀愛の演説をする所がある。其の說に依ると昔人間の體には二つの顏があり、四本の手と足とがあつて、丁度球のやうな圓い形をして居たと云ふ。ところがそれでは人間の力があまり强過ぎて神々を蔑ろにした爲めに、とうとうツオイスの怒に觸れて體を二つに裂かれてしまつた。其の時アポロがやつて來て、裂かれた皮膚を體中へ引き延ばして腹の上で結んでく

れたのが、我々の臍になつたのだ。だから其の後の人間は二つに裂かれたのを悲しがつて、元の殘りの半分に結び着きたいと思ひ焦れるやうになつた。人間の戀は其の時から始まつた。われわれ個々の人間は恰も鰈のやうだとアリストファネスは云つて居る。」

「どうして鰈のやうなんです。」

「鰈と云ふ奴は首の片側に二つの眼があつて、片側に何にもないだらう。それが丁度二つに裂かれた人間の恰好によく似て居ると云ふ意味なのさ。さうして見るとわれわれは一人前の人間ではない。みんな殘りの半分を持つて居る譯だ。その半分が自分のほんたうの戀人なのだ。——何だか馬鹿げた話だけれど、己は其の傳說の中に、深い眞理が含まれて居るやうな氣がしてならない。」

「兎に角面白い喩ですね。さう仰つしやられると、僕も何だかほんたうのやうな氣がして來ました。僕にも殘りの半分があるかも知れません。」

「その半分をお前の爲めに捜し出してやらうと云ふのだ。」

「有り難うございます。僕は樂しみにして待つて居ります。」

三

(翌年の春の會話)

「お前は今年幾つになる?」

「十六でございます。」

「お前の名は何と云ふ。」

「お藍と申します。」
「お前の兩親は？」
「父が十七、母が十六の歳にあたしを生んだのださうでございます。父と云ふのは何處の生れで何と云ふ人か、今も此の世に生きて居るのか、何もあたしは存じません。母は東京のまんなかに暫く藝者をして居りました。さうして一昨年なくなりました。あたしは孤兒でございます。」
「お前は父に會ひたいと思ふか。」
「會へるものなら會ひたいと思ひます。」
「父の方でも、お前を尋ねて居るか知らん。」
「あたしの父と云ふ人は、恐ろしく綺麗で恐ろしく薄情だつたと、あたしの母が申しました。今迄生きて居たところで、あたしと云ふ娘の生れた事なぞは、大方忘れてしまつたでせう。」
「お前は話のよく解る、なか／＼悧巧な娘のやうだ。己はお前が氣に入つた。――己はお前の父に代つて、とうからお前を尋ねて居たのだ。」
「それでは先生は、あたしの父を御存知なのでございますか。父に會はせて下さいますか。」
「己はお前を父に會はせる事は出來ない。お前はお前の父よりも、もつと會ひたい人がある筈だ。己はお前を其の人に會はせてやる。」
「それは一體どんな方でございます。」
「お前の父がお前を生んだ歳と同じやうに、丁度今年はその人も十七になる。さうしてお前の父より

もッと綺麗な若い男だ。お前が美しい女であると同じくらゐに美しい男だ。」

「あたしはそんな方に會ひたいとは思ひません。」

「會ひたいと思はないでも、會はずには居られないのだ。お前の父よりも其の人の方が、お前に取つて大切なのだ。其の人こそはお前のほんたうの戀人なのだ。」

「あたしはまだ戀と云ふものを存じません。あたしに戀人のある筈はありません。」

「其の人の姿を一と眼見れば、お前は戀を知るやうになる。それがお前の運命なのだ。」

「そんなら猶更その人に會ひたいとは思ひません。あたしは其の人に會ふのが恐ろしうございます。戀は恐ろしいものだと、あたしの母が申しました。綺麗な男は情が薄いと、あたしの母が申しました。」

「お前の母がお前の父に捨てられたのは、お互ひにほんたうの戀人でなかつたからだ。しかしお前は其の男から捨てられる筈はない。其の男は此の世に生れ落ちるときから、暖かい兩腕を延べて、情けある胸を開いて、お前の來るのを待ち構へて居る。お前と戀をする爲めに、自分とお前の血潮から、美しい子を作る爲めに生きて居る。太陽の光が、必ず地球へ落ちるやうに、其の男の愛はお前の胸に落ちるだらう。」

「けれどもあたしは、其のやうな美しいお方から戀ひ慕はれる譯がありません。」

「それはお前の謙遜と云ふものだ。お前は自分の貴い値打ちを、充分知つて居るだらう。お前の體のどの部分にも、己は「不思議」を見る事が出來る。お前の深い瞳の底には、汲んでも盡きせぬ愛の泉が湧いて居る。お前の紅い唇の端には、昆蟲の生血を貪る毒草のやうに誘惑の花が咲いて居る。丁度神様の通

り過ぎた土地が浄められると同様に、お前の手足の觸れるところには忽ち歡びの影がさす。お前の腰掛けて居る椅子の周圍にも、お前の手を置いて居るテエブルの上にも、今迄此の部屋に見られなかつた『神秘』がいつしか宿つて居る。お前の頰は鳩の腹のやうにふつくらとして柔かだ。お前の胴は蛇のやうになよ〳〵として軟かだ。お前のしなやかな、なまめかしい皮膚の色は、男の心を惡醉ひさせる音樂のやうだ。……………お前は其の美しい肉體を、子供の爲めに分けてやる氣は起らないか。」

「何だかあたしは欺されて居るやうな氣がしてなりません。」

「己はお前を欺しては居ない。ほんたうの事を云つて居るのだ。」

「しかし其の戀人とやらは、あたしよりもずつと美しい方なのでせう。」

「其の男は、お前の持つて居ないいろいろの美しさを持つて居る。けれどもお前より美しいとは云はれない。若しも世の中にお前に優る男や女があるとしたら、それはお前と戀人との間に出來た子供だけだ。」

「さうして、あたしを待つて居る戀人は、何處に居るのでございます。」

「あの、向うの庭の花園の蔭に、綠の帷の下りて居る窓が見えるだらう。あの窓の中に待つて居るのだ。どうだ、己と一緒に窓の下まで行く氣はないか。」

「…………」

「あの部屋の中は綺麗だぞ。いつ何時お前が來てもいゝやうに、すつかり支度が整へてあるのだ。壁には夢の國の繪が畫いてある。床には猛獸の毛皮が敷いてある。お前の据わる椅子の蓐は、珍しい織物で張り詰めてある。お前の倚りかゝる柱の根もとには、甘い香料が焚き燻べてある。箪笥の中にはお前の

體に似合ふやうな、衣裳だの寶石だの腕輪だのが揃つて居る。お前が戀を恐れなければ、あの部屋の物は殘らずお前の所有になるのだ。さうしてお前は此の邸の娘になれるのだ。己はお前を養女に貰ふつもりなんだから、……」

「あれ、お待ちなさい。あの窓懸けの緑の帷が頻りに動いて居るやうです。帷の蔭から誰やらが此方を眺めて居るやうです。」

「あの男の顔を御覧、……あれがお前の戀人なのだ。窓から首を突き出して、ぢッと此方を視詰めて居るのが、お前にもよく見えるだらう。」

「……」

「もう躊躇することはない。己と一緒に來たらよからう。」

四

(同じ年の同じ春の會話)

「僕は先生の豫言した通り、とうたうお前を戀するやうになつてしまつた。お前は僕を疑つて居やしないだらうな。」

「あたしはあなたを最初に一と眼見た時から、少しも疑ひませんでした。」

「お前はやつぱり、僕の搜して居た女だつた。」

「あたしはあたしの母よりも、仕合せな女でございます。」

「どうしてお前は此のやうにあでやかなのだらう。」

「どうしてあなたは此のやうにお立派なのでせう。」
「僕の體にないものを僕におくれ。お前の體に缺けて居るものを僕が上げよう。さうして先生の言ひ付け通り、缺點のない子供を作らう。」
「あたしが子供に讓るものは、丈なす黑髮と長い睫毛。——それはあなたにない物でございます。」
「僕は何よりも正しい姿勢と堅固な骨格を、——其れはお前にないものだ。」
「あたしはあなたに缺けて居る暖かな脂肪分と艶々した皮膚の匂を。」
「僕は丈夫な齒列びと太い眉毛を。——お前の眉はあんまり優し過ぎるから。」
「あたしは又可愛い口元と見事な額の生へ際を。」
「僕は氣高い鼻の形と健康な肉づきを。」
「それからあなたは廣い胸廓と、伸び伸びした腕と脛とを傳へて下さい。」
「お前は玉のやうな踵の圓味と、手足の指と爪の恰好を。」
「もう其の外にないでせうか。」
「其の外の物はお前も僕も持つて居る。——鋭い官能も、恐ろしい知慧も、そして火のやうな情熱も。」
「……みんな未來の子にやりませう。……」

五

（十五年後の春の會話）

「お父さん、此れは僕のお祖父さんの寫眞ですね。」

「うんさうだ。お前はお祖父さんを忘れてしまつたのか。」

「いゝえよく覺えて居ます。お祖父さんのなくなつたのは、僕が九つの時でした。――ですが僕はお祖父樣の本當の孫ではないんでせう。」

「お前は其れを誰から聞いた。」

「此の間お母樣から聞きました。僕の鼻つきはお父樣に似て居ます。僕の口元はお母樣に似て居ます。しかしちッとも此の寫眞には似て居ません。お父樣はお祖父さんの子ではないんですね。」

「己はお祖父樣の子ではない。お前がお祖父樣の子供なのだ。」

「いゝえ僕はお父樣の子です。お父さんの凛々しい目鼻立ちと、お母樣の優美な手足とを受け繼いだお父樣のほんたうの子です。お祖父樣の血の中から、僕のやうな麗はしい子が生れる筈はありません。」

「それでもやつぱり、お前はお祖父さんの子に違ひない。己とお母樣とは、お前と云ふ麗はしい子を作る爲めに、お祖父樣から撰ばれたのだ。己は己の持つて居るものを、お母樣はお母樣の持つて居るものを、お前を作る爲めにお祖父さんに貸して上げたのだ。お前の體にはお祖父さんの血は流れて居ない。しかしお前の其の姿は、お祖父樣が此の世に遺した藝術の塊なのだ。お前にはお祖父樣の魂が打ち込まれて居るのだ。」

「藝術と云ふのは何の事です。」

「お前はお祖父さんが若い時分に作つたと云ふ、繪だの彫刻だのを見た事があるだらう。あゝ云ふものを作る事が、お前のお祖父さんの仕事だつた。あれを世間では藝術と云ふのだ。」

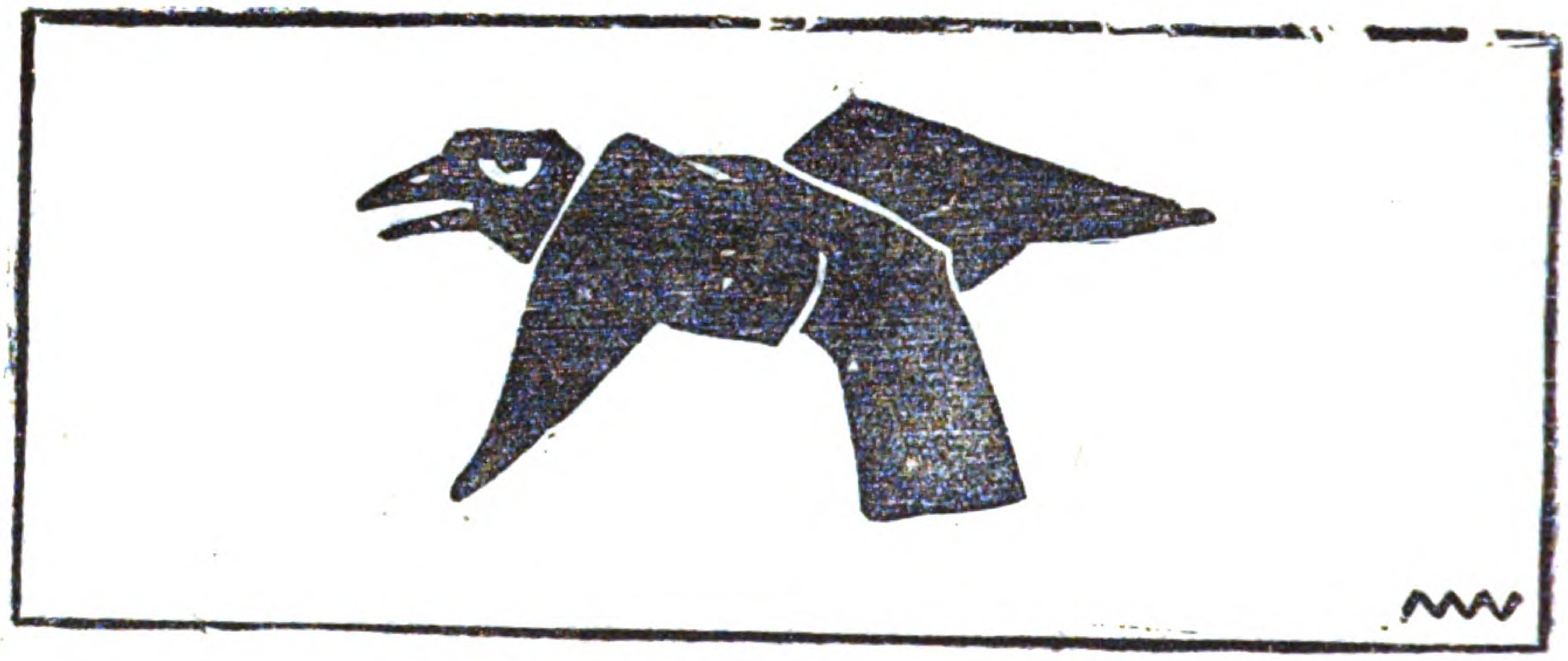
「しかし僕が覺えてから、お祖父樣は一遍も繪や彫刻を作らなかつたやうですね。」
「さうだ、其代りにお前と云ふものを作つたのだ。お祖父樣は御自分の作つた繪や彫刻に對して、どうも滿足出來ないと云つて居られた。世間からも一向巧いと云はれなかつた。そこでお祖父樣は、繪よりも彫刻よりももつと生き生きした藝術を作り出さうとなすつたのだ。さうしてお前を拵へたのだ。お前はほんたうに巧く出來た。あんまり巧く出來過ぎたので、己は氣味惡く思つて居る。」
「世間では巧く出來たと云はないでせうか。」
「其れは云ふに極まつて居る。今に騷ぎ出すに極まつて居る。もう一二年立つて、お前が一人前の男子になれば、……あゝ、想像して見ても恐ろしい。」
「どうしてそんなに恐ろしいのです。」
「お前をあんまり美しく、あんまり貴く作り過ぎた事が恐ろしい。――己は十七八の時分に、世に双びない美男だと云はれたが、それでもお前のお母樣のやうな、自分に適しい戀人を得た。だがお前には、お前に適しい戀人のあらう筈がない。お前を自分の物とする相手のあらう筈がない。男もお前を戀するだらう。女もお前を戀するだらう。しかしお前は其れ等の人を飜弄して、冷めたい背中を向けるだらう。お前の行くところには歡樂の血が流れ、罪惡の錦が織り出され、呪ひの草が蔓るだらう。」
「……さうして其れもやつぱりお祖父樣の遺して行つた藝術なのですか。」
「さうだ、やつぱりお祖父樣の藝術なのだ。――此の川端の家名も財產も、恐らくはお前の代ですつかり滅びてしまふだらう。己はもうそろ〳〵お前に財產を讓つてやらう。」

「ではお父様はどうなさるのです。」

「あすこの部屋にお母様が己を待つて居る。あの緑の窓懸けの蔭で、己は初めてお前のお母様に會つたのだ。己の幸福と己の滿足はあの部屋の中に今も封じられて居る。己は一生あの部屋へ引き籠つて、戀ひしいお前のお母様を相手に、春のやうなうらゝかな月日を送るのだ。」

「僕はお父様とお母様の樂しい月日をお喜び申します。僕はお父様にもお母様にも感謝いたします。」

「さうして、一番大切なお祖父様にも感謝しなければならない。」（大正四年三月作）



八の馬鹿

鈴木三重吉

私が一寸ゐた或貧しい漁村に八といふ馬鹿がゐた。八といふのは十文には二文足りない馬鹿な人間といふ意味だつたから、博士にでも男爵にでも又は下女にでも、犬にでも、馬鹿は平等に附與していゝはずの普通名詞なのだけれど、村では八といへば不公平にも、一人この八のことになつてゐた。

村で八を馬鹿にしないものは第一村の神さま、第二人の女房及びそれ以外の多くの女が、自然の命令に從ひ、又は自然に對する反逆の企圖の下に――從つて、誇り、安心又は人間的平氣と、煩悶或は獸的平氣とに伴はれて――胎内に安眠させてゐる、男と女ばかりであつた。如何となれば、第一、村の神さまはもと／＼人間の死んだのが御本體になつてゐる。そしてその死人は間斷なく人間を守護するのに疲れ果てゝゐた。そのほか、多くの意味に於て、すべての事

に盲い且つ聾してお出でになつた。第二に、村といつても、人家はいくらもない。人口もうぢや／＼ゐる子供とその背中に喰つ附いてゐる準子供を除くと大人はいくらもゐない。——子供はすべてのことを實行する先頭走手（ファーストラナー）である。——その外に村に活きてゐるもので八をしらないものは一寸あり得ないからであつた。

實さい鳥、彼等自身さへ或意味では八を馬鹿にしてゐた。但しこの場合子供等が八を鳥の子分だと信じてゐたといふことを注記したところで私の外見的急速肯定を合理にするには役立たない。これは八が垢で以て鳥のやうに黒いといふ、大人の比喩と、子供等によつての、その比喩の直受とを意味するだけだからである。

八と鳥とには、それより先に或交渉があつた。——八は元來は村の直産物ではないかつた。他の村か町かの製産品（プロダクシャン）であつた。併しどこのものだかはだれにも解らなかつた。いつから村にゐるのかといふことも私はつねつから聞かないでしまつた。三十七八になる或一人の女の言によると、その女がまだ縄飛びをしたりしてきやつ／＼言つてゐた當時、或十二月時分のほろゝ寒い午後に、もとゐた、村の女の先生が、歯下駄をはいてとこ／＼向うの村から歸つて來た。そこでこちらは鼻汁をすゝつて頭を下げた。その後ろから、赤い胴かけをつけた、毛の長いがた／＼馬が、荷を脊つてとぼ／＼やつて來た。その女の子は一人のそ／＼とその馬の後ろへついて村の通りの中ほどまで行つた。稀に通る大きな動物だから、面白くてついて行つたのであつた。すると向うから、膝までしかない、黒い色のぼろ／＼の着物を着た、髮のぼう／＼延びた一人の男が、とぼ／＼やつて來た。まつ黒い足をして、洗足でのそ

り〲やつて來た。通りの家のものが、つき〲に戸口へ出て覗いた。「八」がはじめて村へ這入て來たのであつた。人が出て見たのは最初に八を見附けた人間が愕いたのが導火線となつて、次の家から家へ好奇心が點火されたのである。その最初の發見者に愕きを與へた八は、半分毛を捲つた泥まぶれの鳥の死骸を片手に握つて、股のところをがぢり〲と嚙みしやぶりながら乘り込んで來たからであつた。八はもとよりばかだから、何んにも言はないでのそり〲、失はれた人間のやうに歩いて來た。「われは水を以てバプテスマを授く、されど汝等の未知なるもの一人汝等の中に立てり。」とも「われに後れ來りてわれにまさるものとはこれなり。」とも言はなかつた。

ずゐぶん元からの八だけれど、今でも八はそのときの八と一寸も變つてはゐないとその女は笑つた。おまへだつて、そのちんちくりんの赤ら髮と、その二本の反つ齒とは馬のあとへついて行つたときと一寸も變つてゐやしまいと私は言はずに默つてゐた。

この女は顏に竹の皮のやうな黑いぼち〲が一面にあつて……併しそれはどうでもいゝ。それよりも八は、して見るとそのときから四十くらゐだつたらしい。如何となれば今にやつぱり四十くらゐの人間に見えるからであつた。村の大人が鳥の子分だといひ、子供等がその嘲笑を正面から受け取つてゐると私がさつき言つたのを二分間記憶出來るものにはいかに垢だらけの、汚ない顏をしてゐるかは、いかに馬鹿な男爵にでも直ちに再びこゝで的確な寫像が現象できるであらう。彼のその黑さと汚なさに次いで彼に目立つてゐるものは、第一に彼の長い、ぼこりだらけな、くしや〲の髮と、痩せた、ひよろひよろした長い體軀と、彼のしよぼ〲した目であつた。公平に言へば彼を形成してゐるすべてのもの

がストライキングであつた。併し私にはその目が一等八を特徴してゐるやうに思はれた。一寸見ると泣き出しさうな顔に見えるやうな目で、同時に眠いやうな、又何が何でも平氣だといふやうな、さうかと思ふと陰鬱なやうな、併も笑つてゐるやうな、あらゆる表情を一度に發現してゐる目であつた。それが、各の二分の一秒にちきちき瞬きをする。睫の開閉と共に、目の上下の皺と、小鼻との痙攣が加はつて、迅速に且つ間斷なくちきちき、ちきちきと瞬いてゐるのである。それで以て目がくたびれるせゐでもあるまいが、八はよくゐ眠りばかりしてゐた。ときどき歩きながら眠つてゐた。

八が村へ來たときのことは、さつきの女以外に多くのものが記憶してゐた。或ものは八は、このさきの村のもう一つ先の町から來たのだと言つた。併しその町では、まだもつと先の村からのそのそ來たのだといつてゐるさうであつた。その所謂出て來た村へ行つても、またその先へ行つても、つまり循環少數が割り切れないのと同じであつた。八は、どうしてこの村から向うへ行かないで、こゝにばかりゐついてゐるのかといふことは、馬鹿な村人にはもとより解らなかつた。私にだつて解らなかつた。

村のものだちは、怒りぽい巨人大洋が少しでも顏色をかへると青くなつて大さわぎをして巣穴へ逃げ込むけれど、一寸でも笑つて見せると勇み立つて、巨人の皺の上をかけ廻つて、わつしよいわつしよいといひながら、彼の胴の中の鰯をとつた。晝はまつ裸で赤蟻のやうに働いた。

ぼろぼろの、灰色な、又は澁色な、低い藁屋根が、うぢやうぢやと群がつた、その赤蟻の巣であつた。その狹い通りの中程に二間四方くらゐの大きな井戸がたつた一つあつた。こゝへ村中の若い女たちが細や小紐を帶んで、片かたかたの下駄をはいたり、跣足になつたりして水を汲みに來た。彼等がそこにが

や〱集つて、二十本ばかりの繩つるべで丸桶へ水を汲んだり、わい〱言ひながら、よち〱肩にかついで運んで行くさまを見てると彼等は全で水を汲むために生きてゐるやうに見えた。けれども彼等の多くはそのいそがしい生存が夜になると、結果的に言へばてん〱に爭つて子を胎むことに熱中した。そのために、多くの子供が、水銀劑で解けた。その水銀劑は或野生の植物が供給した。解けない奴は、大きくなつて、青鼻汁を垂らしてうぢや〱わい〱と活動した。子供等は村の巡査にお辭儀をすることと八が馬鹿だといふことより外には何んにも知らなかつた。その巡査は、七月になると、眞つ裸で村を歩いた。人のいゝ巡査であつた。十二錢ぐらゐの素通しの眼鏡をかけてゐた。その眼鏡は、或とき片つ方の、耳へかける柄の先が五分ばかりぽくりと折れて地べたへ落ちた。巡査はくる〱その折れを見廻はしたが目つからなかつた。二三日して、女の子の一人が使ひに行きかけに、土の中から爪でほぢり出した。太陽の光線できら〱光つてるばかりであつた。

一人、八は、巡査にも、水銀劑にも、赤蟻にも平氣で、村の赤火竿のそばで何十年となく暮して來た。村の井戸のところから、小さい汚い家の間をくゞつて海ばたへ出ると一寸した砂地の空地があつてその石がけの先に長い竹の竿が立つてゐた。その先へは滑車がついてゐて、月のない暗い晩には、赤い籠提灯がつり上げられた。赤蟻が、夜海の遠くから歸るのを導く目標であつた。その竿のこちらに板張りになつた疊三枚敷ばかりの火番小屋が立つてゐた。八は夜になるとその小屋の床の下に這入つてゐた。床の下はもと吹き通しであつたのを、交代で小屋番に來る若ものゝだれかゞ、八のために三方へ板を打つつけて、寢所にしてやつたのであつた。そこへ藁をしいて、八は犬のやうにもぐり込んでゐた。

その代り、火番が、

「八よ、〳〵」と上から座板をごと〳〵言はせると、八は直ぐに、呼鈴が押されて鳴るやうに迅速に、下からもぐり出た。冬の寒い晩夜中などに、火の番は、窓からばり〳〵小便をしながら、下から出て來て暗がりで目をぱち〳〵瞬いてゐる八に、「あしゆッ〳〵」と犬をけしかけるやうに息を鳴らした。すると八は直ぐに命令を聞きわけて、赤火竿の綱をたぐつて、灯籠をたぐり下ろして、持つて來る。そのときは眞つ暗い沖の方で、海がごう〳〵と鳴る中に、一點の赤い松火がぐる〳〵と振られてゐるときである。海鼠を取りに出た最後の船の歸着を知らせる灯りである。火の番はそれで任務を了へて家へ歸つて行く。それから一二時間たつた後には、村中で、公然起きてゐるものは八がたゞ一人であつた。八はそんな時分に、暗がりをうろついて浪に打ちよせられた木片や、家々のぐるりのごみの中の板切や、すべて、恰好な燃きものになることの出來るものを拾ひ集めて來るのであつた。不思議なことに八は猫のやうに暗がりで目が見えるらしかつた。夜は一寸も寢ないでうろ〳〵してゐるのであつた。いたづらをし合つてゐる男と女とは、よく八のうろついてゐるのに出くはしたといふ話であつた。

「さ、じつとしちよれ、だれか來た。」と物置の中などで男が言ふ。

「八ぞい〳〵。かまはんな。」と女はくす〳〵笑ふといつたやうな調子であらう。

八は、それから人が起きる時分には、番小屋の下でぐつすり寢てゐた。頭の方から床の下へ這入つて足先を外に出して、人から突つ込まれたやうにして寢てゐた。日がかん〳〵出ると、八は昨夜取つて來た燃きものを、石がけの上などへ干し並べて、またそこらへこゞまつて寢込んだ。私は、屢々、八が、

目を閉つて考へ込んでゞもゐるやうに、番小屋の外の日向で、土の上に膝をかゝへて、息もなさ相に眠つてゐるのを見た。その側に、牡蠣殼のついた木切れなぞが日に乾かしてある中に、潮と泥で黑く腐つた、櫛の缺けらや、椀の剝げたのなぞが交つてゐるのを見たことがある。

八は、年中さういふものを拾ひ集めては乾かして束にして、床の下へ入れて置く。そして、ときぐヽそれを少しづゝ引つかついで米のある家へ出かけて行くのであつた。村のものは殆んど米を食はなかつた。みんな芋ばかり食つてゐた。山でも平地でも畠は芋ばかりであつた。家々ではそれを掘つて來て、穴の中へかこつて置く。かこひ餘したものは、小さい女の子や婆さんたちが手の甲で鼻汁をこすりながら庖丁で薄く切つて、蓆に干した。十一月十二月には、どの家々でも、目ふちの赤い婆さんや、赤ら髮の女の子が、戶口の蓆の上で、ぎしりぐヽと芋を切つてゐる。或意味から言へば婆さんは晚年には芋を切り芋を食つて地獄へ行くのであつた。女の子たちは芋を食ひ芋を切つて、子を姙むべく下ろすべく大きくなるのであつた。村中にはどこへ行つてもさういふ切芋が蓆の上に干し並べてあつた。それへ蠅が眞つ黑にたかつてゐた。全で蠅を干してゐるやうにたかつてゐた。さういふ村にゐて、しかも、鼻たれや赤蟻や、婆さんたちに馬鹿にされてゐる八は、彼等の上に卓然として嘗て芋には見向きもしなかつた。どんなに腹が減つても芋なぞは食はなかつた。米でなければ食はないのであつた。その米を每日食ふところは村ではたゞ、村長の家と郵便局をやつてる物持の家と寺の坊さんぐらゐなものであつた。村長や郵便局は金があるから食ふのであつたらうが、寺の坊主は、金は一文もないくせに、且つ爺さんと婆さんの財布の一文錢をかき集めて活きてゐるくせに威張つて米なんかを食つてゐた。佛さまに供へる

ために米を焚かなければならないからかも解らないけれど、佛典によれば、佛は印度の鍛冶屋の婆さんのところで腐つた豚を食つて、歸りに赤痢になつて道ばたでしやア〳〵と下して、喉が乾いてたまらないから田のどろ水を掬つて飲んだ男である筈である。そんな男が米でなくては食はないといふやうな贅澤なことは言はない筈である。もしどこかでさう言つてゐるとすれば、佛だけに椀一ぱいづゝ米の飯を焚いてやつて、坊主は芋を食へばいゝわけである。けれども米を食つてゐるのは確かであつた。

八はどうして米を食ふのかそれは別らない。腹が減ると木切れの束を擔いでのそり〳〵村の通りへ出かけて行く。その外には決して日中は火番小屋のぐるりを動いたことはない。

「おら、〳〵、八が來たい。」と村の女たちは言つた。

「いゝゝゝあの目を見いやい。」と子供が言つた。

「おめい、惡いことをするとあの八が捲つて食うぞい。」とおつ母が言つた。

「嘘い。〳〵。」と子供はおつ母を撲つた。

八は木切れを以て、村長と郵便局の家と寺とへ代り〳〵やつて行つて、つか〳〵と臺所へ這入つて、米の飯と焚きものとの交換を求めた。それも、例の目をむづ〳〵瞬いて、木切の束を握つて默つて立つてゐる。すると下女やおかみさんが下りて來て八の袋へ飯を入れてやる。八は、それを受け取るとたきものを置いて番小屋へ歸つて來る。相手が知らない顏をしてゐると、八は何時間でも臺所に立つて目を瞬いてゐた。だから、最後には必ず物になつた。つまり有形的行動の先後から言ふと、八がたき物をくれて飯を貰ふのではなくて、相手が飯をくれて八から焚き物を貰ふわけであつた。

八は歸ると石がけのふちなぞに坐つて、手づかみで、袋の中の飯を食つた。村長の家が一ばんけちで時々米の中に麥が交ざつてゐた。八は麥の粒を一粒づゝ口の中で選り分けて、ぷッ／＼と土の上に吐き出した。すると、番小屋の上で烏が「かア」といふ。「かア、／＼」といふ。この「かア」と「かァ／＼」とを飜譯すると、

「おゝい、八が飯を食つてるぞ。來い／＼。」といふのであつた。この譯には近頃流行する誤譯のないことは烏に聞いてくれゝばすぐわかる。次の烏語にも正に誤譯はない。即ち、

「よし來た。おゝい、手前もこつちへ來いよ。かア／＼／＼。」と五六羽の烏が飛んで來て八のぐるりへ下りた。そして、土の上の麥、八の口で洗濯された麥の粒を拾つて食ふ。

「おや、お前ばかり。ずん／＼食ふぢやないか。おや／＼、こいつは石の缺けらだ。ぺッ。かア／＼、かア／＼。」と一羽の烏がおれて、少しく休憩してゐたが、やがて、

「さうだ。」といふ風に八の手元へ飛んで行つて、袋のはしに喰つ附いてゐる白い米粒を突つついて食ふ。八はあんげらかんとして頰張つた飯を嚙んでゐる。このとき程八の顏面の多忙なことはなかつた。目も間斷なく瞬く上に、口も頰もが／＼させなければならなかつた。つまり彼の顏は目と口とを中心として兩個の渦動に轉回するのであつた。烏はそのどさくさまぎれに、八の手の先に附いてるのまで口へ入れた。

「おい、その中指を上へ出せよ。さうだ。かア。」といふ。こんなづう／＼しい烏が出世して代議士や銀行の頭取などになるのであつた。

そこへ子供がわい／＼言ひながらやつて來る。
「しよウい、／＼。」と一人の子供が烏に砂を投げる。
「なアんだ、鼻垂たれ。おい、ぼつ／＼行かう。」と烏は悠々として立つて行く。下へ下りると大きな八と大きな子供だと思つてゐた烏も、天空へ舞ひ上ると、何だ、よく見れば己れよりも小さな、黒豆のやうな八と黒豆かけらのやうな鼻たれ供ぢやないかと思ふ。だから烏は、この次にもいゝ氣になつて下りて來るのであつた。
「見いよ、八が飯ウ食うちよら。」と子供は八を取り卷いて珍らしさうに見てゐた。けれども幸にして彼等は代議士の子でないので、たゞ遠卷きに見てゐるだけで八の飯を取つて食はうとするものはなかつた。この點は感心である。八は目をぱちくり／＼させながら悠つくり／＼食つて行く。この八と同じ米の飯を食ふ村長たちとの違つてゐるところは、八の顏はいくら物を食つても、食はないときの顏と少しも變らないことであつた。いつでも腹の太つてゐるやうな、同時にいつ見ても腹に何んにもないやうな顏をしてゐた。
「八の袋へ砂を入れちやらうかい。」と一人の鼻たれがいふ。
「おい、これ／＼何うする。そげんことをすると海に食はせるぞ。」と、丁度いゝところへ年取つた赤蟻の漁師が來て砂地へ杭を打つ。あとから五六人の若い赤蟻が網を擔いでやつて來る。
「どけい／＼。あつちへ行つて遊べ。食はせるぞ。」といふ。子供はのそり／＼逃げて行く。
八はさうして安全に食事を了へると、ごろんと地べたへ轉がつて目をつぶつてゐる。その顏を見ると

何んにも平氣な空つぽな顏にも見えるけれど、日の當り具合では、八は村の何人よりも最智慮のある人間で、それがすべての人の運命を豫知して、窃かに彼等の前途のために瞑想してゐる顏のやうにも見えた。

「おい八の顏を見い。」

「八い。」と赤蟻がいふ。

「狸見たいな鼻をしよらいのう。」と餘計なお世話をやきながら網を干す。

八はそんなことは平氣で日が蔭るまですや／＼寢て、日沒と共に番小屋の下へ這入り込むのである。八はそんなにして、七八日目に一度ぐらゐしか飯を食はなかつた。寺や村長などのところへ飯を貰ひに――寧ろたきものを與へに――出かけることは一軒へ月に一回と限つてゐた。村長たちは八にそれだけの計算が出來たのを不思議に思つてゐた。その代り八は、時によると、腰のあたりまで海へ這入つて行つたりして、足で貝や小魚を取つた。海の穩やかな時なぞには潮が滿ちてゐる間中、ぢつと一つところに突立つたまゝで、水の中を動かないときがあつた。八はさうして取つた魚貝をいきなり生のまゝで嚙つた。どうして取るものだか、或時は、一尺ぐらゐの鰈や、大きな章魚のぴちや／＼刎ねたり。めり／＼動きもがくのを引つ握んで、火番小屋の側の日向で嚙つて食つてゐた。骨までがり／＼食つた。そして例のやうに仰向けになつて寢込んだ。彼の口元には魚の鱗がこびりついてぎら／＼と日光に光つてゐた。

はじめは村のものが、時折八にいろんな食べものをくれやうとしたものであつた。けれども八は人から直接に物を貰ふことを辱恥のやうに拒んだ。たゞほつてあるものだけは自己の權利のやうに拾つて食

つた。

「おい、八よ、これゥ食へイさ。」と一文菓子屋の婆さんが桃の腐りかけたのなぞを突き出すと、八はそんなものは目に這入らないやうに、知らん顔をして通つて行つた。

「何ちュ馬鹿ぢやろ、人がやらうちュのに」と婆さんは怒つた。後になつてこの婆さんも他の女たちも八に物をくれるのには、八が通るときを見計つて、往來へそれをほかして置けばいゝといふことを知つた。けれども村のものも貧乏だから滅多に八に物を施す餘裕もなかつた。

「うりイ、八がたアけアやの着んもを貰うちよらア、あゝい。」

（おや、八がおたけちやんの着物を貰つてるぜ、やアい。）

と或時村のものは笑つた。おたけといふ髮のちゞれた女がゐた。八が、冬の眞ん中に、いよ〳〵ぼろけはてゝ臀の上までしうない着物を着てゐるのを見て自分の單物のぼろ〳〵になつたのをくれたのであつた。八はさういふものを三年でも五年でも着てゐた。道ばたに落ちてゐるぼろ布は、たとへどろだらけになつた一寸四方の小布でも八はすぐ拾つて海で洗つて乾かして、自分のぼろ着物の上へ縫ひつけた。時には、唐米袋や古手拭の切れなぞが八のコートの一部分に點綴されてゐた。

「全でぼろが歩いちよるやうなもんぢやのう。」と或時村の巡査は笑つた。十二錢の眼鏡の、併も柄が折れたのをかけてゐるくせにいかにも八を嘲るやうにから〳〵笑つた。目の腐つた床屋の寅も出て齒を出して巡査と一緒にげら〳〵と笑つた。

八はこのやうにして何十年といふ前から村に生活してゐるのであつた。馬のあとについてつて八を發

見した女が三十七八になつたのだから、八は少くとも三十年以上はこの村にゐるのであつた。三十年の間には、生れ立ての赤ん坊がとくの昔十五になつて、腕に自分の名前を入墨した。これは大人になつた印であつた。十五になれば漁に出るので、もし海で死んでも、どこかへ漂着すれば、どこの誰だと別るための準備に入墨をするのであつた。その内には女を姙ませたりしてまた赤ん坊を作る。そして酒を飲んで喧嘩をして、暴れて、二十になると兵に出る。そして二三年たつた後には、一等卒のカーキー服を着て、頸にけちな紺のハンケチなぞを結んで、日の丸や聯隊旗やなぞを描いた盃を土産に持つて滿期になつて歸つて來た。そして本當の女房を貰つて盛に鼻たれ子を作つた。それから戰爭へ行つて勳八等を貰つたり貰はなかつたりした。そして今は後備になつてゐる。赤ん坊か頭の禿げた後備二等卒となるだけの變化の課程を八は全で一分間のやうにけろんとして、三十年前も今も同じ四十ぐらゐの顏で我慢してゐる。そして三十年の間精勵勤續して、小止みもなく目をぱち〱させて來たのである。あたり前なら、もう恩給が附いて、貴族院ぐらゐへ入れられてもいゝ筈だけれども、たれ一人、さういふことを運動してやるものもなかつた。八はそれでも一寸も不平を言はずに床の下にもぐつて暮して來た。未だかつてたゞの一度も口を聞いたことがない。笑つたこともない。欠伸一つしたこともない。大人しく、何の音もしずに床の下にゐた。雪が積つて巣の入口が塞つて了ふと、雪が溶けて一人で出口が開くまで、じつとしてゐた。七八月には蚊がうぢや〱たかつて體中を刺しても、八は搔きも動きもしずに我慢してゐた。中學校用、師範學校用、高等女學校用、女子師範學校用、商業學校用と、學校によつて色々の修身の使ひわけがしてある今日に、それらのいづれを開いても、精勤又は忍耐の部に八のことが書いて

ないのは誠に日本の道徳のための根事である。

それは或秋の暮であつた。村のものは近頃八が番小屋の側にゐなくなつたことを發見した。火の番の若者が、夜床の下を覗いて見ても八はゐなかつた。

「八い、八い、ゐないかい。うれ幾だい。」と若ものは竹竿を持つて來て八の穴を突つ突いた。それでも八はゐなかつた。

「どこへ行つたんづろ。」

「もうこの村に飽きたんぢやらうか。」

「さうぞいお前がそんなええ婆さまになつたけ八があいそウつかして他所イ行つたんだい。」

「お前がそねいに邪慳ぢやけいよ。こげんものがゐるところにやうらァゐなァちユゆてどこかへ行つたんづらう。」

「あはゝゝ、く。」

と村の女たちは笑つた。

すると、たゞの胖天の上へ鞄をかけて頬冠りをした郵便配達の爺さんが、村のはづれの出岩の上で、八がわんく泣いてゐたと言ふ報告を持つて歸つた。人々は色んな噂をした。巡査が通りかゝつて、伴れて歸らうとしても、たゞうゝんくと泣いてばかりゐて動かないのだといふものもあつた。

「行て見よう。く。」と子供等は駈けて行つた。

「ゐねいよ。嘘ばつかつかァ。」とやがて彼等の一人は歸つて來た。八は出岩からまたどこかへ行つたも

のらしいかつた。それから十日ばかり八の姿は見えなかつた。

その間に、或ものは、八が社の後ろの赤剝げ山で、泥だらけになつて轉がつてわん〳〵泣いてゐるのを見たといふものもあつた。その外いゝ加減なことを言ふものもあつた。

「死んだんぢやうぜ、そいぢや。」

「さうよのう、どこか病めるけイ泣いとつたんぢやらうぞい、のうゝかわいさうに。」と年寄りたちは言つた。

それから二三日して大雨風があつた。村中の屋根はばら〳〵に吹き飛ばされて、狹い往來がどこへ行つても牛小屋の中のやうに藁がちらばつた。船といふ船は道ばたまで引き上げられた。ごう〳〵と土砂ぶりの雨が暴れ狂つた。寺では鐘をがん〳〵叩いた。社の時の太鼓も鳴り轟いた。子供等は振へ上つて泣いてゐた。男も女も、その晩はいたづらどころではなくて、自分の家の倒れるのを恐れながら固まつてゐた。火の番の若ものたちはびしよぬれになつて黑い夜の中をかけ廻つた。

その翌日は村中は、終ん日あと片附けに追はれた。倒れ落ちた屋根の下より茶碗や膳を引き出したり猫を探して歩いたり、倒れた垣を起したりした、海に向いてゐる家々の雨戶は、づく〳〵になつて開かなかつた。

その夕方がどんよりと濁つて暮れて行く頃、村のはづれのうどん屋の煤だらけの中二階に、七つになるおしいといふ女の子と、五つになるおとうといふ女の子が、ぬれそぼちた板戶の戶袋のところに立つて「雀や〳〵、五兵衛がとツこの雀」といふ歌を歌つてゐた。と、おとうが、

「うりウ、あしこに八がゐるいのう」と姉に言つた。

「どこにやア」と姉が鼻を啜つた。

「うーり、八ぢやぞい。まあ何するだア、海へはいちよら、あゝわん／＼泣いちよら、どうしたんづらい。あゝれ波が來た。あゝ、ずん／＼海へ這入つて行かア。母(かあ)やあ／＼。」とおしいが門口へ出て行つた。

やがて、父(とう)やと母アやが上つて來て向うを覗いた。

「噓をつけイだアれもゐやアせんがい。」

「うーり、うそだいのう。この子は」と二人は代り／＼言つた。

「そんでもゐたい、のう、とうや。」と姉は自己を主張した。

「づん／＼向うへ行つたい。」ととうは廻らぬ口で言つた。

「あつちへ向いてかい？」

「うん、づん／＼行つたい？」

「うゝり、そしてどうしたい。」

「ずん／＼行つたい。」

「やア？死んだいぞい。」

「づうと體が隱れたかや。」

「あゝ。」

「うゝり、まあ。」

と大人二人は愕つて薄暗い潮が滿ち寄せて來るのを見守つた。

やがて村中のものはみんな濱へ出て海を見た。八が水の中へ立つてゐたのをたしかに見たといふものが二三人もゐた。

巡査は夜うどん屋へやつて來た。いつも暮れるとすぐに寢るおようは、母やにぼろ〳〵の垢光りの寢間着を着せられかけてゐた。そこへ父うやは門口で巡査に八のことを說明してゐたが、

「とうや一寸來いよ。」と呼び出した。

「うゝん、いやアだ。」と巡査が氣味が惡いのでとうは應じなかつた。母アやは無理に引つぱつて來た。しいも近所から歸つて來た。

「お前たちが八がずん〳〵深い方へ行くのを見たんぢやの?」と巡査は聞いた。するとしいが第一に自分が八を殺した責任者ででもあるやうにしやくり上げて泣き出した。しいも「おゝん〳〵」と泣き出した。

翌る日には火番小屋の近所のものたちは八の穴の前へたかつて、中を覗いたりして色んな八の追憶をさへづつた。例の三十七八の女といふのもそこにゐた、三十年前に丁度同じからういふ秋の暮に、彼女がはじめて八が村へ這入つて來たのを見た話をした。例のやうに女の先生にお辭儀をしてそれから馬が通るところから話した。

床の下の藁の中から八の缺けた塗椀が一つ出て來た。子供等はわい〳〵言ひながら、その椀を往來中へ蹴り歩いた。

私が雀の餌ほどの月給で、その村の役場へ出てゐたときのことである。(終)



日曜日の遠足

田山花袋

青田に面した中二階の一間で眼をさまして、明るい朝日の光線の漲つた中で朝飯を濟して、新聞をザッと讀んで、それから荒木は靜かに出勤の仕度に取懸つた。スコッチの背廣に埃のついた古びた鼠色の中折の帽子と銀の鎖のついた銀側の時計と、それからかれは何うかすると、机の上に置いた講談本などを風呂敷に包んだ。『何うせ、今日もひまだらう。これでも讀んでやれ』などと荒木は思つた。

荒木はもう四十五六になつてゐた。まだ爺さんと言はれるほどではないが、老年が人よりも一倍早く身に迫つて來てゐるやうなのを感じた。髮は半ば白くなつた。鬚も白くなつた。額の皺なども多くなつた。掌の皮膚などもガサガサした。心や氣は昔のまゝで、自分ではまだ若いと思つてゐるのに、いつの間にか老年は自分の周圍に迫つて押寄せて來てゐた。『何うせ、もう爺だよ』などと

元氣に笑つてゐるけれども、机を並べた青年から、荒木老人などと言はれると、餘り好い心持はしなかつた。

それも道理だ。自分の周圍には、もう自分等の時代の同じ年輩のものは數へるほどしかゐなかつた。町の要路に立つて、勢力の中心になつてゐるものは、皆な自分よりは後輩で、年が十も十五も違つてゐた。鼻垂らしの、やんちやの、いけない餓鬼などゝ思つてゐた子が、立派な中年の旦那になつて、角帶をしめてやわらか物などを着て、大きな店に座つてゐた。かと思ふと、日露戰爭時代に、其處等で多く出來る麥の一手買占をやつて、時の間に巨萬の豪富になつた男は、町で名高い若い綺麗な藝者を圍つて、それを天神の境内に置いた。かれは毎朝會社に通勤する途中に、その捷路を拔けて通つて行くので、何うかすると、そのぞろりとしたどてら姿に邂逅すことなどもあつた。櫺子格子のしやれた窓には朝日が晴やかにさしてゐた。

かれはてくてくと歩いて行つた。かれは東京に置いてある妻と妻の母のことなどを考へた。無意味に夢のやうに過ぎ去つた月日、それをもかれはをりをり頭に浮べた。軍人志願者の豫備校の生徒としてのかれ、漢文や漢詩が旨かつたと言つてほめられた時代のかれ、その豫備校の近くにある寺の一間を借りてひとりで自炊してゐたかれ、兄から月々の手當が來る度に、こつそりとその寺の裏から拔けて、細い路を通つて、人知れず明るい灯の遊廓に通つた時分のかれ、それから暫く經つてある役所の雇から同鄕の先輩のひきで段々屬官になつて行つたかれ、今の妻と妻の母とが小金を持つてさびしい暮しをしてゐるところに段々昵近になつて、終には信用されて遂にその家の入聟になつて行つたかれ、役所をやめ

て、鐵道の方に入つて、會計の一部を擔當して、時には巨萬の金を此方から彼方へ持つて行つたかれ——さういふ光景が長い間の月日と絡み合ひ縺れ合つて、かれの頭に見えたり消えたりした。『あそこにもう少し辛抱してゐれば好かつたんだ。それも、家にいくらの財產があつた爲めに、何ァに、そんなに無理をしなくつても好いッて妻も言ふし、體も弱かつたものだから』こんなことを考へながら、かれは步いた。

しかし、今の會社もかれには居心がわるくはなかつた。去年の秋頃、同鄉の先輩が、『何うだ、荒木、唯遊んでゐても仕方がなけりや、國の製粉に行つて見ないか。あそこなら知つてゐるものばかりだから樂だよ』かう言つて勸めて吳れた。製粉會社の專務取締役や支配人などもかれはよく知つてゐた。專務はかれよりも若い男で、町の金持の息子で、大學を卒業して、洋行などもして來てゐた。それに、町出身の高等商業出の若い理事などもゐた。かれは其處に來て、客分のやうな位置に据ゑられたことを考へた。月給も安かつた。『まア、君なんか、不自由してゐないんだから、遊ぶつもりで來て貰ふんだから、これで我慢して吳れたまへ。その中に何うかしますよ』專務はこんなことを言つて笑つた。その時荒木は『でも、ね、家を東京に置いて置くんだからね。土曜日曜に歸る旅費も要るからね。それに、下宿してゐなくつちやならんし』などゝ言つた。荒木に取つては、客分にされて、勝手なことを言つて、氣の置けない連中の中に勤めてゐるのは好いけれど、それでも、雇れるといふ段になれば、大きな顏をして、君僕といふ關係ではゐられなかつた。いくら若い男でも、いくら自分より後輩でも、理事は理事、專務は專務として立てゝ置かなければならなかつた。『僕なんか駄目ですよ。意氣地がないんだから……い若

い時にうんとふん張らなかつたから。同輩で成功したものは皆なえらくなつてゐますからな」かういふことを平氣で口には出してゐるが、しかしひとりでゐる時には、徒にうかうかと樂に過して來た年月が惜しかつた。『あいつは少將になりやがつた……。一緒にゐた時分には、そんなに出來た男ぢやながつたがな」などゝ二三年前までは、新聞を見て殘念さうに妻に言つたことなどもあつた。しかし、今ではもうさういふ心も銷磨して盡して了つた。何んな人間でも矢張同じ人間だといふあきらめもついて來た。

『今日は木曜日、明日、明後日は土曜日だ。今度は歸らうかしら。この前の日曜に歸つたばかりだから、今度は此方にゐやうかな』などゝ考へながらかれは歩いた。

野にはもう秋が來てゐた。空は澄んで、天末を劃つた山々は碧く美しく見えた。荒木は此間の日曜に、若い同僚にさそはれて、町から遠くない松林に初茸狩に行つたことなどを思ひ出してゐた。路端に熟していがの落ちてゐる栗の實、赤い實のチラチラ交つてゐる草藪、薄や萱の雜つてゐる稺木の林、松林を透して來る秋の靜かな日影、子供達の目白のおとりに出してゐる鳥籠、林の中に一とところ開墾してある農園、さういふものは、昔かれが少年時代に見たものと少しも變つてゐなかつた。昔澤山取つた覺えのある松林は大きく背が高くなつてゐるが、矢張その近所の小松原には初茸が澤山出てゐた。『こゝは昔から出るところなんだよ』荒木はこんなことを言つて、自分の籠を同僚に見せたりした。ある農家では水を貰つて飲んだ。

『昔のまゝだ』

かう言つて聞かせても、その自分の追憶を心からわかつて聞いて呉れる人のゐないのを荒木は淋しく思つた。

かれは天神の境内から、大きな寺の門の見える傍を掠めて、昔は畑と土手であつた大きな停車場前の通りに出て、それから停車場の方へと入つて行つた。停車場のレールを隔てゝ、かれの勤めてゐる大きな會社の白いペンキ塗の建物が見えてゐた。

丁度下りの汽車が來てゐるので、ちよつと待つて、それが靜かに出て行くのを見送つてから、レールを横切つて、近路をして、裏門からかれは會社の方へ入つて行つた。エンジンはもう盛に動いて、粉の袋を運ぶトロコは社内を縱横に活動してゐた。若い同僚が其處にゐたのを見つけて、

「今朝は早いね」

「早いどころか、もう理事が來てるよ」

「さうか、それは大變だ」

こんなことを戯談半分に言つて、荒木は靜かに向ふの事務室へと入つて行つた。事務室には、もう若い理事がちやんと來てゐて、荒木の出て來るのを待つてゐた。机に着くと、理事はすぐ大きな帳簿を持つて來て、『君、これを今日出すんだからつけて置いて呉れたまへ。午後に來るんだ。客が――。交際費の方へつけて置いて呉れ給へ、』かう言つて置いて、今度は若い外交係の方に向いて、『君、吉田屋の方に電話をかけて置いて呉れ給へ。それから、杉山君、小使に言つてね。あの客間を掃除して置けッて言つて置いて呉れ給へ』

客間は和洋折衷の立派な一間で、そこには社に來る得意の客を歡待する準備が完全に出來てゐた。隣の副室には長火鉢などもあれば、押入の中には絹布の蒲團なども二組三組揃つて入つてゐた。粉を買ひに來る得意の客は、時にはそこに二日も三日も泊つて行くやうなことがあつた。社では、そこで製造する上等の粉で饂飩を打つて置いて、客に御馳走したりした。事務員などもよくそれを食つた。

荒木は煙草を一服旨さうに吸つて、それから理事の命じた金を自分の大きな帳簿へと書き加へた。

若い氣の置けない事務員は種々なことを言つて、荒木にからかつた。

「荒木さん」

かう事ありげに呼んで置いて、わざと間を長く置いて、『今度も、奥さんの顏を見に歸るんですか』

『女房の顏なんか見たい年でもないよ』

『そんなことはないでせう。一週間逢はずにゐると、隨分待遠しくなるでせう？』

『そんなことがあるもんかね』

『さうですかね』わざと笑つて『でも、荒木さんの奥さんは若いから』曾て一度連れて來たことのある妻を、この事務員だけは、途中で逢つてよく知つてゐた。

『何うして子供が出來ないんでせうね』

『種がわるいのさ』

『そんなわけはないがな』かう言つて、毎年子供の生れるので困つてゐる松田といふ事務員の方を向い

て、「松田君のやうなのもあるからな」
「松田君は別ですよ」
色の白い外交係はニヤ〳〵笑ひながら言つた。松田は四角な丸いものを買つて來て、始終それをつかつてゐるけれど、何うしても出來るなどと言つて笑ひながら話した。「あれを買ふだけでも大變たから、洗つて干してつかふんですかね。ぢき駄目になつて了ふもんですな。弱いもんですな」
「何度位つかへるえ、君」
「なアに、二三度位のもんですよ、精々。それに變でね。干して置くのが――。」
「これは何だえなんて、子供が聞いて困つたなんて言ふ話はよくするぢやありませんか。」
「さう言へば、あるところで、子供がそれを面白がつて、口に當てゝふくらましてゐるところを親が見附けたといふ話があるぢやありませんか」
用がないと、若い人達はこんなことを言つて笑つた。
「君方はまたそんな話をしてるね」
「荒木さんなんか、さういふことを澤山して來たんでせうね」
「馬鹿言ひ給へ、僕なんか、さういふ方にかけてはごくうぶなもんさ」
「何うだか――」事務員は笑つて、「堺屋に下宿してゐた時分は困つたッて言つたぢやありませんか」
「さうさ、あゝ見せつけられちや困るよ。毎晩騷ぎやがるんだから。キヤッキヤッて言つて、夜は丸で寢られないんだもの」

「あそこは、そんなにひどいかな」
「あそこのことなら、荒木さんに聞くにかぎるよ」
ふと電話が鳴つた。立つて行つた外交係は、やがて戻つて來て、『さア、それぢや、一つ出かけるかな』
「もう來たのかえ」
「うん」
「外交係なんて好いもんだな」荒木は莞爾しながら、『これから一杯飲めるんだね。社の金で三昧への音がきかれるんだね。旨いもんだな」
「何う致しまして――」
外交係はこんなことを行つて、そこにかけてある帽子を取つて、威勢よく靴を鳴して外へ出て行つた。
荒木は話にも飽きて、持つて來た講談本を讀んで見たが、それも面白くないので、事務室を出て、トロコの縱横に通つてゐるところを辿つて、工場の方へと行つた。そこでは大きな構への内に、エンジンが凄しく活動して、何十本と知れない麥を舂く杵が絶えず盛に動いてゐた。大きな篩からは白い粉が雪のやうに落ちてゐた。職工長は職工の働いてゐる間をぶら〳〵と手を後に組んで歩いてゐた。
「これはアメリカのですか？」
「え」

「何うしてもあつちのが好いかね」

「さうですな」

などと職工長は好加減に挨拶した。荒木は杵の盛に動くところに行つて、默つて立つて長い間見てゐた。

次の土曜日曜には、荒木は此方にゐることにした。東京に歸つて見ても、別に面白いこともなかつた。妻の方は若いから、逢ふのを樂みにして、力にしてゐるやうなところもあるが、心臟に病氣のあるかれは、成るべくならばじつとしてひとりで靜かに寐てゐたいと思つた。妻の要求を滿足させずに歸つて來る朝の機嫌のわるい顏を見るのも餘り好い心持はしなかつた。それに別に歸つて行かなければならない用事もなかつた。

今度にかぎらず、かれは時々休日を此方で暮した。その時には、かれはきまつて、あちこちを歩いたり昔の知つてゐる人を訪ねたり沼の畔に行つてぼつねんとしてゐたりした。沼の畔には今度大きな工場が出來るので、大勢人足や大工や車馬が往來した。昔は荒地であつた城址、草藪であつた城址、草や木のこんもりと茂つた中に物凄く殘壕の水が黑く光つて見えてゐた城址、それがこんなに開けやうとはかれは思はなかつた。かれの成長くなる時分には、農に歸した士族の一家族が僅かにその處々を開墾したばかりで、蛇だの蝮だの狐だのが多くそこに住んでゐた。殘つた石壘の傍を通ると、蜥蜴のわるく日に光つた影が物凄く石と石との間に隱れて行つたりした。それが何といふ變遷だらう。明るい派手な公園

が出來たり、外國にでも見るやうなハイカラな養牛場が出來たり、今度はまた百萬圓以上の大きなモスリンの工場が出來やうとしたりしてゐた。本丸と三の丸との境の壕も埋められ、土手も平らにされ、もとは其處からは見えなかつた沼が、公園に行きさへすると、すぐ一目に見渡されるやうになつた。公園には松などが手際よく配置されて、自分の教つた先生の碑や元の藩侯の頌德の碑などが立つてゐた。何うかすると、其處等に散歩してゐる人達は、製粉の半老いた會計係が、ひまさうな顏をして、沼の縁の日當りのところに行つて、默つて沼の方を眺めてゐるのを見ることなどもあつた。

沼も昔とは全く趣を變へてゐた。岸まで一面に深く茂つた芦荻などはもう見られなかつた。水の上に新しく出たがつ藻の芽、ひよつくり浮んでそしてひよつくり沈むむぐり、櫂で輕くあやつつて行く小さな舟、それには依然として昔の面影が殘つてゐて、心を遠く少年時代に誘つて行くけれども、ちよつと見れば、これが昔のあの沼かと疑はれる位であつた。沼の向ふにある名高い躑躅を見に行く舟には、都會からやつて來た若い男や綺麗な女などが乘つてゐた。時には藝者の乘つてゐる舟なども通つた。躑躅のある公園では、赤い旗や赤い提灯などが美しく春風に吹かれてゐた。

ある日曜に、荒木は城址の方に出かけて行つたが、ふと其處に城に縁故のある名高い稻荷があつて、その傍に大きな樫の神木があつたことを思ひ出した。かれの頭には、其時分住んでゐた自分の宅の窓から、いつも夕日の金色の中に黑く鮮かに見えてゐたその大きな木が思ひ出されてゐた。その大きな木の梢から日が蔭れて行くやうにさへかれには思はれてゐた。

その樫の木がとうに切られて了つたことはかれは知つてゐた。しかし根位は堀かへしたにしてもいく

らかは殘つてゐるだらうと思つた。かれは、中學校の裏を通つて、其方の方へと行つて見た。

「稻荷さんは、此の近所でしたね」

あまりあたりの樣子が變つてゐるので、そこで行逢つた人に訊くと、

「すぐ其處です」

成ほど少し行くと、新しい小さな社が見えた。しかしそれが何うしてもあの古い、大きな、屋根の破れた、壁に蛇などのゐた昔の稻荷の宮とは何うしても思はれなかつた。かれは不思議な心持がしながら歩いた。

裏に廻つて、先づ神木のあつたあたりをあれかこれかとさがして見た。しかし、一面に綺麗な麥の畑になつてゐて、それらしい跡は何處にも見當らなかつた。その時分よく筍を採りに來た眞竹の籔のあたりもすつかり畑になつてゐた。

かれはぼツねんとして立盡した。

暫らくしてから、畑に老いた百姓がゐるのを見て、かれは聲をかけた。

「つかんことをきくがね。こゝらに神木があつた筈だがね。枯れて切られたのは知つてゐるけれど、一體、何處等にあつたんだね」

老いた百姓は耳が遠かつた。二三度繰返して、漸く分つて、默つて歩いて出て來たが、十五六間歩いてから、

「此處ですよ、あつたな。根も何も堀つてかへして了つたから、今ぢやわかんねえがね」

「はア、此處かね」荒木は感嘆したやうに言つて、「ぢや、稻荷さんも昔のところとは違ふところへ持つて行つたんだな」
「さうでがんすとも、……元は此處んとこへあつたんさ」
老農はその前の處を指し示した。
「道理で、見當が丸でつかなかつた」荒木はかう言つてまた長い間其處に立盡した。
あゝ家の前に出てゐた六十位の婆さんが、何處かで見たやうな顏だと思つて、立留つて見たが、思ひ出せないので、二三歩々き出して、漸く思ひついて、又引返して、
「杉山さんでしたね」
聲をかけられて怪訝さうに見てゐた婆さんは、「まア、縫助さんけえ？　めづらしい。まア。製粉に來てるとは聞いて知つてゐたけれど、まア、まア。丸でわからねえな。途中で逢つたつてわかりやしねえ。まア、上んなされ、茶でも一杯」かう言つて無理やりに引張り上げられた。縫助といふ稚い頃の名を呼ばれたのも荒木にはなつかしかつた。
「まア、白くなつたなア、いくつだな、縫助さん」
「九」
「四十と、さうかな、私なんかも年を取るわけだな。もう六十と五だからな。まだ、縫助さんが小さい時分には、私も二十代だつたがな」
「早いもんさね」

荒木はかう言つて、「妹さんがあつたけな、何ッて言つたけな、百合さん、あれは何うしなすつた」

「あれは遠方に行きましたよ。大阪の先の何とかいふ處ですよ。あれも、困り者でさ。亭主がわりいもんだから、一生、碌な眼も見ずに終るのさ。子供かな。子供は五六人もあるよな」

「さうかねえ、百合さんが――。まだ若くつて綺麗だつたが――」荒木はこんなことを言つて口を噤んで考へた。その百合といふ子は荒木と同級生であつた。お烟草盆に結つて、赤い鹿の子などをかけてゐた。

これに限らず、荒木の昔を知つてゐる家では、皆なめづらしがつて彼を迎へた。大抵は子息が小學校の教員をしてゐるか、でなけなけば金貸をしてゐるか、でなければ地面や家作で生計を立てゝゐるやうな人達が多かつた。ある家では、八十先になる婆さんがまだ生きてゐて、「まア縫助さんかえ? よく來て呉れた」などと言つて奥から腰を曲げて出て來た。ある後家さんは、堅い養子を貰ひ當てゝ、身代が段々よくなつて、家の周圍なども綺麗にしてゐた。近所の貧しい人ばかりなのに似合ず、自分の住む離座敷を新たに造つてなどゐた。

しかし、さういふ人達も多くはなかつた。荒木は昔の士族屋敷の半は麥畑桑畑になつてゐるのを見た。かれの住んでゐた家も矢張畑になつてゐた。初午の夜に、餓兒大將になつて、自分が太鼓を叩いた小さな稲荷の宮はまだ殘つてゐたけれど、裏の林は切られ、近所の家は壊され、あたりがすつかり畑になつて了つてゐるので、それがその址だとはちよつと思はれなかつた。士族の去つたあとには、百姓か、でなければ市日毎に織物を町に持ち出す機屋などが來て住んでゐた。秋の晴れた日には、唐箕から

もみ売が飛んだり、すくもがぶす〳〵燻つて燃えてゐたり、機屋の物干に紺糸や茶糸がかけて干されてあつたりした。

ある家では、かれの懇意な肥つた妻が死んで、其時分近所に聞はれてあつた妾が本妻に直されてゐた。その時分、若くつて綺麗であつた妾も、もう好加減のお婆さんになつて、『もう私もこんなになつたんですよ』などと言つてゐた。

時の間に過ぎ去つて了つた過去がかれには不思議に思はれた。夢中で、うはの空で、一日づゝ積み上げた月日が、かうした隔りを築かうとは思はれなかつた。しかし、かれはそんなことに心を惱してはゐなかつた。人間て面白いもんだなどと輕く考へた。

唯一人殘つてゐた女の同級生をその士族屋敷の荒れた小さな家に發見した時には、かれは昔の少年時代に歸つたやうな面白さうな態度で半日話した。女は亭主に死なれて、娘と息子とを二人かゝえて、賃仕事や糸繰などをして其日を送つてゐた。息子は町の小學校の教員をしてゐた。娘は頰の赤い肥つた大きな女であつた。かれがたづねて行くと、『母さん、荒木さんが』と言つて、いつも奥に驅け込んで行つた。

來た當座は、よく其處に出かけて行つたものだが、ある日若い同僚の一人に、『荒木さん、好いところを見附けましたな』と何氣なく言はれたのを氣にして、正直なかれは、それから成べくそこに行かぬことにした。

町から士族屋敷の方へ行く處には、もと大手の門のあつた跡があつて、土手と壕とがつゞいてゐたの

であるが、それが今ではすつかり平ひらにされて、城址の公園の方へ行く大きな街道が開通せられ、その一部には町家が軒を並べて、奥に、大きな活動寫眞館が建てられた。初めかれはその近所にある旅館に下宿した。青い菜の畑、娘達の赤い襷の常に見える桔槹の井戸流し、野から無造作に引抜いて來た殺風景な庭の松、さういふものを見ながらかれは毎日暮した。夜は活動の辯士の聲が賑かに手に取るやうにそこから聞えた。何うかすると、かれはひとりで活動に出かけて行つたりした。時には中で同僚の一人に邂逅して、翌日、社で「荒木さん位になつても、矢張、活動は面白いもんですかね」などゝ言はれた。

沼のほとりにある名高い躑躅の花の咲く頃には、それを見に來る東京の客が汽車の着く度にぞろ〳〵と下りた。派手なコートや、帶や、綺麗に結つた髮や、二人つれの雪駄や、二枚草履や、春の日に光る蝙蝠傘などが絶えず續いた。さういふ人達は、停車場から町を通り越して、かれの下宿してゐる傍の路を通つて、晴々とした田圃に出て、沼の入込んで入つてゐる船着から、例の小さな櫓の舟に乘つて、かつ藻や蘆の新芽の出てゐる沼を渡つて行つた。社に出かける途中で、かれはさういふ連中の中に知つてゐる人の顏をよく見かけた。

ある日、電話だといふので、「僕にかえ？　僕に電話？」念を押して立つて行つて聽話機を耳に當ると、元氣な高い聲で、「君は荒木君かえ？　僕、誰だかわかるかえ？　分るまい？　兎に角めづらしい人なんだがな。君が逢へば、びつくりする人だがね。ちよつと來給へな。すぐ此處にゐるんだよ。停車場で

電話をかけてるんだよ」

何うしても笑つて名を言はないので、ちよいと賴んでレールを越えて行つて見ると、其處に綺麗な二十六七の意氣な細君を伴れて、新しい袷の洋服にステッキを持つた紳士が莞爾笑つて立つてゐた。

「ヤア、君か？　何時、お歸りでした？」

「なあに、昨年の暮歸つて來たんだがね。びつくりしたらう、僕だとは思はなかつたらう」

「本當だ。君だとは思はなかつた。」傍の細君の方を見て、『奥さんかね』

「去年歸つて來て、つい此間結婚したばかりだよ。獨身で通さうと思つたけどもね。親類の奴がやかましくつてね。つひ、降參しちやつた。」から言つて大きく笑つて、その細君を引合せて、『矢張、日本が好いね。何處へ行つたつて日本のやうな好いところはありやしないよ。木は多いし、氣候も好いし、山水は綺麗だし、ロンドンだとか、パリーだとか言ふけれど、矢張日本が好いよ。僕なんか丁度十五年あちこつちにまご〳〵してゐたがね、矢張故鄕が戀しいよ。鮨や、天ぷらや、まぐろの刺身が好いよ。……しかし、此處ぢや話せない。折角來たんだから、何處かで、晝飯を食はうぢやないか。好いだらう、一時間や二時間』から言つて、その昔の友はかれを一緒に停車場から誘ひ出した。

それは矢張同鄕のもので、役所に屬官をしてゐる時分、殊に懇意にしてゐた男であつた。外交試驗に及第して、支那からフランス、イギリス、スペイン、トルコなどとあちこちの公使館に長い間書記生をつとめてゐた。デンマークにも行つてゐたことがあつた。それが去年久し振で高等官になつて歸つて來た。

二人は並びながら歩いた。あとから靜かに細君がついて來た。それを荒木はをり〳〵待つてやるやうにした。

「躑躅は？」

「もう行つて見て來たんだよ。士族屋敷や、城趾なども歩いて來たよ。變つたね。僕の家なんかありやしないよ、もう。城趾に來た時には、感慨無量だつたよ。ウオトルローの古戰場に行つた時以上だつだよ。故郷却是似他鄉つていふ支那人の詩があるが、唐人の寢言だなんて思つてゐたが、實際さうだよ。僕なんか知つてる奴は一人もゐないんだからね」

「本當だね。しかし、杉山がゐる筈だが」

「杉山、あいつ、此方にゐるのかえ。ふん」などと言つたが、別に逢つて見やうとも言はなかつた。

「何處か好いんだえ？　一體」

「吉田屋だらう、矢張」

「吉田屋つて言へば、それ、高田がそこの女中にくつゝいて、評判になつて學校にゐられなくなつた家だね」

「さうだ、さうだ」

「さういふ料理屋でさへ、追憶があるんだからな、だから故郷は忘れられないな」

「本當だ」

吉田屋では、大廣間の隣りの八疊で、三人は午飯を食つた。鯉の洗ひに蒲燒に菠薐の酢の物に鯰のす

つぽん黄――それにも故郷のなつかしい追憶があつた。庭を隔てゝ大きな欅の若葉が美しく見えた。

「君は飲まんのかえ？」

「僕は心臓がわるくつて酒は駄目だ」

「晩酌もやらんかえ？」

「晩酌どころぢやない」コップについたビールを指して、「それに半分位のむと、動悸がして仕方がないんだから」

「衰へたもんだね。僕はビールぢや駄目だよ。いくら飲んだつてこれぢや役に立たない。ウヰスキーはあるまいな」手を鳴して女中を呼んできいて見て、「矢張、無いかな。ぢや好い酒を持つて來て與れ、地酒ぢや困るよ」

時々口を挿んでも、相手にされないので、細君はさびしさうにしてゐた。友達は、「お前、遠慮せずに、飯を食ふ奴は食つて了へ。日本の女は遠慮していけない」こんなことを言つてゐたが、不意に、「お前、金持つてるか？」

「え」

「いくらある」

細君が懷中から出して渡す財布を友達は改めて見て、「何あに、歸りの汽車賃さへありや大丈夫だ。おい荒木君、此處に藝者がゐるんだね。一人二人呼んで見やうぢやないか」

「碌なのはゐませんよ。詰らないからよした方が好い」

「なあ、呼ばうな」今度は細君の方に向つて言つて、「こいつ、これで三味線は少し彈くんだよ。」

やがて藝者が二人來て、唄を唄つたり三味線を彈いたりした。荒木はその友達の細君が長唄をかなり達者に彈くのを見た。日の暮れる頃まで騷いで三人は其處から出た。友達はその席で、藝者に外國の賓女の話や、イタリーのキャンキャンの話などを面白さうに話してきかせたが、それが半ば老いた荒木の頭に長い間絡みついて忘られずに殘つてゐた。

天氣は好し、風はなし、今日の日曜は少し遠くの方に行つて見やうと荒木は思ひ立つた。一里ほど行つたところに、雷電神社がある。そこにも矢張此處と同じやうな鮒や鯉や鯰の澤山に捕れる沼がある。少年時代に、かれは父親や祖父に伴れられてよく其處に行つた。その時分の人達は、參詣をかこつけに、其處だの、高取の天神だの、もう少し遠くの方では、佐野の元々大師あたりまでよく出かけて行つて、河魚料理か何かで一杯飮んで來るのを樂みにしてゐた。荒木はそこに行つて其時分の樂しい追憶に耽らうと思つた。

袷に羽織にインバネス、そのインバネスが邪魔な位に好い暖い秋の日和であつた。途中で、ふと沼に沿つた寺に寄つて見る氣になつて、山門を入つて、楢林をぬけて、墓地の方へと出て行つた。人の影もなくあたりはしんとしてゐた。自分の敎はつた漢學の先生の石碑の前に立つて、長い間じつとしてゐたかれは、やがて前に、石段の向ふに、濃い紺色をして沼の水の一とところ林の間から見えてゐるのを見た。林からは葉を篩した日影が絣を織るやうにチラチラと地上に落ちてゐた。

沼の方をぼんやり眺めて、また引返して、今度は觀音堂のある前に行つて、其時分自分等の惡戯をした、和尚の大事にしてゐた大きな蜂の巣のあつたあたりを眺めて、それから覗くやうにして、靜かに本堂から庫裡の前を通つて行つた。あの和尚が今でも生きて其處にゐるやうな氣がした。庫裡の傍の見覺えのある井戸では、寺男が鋤などを洗つてゐた。

沼に添つた一里の道、それは靜かで、明るくつて、そしてしんとしてゐた。林があつたり、村があつたり、竹籔があつたりした。ある小學校の廣場には、靜かな穩かな日が流るゝやうにさし込んでゐた。そこで、先生達がボールなどを投げてゐた。頬かぶりをした百姓の曳いて行く車の音は、その車が向ふに隠れて了つても、まだ靜かに聞えてゐた。

沼尻の卑濕地には、其處にも此處にも家鴨が飼つてあつて、芦や藻などが茂つてゐた。ギヤ／＼と喧しく啼いて、泥濘の中を歩いてゐる家鴨の群をかれは長い間眺めて、「これが皆雁だとか相鴨だとか言つて賣られて行くんだな」などと考へた。

一里の道も、心臓の弱いかれには、さう近いとは思はれなかつた。社のある近所に行つた時には、かれの額は汗ばみ、足は勞れ、心臓の鼓動は高くなつてゐた。かれは靜かな森を見た。その中にある荒れた古い社を見た。昔とはちがつて淋しい人ッ子一人ゐないひろい境内を見た。

澤山あつた筈の茶屋も店を開けてゐる家は一軒しかなかた。汚い着物を着た上さんがかれを奥の暗い一間に案内した。

雑魚を叩いて、それを饂飩粉でこねて、簡單なさつま揚のやうにしたやうなものが此處の名物であつ

た。其處にお參りをしたものは、皆なそれを竹の皮に包んで土産にした。それを子供心にも旨いと思つてゐた。

訊いて見てもちよつとわからないので、手まねぎまでして形容して見せると、

「あゝ、あれですか。あれも、昔は澤山ありましたがな。今ぢや、もう、あんなものを召上るものがありませんでな。とうにやめやした」

「さうかね、ないのかね、旨かつたがな」

殘念さうにかれは言つた。かれは沼の一端の見える室に、一人ぽつねんと座つて、袂から朝日の袋を出して、それに火をつけて靜かにすつた。子供がさで網で頻りに沼尻の川を掬くつてゐる上には、明るい日影が晴れやかにさしてゐた。

「何にしやすべ」

「鰻は出來るかえ」

「へい」

「ぢや、鯰と鰻を見れないか」

かれは其所に落付いて二時間ほども坐つてゐた。酒を飮まないかれは、やがて出來て來た鯰と鰻で飯を食つた。

心の中には流れて行く年月といふことが堪らなく感じられるのであるけれど、それを言ひあらはす言葉を持たないかれは、唯ぽつねんとして、左の手を頰に當てゝ、茫然として唯あたりを見てゐた。夕日

が段々かれの皺の多い横顔を照した。

ある垣根の傍を通りながら、かれはふとあることを思ひ出して立留つた。それも矢張日曜日の遠足の歸りであつた。その日は、子供の時分、よく泳ぎに行つた田圃の方から、釣りに行つた堀切の方へと出かけた。途中にある寺は燒けて了つてなかつたけれど、自分達がよくその傍を通つて歩いた鼻の缺けた地藏尊はまだ依然として殘つてゐた。その日もかれはかなり歩きつかれた。殊に物を食ふ店のあたりにないので困つた。日が暮れる時分、かれは漸く士族屋敷のところに來て、そしてその垣根の前を通つた。

「さうだつたな、此所だつたな、あの女と逢つたのは――」

かう思ふと、今まで少しも思ひ出さなかつた追憶が流るゝやうにかれの頭に簇つて來た。それはもうかれには初戀ではなかつた。丁度かれは東京に出やうとする頃で、女は何でも其の近所の店屋の娘だつた。色の白い肌理の細かい柔しい女であつた。かれは二人の關係の世間に知れかゝつてゐるのを其時此上なく恐れてゐた。女が平氣で絡みづいて來るのも邪魔になつてゐた。

女の泣いた姿が今でも其處に立つてゐるやうな氣がした。

「可哀相なことをした。やさしい女だつた」かう言つて考へて、「何つて言つたけな、さうさう、お初、お初つて言つたつけ。何所に行つたかな」こんなことを考へながら、かれは薄暮の空氣の中に長い間立盡した。

若い同僚達は、かれの遠足の話を知つてゐた。後には、それを種にして、よく荒木にからかつたりした。

「さうして一人で歩いて面白いですかな」

「面白いことはないよ。しかし、昔行つて知つてゐるところは、行つて見たいやうな氣がするね」

「だつて、ぼつ〳〵田圃の中を歩いたつて仕方がないでせう」

「さうぢやないよ。君方も、僕位の年ごろになるとわかるよ」

東京に歸る日が續いて、此方にゐない時には、「遠足の方が大分お留守になりますね」などと同僚達は言つた。

ある同僚は、「でも、荒木さんと歩くのも好いけれど、何んにもない田圃の中を歩いたり、つまらないお宮なんかをめづらしがつたりするんですもの。僕等にもわからない」かう言つて、川の縁の方に行つた時の話などをした。

理事は理事で、

「でも、君方にはさうだらうけれど、荒木さんにはいろんなことが思ひ出されるから面白いんだよ。さういふ心持は年を取つて見なければわからないけど……」こんなことを言つて、「それで彼方此方歩きましたか、佐野の方へも行つて見ましたか」

「え、もう大抵歩きましたな。此間は大新田の方へ行つて見ました」

「何にもないでせう」

「それは何にもありませんがな……」荒木は笑ひながら言葉を濁すと、

「しかし、のんきで好いですよ。荒木さんなんかもう何にも心配はないんだもの。さうして、遠足でもしてゐりや好いんですものな」

「何うしまして――」

荒木は頭を掻いて見せた。

矢張東京に行かずにゐたある日曜日の翌日であつた。午飯の時に荒木は同僚に言つた。

「昨日はひどい目に逢つちやつた」

「何うして？」

「何うしてつて、えらい事だ」

「何うしたんです？」

「えらゝ變つちやつたもんだ」

ひとりで合點してゐて、容易にその内容を話さないので、

「何方へ行つたんです。一體、昨日は？」

「なあに、日向(ひなた)の沼の方へ行つたんだがね」

「よく沼の方へ行きますな」

「なあに、あそこに地藏さんがあるアね。あそこへ行つて見やうと思つて行つたんだよ。昔ね、父親(おやぢ)につれられて行つたことがあるから」

「矢張あるでせう」

「あるにはあるよ、しかしそのことぢやないんだよ。あそこへ行つてね、日向沼の周圍をくる／＼廻つてね。地藏さまへ行つたんだよ。好い天氣だつたし、あそこらには松原があるし、好い遠足さ。それに、地藏さまの前のところに、ちよつとした家があらあね。そこで、ゆつくり遊んでね。日の暮れる頃出て

來たんだよ」

　話しかけて、煙草をゆつくりふかして、「ところが途中で日が暮れて了つて、高根に出たのが、八時頃さ。ところが、びつくりして了つた。あそこは實に開けた。實によく開けた。あまり灯が多いから、もう町へ歸つて來たのかと思つたね。ところが、そこらにある灯は皆なだるま屋ぢやないか」

「あはゝ」

　同僚は皆笑つた。

「えらく開けたもんだ。何所の家にも、一人づゝ色の生白い奴がゐて、喧しく聲をかけるぢやないか。そして市から歸つた機屋達が皆なそこに寄つて騒いでゐるぢやないか。びつくりしちやつた」

「それで、引張られたんですか」

「よせば好いのに……。つい出來心だね。綺麗な二十位な奴がゐて、羽織の袖が切れるまで引張つて離さないぢやないか。仕方がねえ、まアちよつと一服吸つて行けと思つて、上るには上つたが、上つて見ると、さうは行かないでね。いとゞない財布の底をはたいちやつた……。來還もまた引込みだ……」

「あはは」

　若い同僚達は大きな聲をして皆な一齊に笑つた。

「何うでした？　好い女でしたか、心臟は大丈夫でしたか」

　仲の好い一人はかう言つて、傍に寄つて來て、荒木の肩のところを輕く叩いた。皆はまた一齊に笑つた。



紅の森

長田幹彦

……舞臺は唯見る一面に吉野の櫻雲で、薄紅色のまぼろしの間には、今にも揚雲雀が朗らかに囀りつれながら舞ひたちさうな春草の萌えた山膚がみえてゐる。出語りの大夫の頬に寄る皺の數までよまれるやうな明るい光が何處からともなくその書割の面にくわつと燃えて、甲に入り呂に移る唄聲は三味線の忍び音にまつはりながら綿々とした情緒の波を織りだしてゆく。ぬけるほど色の白い狐忠信と、靜とがそのなかで初音の鼓をかせに使ひながら狂蝶の翅のやうに艶やかな衣裳の袖をふるはしてゐるのである。

大阪からきた若い役者の連中で見物に來てゐた舞妓の里菊はそこまで見てくると、芝居のなかに溢れた溫氣にむされて、ぐらぐらと眩暈を催して來た。昨夜富永町の大千賀のおはなで春の夜寒に曉方ちかくまでも雜魚寐の夢を結ぶことが出來なかつたせいか、今日は朝から風邪ごゝちで、ふだんから體の弱い性

女はともすると頭が熱つぽく浮いてくるやうな氣がしてならないのであつた。じつと眼を据ゑてゐると、舞臺のうへにあるものはいつの間にか薄い靄のやうになつてくるくる旋轉し始める。役者の顏も天井から垂れ下つた紅や靑の幟も重苦しく眼先へ押し重なつて、體ごと何處か深いところへ沈んでゆくやうな氣がして來る。彼女は到頭我慢が出來なくなつて、櫻の花櫛をさした京風の重い髷をその儘がくりと土間の棧のうへへ俯向けにしてしまつた。重ねた兩方の手の甲へのせた額はじつとり汗ばむでうわつらだけが火のやうに燃えてゐた。

「ほ、里菊はん。あんたどうおしたんえ。」すぐ後に坐つてゐた老妓の松吉はびつくりして、彼女の肩へ手をかけながら訊いた。

「どないにもしまへんけど、私、眼がまふて……。」里菊は俯伏せになつたまゝ切なさうに呟いて、

「なあ、へ、姐はん。えらい濟まんことどつけど、どうぞ冷たい茶ひとつよんどくりやはいな。」傍にゐた藝妓の春菊は惜しさうに舞臺から眼を離しながらありあふ茶椀に茶を注いでだした。里菊は

「へ、おほきに。」と、消え入るやうに云つて、慄へる手先でそれを受取つてそうつとひとくち唇へ含んだが、そのさまを見てゐた松吉は心配さうな顏色になつて、

「あまり時候が暖いさかい、のぼせたんやな。顏色もえらう惡いえ。それやつたらもう無理せんと、早うお歸りやす。明日はあんた都踊の出番やないか。」

春菊はその言葉を橫合から引取つて、

「さうどす、さうどす。茶席にも出んならん大事な體や。早う歸つて、おかあはんにあんじよ云ふて、寢んどゐやすな。」

里菊はさう云はれるといつもいつも親切にいたはつて呉れる姐はん達の情がしみじみ覺えられて、なにかなしに薄く眼を濕ませてしまつた。とつて十五の感じ易い胸には、春の日の惱ましさが今日此頃は自分でもそれと知られるくらゐ深くふかく根ざして、ふとした拍子にも妙に頼りない心持ちが眼先を暗くしてしまう。

里菊はやがて心をきめて、

「ほんなら濟んまへんけど、私ひとりお先へ往なして貰ひまつさ。」と、云ひながら、友禪の振袖を引絞つてしなしな起ち上つた。

まわりにゐた觀客達は緋毛氈の懸布のなかゝら立つ舞妓の美しさに思はず此方へ顔を振向けた。

ひとつ先の桝にゐたおつれの小菊はそのさまを氣の毒さうに見てゐたが、これもすらりと立ち上つて、

「姐はん、私もう往んでよろしいか。里菊はん氣分が惡うおしたら私そこまで送つていてあげまつさ。私、おはなで大榮はんへ廻らならなりまへんさかい。」

二人はその儘そつと裏の戸をあけて、姐はん達に見送られながら廊下へ出た。

本家茶屋の門を出ると、眞蒼に芽をふいた柳の樹陰からはすぐ下に加茂の河原がひろびろとうちひらけてみえる。向岸の矢尾政や千茂登や西石垣の家並は薄靄に煙つて、灯の影がまるで紅い繪の具を

ゝらせたやうにその底に點々と滲んでゐる。そして四條の橋の袂まで歩いてくると、彼等はその時になつてはじめて今宵もまた東山の頂に夢のやうな薄月がのぼつてゐるのを知つた。薄月の影は町の灯の色に溶けて、そこいらには狐でも化けて通りさうなほつかりした春風の吹くなかに、都踊を見にゆく人や、夜櫻へ行く人が肩と肩とを摺りあはせながら歩いてゐる。

「ほ、えらい人どすやないか。こないに行かはるのがみんな京の人どすやろか。」小菊は呆れたやうに可愛いらしい眼をくるくるさせながら云ふ。

「さうどすなあ、大方京の人どつしやろえ。」と、里菊は言葉少なに答へて、氣が浮かぬやうに道の片陰をえつては歩いてゆく。

「そやけど、それやつたえらいことどすえなあ。こないにして數ねて見たら、大方なんぼほどゐやはりまつしやろな。」

「そんなん分らしまへん。」

「ほゝゝ。私も阿呆やな。……ほ、あこから來やはる人はおのぼりはんえ。怪體な風をしとゐやすやないか。ほしてえらう醉うとゐやすえなあ。」

小菊は彼方から春風のなかを千鳥足に歩いて來る本願寺詣らしい四五人の地方人を指さしながら無邪氣な聲で笑ひだしたが、そのひと連れが醉つたまぎれにさも物珍らしさうに彼等の方へ寄つてくるのを見ると、今度は急に顏色をかへて里菊の袂をとりながら小走りに道の向側へ驅けぬけて行つた。

縄手から富永町へ入る横丁の角まで來ると二人はそこで右と左へ別れなければならなかつた。

「なあ、へ、里菊はん。ほんなら私こゝで別れまつせ。早う家へ歸つてあんじようにしとゐやす。ほして明日また逢ひまへういな。」

「おほきに、ほんならよろしう。」

「さいなら。」

ひとつの木履（こぼこぼ）の音はそのまゝ横丁の宵闇へころころと消えてゆく。

たつたひとりになると里菊は氣分は惡いながら急にうすら寂しくなつた。この儘屋形へ歸つて臥床へ入る氣にはどうしてもなれない。それにその晩は月例の六部講なので、晝でも小暗いあの奥の間では今頃池松のおかあはんや、大利の爺さんが集まつて、陰氣な鐘を叩きながら和讃をあげてゐるに相違ない。さう思ふと彼女の耳には地の底へ滅入つてゆくやうなその鐘の音が聞えて來て、さうしてゐても胸がうづくやうに寂しくなつて來るので、到頭また群衆を慕つて我れにもなく四條通へ歸つて來た。

歩いてゐるといくらか氣持ちがなほるやうなので、足に任せて圓山まであがつてみると、さすがに廣い公園の樹の間も行樂を追ふ人の群で一杯になつてゐた。白鶴、澤の鶴などゝ銘酒の名を書いた小旗は茶店々々の軒にひらめいて、紅毛氈の映りはえる葭簀の陰からは炙ものや酒の匂ひと一緒に

「お寄りやす。」

「おはいりやす。」と、鼻へかゝる尻あがりな聲で婢衆達が群れつどふ客を呼んでゐる。廣場には玩具を賣る露店や、手品使ひ、猿まわしのやうなものまでが、眞黒な人の群を呼び集めて、風船の笛、小供の

喚く聲、さては又商人の賣聲などが一脈の雜音になつて、燃えのぼるカンテラの煙と一緒に祇園社の森の方へ流れてゆく。

名代の枝垂櫻はもう少しづゝ散りかけてゐた。柵の周圍には篝火の火影に幾組となく紅毛氈を敷いた花見連れがあつて、孫子のありさうな老婆までが浮かれて三味線を彈いたり亂舞したりしてゐる。雪のやうな花びらは時折り微風につれて篝火の煙にもつれながらその群のうへゝはらはらと散りかゝるのであつた。

とある群の前まで來かゝると餘り騷ぎが面白さうなので里菊もつい足をひかれて立寄つてみた。そこには下京あたりの小商人連の花見とみえて、三十からみの眉を落とした女房達が茶屋から借りて來た椽臺のうへゝ坐つたり腰をかけたりしながらぎやあぎやあ騷いでゐるのであつた。箱重につめた肴も大方は空になつて、煮ぬきの卵ハ殼や、盃の散亂したなかで今ひとりの男が紅手拭を肩へかけて妙に色づくりながら踊つてゐる。膝をくづした女づれの頰には淫らな酒の醉ひがほんのり燃えて、節面白い流行唄がその口から次々と唄はれる。

里菊は少時の間群衆の後から延びあがつてみてゐたが、その時、自分のすぐ傍に靑く剃つた頭がみえて、時々ほの白い顏がそつと此方を見上げるのに氣がついた。と、みると、それは屋形の寺に當る宗海寺の了念といふ小坊主だつた。年はまだ十三だつたが、出家には惜しいほどの美少年で、人並すぐれて小柄なので、黑の法衣を着た姿がまるで遠忌の折の侍童のやうに可愛かつた。

「ほ、了念はんやおへんか。今頃何處へ？」里菊はぽうつと赧くなつて、それでも紅の靑く光る唇には

微笑みを浮べながら小聲でつぶやいた。

了念はさう云ふ里菊の顏をうつとり見上げてゐたが、急に顏をそむけて、

「私、山までお使に來たんや。」と、膠もなく云ひ放つた。なるほどさう云へば、紫の鹽瀬に華頂山の櫻の紋どころを白く染めぬいた袱紗のかゝつた大文箱を大切さうに小脇に抱へてゐるのである。

「さうどつか。ほしてこれからお寺へお歸りやすのか？」

「う、……」了念は唇を引きすぼめながら無邪氣に答へる。

「ほんなら一緒にそこまで行きまへうな。私も家へ往なんなりまへんさかい。」

里菊はこの妙な出逢ひを四邊の人にぢろぢろ見られるのが氣恥かしさに胸を踊らせながらそのまゝ又歩きだした。

了念はちよつと考へてゐたが、さりげない顏でとことこ隨いてきた。

「なあ、へ、了念はん。あんたはん山へ何の御用でおいきたんどす？」里菊は默つてゐるのも變だと思つたのか、やがて歩きながらこんな事を訊きだした。

「何の用て、そら云へんがな。」了念は人目が薄くなつたので里菊の方へ寄つて來ながら云つたが、「まあ、えゝわ。あんたのことやさかい、云ふてもだんないやろ。私な、長いこと宗海寺に置いて貰ふたけど、今度は近いうちに伊勢のお寺へ行かんならんのえ。ほんでに今日は一日山へいてた。」

「へ、伊勢へおいきやすて？　阿呆らしい、嬲らんとおいきやすな。」

「ほんまや。なんであんた嬲るもんかいな。」了念は不平さうに云つて、「伊勢の四日市たら云ふとこの大

けなお寺へいて、そこの子になんのや。伊勢て遠いとい處やぜ。あんた知てるか。」

「知りまへん。そやけどほんまにおいきやすのか。」里菊はまだ信じないやうに云つたが、了念が薄月の光に青頭を傾けながら默つて歩いてゆくさまを見ると急に心細さうな調子になつて、「なあ、了念はん。ほんまのことゞつか。好かんこと。」

「なんぼ好かん云ふたかて、もうあかんのや。私かてそんな遠いとい處へいきたいことはないのやけど、その尼はんの子にならんことには、もう宗海寺に置いてやらん云はるさかい、……。」

その言葉は云ふ了念よりも聞く里菊にはひとしほ悲しく聞きなされた。なるほどさう云はれてみればたしかにありさうなことである。いつぞやも宗海寺のお住持はんが法事で來られた折に、家のお母はんにこんなことを云うてゐられるのを聞いたことがあつた。了念は孤兒で、賢い子やさかい、どうかして田舍のえゝ寺を貰うてやつて、夏安居や秋の加行の折には御本山へあがれるやうにしてやつたら行末はきつと見込みのある奴や。あんな美しい子やさかい、萬が一をなごにでも魅入られたらもうどだいあかん。などゝ云つてゐられるのをちらりと耳にしたことがあつた。それにうちうちの噂では、宗海寺も先住が極道をしやはつたゝめに今では内證もだいぶきついやうな様子である。さう考へて來ると里菊にも了念のだしぬけな言葉がやつと確かな事らしく思はれて來て、それと一緒に口には云へぬ悲しさが胸に迫つて來た。もうずつと以前から知らず識らずのうちにこの美僧了念のことを何とか思つてゐたやうな氣もして、遠い遠い伊勢へ行つてしまうと聞くと、別れるのがひどく悲しいのであつた。

道はいつの間にか平野家の横から智恩院の山門の前へ出て、二人はうわの空で歩いてゐながらそれと

氣がつく頃には、小堀の御門へ下りる廣道へ出てゐた。そこらは往き通ふ人影も稀で、薄月の射し迷ふ夜の闇には、道の兩側に咲き亂れた櫻がしつきりなしにちらちら音もなく散つてゐる。そして時偶行き逢ふ人は朧ろげな落花の間を歩いて來る二人をばあやかしとでも見るのか、誰れも彼も一度は必ずほの白い顏を此方へ振向けてゆく。

二三歩あとへ遲れた了念はふと里菊に追ひ縋つて、何と思つたか、小聲で

「舞妓はん。」と、呼びかけた。

「そんな怪體なよびやうておすか。私には里菊ちう名がありますかい、その名を呼んどくれやす。」

「ほんなら里菊はん。」

「好かんこと。」さう云ひながら里菊は何氣なく振り向いたが、その時、了念の顏が餘り近く寄り添つてゐたので、思はず少し肩を斜めに引いた。了念の法衣には、山で佛前の鏡張りへでも坐つてゐたものと見えて、沈香の甘い匂ひがほのかにしみ殘つてゐた。

「里菊はん。私、伊勢へ行くのは厭やなあ。京がいつち好きや。」

「ほんならもう行かんとおゝきやすな。私もあんたはんがお往にやしたら寂しうおすわ。」

了念はそれには返事をしなかつた。唯物思はしげに首を傾げて、鳳の木齒の下駄で小石を蹴散らしながら歩いてゐたが、今度はまた此方を振返つて、

「なあ、里菊はん。私、をなごはん嫌ひえ。」

「なんでどす？」

「なんでどすて、をなごはんと一緒に道を歩いてると、何んやしら怪體なことがあるかして、よう人がみよるやないか。ほ、又見ていきよる。怪體な人やなあ。」

里菊はそれに答へるさへ何となくうすら悲しかつた。

縄手の屋形の前まで歸つてくると、了念はつなぎ團子の紅提灯のともつた格子先へ立止つて、名殘惜しさうにしてゐたが、やがて、

「なあ、里菊はん。しばらくあんたとこへ寄せて貰うてもよろしか。あんたのうちのお母はんはえゝもんよんどくれやすさかい、私好きや。」

「どうぞお寄りやすな。そやけどそないに遅うなつても大事おへんか。」

「だんないとも。山へ行くといつかて御本堂廻りして歸るのやさかい。」了念は事もなげに云つたが、ふと氣づいたやうに、「そやけど、なあ、里菊はん。さつきに云ふた伊勢へいくちうこと誰れにも云はんとおいとくれやすや。まだ隠してあるのやさかい、和尚さんに知れると、私、きついめに叱られんならん。ようてな。」

「私、云はしまへん。」

里菊はさう云ひながらそつと小格子を開けた。なかからは今まで戸口へ來て待ちかねてでもゐたやうに鐘の音が寂しく聞えて來た。

「今歸りました。おかあはん、宗海寺の了念はんが來やはりましたえ。」里菊はそのまゝ遊暖簾の下をくゞつて奥の方へ入つて行つたが、その時、奥では和讃の聲がふつりと途切れて、おかあはんの聲が、

「あ、お歸り。あんた何處へ行てたんえ。今南座から喜久彌はんが戻つて來やはつて、あんた氣分が惡いいふてさきへ往なはつたちはるさかい、皆して心配してたところや。」

「えらい濟んまへん。あんまり氣分が惡うおしたさかい、山へいてました。あこで了念はんに逢ひましたんどつせ。」

「さうか。ほしてもう氣色はすつぱりしたんか。」

「へ、もう苦しいことおへん。」

二人の話は暖簾の陰でかはされてゐるので向ふ側の小障子にはだらりを垂らした里菊の姿が薄墨で描かれた玉菊の亡魂のやうに映つてゐる。鐘の音は陰氣に沈んでも、春の夜の艶めいた心持ちはそこにも佇んでゐるのであつた。

やがておかあはんは小障子のところから顏だけだして、

「ほ、了念はん。よう來とくれやした。私はまだお勤めが濟んまへんさかい、あんた奧へいて遊んでゐとくれやす。あとで私もいきますさかい。」

「へ、おうきに。」了念は紫の袱紗を恭しく持ちかへながら滑稽けた樣子をして挨拶した。

里菊はそのまゝ了念を上へあがらせて、階子段の下の暗い小廊下から自分達の居間の方へ連れていつた。龍行燈の光はほの暗く緣板にしみついて、そこまで來ると、二階座敷には誰れぞお客が散財してゐると見えて、二挺ばかりの三味線の音が何處からともなく洩れ聞えてきた。

舞妓や藝妓達の居間は加茂川に面した八疊の奧座敷だつた。すぐ隣りの臺所口から河原へ出られるや

うになつてゐて、二丁ばかり下で落ちる疏水の水音がそこの窓下からひそひそと匂ひあがつてくる。そこには舞妓の喜久彌に花勇、それに藝妓の里子の三人が今芝居から歸つて來たばかりと見えて、だらりや、友禪の襲ねを落花のやうに四邊へ引散らしながら夢中になつて芝居ばなしをしてゐるところだつた。暖かさにのぼせてしどけなくぬぎかけた着物の胸からは、紙燭の光のなかに、緋鹿の子の襦袢が艶めかしくこぼれて、その間にみえる足袋の白さまでが妙に春の宵らしい氣持ちを湧かせる。

思ひがけない了念が入つて來るのをみると、彼等はぴたりと話をやめて、

「ほ、了念はん。お越し。」と、一樣に云つて皆座を開　だした。

「なあ、へ、此處へ來て坐つとくれやす。」と、眞先に喜久彌が云ふと、今度は花勇が、

「私のそばへお坐りやすな。私、長いこと逢はしまへんなあ。」

了念は文箱を持ち扱ひながら問うちを胸はしてゐたが、にこにこ笑ひながら到頭里菊の傍へ引添うてぴたりと坐つた。

「私、こゝがえゝ。里菊はんがいつち好きや。」

「ふわッ、なんで里菊はんをそないにお好きやすのか。」花勇はすぐさまなぢるやうに云ふ。

「それやつたら知れてますやないか。」喜久彌はその言葉を受けて、小さな妬みを眼に輝かしながら、「そら里菊はんがいつち美しうおすさかいなあ。」

了念はさう云はれると急にてれたやうに外方(そつぽ)を向いてしまつた。

花勇はわつと噴き笑して、

「ほ、きつい氣！　お坊んさんがそんなことお云ひやしてゝ大事おへんか。和尚さんが今度めに來やはつたら云ひまつせ。」

皆はその頓狂な聲でくすくす笑ひだしてしまつた。

喜久彌は里菊の傍へ摺り寄つてきて、氣分はもうよろしいかなどゝ頻りに心配さうに問いてゐたが、やがて

「なあ、里菊はん。私ら今こゝでせんど云ひあひをしてたんどすが、あんたはんもひとくち入つとくれやすな。今日の芝居でな、「堀川」がありましたやろ。あのなかで猿まわしになつて出ていかはるお俊と傳兵衛はほんまに心中しやはるのどつしやろか。それとも助からはるどつしやろか。あんたはんどつちやゝとお思ひやす。」

　里菊は餘りだしぬけな問ひなので答へ兼ねたが、やがていつぞや大阪のお客から聞かして貰つた話を思ひだして、

「そらあんたはん、心中しやはるにきまつてるやないか。義太夫はんが云はるゝ文句にも、ほれ、何たら云ふた、「名を繪草紙に……名を繪草紙に……やつす姿も女夫づれ、名を繪草紙に聖護院」や。そや、「森をあてどに辿りゆく。」ちはゝるやおへんか。ほんでにあこの聖護院の森で死なはるのやわ。」

「さうどつか。そやけど聖護院に森てありまつか。私、せんど銀閣寺へ連れつて貰ふた折に聖護院とほりましたけど、何もあらへんかつたわ。」

「そら昔のことゞすやないか。」里菊は笑ひながら云つたが、ふとまた別なことを思ひだして「そやけど、

私こんなことも聞きましたえ。聖護院いはゝるけど ほんまはそやなうて、糺の森で死なはつたちう話もあるのどすてな。心中するのやつたら糺の森の方がよろしいわ。」

「私もそないに思ひます。せんど葵まつりの折にいてみましたけど、加茂のお宮は芝居よりも綺麗なわ。あこで壽三郎はんの忠信と、福助はんの靜が心中しやはるのやつたらさぞ美しうおつしやろなあ。」

喜久彌は今まで觀てゐた南座の舞臺をまざまざと眼先に描き出してゐるやうな眼つきをした。

「阿呆らしい。そんな怪體なことておすか。忠信の惚れてやはるのは靜やないさかい、心中しやはる道理がないわ。」藝妓の里子は笑ひながら口を入れる。

「姐はん、さうかて、二人とも美しいうつくしい人どすやないか。」

「ほゝゝゝ。あんたも阿呆やなあ。美しい人同志かて必ず心中しやはるときまつたもんやおへんえ。」

花勇の罪のない云ひ方はみんなを笑はせた。

了念は怪訝さうな眼つきをして云ひあひをしてゐる妓達の顏をみくらべてゐたが、やつと眞顏になつて、

「なあ、その心中ちや何んや。私、分らへんね。」

「ほゝゝゝ。こら出來ましたな。ほんまに了念はんには分りまへんやろ。」里子は手を拍つて笑つて、「あんたはん方そんなこと知らいでも宜しいわ。お坊んさんどすさかい。」

「さうか。そやけどお坊んさやかて、世の中のことは何んでも知らいではいかんて、私のとこの和尚さんは云はゝるえ。」了念はきよとりとしたてましやくれた顏をして云つた。

「ほゝゝ。あの顔が可笑しいわ。今にあんたはんにもそれがよう分るやうになりまつせ。」

「そんないけず云はんとちよつと敎へて吳れたらよろしいやないか。……ほんなら寺へ歸つてから了順はんに訊んねたろ。」

「阿呆らしい。お寺でそんなこと云ふたら、あんたはんきついめに叱られまつせ。ほゝゝ。」喜久彌は卯の花模樣の袖で唇を抑へながら笑つたが、やがて、「そないにお云ひやすなら、私があんじよう敎へてあげますさかい、私のねきへ來とくれやす。そんでなうては話が遠うて出來しまへんえ。」

了念は素直に立ち上つて、それまで膝のうへゝ載せてゐた文箱を床の間の傍の大鏡臺の處へ置いて、つかつかと喜久彌のわきへ寄つて行つた。そしてぬぎすてただらりをしゆつしゆつと音を立てゝ後へ押しやりながら、喜久彌の肩に纏れるやうに坐つた。

喜久彌は思はず一座の顔を見廻はしたが、急に嬉しさうな笑顔になつて、

「あんたはん、いつ見ても綺麗なわ。私にあんたはんの眼おくれやはい。」

了念はてれて、喜久彌の唇を指ではじきながら、

「そんないらんこと云はいでもよろしい。それよりも早う云ふとくれやす。」

「あ、痛。そないにきつうおしやはんかてよろしいやないか。」喜久彌は又袂で口を掩ひながら、「ほんなら敎へてあげますさかい、そのかはりいつぺん私の云ふとほりにおしやすな。私の云ふことをなるべく早う云ふとみやす。こないに云ふのどつせ。聖護院の森、糺の森、信田の森。」

「そなこと云はれいでどないにするのや。聖護院の森、糺の森、信田の森。」

「まちよつと早う云ふのどすがな。ひと息に云はなあきまへん。」

「聖護院の森、糺の森、信田の森。」

「信田森の、狐を釣らうよ。ほゝゝゝ。」喜久彌はぽうつと上氣した頰で笑ひ崩れながら、いきなり眞白な了念の手をとつて狐のやうに引きつらせ、法衣の下から白の下着の裾を尻尾のやうに手早く引出して、そのまゝ小さな了念の肩をじつと抱きすくめた。そして了念が振り離さうと足掻くのを猶ほも抑へつけながら、

「心中云ふたら、こないにして女はんと男はんと一緒に死なはるのどつせ。分つてますか？」

了念はやつと喜久彌の手を振りもぎつて、肩にかゝる美しい振袖の陰でせいせい息を切らしながら、

「阿呆やなあ。そんなんが心中やつたら、私もうやめにする。法衣もなにも破れてしまうやないか。」

一座はその様子をみてわつと笑つた。その聲に答へるやうに、河原の方からは柔い春の夜風が吹き寄せて來て、ことことと窓の障子を鳴らして行つた。向ふ岸の先斗町で唄ひさんざめく絃歌のどよみが、その風のあとを追ひながら鴨川を渡つて遠く聞えて來た。

そんな多愛のない惡巫山戯に耽つてゐるうちに里菊はまた少しづゝ氣分が惡くなつて來た。脊筋にはぞくぞく寒氣がしてゐながら、頰ばかりぽつぽとほてつてゐる。しまいには皆の笑ひ聲がだんだんと遠くなつて、濕んだ瞳の底には色の白い、眼の美しい了念の顏ばかりがぽうつと滲んでくる。彼女は眩暈がするので窓際の鏡臺のところへ行つて、うすら寒い風の當るやうに障子を細めにあけながら、衣裳簞笥の前へがくりと體をもたせかけてしまつた。

皆の話聲や笑聲が其時にはもう遠くの方から忘られた記憶のやうに彼女の耳へ響くばかりであつた。彼女の眼の前にはやがて熱に浮かされた不可思議な幻影の世界がひろがつて來た。さつき芝居でみた吉野山の舞臺面のやうに、そこには煦々とした春光に彩られた綠の森がある。樹々の梢からは日の光が斑のやうに隙洩れて、黄いろい樹幹の立重なつた奧には繪に描いたやうな淺い丹塗の加茂の御宮が玩具ほどに小さくみえてゐる。すぐ眼の下には眞四角な神泉があつて、雪とも紛ふ白砂の底から、小さな水の球がぷくぷく湧き出てゐる。四邊には鳥の聲さへ聞えず、耳にしみ入るやうな靜けさが漲つて、どこをみても眞綠の氣がぼうつと眼界をかすめてゐるやうな氣持ちがする。

ふと見ると、彼女の側には狐忠信の着つけをそのまゝに、淺黄襦子の脚袢をはいた一人の子が打倒れてゐる。よくみるとそれは了念で、片袖の八つくちの處からはふだん持つて歩いてゐる母親ゆづりの水晶の珠數が半分顏をだしてゐる。

彼女は吃驚して、思はず、胸を躍らせながら、

「了念はん。」と、叫んだ。

答へがない。

顏をのぞき込んでみると、了念の雙眼はいつぞや大彦のおかあはんが死なはつた時のやうに白眼だけみえて、黑眼は上眼蓋の睫毛の陰へ隱れてゐる。

里菊ははつとして、ひよつとしたら了念はんと心中に來たのではないかと氣づいて、おろおろ聲で今一度、

「了念はん。」と、呼んでみた。

何處か遠くで多勢の人のわあわあ笑ふ聲が聞える。……………

「はゝゝ。怪體な、里菊はん、あんたはん居眠りして寐言云ふてやはるえなあ。」と、云ふ了念の聲でふと眼をあけてみると、紙燭の影には里子や喜久彌や花勇が呆れたやうな笑顔をしながら此方を眺めてゐて、すぐ眼の前には了念がさつきの文箱をまた小脇に抱へて突立つてゐる。

「眼が覺めましたか。あんたも居眠り坊主やなあ。私、雨が降つて來たさかい、もう往にまつせ。ほんならあのことを誰れにも云はんとおゝきやすや。私、往ぬ前にま一度寄せて貰ひまつさ。」

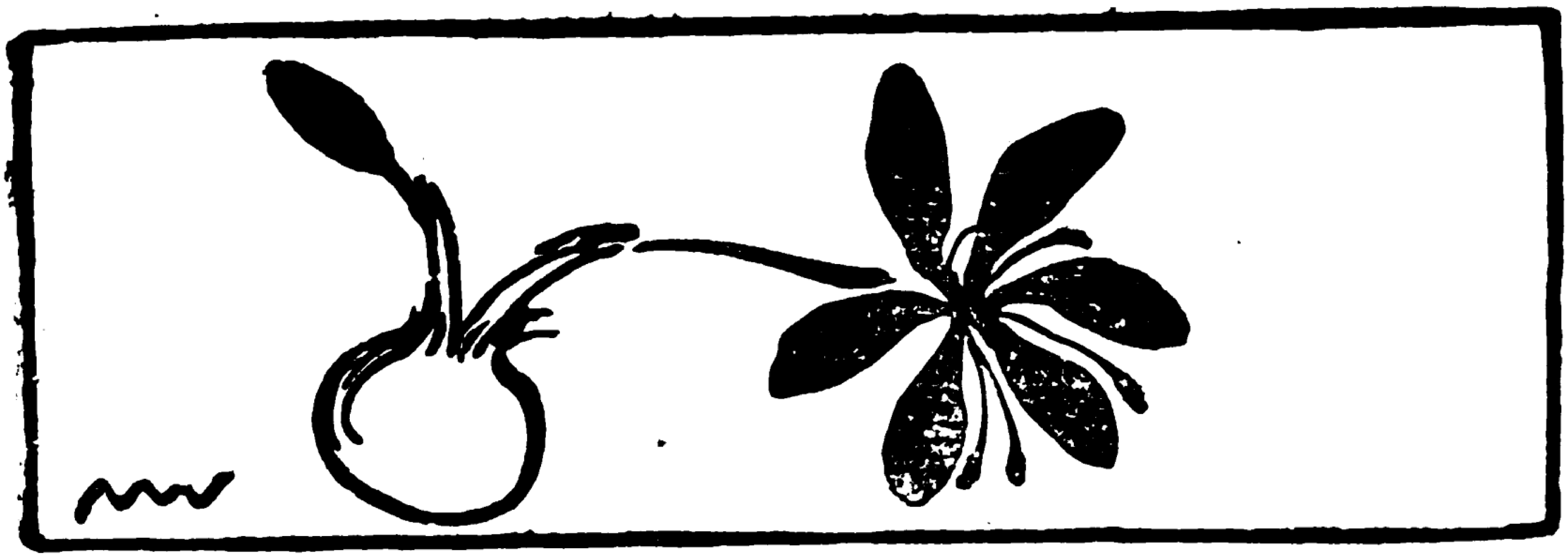
了念は里菊の耳に囁いた。

その時、覺めきらぬ里菊の耳にはまた臺所口の方から

「お君はん。お糸はん。早う干しものを入れとくれやす。雨が降つて來ましたえ。」と、慌たゞしく叫ぶおかあはんの聲が聞えた。

と氣づいて、細めに開けた障子の隙間からのぞくと、空には薄月が殘つてゐながら先斗町の灯はいつの間にか銀のやうな雨の脚に煙つて、三條の大橋にはもう二つ三つほの白い傘が動いてゐる。河原にふりまよふそゝぐ雨の音はまるで春が忍び足に歩いてゆくやうだつた。

里菊はそつと了念の法衣の裾を抑へて、涙ぐんだ眼でその顔をみあげた。（をわり）



最初の女

正宗白鳥

鶴屋の一人息子の猛男は、たゞれ目や皮膚病の多い漁師村の鼻垂れ小僧の中では際立つて愛くるしかつた。はち切れそうな頰つぺたは林檎のやうに紅味を帶び、齒並みのいゝ口元には邪氣ない微笑を漂へてゐた。

「あの子は大きうなつたら、石本先生のやうになつて、さぞ女に好かれるこつちやらう」ある日道傍で立話をしてゐる漁夫の女房達が、辨當箱と鞄とを肩に掛けて學校通ひをしてゐる猛男を顧みながら、聲高にこんなことを言合つた。猛男は子供心にも極りの惡い思ひをした。

「女子は臭い」彼れは子守女の脊に縋付いてゐる時分から既にさう感じてゐたので、歳を取るにつれてます／＼厭らしく思ふやうになつてゐた。家へ出入りする村の女を嫌つた。女が入つた後で風呂へ入ると氣持を惡るがり、祖母か母の外の

女には辨當の握飯も握らせなかつた。餅搗の手傳ひに來た女が汚い手で餅を千切つては揉み丸めてゐるのを見ると、毒を付けられてゐるやうな氣がした。

夏になると、婆さんでも若い女でも、腰卷一つで汐に燒けた肌を露出にして外を歩いてゐるのが、彼れには面を向けられぬほどに醜く思はれた。殊に鐵漿をつけた女が大きな乳房を出して、嬰兒に含ませてゐるのを見るとぞつとした。

猛男の家の練塀に沿うた崖の下には、八軒屋と呼ばれてゐる十軒ばかりの長屋があつて、其處はこの村の中でも取別け不潔な場所になつてゐた。何の蔽ひもない共同の雪隱が路傍に設けられてゐたり、崖から流れ落ちる汚れ水が溜つてゐたりした。窓からぶら下げられた襁褓や襤褸が天日に照らされて、惡臭を放つてゐた。そして、漁夫が沖へ出た後では、女房達は食ふ事の外には何もしないで、冬の晝間は崖を後に日向ぼつこをして、夏の晩には家の中の蚊を避けるために近くの海際へ出て囂しい話に時を過してゐた。

猛男はその邊を通るのが氣味が惡かつたが、海の方へ出るのには、其處が一番の近道であつた。夏、水泳の行歸りは裸足でその臭い土を踏まなければならなかつた。梅雨時分には人間の身體中から出る限りの汚い物をこね返してゐるやうな泥濘に下駄の歯を沒して通らなければならなかつた。

女共は彼れの顏を見ると、挨拶をしたりお愛相を云つたりしたが、彼れは何時も知らん顏して行過ぎた。

ところが、ある日この八軒屋の女の子供が四五人ぺちやくちや喋舌つてゐるのが彼れの耳に觸れた。

「猛さん」だの「鶴屋のぼんさん」だのと云つてゐた。ふと振返ると、皆んなが此方を見ては笑つてゐた。

「きいさんが會ひたいんぢやとい」と、その中の一人が云つた。

「きいさんは彼處へ隱れとるがな。呼んで來うか」と、一人が云つた。

猛男は妙な顏して顧み／＼其處を通り抜けて家へ歸つたが、きいといふ女の事を考へて、子供等の擧動をも考へてゐると、何か知ら變な氣持になつた。きいはこの頃海向うから渡つて來て八軒屋の端に住んでゐるお松といふ後家さんの娘である。石屋の隱居がわざ／＼この村へ親子を連れて來て、食はせてやつてゐるので、その隱居は時々この家へ泊りに來てゐる。酒を飲んで唄を唄つてゐることもある。きいは母親に似て容色がいゝからもう五六年したら、若い者が抛つては置かんと誰かゞ云つてゐた。

猛男はかねてちら／＼聞いてゐたきいの身の上を思出して、きいの丸い顏をも思出したが、この女の子と自分とが何かの關はりがあるやうに、名前を並べてゐるのが不快で堪らなくなつた。蛞蝓が水蛭に吸付かれてゐるやうな氣がした。そして、假りにもそんな汚らしい話が家の者の耳に入らぬやうにと願つてゐた。夕方八軒屋の一人が女の子を連れて唐春を借りに來た時にも、その子が母親の手傳ひをしながら、猛男の方を見てニヤ／＼笑つてゐた。

翌日もその翌々日も、八軒屋の側を通ると、女の子がわざ／＼傍へ來ては、揶揄ふやうにきいさんがどうのかうのと喋舌つた。ひどい奴は裾をまくつて見せたりした。

「猛さんはきいさんが一番好きなんぢやとい」と一人が云へば、

「けなりからうがな、お前は」と他の一人が云つた。

二三人が囃立てながら、猛男の道の邪魔をして飛廻つた。猛男は小石を拾つて投付けたが、さうすると、彼等はます／＼面白がつて二三丁も付いて來た。

猛男の心は欝陶しくなつた。道できいの姿を見ると遠廻りしてゞも避けるやうにしたが、突如に出會ふと目を尖らせて顔を背けた。きいは笑ひを噛殺してゐるやうな顔付をして驅け出した、きい一人の時ならまだしもだが、連れのある時には、子供心にも猛男は浮世の狹いやうな感じがした。相手が男の子で、先方から喧嘩を仕掛けるのなら、此方でも負けてはゐないのだが、女の子の揶揄冷笑はどうして凹垂らされるか、彼れには考へがつかなかつた。それも外の事で無禮な眞似をされたのなら、毆りつけるか突飛ばすかして懲らしてやるのだが、きいの事から手出しをするのは何だか後目たかつた。「何故そんな亂暴なことをした」と祖母や母に詰られた時に明ら樣な言譯の出來ないのが恐ろしくて、憎々しい女の子の仕打に對して腹癒せが出來なかつた。そして、學校へ通ふにも濱へ出るにも、毎日ぐる／＼遠廻りして、只八軒屋を避けるより外に方法はなくなつた。

猛男は七つ八つの頃から、大阪朝日の續物の話を一回づゝ祖母に聞かされるのを樂みにしてゐたが、次第に聞かされるだけでは滿足しなくなつて、自分自身でぽつ／＼拾ひ讀みするやうになつた。

「こないに仰山にいろ／＼の事が書いてあるのに祖母さんは何時も少しゝか話して呉れんのぢやな」と云ひ／＼、長い一回を讀むには骨が折れた。わからん言葉は根掘り葉掘り祖母さんに訊いて困らせた。

「戀の敵(かたき)と云ふのは何のこつちやらうな」と訊くと、祖母は笑つて答へなかつた。が、前後の筋や祖母の答へ惱んでゐるのから想像すると、朧ろげに分るやうな氣持がした。續物の中の女や男が互ひに云つてゐることが、祖母の口から摘撮んだ筋を聞くのとは比べ物にならぬやうな面白さを含んでゐた。それに挿繪の女は奇麗だつた。厭な臭ひを放たなかつた。手に執つて顏を押付けて讀む新聞の紙の臭ひは次第に懷しくなつて、學校から歸ると、待兼ねて讀耽つた。

「もつとすら〳〵つと讀めて、書いてあることがよう分るとえゝがなあ」と、讀みながらも時々抵牾(もどか)しい思ひをした。

でも、長い今樣の續物を一つ讀終つて、新奇な昔物語に移つた頃には、餘程讀み易くなつて、興味も更に加はつた。机の前で讀本の復習をしてゐる時でも寐床へ入つた後でも、讀んだことが面白さうに思出された。お姬樣の戀病や、不義者のお手討や、忍び男の見あらはしや、昔にはこんな變つたことがあつたのか知らんと、ふと疑ひを起して、皆んな譃つ話かも知れないと、詰らなく思つたりした。

二三ケ月過ぎると、八軒屋の女の子等は道で會つても、前のやうに煩い惡戲はしなくなつた。猛男は遠廻りを止めて、其處を通り拔けるやうになつた。

ある蒸暑い晚に、一人で濱の方へ納涼(すゞみ)に出たが、月が冴えてゐて、見馴れてゐる自分の村でありながら、何處も繪に書いたやうに奇麗に見えた。滿汐は岸を洗つて、流れ寄つた藻屑が碎ける光の中をふはふは漂つた。猛男は小石を投げなどして磯を傳つて遊んでゐたが、ふと、誰れかゞ二人連れで埠頭場の

方へ來て、其處に繋いであつた小船に乘つて纜を解いた。

猛男は何氣なく近寄つて、月の光に透かして見ると、一人はさいの母親のお松であつた。一人は石屋の隱居らしかつた。さいが乘つてゐないので、尚更變に思ひながら、猛男は暫く跡を見入つて、うつとりして櫓の音を聞いてゐた。

歸りにも八軒屋の前を通つたが、誰れも外で涼んではゐなかつた。大勢の御詠歌の聲と鉦の音とが家の中から洩れてゐた。何時もこのあたりを見向きもしない猛男も、足を緩めて窓の方を見上げた。さいの家の小さい窓は開放されてあつたが燈火は點いてゐなかつた。ふとした好奇心から爪立足して近づいて中を覗いたが、寢息が聞えるばかりで、人の姿は見えなかつた。蚊遣りの烟の流れ出てゐる左手の家では、御詠歌がます〳〵はずんでゐた。醜い顏形をしてゐながら誰れも皆いゝ聲を出してゐた。

猛男は暫く立留つて聞惚れてゐたが、ふと後の方で自分を呼ぶ聲がした。顧みると家の下女が側へ寄つて來て、

「坊さんは此處で何を見とんなさるんかな。方々搜して居つたのぞな」と、手を執らうとした。

「わしは何も見とりやせんがな」

猛男は下女の腋の下をくゞり拔けて、逸散に家へ驅けて歸つた。

「おゝ猛か、何處へ遊びに行つとつたのぢや」と、祖母や母に訊かれて、叱られて、いゝ加減な返事をしながら、蚊張の中へ藻綠込んで、今見て來た月夜の景色を思出して樂んでゐると、遲れて歸つて來た下女は、お松後家が石屋の隱居に連れられて胎兒を墮しに行つたといふ村の者の噂を傳へた。

「どうせそんなこつちやらうと思ふとつた。此間家へ來た時に、もう餘程大きな腹をしとつたから」

「無事に生んだとて、仕末がつくまい。お松にしてもあんな老人を何時までも手頼りにしちや居れまいからな」

こんな話を耳に入れながら、猛男は蒲團の中で戰いてゐた。海向ひのある村に兒墮し婆のゐることはかねて聞いてゐたので、今見た船が其處を指して行つてゐると思ふと、月の光つてゐる海も物凄い色を帶びて來た。そして、兒を孕んだり殺したりせねばならぬ男や女の關係が八軒屋の泥濘道よりも汚らしい恐ろしいものと思はれ出して、自分は一生そんな忌はしい女の側へも寄らぬと尊とげな決心をした。

血みどろになつた赤ん坊のむごたらしい姿を彼れは夢に見た。赤ん坊の腹から留め度なく湧出る臭い血汐は海の水をも眞赤に染めた。

その翌日學校への道すがら八軒屋の方へ目を注いだが、大きな女も小さな女も朝から兩肌を脫いでガヤ／＼騷いでゐた。家々の窓から窓を蔽うて大きな網が干されてゐて、網からは雫が垂れてゐた。ふと網の蔭から何か食べながら顏を出したきいは一寸見ても分るほどに白粉を塗付けてゐた。

猛男はつと其處を通過ぎて、木蔭から不思議さうにきいの樣子を竊み見した。女の方では見られてゐるのに氣がつかないらしく、箸に突差した南瓜をしやぶつてゐたが、食ひ盡くすと、干してある網の端で口端を拭うた。そして振返つて近所にゐる友達を呼立てゝ、自分で差圖して錢投げの遊びをし出した。棒切れで地べたに線を引いて、それを的に一文錢を投げて勝負を極めるのである。八軒屋の仲間中

では小奇麗な服裝をしてゐるきいは、その日も浴衣に紅い帶をちやんと締めてゐたが、遊びにかゝると、浴衣の袖をまくつて、むつちりした白い腕を露し、足を浮せて、泳ぐやうな身體付をしては、的を目かけて錢を投げた。的に當てることも巧みだつたが、投げる時の手足の樣子が他の女の子とは全で違つてゐた。

猛男は見飽かぬ思ひをして、きいの順番になるのを待兼ねては見入つてゐた。きいの手には次第に一文錢が殖えたが、と、やがてそこへ網の蔭から腰卷一つの婆さんが出て來て、「またそんな惡戲をしやがつて。きいが一人で皆んなの錢を捲上げやうと思ひやがつて。……今まで取つたのを皆んなに戻してやれ」と怒鳴つて、きいが赤んべをするのを見ると、「この畜生承知せんぞ」と擢みかゝらうとした。

きいは素早しこく逃げて「これで飴玉を買うて皆んなに頒けて上げるから、皆んな一緒に來なよ」と差招いた。

猛男は駄菓子屋の方へ驅けて行く彼等の姿が見えなくなつてから歩き出した。

きいの錢投げの樣子に、猛男は生れてこの方味ひ知らぬ興を覺えたので、二日三日つゞけて、日に幾度となくそのあたりへ出掛けたが、またとかの面白い遊びを見ることが出來なかつた。何時も子供の泣聲がしたり、汚い人間が出たり入つたりしてゐた。

幽靈のやうな顏したきいの母親を其處に見たのは餘程の日數を經た後であつた。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御記附を乞ふ

踊れ！踊れ！

面白やオリオンの滑りの快さは春の空に翔るつばくらのごと
面白やオノトのペンの無礙自在は春の風を姙みて走るヨットのごと
爛熳たる春の花の下蔭に　萬年筆の勝利を歡樂とを
祝ふて踊れ！

ラ、ラ、オノト！
ラ、ラ、オリオン！



オノト萬年筆
無飾金六圓
飾付金七圓以上

オリオン萬年筆
無飾金貳圓八拾錢
飾付金參圓廿五錢

萬年筆特製
アテナインキ
金廿錢
送料各金拾貳錢

東京日本橋通
大阪東區博勞町

丸善株式會社

京都三條通麩屋町
福岡市博多上西町

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

（中付四の一）

(中付四の二)

小山内薫序　曾我廼家五九郎序
松崎天民序

池内萍綠著

淪落の男

■新刊忽再版出來■　中判三百五十六頁　正價五拾錢　送料金六錢

或る時は新聞記者たり、或る時は俳優であつた著者が、最近十年の間に、四人の女の上に經て來た情事の懺悔錄である。其の赤裸々にして大膽なる告白は、讀者をして卷を掩ひ卒讀に堪へざらしむ戀物語である。名づけて『お白粉とペンと』『鴨綠の河畔にて』『謎詩のたはむれ』『旅役者の群から』と云ひ、何れも狂はんばかりの戀に痩せし小說的事實物語である。敢て尤ゝ興味ある珍書として大方に薦む

鈴木三重吉作

女鳩桐の雨　合冊

約八百頁　價九十錢　送料八錢

■松崎天民著■

忽三版　**同棲十三年**　四六判布裝特製　正價金八拾五錢　小包料金八錢

三版　**社會觀察 萬年筆**　四六判四百六十頁　正價金七十錢　郵稅金八錢

再版　**女八人**　四六判四百六十頁　クロス天金函入　正價金壹圓　小包金八錢

四版　**人生探訪**　四六判三百五十頁　正價金六十五錢　郵稅金八錢

六版　**淪落の女**　四六判瀟洒裝幀　正價金五十錢　郵稅金六錢

發行所　東京日本橋區鐵砲町六番地　振替口座東京壹五〇五六番　**磯部甲陽堂**

(中付四の三)

千古不磨の一大叢書 ■ 國民教育の最高權威

列聖全集

會員募集

入會申込 四月末日限

歴代天皇の御製、御撰、宸記、詔勅、宸筆、悉く之を祕府寶庫に索り、網羅謹輯して玆に振古未曾有の一大聖典成る。乾綱炳として日星の如く、宸藻燦として耳目を照す。是寔に國民の明鑑にして、またまさに教育の典謨たるべきもの、誰か此懿訓靈矩の偉大なる感化を庶幾せざる者ぞ。敢て江湖の諸賢に賛同を悃ふ。

御製集 十二冊
現存せる御製集の祕籍全部と、あらゆる歌書史乘を審案して謹撰せる御製とを收め、之に添ふるに神代諸神の御詠と、歴代皇后中宮の御歌とを以てせり。

御撰集 六冊
歴代至尊の御著述をはじめ宸翰、詩文、連歌、聯句、狂詠、文字項にいたるまで、苟も御撰として確證あるものは統て網羅謹輯せり。

宸記集 二冊
歴代聖上の御日記を謹集大成せるもの、なかにも伏見宮家御祕藏の宸筆本花園院宸記の大冊は、同宮家の御允許を得て拜寫謹載せる最貴重書也。

詔勅集 二冊
洽く浩瀚なる載籍を獵渉審案して、歴代の詔勅宣命悉く之を謹輯し、毫も遺漏なからんことを期せり。

宸筆集 一冊
歴代天皇の御眞筆にして、特に傳來の正確なるものを精選し奉り、之を鮮明なるコロタイプ版に謹製せるもの也。

皇室御撰解題 一冊
帝國大學史料編纂官和田英松氏多年の苦心に成れるもの、歴代天皇及皇族の御著述の解説考證を下して正確詳密を極む。

名譽賛助員

伯爵 土方久元
侯爵 久我通久
侯爵 徳川賴倫
子爵 入江爲守
男爵 澁澤榮一
法學博士男爵 阪谷芳郎
文部次官 福原鐐次郎
法學博士 井上友一

編纂主宰

宮中顧問官貴族院議員 平山成信

編纂顧問（イロハ順）

文學博士 芳賀矢一
文學博士 萩野由之
文學博士 上田萬年
文學博士 三上參次
文學博士 關根正直

略規

■非賣品（全二十四冊 二篇）（一冊五百乃至六百頁）

■裝幀岡田三郎助畫伯意匠菊判總羽二重製三方金。羽二重下の模様十色刷。莊嚴高雅空前の美本。

■來る六月上旬より毎月一冊づゝ刊行し、會費は一ヶ月金貳圓五十錢とす。但外に送本料を要す。

■申込金貳圓を要す。但此申込金は最終の會費に加算す。

規定及見本は御申込次第進呈す

東京市麴町區内幸町一丁目三番地
列聖全集編纂會
主幹 中塚榮次郎
電話新橋二一八七番
振替東京二九八八八番

（中付四の四）

K男爵夫人の遺書

野上彌生子

田丸さんは今朝の列車で歸られました。私の今度の咯血が決して心配すべき性質のものではないから、と云ふ事を幾度も〳〵斷言した上、親切な醫師としての優しい慰めと、いたわりの言葉を殘して置いて歸られました。私はたゞ默つてそれを聞いてをりました。けれども一と筋の涙が左枕の上の眼から、下の眼に連なつて熱く溢れ出るのを隱す事が出來ませんでした。私はもうすべてを察してゐたのですから。何もかも分つてゐたのですから。

私の泣くのを見て看護婦は側の藥瓶などを並べてある小卓から、ガーゼのきれを取つて眼を拭いて呉れようといたしました。私は手眞似でそれをそのまゝ顏の上に載せて置くように命じて、ぢつと白い小ぎれの下に眼をつぶつてをりました。金盥の殆んど半分以上を充たしたこの間の咯血の時から、もう覺悟はしてゐました。胸の臟の中に濃み腐れて絡らんでゐた苦しい塊りを、悉く吐き

出して仕舞つた後の、さつぱりした快い疲勞の中に、一番に感じた事は自分の死ぬ時が來たと云ふ事でありました。良人と共に田丸さんが馳けつけて下すつて、これまで幾ら頼んでもきいて下さらなかつた歸京の事を、御自分から話し出して氣安く許したのも、私の信念を堅くさせた一つでありました。

「おひ〳〵お暖い時候にもなりましたから、今度の事が少し落付いたら東京へお歸りになるもよろしいでせう。やつとお望みが叶つたわけですね。」

醫者はいつもの柔らかい調子で何氣なく斯う申しました。けれども私はこれはこの海岸から私を死骸にして連れて歸らないための用心に過ぎない事がよく分りました。けれどもそれと共に私の心には或不思議な落ちつきがありました。この病氣になつてから五六年この方、有らゆる考へや行ひの底に根深く横はつてゐた運命の自覺が、すべての神經をそれに馴れさせてしまつた爲めかも知れません、いよ〳〵間近に迫まつて來た死に對して、割合にあわてもしなければ怖れも、慄きも、悲しもしない自分を見出してゐます。こんな樣子でしたら私は案外靜かに死んで行けそうな氣がいたします。斯う申しますとあなたから、これぢや何故お醫者樣の立ち際に女々しい涙などを見せたのだと反問されるかも知れません。いゝえ。その時計りぢやありません。私はたえず涙ぐんで計りをりますもの。何を見ても、何を考へても直ぐ泣きそうになります。けれども私の涙の本統の意味がお分りになつたら、そうは咎めないで下さるでせう。私のこの涙は死ぬのが悲しくて流れるのではなさそうで御座います。怖ろしくて泣くのでもありません。此世の執着を捨てきれないために湧く涙でもありません。この二つの眼から絶えず浸み出る暇かい、柔らかい不思議な液は、四十年近くの年月の間に接觸した現在のすべての物に對する私

の魂の告別なので御座いませう。人に、光に、空氣に、草に、花に、木に、壁に、疊に、器具調度に、長い左樣ならを云はうとして、斯うして流れ出る涙なのだらうと思はれます。本統に私は今とぼ〳〵と辿りつくした自分の『生』の野の細い路の果てに立つて、一歩先きの暗い穴に足を蹈み込む瞬間前、佇んで振り返つて、靜かな一瞥を過去に投げようとしてゐるやうなもので御座います。私のつけた足跡は一寸と見には割合にまつ直で單純で、少しの曲折も波瀾も見出されないで續いてゐます。人には幸福な𠮷しい生涯を送つたものと思はれるでありませう。それを思ふと私の心は痛みます。云はうようもない苦悶を覺えます。私はそんないゝ人になつて死ぬる身ではありませんから。私は今その事を痛切に感じます。而して平穩らしい、無事らしい足跡の底に隱されて來た自分の虛僞と罪を顧みて戰いてゐます。もとよりこの苦悶は決して今新らしく生じたものではありません。私の生涯の大部分——結婚生活のすべてを通じて私の上に落ちてゐた黑い影でありました。足に結びつけられた重い鎖でありました。私は幾度この怖ろしいもの、悲しいものをふり落そうとして藻搔いたでせう。けれども弱い心と卑怯な怖れがとう〳〵今日まで、この墓の戶口まで、それを引きずつて來させたのでありました。一言で申せば、私は良人にある秘密を持つて暮らして來たのでございました。斯くつもりはなかつたけれども、打ち明ける勇氣を缺いた爲めに、一つの噓僞を作つてしまつたのであります。私は今度の咯血で肺の中の腐れた血の塊りを吐き捨てたと同じように、この隱れた罪を打ち出して仕舞はないでは死んで行かれない氣がいたします。でなければ良人は今まで信じて吳れてゐる通り、貞節な妻、死の瞬間まで彼を愛した——彼一人のみを愛して來た二心のない優しい妻としての私の幻影をいつまでも破らないでゐませうから。

私は死んでまでも良人を欺かなければならなくなります。そんな重なる罪がどうして犯されませう。私は最後の時の來ぬ前に早くすべてを打ち明けなければなりません。而して私の罪の宥しを乞はなければなりません。それが一番いゝ事で、又この場合何より大切な事だと云ふ事を私の理性がよく分つてゐます。それでゐながら、これまでに押しつめられながら、私の今の心は矢張りある臆病な躊躇を捨てかねてゐます。ディスイルージョンの後の良人が思ひやられるからであります。それは餘りに痛ましい、みじめな打撃でなければなりません。良人がどれ程私を愛してをり、尊敬して呉れてゐるかを知つてゐるだけそれだけ、その結果が怖くなつて參ります。良人の身と魂の上に、それが原因して何か取り返しのつかぬ悲しい事でも起りそうな豫感さへします。本統に恐ろしい、想像するだけでも堪えられない事です。私は良人を愛してゐますから。この秘密に關係なしに初めから愛して來たのですから。私は考へました。考えて苦しみました。罪を告白して死んで行き度いと思ふ私の願ひは、良人のためとよりは自分のためではないかと思うて悶えたのでした。自分の鎖を絶つて、身を輕くして死んで行き度いために、私はそれを良人に結びつけるものではないでせうか。自分の胸に苦しく湛えられて來た汚いものを吐き出そうとして、良人の身と魂に吹きかけるものではないでせうか。身動きの出來ぬ苦痛が私を壓します。私の思ひ迷うた心は脱する事も出來なければ、そのまゝ靜止する事も出來ない陥穽の底でたゞ震えてゐるので御座います。私はこの中からあなたの事を思ひました。而して大變いゝ事を思ひついたように嬉しく感じました。私はあなたにゐらして頂いてすべての事を打ち明けたり御相談したりしようと思つたのでした。けれどもその考えも軈て變りました。私の衰弱したこの身體はとてもこんな感情のこ

み入つた長い話をする事は出來ますまいし、その上私の發聲は日増しに困難になつて來てゐます。田丸さんは何とも仰つては下さいませんが、これは病毒がだん〳〵喉頭を犯して來た兆だと云ふ事を私はよく知つてゐます。どちらにしてもゝう口から口の話は六ケしう御座います。私は決心いたしました。而してこの手紙を書き殘す事にいたしました。結局こんな種類の告白に於ては、控え目になつたり、臆病になつたりしがちな談話よりかは、手紙の方が正直に滯る所なく私の心の動き方を傳へるだらうと思ひます。私が死んだらどうぞ一番にこの手紙を御覽下さい。同時にお願ひが御座います。あなたが一應これに目を通して下すつた上、良人に見せるのが本統だとお思ひになつたら、すべての事情を打ち明けてあの人の手にお渡し下さいませ。もし又良人がこれに依つて受ける打撃に就いて、私と同じ恐怖をあなたも同様に感ずる事が御座いましたら——過去は過去に葬つた方がいゝとお考へになりましたら、火にでも入れて下さいませ。すべてをあなたの理解のある鋭い批判にお任せいたします。どちらにしても私はこれで本統に安心して死ねる事になりました。けれどもあなたに取つては可なり迷惑な役をふり當てられた譯でせうと考えてお氣の毒に存じます。どうかお許し下さいませ。たつた一人の友達としてあなたを尊敬し、愛してゐるものゝ、最後の希願を受け入れて下さいませ。私はあなたを信じて書き殘します。而して信じて死んで參ります。

話は可なり遠い過去に歸らなければなりません。丁度良人との婚約の出來た年で、私が十八の夏の事でしたから、殆んど十五年近くの昔の偶然な出來事で御座います。全く偶然と云ふ言葉がその事を一番

よく形容するもので御座いませう。夢よりも不意に、五月の空の驟雨よりもあはたゞしく、渦巻いて消えた情熱(パッション)の波でありましたもの。戀と云ふ名さへ當てはまるかどうか分らない位ゐの瞬間の閃きなのではありますが、とにかくその不思議な魔法じみた機會に、婚約の良人に與ふる筈の大事なもの――最初の接吻を盗まれてしまつたのでありました。私は初めから順序だてゝお話しなければなりません。

その頃私の父は南歐のある首都の公使として母と共に任地にゐましたので、私は女の兒のない母方の伯父の家で氣隨な、可なり甘へた少女時代を送つてました。小さい頃には方々外國の土地を連れて歩かれたのだそうですけれども、そんな記憶はほんの僅かしか殘つてゐませんでした。けれども父がそんな公職にあるのと、母の家が同じように外務省に縁の近い官吏と云ふので子供の時から外國人との接觸が珍らしくなかつた。殆んど普通であつたと云ふ事を覺えてゐらして下さいませ。(これは何んでもない事のようですけれども、私の不思議な夢を説明するには是非知つてゝ頂かなければならない事だと思ひますから)その中に取り分け私を可愛がつて親切にして呉れた一人の夫人がありました。マダム、×××と云つて某大使館の一等書記官の夫人でありました。羅甸型の婦人をよく現はした多血質の情合の深い人でありましたが、これまでの任地が不思議と私の父母の行く土地と一緒になつたとかで、二人とも可なり懇意な間柄でありました。その時も今ゐる同じ首都から轉任になつて來たと云ふようなわけから、初めて伯父の家の客間に坐つた時から、外の人とは違つた親しい會話が取り交はされたのでありました。私も呼ばれて引き合はされました。夫人は、

「近いうちにお母様にお逢ひになれますよ、きつと。今までの奇妙な運命によりますと、私のゐる所へ

はきつと後からお母様がゐらつしやる事になつてゐますのですから。でなければ私がお母様のゐらつしやる土地へ行かなければなりません。」

と云つて笑ひました。實際父は遠からず賜暇で一二ヶ月歸朝する豫定になつてゐましたので、伯父はそれを話し出して、どうしてもそれは運命だと云ふ事を、外交官らしい輕い巧みな滑稽を交へて說き立てましたから、一坐は皆んな興がつて笑ひました。私はその時の夫人の艷麗な笑顏が、美しいものゝ好きな、ことに周圍の關係から洋風の美に心醉しがちであつた十六の少女の胸に與えた印象を未だに忘れる事が出來ません。私はほんとうにいゝ人に出逢つた事を悅びました。而してあんな美しい貴婦人が母の昵懇な人で、私を可愛がつて呉れてゐるらしいのを、嬉しくも、誇りにも思ひました。

　全くその日から夫人は私を引きつける或力を持つたのでありますが、間もなく父母が任地から歸つて來て一と春を日本で暮らして行つた間に夫人と私の關係はすつかり極まつてしまひました。私は旅にある母の代りに今一人の母を見つけ出したのでありました。いゝえ夫人は母であると同時にお師匠様でもありました。私が人前で踊れるようになつた事も、今日まで續いて唯一の樂しみとなつてゐる音樂の趣味を覺えたのも、正確なリファインした佛語をどうにか不自由なく話せるやうになつたのも皆んなこの親切なお師匠様のお蔭でなければなりません。私はだん／＼年を取つてからその當時の事を顧て、なぜあの夫人が今まで見も知らぬ東洋の一小國の、黃色い皮膚をした小娘にあれだけの熱愛を示めしたのだろうと考へて見ますと不思議な氣がいたしました。母を知つてゐたと云ふ、たゞそれだけの原因からだとは到底考へられませんでした。この頃の私の年齡はもういつまでも人のいゝ單純な判斷ばかりはさせ

なくなりました。夫人は私とのそんな特殊な關係の中に或る異國趣味な快樂を見出そうとしたのではなかつたでせうか。外國の漫遊客が古道具屋の店から奇妙な骨董品を買ひ込んで行つたり、袖の長い着物のムスメさんと一時的の結婚生活をして見たり、繪提灯を悦んだり、シャミセンの音を持て囃したりするのと同じ情緒はなかつたでせうか。その上×××氏は可なり放縦な裏面を持つた人らしう御座いました。子供がないのできちんと取り片附いた、そのきちんとし過ぎたのが妙に陰氣な淋し味に變じそうな部屋の隅に、たつた一人所在なさそうに坐つてゐる夫人を見かける事も少くはありませんでした。こんな時には夫人の表情は別な人のやうに沈んで、ずつとふけて見えました。とにかく斯うした瞬間をまぎらし得る遊び相手としても、彼女の所謂「小さい兎」は有用な氣の變る異國趣味な人形だつたのでありませう。

こう云ふ考へ方が彼女の私に示めした愛や親切を否定しようとするものでないのはお分り下さる事と思ひます。たゞ後になつて私の年齢が、その異常な、風變りな關係を解剖して見ようとしたに過ぎないのであります。感謝は今日だつて變りはありません。本統に不思議な縁だつたと思つて、なつかしい思ひ出にしてゐますのですが、しかしその追憶の最後を塗りつぶす、黒い汚點を思ふと、私の心は忽ちまつ暗になります。二年あまりの自由な、輝やかしい生活の代償としては、私は余りに高價な支拂をしたのでありましたから。

事件は十八の夏の事だつたと先つきもお話いたした積りですが、その年はいろ〳〵な意味で私に紀念すべき事の多い年でありました。私は三月末に今まで上つてゐた學校の課程を了ると共に、丁度その頃

を若い娘たちの結婚や婚約の季節と思ひなされてゐる一般の例に倣つて、遠縁に當るK男爵の長男——今の私の良人と許婚になりました。良人はまだ九月でなければ大學を出ませんでしたから結婚式はその時と思はれてゐました。而してそれがすんだら一二年がゝりの長い旅行で父母のゐる首都を訪ねて、あちらで遊んで來ると云ふ事まで極まつてゐました。私はそれを樂しみな計畫にして悅んでゐました。婚約も、普通の戀愛と云ふ熱心を通つて現はれた事ではありませんでしたけれども、矢張り私には嬉しいものでありました。親類つき合ひの間に透一さんと呼んでゐたその青年は、決して嫌ひな人ではありませんでしたから。ことに古い武家の血をついだ、男性的のやゝきつい整つた容貌を持つて、多くの外國人の優秀な肉體美に馴れた目にも、そう見劣りのせぬ事が、私の娘らしいひそかなる誇りであつたのは確かでありました。けれどもそんな些細な悅びやかすかな憧憬を除いては私の女としての心の蕾はまだ堅かつたらしい。自由に大事がられて育つた少女のある型が示めす通り高い脊丈の身體にいつまでも子供のまゝの情緒を盛つて、『性』と云ふような感得には可なり疎い、不權衡な發育をしてゐたらしい事は、この上もない不幸でありました。でなくとも、その堅い情の芽が、おひ〳〵現はれて來るに相違なかつた未來の良人に對する深い愛慕と執着の中で葉を生み花になつて行つたのならば自然でもあり、理想的な發達でもあつたのでしたが、その場合はそうでありませんでした。蕾は不用意な機會に思はぬ溫室に投げ込まれたのでありました。私の胸の最初の花は不自然な咲き方をしてしまひました。

私が×××夫人の客間でエミイル・アドレエルと呼ぶ若い佛蘭人に引き合はされたのはもう六月に入つてからだつたと覺えてゐます。私はその人を見た時に初めて逢つた人のような氣がいたしませんでし

た。夫人の家と非常に親しい關係のある香港領事の二番目の息子として、寫眞帖の中で度々見馴れた顏でありましたから。私の事も噂してあつたと見えて、紹介の時夫人は

「アドレエルさん、これが御存じの私の娘でございます。」

と云ひました。私達は長い友達のように笑つて初めての挨拶をいたしました。アドレエルはボルドオの町の古い邸に、年取つた祖母や妹達と氣樂な生活をしてゐる人でありますが、大學で修めた學科は植物學でありました。專門の立派な著書もある有望な博物學者だと聞いてゐましたから、も少し年配の人かと思つてゐましたら、寫眞で見たより又若い、ものを云ふ度に白い頰の下にばあつと血の上るほどな初々しさのある青年でありました。でも話ぶりは快活でありました。二三ヶ月の間支那で集めて來た珍らしい植物の話などもしましたが、ちつとも學者風な氣取つた所はありませんでした。私が墨繪の草花に蝶やとんぼの群れてゐる縮緬の單衣を着てゐましたのを目に留めて、

「あなたのお召物は自然科學的の圖案ですね」と云ふような冗談も輕く出ました。

その後も私は夫人の家で度々その人に逢ひましたし、伯父のところへも夫人が連れて來た事がありました。けれども私の心は特別にその人に引きつけられるような事はありませんでした。矢張り夫人の家で出逢ふ他の誰彼に對するとの何んにも變りはなかつたのでありました。アドレエルは日本が想像以上に自分の氣に入つた事をいつも話しました。而して豫定より少し長く居て專門の事も色々研究する積りだし、內地をも步いて有益な標本を集めて行き度いと云つてゐました。

その內に月が變ると社交界の人々は方々の涼しい山や海邊をさして東京を離れる頃になりました。×

××夫人はこれまでは日光に避暑してゐたのでしたが、今年は箱根に在る知人の別莊が開いてゐるので其處へ行く事になりました。今年は初めてあなたと一緒に夏が送られる、と夫人は申しました。伯父の家の別莊が小田原にあつて、伯母や私は毎年其處へ行く事になつてゐましたから、箱根へ行つたり來たりするのは譯のない事でありました。稍もすれば退屈になり勝ちな避暑地の明け暮れにはこれも變化のある銷閑の手段でありました。私はよく伯母と二人して或は一人して、さわやかな夏の朝の電車で山の方へ運ばれて行きました。而して一日がゝりで遊んで來ました。×××夫人の別莊にアドレエルも避暑してゐた事はほゞ想像してゐらしたでありませう。全く彼はその夏私のいゝ遊び相手なのでありました。山の上の湖でボオトを漕ぐ時でも、涼しい谷川の緣の小路を散歩する時でも、×××夫妻の一組に對して並ぶ一組は私と彼でありました。夕方小田原から迎ひに來る別莊番の爺と共に、彼は山を下りて送つて呉れる事さへありました。けれども私は何んにも怖れなかつたのでした。實は氣が付かなかつたのでありました。私は兎も角そんな方面には機敏な目を持つてゐた筈の伯母さへ、何等の猜疑心をも挾さまないかのようでありました。これは幾らその間に馴れてゐたとは云つても、人種や習慣の相違と云ふ事が、同じ眼の色をした男女に就いてよりは、特殊な安心を生ぜさせてゐたのかも知れません。同時にそんな警戒じみた目を投げさせる隙のない程、アドレエルの態度は落着いて、公明で、上品だつたのでありました。

斯う書いて參りますと、あなたはその間私の良人たるべき人は何處に何をしてゐたのかを不思議がるでありませう。私はその事をお知らせしておかなければならないと思ひます。あの人はその年は避暑ど

ころの騒ぎではなかつたのでした。九月の卒業期を目の前に控えて、法科の暴君たる尨大なノートの問に苦しんでゐたのでありましたから。東京にはゐませんでした。輕井澤よりかもつと遠い、涼しい寒村に隠れて、世間との交渉を絶つた生活をしてをりました。をり〳〵伯母や私の手許に届く便りでも、短い電報のやうな文句で、鑵詰だとか旨いお菓子だとかの注文書ばかりでありました。私はその夏もしあの人が私達と一緒に小田原へ來てゐたのなら、凡て無事にすんだでせう、少くとも次ぎのやうな事件の起る機會はなかつたでせうと思ふ事がよくありました。

八月に這入つて避暑地の賑ひが絶頂に達した頃でありました。×××氏夫妻の催しで、同じ土地に集まつてゐた懇意な外國人を招いて晩餐會のやうな事をした時に私も行きました。伯母も招待されたのですが、丁度東京から避暑客が見えて行かれなかつたのでありました。遲くなるかも知れないから泊まる積りにしてと夫人からは云つてよこしました。お客様は二十人余りもありましたでせうか。夏の事ではあるし、殊に避暑先きの催しで何となく風變りな略式なところが、客の方にも主人側にも打ちくつろいだ面白い氣分を與えました。人數にしては部屋が稍狹いので谿河に面したバルコンや、山の方の三つ窓から涼しい風が這入つて來ても、酒の香や、食物の匂ひや人いきれや、又は着物に注ぎかけた薰(かをり)ものにむれた空氣を冷ます程には參りませんでした。男も女もみんな汗ばんだ赤い顏をして、笑つたり、話したり、杯を上げたりいたしました。私の席は×××氏と横濱に大きな商館を持つてゐる○さんと云ふお爺さんとの間にありました。この○さんは×××氏の家でよく逢ふ快活な氣さくな年寄でありました。その晩も先に立つてはしやいで、滑稽な事ばかり云つてはみんなを笑はせました。私はお隣りなので色

んな事を話しかけられて餘計におかしくつて堪りませんでした。デザートがすんで一旦別室に分れた男客と女客が、又次ぎの廣間で一緒になつた頃には、酒や煙草の後の靡亂したやうな亢奮狀態に這入つて、誰もかれも何か一と騒ぎしないではゐられないと云ふような顔つきをしてゐました。二三人の若い女客が交る〲ピヤノを彈いたり、歌つたりしました。男達も一緒になつて歌ひました。その間に交つて私はアドレエルが何となく沈んだような氣乘りのしない顔をしてゐるのが見逃す事が出來ませんでした。ある窓の側で一緒になつたので、私は氣分でも惡くはないのか聞いて見ました。するとアドレエルは口許で笑つて、何んともないのだと答へました。而して大變いゝ月が出てゐると云つて窓の外を覗いたので、私も一緒に覗いて見ました。空に溶け入る黒い山々の輪劃をかつきり眞珠色に隈どつて、夏ながら青い山の月がすぐ前にありました。

其處へ〇さんがはしやいだ聲で、重大な遊びが初まるから皆んな席に着いて吳れるやうにと呼んで歩きました。この年寄りの滑稽らしい趣向を想像して話をしてゐた人も話をやめました。樂器のまわりに集つてゐた人達も群れをくづして來ました。而してみんな何か面白い事を待ち設けた顔をして笑ひながら思ひ〲の椅子を占めました。

お爺さんのこれから初めやうとする遊戯は『エロスの戯れ。』でありました。その名を聞くとみんな手を叩いたり、笑聲をあげたりいたしました。私は今までこの遊戯に交つた事はありませんでしたけれども、方法は心得てゐました。まあ日本でする緣結びの一種であります。でもあんな男女の名と名を書きつけたり、そのくじを引いたりする込み入つた手數はありません。凡て指名で極めて行くのでありま

す。即ち司會者見たような一組の男女が現はれて、一坐の中のある男と女とを指名します。すると指名された二人は手を取つて廊下へ出なければなりません。而して接吻しなければなりません。それがすむと今度は自分たちが次ぎの新らしい一組を選ぶ――規則として女は男を、男は女を――權利を有するのでありました。方法だけ聞いたのでは如何にも放縱な遊戯のやうでありますが、事實は決してそんな感じの件はない、洒脫な滑稽味の溢れたものでありました。と云ふのは約束としてその接吻が唇であつてはならぬ事及びその指名がなりたけ不自然でなければならない、不相應であり不釣合ひである事が最上の撰擇とせられてゐるからでありました。けれども例外として一般のおどけた組合せに對する對照のために、極めて似合はしい一と組二た組を挾む場合もない事はありませんでした。それが又非常に面白い變化になるのでありました。幾組かの滑稽な接吻が繰返された後、肥滿病のふくれきつた○老夫人と組まされた、電柱のように長い瀟洒な×××氏が、

「マドモアゼル・カムラ！」

と高く呼び、○老夫人がその象の鼻のような圓い腕を延ばして、アドレエルを指したのは、そんな一と組を作るためだつたのでありませう。一坐はざわめき立つて思ひつきな撰擇を歡迎しました。私はたゞ一人の日本の娘である事も、人々の好奇心を興がらしたと見えます。私は流石に顏に血の上るのを感じました。けれどもこんな場合に不調和な羞恥を現はしたり、逡巡したりする程、これ等の人々の習慣に馴れない身ではありませんでした。私は立ち上つて快活らしく廊下の方へ歩いて行きました。アドレエルも椅子を離れました。彼は向側の壁に添うて。私は此方の壁の前を。二十歩に餘る程の廣間を行き盡

すと、正面に壁にしきられた二つの入口が並んでゐます。アドレエルは右の入口から出ました。私は左の入口から出ました。二人は月の光の射したうす暗い廊下に出て向合つて立ち留まりました。私は何と云ふ意味もなしに本能的に微笑して彼を見上げました。するとその時彼の異常な表情が鬼火の閃きのやうに脳裏に映りました。彼は何んと云ふ青い顔でせう。先刻窓のところで見たより又青い、病人じみた痙攣的な顔をして、唇を噛んでゐました。眼は据つて全身は悪感を感じてゐる人のやうに震えてゐました。その刹那私の不用意な心は云ひようもない程の驚と恐怖で一杯になりました。私は夢中で後退らうとしました。けれども次ぎの瞬間には自身の自體がもうある燃ゆるような強い壓力の中に封じ込められるのを感じました。唇には柔らかい燃ゆる肉の觸覺がありました。私はそれに抵抗しようとする力もなければ、意志をも失つてゐました。確かにその意志を失つてゐました。而してもう恐怖もなければ、驚きもない不思議な忘我の間に、私の處女性の一部は——少くとも精神的には空しく失はれて行つたのでありました。斯う記叙して參りますと、その出來事は如何にも長い順程を取つたように見えますが、それは文字の連りの長さで、事實の上の進行は火花のような瞬間の閃きであつた事はお分り下さるでありませう。全く二人は室内の人々から何等の注意をも引き起される事なしに落着いて席に復する事が出來たのでありました。私はその時の十八の娘をいぢらしい同情の念でふり返つて見る事がよくあります、而してあれだけの惑亂をよくも支へ得たと思つてやります。私は本統にその時奇妙なほど強い辛抱が湧いたのでありました。席につくと共に當面の役目となつた指名の事も、先刻ピアノを引いた美しいB嬢の名を高く呼んで笑ひかけました。アドレエルもそれに對して○老人と同じ年配ほどの老武官を撰ぶ滑稽

を忘れませんでした。一坐は何事もなく次ぎから次ぎへ笑聲に移つて行きました。

けれどもお客様が皆んな散じて、夫人の隣りになつた寢室に退くや否や私はそのまゝ寢床の上に倒れました。凡ての亢奮が去つた後の創づいた、うつろな胸を充たしたものは、たゞ悲しい、取り返しのつかない或物を悲しむ、悲しい涙のみでありました。

その明けの日家に歸ると私はそのまゝ氣分が勝れないからと云つて臥せりました。病氣と云ふのは決して嘘ではありませんでした。心も身體も、これが病氣でなくて何んでありませう。後悔と羞恥とに裏付づけれた一種の甘い追慕。あんな場合につけ入つた大膽な恥辱をさへ、一圖に怒り憎み去る事の出來ないような不思議な誘惑は、癲癇の發作以上に私を苦しめたのでありました。その一夜は、一時に十も私に年を取らせました。赤ん坊の時以來、清淨で平和で、安眠と無邪氣な夢より外なかつた私の寢床は、樣々な不純なもの、怖ろしいもの、汚いもの、いまはしいものゝ巢になりました。私は二三日その中で泣いたり、苦しんだり、悲しんだりして暮らしてゐたのでありました。其處へ一つの手紙を受け取つた時の私の惑亂をお察し下さいませ。封をきる前に私はその字を見て震えました。

『これ以上私に何を云ふ事があるのだらう。』

私の自尊心は初めは流石にある怒りを覺えないではゐられませんでしたが、と云つてその儘その手紙を見ないですます程の强さは到底なかつたのでありました。暫くの後には、初の怒りは淡いなつかしさにさへ變じかけました。……何より二人の間に誤解があつてはならない。私は凡てを語り度い。否え語らないではゐられない。訪問を許して下さるならこの上の事はないのだけれども、先夜の無禮に對

してそれはあなたの尊嚴の許さない事かと思ふ。私は明日午前の十時から十二時までの間、あなたの別莊の裏山でいつもの通り蘚苔の採集をする積りである。もし運命が其處で私達を出逢はして呉れたならば、こんな嬉しい事があるでせうか……と云ふ意味のその手紙は私の上に又新らしい苦悶を呼び起しました。行つてはならない。行つてはならない、と堅く誓ふような心の下から、私はもう裏の松原をぬけて山の方へ馳けて行く自分を見ました。瀟洒な夏着の肩に大きな採集器をかついで居る彼の姿はすぐ目の前にありました。行つてはならない。行つてはならない。私は凡ての幻影を見まいとして、白い麻の寐布團の襟でしかと目を押えながら身體を堅くしてゐました。

明けの朝は秋のやうな細かい雨がしと〳〵降つてゐました。私はこの雨が嬉しいやうな氣がしました。雨のために彼は來ないだろうと云ふ氣休めが作れるためでありました。けれども八時が打ち九時が過ぎてだん〳〵約束の時間に近づくに從つて、彼はきつと來ると感じられました。どんな事があつても來るような氣がしました。雨の山道を私のためにゐもせぬ私を待つために來るのだと思ふとぢつとしてはゐられない程、いら立たしく、周章てた氣分になりました。私はとうと起き上つて手輕るな着換をすますと、廊下から庭をぬけてその儘外に出ました。でも山の方へ馳けて行くほど突きつめた勇氣はありませんでした。足は却つて反對の海邊の方へ向きました。今日は泳ぎの群れもなくひつそりと雨に濡れて靜まつてゐる灰色の砂濱や、遠く青黑く動いてゐる海を見ると、ひとり手に涙が落ちて來ました。私は小さい洋傘の中で泣きながら砂の上を歩いて行きました。私は何十分何時間そうして歩いて來たのでせう。家に歸つた時には全身がぐしよ濡れになつて頭はくら〳〵しました。

「まあどうなすつたんですよ。病氣だつて臥つてる人が、こんな日に外に出歩いて。」

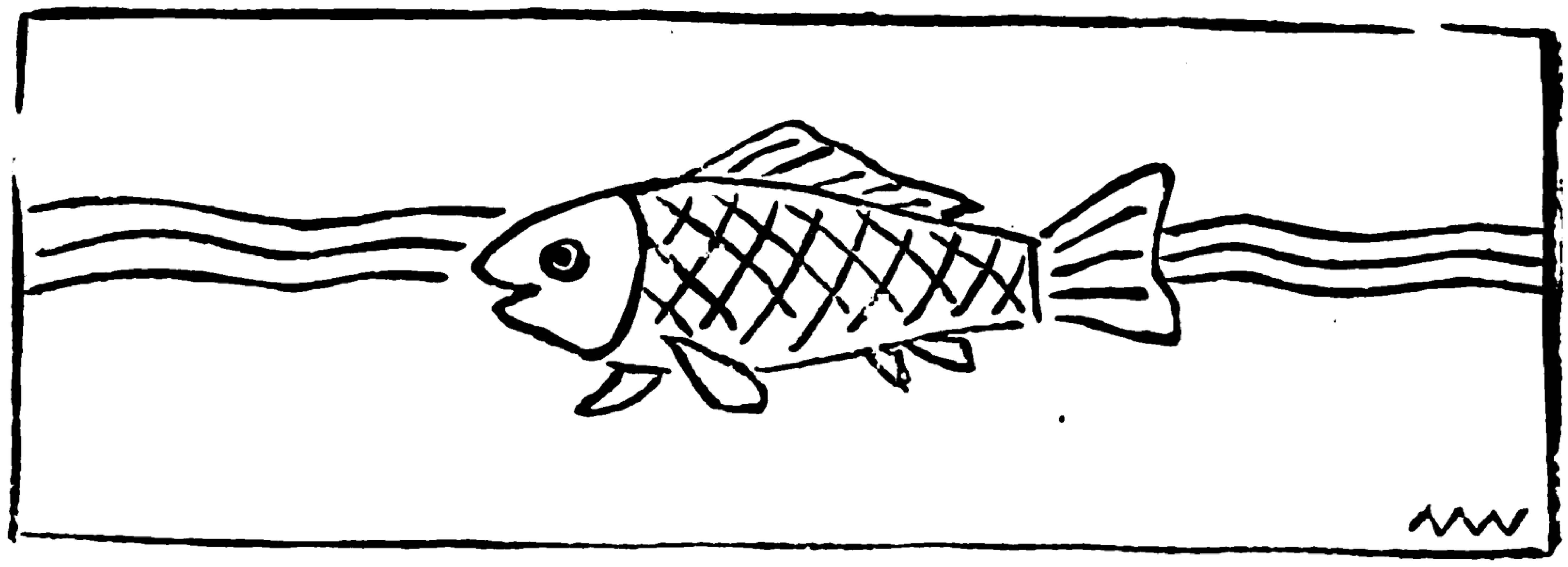
家に這入つて伯母から珍らしくこんな高い聲で叱られた時、私の胸の中は無闇と悲しいものがこみあげて來ました。そのまゝ伯母に取りすがつて何もかも打ち明けてしまひ度い氣がしたのでありました。私は伯母の部屋につき坐つたまゝ聲をあげて泣きました。

私は又寢床に運ばれて行きました。凡てが病氣のせゐにして考へられてゐました。私がたゞ東京に歸る事のみをせがみ立てたのを逆らはないで連れて歸つて吳れたのもそのためでありました。×××夫人が暇乞ひに來てくれた時、私はアドレエルが專門上のある研究のため急に濠州へ旅立つ用意をしてゐると云ふ話を聞きました。

これで凡ての顚末はほゞお分り下すつた事と思ひます。けれども私の秘密が單にこれだけの挿話を良人隱してゐたといふに過ぎなかつたのなら、今になつてこれほど怖れたり、悲しんだりする事もなかつたかも知れません。私にはこれが原因してもつと心理的な根强い罪を作りあげてゐたのでありました。

私はその後間もなく結婚して以來子供の生まれる事を怖れました。どうかして子供の生れないようにと念じてゐました。もし子供を生めばそいの兒はあの魔法じみた夢の中の人の皮膚ゝ眼の色を持つて生れそうな、迷信的な恐怖を持つてゐたのでありました。それだけ私はアドレエルを忘れる事が出來なかつたのかも知れません。私の精神的の姦婬は決してあの刹那のみではなかつた。ずつと今日まで一生涯續いて來たのかも知れません。こんな怖ろしい事が他にあられませうか。それを思ふと私の割合に早い死は寧ろ祝福でなければなりません。それは死ぬ事に依つてのみ絕ち得べき罪でありますから。終身の禁

錮に處せられた囚人の足頸の鎖りと同じように。さあ、私はもう靜かにその時を待てばよいのでありま す。これを書いて仕舞つたので、もう殘つてゐる仕事もなくなりました。あなたに永久の左樣ならを告げてこの筆を措きませう。



今戸橋

久保田萬太郎

五年まへの鈴むらの旦那。――せん枝は愚痴だからそれは思ふまいとした。愚痴だからそれはいふまいと思つた。

だけどもそれは――一圖に狂人だといつて誰も相手にしなかつた柏枝の死ぬまで面倒をみた旦那。――「人間は下らないが、落語は本筋だ。」とばかりで、まだ品川のりう生の部屋にぐづ／＼してゐた三橋を、無理から種々世の中へだす算段をした旦那。――

『見舞に行きたいのだけれど、顔をみるのが辛いから勘忍して呉れ。』

いよ／＼自分の眼が駄目と大學で見離されたときいて、鈴むらさんは、深川の隱居所から、――あとで聞くと、その時は丁度日本橋の見世は銀行の手へ渡したあとで――三橋を代理に見舞によこした。かういふ傳言をして、二十圓つゝんで屆けて呉れた。――「顔をみるのが辛いから。」といふその傳言を聞いた

ときの心もちを、せん枝はいまに忘れることが出來ない。

同情の深い、道理の解つた、——氣の勝つた——

『何といつても人間は育ちだよ。育ち一つだよ。——そこへ行くと鈴むらの旦那はさすがに十三から十九まで年期を入れて、他人の間で苦勞をして來たゞけのことはある。俺たちの心もちを知つてる。俺たちの心もちが解つてゐる。』と柏枝がよくいつた。——鈴むらさんはとにかく藝人や藝者の持つてゐる暗い心もちを摑んでゐた。

柏枝が生きてゐて、現在の鈴むらさんの爲體をみたら何といふだらう——とせん枝は考へた。鈴むらさんがとう〳〵また深川の隱居所を賣つたといふことを聞いたときには、柏枝はもう巣鴨の病院へ入つてゐた。自分は女房のお玉と二人で、天王橋の側で髷入屋をやつてゐる弟の店に厄介になつてゐた。——毎日ぼんやりと自分の心もちばかりを眺めて暮してゐると、十日に一度位づゝ三橋が來て、柏枝の容態のだん〳〵と惡いことや、鈴むらさんがご新造と二人で、今戸の八幡さまのそばへ家を借りることになつたといふやうなことを種々聽かして呉れた。

『八幡さまのそばつていふと何かい、あすこの都鳥の煎餅屋の近くかい。』

『なあに、彼方の方ぢやない。八幡さまより橋場の方へすこし寄つたところだ。あすこの、此方から今戸橋の方から行くと、左り側に今戸燒屋が一軒離れてある。——その今戸燒屋の横を入つたところだよ。』

『あゝさうか解つた。——ぢやあ手前に俥宿があるだらう。』

「あるあ〳〵。」
「彼處いらなら閑靜でいゝ。――あの八幡さまの前のところに、あすこに喜多川つていふ鰻屋があるだらう。」
「喜多川つていふか何ていふか知らないが、鰻屋はあるよ。」
「門のところに一寸柳があるのを覺えてゐる。――「東風吹くやまた賣れてゆく十狐」つて句があるけれど、あの今戸橋を渡つて、二三軒今戸燒屋がならんでゐるところの工合が以前好きでね。柏枝と二人でよく用もないのにぶら〳〵あるいたことがある。――その時分、まさか旦那があんな方へ閑居をしようとは夢にも思はなかつた。」
「誰だつて思やしないやな。」
「だけど何の事はない、柏枝の家がよくなつたかはりに、連中の朝がへりの宿が出來たやうなものだね。」
　柏枝は煩ひつく前までは、長い間、妹と二人で聖天町の紀の國屋といふ質屋の裏にゐた。――せん枝は、吉原へ泊つた朝は必ずかへりにそこへ寄ることになつてゐた。柏枝と二人ですぐに一杯はじめて、雨でも降つてゐると、そのまゝぐづ〳〵に晝すぎまで飲みつゞけた。燈火がつくので驚いて、そのまゝ柏枝と一しよに寄席へ行くことが珍しくなかつた。――三橋が一枚そこに入ると、妹に表の質屋へ三味線を借りにやつて、三橋に彈かして、柏枝が、「頃は元祿十四年、八月七日の朝まだき、卍巴と降りしきる――」といふ柏枝一流の浪花節をよく唸つた。

その顔――その聲音――

『旦那もさういつてたよ。』と三橘がいつた。

『戯談ぢやあない。』とせん枝がいつた。『だけどよく出來てるぜ、旦那はとにかく二十萬からの身上を片なしにするし、柏枝は氣が觸れるし、俺は盲目になるし――全體可笑しいよ。』

『洒落れた大詰だよ。』

『だが大詰は大詰でも一番目の大詰だよ。まだ二番目もあれば、淨瑠璃もある。――芝居はこれからだあね。』

『淨瑠璃をだすなら常盤津がいゝね。――常磐津で柏枝の狂亂。――「戀しき人を都鳥」つてなことで、柏枝が踊りぬいたつてね。』

『それも好いだらう。』とせん枝は笑つた。『それはさうと、この間の研究會の「三枚起請」がバカな評判だね。』

『彼奴には弱つたよ。とにかくあの日は、上野の師匠の「子別れ」に、柳生さんの「唐茄子屋」といふものが出てゐるんだらう。――もう散々な目に逢つたよ。』

『だけど「子別れ」も「唐茄子屋」もいつもほどでなかつたといふぢやあないか。それに柳蔽さんの「大工調」が惡かつたとね。――なんにしてもこの間の會は、三橘師匠が一人で持つて行つたといふ噂だぜ。――昨日小山さんも來てさういつてゐた。』

『戯談だよ。』と三橘がいつた。――柏枝がゐなくなり、せん枝がゐなくなつたから、三橘はいつか研究

會の人氣役者になつてゐた。

それから一年の間は、せん枝は世間から全くかけ離れて暮した。身體の工合がなんだかハッキリしないので、半年はほとんど寢て暮した。上野の師匠のところから、弟子が二三人替り〳〵稽古にくる。——そのほかには師匠のところの番頭がとき〳〵見舞にくるだけで、連中のものは誰もべつにたづねて來なかつた。——三橋もまるで顏をみせなかつた。

『三橋つあんはどうしたんだらうねえ。幾らなんでも偶には來て吳れたつていゝだらうにねえ。』と、とき〳〵お玉が愚痴をいつた。

『座敷でも忙しいんだらう。——賣れる藝人がぐづ〳〵遊んでゐるやうぢやあ仕樣がねえやね。』とせん枝はいつた。——せん枝は自分をまぎらすことばかり力めてゐた。

思ひだすのは鈴むらさんのこと、——柏枝のこと。——柏枝が病院を出たといふことが新聞に一寸出てゐたと聞いたが、たゞ病院を出たといふだけで細かいことはなんにも解らなかつた。番頭が來たとき訊くと、師匠のところへもたゞ病院を出たといふ報知が妹の手蹟で來たきり、何處にどうしてゐるのだか、據然それはわからなかつた。

『聖天町へ一度行つて見ませうか。』とお玉も種々心配した。

『聖天町へ行つてどうするんだ。』

『さうでもない、もしかまた聖天町の家へ何してゐるかも——。』

『だからお前は莫迦だつていふんだ。一年も一年半も家賃を拂はねえで、散々大屋と喧嘩して出た家へ

何處にかへつて行く奴がある。」とせん枝がいつた。

「旦那のところへ行つて訊いたら解りやあしないかしら。」

「何處の旦那――。」

「何處のつてお前さん、鈴むらの旦那さ。――今戸だといふから、譯はないから、私が一寸行つて來ませうか。」

「莫迦。」とせん枝がいつた。「旦那のところへきゝに行つていゝ位なら、なんにも心配はしねえやい。」

お玉には、せん枝の心もちを汲むことが出來なかつた。

春になつて、――忘れもしない十一日の藏開の日だつた。身に染みて寒い日だつた。せん枝は火鉢のまへに座つて、弟に初刷の文藝倶樂部を讀ましてゐた。

すると、

「せん枝さん、ゐるかい。」といつて門口の格子が開いた。

「何誰――。」とお玉が立つと、

「私だよ。」と――それは小山さんだつた。

「おや先生。」とせん枝がいつた。「すつかりどうもお見限りでしたね。」

「その代り今日は、珍らしい人をつれて來たよ。」と小山さんがいつた。

「珍らしい方――さうですか、何誰です。」といふと、

「新さん、俺だよ。」といふ聲が小山さんの後にきこえた。

「旦那――。」とせん枝がいつた。――思ひがないそれは鈴むらさん――鈴むらの旦那だつた。
　三年まへの十一月、雪のちらついてゐた日、研究會の樂屋から、柏枝と三橋と三人、鈴むらさんから電話がかつて水神までかけつけたことがあつたが、――それが鈴むらさんに逢つた最後だつた。――そのとき、小梅の宗匠と小山さん――小山さんはまだその時分は新聞社へでゝゐた――とがさきへ來てゐて、其處からまたさきに吉原へ行くことになつた。鈴むらさん、小山さん、小梅の宗匠、柏枝、三橋――それに日本橋から來た藝妓と幇間。――生憎せん枝は、そのときは何か都合があつて、途中から一人わかれて、新石町の寄席を勤めにかへらなければならなかつた。――四五日すると、なんだか眼の中がだん／＼朦朧として來た。夜間、燈火をみると、燈火がどういふものか暈をかぶつてゐた。――可笑しいなとは思つたけれど、眼に疲勞が出たか何うかしたのだらうと思つてゐた。十一月の下席だけはとにかく剛情に勤めて、十二月になつたから療治にかゝらうと思ふと、工合がバカに惡くなつて、手探にしなければ茶碗も箸も持てなくなつた。側に座つてゐるお玉の顏がハッキリ解らなくなつた。――早速大學へ行つて診斷して貰ふとこれが駄目。
　二年、三年――とう／＼現在の眼のみえない身體になつた。
「旦那、暫くでございました。」といふと、思はず暗い眼の中が泪に濡れてくることが仕方がなかつた。
「暫くだつたねえ。」といふ鈴むらさんの聲も曇つてゐた。
　鈴むらさんと小山さんとがその日に來たのは、世間の種々な柏枝贔負の人々が寄つて、近いうちに柏枝慰藉會をやるといふ話を持つて來たのだつた。

せん枝はすぐに訊いた。

『先生、全體柏枝は何處にゐますんで――。』

『知らないのかえ。病院から出て、いまは森下の妹の亭主のところにゐる。』

『妹の亭主。――何日あの何が亭主を持つたんです。』

『私もよくは知らないが、以前何が小田原に藝者をしてゐたとき約束をした男なんださうだがね。――親切な男でね、兄さん、兄さんといつて、あの妹と二人で親身に世話をしてゐる。――だけどあの妹も、あの兄貴には隨分酷い目に逢つてるんだけれど、よく感心に世話をするね。』

森下といへばすぐ目と鼻のさき。――せん枝は一言知らして呉れない妹が憾みに思はれた。

『ですが、病院を出てから、身體の方は全體何うなんです。』

『頭腦の方はどうにか通常になつたが、何をいふにも今まで長い間だつたからね。――それに年齢が年齢だから、身體がすつかり弱つてゐる。』

『とにかくあの工合ぢやあ、もう長い正月はないよ。』と鈴むらさんがいつた。

せん枝は、衰耄した柏枝の顔――その冷かな眼付を思ひ浮べた。

『日はこの十八日、場所は柳島の橋本だけれど、何うだらう、三橋と二人で、君もその會へ來て呉れないか。』と小山さんがいつた。

『先生。』とせん枝がいつた。『何うでせう、その會に、私に一つ落語をさして下さいませんかしら。』

『其奴はいゝ。』と鈴むらさんがいつた。『柏枝が聞いたら喜ぶだらう。』

「君にさういふ心もちがあるなら、三橋にも一度その事を話してみよう。」と小山さんがいつた。

お玉が「なんにもご座いませんが――」と仕度をして持つて來た。三人は飲みながら、柏枝の話、三橋の話、小梅の宗匠の話――種々と以前の世の中の話がはじまつた。燈火がついても話はなか／＼盡きなかつた。九時をきいて、小山さんは無理に鈴むらさんを急立てゝ歸つた。――鈴むらさんはすつかり虎になつてゐた。

「そんなに飲りもしないのに、旦那は割合にお弱いんですねえ。」とお玉がいつた。

以前は、二晩や三晩飲みつゞけても、決して心もちを崩すやうな鈴むらさんではなかつた。矢張種々苦勞があるとみえる――とせん枝は考へた。

會の日――せん枝はお玉に連れられて橋本へ出向いた。雪にでもなりさうな、曇つた日だつた。――天神川を通る自働船の音をきゝながら、三橋が「おせつ」をやつたあとで、せん枝は「湯屋番」を噺した。

喝采だつた。――やがてお膳が出て、宴がまさにこれから酣といふところへ、柏枝のところから電報が届いた。

「ハクシイマシボウス」

一座は、思はず打たれたやうに沈んだ。

慰藉會は急に追悼會になつた。

「故人を偲ぶために、何うだらう、何か柏枝の得意にしてゐたものを一つ聽かして貰れまいか。」

そこでまた三橋が「三人旅」を演つた。

『――一つせんめ、ありやなしや――なんだい、兄貴、ありやあ。』――ぐうたらな三人の苦勞。せん枝は默つて側でそれを聽きながら、柏枝と、三橋と、自分との――三人の生涯を深く思はなければならなかつた。

その後で、せん枝がすぐ「居殘佐平治」を噺した。

その晩も、鈴むらさんはぐづ〳〵に醉つた。

『誰が何といつたつて、柏枝を一番知つてゐたのは俺だ。――俺が柏枝を知つてた代りには、柏枝も俺を知つてゐた。俺の心もちは誰よりもよく柏枝が知つてゐた。――柏枝がゐなくなつて、もうこの世の中に誰も俺の心もちの解る奴がゐなくなつた。――祭して呉れ、後生だから祭して呉れ。』と、せん枝のそばに來て、クド〳〵と鈴むらさんは掻口說いた。

歸途には雨になつてゐた。――せん枝は俥の幌の中に深くつゝまれて、柏枝のこと――三橋のこと――鈴むらさんのこと――

『いよ〳〵二番目が開く――。』

雨にまじつた霙の音がサラ〳〵と悲しく聞えた。

二月、三月、四月。――花が咲いて、丁度柏枝の百ケ日が來たとき、せん枝は弟の家を離れて、金龍山下瓦町――今戸橋のそばの河岸にお玉と二人で別居になつた。

種々それには細々した事情があるのだけれど、結句は弟とお玉との間の折合が惡いのだつた。

「兄さんは仕方がないけれど、嫂さんの世話をする義理はなんにもない。」といふやうなことを弟が口に出していつた。

それを聞いて、

「箆棒め、女房の一人や二人、眼が見えなくつたつて何だつて、食はせる位なことは出來る。義理が何うのかうのつといふやうなことをいふやうな、譯のわからねえ奴の世話にはならねえ。」とせん枝がいつた。――そのまゝ誰にも相談をしないで、その翌日、家の見當つたのを幸、すぐにその瓦町へ引移つた。

三橋は丁度、兜町のお客につれられて、大阪の方へ遊びに行つてゐた。――轉居の通知をみて、何うしたことかと、すぐに訪ねて來たのは鈴むらさんだつた。

「今だからいふけれど、全體私はあの天王橋の阿母と長の字(弟)とが氣に食はなくつてねえ。お前に逢ひに行かうと思つても、二人の愛想つ氣のねえ顔をみるのが辛いから行かなかつた。――以前なら、幾ら愛想つ氣のない顔をされたつて平氣だが、今は此方にヒケ目があるからねえ。」と、すつかり話をきいたあとで、鈴むらさんがいつた。

「いえね、満足な身體でないんですから、何をいはれても默つてゐればいゝんですけれど、あんまり癪なことをいはれたんで、つひそのこんな事になつてしまひました。」

「だけどね、これが長の字一人なら、とてもそんな思ひ切つたことのいへる譯がない。かげで種々糸を引っぱつてゐる奴があるからだよ。」と鈴むらさんがいつた。「四段目の言詞ぢやないが、シテこの上のご

所存はどうなんだい。」

「一月や二月のところは何うにでもなりますから、そのうちに何うにか考へて、仕方がありませんから、また商賣をはじめます。」

「返り咲もいゝだらう。――お前がそのつもりなら、俺もなんとか工夫をして見ようよ。」

鈴むらの旦那はなほ鈴むらの旦那だつた。――せん枝は一と眼、鈴むらさんの顔をみたいと思つた。

「旦那、橋を一つお渡りになればいゝんですから、何卒いつでもお閑暇のときにはお遊びにおいで下すつて――」とお玉がいつた。

「有難う。」と鈴むらさんがいつた。「濱金の前に甘い蕎麥屋があつてね。――雨が降らうが何うしようが、日に一度は必ずそこへ蕎麥を喰ひにくるんで今戸橋を渡る。」

「濱金の前に、角に、以前船宿が一軒ありましたけれど、今でもありますかしら。」とせん枝がいつた。

「今でも其奴はあるよ。」

「以前はよくあの軒に網が干してあつたのを覺えてゐますが――」

「いまだに軒に網が干してある。そばに、つり舟と書いた行燈が出てゐるから安心していゝよ。」

「濱金のおかみさんは年を老つたでせうねえ。」

「つまらない心配をしてゐるぜ。」

「旦那、色氣ぢやありませんよ。」

「解つてるよ。」と鈴むらさんが笑つた。「だけど、この家の十二兩はどう考へてもやすいよ。俺のところ

も十二兩だけれど、此處のことにすら雲泥の相違がある。日當りの惡い、イヤにじめ〳〵した家でね。——何うして、川のみえるだけでも、この家は十二兩がものはある。」

「夜分になると、船の音がきこえます。」

「さうだらう。——だが俺のところも、二階の障子をあけると、眼の前にすぐ待乳山がみえてね。——一寸「きれ爪の夕越ゆくや待乳山」といふやうなイキなんだがね。」と鈴むらさんがいつた。

何故か、せん枝は、暗い夕暗の中に燈火のちら〳〵する待乳山が胸に浮んだ。

一日置いて、その翌日に鈴むらさんがまた來て、

「明日の晩、こゝの家で一寸寄合をつけるから、その積りで——」といつた。

「寄合——」

「實はね、この春、橋本へ來た連中が寄つて、せん枝會を一つ拵へる段取がついたんだがね。」と鈴むらさんがいつた。

「せん枝會といひますと——」とせん枝がいふと。

「せん枝後援會さ。——明日の晩、その下相談に、四五人此處へ來ることにしたんだが——べつに都合の惡いやうなこともないだらう。」

せん枝は、鈴むらさんの心盡をしみ〴〵思はなければならなかつた。

「何うもまことに——種々相濟みません。」と、せん枝はフト眼を伏せた。

「何とかして一つ景氣をつけようぢやないか。」と鈴むらさんがいつた。

「時間は何時頃から――。」

「何時頃といつて、まあ六時か七時だらうねえ。」

翌日。鈴むらさんは日の暮れないうちから來て、小山さんや、小泉さんの來るのを待つてゐた。

鈴むらさんのために、せん枝は、お玉に吩付けてすぐに酒の仕度をさせた。

「お玉さん、其奴は何にしよう、あとで皆が來てからにしよう。」と鈴むらさんがいつた。

「そんなことをいはないで、皆さんのお見えになるまで一つ――」とせん枝がいつた。

「實はね、いま一寸濱金の前の情婦のところへ寄つて來たんでね。」と鈴むらさんがかういつた。

せん枝とお玉が食事をしてゐる間、鈴むらさんは縁側へ出て川の上を眺めてゐた。

「水の上に燈火のちら〳〵するのを見ると、もう心もちは夏だね。」とせん枝にいつた。

「何處か風の工合にも涼しいやうなところがあります。」とせん枝がいつた。

七時になつても、七時半になつても、誰も顏をみせなかつた。

「何うなすつたんでせう。何誰もお見えになりませんね。」とせん枝がいつた。

「みんなノンキな連中ばかりだからね、七時といつたら八時でなければ出て來ない。――だが、もう彼是八時だらう、そのうちにはもう來るだらう。」といつてると、「驚いた、まだ誰も來ないのかい。」といひながら、そこへ小山さんが格子をあけて入つて來た。

すぐにあとから、小泉さんが來ると、續いて銀座の新聞社に出てゐる三好さん、小說家の吉野さん、――すこし遲れて、木挽町の芝居の川田さんと、劇評家の里見さんとが一しよに來た。

「ところで相談だがね――」と小山さんが話の口を切つた。「種々に今日草案を拵へて見た。――なんでも構はず會員に月々二十錢づゝ會費を出して貰ふことにしたいと思ふけれど、何うだらう。」
「その二十錢は何うする譯なんだい。」と三好さんがいつた。
「せん枝師匠の生活費になる譯さ。」
「だけどね、幾人會員を拵へるつもりか知らないが、假りに二百人出來たつて多寡が知れてるぜ。」
「當前さ、勿論會費だけぢやあ仕方がない。それはそれとして、一方には、毎月一度でも二度でもせん枝會をやつて、精々取上げる算段をするのさ。――とにかくせん枝會以外には、何處の寄席へもせん枝は出ないといふことになれば、二百や三百の客は始終呼べると思つてゐる――。」
「ところで會員がそのせん枝會へ行くときには何ういふことになるんだい。」と小泉さんが訊いた。
「會員には、無論默つてゐてもそれは招待が來る譯だらう。」と三好さんがいつた。
「戯談だらう。」と小山さんがいつた。「招待なんか出してたまるものか。會費は會費、木戸は木戸さ。會員でも會へ來るときは木戸を拂ふのさ。」
「其奴は阿漕だな。」と吉野さんが側から口を出した。
「阿漕でも仕方がない、とにから此方は商賣なんだから。」と小山さんが笑つた。「ところでなんにもご異議はございますまいね。」
小山さんはすこし醉つてゐた。
「議長一寸。」と三好さんがいつた。「だけど、せん枝會以外にせん枝は何處の寄席へも出ないといふこと

にするのはせん枝君の爲めに何うだらう。一度これは上野の師匠の心もちも聞いてみる必要がありやしないかしら。』
「四代目のところへは私が行つても構はない。』と鈴むらさんがいつた。
「ところであとは、趣意書だの、發會の都合だのだけれど――」
「何うでせう、さういふ細いことは、一切小山さんと小泉さんとにお任せすることにしたら。』と川田さんがいつた。
それが好いといふことになつた。それで相談は片附いた。
お玉かチャブ臺を燈火の下に持ち出した。
寄席の話、芝居の話、それからもう二三日して初日の出る夏場所の角力の話。――種々に盃をめぐらしながら、鈴むらさんを入れて七人、あとはうき〳〵した雜談に時を移した。
「三橋はどうしたらう。』と、フト大阪にゐる三橋の噂が出た。
「まだ大阪から歸らないのかい。」
『もう彼是一と月になる。――何をしてゐるんだか――』
「新町あたりを泳いでゐるんだらう。」
『苦勞のない男だからねえ。』と川田さんがいつた。『あの苦勞のないところが、いかにも藝人らしくつて嬉しいよ。」
川田さんは三橋が大の贔負だつた。

「それで何かい――」と小泉さんがせん枝にいつた。「大阪に行つてから、とき〴〵は端書位よこすかい。」

「此方へ越したことを一寸さういつてやつたけれど、その返事もよこしません。」とせん枝がいつた。

――せん枝は、そのときはじめて口を開いた。

「では總立といふことにしよう。」といつて、やがて六人がドヤ〳〵とみんな歸ると、

「また明日來る。」といつて、鈴むらさんも、あとから一人で歸つて行つた。

暴風のあとのやうに悲しい燈火の中に、せん枝は一人殘された。捨てられた犬のやうに眼を伏せて、火鉢の前にヂッとせん枝は動かなかつた。

「どうしたの、お前さん、心もちでも惡いのかい。」とお玉がお側へ來た。

「久しぶりで飲んだものだから、なんだか身體がフラ〳〵しやがる。」といつて、せん枝はお玉から顔を背けた。

せん枝の眼の中は泪で濡れてゐた。

五月の夜の寂寥。――鐘の音が川水の上に響いてゐた。

六月になるとすぐ、「せん枝會」の第一回は新石町の立花で開かれた。

補助として、上野の師匠、柳生、せん枝――それに大阪から歸つて來たので三橋。――梅雨あけの暑い日だつたが、それにも拘らず「滿員」といふ景氣だつた。小山さんの豫想に外れなかつた。

せん枝は、「湯屋番」と「近江八景」とを二席やつた。――三年前、矢張この新石町で、柏枝と二人で最後に二人會をやつたときと、それは同じ番組だつた。

「せん枝」會の趣意書の印刷物を、その日に、番組と一しよに木戸で配つた。「――せん枝儀、その後不具ながらにいよ〱藝事を相勵み居り候こと、たのもしく存ぜられ候。あまりに笑止に候まゝ、この度私ども相集り――」といふ小泉さんの書いた文句を見ながら、誰も、高座の釋臺に縋つてゐるせん枝の噺を聽いてゐた。

鈴むらさんは樂屋へ來て種々世話を燒いてゐた。

二三日すると、思ひがけないところから、一枚二枚づゝ入會の申込が來た。

『川田さんと、吉野さんとの方で二十人づゝ出來るとすると、百五十人には譯なくなります。』と、今度せん枝會の番頭を一切やることになつた粂さんが――以前上野の師匠の前座をしてゐた粂さんがいつた。

ところが、その月の下旬から、せん枝はまた煩ひついた。

全體、神經衰弱で身體の弱つてゐるところへ持つて來て、胃腸を酷く惡くしたのだつた。――そのまゝ、七、八、九、と三月の間、せん枝は川に向いた座敷の眞中に仰向に寢て、灼けるやうな炎熱を相手に暮さなければならなかつた。

去年煩つてゐたときとはちがつて、今年は毎日見舞にくる人が來た。稽古にくる上野の弟子が、「師匠、今日はいかゞです」と替る〱願にかけて毎日くる間に、「一寸來ようと思つたんだけれど、つひいつもゴタ〱してゐるもんだから――』といふやうなことをいつて、きん枝だの、柳左だのといふやうな連

提灯が間断に通つてゐた。それをみて鈴むらさんが「新さん、浮世の奴は莫迦だね」といつた。その言葉に、いかにも未練がなくつて嬉しかつた。——前川を出て、これから仲見世でもブラ〳〵しようといつたから、「もしかまた吉原の奴にでも誰かに見付かつて、五圓得られたところで詰らないからお止しなさいまし。」といふと、「それもさうだね。」といつて雷門から俥に乗つて深川へ歸つた。——その翌日だ。元日には待つてゐるからといふ前からの約束で、日本橋の待合へ行くと、白襟の藝妓が二三人と、小梅の宗匠とが來てゐた。——「元日や今年もうちに越の春」といふ鈴むらさんが惡戯書をすると、小梅の宗匠が「敷居またげばみな恵方なり」とすぐ脇をつけた——。

旦那のその心もちがいかにも可懐しくつて嬉しかつた。

「小梅の宗匠はどうなさいました。」とせん枝が訊いた。

「暫く逢はないがね。」と鈴むらさんがいつた。「渡しをわたればすぐなんだけれど、なんだか宗匠に逢ふのは臆劫でね。」

せん枝は、フト默つて眼を閉ぢた。

九月になつてもまだ暑かつた。——日の中は、せん枝はずツと眼を閉ぢて、半分もう死んだつもりになつて仰向になつてゐた。

日が暮れたと聞くと、せん枝は眞實蘇生つたやうに思つた。夕飯を濟ますと、早くから蚊帳を釣らして、その中で、せん枝は樂しい燈火の色を考へてゐた。——幾ら暑いといつても、蚊帳の裾へ來る風

──水の上から來る風はもう秋になつてゐた。

トロ〳〵としたと思ふと、

『お前さん、お前さん──』とお玉に呼ばれて、せん枝は眼を覺ました。

『粉藥を飲むのを忘れちやあいけません。』

『風が涼しいもんだから、つひトロ〳〵とした。』とせん枝がいつた。

〳〵すつかり曇りましたよ。』

もいゝ時分だからね。』

ハ表の戸を叩いてゐる音が聞えた。

（三）

といふ聲が聞取れた。

〳〵を出た。

『何かご用でもあつて──』

『今日甚助出たきりまだ戻りませんから、もしやと

──』

『今日は一度も

「何かご用でもあつて――」
「今日晝間出たぎりまだ戻りませんから、もしや此方ぢやないかと思つて、それで伺ひに出ました――」
「今日は一度もお見えになりませんでした――」
「どうもお睡みのところを相濟みません。」といひながら、使はやがて歸つて行つた。
「何うしたんでせう。」
戸を閉めて、お玉が蚊帳の中へ入つて來た。
「何處かに行つて飲んでるんぢやありませんかしら。」
「そんな事だらう。」とせん枝がいつた。
翌朝、お玉が竈の下を見てゐると、「お早う」といつて、鈴むらさんが水口から入つて來た。
「まあ、旦那――」とお玉がいつた。「昨夜、十二時すぎお宅からお入でした。」
「昨夜はどうもすこし失敗つてね。」と鈴むらさんがいつた。
「一體、何處へお泊りになつたんです。」
「實はお前、警察へ引張られてね。」
「警察へ――」とお玉は鈴むらさんの顏を見た。
「莫迦な話だがね。」と鈴むらさんが笑つた。
「乗替の事から、雷門で電車の監督と喧嘩をしてね。――すると、交番から巡査が出て來て、此奴がま

たイヤに監督の最負をしやあがつたのさ。小癪に障つて、今度は巡査に喰つてかゝつた奴さ。――すこし此方がいひすぎたゝんだから、とにかく本署までつていふんで、これがとう〳〵象潟町まで引張られた奴さ。』

『そんなに飲つてゐらしつたんですか。』とお玉がいつた。

『真逆に素面ぢやあなかつたがね。』と鈴むらさんは笑つた。

せん枝は、蚊帳の中にまだ暗く眠つてゐた。

宵には雷が鳴つてゐた。

十二時すぎて、せん枝がフト眼をさますと雨の音が聞えてゐた。

「降出したな。」と思つた。

今戸橋、慶養寺の筋塀、八幡さまの銀杏。――夏の名残の雨は二日降續いた。（四年三月）



Tokioの消印

小山内薫

……「生れた國」へ歸つてから、もう二月になるが、一向面白い事がない。まるで墓の中にゐるやうだ。まるで牢屋の中にゐるやうだ。見えない。聞こえない。食へない。笑へない。話せない。身動きが出來ない。息が出來ない――鐵か何かで出來た diving-dress を着て、深い深い海の底へ降りて、それでair-pumpを切られてしまつたやうなものだ。

俺は十の年に俺の「生れた國」を出たきり、二十年といふもの、まるで自分の國の土の匂を嗅がなかつた。だから俺は自分の國がどういふ國だか、この二月前までは全く知らなかつた――俺が生れてから十の年まで寢たり起きたりした世界は、「六區」といふ所の、汚ない見世物小屋の樂屋だつた。俺は俺の足の下で重い大きな球を轉がしながら、でこぼこな舞臺を行つたり來たりしたり、人間の上を人間が踏み、その又人間の上を人間が踏んで出來た「人間の塔」の一番

てつぺんに載せられたり、下から見ると天井裏へくつついてるかと思はれる位高い所に張つてある細い綱の上を、足の親指と人差指で挾みながら、命懸けで渡つたりした。俺は俺の足の下に集まつてゐる大勢の人が、笑つたり、囃しやり、手を叩いたりするのを見て、何が嬉しいのか少しも分からなかつた。俺の着物は寢るにも起きるにも、赤白の段だらの、汚ない汗臭いメリヤス一枚であつた。俺の食ひ物は年中油揚と澤庵と焦げ臭い riceであつた。さうして、俺は生れてから十になるまで、この見世物小屋から外へ、一歩も足を踏み出した事がなかつた。俺の「生れた國」に關する記憶は唯これだけだ。だから、俺は俺の國といふものを今までまるで知らなかつた……

さて今度歸つて見ると驚いた。俺の國には「夜」がない、「夜の生活」がまるでない。「銀座」といふ一番賑かな通りでも、十一時頃になると、殆んど一軒殘らず店の戸を締めて寢て了ふ——俺の國の「夜の生活」は唯「寢る」といふ事だけらしい——Café 何々と看板の出てゐる家があるから這入つて見ると、客は醜い顏をした男ばかりで、そいつらが濁つた聲で叩きつけるやうに歌を唄つたり、吃つた詞で種のない喧嘩をしたりしてゐるのだ。たまに女が這入つて來るかと思ふと、きつとその右の手は亭主に捕まへられてゐるし、その左の手には子供がぶらさがつてゐるのだ——俺の國は實に不思議な國だ。Family Happiness が Café で見られるのだ——まだしも給仕がミユンヘンの Weinstube 式に Kellnerin なのが見つけものだが、こいつらが又お姫樣のやうに惡く取り澄ましてゐて、馴染のない者には天氣の挨拶一つしないのだ……

俺は"Geisha"の來て夜を明かすといふ「待合」といふ所へも行つて見た。併し、これも俺にはちつと

も面白くなかつた。"Geisha"といふ奴はニユレムベルクの人形のやうなものだ。横にすれば目をつぶるし、たてにすれば目を明くといふだけの代物だ。笑つたつて、話したつて、歌を唄つたつて、「ぜんまい仕掛けでこの通り動きます」といふだけの物だ。Passionもなければ、bodyもないのだ。血液もなければ、筋肉もないのだ。腹の中には鋸屑か何か這入つてるんだらう。叩けば皮膚がコッコッいふに違ひない。しかもこいつが白い泥で出來た顔の上へ、更に「啌」といふ木で出來た厚い面を冠つて、自分達が何から出て來たのか、自分達から何が出るのか、そんな事は一向知らないといふやうな顔をしてるのだ。こんなものを、高い金を出して——俺の國は不思議な國だ。女の顔を見るのに金がゐるのだ——おもちやにして喜んでゐる俺の國の紳士は、二つか三つの赤んぼにも劣つてゐる……

俺は地圖を頼りにして、"Oiran"のゐる「吉原」へも行つて見た。併し、俺は飽く所を知らぬ不滿足に身を悶えて、失望と憤怒に夜の明けるのを待ちかねた。"Geisha"は泥で出來た人形だつたが、"Oiran"は氷で出來た人形だつた。「氷の人形」は破れた戸の隙間から冷たい風の這入つて來るやうに、時々俺の皮膚の側へ寄つて來ては、直ぐ又俺の皮膚を離れて行つた。俺はそのたんびに刺すやうな戰慄を覺えた。一體、あの死靈のやうな青いapparitionは、どこから現れて來て、どこへ消えて行くのだらう——墓穴から出て來て、墓穴へ歸つて行くのではあるまいか——"Oiran"といふ奴は、俺にとつては唯「足音」だけだつた。帽子の箱を小さくしたやうな、tallな草履で、鐵板のやうに冷たい廊下をコトリコトリコトリと、棺の中へ土の塊をはうり込むやうな音をさせて、遠くなつたり近くなつたりする影のやうなfootstepsだけだつた。俺はそれを聞くたんびに血が凍るやうな氣がした……

俺は俺の國で所謂"La femme infernale"のゐる「水天宮裏」といふ所へも行つて見た。ところが、俺はここでえらい Moralを聞いた。それで、恐ろしくなつて、靴の紐もろくに結ばずに、表へ飛び出した。俺は飛び乘つた人力車を急がせながらホテルへ歸る道々も、時々それを思ひ出しては身慄をした。その Moral はかういふのだ——『親孝行の爲ですわ。』……

ナポレオンを崇拜してゐる、倫敦の "Ethel" のやうな女は、この國にはゐないのだ。死んだ亭主の勳章を額にして飾つてある部屋へ、平氣で客を引つ張り込む、伯林の "Else" のやうな女は、この國にはゐないのだ。田舍の家へ歸ると、親に金がうんとあるんで、nett なお孃さんでゐなければならない——それが厭だからと言つて、國へ歸らずに毎晩 Prater へ出てゐた維納の "Mizzi" のやうな女は、この國にはゐないのだ——俺の國のMoral は親の爲に子の肉を踏み躙らせるのだ。子の爲に親の肉に毒を盛らせるのだ。「自分」といふ神はどこにもないのだ。「自分の爲」といふ祈禱はどこにもないのだ……恐ろしい Moral だ。惡魔よりも恐ろしい Moral だ……

完全な靈魂は完全な肉體の內にある。この國に完全な靈魂のないのは、完全な肉體がないからだ。この國の總ての魂が虛僞なのは、この國の總ての肉が虛僞だからだ……

俺の友達の Pisarev といふ奴(これはオデッサで小さな寄席をやつてる奴だが、愉快な Dilettantで、俺と同じやうに grotesque な繪が大好きだ)は、俺の國の昔の木版繪を見て、どう見ても人物のKimonoの奧に肉體があるとは思はれないと言つた。Pisarev の言つた事はほんとだ。俺の「生れた國」の人間は、着物に唯首がついてるだけだ……俺の「生れた國」には「肉體」がないのだ……

俺もそつちに居た時分には、gait 一つに魂を打ち込んだ事もあつた。脛の suavity に氣を矢ひさうにした事もあつた。足の鼓動の中に「强情」や「柔順」を理解した事もあつた。肩の丸みに情慾の Andante を聞いた事もあつた。「踊つた夢を見ると、明くる日骨が痛くなる」といふ女を或本の中で讀んで、さういふ女を探して歩いた事もあつた……

維納の "Frauengarten" で、基督の豫言者 Johannes のやうに、裸の上へ白い羊の毛衣一枚卷きつけたきりの "Sonia" を、一雫も殘さずに味はつたのも、今ではもう夢だ。莫斯科の Banya で、クラカウ生れの "Juta" と、アダム、イイヴのやうに飯を食つたのも、今ではもう夢だ。西比利亞の三等列車の中で、蠟燭の光に顔をそむける、伊太利生れの "Maria" の黒い髮の毛を、指に卷きつけて放さなかつたのも、今ではもう夢だ……

この國には生れた儘の人間は一人もゐない。生れた儘の生活け一つもない。みんな面を冠つて歩いてゐる。みんな鎖につながれて座てゐる……俺は熱帶から急に寒帶へ來た動物のやうに、日一日と心が疲れて、筋肉が力を失なつて來た。これではとても駄目だ。もうどうなつても構はないから、もう一遍そつちへ行かうと思つてゐると、突然俺は俺の今まで少しも知らなかつた「世界」の話を聞いた——

丁度、をととひの木曜日の晩だ。「濁つた歌」や「吃つた喧嘩」や「澄ました給仕女」が厭で厭でたまらないけれども、外に行く所がないので、爲方がなしに Café Lion ——恐ろしい名前だらう。その獰猛獸らしいものは一疋もゐないのだ。集まつてるのは臆病な家畜動物ばかりだ——といふ家へ行つて、Bénédictine を飲んでゐると、ふと隣りの卓でこんな話をしてゐる奴があるのだ—、

「こなひだ始めて房州の……(この所の名が俺には分からなかつた)へ行つて見たが、曖昧屋の多いには驚いた。「しるこ」といふ看板の出てゐる家があつたから、そこへ這入つて、汁粉を呉れと言ふと、おやぢの言ひ草が面白いのだ。「お汁粉は只今お湯へ行つてをります」……」

「Ha, ha, ha! それからどうした。」

「勿論、お汁粉の歸つて來るのを待つてゐた。そして、腹一ぱいお汁粉を喰べた。」

「Gut geschmeckt ?」

「Oui, j'avais faim.」

(これは實際この連中がその時使つた詞なのだ。この連中も俺のやうな Bohème だと見えて、自分の「生れた國」の詞だけでは話が出來ないのだ。いろんな國の詞をめちやめちやに交ぜて使ふのだ)

「そいつは面白かつたな。さう言へば俺もこなひだ面白い目に會つた。薄暗い柳の蔭から丸髷に結つた femme de trente が出て來て、俺を引つぱるのだ。そこで俺は電車へ乗るのをやめて、そいつの跡について行つた。或暗い横町へ這入ると、或 Maison à louer の雨戸を明けて、平氣でその中へ這入つて行くのだ。そこで、俺もついて這入つた。マッチの音が暗闇でカサカサいふかと思ふと、パッと蠟燭に火がついた。見ると、この國にこんなのがあるかと思はれる程な生き生きした體が、はち切れるやうな Lust を唄つてゐるのだ……その晩が初めで、俺は五六度その Maison à louer へ通つたが、やがてその家へ人が住むやうになつたので、femme の行くへも分からなくなつて了つた……」

俺はこの連中の話を聞いてゐる内に、この連中の「生活」が美ましくなつて來た。この連中はこの國の

俺のまだ全く知らない「世界」を知つてるのだ。そんな「世界」が果してこの國にあるのなら、是が非でも俺はそこへ行かなければならないと思つた。さういふ所へ行けば、或は俺の命が助かるかも知れないのだ・・・

この話をしてゐた連中は、外の domestic animals とは全く類を異にしてゐた。この連中の目の中には人間生れた儘の根强い輝きがあつた。顔の表情にも、手足の運動にも、少しも拘束された「奴隷」がなかつた。談話の調子にも流れてやまない川のやうな「自由」があつた。俺はこんな group を始めて俺の「生れた國」で見た・・・

段々話を聞いてゐると、その柳の木のある町の名も分かつた。その邊の詳しい地理も分かつた。時間も丁度今頃だといふ事が分かつた。そこで、俺は急いで Café を出て、丁度俺の方へ歩いて來た人力車へ飛び乘つた・・・・

ここで、俺は貴樣に一寸斷つて置きたい事がある。

貴樣は十七世紀の Flemish の畫家の Pieter Breughel といふのを知つてるか。無論知るまい。尤も、この名は親子二代とも同じだから一寸分かるまい。俺のいふのは二代目の Pieter だ。『地獄』と綽名を取つた Pieter だ（親父の綽名は『道化』で、これも畫家だつた弟 Jan の綽名が『天鵞絨』だ）。この先生は癲癇の女や、盲の行列や、躄の乞食やなどばかり書いた人だが、この先生の書[illegible]この醜怪極まる密畫に『情慾の比喩』といふのがある——俺が又こんな事を言ひ出すと、貴樣は又例の「醜惡狂」が始まつたと言つて、

笑ふかも知れないが、俺にはどうしてもやめられないのだから爲方がない。巴里で買つた Barbey d'Aurevilly の『惡魔』なども、いまだに俺の肌身を離れずにゐるのだ。あの中の『女の復讐』といふ話だの『罪惡の中の幸福』だのといふ話は、讀むたんびに身内が新しく躍つて來るので、幾度繰り返して讀んでも俺は飽きない。近頃露西亞に Aleksei Remisov といふ「醜惡の詩人」が出て來たさうだが、そいつなども Pisarev に話を聞くと中々面白さうだ（俺は俺の露西亞語がまだ本を讀むまでになつてゐないのを腹立たしく思ふ）。俺の「生れた國」にも、近頃 Tanisaki といふ若い作者が出て來て、『少年』といふ Remisov 張りの小説を書いたさうだが、これはまだ讀んで見ないから、どの程度まで突つ込んで書いてあるか、俺は知らない――話が橫へそれた。

さて、今の『情慾の比喩』だ。この繪の內容は今ここに詳しく說く暇もないし、又說く必要もない。唯この繪の左の下の隅に或異形な動物が書いてあるのを紹介すればそれで用は足りるのだ。この動物は猿の頭を壓搾機にかけて扁平にしたやうな顏をしてゐる。頭が馬鹿に小さくて、耳が馬鹿に大きい。口が橫一文字に大きく裂けてゐて、目が二つ錐であけたやうに小さく明いてゐる。そして、鼻がない。體は人間に似てゐるが、手足が細長くて、腹ばかりが氣味の惡い程膨れてゐる。そして、肩の左右には三つに又の切れた、紙で出來たやうな、大きな薄い羽根がついてゐる。尻の所には、短い尻尾が釘のやうに突き出てゐる――この異形な動物が、地面の上へ仰のけざまに引くり返つてゐるのだ……

俺は間もなく目的地へ着いた。人力車を降りると、およそこの邊だなと思ふ區域を、行つたり來たり

しながら、ぶらぶら歩き始めた。俺は電車を待つやうな樣子で、停車場の所に立つて見たり、何か買ひさうな顏をして、唐物屋の飾り窓を覗き込んで見たりした。併し、俺の燃えるやうな「探し求める目」は俺の側を行つたり來たりする人間の黒い影の方へばかり向いてゐた。俺は約束した女をでも待つやうに、俺の方へ近づいて來るあらゆる足音に聞き耳を立てた。俺の耳は熱を持つて來た。俺の股は脈をうつて來た。…………………

突然、俺の前に或黒い影があらはれた。そして、その黒い影の中に光る目が何か言ひたさうに、ぢつと俺の目を見詰めてゐる。俺は一瞬間息が詰まるやうな氣がしたが、よく氣を落ちつけて。街燈の光に顏を透かして見ると、それは小さな丸髷を頭の上にのせた、あばた面の四十女だつた……俺は Hallucination をやつたと思つて、直ぐその婆あに脊中を見せた。するとその婆あの足音が俺の後について來るのだ。いくら歩いても歩いても、俺の後について來るのだ。俺は乞食だなと思つたから、叱つてやらうと思つて、或蕎麥屋の角まで來ると、突然立ち留つて、急に後を振り向いた……

「旦那、遊んで入らつしやいな。」

俺が口を利く隙もない内に、婆あは行きなり俺にかう浴せかけた。俺はびつくりして、婆あの顏を穴のあく程見詰めた。俺にはこの女の言ふ事がまるで理解出來なかつたのだ。

婆あは俺の顏色を見て取ると、直ぐ註釋を加へるやうにかう言つた——

「綺麗な子がゐますよ。」

俺はやつと理解する事が出來た。このあばた面は Guide だつたのだ。そこで、俺は一瞬間も躊躇をせ

すに、直ぐ話をつけた——

「お前の家にゐるのか。」

「ええ。」

「幾人ゐるのだ。」

「一人つきりですよ。」

「好い子か。」

「好い子ですとも。」

「いくら入るのだ。」

「五十錢。」

「宜しい。」

「前錢ですよ。」

「宜しい。」

俺はなぜこんな會話を、一々詳しく貴樣に知らせるのだらう。俺は俺の「生れた國」へ歸つてから、この二月の間に、この位氣持の好い會話をした事が唯の一度もなかつたからだ——俺の「生れた國」の象徴は、迂回に迂回を重ねて、終に目的地へ着かない會話だ……

俺は婆あの手に銀貨を握らせると、直ぐ一緒に歩き出した。或暗い横町へ曲ると、その角に丈の高い肩の廣い男が立つて待つてゐた。婆あはその男に金を渡した。男の黑い影は俺と婆あの後(うしろ)について歩

出した‥‥

俺はふと伯林で經驗した或事實を思ひ出した。用を濟まして歸らうとすると、女の情夫が衣裳戸棚の中から飛び出して來て、俺にピストルを向けながら、「金を出さなければぶつ放すぞ。」と言つて嚇かした時の事だ――今俺達の後(うしろ)について來る男も、或はさういふ類(たぐひ)の奴ぢやないかと思つた‥‥併し、俺は一向平氣だつた。さういふ危險な世界には、却つて外では得られない强烈な Joy があるのを、俺は度々嘗めて來て知つてゐるから、俺は寧ろ血の湧き立つやうな、痛快な豫想に驅られながら、張り切つた弓のやうな足どりで暗い道を歩いた。

暗い道の中にも、又一層暗い路地があつた。その角まで來ると、その大きな男は、張り番でもするやうに、往來の方を向いてぴたりと立留つた。

俺は婆あについて路地の暗闇中へ這入つた。路地は隨分長かつた、そして幾つもに曲つてゐた。俺は目を結(ゆ)はへられて、Labyrinth の中を連れて歩かれるやうな氣がした‥‥

やがて、ぼんやり中に明かりのついた、小さな家の前へ來た。婆あは急いで格子戸を明けて、早く俺に這入れと言つた。

上がつて見ると、直ぐ目の前に二階へ上がる階子段の裏が裸で出てゐる。皮膚病患者のぶつぶつした茶色な肌を見るやうな疊の上に、紙のやうに薄い蒲團を敷いて、六つ位な色の黒い男の子が鼻をたらして寢てゐる。その直ぐ向うは臺所で、腐つた流しだの、罅の入つた水瓶だのが見えてゐる‥‥さういつた醜汚な場景は益々俺の Lust を刺戟した‥‥

「二階にゐるのか。」

俺がかう聞くと、婆あは『いゝえ。』と言ひながら、今までとは丸で違つた冷淡な態度で、何を探すのか頻に戸棚の中を掻き廻してゐたが、やがて白い物を懷に入れると、いきなり俺の前へ來て、何の感情もなしに Pieter Breughel の繪にある異形な動物のやうな形をした….

『Pourquoi ? 』

『C'est moi』

(俺は「生れた國」の名譽の爲に、これを「生れた國」の詞で書かない)

俺は靴をひつ摑んで、靴下一つで表へ飛び出した――恐ろしい Moral だ。戰慄すべき Moral だ。「水天宮裏」でぶつかつた「道德」よりも、更に horrible な「道德」だ。

一グラムの血もないのだ。一オンスの生命もないのだ。唯冷酷な道德が醜惡な肉塊となつて、汚ない疊の上に轉がつてゐるのだ――鼬のやうな目をした、猿のやうな耳をした、蝙蝠のやうな鼻をした、色の黑い、あばた面の四十婆あは、人の作つた醜惡な Moral の象徵だ。

Pieter Breughel の繪にある恐ろしさは、「眞實」の恐ろしさだ。俺が今見た恐ろしさは、「假面」の恐ろしさだ。俺の終始求めてゐる「醜惡」は「生れた儘の人生」なのだ。俺の今見た「醜惡」は「人のこしらへ上げた人生」なのだ….

眞つ暗な細い道を、滅茶滅茶にあつちへ曲つたりこつちへ曲つたりして、やつと路次の口まで駈けて出ると、そこに立つてゐたさつきの大男が、大きな力のある手でいきなり俺の襟首をひつ摑んだ――

『どうしたんだ。』

『恐いから逃げて來たんだ。』

「小僧め。探りを入れに來やがつたな。」

かう言ふかと思ふと、男はいきなり拳を固めて、俺の左の顳顬を、齒が拔け落ちるかと思ふ程ひどくぶつた……

俺の左の顳顬はけふもまだ痛い。併し、この痛さには快感がある。あの大男は俺を Detective か何かだと思つて、本當に怒つて、滿身の力を拳一つに集めて俺の横つ面をなぐつたのだ。あいつの女房(?)が飢渇の爲に情慾のない body を賣つてるのとは、とても比較にならない眞實さだ——俺は俺の肉の痛さを味ひながら、こんな事を考へてゐる……

併し、俺の「生れた國」には、終に俺の求めてゐるやうなものはなささうだ。俺はどうしても又俺の「育つた國」へ歸らなければなるまい。かうやつてこの儘ここにゐれば、俺は段々血も肉も衰へて來て、終には「死」を見る事になるだらう……

貴樣は幸福な國にゐる。飽くまでも自愛し給へ。

東京にて

Tommy Mateno.

一九……、二、二四

(俺の本當の名は調べてゐるがいまだに分からない)

巴里 "Magic City" にて

近江三次君

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

創刊四週年

新日本

記念號　四月一日發行

定價本號に限り四拾錢郵稅三錢●普通號郵稅共廿八錢三冊前
金郵稅共八十四錢六冊壹圓六拾五錢十二冊參圓四拾八錢

◎新政黨論

（國務多忙にもかゝはらず頗る長篇）大隈伯爵

▼本誌四週年を迎ふ…永井柳太郎
▼經濟問題…鹽澤博士
▼英獨經濟戰の將來…福田博士
▼日露の將來…足立北鷗
▼商權擴張の好機…河津博士
▼海外思潮…上田博士
▼演劇評論…楠山正雄
▼文藝評論…大杉榮
▼日露貿易の將來…津村教授
▼國民生活と憲政教育…浮田博士
▼春と花　横山健堂
▼春の歌…若山牧水　北原白萩
▼花時の今昔…白柳秀湖

四週年紀念　文藝附錄

小說　男の心臟　森田草平
小說　夕日の路　田山花袋
小說　港の女　長田幹彥
小說　糧のない熊　秋田雨雀
小說　奇蹟　昇曙夢

◎現代思潮

數十件——これ本誌獨特の讀物にして一讀して世界の趨勢を知り思想の推移を解し座がらにして大世界を洞觀するの便益あらしむ

（中付五の一）

發行所　東京神田　（振電 替本 五四一 〇一〇 一三三 番〇六）　合資會社　富山房

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

近代思潮叢書

有田四郎氏裝幀

編	書名	著者	定價
一編	ルードルフ オイケンの哲學	第一高等學校教授 東洋大學講師 三並良著	オイケン肖像入 ■定價七拾錢 郵税金八錢
二編	現代思想と倫理問題	オイケン博士原著 文學士今岡信一良譯	附錄「宗教に歸れ」 ■定價七拾錢 郵税金八錢
三編	生の更改と新藝術	文學士内藤濯著	四六判二百八十頁 ■定價七拾錢 郵税金八錢
四編	科學と宗教	文學士三井北川著	「最近物理學界の進步」 ■定價七拾錢 郵税金八錢
五編	現代の思想家	文學士小松武治著	六大思想家寫眞 ■定價七拾錢 郵税金八錢
六編	自我の研究	隈畔野村善兵衛著	四六判三百五十頁 ■定價七拾錢 郵税金八錢
七編	靜觀と思想	陸軍大學教授 岡田哲藏著	四六判三百八十頁 ■定價八拾錢 郵税金八錢

■板元 東京橋尾張町 警醒社書店 振替東京五五參番■

新渡戸稲造博士述

人生雜感

四六判洋布製
正價八拾錢
郵税金八錢

(中付五の二)

文學士 後藤末雄氏著

大好評

近代佛蘭西文學

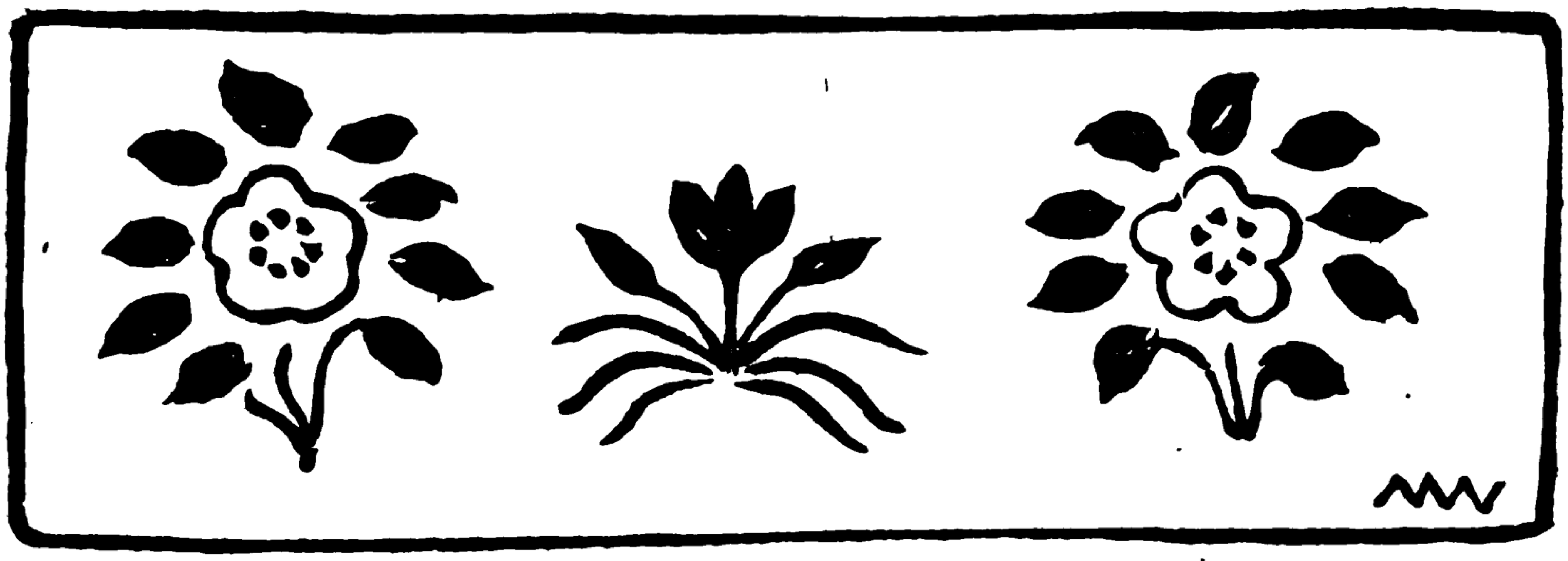
定價壹圓廿錢
郵稅拾貳錢

我國文壇に於ける此種著者の權威として本書が如何なる地位を占むるかは左記我國第一流の諸新聞紙の評言によりて之を知れ!!

報知新聞曰く『我國には佛蘭西文學が充分紹介されて居ない、夫を遺憾として此著が出た譯だ。ロマン、ローラの藝術から書初めてピエール、ロチと其印象主義や、モオパッサンの狂態や、ゴンクールの特徴や、バルザックや其他紅い火のやうな國民性を覗ふに足る近代佛蘭西文學の趣味ある梗概が出來るだけ平易な言葉をと、著者の狙つた的が外れずにスラ〳〵と書れてある、苟くも藝術といふ語を口にする程の人が、此著書を瞥見なりとしないのは恥だ』■時事新報曰く『近代佛國文學の種々相より人格藝術傾向に及び、更に時代の反影を描出するに於て、其智證の精透と觀察の妥當なるは流石に佛文學に造詣深き著者の勞作たるを欺かず、描叙極めて精彩文章又清新にして、氣分の藝術たる佛學近代文學の神髓を描盡するに些に遺憾なし』■東京朝日新聞曰く『所謂近代の自覺せる文學として佛蘭西文學は一方の中心をなすもの‥本書は之等近代佛文學者一々に就て其性格其作物其特色等に關し記述若くは評論を加へ、往々劇或は其他の藝術にも言及したるを特色とす』■國民新聞曰く『佛文壇に現はれたる人と思想とは殆ど網羅し盡されて遺憾なきに庶幾は佛文學研究に資する著書の尠い我文壇に利する處は定めし多いことゝ思ふ。』云々

(中付五の三)

發行所 東京本郷區元富士町 振替東京二五二〇〇番 石川文榮堂



住吉心中

近松秋江

一昨年の丁ど今時分――四月の初旬であつた。私は、その頃何といふ當もなく、たゞ逗留してゐた大阪の住吉公園の中にある御料理に旅館を兼業してゐる宿屋を毎時のやうにぶらりと立出て、まだ朝露に濕つてゐる砂地の上をさくりさくりと踏みしだきながら、靜かに咲き盛つてゐる櫻の下をひとめぐり歩いて、それから高燈籠の下を流れて、野川の水を集めつゝ遠く濶けた新田の中を通つて、果てはちぬの海に落ちてゆく堀割りの土手に沿いて、青々と燃え立つ平野の綠に眼を悦ばせながら、どこまでも何處までも川しもの方へ足を運んで行つた。

すると石材を運んで堀割りを入つて來る荷足船が、二つ三つ一處にかたまつて、船頭が何か喚きながら澱んで流れる水の上を凝視めてゐる。向の畦道を女子供までがつゞいて馳せて來てゐる。それを見て私も思はず急ぎ足になつた。

近寄つて一と目見るとゝともに、私ははつとなつた。それは若い男女の身體が繋がり合つたまゝ死んでゐるのであつた。

「まだ死んで、なんぼにもならへんなあ。」

「昨夕やな。」

「もつと近い、今曉や。」

後からあとから馳け集まつて來たそこらの男女は土手の草を滑り下りて水の上を氣味わるさうに窺いて見ながら各自に種々なことを饒舌つた。

「ほ、どゑらい別嬪やで、まだ若いなあ。」

「藝者やろか。」

「ちがふ。娼妓や。」

「どこやろ。龍神やな。」

「難波新地の娼妓や。」

女連までが、男達と同じやうに、女の方を餘計に氣にして、出たらめの想像を附け加えた。

「巡査どうしたんやろ。まだ來やへんか。」荷足船に積んだ石材の上に腰をおろしてゐた若い船頭の一人は、さういつて頭をあげて土手の上の方をちよつと振顧つて見たが、

「えゝことしよつた果報や。さぞ本望やろ。南無阿彌陀佛ちや。」

と、いひつゝ棹を取直して、ふはりと水に浮いてゐる二個の死骸を、つゝいてゐたが、ぐつしよりと

死體を包んでゐる女の着物の前を棹の先ではね除けた。黒く濡れ浸つたお召の下には白い脚に絡みついた長襦袢の友禪縮緬に置いた垂柳につばめ模様の染色が野川の水に溶けて流れさうである。

『死出の道行きや思ふて、精出して粉飾してけつかるわい。』

若い船頭は、そんなことをいつて、その長襦袢をも容赦なく掻き分けてしまつた。硬ばつた眞白い脚が股の處まで深く露はれた。

すると、心無き若者のするこの無慘な仕業を興味の眼で瞻めてゐた土手の上の群衆は、さながら自分達の心を得たやうに、一時にどつと卑しい聲をあげて笑つた。

そのうちに巡査が土手を傳うてやつて來るのが見えた。あとから、また多勢の彌次馬がつゞいてゐた。

警官は、ちよつと死骸を見やつて、すぐさま土手から荷足船の上に飛んで下り、船頭に手傳はして船を傍に漕ぎよせて、重い二人の死骸をやつと舟板の上まで引揚げた。がくりとゆがんだ丸髷の頭髪が、丁ど烏蛇のやうに滴と一緒に板の上を幾條となしに這ひ亂れた。

それは、新聞の三面記事に書かれがちの誇張でなく、土のやうに蒼白くなつてこそゐれ、男も女も美しい目鼻だちであつた。そして引揚げられてからよく見ると、身裝風俗が女は商賣人ではなかつた。

そこへ人足が何處からか早くも蓆を持つて來て、土手の上まで移された男女の死骸の上にそれをうち被けた。

どういふ因緣で二人はこんな淺間しい最後を遂げなければならなかつたのであらう。昨日の翠帳紅閨

にかはる粗莚の床には蠟細工のやうな白い足の先が蒲公英や菫の咲きまじつた青草の褥の上ににゆつと露はれてゐた。

「さあ、見るもんぢやない、みるもんぢやない。彼方去つたいつた。」

警官は、だん／＼集つて來る彌次馬を追ひ拂つた。

私は、その聲におぢて、どつと後に退いた群衆の中にまじつて一處に後寄りしたまゝ、その上再び近づいて見る心にはならなかつた。そして丁ど自分がもつとで死ぬ處であつた惡夢から覺めた後のやうな厭な心持ちに胸を鎖されつゝ、もと來た田圃道をつたうて公園の方に歩いてもどつた。

少し暖かすぎるくらゐ強い春の日に照されて、盛に燃え出た青草からむうつとするやうな草いきれが上騰つて、私は顳顬に輕い痛みを覺えつゝ、今目撃した忌しい物象から、それからそれへと取留めもない幻影を描いた。

恐いものほど、餘計に見たいといふけれど、私はそんなものを見ることを好まない。まだ幼い時分に、酒の上の口論から平素溫厚な男が、ある狂暴な若者のために出刃庖丁を以つて突殺されて半死半生になつてゐるのを遠くからちらりと見たことがあつた。仰ぞり倒れながら肥つた白い膝をたてゝゐる、その膝に鮮血が幾條となく流れてゐるのが、強く私の心頭に殘つた。私はそれを一と目見るより、ふら／＼と腦貧血を起しさうに氣持惡くなつて、すぐさま家へ驅けて戻つてそのまゝ寢床に臥つてしまつた。平和な田舍ではその村始つて未曾有の珍事であつたから、その晩村中の者の騷ぎは凄まじいばかりであつた。その時分田舍ではまだ珍らしかつた學校出の若い醫者は早速驅けつけて來て手術を行つた。その時

始終傍に立合つてゐた兄は、後で、下腹部の傷口からはみ出た大腸の固りを醫者が手を以つて押込みおしこみしたことまで、手眞似をしてくはしく話したが、私は、それにさへ耳に蓋をしたくらゐであつた。

それから後暫くの間、私は、自分で仰けに寢ることが出來なかつた。さうして寢やうとすると、暗がりの中にも、血の流れた肥つた白い膝がまざ〳〵と眼に見えた。今寢てゐる自分がその人間のやうに思へて仕方がなかつた。それから半月ばかりして私は大阪に出て來たので自然にその氣味の惡い幻影は薄らいでいつた。

さういふ頭の狀態は、今でも私にはあつた。その男女の死骸は、その日晝間中どんなにしてゐても、私の眼前から離れなかつた。そして夜になるにつれて、肉眼に映る他の凡ての物象が暗の中にその形體や色彩を沒するに反して、かの水に浮いてゐた二つの死骸はます〳〵明かにその現實の姿を顯はして來た。

私のゐた宿は、住吉公園の大鳥居を外に出はづれた、ごみ〳〵と人家の建ち並んだ一廓の中にあつた。隨分古い建て物で、まだ堺の大濱が今のやうに繁昌せぬ時分は、すぐ向ふ前の湯屋の鹽湯になつてゐて大阪から保養がてらにそこへ鹽湯に入りに來たものであつた。

私は、初めその座敷を借りやうかと思つて見に來た時に陽氣に建てゝあるにもかゝはらず、何となく最初から陰慘の氣に襲はれた。昔時入江であつたのが、段々埋め立てられて公園の一部になつたので、自然の水溜りにそのまゝ人工を加えて出來た古池や庭園なども久しく手入れをせぬと見えて、自然

に荒廢するにまかせ、青く腐つた水の底からぶく〱と泡を立てゝゐる。下にも二階にも三十疊も四十疊も敷かる廣間があるかと思ふと、その古池に沿いて廊下を廻つた處には大廣間の丁ど裏手に隱れたやうに薄暗い四疊半だの三疊だの小い間がつゞいてゐた。私はその四疊半のしんとしたのが氣に入つて初めはそこを借りることにしたが、何となく不用心なのと、その中に立つてゐると日當りの惡いせゐか身内が冷りとする。

「こゝは、あんまり陰氣で氣味がわるい。」

何だか、昨夜來て泊つた男と女の客が翌朝起きて見たら、剃刀で咽喉を突いて心中をしてゐたといふやうな出來事のありさうな部屋だと、そんなことを心の中で思ひながら、さういつて、二階の床も押入れもない長四疊の部屋にかはつた。そこは、うつかりして頭を伸すと、頭を打つけさうに、屋根なりに天井が低くなつてゐた。

これから追々夏季になれば、大阪から間借りをして出養生に來るお客で、そんなだゝつ廣い建物がどの座敷も滿員になるのだ、といつてゐるが、それにはまだ時候が早いので伽藍とした荒れ寺のやうな家の中にゐる者といへば、私の外には自分で料理番をする氣の好ささうな亭主と、若い女房と頸部に瘰癧が出て始終紙をはり付けてゐる婆さんと三人が、ゐるかゐないのか分らないやうに奧まつた茶の間に住んでゐるばかりであつた。

それでゝその日は晝間一組の客があつて、二階の大廣間の眞中にちよんぼり五六人陣取つて、大阪の客にはめづらしくおとなしく騷いでゐたが暮れ方には引揚げていつた。

そのあとはまたいつものやうな寂しさに歸つて、私一人が薄暗い二階の隅の方にゐるばかりであつた。私は何故、こんなわびしい、不自由な思ひをしながら、希望のない歳月を、いたづらに過してゐるのであらうかと、自分で自分に問ふて見ることもないではなかつたが、それは自分でもどうすることも出來なかつたのである。

その邊は、もう宵の口から何處の家でも表を閉めてしまふので、世間がしんと靜りかへつて、時々ざあといふ公園の松の音が却つて夜の寂しさをますばかりである。

私は、いろんな取り留めのない空想や悔恨に疲れた所爲か神經はます〳〵亢奮して、その朝眼にしみつくやうに殘つた忌なものゝ姿形がまたしても幽かな電燈の光の中に髣髴として顯はれて來た。私は、じつと、それを追ひ退けるやうに獨語のやうに聲を出して妄念を叱咤した。けれどもいくら追拂ふとしても、追拂へば、追拂ふほど、あとから後から同じ忌はしいものが眼前にちらついた。

私は早く蒲團を被つて寢やうと思つたが、寢るには便處にゆかねばならぬ。たゞ大きいばかりで氣の利かぬ建物には便處は一處しかついてゐなかつた。そしてその便處にゆくには階下の大廣間を通りぬけて暗い廓下に出て、例の四疊半と三疊の間の横を傳うて面倒な開戸をあけ、戸外に架けてある三尺の歩板を渡つて、それから別な棟になつてゐる便所に入るやうになつてゐる。

いつもでさへそれが思ひであるのに、その夜は殊にどうしやうかと思つて余程耐忍して見たが、耐へやうとすれば、するほどまたその爲に頭が冴えて快く寢着れさうにないので、道の千里も歩く氣で起きて行つた。

大廣間には薄暗い高い天井から赤ちやけた電燈が中央にたつた一つ吊り下つてゐるばかりで、あとは眞暗な闇を歩かねばならなかつた。するとつい二三日前の晩その四疊半に胡散臭い男と女が來て泊つていつたのを、やつぱり便所に通ふ時に認めたことが思ひ浮んだ。私は、もしかすると今日のはあれぢやなかつたらうかと思つたが、それにしてはあんまり死骸が奇麗すぎる。そんなことが自然に頭の中を往來してゐると、私の眼には暗がりの中に忽ちまた飛んでもない妄像を認めた。

黒天鵞のやうな眞暗い闇黒の中にさながら陰府からでも吹いて來るやうな冷い風が何處からともなくすうつと起つて撫でるやうに肌に觸れた。私は覺えず慄然となつた。するとその闇黒の中に座敷に一ぱいもあるやうな大きな坊主の顔が見えて、咽喉の奥まで見えるほど大きな口をあけて、優しい目をして聲をも立てずからからと唯笑つてゐる。それが

「どうだ。誰れでもみんな同じことつたらう。」

と、いつてゐるやうである。そしてその坊主が私には丁ど元祿の昔この住吉神社の社頭に於て一日に二萬句を吐いたといはるゝ西鶴のやうに思はれた。

「自分では隱してゐると思つてゐても、人は何も斯も知つてゐるぞよ。それあの……」と、いつてゐるやうでもある。

私は不思議に思つて凝乎とその暗の面を見つめてゐると、そこに今にも雨の落ちて來さうな黒い雲が疾風とゝもに湧き起つて瞬くうちに空の大半を蔽うてしまつた。すると今まで明い眞晝の光の下に白く咲き誇つてゐた櫻の花片が急にざはめき出した高い松風の音と一緒に旋風のやうになつてばらばらと吹

き散つた。朝からそこの櫻花の木蔭の砂場で赤い花見手拭を頸に卷いて男も女も派手な長襦袢一つになつて遊び狂うてゐた多勢は、急に天候が險しくなつたのに驚いて家の中に姿を隱してしまつた。騷々しい花見客の人聲が絶つと、社頭の老松を搖る風の音はます／＼劇しくなつて今を盛りの櫻の梢か地へたに這ひつきはせぬかと思ふばかりに疾風に吹き曲げられた。美しい公園の砂地の上に見る／＼うちに丁ど片陰に消え殘つた泡雪のやうな花吹雪が松の落ち葉と一緒に吹き寄せられた。

私はひとり突立つて向を見てゐると、吹く風の中を友禪縮緬の長襦袢の裾に脚を卷きつけられて歩きにくさうにしながら、右の手で着物の前をしつかと抑へ、片一方の小袖を高く翳して顏に散りかゝる花瓣をよけつゝ急いでゐる。だん／＼此方へ歩いて來るやうである。目を留めてよく見ると蒼いほど白い顏にその顏を小さく思はせるほど多い前髮や鬢の毛が蔽被さりさうになつてゐる。そして恐しいほど眞黑いはつきりとした瞳をしてゐながら、柔かく結んだ脣を今にも泣き出さんばかりに憂に堪えぬものゝやうにゆがめてゐる。私は好きなゲーンスボロウの美人畫にあるやうな感じのする顏だと思ひながら、傍に近寄つて來るのを待つてゐると、女も此方を認めたらしくその淋しい憂はしげな顏につと微笑を洩らした。

私は氣味の惡いほど房々として多い頭髮や冴えた瞳や際立つた眞白い顏が恐くなつて後に退いて逃げやうとしたけれど何かに身體を縛られてゐるやうで自由にならなかつた。すると女は間近に進みよつて

「どうもお待せ申しました。」と、口をきいて面伏せさうに目を落して下を見てゐた。

はてお種に酷く肖た女だな。お種が、行つて待ちあぐんでゐると、黒光りのする箱段を踏んで上つて來て靜つと襖をあけながら

『あゝおそくなつて濟みません。』

笑ひかゝつて傍に寄つて來た。それを想ひ浮べて

『おゝ、お前はお種ぢやないか。……何時遠國から歸つて來た?』

さういつてゐる内に胸が閊へたやうに、いつか忘れてゐた舊い怨恨が生々しく思ひ出されて來た。

『私、種ぢやありません。種は歸つて來やしません。私です。種の姉です。隨分お待ちになつたでせう。これで一生懸命に急いだのですけれど。』

さういひながらはつと顏をあげて笑ひ〳〵此方を見た顏をよく見ると種によく肖てはゐるが、昔し見てゐた種よりも少し老けてゐて、種と同じやうに多い頭髮が銀杏返しでなくて丸髷である。

それにしても派手な大島絣の一枚小袖に匂ふやうな深い紺色の縮緬の羽織は以前お種が好でよく着てゐた着物と同じだと思ひながらなほもじろ〳〵眺めてゐると、襦袢の襟までが、いつかお種に一つは姉さんに送つてあげと言つて二つ買つてやつた江戸紫に青海波を絞つたその半えりであつた。多い髮の遣ひかぶさつた白い頸筋のまはりから好い化粧の香がそことなく匂ふてゐる。

『さあ、遲くなると雨が降つて來ますから早く家に入りませう。……今朝あつちの山の方から出て來たんですから早くはやくと思ひながらつい遲くなつてしまつた。』

と、いつて振顧つて指ざす方を見るとまだ春寒い遠くの峯々が暗くなつた天の盡きた彼方に白雪を戴

せて夢より淡く連續してゐる。

それは和泉と紀伊との國境を走つてゐる葛城山脈のやうにも思はれるかと見れば、また關東平野の北端を劃つてゐる日光赤城の諸峯のやうにも思はれた。

それ等の遠山の雲は私達の座つてゐる二階座敷の窗からも一目に見放された。

『いゝ山の景色ですねえ。あなたやお種の生れた處はあの山の麓になるんでせう。』

さういひつゝ、私はあんな深い山の中に、あんなに男の心を縛める強い力のある頭髮をもつた女が産れ出でたかと思つてぢつと感心して見てゐると種の姉の顔が自分で思つてゐる通りに頭髮はます／＼黑く顔はいよ／＼白くなつて、これまでの記憶にあるよりも、もつともつと際立つた顔になつて來た。

さうして二人で酒肴の載つた餉臺見たやうなものを中にして差向つて坐つてゐると、そこが料理屋の二階であるにもかゝはらず、種の姉の家のやうに思はれた。そして姉は昔し種が言つたりしたと同じやうに

『あゝ、あつち行かう。あつち行つて寢やう。』

さういつて私の手を捉るやうにして別室に連れて行つた。そこには赤ちやけた電燈が幽かに點つてゐた。種の姉はその下に座つて種と同じやうに私の脱ぎ棄てた衣服などを一々疊んで重ねた。それから自分も艶々とした丸髷姿で長襦袢一つになつて好い匂ひをさせながら柔かに傍に寄つて來た。

私はその女が種でなく種の姉であつて、種は賣色であるが姉はさうでないといふことに非常な邪惡な興味を刺激せられつゝ、胸の動悸の亢るほど罪惡と恐怖とを感じてゐた。それとゝもに何となく深い滿

上つて來た。私はどうかしてそれを忘れてしまつて、心地よく寢ねばならぬと思つてあつち返り、こつち返り幾度となく寢返りをして苦しんだ揚句、やう〱曉方になつてそれでも二時間ばかりぐつすり困睡することが出來た。

そして今度眼を覺すと、古い雨戸の隙間から明い光線が棒のやうに射込んでゐた。起つて戸を明け放すと、外は今日も好い天氣で、もう方々から花を見に來た連中が公園の中を歩いてゐる。早速新聞を取つて來て見てゐると、住吉心中といふ見出しの下に男も女も大阪府下池田在の者で二人とも困らぬもので、女は人の妻であるといふことが記してあつた。

私は全く不思議に夢が合つたのを訝かりつゝ、好奇心に驅られて朝の散歩に昨朝の處を歩いて見た。けれども死骸は、とつくに取り形けられて、その後には昨日のまゝの蒲公英が、麗かな春の光に浴してゐた。(おはり)。

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町 東京堂
仝 神田區裏神保町 上田屋
仝 京橋區尾張町 東海堂
仝 京橋區元數寄屋町 北隆館
仝 京橋區西紺屋町 良明堂
仝 日本橋區本石町 至誠堂
大阪市北區梅田町 盛文館
仝 東區京町堀 太華堂
仝 東區瓦町 東枝支店
京都市七條停車場前 三共社

○定價 金貳拾五錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢 但支那を除く）

冊數／區別	內國	外國	
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢	以上郵稅共
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢	

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍價に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七冊分の割合なれば一ケ年分御註文の方は內國は金四圓二拾五錢外國は金五圓九拾五錢の割となる

本號 特價金五拾錢 郵稅金四錢

送金注意

一誌代郵稅 は一切前金とす、金切の場合は發送を止むべし
一郵便爲替 にて御送金の場合は指定を本鄕西片町十番地中央公論社とし拂渡局を東片町局と指定あれば途中盗取さるゝ虞なし
一振替貯金 口座は東京三十四番なり
一郵劵代用 必ず一割增の事
一集金郵便 の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込 をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
　一金一圓迄 金六錢
　一金五圓迄 金七錢 （集金委託料及送達料共）
一受領證請求 は必ず返信料を要す

大正四年三月廿九日印刷納本
大正四年四月一日發行 （禁轉載）

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 高木酉三

發行所 東京市本鄕區駒込西片町十番地 中央公論社
電話下谷九一一九 振替東京三十四番 電信略號コウロン

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

